
Muv-Luv オルタネイティブ ~ファイブ・リバイ~

霧丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v オルタネイティブ ～ファイブ・リバイ～

【Nコード】

N 4 9 6 5 0

【作者名】

霧丸

【あらすじ】

平行世界より舞い降りたオリキャラによって次々と明かされていく真実、BETAのその正体よ戦いの行方は？
戦術機がSRWOGの技術によってAM化します。

現在TE編、再会を果たしたクリスカ、部下となった唯依、XFJ
計画機が二機…

TEはテロ編までを予定しております。

第00話 来訪者（前書き）

素人の変な文章ですが読んでくださるとうれしいです。

第00話 来訪者

ブラックホールそれは超重力の渦である。

光さえ吸い込むそれは太陽の30倍の質量を持つ恒星がその寿命を終えその膨大な熱量が膨張し続けた結果、その中央に高密度の炉心が形成される一定値を超えたとき力場自体が反転し外へと向かっていったエネルギーがすべて中心へと吸い込まれるようになり生まれる。

このブラックホールは直径数cm程度ではあるがごくまれに地球の衛星軌道上に自然に形成されることがある。

いま、BETAによって蹂躪されつつある青い水の惑星衛星軌道に突如形成される。

本来なら数秒の内に蒸発してしまうはずのそれは、ゆっくりとしか確実に拡張され直径20メートルほどまで広がる…

その漆黒の渦から一体の全長20メートルほどの機兵が這い出てくる。

薄い紫陽花色の機体が赤い鎧を纏ったような印象を受ける。右腕には三つの砲身が三角形に位置するように設置されその中心には一本の鞘が固定され巨大な日本刀が納められて一つのユニットと化した武装が前腕部に装備され、反対の左腕の前腕部には三つの白い突起物が装備されていたそしてその頭部にはまるでカブト虫のようなマストセンサーが額から前方へと突き出ており、両腰のサイドアーマーに位置する部分には左右に一丁ずつ巨大なりボルバーがぶら下げ

られている。

その一機の機兵の胴体の中に納められているコクピットで一人の男性：細かい容姿はパイロットスーツのせいで確認できないが唯一つ判るのは彼が纏っているそれは赤を基調としたATXチームのものであるということだけ。

「……………着いたのか…これで二つ目になるな…平行世界は……………コロニーが無い…ということはこの世界の時間軸は過去の可能性が高いか？……………この世界に俺の求めるものは存在するのか？……………だが、もう後戻りはできない、この挑戦は片道切符……………最初からわかっていったことだ」

男はつぶやきながら機体のコンソールを立ち上げ作業を開始しする。声から十代後半から二十代前半であると予想される。

「機体損傷…無し、T-LINKシステム…異常なし、テスラ・ドライブ…異常なし、グラビコンシステム…問題なし、T-LINKフライトシステム…問題なし、現在待機モード、ブラックホールエンジン…定格起動中、問題なし……………ふうっ」

機体のメインシステムをコクピット内の空中に表示されたモニターで確認し、異常がないことを確認するとヘルメットに手を掛けはさず。

青年の素顔が露わになる、おそらく18前後であり顔立ちから日本人であることがわかり、やや色素が薄い髪は黒と言っより茶髪に近く、瞳もブラウンである。

青年は一息つくとさらにコンソールを操作し機体の武装を確認する。

「三連装フォトンガトリング…問題なし、シシオウブレード…問題なし、プラズマバックラー…問題なし、フォトンリボルバー…問題なし、念動フィールド…問題なし、T-LINKフェザー…問題なし、現在待機モード…よし！システム・オールグリーン！！」
“ビルトライガー”起動！！！！

機体の動力機関であるブラックホールエンジンが回転数をあげブラツクホールの向こう側、虚数空間より無限のエネルギーをくみ上げそれによってビルトライガーの機体にエネルギーがいきわたる、暗闇を映すだけであった機体の双眸に緑の光が灯され背面のストラスタ―内部に斥け合う力、斥力を持った緑色の粒子：反重力子が生成され漏れ出る。それによって機体が押し出され微速前進する。

「まずは地球に下りて情報収集だ」

機体に搭載されたテスラ・ドライブにエネルギーが回され粒子生成量が爆発的に増加し機体は緑色のフレアを噴出しているかの様子を呈しながら一気に加速し、青い水の惑星へ向かう。

「Gテリトリー・ブレイクフィールド展開、大気圏突入開始！！」

赤い鎧を纏った機体は吸い込まれるよう青い惑星へと赤熱化しながらきえていった。

マブラヴ・オルタネイティブ ｝ファイブ・リバイ

プロローグ

これは、一人の竜神人の最後の戦いを描くちんけな御伽噺の英雄譚である。

竜神人と英雄の会合

「なぜサーヴァントがここにいる？」

「サーヴァントって何だよ！！わけわからねえよ！！！！」

人の心が見える少女は竜神に恐怖する

「あの人は…人間じゃありません…」

「霞？人間じゃないってじゃあ一体何なんだ？」

「わかりません。ただ大きくて怖い存在です」

告げられる真実

「白銀、お前は継ぎ接ぎの贋作だ。」

「俺が…贋作…俺が……偽…者……？」

「そうだ、そしてお前は二度と元の世界とやらに帰る事はできない、できても元の世界とよく似た世界の自分を殺して入れ替わることぐらいしかできないさ。果たしてそれはほんとうの意味で帰ったと言えるのかな？」

「そ、そんな…おれはもう二度と帰る事はできないのか…?!」

魔女と竜神人、そして突きつけられる銃口

「BETA…G元素…定期的に打ち上げられる物体…完全に殺される命…そういうことか！！」

「興味深いわね、あなたに一体何がわかったのか教えてもらえるか

しら？」

怒りに震え己が力を解き放つ

「神々の原罪の果ての地で

私は今こそ”誓約”を果たす。

祝福の華に誓って

埋葬の華に誓って

我は神話を紡ぐ存在モノ為り

っ！！！！！！」

三振りの刃

真の救世主の顕現

貴方に救世主の鎧を

遥かな太古に百邪を退けし五行の金を司る、最も旧く新しき神の鎧を

燃える五亡の星を背負った魔を断つ剣を

命を超えし者よ、我等ソムニウム最後の力を

託す

受け取れ、起源の力

生かす為に破壊する究極の勇者王の鎧

を 破壊神の鎧を

ジエネシックを

我は憎悪に燃える空より零れ落ちし涙

流され血によって盛る正しき怒りの焰

我が名は

魔を絶つ剣なり

悲劇のもと想い人に贖作と知られながらも受けいられる英雄

「タケルちゃん!! 会いたかったよお!!」

「す、スミカ……よかった、ほんとうに……ほんとうに……よかったよ……よかったよ……」

「白銀、守ると決めたら最後まで守り通せ! 女に目の前で死なれるとなかなかに応えるぞ」

舞台は宇宙へ

「全スペースノア級、発進準備完了!!!!!!」

「よしっ!!!!!! 全艦オーバーブースト!!!!!! 目標……BETA本星!!!!!!」

「あれが……BETA本星……?」

「本星というよりは本体だな。人間のいや、地球……違うなこの全宇宙の生きとし生けるものすべての敵だ!!!!!!」

BETAとはいったい何なのか?、戦いの果て人類は未来をつかめるのか?

無念のうちに散った者たちが残して逝った正しき怒りと憎悪を受け継いだ戦士たちは何を想い、何を掴むのか……

そして、竜神人は何を想いどう動くのか……

これは…英雄譚である

第00話 来訪者（後書き）

感想待ってます。

目次

序章 降り立つ来訪者編

ロシア、ノンギスクハイブにおける末期の第3計画ESP能力者たちの最後の戦いとクリスカと亮の出会いを書いた章

龍神人の見た世界 編

主に日本を中心の話だが前半と後半に数年の開きがある。

前半は日本における情報収集中に悠陽と出会ったこと、後半は明星作戦について

扉と監査者（OG）

OGの世界での最終決戦、アインスト戦からマブラヴの世界に至るまでを書いた外伝的章

新たな牙

新世代機開発や後の鍵となる様々な物の入手や明星作戦後の世界の
変わりようを書いた章

東ドイツ解放 機神胎動 編

欧州最大の社会主義国家、東ドイツの恐怖政治を打倒し欧州を本当
の意味で一つにするまでの過程を描いた章

G元素の秘密が暫定的に明かされる。

真実

鎧衣の助けを借りて横浜基地に侵入した亮は反応炉を目にしBET
Aの存在する真実を悟る。

樹海のひとり (TE)

現在執筆中

マブラヴ外伝、TEを描いたもの原作と違いXFJ計画の機体が二機に

亮がアラスカに派遣されたその真の意味とは？

鎧衣さんの水面下の動きがだんだん大きくなっている。

第01話 ロークサヴァー（前書き）

いきなりオリジナルストーリーです。

感想がほしいです

第01話 ロークサヴァー

西暦 1995年

地球外起源種 BETA を理解しコミュニケーションを図るという目的の元“オルタネイティブ”という計画が極秘裏に実行されていた。

しかし第一、第二と二つの段階で異なる方法で研究が行われるも判明したことは唯一つ

“ BETA は炭素系生命体である ”

ということだけであり多大な予算と設備・人名を投入するも実質何も判明していないことに他ならない。

そんなオルタネイティブ計画は現在第三段階：ESP能力者による思考の読み取りと和平の意思を伝達するという目的の元、人工授精・投薬・肉体改造などおよそ人道的とは思えない方法で大量生産された墜とし子たちは戦闘機という戦闘機から派生した人型機動兵器：機械仕掛けの鋼の鎧に乗り込み死地へと向かう：

1990年からこの計画によって大量のESP能力者たちが繰り返し死地へと向かい帰ってくることも無くその命の炎を散らしていった：

彼らは大量生産のため不安定な母体に頼らず人工子宮によって生まれ出され人として接せられることなく育ちそして死んでゆく：彼らの幸福はどこに存在するのか？

彼女らは人の温もりも知らずに消えていく：彼女らの生きる意味は

一体何なのか？

このような人道に反した行いは人間が選択肢が無いほど追い詰められ起きた必要悪だったのか？

それとも人間が本来持つ業の深さ故か？

1995年 現在

オルタネイティブ3計画：通称【第三計画】において多大な犠牲を強いて敢行された結果唯一つの成果

“BETAは自身を含め炭素系生命体を生命種としてみなしていない”

というBETAとの和平が絶望的だというわかりきった結果が確認されるだけとなった。

これに伴い日本主導の“BETAに対する諜報員の製作”及びアメリカ主導の“新型爆弾によるBETAへの大規模攻撃”このどちらかが採用されることとなる。

つまり第三計画は打ち切り確定であり普通に考えればこれ以上の犠牲を出すのは愚の極みであるのだが：第三計画主導国家：ソビエト連邦は国連からの支援が行われているうちに大量生産されたESP被検体を振るいに掛けることにしたのだ。

戦場では能力の低い固体から死んでいく、ならば過酷な環境から生

還した固体は高い能力を持っていることに他ならない、その固体同士を掛け合わせればさらに優秀な固体が誕生する。

…仮に全滅しても基本能力の高い第6世代ESP体がいる。

この人を人として見ず競走馬を品種改良するのと同じ方法で自国の兵士を作ろうとする悪魔の計画によって生み出され、翻弄された1人の少女と青年が“ソ連領エヴェン自治管区ノングスク”に建造されたBETAの巢であるハイブ付近に同じ運命を背負った兄弟達とともに鋼の鎧に乗り込み戦っていた…

ノングスクハイブの周辺に広がる膨大な荒野…

かつて人の営みが行われていたそこはBETAによって蹂躪され、町も自然もそして地形さえ残さず消し去られた。ただ荒野が広がるだけとなっていた…

その荒野の真つ只中三つの巨大な全長20メートル前後の人型の機械が両手と背部に機関砲を携え周囲を埋め尽くさんばかりの明らかに地球のものではない不気味な存在に向けて有らん限りの弾丸を打ち出し戦っていた。

その三つの機体は軍隊によく見られるあらゆるセンサーを頭部や前腕部そして両肩に装備しているが、機体本体は空気抵抗を考慮しているような形状であるにもかかわらずセンサー・アンテナが明らかに空気抵抗を増やしてしまうような歪な配置となっていた。

第3計画のために製作された機体、強襲偵察用の機体F - 14 A
N3 マインドシーカーである。

劣化ウランで作られた弾丸はその昆虫とたこか何かをごちゃ混ぜにしたような気持ちの悪い容姿の何かに次々と打ち込まれ屠っていくが如何せん数が違いすぎるためじりじりと近づいてくる。

「くそっ!!!このままじゃ押し切られるっ!!!クリスカッ!!!
!プロジェクションはどうなっている?!」

その三機のマインドシーカーに内の一機の胸部に収められているパイロット：衛士が搭乗し機体を操作する管制ユニット内部に二つの座席が設けられ後部座席の銀色の髪と瞳の恐らく二十代前半の青年は前部座席に佇む十代半ばもしかしたら前半の同じ髪に同じ瞳の少女に語り掛ける。

「さっきからやっているけど、反応が無い…: いったいどうすれば…
トリースタ?!」

少女、クリスカの応答に顔をしかめる青年トリースタ

「どうすればいいも何も…: 生き残るしかないだろ!!!リーディング
のほうはどうなんだ?!」

ひたすら銃を乱射しながら応えるトリースタ

「だめ!!! やっぱり何も判らない、意思はあるみたいだけどなんて
いうか…: 通信機の周波数が合わない感じ」

それを聞き舌打ちをする

その瞬間トリースタは何か悪寒のようなものを感じ通常のF-14より出力を上げられた跳躍ユニットをふかし緊急ジャンプを敢行する。

機体が推進剤の燃焼噴射の反動を受け宙に舞う

次の瞬間、いくつもの閃光が走り先ほどトリースタの機体存在していた場所を通り過ぎる。

さらに迫る閃光を腰に取り付けられた戦闘機のような噴射装置をたくみに操作し回避していく

「なめるな!!!俺だつてESP発現体だ、プロジエクションができなくとも貴様らの俺たちを屠ろうとする意思を読み取る事はできるんだよ!!!」

トリースタはリーディング能力を相手の攻撃しようとする意思が発生する際の揺らぎを感じ取り絶妙なタイミングで機体を操作し回避を続ける。

そのころ他の二機のマインドシーカーは閃光：レーザーに対し緊急回避を行おうともするも一機のマインドシーカーは回避行動に移れず機体の胴体が貫かれる。

管制ユニットが存在した場所には赤く赤熱化した風穴が開いていた。

そして閃光に貫かれたマインドシーカーは糸の切れた人形のように倒れながら延焼し炎につつまれ跳躍ユニットの推進剤に引火し爆散する。

「っ！！トリーツア！！！」

機体が爆散するのを確認したクリスカがその機体に乗っていたであろう兄妹の名を叫ぶ

「よくも……よくもっ！！！！やってくれたな！！！」

トリースタは叫びながら照準をレーザーを放った存在、光線級が照準に入るのを確認するなり引き金を引く。

それに連動しマインドシーカーは両手に携えられた突撃砲の引き金を引き劣化ウランの雨を爆音と共に降らす。

全長3メートルほどの二つのその体の三分の一を締める目玉と人間の足に酷似した脚部をもつBETAはなすすべも無く劣化ウランに引き裂かれ紫色の体液を撒き散らしながらひき肉になり、マインドシーカーが砂埃を舞い上げながら地面に着地する。

光線級を排除したことを確認したトリースタは仲間のレーザーを回避することに成功し残ったマインドシーカーを確認し通信を取る。

「イグナートっ！！チエーヴァチっ！！無事か?!」

通信をしながら自機を仲間の機体の後ろへと持って行き死角をかバ―する。

「…大丈夫」

「ああ、問題ない…しかしこのままじゃ俺たちもお陀仏だ…幸い俺たちを戦場に括り付ける指揮官様はお空の上だ」

抑揚を欠いた少女の声と苦々しい口調の青年の皮肉が通信機から聞こえてくる。

ハイブの間引きの合間に少数によってBETAと接触を図るといふ作戦の性質から支援はまったく期待できずマインドシーカーは本格的な戦闘用ではない。

「こいつで逃げ切れるのか？」

背中合わせに銃を乱射しながらトリースタは問い返す。

「中国に伝わる地獄に行つて帰つてくる方法知ってるか？」

「何かいい方法があるの？イグナート？」

クリスカの問いに答えるもう一機のマインドシーカー駆っているであろう青年イグナートが応える。

「何、簡単な話：絶対に振り向かず全力で突き進むだけだ…たとえ仲間の悲鳴が聞こえようが助けを求める声が聞こえようが…な」

「それって…」

「そつだ早い話、脇目も振り向かず逃げろだ」

イグナートが何かを言いかけるクリスカを遮って告げる。

「レーダーユニットのパージを提案します」

マインドシーカーにイグナートともに乗り込んでいる少女チェーヴヤチがその抑揚を欠いた口調で提案する。

「ハッ！確かにこんな作戦、索敵能力なんか要らないしな。普通にジユラーブリクのほうが圧倒的にいいに決まってる」

トリースタは愚痴をこぼす、しかしジユラーブリクは過渡期の機体のせいで安定性に欠け動作不良を連発することで有名である……が、このように敵に囲まれ弾薬の補給もままならない状態ではあの高機動と近接用固定装備は心強い。

「じゃあ10秒後にレーダーユニットパージと同時にブーストジャンプあとは安全圏までひたすら逃げ続ける……！光線級に気をつけるよ……！」

「……了解」

イグナートの号令とそれに応えるこえがマインドシーカーの鋼鉄の棺桶に響き渡った……

その頃はるか上空の宇宙^{ぶそ}で重力の渦から来訪者が現れようとしていた事を知るものはいなかった……

続く

第01話 ロークサヴァー（後書き）

クリスカはトータル・イクプリスのとき20歳で計算しています。

簡単な人物紹介

トリースタ：第四世代の300番目の固体プロジェクト能力は発現しなかったが非常に高い衛士適正とリーディング能力を持ちクリスカとともに第3計画の作戦マインドシーカーに乗り戦う。人口ESP発現体にしては珍しく感情が豊かクリスカにも大きな影響を与えた。

トリーツア：第4世代30番目の固体。光線級の攻撃とともに乗っていた衛士とともに死亡

イグナート：第3計画のために召集された一般衛士。トリースタと仲がいい

チエーヴァチ：第五世代9番目の固体。感情があまり育っていない。

最近…ソビエト製戦術機の顔がリベル・レギスに見えて仕方が無い

ヒロインズごじつめん…

現在候補

1 ・夕陽

2 ・クリスカ&イーニヤ

3 ・遙

4 ・水月

5 ・篁 唯依

6 ・冥夜

7 ・オリキャラ（イギリス人）

8 ・ハーレムでいいやああ

どれがいいでしょう？

第02話 生きる意味（前書き）

うっかり消してしまったのを書き直したら原型とどめてなかった…

かなりオリジナルの設定&ストーリーになってしまいました。

第02話 生きる意味

「10・9・8・7・6…」

通信機越しにカウントダウンがトリースタの耳に届く。

彼らは、これから数秒の後に生き残るために一斉離脱を敢行することになるのだが……戦闘によって機体の燃料、推進剤も心許無く光線級がいつ現れるか判らなく、この状態では成功する可能性はきわめて低い、と言わざる得なかった。

だが、彼らには生きて明日を掴むにはそれしか道が残ってなかった…

それほどまでに彼らが生き残る可能性は絶望的だ。

だが、彼らは最後まで諦めない…その手に未来を掴み取れることを…

第02話

マインドシーカーのコックピット…管制ユニットと呼ばれるそれに設けられた後部座席に座り機体を操作する銀髪に白い肌の青年…ロシア語で300の名を持つ青年トリースタは僅かの間、思案する…

「人間は生まれた時から人間であるのではなく、人間として育つことにより人間となる。」

何かの本載っていた一節だ…信じられないが、人間の赤ん坊が狼に拾われ狼として生きていた、という逸話まであるのだから間違いなのかもしれない。

だとしたら俺たちは…一体何なのか？

生きて^{サンプル}標本として、またはさらに優秀な固体を生み出すための種馬として、生きて兵器として、そして使い捨ての道具として……

人間性を求められず生み出され、教育され、さらには能力の低い固体は”処分”される。

その結果…大半の兄弟姉妹は感情の起伏が乏しく、なぜ、何のために生きているのか与えられた理由を”知っている”だけで真の意味を見出そうとはしない。

……かつての俺と同じように

おれ自身リーディングはできるがプロジェクションができないという人工ESPとしては不良品だった。

だが、非常に高い衛士適正を持ち、何れ起こるであろう戦術機同士による戦闘…つまり人間が操る戦術機戦において、敵衛士の思考を

読み取り常に先手を取ることのできる存在を作り出すための標本サンプルにして種馬だ。

そのためだけに生かされた、そして兵士としての教育が行われていた。

数年前までひたすら訓練、訓練、訓練：ひたすらに訓練のみの毎日

そんなある日のことだった、俺は一人の研究員に「面白いものを見せてやるから、ついて来い」と言われ命令だったこともあり何の疑問も持たずについて行った。

真っ白い廊下、天井も、壁も、床も、白一色に染め上げられた施設のなかで一定の間隔で設けられた窓から見える青空がひどく印象的だった。

しばらく歩いていくと白の廊下の壁に設けられた長いガラス張りの窓が設けられ中が廊下から良く見える部屋の前と着き、研究員が

「着いたぞ、ここだ」

と顎で中を指し示す……中には赤ん坊用のベットが立ち並び、自分と同じ色の髪を持つ大勢の赤ん坊が眠り、時に泣き叫んでいた。

その中の一つまだ性別はわからないが“スヤスヤ”と安らかな寝息を立てていた一人の赤ん坊が酷く気になった。

しばらくその赤ん坊を眺めていると赤ん坊は目を覚まし此方へとその首を此方へと向け俺を視界に入れるなり

「キャツ！！キャツ！！」

手を伸ばし笑いかけてくる。

その笑顔を見た瞬間、その子の必死に自分の感情を伝えようとする様を見た瞬間：

俺の中で何かが変わった、

この笑顔をもっと見てみたい、
逆に泣き顔は決して見たくない

そんな自分の物とは思えない俺の思考をリーディングによってその子は垣間見たのか、その子からは無限とも思えるほどの喜びの感情が見えた。

それによつてか、はたまた最初にその子を見たときからか、やはり笑顔を見た瞬間からだろう。

存在しないはずの感情に火がつき、胸のうちの何か：が、熱く、暑く、燃え滾り、脳内に数倍のカフェインを直接流し込まれるよりも圧倒的にすさまじい覚醒感が自分を襲う。

今まで色を映さず色彩を欠いた世界しか映さなかった瞳は、急激に白一色のこの世界だが確実に色彩を持った世界を映し出した。

「ほう？やはり親子だな、私が何も言わずとも通じ合っている」

俺が自分の、今ままでになかった感覚に戸惑っていると、俺をここまで連れてきた白衣の男がそう語った。

「親子…？」

普段、冷静沈着で何事にも動じない俺だったが、何故かそう返すのが精一杯だった。

「ああそうだ、あの赤ん坊は【イーニア・シエスチナ】……第6世代人工ESP体、そして貴様の遺伝子を受け継いだ真正正銘、貴様の娘だよ」

人工ESPは安定して大量生産するために人工授精および人工子宮によって生み出されるつまり、あの子には母親がないのだ。生物学上の母はいるだろうか…

自分も同じ身の上ではあるが、あの子が不憫に思えてくる。

「その表情、よほど驚いたようだね」

「はい、もう博士の分も驚いたのではないでしょうか」

「……君が皮肉を言うようになるとは…存外面白い結果もついてきたな」

研究員は一瞬、驚愕の表情で俺を見るがその後はニヤニヤといやらしい目で見ると、それが何故かとても不快に感じた。今まで似たようなことはあったが気にもならなかったのに……だ。

「自分の子供はあの子だけでしょうか？」

研究員にあの目で見られるのはとても不快なので研究員の意識を別方向に向ける。

「ああ、あの子だけだよ。君はESP能力者としては欠陥品だ、故に君は少し性能のいい戦術機の生体CPUとしか上の連中はみていない。

だから……ね、これからの衛士適正とESP能力を併せ持った固体を作るかどうかは、あの子が如何な能力を発揮するかで決定される。

」

本来は君“も”廃棄処分なんだよ。つと研究員は付け加える。

俺は視線をあの子に再び向けるするとあの子……イーニアは手を伸ばしても届かなかったせいかわずり始め、目に涙がたまりすぐにも決壊し大泣きしそうであった。

それを見て俺は、

「……イーニアを抱いてもいいですか？」

「ふうむ……」

それは懇願に近い物であった、研究員はわずかばかり首をひねり

「まあ、いいだろ」

許可を出した。

俺は許可をもらい部屋に入室し、イーニアのべつとの傍らへと歩み寄るイーニアは俺が近づいたことに気づくまいり一層腕を精一杯伸ばしてくる。

そんなイーニアをそつと抱き上げる…

「とても軽いけど…とても重い……な」

俺の口から言葉が漏れるが腕の中のイーニアは俺の心境など露知らずに笑顔できゃっ！きゃっ！笑いながら俺の顔に手を伸ばしていた…

あの時から俺は生きてやりたいことが出来た、夢というやつだろう。

【イーニア…あの子にいつか父親らしいことをしてやる】

そのためにいろいろな事を学んだ。

そのために、いつかこんな腐った連中の巣窟から抜け出して、イーニアと普通の親子になる。

そのための準備は後一步で完遂し実行するのみとなった。

……しかし、これを察した連中によるものかどうかはわからないが
オルタネイティブ3に招集された、欠陥品である自分だ。

絶対に生き残り、夢を完遂させる。そのために何が何でも生き残る
！！

「5・4・3！！センサー各種、分離^{パージ}！！！！」

彼ら第三計画の墜し子たちは明日をつかめるのか…

「2・1・0！！！！ブースト・オンっ！！！！」

続く

第02話 生きる意味（後書き）

主人公の出番がまだまだない……汗

感想待ってます……！！！！

第03話 散る命(前書き)

今回結構重いです…

感想がほしいなあ~~~~~

第03話 散る命

「5・4・3！！センサー各種、分離！！！！」

掛け声と共に背中合わせに両の手に携え突撃砲を連射していた機体【マインドシーカー】の全身で小爆発：固定用のロックボルトが炸裂し固定を失った各種センサーユニットが自由落下を開始する。

「2・1・0！！！！ブースト・オンっ！！！！」

センサーユニットが地面に音を立てて落ちていくさなか、機体の腰アーマーにフレシキブルアームに接続された戦闘機からコックピットを排した形状の噴射推進装置：跳躍ユニットのスラスタノズルが火を噴きその反動を受けて機体が宙へと浮かび上がる…

もともと通常の機体に比べ軽量化を施され、腰部に連結された跳躍ユニットも通常の物に比べ推力を上げられたモノであり、センサーユニットをはずしたことにより損なわれていた空力特性も回復した。

以上の理由によりマインドシーカーはその機動力を先ほどまでとは比べ物にならないほどに増し、一気に高度を稼ぎ跳躍ユニットの角度を変更し、機体の向きを変えハイブの地上部に存在する。

まるで岩盤を積み上げたような建造物：モニュメントを背に飛翔する。

サイド トリースタ

どこまでも続くかのように広がる荒野…

其処は無数のハイブに帰還するBETAによって赤、白、濃緑に染まっていた…

その上を俺たち4人を2人づつ乗せたマインドシーカーが飛行機雲の尾を作りながらまっすぐと目的地に向かい巡航していた。

時折、俺たちの前に立ち塞がるうと、白っぽい胴にモース硬度15を誇る剛腕を携え、まるで地獄の業火によって苦しめられている亡者の顔に見える尾節を持つ蠍サソリのようなBETA・要塞級グラップラーが小型のやつらと一緒に地面から湧き出る。

だが、もともと戦術機よりも小さい体躯のやつらの頭上を俺たちは素通りし目的地を目指す…

あと少しで、第一次防衛線でBETAの縄張りから逃れることが出来る…

っという思考が脳裏をよぎったその瞬間、

突如として前方の地面が弾け大量の土砂が宙に舞い、まるで羽の変わりに足を付けた蜂に酷似したBETA、要塞級フォートが姿を現す。

全長50メートルほどのそいつは俺たちの機動のまん前に立ち塞が

る……が、一々倒している余裕も、時間もない。

「てめえにかまつてる暇なんぞないんだよ!!!やるぞ!!!イグナー
トっ!!!」

「おっっ!!!」

要塞級は尾節に収納された触手を撃ちだしその先端についた要撃級
要塞級は尾節に収納された触手を撃ちだしその先端についた要撃級
や突撃級の甲殻と同じダイヤモンド並みの硬さを持つ鋭角を突き刺
し標的の内部に直接濃酸を注入するか触手を鞭のようにしならせて攻
撃する、つまりやつ頭部(?)と同じ高さにいる俺たちには有効
な攻撃手段が触手を振り回すことだけで一度踏み込まれば有効な
攻撃手段がないということだ。

まずは俺のマインドシーカーが先行する。

跳躍ユニットのロケットエンジンが点火、機体が一気に加速するし
それに伴って体にかかるGが心地よい。

「あらよつと!!!」

跳躍ユニットのスラスタノズルの向きとウイングの向きを調整す
ることによってマインドシーカーはその軌道を変え唸る触手の鞭を
潜り抜け、マインドシーカーは要塞級の顔面?を踏みつけそれを足
場にして跳躍する、すぐ後ろのイグナートもそれに続く。

要塞級を飛び越え、幸いなことに光線級も出てこなかった。恐らく
同時に行われた間引き作戦の際、人間側の機体の迎撃に回され破壊
されたか、エネルギー切れなのだろう…

光線級は一体あたり製造に使うG元素が多く量産に向かないや、高

出力レーザーを照射するため持久力が低いといった仮説があったがそれが正しかったのだろう。

地面が再び吹き飛び地中から十数体の要撃級グラップラーと要塞級フォートが飛び出してくる。

俺たちは再び要塞級フォートの顔面を踏み台に跳躍する。

その瞬間……!!

「っ!!!!」

背筋を駆け巡る悪寒、複数の視線に射抜かれるような感触を感じた

……

「よけるっ!!イグナートっ!!!!光線級だっ!!!!」

「なにっ?!」

咄嗟に俺はアメリカ製戦術機特有の高出力跳躍ユニットをもって強引に機体の向きや速度を急激に変更する手法【チェンジ・オブ・ペース】を実行し機体をレーザーの射線上から退避する。

……が、僅かばかり遅れたイグナートの機体が紅い光線…レーザーの照射を受ける対レーザー拡散皮膜がすさまじい勢いで蒸発し機体の損傷を何とか防ぎ機体がレーザーの自動回避モードに移行し射線から退避させ回避させるが自動操縦に切り替わっていたため機体は地面に着地する。

その援護のために俺は機体を旋回させる。

機体が空気を切りながら加速し、トリガーを引くと自動照準オートロックオンされた突撃砲の銃口が多数体の要撃級グラップラーに劣化ウランの弾頭をもつ36mの弾丸を次々と吐き出す。

戦術機は一動作ごとにタイムラグ：硬直時間が存在するため其処をカバーするために戦術機は二機以上の編隊を組み互いに硬直時間をカバーし合うのが一般的だ。

奇しくも光線級によって無用の長物と成り果てた戦闘機のフォーメーションと同じである。

突撃砲から放たれた弾丸が次々と要撃級に吸い込まれ、要撃級を穿ち、要撃級はその体液をばら撒きながら活動を停止するがその後ろいた奴等はお構いなしに仲間の死体を乗り越えて迫りくる、

「イグナートっ！！速くここから離脱するぞっ！！」

「……………俺たちを置いていけ」

「?!」

イグナートたちの駆るマインドシーカーからの通信を聞き我が耳を疑う

「どづいつこと?!!!イグナート!!!!」

前部座席にいるクリスカがイグナートに聞き返す

「跳躍ユニットをやられた、もうじきこいつは爆発する……」

「計算によると1分18秒後です」

見るとマインドシーカーの跳躍ユニットから“ポタポタ”と透明な液体が垂れ落ちていた。

「だったら、速く乗り移れ……」

叫ばずには要られなかった……自分の妹に値するやつと、生まれて初めて出来た親友を見捨てることなど出来ない。

「ふざけるなっ……！そんな時間奴等がくれるわけないだろっ……！それに貴様には生きて帰えりを待っている奴がいるだろう？！それに貴様は相棒の命を背負っているんだぞ……！俺たちを切り捨てていけ……！！」

“幸せなんてモノはなっ……！条件つきでしか手に入らないんだよ……！！！！！！”

「そんな……イグナート……！チエーヴァチ……！」

クリスカの悲痛な叫びが鋼の揺り籠に響く

「イグナートが言った筈……たとえ、助けを求める声が聞こえようとも振り向き立ち止まってはならない、だから行って」

チエーヴァチの言葉が胸に突き刺さる。

「すまないっ！！！」

俺はそれだけ言い残し機体を操作し、その場を離れる…

「待つて！！トリースタ！！まだ間に合う！！二人とも生きているんだよっ?!」

クリスカの悲痛な叫びが耳に届くが俺だって助けたいが出来ない、あいつの思いを無駄にしてしまう。

「クリスカ……俺はお前と自分の命そして俺の夢とあいつらの命を秤にかけてもう選んだ……もう選んだんだよ、もう後戻りは出来ないんだよ。」

肩が震える、俺は自分の大切な物を切り捨てた、ほかの誰でもない自分だ。

その頃

「まったく……そこは“すまない”じゃなくて“ありがとう”だろ
うが……」

跳躍ユニットを損傷しもはや飛ぶことが出来なくなったマインドシ
ーカーのコックピットでイグナートは文句を口にする先ほど今生の
別れを告げた親友に向かって

「なあ、チエーヴァチ？」

そして、前部座席にいる親友と同じ銀色の髪を持つ少女に同意を求めめる。

「そうなのでしょうか？……そのような気がしますね」

抑揚を欠いた少女の声に僅かばかり感情が燈った様な気がした。

「お前さんもすまないな…俺がミスったばかりにこんな場所で…」

「いい…気にしてない、短い間だったけどあなたの色は心地よかったです」

「もつとお前さんに外の世界を楽しませてやりたかったんだがな…」

…」

機体が二足歩行で移動する際の振動の中で最期の会話をする二人、ロシア語で9番の名を持つ少女は二人きりのときだけの口調へと変わっていた。

「本に載ってた…」

「ん？何がだ？」

「人は死んだら生まれ変わって、新しい人間として生まれるって…」

…」

「輪廻転生ってやつか……どうなんだろうな？死んだことないから分からん」

「じゃあ約束して、もし生まれ変わったならば私に世界を見せて、私に思い出を頂戴」

それをきいてイグナートはわずかの間、驚愕に固まるがすぐにニヤリと口元に笑みを浮かべる。

「……いいだろう、覚悟しとけよ、もういやだって言うまで引き摺りまわしてやるよ」

「楽しみ……」

チエーヴァチの顔にも笑みが生まれる。

「だが、その前にだ……!」

「あの二人のために……!」

「一匹でも多くのBETAを道ずれにする……!……!」

二人の戦いが始まる。

「まずは跳躍ユニットを……!」

「了解っ……!」

マインドシーカーの腰部の跳躍ユニットのロックボルトが炸裂し跳躍ユニットが機体から落下する。

その後すぐにマインドシーカー二足走行で駆け出す。

「私が狙う!!」

「任せたチエーヴァチ!!」

機体の背中に設けられたサブカメラの映像がチエーヴァチの網膜に映し出される、そして兵装担架が起き上がり装備された予備の突撃砲の銃口を廃棄された跳躍ユニットに向ける。

「シュート」

一発の弾丸が跳躍ユニットに当たり、跳躍ユニットは爆発する。数体のBETAを爆風が焼き殺し、飛び散る破片が無数の小型BETAの息の根をとめる。ときに押しつぶし、穿ち。

「後ろを頼む!!」

「分かってる!!」

両手に携えた突撃砲と背中から後ろの敵に向けられた計、4門の銃口から劣化ウランの弾丸が放たれ敵を確実に葬り去る。

それは、一つの戦術機を駆る二人が背中合わせに戦っているかのようであった。

“カチっ！カチチチ！”

激鉄が火薬を爆発させず空振りする音が機関砲から届く……

「もうだめだな、完全に弾切れだ……」

一機のマインドシーカーの周囲には無数のBETAの死骸が散乱しその体液で地面は染まっていた。

「こっちも弾切れ……」

大型のBETAの影から無数の血のように赤い物がまるで巢に落ち込んだ得物を刈る蟻のように無数にわいて、マインドシーカーに張り付きその全身をおおう。

ガリガリと金属を削る音が鳴り響き、二人の終焉を告げる。

「さて、お前みたいな美人を奴等にやるのはもつたいたい」

「私もあなたをあいつらに渡したくない………約束守ってね」

S-11：自決用の高性能爆弾をタイマーで起動させるイグナート網膜投影を切り自身本来の視界に戻し振り向きイグナートを視界に入れるデューヴァチ。

「ふ、俺は約束を守ることに定評があるから安心だ」

「そう、良かった……」

安堵の息をつくヂェーヴァチ。

「おいおい、ボケ殺すなよ、其処は聞いたことないとかあるだろ？」

イグナートも網膜投影を切りヂェーヴァチを視界に入れる。最期に見ておきたいから…その姿を網膜に焼付け、声を鼓膜に刻み込む。

「少なくとも私との約束をあなたは破らなかつた…だから」

「じゃあ、来世とやらで運命的な出会いでもしてそのまま結婚でもするか？」

「それもいいね…でも、」

ヂェーヴァチは少し悲しげな表情になる。

「でも？」

聞き返すイグナート

「未来でそうなりたかつたなあ…」

「そうか……」

BETAさえ存在していなかったら在ったかもしれない未来、いやその場合第三計画自体なく出会えなかったかも知れない、親友とも最愛の女性とも…

(なんて……皮肉なんだ)

「さて、また出会えることを期待して一発ドでかい花火を上げてやるうかつ!!!」

タイマーが残り10秒を切る

「またね…イグナート」

チエーヴァチは再びめぐり合えることを信じてその一言に総てをこめる、かなわない願いと知りつつも。

願わずには要られなかった、言いたいことやりたいことは何も知らないが知りだしたら限がない。

だが、それらとは別に今生においてどうしてもして欲しかった事があった。

ただ、一度くらいは言ってほしかったなあ……”好きだ”って

「チエーヴァチ!!!好きだっ!!!」

それは、最期の最期にてかなう……もう未来などなく待つのは死だけだとしても彼女、チエーヴァチの心は満たされる。

「っ!!!…私もだよイグナート……大好きっ!!!」

カウントが0を指し示す……

二人を乗せたマインドシーカーは内側からあふれ出る白い閃光に飲

「ハア、ハア、ハア……くっそたれがつ!!!」

無数のBETAに取り囲まれながらも戦い続けるマインドシーカーとそれを駆るトリースタ

「トリースタ！大丈夫?!」

「お前こそ大丈夫なのか？クリスカ」

いいつつトリースタは突撃砲の残弾を確認する。

(右腕突撃砲：残弾数、36m32発、120m2発、左腕突撃砲
…36m154発、120m7発か…よしっ!!!)

「一発で決めるっ!!!」

腰部の跳躍ユニットを吹かし機体が一気に加速し眼前の要撃級へと
向かう

十数メートルあった距離は一気につまり要撃級は迫り来るマインド
シーカーに向かい、ダイヤモンドよりも硬いその剛腕を振るう。

が、剛腕が振るわれるよりも速く左右の腕の間にある顔面に銃
口が突きつけられる。

「喰らっどけっ!!!」

“ズドンっ!!!ズドンっ!!!”

グラップラー
要撃級はそのまま赤とも紫とも取れる色の液体を流しながら崩れ落ちる。

その瞬間

“ズガアアアア”

「グっ！！！！！」

「きゃああああー！！！」

後ろから激しい衝撃がマインドシーカーと中にいたトリースタとクリスカを襲う。

要撃級（グラップラー）をしとめた瞬間後ろから突撃級の突進を受けたのである。
デストロイヤー

突撃級のモース硬度15を誇る鋭角を備えた甲殻と時速170kmの速度から繰り出される一撃は戦術機の装甲など、まるで粘土のように破砕する。

ややズレていたためか、その一撃はマインドシーカーの右手を肩口から弾き飛ばし、胴体の一部を陥没させるに留まる。

「……………クっ……………クリ……………スカ……………ぶ、無事か？……………」

どこか負傷したのかトリースタの口調に苦悶の色が混じる。

「……………っ！私は大丈夫、トリースタは？」

軽い脳震盪でも起こしていたのか、朦朧とする意識をクリスカは頭を振り意識を強引に覚醒させる。

「……俺も…ぶ、無事だ……だが、こちらの操作系をやられた……
そっちはどうだ？」

「トリースタ？！どこか怪我したの？！」

トリースタの苦悶の声を聞き網膜投影を切りトリースタの姿を確認しようとするクリスカ。

「振り向くなっ！！まずは操作系を確認するんだっ！！クリスカ・
ビャーチエノワ！！！！」

「わっ分かった…トリースタ」

トリースタの叱咤により作業を行うクリスカ

ここは敵地のご真ん中である尚、周囲には無数のBETAまずは敵の排除もしくは離脱が最優先であり怪我の治療など一番最後である。そうしなければ此処で二人とも死ぬのだから…

「こっちは問題ないよトリースタ」

「……よし、お前が動かせクリスカ」

「え……？」

「ぼさつとするな、メインをお前に切り替えてお前が動かせ、お前にしか出来ないんだ。」

「……………」

「俺たちを逃がしてくれた、イグナートやチエーヴァチの意思と犠牲を無駄にするな」

「…分かった、やってみる!!」

作業用のコンソールを取り出し、機体の操縦優先度を前部座席の自分に設定し、操縦桿をクリスカは握り締める。

「お願いっ動いて」

要撃級の死体にもたれかかるように活動停止してたマインドシーカーが活動を再開する。

機体のエンジンが回転数を上げマインドシーカーの瞳に光が宿り機体を電気信号が駆け巡る。

その信号を受けて、電磁伸縮帯が機体の右手を欠いた四肢を動かしてベアリングが軋みながら稼動する。

「ブーストジャンプ噴射跳躍、開始」

腰部の跳躍ユニットが燃料を燃焼させ炎を噴射し機体はそれを推進力にして大きく跳躍する。

だが、

（機体が左に流れる！）

「……何？…あれは…一体……なんなの？」

クリスカの問いに答えるものはなく、クリスカの網膜には浅いクレ
ーターとその中央でゆっくりと立ち上がる紅い鎧を纏った一機の機
兵がいた。

続く

第03話 散る命（後書き）

次回、敵の攻撃により半壊するマインドシーカー！！

止めをさされそうになる其の時、一つの物体が墜落する！！

クレーターより現れるのは紅い鎧を纏った機兵

クリスカとトリースタの運命は如何に？！！

文章とかこれでいいのでしょうか？、楽しんでいただけますか？

第4話 舞い降りし者（前書き）

前回の第3話に追加している文章があるので先にそちらを読まないとちんぷんかんぷんになると思います。

第4話 舞い降りし者

BETAの群れを吹き飛ばすほどの衝撃波を巻き起こしたクレーターの中央に佇む紅い機兵、ビルトライガーはその双眸に淡い緑色の光をともしながら周囲を見渡す。

『無事か？其処の機体のパイロット』

外部スピーカーからライガーのパイロットの音声が流される。

「どうしよう？トリースタ？（パイロット？衛士じゃなくて？）」

「……とりあえず、名前を……聞き……出すんだ……そして、戦闘になつたらやつをリーディングするんだ……（何だあの機体は?!普通の戦術機とはまったく違う）」

「分かった」

『何とか無事だけど……うまく動けない……』

クリスカも外部のスピーカーとマイクからの音声でやり取りを行う

『……少し待っている。周囲の敵を殲滅する』

（この数のBETAを少しの間で倒せるというのか?!）

『まって!!アナタの名前は?!』

トリースタは驚愕に思考が硬直し手いる間にクリスカが紅い機兵を

駆る青年に尋ねる。

『俺の名は……【東雲 亮】だ。』

紅い機兵はその背から地面をけると同時に緑色のフレアを噴出し体制を建て直し始めたBETAへと疾走する。

第4話 舞い降りし者

『T-LINKコンタクト・念動集中』

東雲の意識がライガールの四肢に集中し、膝と肘に装備された念動フィールド発生装置がT-LINKシステムにより拡張された思念を物理的な力に変換し一種の力場を四肢に纏う形で発生させ、ライガールの四肢が淡い緑色の光の膜に覆われる。

『フンっ！！！！』

光に覆われた右足で要撃級を蹴り上げるライガー、サソリのような生き物はまるでボールのように空高く舞い上がる。

空中に刹那の間浮遊する要撃級に迫る影　ビルトライガー。

「墮ちろっ！！！！」

ライガーは回転しながらまわし蹴りをBETA Bに食らわせ叩き落とす。

要撃級はなすすべもなく蹴りを受けいれるしかなくまるで弾丸のように、稲妻のように、BETAの群れに向かって吹き飛び、

無数のBETAが一緒に弾け飛ぶ

「次っ！！！！」

群れのなかにいる蜂のような外見のBETA要塞級を見据える。

「プラズマ・バックラーセットっ！！！！」

左腕に備え付けられた白い三つの突起物。

それに機体の胴体に収められたブラックホールエンジンから膨大なエネルギーが送り込まれ、それに伴い突起物の内部機関が高速回転し、超高密度のプラズマエネルギーを生み出す。

“バチっ！！バチイ！！！！”

突起物内部に納まりきらなくなった蒼白のプラズマがあふれ出す。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！……！」

その青白いプラズマを纏った拳を構えライガーは背面スラストにより反重力子を噴出し、超加速する。

加速をつけたライガーはその左腕を要塞級の顔面へと叩き付ける。

要塞級の強固な甲殻はあっさりと簡単に碎け、左腕が顔面に食い込み。

『打ち砕けっ！！！！ジエツト・マグナムっ！！！！！！！！』

“バシユっ！！バシユっ！！バシユ！！！”

三つの突起物の内部に圧縮、蓄積されたプラズマエネルギーが直接、要塞級の体内へと打ち込まれた。

ライガーは食い込んだ左腕が鮮血の尾を引きながら引き抜かれライガーは一気に離脱する。

ライガーが離脱すると時を同じくして打ち込まれたプラズマエネルギーの塊は均衡をなくし、要塞級内部から弾け飛ぶ。

“ガッシャン”

機体が地面に着地すると同時に内側から爆ぜ、見るもおぞましいオブジェと化した要塞級は倒れる、無数のBETAを押しつぶしながら。

着地したライガーに群がる無数のBETA。

『T-LINKフルコンタクト、ライガー高機動剣戟モード…』

ライガーがその右腕に備え付けられた刀を左手に掴み音を立てて引き抜く、

『T-LINKフェザーっ！！！！！！』

“バサア”

背面スラスターの両脇に備え付けられた支翼が展開する其れは、翼膜を剥がされた鋼の竜の翼のようであったが、次の瞬間には淡い緑色のフレアが噴出し、それによって翼が形作られる。

「刃よ破を纏え…」

抜き放った刀に極限まで細く、薄く、硬く、研ぎ澄まされた念動フィールドが纏わされる。

その刃先は粒子一個分の薄さとなり、理論上あらゆる物を切り裂く。

“シュンっ！！”

翼が一瞬きらめいたかと思うと其処にライガーの姿はなく、同時に数体のBETAが切り裂かれる。

其れは雨のように流星のようにBETAに降り注ぎ貫いていく。

「念動爆砕っ！爆ぜろっ！！！」

BETAを貫いていた光の念動フィールドで作られた矢が一斉に爆発しBETAは爆散し、その爆炎に機体が照らし出さる。

其れはまるで神の裁きを与える熾天使セラフにして執行者エクスキューショナーであつた。

（通常の機体では物量に飲み込まれるな…だが、航空戦力を整えればそれほど脅威でもないはずなんだが…）

亮の疑問はこの後すぐに解決されることとなる。

一筋の閃光が彼の駆るビルトライガーに迫っていたからだ。

「っ！！熱源反応だっ！！Gテリトリー展開！！！」

機体の周囲を重力フィールドが覆い、機体を襲う閃光レーザーは拡散、湾曲され機体に届くことはなかったが、亮は冷や汗を流すレーザーの発射地点が数十〜数百キロ先なのだから…

（超遠距離からの高出力レーザーによる狙撃…一体一体の戦闘力はアインストに遠く及ばないが其れを超える物量と飛行物体を正確に捉え、確実に落とす狙撃これは厄介だ。）

『おい其処の機体！！これから貴様らを担いで離脱するいいな！！返事は聞かない』

ライガーは刀を鞘に収め機体を反転させ地表すれすれを飛行し、そ

の途中で未だ倒れているマインドシーカーを掴みその空域を離脱する。

サイド クリスカ

今、私は突然現れた機体に乗機ごと担がれ飛行している。

有り得ない、あの機動性にパワー、要塞級を一撃で屠るなどの武器、レーザー攻撃を無効化する見えない壁、光の翼が生み出す面制圧能力と重力を慣性の法則を無視した飛行能力、高機動……

そして何より、何処までも何処までも透き通る無色の心

戦闘中彼をリーディングしてみた、彼は何も感じていないだけどころしているのは確実、自我もきちんとある、だがあえて言うなら何も興味を抱いていない。

兄弟たちとは違う、あの子達は自我が存在していないため感情が育っていないだけだけど彼は違う、確固たる自我を持ちながら何も思っていない自我が存在しながら感情がない。いや、一色だけ彼の心に渦巻いている感情があった。

とても、とても薄くて意識しないと気づかないくらい薄い色

其れは、渴望のいろ

彼は、何かを求めている。

彼は何を求めているのだろうか？

気になる……彼のなか深く読み取ってみよう。

第5話 眠りしモノ

白い空の広がる丘へと続く一本の道、その真ん中に立ち尽くす一人の少女。

その銀髪が風になびく、思わず髪を押さえつつ少女…クリスカは不思議な郷愁にも似た感情を抱く

此処は、一体何だろう（何処だろう）？

あたりを見渡す。あたり一面草花が咲き乱れ、丘の頂上には一本の大樹が聳え立っていた。

その大樹に茂った葉は、幻想的な白い光を放ちこの丘を照らしている。

BETAによつて自然のほとんどが壊滅した今このような光景はユラシア大陸には存在しない。

いや、そもそも光を放つ葉を持つ樹など現実には存在しない。

ふと、クリスカは草花に紛れ存在しているある物に気づく

「墓標…其れも沢山……」

其れは、紛れもない墓標の丘だった。
ある物は石を積み上げられただけ、
ある物は十字の杭を突き刺した物、
ある物は四角い墓石に名前が刻まれ、
ある物は其処に誰が眠っているかを示すだけの墓標、
ある物は剣が突き刺さっただけ、
ある物は銃が地面に突き刺されている……

だがその墓標達は苔が生い茂り、蔦が絡みつき花を咲かせ至る所から新芽が顔をのぞかせ、死の象徴でありながら、命の息吹を感じさせる。

だが、一切の動物が存在せず穏やかだが寂しく、暖かいが寒い、落ち着くが落ち着かないそんな相反する感情を抱く。

クリスカは丘の頂上へと続く一本道を登っていく……

すると途中にやや大きく開けた広場のような場所があり其処には五つの武具が突き刺さっていた。

うつすら青白く光る弓、
紅い光を放ち仄かに熱気を放つ槍、
風を纏う直刀、
突き刺さった地面が其処だけ湿り気を帯びている水の剣、
雷を帯びた野太刀

そのどれもが、神聖な空気を放っていた。

「これは…一体…？」

一体これは何なのかと突き刺さった武具のうち弓に手を伸ばす…が、

“バチイっ！！！！”

「キヤっ！！」

伸ばした手が見えない力によってはじかれる。

「一体これは何なのだろう？」

他の武具も触れないと考え、武具達を素通りして、頂上を目指す。

クリスカ自身いままで、植物は資料でしか見たことがなく興味を引かれるのだがこの空間に流れる寂しい空気が其れを許さない。

歩を進めるうちに丘の頂上、聳え立つ大樹の根元が見えてくる。

そこでクリスカは歩をとめる。

その大樹の根元にいた存在に気がついたがゆえに止まらずにはいられない。

其れは、青く光る鱗に水晶のような角を生やし蛇のように長い体をとぐるを巻くように眠るモノ。

まるで物語りに出てくる巨大な龍そのものであった。

勇気を出して一歩、歩を進める。すると龍は目を覚まし、頭を持ち上げその金の双眸がクリスカを見据え、ゆっくりと腕と反対に位置するその背の翼を広げ翼膜が張ってあるべき場所に膜が存在せず代

わりに蒼い炎の羽を携えた龍の翼が広げられる。

「G U U U U U U U U U U U U U U U ……」

龍がうなりを上げ、クリスカに顔を近づける。

「っ！！！」

クリスカはあまりにの恐怖と緊張に硬直し叫びをあげることもない。

そんなクリスカの肩が突如後ろから掴まれる。

「っ！！！！！」

肩をつかんだ存在はクリスカに語りかける。

「其処までだ、それ以上入ってくるんじゃない。」

クリスカは咄嗟に後ろに振り向き自身の肩を掴んだ存在を視界に入れる。

其れは、黒いロングコートを羽織り、やや茶髪に近い黒髪の青年であった。その金色の瞳孔が縦に割れた瞳が酷く印象的だった。

「現世うつしよに戻るんだ。君がいるべき場所はたぶん此処こゝじゃない。」

青年がそういうと同時に視界がぼやけ、クリスカの意識は其処で途切れる。

「はっ！……い、今のは……？」

クリスカが我に返ると其処はあの不思議な空間にいた前と変わらず
マインドシーカーの管制ユニットであった。

（確か自分は、リーディングを行おうとしていた？いや、行った？）

『おい、敵の反応はこのあたりにはない。だからいったん休憩を
入れるぞ。』

マインドシーカーを担いでいる紅い機体から先ほど空間で声をかけ
てきた青年と同じ声が接触通信によって響いてきた。

第6話 遺言（前書き）

なんか8日にアクセス件数が777だった…なにか景品もらえな
いかなあ

第6話 遺言

ノングスクハイブより遠く離れたとある渓谷

そこに全身に赤い鎧を纏いその隙間から紫陽花のような薄い紫を覗かせる機体【ビルトライガー】が淡い緑色のフレアで出来た光の翼を広げながらゆっくりと砂埃を舞い上げながら着地する。

その腕には一機のミミズクのような頭部を持つUNブルーに塗装された戦術機が抱えられていた。

抱えられた戦術機は右腕が引き千切られたかのように損失し胴体部にも損傷が見受けられ、間接部からは内部機関が顔を覗かせて、機体のオイルがまるで血のように滴り落ちていた。

ビルトライガーはゆっくりと機体を渓谷の崖にもたれかせる。

その戦術機の胴体内部の管制ユニットの設けられた前部座席に座る少女クリスカは先ほど見た世界とそこで出会った青年を思い浮かべる。

（あの人とあの見たことも無いタイプの戦術機に乗っていた人と声が同じだった……）

だとするとあの世界はあの機体に乗っている人の心の世界なのかもしれない……）

仮説を立ててみるが答えは出ない、証明する手段が存在しないのだから。

それにいままで彼女がもつ能力リーディングは相手の感情を色で捉

えイメージを視覚で捉え、思考を音声として受け取る物だ。

いくら奥深く探ろうとしたからといって自身の精神が相手の中に入り込むなど今までなかった。

疑問が疑問を呼ぶ…さらにあの世界で見た五つの武具、そして眠っていた龍それらが何を意味するのかクリスカが知る由も無かった。

頭の中をぐるぐると際限なく巡る思案をいくら考えても答えは出な
いと諦めて中止し、網膜投影を切り後ろの座席に座っているはず
の自身にとって兄であり、父でもある青年に語りかける。

「トリースタ体は大丈夫？怪我していたみたいだったけど……」

「……………」

トリースタからの静寂のみしか返ってこない。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……………」

いや、トリースタの荒い息が聞こえてくる。

「トリースタっ！…」

クリスカは座席と強化装備の接続コネクを切り後部座席へと向かう。

「あ、あ……………」

其処で見たのは

「ト、トリースタアアっ！！！！」

歪んだ管制ユニットの壁によってによって機材に挟まれ、顔は土色に染まり口から血を流した瀕死のトリースタの姿だった。

第6話 遺言

マインドシーカーを崖に背をもたれかせたライガーは地面に肩膝を着く、そして“カシユっ”と言う空気の流れる音…エアロックが解除された音のあと機械の小さな動作音と共にその胸部の装甲が展開しその身を紅いパイロットスーツ…ATXチームの其れに身を包ん

だ青年、東雲 亮が姿を現しコックピットハッチから飛び降りる。

“ザッ！”

明らかに5メートル以上は高さのある其れをまるで意に介さず極自然に飛び降りることが出来て当然と言わんばかりに着地する。

亮は眼前の鋼鉄と複合材で作られた巨人マインドシーカー…後のソビエト製戦術機の原点とも言われる其れを見上げる。

「……………」

地面に横たわる鋼の巨人を見上げながら先ほど自身が蹴散らしたモノについて物思いにふけていた。

（あれは…いつたいなんだ？あれは生物であつて生物ではない……戦っていた本人に聞くのが一番手っ取り早いか。）

亮が情報は持っているものから聞き出すのが一番という結論に達したとき、マインドシーカーの胸部装甲が展開し中から銀髪を靡かせた少女が顔、必死の様相で亮に懇願する。

「アナタはっ！？……お願いっ！！トリースタを……トリースタを助けてっ！！！」

「一体どうした？」

「お願い…お願いだから……トリースタ…トリースタを助けて……」

銀髪の少女クリスカと打って違い冷静に事情を聞きだそうとする、
が今のクリスカに落ち着くなど不可能であり其れを察した亮は戦術
機の胴体の上へと直接飛び上がる。いくら座していると言っても人
の十倍近い大きさを誇る戦術機……のである。

「ヒッグ…ヒッグ……トリースタが…トリースタが…死んじゃうよ
おおおっ！！！」

クリスカは亮に縋り付き嗚咽を漏らす。

「^ど退け」

縋り付くクリスカを押しつけコックピットを覗き込む。

（機体が損傷した際にコックピットが損傷・圧壊しそれに巻き込ま
れたか…）

機体が損傷した際に機体の内部構造体に挟まれ“通常”では重機を
持ち要らなければ救出などとても不可能であった。

「仕方ないか……【龍魂覚醒】っ！！」

亮の雰囲気が一変する、膨大なプレッシャーを放ち風も無いのに何
かの本流が亮の周囲に渦巻き、膨大な神のみが持ちこたえる神気を発す
る。

そのブラウンの瞳は、暁の刻限より数瞬後に顔を除かず太陽のよう
な金色であり、その瞳孔はまるで爬虫類の其れのように縦に割れて

いた。

その光景を見たクリスカはトリースタのことも一瞬頭から消え去る。先ほどの不可思議な世界で出会った青年そのものであったからだ。

「やっぱり……さっきのはあなたの世界だったんだ……」

亮はクリスカが驚愕と納得をこちゃ混ぜにした感情に支配されているうちにコックピットに飛び込み…

「ふんっ！！！」

トリースタを挟み、圧迫していた機材をまるで粘土のようにたやすく押し広げ機体の外へと運び出し地面に横たわらせる。

「おい」

トリースタを救出する様子を見守っていたクリスカに呼びかける。

「……な、なに？」

最期の別れを告げておけ

「え？……え？…最期って……」

亮の言葉は無情にも現実を突きつける。

「こいつはもう助からん」

「え……うそ…だよね？」

いつの間にか元に戻ったブラウンの瞳でクリス力を見つめながら告げる。

「本当だ……こいつはもう間も無く……“死ぬ”」

亮の言葉が溪谷に木霊する……

東雲 亮は今、眼前に二人の男女を見据える。

地面に横たわる青年の手を必死に少女は握り締める。まるで其処からいなくなる存在を繋ぎ止めようとするが如く。

このような光景はもう見飽きた。幼きころより俺が見続けてきたのは別れの場面ばかり……
もう何度見ようと心も動くことは無い。

二人は同じ色の銀髪であり、兄妹のようにも親子のようにも見える。その二人は今生において最期のとなる言葉を交えている。

「ク……クリスカ……最期に……頼みたい……ことが……ある……」
「なに？ トリースタ」

内臓は機材に押しつぶされたとき粗方つぶれもはや助かる見込みなど皆無であったが、戦場において最期の言葉を死に水を取るものに伝えられるのは比較的幸運だ。

「イ……イーニヤを……た、頼む……」

「わかったよ、トリースタだから安心してあの子……イーニヤは私が“守る”」

其れを聞き届けたのか幾ばくか安堵の表情を浮かべる青年

「そ……そうか……なら……安心……だな……」

最期にそう告げると青年の瞳から光が消えつせる。

「トリースタ？……ねえトリースタ？……ねえってば…返事してよ…ねえってば…返事してよ…返事してよ…トリースタアアアア！」
青年の腕を必死に力の限り握り締めるが彼から返事が返ってくるこ
となどもはや無い。

俺はその手を背後から押さえ、一本ずつ硬く握り締めた指を解いて
やる。

「あ……」

次に開いたままの彼の目を閉じさせてやり、銀髪の少女に告げる。

「もう…眠らしてやれ……」

「う、うん」

その目に今にも決壊寸前のダムのようになみだを浮かべながら少女
は答える。泣くの堪える必要性などないと言つのに…俺はもう泣け
ないというのに…

「私は泣かない…だってトリースタと約束したもん。」

イーニヤを守るってだからこんなところで泣けない、泣く訳にはい
かない…ムグっ…！

彼女の前に回り頭を胸に押し付ける。

「泣いていいんだぞ、泣けるのだから」

「あ、あああ……泣いていいの？」

第6話 遺言（後書き）

緊急アンケート（緊急じゃないけど）

鑑 純夏専用機アンケート

1 炎神 レイアース

2 魔装機神 グランヴェール

3 その他

どれがいいでしょう？

* 凄乃皇は認めん

第07話 埋葬（前書き）

今日明日中にこの章を終わらす!!

第07話 埋葬

夜の溪谷、虫の鳴き声一つしない風の唸り声のみが響くなか、其処ではランプの明かりに照らされた二人を見守るかのように座する二体の鋼の人型……その膝元では件の二人がランプを中央に向かい合っ

「ほら、出来たぞ…熱いから気をつける」

「あ、ありがとう…」

ランプの横で携帯用ガスバーナーを使い作られたコーヒーをクリス力に渡す亮と其れを受け取り両の手で包み込むように湯気の立ち上る黒い液体の入ったカップを受け取るクリス力。

其れを一口、口に含み飲み干す。

「う！苦い…けど、おいしい…」

ライガーに積まれていた非常用食料の内のレトルトではあるがクリス力には少し苦ったらしい、しかしそれでもはじめての天然ものに舌鼓を打つ。

「そうか君には少し早かったか…」

感想を聞き届けた亮もまたコーヒーを口に運ぶ

「ありがとう」

「？何がだ」

コーヒートの礼は先の礼であるので何に対して礼を言ってるのか亮は分からずに聞き返す。

其れを聞いたクリスカは視線を崖の麓に並ぶ幾つかの石の列へと向ける。

「トリースタたちのお墓作ってくれてありがとう」

一列に並んだ石にはそれぞれ名前がローマ字で刻まれていた。

その中の二つ、一つだけ名前の二つ入った墓標と一つだけその墓標の下に本人が眠っているものがあつた。

本来であれば生きた標本である彼女らは死すれば文字通り廃棄されるのみであり墓標など作られることも、またその墓標に祈りをささげるものも居やしない。

「気にするな、俺は君の手伝いをしたただけだ……それに死者に礼を尽くすのは悪い事じゃない。」

亮も自分用のコーヒートを口にしながら言う。

クリスカは其れを見ながら気付く。亮がいまだ自分を名前で呼んでいないことに、

「自己紹介……してなかったね…私は【クリスカ】…【クリスカ・ビヤーチェノワ】あなたは？」

其れを聞いた亮はコーヒートを見つめながら改めて名乗る

「亮…東雲しのめ 亮…姓が東雲、名が亮だ。」

「分かった。亮って呼ぶね。」

「ああ、分かった…クリスカ」

クリスカは名を呼ばれたことにたいして笑みを浮かべ亮を見つめ、東雲は黙ってコーヒーを口にしていた。

少しばかり穏やかな空気が流れていた。

第7話 埋葬

「さて、聞きたいことが幾つかあるがいいか？」

コーヒーを飲み終わり、ランプの明かりを見つめていたクリスカに亮が問いかける。

「なに？」

「君たちが戦っていたあれは何だ？」

「……BETAを知らないの？」

亮の質問に対して怪訝な表情で問い返すクリスカ。

「ベータ？」

「Beings of the Extra Terrestrial
origin which is Adversary
of human race

単語の頭文字だけとって呼ばれる通称【BETA】私たちはそう呼んでいる。もうユーラシア大陸は殆どやつらに占領されていて、このままだと30年持たずに人類は滅亡するって言う人も居るみたい。

其れを聞きやや顔をしかめる亮

「人類に敵対な異星起源種、の英語か……何処の世界でもあまり状況は変わらないのかも……」

亮の口からこぼれた後半の言葉に反応する。

「世界……ねえ、亮って何処から来たの？『何処の世界でも』って事は他の世界から来たの？」

「……………」

亮は僅かばかり無言で思索する。

(まあいいか、大して問題ではあるまい…)

「そつだ、おれは確立分岐世界…：言つて見れば平行世界から来た、そして異星からの攻撃を受けていた世界は此処で二つ目だ。もっとも敵は大きく異なるがな…：」

BETA以外の宇宙人にクリスカは驚きを隠せずに目を見開き尋ねる。

「BETAじゃないの？」

「違うあいつら、インスペクターは人類を管理つまりは支配しようとやってきた。つまり知的生命体だった。

それに比べBETAだったか？あれは、同時期に出現したアインストと呼ばれる 正体不明の生物群に近いものがあるが…

あれには作つた者の悪意が感じられる。」

亮の最後の一言“作つたもの”という言葉に引つ掛かりをクリスカは感じる。

「作つたものの悪意？」

「ああ、通常生命体は存在の核となる魂と其処から生み出される生命力によつて生命活動を行う。

だが、BETAは魂が存在しない。ただ生命力と作業に必要な程度の意志…

つまりは、機械が動くのに必要な電気の変わりに生命力、プログラムの代わりに意志を書き込まれただけの存在。

あえて言うなら完全自立稼働の有機機械とでも言うべき存在だ。そして其処から、命を使って動く機械を作る時点で、自分達以外がどうなるうとかまわないと言う悪意が感じられる。」

亮の言ったことに驚きを感じずともクリスカはなぜ亮が其れを分かっただかと言うことに疑問を感じる。

BETAに関してはまだ判明しているのは炭素系生命体だという一点のみであり、その一つが判明させるために多くの血が流れたのを彼は唯一度見ただけでその本質を理解したのだ。

「な、なんでそんなことが分かるの？」

亮は一旦目を瞑りやがて語り出す。

「…昔、似たようなものを見たことあるのと俺の【目】が特殊だからだ…」

「似たようなもの?!目が特殊？」

「ああ、俺が生まれた世界では裏の世界ではあるが魔術が存在し、吸血鬼と呼ばれる幻想の存在も存在していた。その吸血鬼の手足となり人間（餌）を狩る存在【死者】。」

そして、俺の目は魂と其処から生み出される生命エネルギーを視認することが出来る。一部地方では浄眼とも呼ばれていたな……ともかく、その二つからだ。」

亮の話が非現実過ぎてクリスカは半ば思考を放棄して率直な感想を

漏らす。

「なんていうか……信じられないね」

「そつだ、普通誰も信じないだからこうして話している。」

其れもそつだと思わず納得してしまつ。

ただ、自分を信用してくれていた訳でない事に少し落ち込み。

なぜ落ち込むのか分からず頭を抱えることとなる。

「さて、とにかく情報がほしい。クリスカ、君の力を使って教えてもらえないか？」

「っ!! 知っていたの？」

クリスカの顔が強張る。今彼女の心を恐怖が支配していた。

かつて、部隊の仲間であったもの達による心ない言葉、態度の数々がクリスカにその感情を抱かせた。其れは人の無意識の防衛行動によるものかもしれない。

「同属は同属を知る、場に存在する意思を読み取る力【リミピッドチャンネル】において俺は君たちよりも高次にいるそれだけだ。

言っておくが世界そのものや俺の意思を強引に覗こうとはしないことだ命の保障をしかねる」

クリス力は最期の可能性を聞き背筋が寒くなるのを感じる。先ほどまで感じていた恐怖とは別の恐怖がクリス力を支配し、たかが人間に対する恐怖をいともたやすく吹き飛ばした。

あの世界であの龍が顔を近づけてとき、あの時亮に呼び止められていなかったらどうなっていたか想像がたく無い。

「…ん、分かったじゃあ、今のところとりあえず分かっているBETAの生態と区分を送るね。」

「ああ、頼んだクリス力…」

再び名前を呼ばれ顔が綻ぶのを感じるクリス力だった。

「さて、疲れただろう…もう夜も遅い寝るといい」

BETAに関して一通りの知識と簡単な世界情勢をプロジェクションしてもらい

亮は組み立てておいた携帯用のテントを指しながらいう。

「ん、亮はどうするの?」

テントに向かおうとするクリス力だったがランプの前から動かない

亮を見て問いかける。

「見張りをしている、もらった情報によるとBETAの対人策的能力はかなりのものだ。一人は絶対に起きて見張りを行う必要がある。」

「分かった、途中で交代するよ。」

「ああ…お休み、クリスカ…」

「お休みなさい…亮………」

抑揚があまり無かったが僅かに優しさの籠った声で告げる亮とそれに応えながらクリスカはテントに入り眠り寝袋に身を包み横になる。

（亮一体何を思っているのかな……あの世界に入り込んでからリディングが出来なくなっていたしわからないのが不安だなんて初めてだな…）

実際には再び入られても困るので亮が自分のチャンネルを閉じて精神波が漏れでないようにしていたのだ。

クリスカは其れによって初めて普通の会話を行ったのであり、クリスカはなぜわからないことが不安なのか分からず胸に未知の感情を抱いたまま眠りに着いた。

一方亮は、ランプの明かりを見つめながら感覚を広げ周囲を警戒しながら思索する。

テントから飛び出ると朝の冷たい空気が僅かに残る眠気を吹き飛ばし、吐く息を白く染める。

周囲を見渡すクリスカ、其処には昨日の道具はそのままです。対の鋼の巨人から滴り落ちるしずくが朝日に透けて輝いていた。

……が亮の姿はなかった。

「一体何処に……」

少なくとも自分の機体が此処にある以上遠くには行っていないと当たりをつけ周囲を散策し始める。

すると、何処からともなく旋律が風に乗って聞こえてきた。

(B G M W i s h a n d s a d n e s s (願いと悲しみ))

其れは、穏やかに流れる風のように、緩やかに流れる水のように

其れは、悲しく、切なく、そしてどこか優しい旋律だった。

クリスカは導かれるようにその旋律を発しているであろう人物を探す。

そして、見つけた

彼は朝日に向かい、人ほどの岩に腰掛オカリナを吹きながら旋律を奏でていた……

クリスカがは彼の後ろに立ち、旋律に耳を傾ける。

自然と涙が溢れ、胸にある何かがその旋律によって肥大化し締め付けられるような何かを感じる。

やがて、演奏が終わり彼は振り向き

「さあ、朝食をとるかクリスカ？」

心なしか彼が涙を流す自分をみて笑みをむけたように感じた。

とても、とても、穏やかな優しい笑みを

続く

第07話 埋葬（後書き）

テイルズ オブ ジアビス 大好きなんです。

第08話 別れと門出（前書き）

これで降り立つ来訪者編は終わりです

感想お願いします。

第08話 別れと門出

出合いは別れへの確約

出会った時既に別れは必ず来ると確定している

だが、人々は次に出会えることを望み、願う

故に人は別れの言葉として、いつかまた出会える日が再び来るように
祈るように其れを口にする

“またね”と

第08話 別れと門出

「ねえ、亮其れ何？」

クリスカは視線で亮の腕の中にあるオカリナを指しきく。

「これか？これはオカリナと言う楽器だ。」

クリスカが見やすいように差し出す。

「オカリナ？楽器？」

「日本など世界中に古くからある楽器で息を吹き込み、吹き出る穴の数や面積を調整して音を出すと言ったものだ。」

クリスカは亮の手の上のオカリナを突つつく。

「へえ…これからあんなきれいな音が出るんだ……あっ！」

“パリン”

オカリナは突如硝子が割れるような音を立て碎けて光る砂となって消えて行った。

「う、ごめんオカリナ壊しちゃった……」

激しく落ち込み、怒られやしないかとおびえるクリスカに亮は肩をすかず。

「気にするな、これは【投影】と言う魔術でつくった複製品だ。時間がたてば自然と消えてしまうその場限りの代用品なんだ。言ってみれば氷の彫刻、壊れて当然タイムリミットだったただけだ気にするな。」

「なんだあ…よかったああ…」

胸をなでおろしながらクリスカは安堵の息を漏らす。

そして少し残念そうな顔をしていた。

「なんだ？ほしかったのか？」

「え？そんなこと………ないよ？」

「ずいぶんと長い間だな、そして疑問系かおまけに視線を露骨に逸らすな」

明後日のほうを向いて応えるクリスカに亮は若干あきれ声で言う。

「違っつて言ってるでしょ！！」

「分かった、分かった、分かったから」

「ちつとも分かってないっ！！亮のばかああああ………」

クリスカは木霊と亮を残しテントのある方へと駆けていった。

「やれやれ………俺は…笑っている…？」

自身の無意識による顔の筋肉の運動を感じ亮は指を顔に当て其れをなぞり、それに疑問感していた。

亮自身、いままで意識的にしか表情が作れなつたが故の戸惑いであつた。

数時間後

「どうだ？」

「何とか動きそう、メモリーもちゃんと消えてたよ。」

マインドシーカーの足元から声をかける亮と管制ユニットから返事を返すクリスカ

機体の戦闘記録が残っていたら後々厄介なので機体を初期化することにしたのだ。

もつとも機体が前回の戦闘で一度機能停止に追い込まれたため保存されたデータ自体は少なくまた、トリースタのことも在ったので主記憶装置メモリのデータを副記憶装置に保存せず居たので機体のレコードは基地から発進する直前のものとなっている。

(メモリーは電気供給が切れるとメモリー内の全データが消滅する)

そもそも戦術機は膨大な量のプログラムを処理するため一々反応の遅いHDDから呼び出し処理していたのでは戦闘などとても出来たものではない。

そこで、RAMディスクと呼ばれ機能を使いHDDのプログラムを全て主記憶装置メモリに写し其処から直接起動することで機体のレスポンスを高め、また振動に弱いHDDを機体起動中には停止させておくことで機体の長寿命化を為していた。

半導体技術が進歩しHDDにではなく半導体に記憶できるようになるか、電気ではなく光で信号のやり取りを行えるようになればこのような問題もなくなるのだが…

「分かったじゃあこれでお別れだなクリスカ」

亮はライガーのコックピットに飛び乗り中に入ろうとするところでクリスカが呼び止める。

「ねえ亮、なんでいつしよに行けないの？」

クリスカがその瞳に悲しみに染め亮を見つめる亮は振り向きコックピットハッチクの上のクリスカを見据える。

「組織、特に軍隊は信用できない特にこの機体関連ではな、消されるか良い様に使われ何れ消されるのが目に見えているだからだ。」

「じゃあ、私もいつしよに「君には託されたものがあるのだろうか？」
っ！……！」

クリスカはトリースタとの最期の約束を守らなければならないと自分が不思議な感情を抱く亮といつしよにいたいという相反する想いがその小さな体を引き裂かんばかりに暴れまわっている。

「……………選別だ、とっておけっ！」

「わっ！わわっ！……これって……」

亮がコックピットから投げつけたものを落としそうになりながらも何とか受け取る。

それは、朝亮が吹いていたものと同じオカリナだった……

「投影とは別の魔術で作ったものだ。ずっと消える事はない好きにしろ。」

そういつて亮は紅い機兵の胸の空洞へと入り、ゆっくりコックピットハッチが閉まり、

“カシュっ!!!”

空気が抜き出る音がし機体にエアロックが掛かり、ライガーのエンジンが始動し全身の機関が稼動を始める。

“ブウウウンっ!!!”

機体の双眸に光が宿り、ゆっくりと機体が駆動音を響かせながら立ち上がる。

「ねえ!! 亮!! また会えるかな!!」

クリスカは眼前に巨人内部にいらるであろう青年に向け叫ぶ、

『縁^{えにし}が在ればな……』

機体の外部スピーカーから亮の声を響かせながらライガーはクリスカに背を向け、

“バシユっ！！”

背面スラスタの両脇に備え付けられたT-LINKフェザーが展開し周囲に溢れ余過エネルギーによって余分に作られた羽が宙を舞う。

『また、会える日を楽しみにしているぞ。クリスカ、ではまたな』

ライガーの翼がはためいたかと思うとライガーはあっと言う間に地平線の彼方へと消えて行った。

「またね…亮…」

少女の呟きが風によって流れていったのだった。

そして少女の両手に握り締められたオカリナが彼女の胸で陽光によって煌めいていた。

それから四季は六度めぐり 6年の月日が流れた…

「ねえ、クリスカあの曲聞かせて。」

アラスカの大地に二人の銀髪の少女がいた。

片方は少し舌足らずで腰までその銀髪を伸ばしもう片方はすっかり成長し大人への一步を踏み出したクリス力であった。

「分かったよ、イーニャ……」(BGM Wish and sadness)

オカリナの旋律を奏で、聞き届けていた。

あの出会いのあと、一週間後第三計画は接收され、第4計画へと移行した。

あれからいろいろあった、トリースタの約束どうりイーニャを守るため自身を戦士として鍛え、守るために戦い続けた。

そして今も戦っている。

仲間から魔女と蔑まされようと、

祖国から政略のための道具として扱われようと

(私は、トリースタとの約束を守って戦っている。お前はいつになったらまた会えるのだ亮?)

” ぎっ！…ぎっ！… ”

後ろからいつの間にか近づいていた足音が背後で止まる。

「ふむ、懐かしい旋律に誘われて来て見れば、これはまた懐かしい顔に会えたな。」

後ろからなつかしい声が耳に届き、思わず振り向くクリスカ

「り、亮……なのか？」

其処に居たのは、あの時と全く変わらない容姿の国連軍服の上にE
U英軍の軍服を羽織った東雲 亮が居た。

「この数年で容姿が変わった気がしないのだが、もしかや忘れたなど
寂しい事をいうなよクリスカ？」

彼が意地悪く口元を歪めいう。

「この、馬鹿たれ……」

降り立つ来訪者編 終わり

第08話 別れと門出（後書き）

ふう…なんか予定の倍以上の話数になっちゃった

第09話 異世界（前書き）

少し修正

第09話 異世界

第3のお墜し子と龍神人の会合から一月たち

日本を代表する山 【富士山】

その火口の内に空間的にも時間的にも断絶された一角があり、

其処を棺のように、檻のようにして眠る一体の紅い機兵【ビルトライガー】の姿があった。

機兵は主が再び自身を駆り、空を翔け、主の敵を自身を使い屠るのをただ待ち続ける。

そして、千年の歴史を誇る京の都で黒いロングコートをはためかせ歩を進めるやや茶髪に近い黒髪にブラウンの瞳を持つ 青年 東雲 亮の姿があった。

OPテーマ LADY FIGHTER!

第09話 異世界

クリスカから別れた後、ライガーを富士山火口内部に空間封印を用いて隠し日本で隠れながら過ごし情報を探っていた。

まずはこの世界の歴史である。もっとも図書館に赴けばよかつただけなのでたいした労力は掛かっていない。

それによると日本の歴史は開国そして、大政奉還からやや異なる歴史を歩んでいたようだ。

前の世界では全く同じ歴史を歩んでいた上で未来の時間軸に飛ばされていたのだから若干驚いたものの平行世界なのだからありえると納得する。

次に式紙を使い軍事関係を探る、どうやら旧来の武家と軍隊がそれぞれ独立した組織を構築し其れを将軍が統合するという体系だ、あまり問題が起きていないのでまあよしとする。

戦術機はもと居た世界と比べ機械工学が異常ともいえる速度で発達している。

同年代で換算すると材料工学も10年近く進歩が早いやはり目の前にある危機に誘発されての事と言える。

ある意味、前居た世界でシャドウミラーのいう理想の世界に近いものがあるかもしれない。

【闘争が絶えず行われ人類が進歩し続ける世界】

俺は其れを、肯定して否定した。

此処とは違う世界其処は様々な脅威にさらされ、滅亡の危機に立たされていたが人類はその運命を享受せず打ち砕くための剣として様々な鋼の巨人を生み出していた。

平行世界からの転移の反動を受けて気絶した俺は、反応捉えたシャドウミラー旗艦「スペースノア級壱番艦 シロガネ」に收容され、その高い身体能力を買われシャドウミラーの特機のパイロットとして予備機扱いだったヴァイサーガに乗ることとなった。

そして、伊豆基地をクーデター軍が占拠すると同時に潜入していた人造人間「W17 ラミア・ラヴレス」が敵主力を無力化するという手はずだった。

途中までは上手くいっていた。

そして俺はヴァイサーガに乗りシロガネの艦首の上に立ち、基地と其処に並ぶロボット達を見下ろいていた。ヴァイサーガのマントが

風にはためいている。

「ヴィンデルといったな。……お前達の目的は何だ？

こんな回りくどいやり方をしたからには…それなりの目的があるはずだが？」

紅い重量級のゲシュペンストに乗った男がヴィンデルに問いかける

「我らの目的は一つ……理想の世界を創ることだ。」

「理想の世界だと？」

「こりやまた、随分と大仰な話だな。要は世界征服ということか？」

グルンガスト壱式かややふざけてはいるか要点を付いた返答が還ってくる。

「言い方を変えればそうかもしれん。

だが、何を以て理想の世界とするかは、世界を創る物のみが決定する権利を持つ。

そして、世界征服はその権利を行使するための過程に過ぎない」

「ゴタクはいい！さっさとめえの理想とやらをいつてみる！！」

あの魔力で動いている機体、【サイバスター】デウスマキナとは別の魔導技術で創られた機体のパイロットが吼える…しかしなんで魔導機を動かす者はあんなに短気ばかりなのだろうか？

どこぞのマスターオブロリコンや正義の味方志望とか

「……永遠の闘争……
絶えず争いが行われている世界……
其れが我々の理想の世界だ。」

随分ともったいぶって言う割にはとんでもない間違いだらけの理想だ。

何故ならこいつらの理想は既に叶っている

「ふざけんな！そんな世界の何処が理想だ！！」

サイバスターの機体のパイロットが再び吼える。

なにを持って理想とするかはそのものによる、つまり自分の尺で相手の理想を測るなど出来ない。

そのことに気付かないのだろうか？

「理想よ。」

戦争があるから、破壊があり……同時に新たな創造が始まる」

まあ、おおむね間違っていないが決定的な間違いがこいつらには存在している。

「戦争があつたからこそ発展した技術がどれほどあるか。考えたことあつて？」

「戦争で発展した技術？」

「そう、

例えば、テスラ・ドライブ……

戦争がなければ、現状ほどの小型化・高性能化は進んでいなかった……」

俺にこの機体を与えた本人レモン・ブラウンニングが語る。

「……！」

そして、レモンの言おうとしている意図に気付く面々

「そしてヒュッケバインをはじめとするEOTを応用した人型機動兵器……」

トロニウムを動力源とするSRX……これらは異星人との戦争がなければ生み出されはしなかった……

あなたが使っている兵器は戦争が生み出した技術の結晶……
人類の叡智とも言える物なのよ。」

「そんなことが……そんなことがあつてたまるもんか……！」

「科学は人類の発展のためにあるものよ！」

戦争のための技術が人類の叡智であるはずなどないわ！」

ハガネの管制室にいる女性とガリオンをカスタムした白銀の機体資料によると【アルテリオン】のパイロットの二人が否定するが知っているのだろうか？ 普段何気なく使っているPCとて、もともと大砲の弾道計算機が原型ということ……

「だが、戦争なくして人類の発展は有り得ん。其れは歴史が証明している。」

馬鹿か……歴史が証明しているようにわざわざ引き起こさなくとも

勝手に争いは起きる。

「大佐の言う通りだ。

戦争があるから英雄が生まれる。そして、その者こそが……
異星人を駆逐するものとなる……！」

この艦長も駄目だ……英雄は生み出すものではない自然に生まれるものだ。生み出された英雄には何の価値もない。

「リー！！貴様本気でそんなことがっ！！戦争を継続させて犠牲を出し続けるのかっ?!」

「犠牲は既に払われている。

貴様やケネスのように無能な軍人のせいだな！！

シヤドウミラーこそ私の理想の軍隊。

兵士は己が任務に忠実であり、命を捨てることも厭わない。

そのような彼らでなければ、地球圏を防衛することなど出来んのだ。

「

馬鹿か、人のみが持ちえる力なくして何かを守るなど出来はしない。
何かを守ろうという意志こそ、理不尽を許さないという怒りこそ、
奪ったものを許さないという憎悪

それらこそが最も強い力となるというのに、簡単に命を捨てるもの
ほど弱いものは存在しない。

そして、人は兵士に成れても、兵器には成れん。

「俺達は戦争を続けるために戦ってるんじゃない！

お前達のような連中からこの世界を……其処で生きる人たちを守る
ために戦っているんだ……！」

俺と同じ力を持つ機神に乗っている青年が叫ぶ、だが戦う理由が弱すぎる抽象的過ぎる。

「フン、末端の兵士は己の任務のことだけを考えていればいい
そして、任務を忠実に遂行する兵器であればいい」

こいつはホンと救いようがない

「……………最終通告だ。」

ダイテツ・ミナセ中佐。武装解除をしろらう。

さもなければ……………死だ。」

俺は、こいつらを見限った

第09話 異世界（後書き）

これから東雲の過去話

第10話 離反(前書き)

スミカ専用機途中報告

アンケートできたやつ

サイバスター

ライブレード

アンジエルグ

ヴァルシオーネ

デモンベイン・ブラッド

グレンラガン

ヴァルシオン改

作者の考えたやつ

炎神 レイアース スミカが「炎の矢」とかやったらキャラ的に合うと思った

グランヴェール 荷電粒子砲つながりあと色

友人からの意見

ガオファイガー ファントムつながりか？

あと修羅神とか

第10話 離反

「……………」

「艦長…！」

「戦争が人類の発展を促す…：確かにあの男の言う通りだろう。

だが、戦いによって生み出されるもの、そして失われるもの…：その意味を理解せず結果だけ見るもの に戦争を語る資格などない！
！……！！」

そつだ其れが正しいのだろう。

(B G M A S H T O A S H)

シャドウミラー総司令官【ヴィンデル・マウザー】は二つ大きな過ちを犯していた

一つ、自意識を確立した兵器はもはや兵器ではなく兵士だということ
二つ、兵士は何のためどの様に戦うか自分で“選べる”ということ
兵士は戦わされるものではなく戦うものだということ

天使のような羽を背に、女騎士のような風貌の機体のパイロットW
17…

否、ラミア・ラヴレスは、アンジェルグはその純白の翼をはためかせ一気にヴィンデルに向け加速する。

「む……」「W17……!?あなた、何を!?」

空を切りながら尚加速するアンジェルグ

「ヴィンデル様、レモン様……」

“ガキイン!!”

アンジェルグは体当たりの用に突進しヴィンデルの機体にしがみつく。

「貴様、何の真似だ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ヴィンデルが吼える。

「コードATA……」

『ASH(塵は) TO ASH(塵に)』……発動……!!!!!!」

ラミアの音声コードを認識したアンジェルグはその動力炉を限界以上の回転数へと押し上げる。

「私達を……!?待ちなさい、W17」

彼女の生みの親であるレモンが静止をかけるがラミア・ラヴレスは止まらない。

“ キュイイイイイイイインっ！！！！ ”

機体の動力炉が回転数を限界以上に上げられたことで悲鳴を上げるが尚回転数と生み出されるエネルギーは上がり続ける。

「我々はこの世界に… 『こちら側』 に来るべきではなかったのだ… 戦争によって成り立っていた世界… 其れが 『向こう側』 … 我々の世界だ。

しかし、戦争を否定することによって創られていく世界もある… 其れがここだった。」

「ぬううう、離せっ！！W17っ！！！！！」

ヴィンデルの機体ツヴァイザーゲインがアンジエルグを殴りつける

何度も

何度も

何度も

アンジエルグの顔の装甲が碎け素顔が顕になる。

「私のような作り物… 戦争のために生まれた子供が介入すべき… いや、介入できる場所ではなかったのだ。」

自身の否定、自分の存在価値を定めることは人間にしか出来ない。

「W17…！！それがあなたに芽生えた意思なの…！！？」

レモンは自身の作りし物が、作られし者になるのを感じる。

「ぬうう、所詮は人形！！貴様、狂っていたかっ！！」

ヴィンデルはあくまでラミアを物とし、人であることを決して受け入れない。

「向こう側の尺度ではそうだろう。だが…学んだといってもらおう
！！！」

「W15、16！！！！アンジェルグを引き剥がせ！！！！」

「はっ！！！！」「させはせんぞ、W17ツ！！造物主に逆らうなどッ
！！！！！！」

ヴィンデルの命により今まで静止していた紅い戦車と人型を混ぜたような機体ラーズアングリフと背中に円錐状の突起つまりドリルを背負った白と黒の特機が動き出す。

「W15…お前は心さえ借り物の人形のままだったようだな。この状況を予測すら出来なかったか。遅いぞ…！！」

命令を受けなければ動けない其れが人形だ。

想定外のことが起ころうとも自分で考え行動できる其れが人間だ。

「あなたは…次のステージに進んだのね……」

やはり、あなただけが…あなたこそが……最高傑作……」

「……いや、私は欠陥品だ。仲間を欺き、生みの親にすら牙を剥く……な
すまない……レモン様。私は……」

其れは、何のための謝罪なのか……

「W17……っ!!」「……!!!!」

アンジェルグのエンジンが臨界をこえ

世界を染め上げた

第10話 離反

“ガツシャーーンっ”

爆発を超至近距離で受けたツヴァイザーゲインと爆風によって吹き飛ばされたヴァイスセイバーがゆっくりと起き上がる。

「ご無事ですか？ ヴィンデル様、レモン様」

「……私は大丈夫よ。（予想できなかったわけじゃないけど、まさか……この状況でなんてね……）」

……其れよりヴィンデル、ツヴァイは？」

ヴァイスセイバーはとくに大した問題もなく起き上がる。

が、ツヴァイザーゲインは機体のあちこちから紫電を撒き散らしながら何かが引つ掛つているような動作で起き上がる。

「ぬっつ……機体はともかくシステムXNが損傷したか。

戦闘も不可能……！」

おのれ、人形風情がよくも……！」

ヴィンデルが呪詛を垂れ流しに唸る。

ハガネの面々は先ほど自爆した仲間动摇している。

「無様……なんと無様な。」

ヴァイサーガのコックピットで亮の口から眩きがもれ出た

「撤退しましょう、ヴィンデル。システムXNのこともあるし、これ以上傷を広げるべきではないわ。」

「仕方あるまい……！」

リー中佐、ハッチを開ける。帰還する」

「ハッ！」

ツヴァイザーゲインは背面スラスターを吹かし、一気にシロガネの甲板へと着陸しハッチから中に入ろうとする。

「W15、16…そしてシノノメ…後詰めはお前達に任せる」

「承知」「……………」

W15・ウォーダン・ユミルが応えるが亮は沈黙したままだった。

「どうした？シノノメ……」

ハッチに半分入っていたツヴァイザーゲインが振り向き問う

「断らせてもらおう……貴様達にはほとほと呆れてものも言えん。」

「何？」

「貴様等には愛想が尽きたといったのだ。

闘争が常とする世界だと？随分と今ままで勿体つけておいて……失望したぞ。」

盛大に亮がため息をつきながら言う

「貴様も我らが理想を理解できんか……！」
ヴィンデルの声には明らかに失望の色が混じっていた。

「違うな、理解も納得もしている。人は闘争によって己を高めるそれは正論だ。」

「ならば何に失望したというのだ？シノノメ？」

自身の理想が間違っていないといいつつ、失望とはどういうことなのか分からずヴィンデルは聞き返す。

「簡単なことだ……貴様等の理想は既に成就している。貴様等が手を下す遙か以前からな。」

レモン・ブラウンングも言っていたらう？それは歴史が証明している。人間が何をどう足？こうと 必ず争いは起きる。

つまり常に闘争が起きる世界そのものではないか。

……貴様等の理想は、戦いは無意味だ。ただいたずらに他者の掛け替えのない存在を奪い去るだけの 害悪だ。

既に終わりに直面し、自身が信じたくないことを直視できんもののため剣を振るう理由はない。」

亮はシャドウミラーの、ヴィンデルの理想こそ否定していなかったが存在を彼らが積み重ねてきた全てを無意味と断じ、さらに害悪とまで言い切る。

「貴様つ……！よりによって我らの理想が……！戦いが……！無意味だ……！」

我らが害悪である……？！人類の未来を憂い剣を取り戦い続けた

我らが害悪とそう言うかシノノメっ！！！！」

ヴァイサーガはツヴァイザーゲインに振り向きその紅く光る目で射抜く

そうだ貴様等は所詮、鑑に映った影…存在そのものが無意味だ

亮の否定の言葉が機械仕掛けの方舟の甲板に風の音と共に響き渡った。

「クククククははははは……」

W15、16！！！！シノノメをこの裏切り者を殺せっ！！！！」

「ハッ！」「承知」

ヴィンデルの号令と共にスレードゲルミルが甲板に着地すると同時にその巨大な体躯より尚巨大な蒼い刀身の大剣【斬艦刀】を世界を

本来ヴァイサーガの腕に設けられた獣の爪のような刃に纏わされるエネルギーがヴァイサーガの左手全体を覆う

「偽者でもいい、贗作でもいい……」

ヴァイサーガは自身が足場になっている斬艦刀を蹴り、背面スラストを一気に吹かせスレードゲルミルに迫る。

「だが其れを己が業に昇華できなければ唯の猿真似だっ……」

“バキンっ!!”

「ぬうっっっっっ!!」

言葉と共にスレードゲルミルを殴りつける。

それによって額のドリルインフェルノが砕け散り、あまりの衝撃にのけぞる。

さらに、殴った左手を右手の剣の柄に添える

「己だけの真作を魅せて見ろ!! 死人神よ」
ウォーダン

本来、地面を走る斬激を生み出すエネルギーが、鞘のなかに充填され一気に解き放たれ、スレードゲルミルの胴を袈裟切りにした。

「又オオオオっ!!」

スレードゲルミルは倒れ落ち甲板から落下し海へと落下した。

「ではなシロガネ……拾ってもらった恩があるから一度だけ見逃してやる……」

とく去ね」

そういい残しヴァイサーガは甲板から伊豆基地に飛び降りる。そして其れを狙う紅い狙撃主^{スナイパー}

「ターゲットロック、バレルロック、誤差修正………
Fソリッドカノン、ファイア………！」

ライズアングリフの肩に展開固定された大口径の大砲より破壊を秘めた弾丸が放たれまっすぐヴァイサーガに空気を引き裂きながら迫る。

「ぬるい」

“キーンっ！”

一筋の光が走り遙か後方で二つの水柱が上がる。

「?!まさか……弾道を読み取って弾を切り裂いたというのか?!」

“カキンっ”

W16の驚きの声をもともせずいったん剣を鞘にしまい。

「奥義セツト…！刃よ乱れ飛べ…！」

腕が剣が視認できないほどの速さで幾たびも居合い抜きが放たれ幾つもの渦を作り出す。そしてその全ての渦の中央を剣で刺し貫く。

すると全ての風の渦は一つの巨大な渦巻きとなってラーズアングリフを襲いその動きを止める。

「行けっ！ヴァイサーガっ…！」

ヴァイサーガは剣を突き出してその渦の中央、台風の目にあたる部分突き進む。

「これが“風刃閃”だ」

台風の目にとらわれたラーズアングリフは抗うすべを持たずただ、刃を受け入れるしかなかった。

ラーズアングリフの胸に深々と刃が突き刺さり崩れ落ちる。

剣を引き抜くヴァイサーガその剣にはまるで血液のように機体のオイルが滴り落ちていた。

「一度だけ、一度だけ見逃してやる。とっとと失せろ。」

「くっ…！！」「ぬうううううっ…」

海に沈んだスレードゲルミルが大量の海水を流しながら浮上する。修復用ナノマシン影響なのか傷口が幾つもの光の小塊が蠢いている

様に見える。

“ピピっ!”

「W15、ヴァインデル様から撤退せよとの指令だ、離脱するぞ」

「承知」

スレイドゲルミルはラーズアングリフを抱えその背中のドリルから炎を噴射し空に浮かび飛んでいき少し立つとその姿をかき消す。

ASRSを展開してステルスモードに移行したのだろう。こうなると視認も難しく追跡は困難を極める。

いつの間にか後詰め部隊の殆どは破壊されており、シロガネも離脱していた。

「貴様……一体何者だ?!」

背後から重量級の紅いゲシュペンスト【アルトアイゼン】パイロット、キョウスケ・ナンブが問う。

「俺か？俺は リョウ・シノノメ シャドウミラーから見れば裏切り者だ。
」
」

こうして俺はシャドウミラーと決別した。

第10話 離反（後書き）

このままOG編 書くか

クリスカと別れた後に戻るかどっちがいいでしょう？

1、OG編

2、クリスカと別れた後

以上の二つでお願いします。

第11話 夜明けの星、沈む陽（前書き）

OG編はイベントもしくは何らかの記念ごとに掲載することにした（マブラヴがメインなので）

ツヴァイザーゲインのシステムXNはコル・レオニスの粗悪品、分裂は多次元屈折現象キシユリア・ゼルレッチとします。

第11話 夜明けの星、沈む陽

初夏の汗ばむ日差しから逃れ、亮は人のあまりいない梅小路公園の樹に持たれかかり、オカリナを投影し演奏を奏でる。

頬をなでるそよ風とひんやりとした地面の感触が心地よい、そして奏でる音楽の涼しげな雰囲気心なしに涼を運んで来ているかのようであった。

(BGM 素敵だね (instrumental))

そして、風に髪を揺らされながら其れを見つめる一人の少女がいた…

第11話 夜明けの星、沈む陽

「きれいな旋律ですね、心洗われるようです。」

演奏が終わるや否や声を掛けられる。

後ろを振り向くと着物、其れも上物に身を包んだ12〜3ほどの少女がいた。

すうっとした切れ目の瞳に長いまつげ、ややや紫に近い艶やかな黒髪を後ろで束ね、余った髪はそのまま垂れおろしている何とというかポニーテールとちょんまげを足して割った感じの髪型だ。

「申し遅れました。私は夕陽といます。夕焼けの夕に太陽の陽で夕陽、あなたは？」

「亮……東雲 亮……亮は諸葛亮孔明の亮だ」

俺の名前を聞くと彼はまさしくその名の通り穏やかな太陽のように微笑む。

「【東雲】……其れは、夜明けの茜色に染まる空。そして【亮】それは高き所に座し導くものを意味します。そなたはたとえるなら明けの明星とでも言ったところでしょうか……
良い名ですね。亮」

外見も年齢不相应に気品が溢れ、知識も一般より多くある。この年齢でこれほど落ち着いた振る舞いを身につけたことに素直に舌を巻く。

「やれやれ、いきなり呼び捨てのうえ神に反旗を翻すものと同じ二名か……まあいいのだが……な」

「では、亮とお呼びしますね。」

「強引なことだ」

「よく言われます。」

「フっ……」「フフッ……」

二人とも静かに笑い合っていた。

「それで君はどうしてこのような場所にいるのだ？」

「え、おかしいでしょうか？」

何時の間にか横に座った夕陽が亮の問いに少し驚いた表情で問い返す。

「君の口調、服装、仕草どれをとっても一般家庭出身とは思えない。どこかのお嬢様といったほうがしっくり来る。」

「そなたに隠し事は出来ないのかも知れませんが……実は抜け出してきたのです。」

詳しくは言えませんが私のこれからが私の意志とは無関係に決められて行くのが嫌になったのです。」

「……………」

亮は唯だまって夕陽の独白を聞き続ける。

「仕来たりだからとたった一人の双子の妹とも乳飲み子のうちに引き離され、友人も出来ず、そのことに対して訴えることも出来ない自分の立場が、自分の弱さが嫌になったのです。」

その顔が悲しみの色に染まる。亮が一ヶ月まえにみた少女のように…

「なら、どうする？此処に逃げてもどうすることも出来はしない。」

亮はおもむろに口を開く

「……はい……私は、自分がどうしたいのか、どうするべきなのかは分かっていますけど、其処に自分の意思が存在しないのが酷く嫌なだけなのです……子供ですよね。」

顔をうつむかせ自嘲の笑みを浮かべる夕陽

そんな夕陽に亮は当たり前だと告げる

「何をいつかと思えば、君は子供だ。誰がなんと言おうが子供だ、頼ることも、吐き出すことも甘えることも許される。其れが子供だ。生まれなど関係ない。」

「で、ですが……」

「それに、君は君が成したい事をすればいい其れが定められた運命のレールだとしてもその分岐点を創るのも選ぶのも自分自身にしか出来はしない。

ほら？君の意思は確かに存在している。……最後に選ぶのは結局自分自身だ。」

「……………」

夕陽は黙り込む、その小さな胸に亮の言葉が何度も木霊し自身の持つ答えへと昇華させて行く…、その肩にその小さな体では到底支え

きれない責務と言う名の重き枷を乗せて。

しかし、答えを出し枷をものもしない強さを身につけるには今しばしの時を有するのは至極自然なことだろう…

其れがたかが人間、それも十台になったばかりの少女であれば…

「俺は、しばらく此処にいる心の整理が付くまでいい。」

東雲は目を瞑り少しぶつきらばうに言う。すると夕陽は少し困ったような笑みを浮かべる。

「では、お言葉に甘えさせていただきます。亮」

「分かった……おい、何をしている？」

亮の太ももに掛かる心地よい重み、夕陽が亮の膝で膝枕をしていたのだ。

「亮は甘えることも許されるといいました。これは許されないことですか？」

「……好きにしる……」

亮はオカリナを投影し、音楽を再び奏でる少しでも膝の重みを与え
る少女が安らかに眠れるように

夕陽はいつの間にか亮の膝の上で眠りに落ちており、亮はオカリナを吹き旋律を奏でる。

しかし、亮は奏でていた音楽を止める。望まぬ来客が来たからだ。

“ぎっ”

亮とその膝で眠る夕陽を複数の黒服が囲み、銃を向ける。二人に向かい。

「やれやれ、安全大国日本は何処へ行ったのか……」

亮は苦笑を浮かべながらつぶやく。

「その娘を渡してもらおう……」

黒服のリーダー格と思われる男はおもむろに銃を突きつけながら亮に夕陽を渡せと要求する。

しかし、わざわざ殺気を向けて丁寧な銃口まで向けている相手にこのか弱い少女を渡す道理など亮には存在していなかった。

「その粗末な殺気をせめて俺だけに向けていれな。」

亮は夕陽を膝枕から降ろす。若干、夕陽の寝顔が残念そうに歪むが気にしてはいられない。

夕陽を樹にもたれかけさせ亮は夕陽をその背に守るように黒服に相対する。

「……………なら、其処の小娘と共に黄泉路へと旅立て。何、寂しくは無いさ、二人いっしょだからな。」

「くつくつくつく……」

向けられる銃口（殺意）をもともせず亮は笑いを漏らす。

「何がおかしい？」

「いやなに、勘違いも此処まで来ると滑稽だとな」

「勘違いだと？」

「そっだ……」

“ブワっ！！”
亮から黒複たちに向け嫌な生暖かい風……否、圧力・殺気が放たれる。

「君達が寂しくないのだぞ？なぜなら……………」一人たりとも欠けずに黄泉路へ旅立つのだからな……………」

地獄の底から響くような声が開けた空間であると言つのに木霊する。

「撃てっ！！！！」

一斉に黒服たちの手に携えられた拳銃が一斉に火を吹き、殺意を乗

せた弾丸が悪意の激鉄によって撃ち出された。

「コンタミネーションアウト」
「混合・解除」

“キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！”

亮が「コンタミネーションアウト」混合・解除とつぶやくと同時に腕がぶれ消える。

そして、鳴り響く無数の金属音、

そして、亮の足元に無数に転がる二つに裂かれた弾頭……

そしてその一瞬ぶれ消えた腕にはいつの間にか二刀一対の日本刀を携えている亮。

その右手には三酸化レニウムで作られた紅い刀身が金属光沢を放ち、刀身に舞い散る桜の花びらのような模様が刻まれた日本刀が、

左手にはタングステン・レニウム合金で作られた蒼い金属光沢を放つ刀身が、黒い風の文様が刻まれ携えられていた。

それぞれ、銘を【白桜】・【禍風】とする霊剣である。

「ば、ッ化け物……」

黒服の一人が呟きを漏らし、其れを聞いた亮はニヤリと口の端を吊り上げ、

なんだ……今頃気付いたのか？

まるで三日月のように口を歪め告げた。

「落ち着けっ！！！数はこちらが圧倒的に上だ、それに奴は所詮一人、守りながら戦う以上勝機は我らにある！！！」

黒服のリーダー格の男が一同を叱咤し黒服たちの半分が亮に銃口を向け、半分が夕陽に向けられる。

通常、護衛対象を守りきるには攻める側の3倍の戦力を必要とする。それでも無傷で守りきるのはむずかしい。そして、再び一斉に殺意の弾丸が迫る。

「フンっ！！」「ガキン」

亮は神速をもって左腕の禍風を地面に突き刺す。

『守護方陣』っ！！！」

亮の言霊により禍風を中心に白く光る五芒星が展開され、夕陽と亮をその内に納めその円周部のラインにそって白い光の壁が発生し弾丸を全て消し飛ばし二人を弾丸のシャワーから守り通す。

「なにっ?!」

黒服が驚きの声を漏らす。

リーダー格の男は目の前におきたことが信じられなかった。

一瞬で刀を握っていたことは不思議ではあるが暗器術と考えれば在る程度納得は出来るし、刀で弾丸を凌いだ事もそういう技のある古武術がある以上できる人間がいたことになるので驚きはしたが理解は出来た。

(しかし、これは一体なんだ?!)

目の前におきた現象を、出来事を、怪異を理解できず思考が停止し、体がわずかばかり硬直する。

その瞬間すぐ後ろから

「随分と余裕だな？貴様等を刈る者が眼前にいますと言つのに…な。」

目の前にいたはずの男が耳元で囁いていた。

続く

第11話 夜明けの星、沈む陽（後書き）

ハーレム行くぜ

第12話 手紙（前書き）

グダグダ感があったので少しプラン修正を行い12話を書き直しました。

（何故かバイト中にいいアイデアって思いつくんだよね）

第12話 手紙

「さま、 ひさま、 悠陽様っ！！！！！」

ゆさゆさと体をゆすられ夢の住人と成り果てていた夕陽こと煌武院
悠陽は外からの刺激によって僅かばかり現実に回帰し、それによ
って体をゆすり続ける存在の音声とその主の存在を認識する。

「ん、真耶さん少しお静かになさい。折角、人が気持ちよく寝てい
たというのに……」

「よかった。ご無事で何よりです。悠陽様の征夷大將軍就任反対派
が独自行動をとった言う情報があり悠陽様をお探ししていたので
が一向に御身が見つからず肝を冷やしました。」

「いまだ寝ぼけていたため声の主、自身の護衛でも在る月詠 真耶の
切迫した状態を現す声色に気付かず文句を垂れ流す……が、自身が
頭を預けていた温もりが無いことに気付く。」

「急激に意識が覚醒し周囲の情報を各感覚器官が収集し、其処に亮の
存在が居ないことを認識する。」

「亮はっ?! 亮は何処に行っただのですか?!」

「りょう? りょうとは一体何者でしょう?」

悠陽の口にする名に心当たりの無い月詠 真耶は首をかしげる。

「私と共にここにいた者です！真耶さんっ！知り……」

と悠陽は真耶に訴えかける途中でそれに気付く

悠陽の前に地面に深久と突き刺さった青い金属光沢を放つ一本の刀を

「私が此処にたどり着いた際、この樹の木陰に持たれ掛かりお眠りなっていた悠陽様とまるで悠陽様を守護しているかのように突き刺さっていたこの刀のみでした……」

「そうですね……」

其れを聞き落胆する悠陽せめて、自身が目覚めるまで居てくれてもいいのではないかと少し八つ当たりにも近い感情を抱く。

「それにしても不可思議な刀です。この刀、手に取ろうとしたのですが全く地面から抜けないのです。一体どの様にこの場所に運びこのようにしたのか皆目検討もつきません。」

悠陽は立ち上がり剣の柄に手を懸ける。

「もしまし…亮の刀なのかもしれませんね」

悠陽が刀を手にし僅かばかり引き抜く力を加えた瞬間、

“カキン”

「キャッー!!」

刀はいとも容易く地面から離れた。

その予想以上に刀が簡単に引き抜かれたことにより悠陽は尻餅を
ついてしまう。

「なんと?!あれだけびくとも動かなかつたものが?!」

月詠 真耶は驚きの声を上げる、自身が幾ら力を加えようともびく
ともしなかつたものが自身より力の無い悠陽に容易く抜かれたことに
街を歩けば十人が十人振り向く美貌をもつ彼女が一本の刀を必死に
地面から引き抜こうと悪戦苦闘している姿はいささかシニールでは
あるが…

「軽い…まるで雲を掴んでいるかのようです。」

悠陽は自身の手にある刀のあまりの軽さと手によく馴染む感触に驚
嘆の声を上げる。

「悠陽様、その刀拝借してもよろしいでしょうか?」

月詠 真耶は刀に疑問を感じ自身で確かめようとする。

警戒半分、好奇心半分で

「ええ…」

悠陽は刀を月詠 真耶に手渡す。

「謹んで拝借いたします。」

刀が完全に月詠 真耶へとわたった時、刀の重量が一気に増す。それにより腕はプルプルと振るえ徐々に関節が広がっていく。

「ぬ、お、重い……！」

余りの重さに刀から手を離してしまい、刀は重力に従い落下し

“ガツキンっ！！”

地面にめり込む

「……………」

「……………」

あたりを静寂が包み込む……

「お、おかしいですね……」

悠陽は屈み地面にめり込んだ刀を手取る。

ヒョイツと片手で簡単に刀は持ち上がる。

「悠陽様……………」

真耶がまるで化け物を見るかのような眼で悠陽を見つめる。

「私はそんなに力持ちではありません！！か弱い女の子なんですから……！」

「こーん…（色々突っ込みどころの多い否定だね）」

目じりに涙を浮かべ力いっぱい否定する悠陽の足元で何時の間にか居た一匹の白い毛並みの狐がなんかそんなことを言っただけでそんな鳴き声を挙げる。

「失礼な！……あら？この子は？」

悠陽は足元の狐に屈みその小さな頭をなでる。

「野狐でしょうか？なんとも珍しい毛色です」

横から真耶が狐を覗き込む。

「コンッ！（これ、あげる）」

「これは？……っ！！」

白い狐は風に飛ばないように前足で押さえていた封筒を咥え、悠陽に差し出す。

封筒を受け取りそれに書かれた字を眼に納めるやいなや悠陽の眼が見開かれる。

封筒には

『夕陽へ』

と書かれていた。

第12話 手紙

「悠陽様それにはなんと？」

「……………この刃の銘と私宛に二つの言葉がつづられています。」

悠陽が手紙を読み終わるのを見越して真耶が語りかける。その顔には怪訝な表情が浮かんでいた。それもそうであろう。

自身の主が何時の間にか警護を抜け出し、やっと見つけたら素性の知れぬものと共に居たといひいそいつはいきなり狐に手紙を運ばすなどという非常識なことをやってのけたのだから。

「刃の銘は“禍風”私にしか持つことの出来ぬ刀とつづられております。恐らく私以外にはその重量を急激に増大させる力があるのでしょう……」

「そのようなことが…信じられませんでしたが似たような逸話は数多く存在します。

もしかしたら由緒正しい刀なのかもしれません。」

真耶は主が納得しているのだから自身が納得しなくてどうするのかと無理やり納得する。

そして気になる二つの言葉を悠陽に問う。

「では、悠陽様に贈られた言葉はなんと？」

悠陽は一度目を瞑り心を落ち着け、その言葉を口にする。

「君にとつての月を見つけろ、道しるべを示す太陽ではなく優しい光で癒しを与える月を。君が太陽なのだから”

そしてもう一つ“国が故郷なのではない、故郷に国がある”の二つです。

……深い言葉ですね、真耶さん…国という形無きものに惑わされるなども国ではなく其処にある大切なモノを守れとも言っているように取れます。

……もしかしたら私が思い至らないだけで他にも意味が在るのかも知れませんか…」

「？悠陽様一つ目の言葉には何も無いのでしょうか？」

基本的に生真面目な悠陽の正確からして片方だけの感想をくちにしてお片方を無視するというのはありえないので疑問に思い真耶は悠陽に質問する。

其れを聞くなり悠陽はくすりと笑う

「いいのです、私にとつての月はもう見つかっていますから。」

「なっ?!」

「あの人は夜明けの明星ではなく夜明けの月だったようです。」

悠陽の言葉の意味を悟り真耶の顔が驚愕に染まる。

「悠陽様!!!その者は一体何処のどいつですか?!」

「さあ?何処の何方でしょう?」

悠陽は笑いながら返す。

そして、何時の間に白い毛並みを持つ狐の姿は其処にはなかった。

『夕陽、今は君をこの名で呼ぼう。』

その刀は禍を掃う風“ 霊刀・禍風” 自身が認めたものしか握れない
守り刀

其れを君に託そう、禍風が認めた君なら未来を切り開けるだろう。

これから君は輝き続ける陽として頂に立ち続けなければならない、
この世界で陽を背に立つものが最も暗い暗黒に居ることとなる。

そんな君に二つの言葉を残そう。

“君にとっての月を見つけろ、道しるべを示す太陽ではなく優しい

光で癒しを与える月を。君が太陽なのだから”
“国が故郷なのではない、故郷に国がある”

この言葉の意味をよく考えて成したい事をなしてくれ。

東雲 亮

□

京都の東門跡、其処に一人の青年 東雲 亮が初夏だというのに黒いコート羽織、黙禱をささげていた。

「……………父上、母上…義父さん、義母さん…」

「ごーん（ただいま）」

亮の口から呟きが漏れると同時に足元に何時の間にか居た一匹の白い毛並みを持つ狐が鳴き声をあげた。

「お帰り、月砂ちゃんと渡したのか？」

「ごんっ！（もちろんっ！）」

尻尾をピンと立てながら返事する狐こと月砂

「そうか、ご苦労だったな……」

亮は屈み目線を合わせ、月砂の咽をなでながらねぎらいの言葉をかける。

「こーん？（でもよかったの？刃菊が行っちゃって？）」

首を傾げながら尻尾を？の形にして月砂が鳴く。

「ああ、あの子が自分である子を主として認めただ。本来あの子は守りの存在、俺のような刈るものには似合わないよ……」

「こーん……（さみしくなるね……）」

先ほど？の形をしていた尻尾が頭と共にいかにも落ち込んでいますといわんばかりに垂れ下がる。

「そうだな……さて、これでこの国での用事も終わった次の国に行くぞ。」

「こんっ！（うんっ！）」

「コンタミネーション・オン」

一瞬、月砂が紅い刀身の刃に姿を変えたかと思うとその輪郭を崩し淡い緑色の光となって亮の左腕に吸い込まれた。

そしてそれ以来、日本で亮の姿を見たものはいなかったと言つ……
日本で二度目の大きなアメリカの裏切りが起きる日まで。

続く

おまけ

「それにしても亮……よくも私に恥を書かして、その上私が眠っている間に姿を消すとは……OHANASSIしなくてはいけないようですね……ふふふふふふふふふふふふふふふふ……。」

“ぞくううううううつ!!!”

「っ!!! 一体なんなんだ？何か？がれてはいけない何かに？がれて、

起こしてはいけない何かを起こしてしまったような気がする……」

「こん？（なにそれ？）」

頭を傾げながら？マークの尻尾を立てる白い狐と身震いしている黒いコートの青年が居たとか居なかったとか。

第13話 怒りと憎悪（前書き）

追加しました

ちょっとデモベ入ってます

第13話 怒りと憎悪

1998年

それは日本にとってもっとも忌々しい激動の年といえるかもしれない。

朝鮮半島撤退支援を目的とした作戦において、後に光州作戦の悲劇と呼ばれる彩峰中将事件が起きる。

脱出を拒む現地住民の避難救助を優先する大東亜連合軍に、国連軍指揮下の彩峰中将が同調し協力したため、結果的に国連軍司令部が陥落。指揮系統の大混乱を誘発し、国連軍は多くの損害を被った。

それに対し国連は日本政府に猛抗議し、彩峰中将の国際軍事法廷への引き渡しを要求した。

内閣総理大臣・榊 是親は、最前線を預かる国家の政情安定を人質に、国内法による厳重な処罰という線で国連を納得させた。

彩峰中将は敵前逃亡の罪に問われ、投獄・銃殺刑となる。

これは軍部に強い反発を呼び、また国連の要請は国連のひいてはアメリカが自身の作戦の見通しが甘かったことの責任を日本になすりつけたもので、大東亜連合や中将に救われた者や慕うものに反米感情と内閣への不信任感を植え付けることとなる。

さらにBETAの日本上陸

これにより日本国民の3割、約3600万人が犠牲となり西日本は完全に壊滅し、首都京都も陥落し首都は東京へと移行された。

このBETA進行の際、条約同盟を結んでいたアメリカ軍の避難民諸共BETAを攻撃する作戦において帝国軍との間に論争が絶えず、佐渡島にハイブが建設されBETAの進行が一時停止した際に突如アメリカは条約を一方的に破棄・撤退を行う。

これにより軍部のみならず国民全体において強い反米感情が植えつけられた。

さらに横浜においてもハイブが建設されH20：チヨルウォン鉄原ハイブ、H21：佐渡島ハイブ、H22：横浜ハイブ、これら計3つのハイブによる脅威に日本はさらされることとなる。

そして、翌年1999年

国連、大東亜連合、日本国軍の共同でアジア方面最大の反抗作戦“明星作戦”が行われることが決定するが其処には正史とは違う流れがあった。

水面下で技術提供を受け、酷似するドクトリンを持ち同じくBETAから本土奪還を目指すヨーロッパ連合、通称EUから新型戦術機ECTSF先行試作機“タイフーンType-4GLX”試験部隊

ウォール中隊の派遣を決定。

一機でも多くの戦術機を必要としておりアメリカ製戦術機よりも日本の戦法にマッチし連携もとりやすいと日本軍はEUの介入を快諾していた。

太平洋上の戦術機母艦において異世界の技術を盛り込まれた暴風の名を冠する鋼のヒトガタが複数佇み自身の主の敵を狩るのを待ち続けていた。

そのうちの一機、紫陽花のような蒼紫に機体を塗装され他の機体とは微妙に異なる部位を持つ機体の内部、鋼の揺り籠にして棺桶…管制ユニットには強化服に身を包んだ東雲 亮の姿があった…

第13話 怒りと憎悪

蒼紫色のタイフーンの胸部コックピット、管制ユニットの内部で亮は僅かばかりBETAを本格的に消すことを決めたときのことを思い出していた。

俺はイギリスの難民キャンプに紛れ込み其処から軍に入ること
国籍を取得し自身のカードとなる前の世界で得た知識を使い土台を築
くことにした。

難民キャンプに紛れ込むのはさほど難しくはなかった、この世界B
ETAにより故郷を失ったものなど文字通り溢れるほど居ただか
らだ。

国が壊滅するとき詳細な国籍のデータは失われ、たかが一人がその
国の住民であると名乗り出たところで確かめる術は存在しない。

故に俺は日系インドネシア人として紛れ込み、軍に志願した。

俺と時を同じくして志願した者達は多く居た、肉親を殺された者、
愛するものを殺された者、故郷を取り戻したいと挑むもの、奪わせ
ない為に戦う者様々だ。

志願して簡単な身体検査が行われるが最上級の神秘とも生身で渡り
合える俺が落とされるはずも無く入隊許可が下り士官学校へ後日移
動することとなった。

其の時事は起きた、難民キャンプをBETAの大群が襲ったのだ。

BETAは地下深く掘り進み進行していたのだ。定期的な間引き、

築かれた防衛線、警戒や哨戒が規則的なルーチンを形成し地下進行という脅威に対して意識が弛緩していたのだろう。

そこで、クリスカにもらった情報のどのBETAにも該当しない新種を俺は目の当たりにする。

巨大な芋虫のような下半身に人間のそれに酷似した上半身、そしてきのこの笠を連想させる頭部、気色悪い白い肌……後に兵士級と呼ばれる新種のBETAだ。

しかし、あれが新種かどうかもつと言うならBETAかどうかさえも俺にとっては些細な問題だった。

あれを見て聞いてしまえば

お母さん……お父さん……何処？何処なの？……助けて……助けてよ……

お願いっ！！見ないで！私を見ないで！

俺を殺せっ！！ころしてくれええええ！！

止めてくれ！止めてくれ……俺の体でこれ以上！人を殺させないでくれっ！！

もういやだ……もう嫌だよ……誰か、誰か、この地獄を終わらせて……

俺の瞳、浄眼が捕らえた死して尚死ぬことの許され無かった者達の嘆き

それはBETAに喰われ、その肉体をあるうことか仇に利用され次の犠牲者を出すための道具にされた人々の怨嗟と苦痛と嘆きの声であり、兵士級に重なるように見えてしまう腐敗した魂の慟哭だった。

其れを見た瞬間、頭が冷え切りまるでマグマを胃に流し込まれたように腹が厚くなり、視界が赤く染まる。

それは、久しく感じることの無かった怒りと憎悪だった。

それは、子供の明日を守れなかった父の怒りか…

それは、子に明日を与えてやれなかった母の嘆きか…

それは、温もりを奪われた子の叫びか…

俺はあれを見た瞬間、俺を俺とする全てにおいてこいつらを敵と、在ってはならないモノと認識した。

「大尉！シノノメ大尉！！全艦隊から艦砲射撃始まりました！
作戦開始です！！」

ヘッドセットからの音声で意識が現実へと回帰する。

網膜投影による表示に本来なら肩口まである金髪を邪魔にならないように後ろで縛りまとめた青い瞳を持つ少女の顔が映し出された。

自分の副官であるコード・ブラボーことシルヴィアである。

「ああ、分かった…全機機関始動！各兵装の起動確認後、イントル
ーダーによる陸地制圧の支援を行いつつ上陸、その後はブラボーの
指示に従い日本軍と連携して事に当たれ。

虎の子の機体は大破はさせるな。

”仮に”ベイルアウトする際は動力炉を暴走、自爆を必ず行え！い
いな！！」

「了解！！」

ヘッドセットから各員の復唱が耳に届く。

さあ、刈り尽くすぞ……タイフーン……!

「メインコンピュータ 起動、プラズマ・ジェネレーター 運転開始！」

機械仕掛けのヒトガタの脳髄に無数の光子が蠢き無数の0と1を叩き出し起動プロセスを実行して行く。

機体の胴体部に納められた鋼の心臓内部の重水素と3重水素がレーザーを照射され一気に高温・プラズマ化を引き起こし膨大な熱量と電磁波をばら撒きながら原子組み換えを引き起こし炉心を形成し小型の太陽となり其れを重力の壁が包み込む。

小型の太陽をから放出される太陽風を電気エネルギーとし機体を稼動させる。

“ブーン……!”

沈黙を保っていた機体の全身にエネルギーが回され機体に淡い緑色の光がともされる。

「プラズマジェネレーターの核融合反応の安定を確認、兵装選択及び取得の開始」

本来通常の兵装担架用のコネクタに接続された背に突き出たようなまるで小学生のランドセルのようなパーツの上部に設けられた4つのコネクタに作業用クレーンによってGWS - 9突撃砲が固定された兵装担架が内側の二つに接続され

“ガキンっ！カシユ！！”

固定される。

続いて外側の二つには細い黒い棒のようなパーツが兵装担架と同じフレキシブルアームに接続された状態でクレーンが運び

“ガキンっ！カシユ！！”

固定された。

さらに機体の両の手の前にもGWS - 9突撃砲が左右に1丁ずつクレーンで運ばれ、蒼紫のタイフーンは其れを、前腕部のカーボンブレードスタビライザーがフランス軍のラファールのそれに交換された腕のマニピレーターで掴む。

「全兵装の確認をクリア、機体状況オールグリーン…これより発進シーケンスに移行する」

機体を船に固定している固定器具のロックボルトが解除され機体が自由のみとなる。

そして機体の各駆動部に光信号による信号が伝達され船の格納庫に地響きを鳴り響かせながらタイフーンは昇降リフトへと歩を進める。

「ウォール・アルファ、カタパルト使用許可下りました、入場してください」

「了解した」

ヘッドセットからオペレーターの指示が届きタイフーンは昇降リフト……戦術機用のエレベーターに乗り機体がリフトによって上昇していき鋼鉄の壁が消え視界が開けると共に陽光によって機体が照らし出される。

重騎士を彷彿させるその機体は船上に設けられたまるでスキー板の固定器具のような装置にラファールのものに交換された足首を置く。

“ガキンっ!!”

するとまさしくスキー板の固定器具の如くタイフーンの両足の足首が固定される。

「カタパルトにアルファ機の固定を確認」

オペレーターの音声が鼓膜に届くと同時にその背後ではリフトによってブラボー機：シルヴィアの灰色のタイフーンがリフトの駆動音を響かせ姿を徐々に現していた。

こちらはアルファ機：亮の機体と違い正史の其れとはあまり形状が違わず背部に装着されたユニット以外違いは無かったが武装は右手にGWS-9突撃砲、背部兵装担架には左にハルバート、右の兵装担架には右手と同じくGWS-9突撃砲とEUではポピュラーな装備であった。

「AL弾迎撃率82%重金属雲の発生を確認、各機発進してください」

其れを受け蒼紫のタイフーンが前屈姿勢をとる。

「了解：カタパルトのコントロールを渡してくれ」

「了解、射出のタイミングをウォールアルファに譲渡します発進どろぞ」

「アイ・ハブ・コントロール、アルファ・リヨウ・シノノメ出る！」

カタパルトのランプが赤から緑に変わり亮がスロットルを入れると同時に脚部を固定している固定器具が甲板先に高速でスライドし亮の駆るタイフーンを加速させる。

「テストドライブ起動！ブーストジャンプ噴射跳躍！」

機体の兵装担架ハブをかねる慣性と質量の分離装置であるテストドライブが機体の重量を反転させ、Tドットアレイと呼ばれる力場を形成する。

” キュイイイイイイイイイイイイイイイイイイイン…… ”

其れと同時に腰部跳躍ユニットが空気を吸い込み燃料を爆発させ火を吹きその反動をダイレクトに機体に伝えカタパルトによって加速している機体に尚加速度を与えた。

「テイク・オフ!!!」

機体が船上から撃ち出され空に舞つ…

続く

第13話 怒りと憎悪（後書き）

4 GLXはFourth Generation Language
e Xの略で日本語訳すると試作型第4世代

ウォールは部隊コードが表音記号で表されます（元ネタ”死が二人を分かつまで”に登場するザ・ウォール）
タイフーンに搭載されたテストドライブはリオンのと同じでまだ外付けの浮くだけです。

第14話 明星

1999年8月5日

「作戦開始っ！我が大地を取り戻し英霊達への手向けとせよ！」

（推奨BGM 真夏の扉 歌：GLAY）

海からは国連、日本帝国軍、大東亜連合の全艦隊が終結し横浜の異形の巢窟と成り果てた魔都の市街地に艦砲射撃を陸地からは戦車部隊は支援砲撃を行い無数の砲弾が横浜の空を横切り降り注ぐとす
る。

しかし、横浜に築かれたその地が魔都である証、ハイブ地上部位モ
ニメントの麓から無数の赤白い光線^{レーザー}、圧倒的な熱量を持つほど収
束された光がまるで花火の火花の如く地上から砲弾を打ち落とす。

レーザーによって外郭が蒸発した砲弾は重金属粉を大量にばら撒き
金属の霧を作り出す。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

重金屬の霧が横浜の市街地を覆うと同時に陸と海から青いヒトガタと黒いヒトガタが無数に流れ込む。

BETAによって奪われた故郷を取り戻さんとする戦士達である。

戦士は刃金はがねを纏まといて、鋼鎧はがねを纏まといて、鋼志はがねを秘めて戦場を駆ける。

『貴様等さえ…！貴様等さえ居なければっ…！』

黒い人型の内の一種、細身のシルエットにまるでヘルメットを被った歩兵のような頭部の戦術機日本製戦術機不知火がその両手と背部兵装担架に取り付けられ脇から銃口を覗かせる87式突撃砲をから無数の銃弾を撒き散らしBETAの軍勢を肉塊へと変え、両肩のミサイルコンテナからミサイルを一斉発射しBETAは爆炎へのまれていく。

『取り戻すんだっ…！全てを…！！』

黒い重装甲の機体、最初期から使用、改良が続けられた機体“撃震”が左腕の亀の甲殻のような盾“92式多目的追加装甲”で要撃級を殴り六角形のユニットが爆発し機体に伝わる衝撃を殺しつつ倒し、激震は転倒した要撃級を超重量を以って踏みつけその頭部に36m

m劣化ウラン弾を撃ち込み返り血に機体を染め上げる。

『死なせたく無い…！死なせたくないんだあつ…！！俺達の町でこれ以上誰も死なせたくないんだあああああつ…！！！！』

UNブルーに塗装された不知火が空中から落下しつつ87式突撃砲を乱射しつつ弾切れと同時に投げ捨て背中に背負う“74式近接戦闘長刀”を着地と同時に振り下ろし要撃級を一刀両断する。

『とくと魅よ！これぞ我ら期衛の新しき刃！貴様等を滅ぼす破滅の雷！武御雷ぞ…！！』

蒼く彩られた一種の芸術品のような美しさを醸し出しつつ“人喰い鮫”を連想させる面構えの鎧武者を彷彿させる戦術機“試作型武御雷”が右手の“74式近接戦闘長刀”を一閃、要撃級の蠍の毒針に位置する地獄で無念の呻きをあげる亡者を連想させる感覚器を切り落とし、そのまま左手の手甲の様な装甲から刃を展開し要撃級の頭部を殴り潰すかのごとく刃を深々と突き刺し止めを刺す。

『亡き友との誓い！今こそ果たさせて貰うぞつ！』

フェリス・カモフラージュ…灰色と紺の二色で塗装され武御雷と同じ跳躍ユニットを取り付けられ、内部部品を高出力のものに交換された不知火…不知火 壱型丙がその膨大な出力をもつて一気に踏み込み左腕に逆手に構えたスパーカーボンの刀身を持つ“65式近接戦闘短刀”を突撃の威力を用いて要撃級に突き刺し、裂くと同時に右手の87式突撃砲を右側の要撃級に向け放つ。

『頼む武御雷…私を、私達を導いてくれ!!』

山吹色に塗装された武御雷は三次元起動を描き、時速170kmにも及ぶ巨大な鎌と化した突撃級の背後を取りその軟らかい体組織に突撃砲から銃弾を撃ち込み屠る。

戦士は未来に向け雄たけびを上げ突き進む、しかし此处は戦場…勝者が居れば敗者という骸が積み上げられるのも当然の理

『うわああああああああつ!!………』

一機の烈士のマーキングを施された漆黒の不知火が突撃級の突撃を正面から受け胴体はひしゃげ、中に居た衛士は自身を守る壁に押しつぶされ絶命する。

『じ、このやろおおおおおおおつ』

二機編成を組んでいた黒いF-15J“陽炎”の衛士が相棒を殺さ
れたことで我を忘れ突撃級を後ろから長刀で串刺しにし仕留める。

『やつ……………』“バシユ”

仇を取ったことに歓喜の声を上げるとき一筋の赤白い先行に陽炎は
胴体を貫かれ内部に居た衛士はその存在をかき消され、陽炎は糸の
切れた人形のように倒れ伏す。

『クツ!!』

地面から突然湧き出た要撃級に先手を取られ漆黒の撃震は何とか左
手の“92式多目的追加装甲”で蠍の鋏のような剛腕を受け止める
が超重量に関わらず吹き飛ばされる。

吹き飛ばされ、何故かいまだBETAび破壊されていない住宅街の
うち一軒の民家を押しつぶしながらうつぶせに倒れる撃震

そしてそれを起こそうとする衛士しかし……………

“ガンツ!!ガンツ!!”

『う、動かない?!』

脚部の間接が受け止めたときに歪み間接が正常稼動することが出来
なくなり激震は動けなくなる。

そして、大型種の足元をうろついていた紅いアリ……戦車級BET
Aが一斉にたかりガリガリと音立てて重装甲を誇る激震の装甲をま
るで砂糖菓子を噛み砕くかのように噛み砕いていく

『う、うわあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

機体を噛み砕く音がダイレクトに管制ユニット伝わり、見えない恐
怖となり衛士を襲う。

衛士は恐慌状態に陥る……がそれは終わりを迎える

「あ……………」

管制ユニットに陽光が入り込み光の取り込み口となるコックピット
ハッチを食い破った紅い大きな口をついたなんとも表現しにくい夕
脚の怪物が逆行に照らされていたのだ。

衛士は己の運命を理解すると共に意識を永遠に閉ざすこととなる。

『うおおおおおおおつ！！』

機体をBRTAの体液によって紅い斑模様とその隙間から見える下の塗装である灰色と紺のフェリス・カモフラージュ塗装の不知火・壱型丙：内部の衛士“巖谷 榮二”は覇気と共に不知火・壱型丙に長刀を振り切らせ突撃級を両断しようとするが…

“ガキンっ！！！”

長刀が中ほど食い込んだ状態で長刀は根元から折れる

『しかしっ！！！！』

折れた状態で突き刺さった長刀の先端を蹴り一気に奥深くまで突き刺す。

さらに左手のシースタビライザーから短刀を引き抜き制御中枢に突き刺しBRTAを仕留める。

『くっ……武装がもう無い………』

伝説の開発衛士とまで言われた彼が駆る不知火・壱型丙の塗装は飛行速度、移動方向などを欺瞞するための迷彩塗装の一種であり、それにより味方の支援を困難としさらに近接戦闘能力の高いこの機体を十二分に生かす彼の戦闘技能が裏目にでて彼は今、戦場で孤立してしまっている。

これは彼の戦況分析能力が低いわけではなく機体性能を完全に引き出さなければ命を落としてしまうほど厳しいものであったからである。

そして激しい戦闘の末、弾は尽き、刀は折れ、最後の武装は短刀一本のみであった。

“ズガ　　ンっ……!!”

地面が突如爆ぜ、要塞級が顔を覗かせる

『こんな時には……俺もつくづく運が無いな……』

彼の脳裏によぎるのは亡き友の忘れ形見であり、実の娘のように溺愛している少女のことである。

(せめて、孫の顔ぐらい見たかったのだがな……)

日本の戦術機にはむざむざとじわじわ殺されるのを待つよりも相手を巻き込み自決するほうが何倍もいいという思考の元ほぼ必ず自決用高性能爆弾“S-11”が装備されている。

短刀一本でBETAの軍勢のど真ん中に居るのだから巖谷のとり道は決まっていた。

巖谷がS-11の起動スイッチに手を伸ばそうとしたその瞬間、

“バァァンっ！！！”

『何っ?!』

要塞級の頭部が爆ぜ大穴が空く。

『貴様等に叔父様をやらせてなるものかあっ！！！！』

“キュイイイイイイッ”

ジェット噴射の爆音と空気を引き裂く音を引き連れて山吹色の複雑な三次元曲面と鋭角的なパーツで作られた流線型の鎧武者、武御雷が巖谷の駆る不知火 吉型丙の真横を猛スピードで翔け抜ける。

『篁少尉！！！！』

不知火 壱型丙を追い越した武御雷ははまだ力尽きてはいない要塞級へと突貫し先ほどの120mm滑空砲によって穿たれた穴に銃口を突き刺す。

『異星起源種め…っ！絶対に…絶対に…っ！貴様等の好きにはさせないっ！！』

山吹色の武御雷はその引き金を引き36mmの弾丸が甲殻に缶詰にされているBETAの体組織を蹂躪し、内部を直接破壊された要塞級は轟音を響かせ無数の小型種BETAを押しつぶしながら倒れ動かなくなる。

『…無事ですか？！巖谷少佐！！』

要塞級を屠り地面に砂埃を舞い上げながら着地する山吹色の武御雷そしてその衛士であり、開発衛士でもある巖谷の娘とも言えるであろう少女、篁 唯依からの音声が届く、

『ああ助かったよ、唯依ちゃん』

巖谷は普段どうりの呼び方で唯依の礼を言う、それは彼なりの親愛の情の表現でもあり初陣である彼女の精神状態を心配してのことでもあった。

『少佐、今は作戦行動中ですそのような呼び方はおやめください。』

『相変わらず硬いね……』「そんな事じゃいかず後家になっちゃよう……」

それに凜然とした軍人として唯依は答え、父親譲りの堅物に伴侶となる人物の苦労を想像し、もしかしたら……というある意味最悪な未来を想像してポツリと呟く

『少佐聞こえていますよ？どうやら後でゆっくりOHANASSIする必要があるそうですね』

……が、其れがいけなかった。

極上のいい笑みを映し出す唯依の姿が網膜投影による映像通信によって映し出されていた。

誰もが見ほれてしまうほどの美しい笑みであったろうが、この笑みは見た瞬間“獲物”以外は目を即座に逸らすであろう。……眼が笑っていないのだから……

『ま、待ってくれ！！俺は君の事を心配して……』

『よ・け・い・な！お世話ですっ！！』

ある意味死刑宣告がなされ巖谷はうなだれる。

まるでいっしょに衣類を洗濯しないでくれと娘に正面から告げられた父親のように

“ドオオオオンっ！！！”

巖谷 榮二に愛娘からの死刑宣告が告げられると同時に地面が又も爆ぜ、無数のBETAが現れる。

『少佐下がってくださいっ！！此処は私が！！！！』

生来の責任感の強さからか一人残り巖谷を撤退させようとするが戦術機のものである特性、どうしても動作ごとに硬直時間が生じ一切の人力が効かなくなる状態が発生し無防備になる時間帯存在し其れを補うために戦術機は最低、二機編成で互いの硬直時間をカバーし合い戦闘を行うのだ。

『駄目だっ！！あの数だエレメントを組まないと直ぐにやられてしまっぞっ！！……あれは！！！！』

友人の忘れ形見である唯依を失うわけにはいかないと叱咤する巖谷その視界に地面に突き刺さった在る物が写る。

作戦開始同時にはら撒かれた補給コンテナしかしその中に入りきらないほど巨大な武装、今回EU軍が参加しているが故に補給コンテナ共に戦場にばら撒かれた其れが巖谷の瞳に写る。

『あれならっ！！！！』

『少佐？！！』

不知火 壱型丙がBETAの群れを飛び越える。

巖谷の突然の行動に驚きの声を上げる唯依

地面に突き刺さる無骨にして創玄、冷酷にして無慈悲しかし其れを手にするものに熱い何かをもたらす其れ、“要塞級殺し（フォートスレイヤー）”の異名をもつ大剣^{グレートソード}“BWS-3 Great Sword”その元に壱型丙は着地しその柄に手を懸ける。

『壱型なら振るえるっ!!!』

（推奨 BGM 赤の修羅神）

元来、不知火 壱型丙は大型化する武装を難なく扱うため機体各部の駆動系が大幅に強化された機体である。

不知火の強化されたジェネレーターから膨大な電力が生み出され、カーボニック・アクチエーターが高出力のトルクを間接部にもたらし、超重量を誇るBWS-3 Great Swordを地面から引き抜き振るう。

“ブウンっ!!!” 『行けるっ!!!』

感触から十二分につかえると判断し、大剣を下段に構え、跳躍ユニットを吹かす。

高出力のジェットエンジンである跳躍ユニットから噴出される炎が地面の砂を舞い上げ、機体が水平に弾丸のように撃ち出される。

『砕くっ！止めても無駄だっ！！破ああああアアアっ！！』

要撃級をそのダイヤモンドよりも硬い剛腕諸共叩き切る。

『全てを粉碎するっ！！！！』

後ろから突進してくる突撃級に気付き大剣を振り上げる。

突進してくる突撃級にタイミングを合わせ一気に振り下ろす。

『おりゃあっ！！！！』

甲殻が一気に輝入り、砕け、その下の体組織は断ち切られる。

『うおおおおおっ！！！！』

その次に突撃してくる突撃級に機体をすぐさま回転させ大剣をを本来

の使用用途どおりに脇に構え、剣の刀身に備えつけられたもう一つの柄を確と握り締め突進する。

“バシユウウウウんっ！！！！”

跳躍ユニット内部で気化した燃料が酸素と混じりあい密閉空間で燃焼させられ、スラスタノズルが開くと共にバツクドラフトを引き起こし機体にすさまじい加速を与える。

『貫徹えっ！！！！』 “ガキンっ！！！！”

大剣の切っ先は突撃級に真正面から深々と突き刺さった。

『おおおおおおおっ！！！！』

大剣に突き刺さった儘の突撃級をフルスイングする。
遠心力により突撃級は引き抜かれ、要撃級にヒットする。

『うおおおおっ！！！！』

再び大剣を下段に構え、壱型丙は翔ける。

大剣が地面との擦過により火花を散らす。

『一刀っ！！！！両断っ！！！！！！！！！！』

大剣を振り上げ怒声と共に振り下ろし突撃級と要撃級まとめて断ち切った。

BETAの返り血により紅く染まったその様はまさしく赤の修羅神であった。

『篁少尉っ！！そつちはどうだ?!』

『これでっ！！最後ですっ！！！！』

山吹色の武御雷が要撃級の足を切り落とし無力化した。

『何とか…になりましたね…』

『ああ、だがこつちはかなりガタが来ている。正直、廃品にまわされないか不安なぐらいだ。』

『当然です。あんな無茶苦茶したんですから。』

『其れを言われると辛いな…』

本来、打突用の武装を振り回して無双したのだから当然といえば当然である。

巖谷はかつてアメリカ軍とのトライアル模擬戦で相手の銃弾を長刀の柄で防いだこともあり無茶は日常茶飯事ともいえる

（ちなみに唯依にお見合い話をわんさか持ってきては「孫の顔が見たい」と言い唯依の頭を悩ませているハツチャケ要素も兼ねそろえる猛者である）

“~~~~~”

辺り一体を地響きが襲う

『気をつける！！団体さんのお出ましだっ！』
『ハイっ！少佐！』

“バアアアアッ”

地面が一斉にあちこちで爆ぜ二機の戦術機を取り囲むように無数のBETAが湧き出てくる。

『苦しい戦いになりそうだな……』

『てえええやああっ！！！！』

唯依のかる武御雷は長刀を振り下ろし、切り上げ、突き、薙ぎ払い無数のBETAを葬っていく。

既に突撃砲の弾は尽きている。武装は武御雷の全身に装備されたスーパーカーボンエッジ装甲と隠し爪そして背に背負う一本と手に携えている長刀のみ

『うおおおっ!!』

長刀を突撃級に振り下ろしそのその甲殻に深々と刃が食い込むが振り切ることが出来なかった。

度重なる使用により刀身の切れ味が極端になくなっていったのだ。

『クッ!!』

すぐさま長刀から手を放ちバックステップで距離をとる。

『唯依ちゃん後ろだっ!!!!』
『っ!!!!』

巖谷駆る不知火からの通信により振り返る無手の武御雷、そして振り下ろされる要撃級の剛腕、射撃武器が無く距離的に間に合わない距離の不知火

戦術機の堅牢な装甲を紙粘土のように破碎させ、中にいる衛士を引き肉へと変える剛腕が振り下ろさる。

“ブウンー!!”

『唯依ちゃんっ！！！』

自身の愛娘に迫る不条理に叫びを上げるが、不条理は不条理ゆえに止まらず理不尽に無慈悲にダイヤモンドを越える硬度を持つ破城鎚が武御雷に迫る。

死ぬ

唯依の脳裏にはその言葉がよぎり、走馬灯の如く今まで自身が積み重ねてきたものが次々と浮かんできては消えていく。

期衛専用機の開発衛士であった父とその友人、巖谷の叔父様

父が亡くなったあとはその志を受け継ごうと血がにじむを通り越して肉が抉れ、骨が露出しそんなほど修練を積んできた。

もう覆しよう無い現実、自身の命を刈り取る死神の鎌たる要撃級の濃緑の剛腕がスローモーションのように写る。

『許して…ください…』

唯依の頬に自然と透明な雫が伝う。
それは敵への懇願ではなく、自身を支えてくれた、きっかけを与えてくれた人たちの大恩に報いることが出来なかったという無念の涙であった。

その時っ！

“ガキンっ！！”

『何とか間に合ったようだな……』

青紫色のまるで紫陽花のように落ち着いた色合いの西洋の騎士の様な戦術機が舞い降り、山吹色の武御雷に迫る死神の鎌をその左腕で真正面から受け止めていた。

前腕部に装備されたブレードスタビライザーが金属擦過の耳障りな音を立てながらカーボンナノ構造体の圧壊による特有の紅い火花を撒き散らしている。

『ASH TO ASH……』

“塵は塵に”といいつつ右手のGWS-9突撃砲を要撃級の頭部の白いまるで昆虫の幼生のようにぶよぶよとした質感の体皮に押し付け引き金を引く。

“だだだだだだだだっ！！”

ゼロ距離で放たれた弾丸により要撃級は頭部をズタズタにされ、地響きを鳴り響かせつつ崩れ落ちた。

『無事か？其処の日本軍機？』

翻訳機を使用していない生の日本語による声が箒 唯依の鼓膜に届く……

続く

第14話 明星（後書き）

解説コーナー

武「作者、何で武御雷があるんだ？あれ00式と言われるだけあって2000年配備だから一年早いだろ？！」

霧丸「それはだね、武御雷自体は1998年には既に完成していてヴァリエーションと機体熟成のために二年かけたってだけだから日本の存亡をかけた作戦に使わないはずは無いと思ったからだ。ちなみに不知火 壱型丙もだよ」

武「じゃあ何でTEの中佐が戦術機で無双してんの？」

霧丸「基本的に日本に後が無い作戦なのに優秀な衛士を遊ばせてると思うか？それに多分あのおっさん不知火のテストパイロットもやってるよ。だから乗り手を選ぶ壱型丙に乗れる熟練衛士で一番使いこなせそうじゃん？」

武「なるほど…そういえば明記していないだけで結構有名どころ混じってなかった？」

霧丸「気にするな」

武「あと挿入歌って俺知らないんだけど？」

霧丸「ググレ、GLAIのデビュー当時の曲でSFロボットとしてやや異色のヤマトタケルのOPだった曲だ」

武「真夏の扉か…日付はぴったりだな」

霧丸「合うの探したからな」

武「無駄な努力…」

（ホンとは久しぶりに見ていてこれ合うんじゃないかね？と思ったからぶっちゃけたまま）

タイフーン TYPE - 4GLX解説

タイフーン TYPE - 4GLX

先行試作型タイフーンをシノノメがOGの技術を用いて改修した機体（東雲の機体はタイフーンとラファールが半々で融合した特別仕様機である。ちなみに単純なスペックはタイフーンやラファールとあんまり変わらない）

段階的改修がなされているが現在本体の外装は背部のユニット以外変化なしでウォール中隊専用機となっている。Xが示すとおり現在は開発途中である。

フェイズ1

背面ユニット：テスラドライブの搭載

機体に掛かる重力という慣性を反転させ機体の浮遊と質量の仮想的な0もしくは1を実現し通常の反動推進と一線を化す機動性と機体の耐久力、耐弾性を獲得する。

テスラドライブユニットは不知火の電磁投射砲の弾倉と同じく背部の兵装担架と背面に固定され僅かな改修で既存の殆どの戦術機に搭載可能なほか、テスラ・ドライブ自体に兵装担架を装備できるようになっている。

フェイズ2

動力をプラズマジェネレーターに交換・各関節をTGCジョイントに交換

テスラドライブの開発と運用で得られた重力制御技術を用いて小型・高性能化され戦術機に搭載できるようになった核融合炉。熱による発電のほかに炉心から発せられる強力な電磁波をダイレクトに電気エネルギーとして取り込んでいる。

それにより超高出力の動力を得られ同時にTGCジョイントを装備可能となる。

TGCジョイントもテスラドライブの技術蓄積の産物で、間接に慣性制御機能を持たせ耐久性と高トルクの獲得これにより機体寿命の大幅な延長が期待できるほか、大型機の開発が現実に可能となる可能性を秘めている。

フエイズ3

光コンピュータの搭載及び、TC・OS・ZINKIO1・FUZIONのいずれかのOSを搭載および、新型センサーモジュール搭載

光コンピュータの搭載によって機体の演算能力が大幅に向上し、また第三世代機の特徴である光ファイバーによる高速・大容量情報転送との組み合わせで従来では考えられないような即応性を獲得する。元来戦術機は電子PCの演算結果を電気信号 光信号と変換が必要であったがそれが無くなりシーンスの信号伝達が可能となったこと、PCの演算能力が上がったことの二つに起因する。頭部センサーモジュールは光信号に対応する新型を採用

また、OSは戦術機の動作がワンモーションごとだったのにたいして連続した攻撃が全てのOSで可能となっておりタイフーンのように固定装備の多い機体との相性がよい。衛士の戦闘パターンに応じた好きなOSの選択及びモーションパターンの採用が可能

ちなみにZINKIO1はダイゼンガーに搭載されたOSである。

現在ウォールの機体はこのフェイス3である（東雲の機体も段階的にこのフェイス3であるがパーソナルカラーの採用と胴体部と足首さらに前腕部のカーボンブレードがフランス軍のラファールに交換されているのとテスラ・ドライブユニットに兵装担架コネクタが増設され専用装備が追加されている）

以下はこれからの改修予定

フェイス4

機体各部のモジュールを交換による改修

フェイス5

第4世代機専用新型テスラ・ドライブの装備
専用武装の開発

現在フェイス4新型モジュールの開発が行きづまっており、打開のめどは立っていない。

また、東雲が提唱した第4世代戦術機の定義は以下の通りである

- ・ テスラドライブによる完全無反動推進
- ・ プラズマジエネレーターによる大出力
- ・ TGCジョイントによる機体高耐久性及び高トルク稼動
- ・ 光コンピューターと光ファイバーによる即応答性
- ・ 新型OSによる高い操作性

これらを満たした戦術機には型式番号として4GLが付けられる事となる。

第15話 紫電の刀王（前書き）

武「なあなあ」

亮「何だ？」

武「お前の機体って部分的にラファールなんだよな？何でだ？」

亮「タイフーンはラファールに比べ機動射撃に秀でてラファールのほうは剣戟戦闘に向いているからだ。

腕のカーボンブレードも剣を使うこと重視で作られていたからと、足首はスラスタユニットが内蔵されていて速度とかいろいろやりやすい（スラスタは付いているがラファールに比べ出力が低い）などの理由だ」

武「なんで始めからラファールに乗らなかつたんだ？」

亮「イギリス軍が次期主力機開発から勝手に抜けて研究成果から作った機体に乗れるか」

武「あ、政治的背景もあるのか」

亮「何より顔が嫌いだ」

武「結局好みかよ?!」

第15話 紫電の刀王

『無事か？其処の日本軍機？』

目の前に突如として現れたその機体とそれに乗っているであろう衛士の発音に唯依の意識はぐるぐると出口の無い迷路を彷徨い思考が完全に停止していた。

今見ている光景は何だ？

唯依の目の前に背を向けている戦術機は日本製戦術機と同じく空力特性を考慮したスリムなシルエットを持ち、武御雷と同じく全身にカーボンブレードを装備した甲冑騎士を彷彿させる戦術機……資料で見たことがあるEUの次期主力戦術機“タイフーン”

しかしそれはあるうことか日本において特別な色である紫と蒼とも取れる色彩普通に見ただけでは

日本を侮辱しているのか！

と激昂したかもしれないが、その戦術機は…

ダイヤモンド以上の硬度とカルボナードを凌駕する靱性を兼ねそろえる攻撃用前肢の猛撃を

その猛撃は強固な堅牢性を誇る戦術機の装甲をまるでダンボールを押しつぶす彼の様にいと容易く破壊する。

その一撃を

あるつことか片手で受け止めながら要撃級を難なく葬ったのだ。

この空に浮くもの全てを撃ち落とす光線級に支配された空から舞い降りて…

さらに聞こえてきたのは翻訳機を使用したどこか機械的な音声では無く、

日本で生まれ育った者のみかなしえる発音の純粋な日本語であった。

どうやってレーザーの飛び交う空を翔けたのか？

どうして要撃級の一撃をしかも片手で受け止めたのか？

なぜ日本人でありながらその紫の機体に乗っている？

その意味を知らぬわけがあるまい？

『き、貴様は一体……?』

しかし自身で幾ら思考しよつとも答えなど出るはずも無かった。

第15話 紫電の刀王

『き、貴様は一体……?』

唯依はただ聞くことしか出来なかった。

『そんなことよりも戦えるのなら周りを何とかしろ』

すると亮のタイフーンは唯依の武御雷を背に庇いつつ両手のGWS
- 9 突撃砲を最低限の弾で正確無慈悲な狙いで的確にBETAに3
6mm劣化ウランの弾丸が放つ。

放たれた弾丸はBETAの制御中枢を、間接を、穿ち軟らかい体組織が蹂躪され透けて見えていた血管から汚い体液が噴水のように吹き出る。

BETAを次々と無効化している亮のタイフーンの背後では、告げられた一言で唯依は自身のおかれている状況を再認識する。

『っ!! すまない… そうだな、貴様の言うとおりで』

『機体状況はどうなっている? あと其処の不知火も』

亮のタイフーンはちらりとやや、離れた場所で大剣を振るう不知火を一瞥し問いかける。

『機体は問題ないが武装がもう刀が一本のみだ』

『こっちは機体の間接と稼働時間がやばいなっつ!!!!』

背中の中刀を抜刀待機状態で構えつつ唯依が、不知火 壱型丙が大剣で突撃級を叩き潰しながら応える。

通常よりも高出力化された分、不知火 壱型丙は稼働時間が短くさらに大質量の大剣がそれに拍車をかけていた。

『ちっ!』

二人の答えに亮は舌打ちを打つ、

(どうする？突撃砲をあの人に渡したとしても撤退途中で稼働時間が過ぎた場合危険すぎる…わざわざ助けたのに死なれては意味が無い。

……かといって此处で護衛に俺が着く訳にはいかない…わざわざ此处に来た意味が無くなってしまふ…)

今しがた空を翔けてきた亮は戦場が戦車級の赤い体躯で染まっていたのを見ていた。

つまり何処にも彼処にも戦車級がうるついておりそんな中で一時とはいえ無防備で突っ立て居る危険性は考えるまでも無い。
あつと言つ間に集られ、BETAに喰われるがおちである。

『ハッ！！』

唯依の武御雷が先ほどの長刀が刺さつたままの突撃級が突進してくるのにあわせ背のブレードマウント兵装担架を稼働させ、柄に手を添え丁度刀を肩に担ぐ形から居合いを放とうとする。

突撃級が武御雷の長刀の間合いに入る…

“バァアアァンっ！！”

『な、何?!』

唯依はまたも驚きの声を上げる。

いきなり切り捨てようとした突撃級が吹っ飛んだのだ。

さらには吹っ飛んだ突撃級には直径3mを超えるの大穴が開いており辺りには肉片と甲殻の破片が体液にぬれ散らばっていた。

『一体何が……?』

唯依はセンサーに眼をやるが半径数キロに友軍のマーキングは無い、突撃級が吹っ飛んだ方向から目の前のタイフーンでもない不知火は今のところ射撃武器が無い。

唯依の思考は混乱を極める。

『超遠距離狙撃……フォックストロットか!』

亮が其れをなした方法と人物を告げる。

其れと同時に音声通信が亮のタイフーンを介して送られてきた。

『隊長っ!!俺らがそいつらを援護します。存分に暴れてください

っ！』

『インディアン上出来だっ！！フォックストロットにも”よくやった”と伝えてくれ』

送られて来た音声に亮は管制ユニットの座席で口元を吊り上げながら答え、跳躍ユニットを吹かす。

タイムラグなど無いに等しい時間で最高速度に達し、正面にいた要撃級に翔ける。

要撃級は猛スピードで迫り来る蒼紫の機体を粉碎すべく、攻撃用前肢を振り上げている。

それは機体が前腕の届く位置に達するに忖じて振り下ろされる。

『殺意は引き金を絞り…！』

亮は微笑を漏らし蒼紫のタイフーンは地面を蹴り、肩部の後ろのスターノズルを展開しブースターが火を吹く

それによって蒼紫のタイフーンは空中で前転を披露し、自身の真上に向け二丁のGWS-9突撃砲の引き金を絞り文字通り弾丸の雨を降らし、崩れ落ちる要撃級を背に地面に着地する。

『魂は弾丸に宿るっ！！！！！！』

左右に突撃砲を持った両腕を広げ銃弾を放ちさらに二体の突撃級が血の噴水を上げ、地響きと共に崩れ落ちる。

其処に時速170kmで迫る突撃級、それに対し青紫のタイフーンは踵に備え付けられたスラスターを吹かし

『銃神演舞……』

短刀の刀身が固定されたつま先で甲羅の無い腹を蹴り上げる。

慣性制御された間接は何の抵抗も無くスラスターの力とカーボニックアクチエーターのパワーを余すことも無く伝え、それ自体も稼動方向へ慣性を制御することで通常の何倍もの力をタイフーンにもた

た

突撃級はボールのように宙に舞い、

『クライ（踊れ）・クライ（踊れ）・クライ（踊れ）っ！！！！』

真下から36mmの弾丸に貫かれる。

甲殻内部の体組織をズタズタにされた死骸が地面に落ち、複数の戦車級を押しつぶすのと同じくして

『危ないっ!!』

武御雷にのる唯依の叫びが届き、右側から先端に鉤爪が付いた触手が青紫のタイフーンに迫る。

『ふっ…』

亮は嘲笑を漏らしながら右手の突撃砲を離すと共にその触手の鉤爪の根元を鷲掴みにし、その触手に？がった本体…要塞級BETAに向け一気に飛ぶ。

『返すぞっ!!』

要塞級の頭部を越える高さまで飛び上がった蒼紫の機体は要塞級の鉤爪をその持ち主である要塞級の頭部に落下による運動エネルギーを利用して突き刺す。

今まで数多くの衛士を葬り去ってきたように内部に直接、鉤爪から強酸性の液体を注入された要塞級は内部に居るであろう小型種ともどもその肉を解かされる。

『避けれるものなら避けてみる…』

要塞級が崩れ落ちるのを見下しながら亮は、地面に放置された突撃砲を左手の突撃砲で狙撃する。

穿たれた突撃砲は内部の火薬とロケット燃料が爆発し無数の破片を完全無作為に周囲にばら撒きあたりの小型種BETAはその一帯だけだが一掃される。

『これで弾切れか……』

亮の網膜に残弾ゼロを示す紅い表示が映し出されているが大した感慨も無く呟く

『さて……これからが本番だ……』

青紫のタイフーンは突撃砲を投げ捨てるとその背の両外側のコネクタに装備された黒い棒のような装備の上から拳三つほどの場所を片手づつで掴む。

するとタイフーンの掴んだ場所より先の部分が“開く”

『刀王とまで言われた我が断罪の刃……』

黒い棒の中から現れたの二振りの中刀

その外見はまさしく仕込み刀

極限まで薄く鋭く鍛え上げられた反りの全く無い刀身、それは如何な加工を施されたのか銀色に光り輝いている。

『その身で特と味わい、地獄への手土産となせ…』

両の手に銀色の直刀を携えた蒼紫のタイフーンは稲妻の如く翔け、暴風のように剣風を撒き散らしそれによって血飛沫が舞う。

其れを唯依は呆然と見つめていた。

『なんと……』

その光景は異様だった。

先ほどの機動射撃も常軌を脱したものだだったがこれは…

格が違う

圧倒的な加速、膂力、其れを完全に使いこなし高いGをもともしない高い身体能力さらに刀身を確実に切断面に対し垂直に当て切り

裂く技量…

今しがた、要塞級の首と片足が一瞬で切り落とされ骸と化している。

『ヒュウ！さすが隊長“紫電の刀王” 桁違いだな！』

『紫電の刀王……？』

『彼がそう…なのか？』

唯依は鸚鵡返しに聞き返し、巖谷は名前を聞いたことがあるらしい。

『そうさ、見て見る。まるであの刀の反射が稲光で、隊長のパーソナルカラーと合わさってまるで紫の雷みたいだろ？』

先ほど通信を送ってきた男性が解説を行う。言われて見れば確かにそう見える。

唯依はあまりに圧倒的な戦いぞままるで舞を舞っているかのような剣舞に見ほれていた。

しかし剣舞は終わりを告げる、男性の切迫した声とそれによって知らされた事項に

『なっ？！マジか！！隊長っ！！アメリカのアホ共が新型のM A P Wぶっ放しやがった！！急いで離脱しろっ！！』』

これが後に人類を二分したといわれる兵器が始めて戦場で利用された瞬間であった。

第15話 紫電の刀王（後書き）

次は支援の二人のことを冒頭に持ってきてきます。

第16話 戦士(前書き)

PCが壊れた…グスッ

何とか直して復旧させようとしたらデータ入れたHDDが壊れて…

燃え尽きたぜ…(明日のジョー)

第16話 戦士

魔都と化した横浜の大地に振り続ける砲弾の雨

それを降らし続ける太平洋上に浮かぶ艦隊……

その中でも一際巨大な空母

他の駆逐艦に比べ搭載する砲の数こそ微々たるものだがその甲板、十数機の人型が飛び立っていったその広大な甲板にはイギリス陸軍機の証であるエメラルドグリーンに塗装されたタイフーンが二機佇んでいた。

『まったく…隊長も慣れないことをしてんな…』

二機タイフーンの内の一機、右側の兵装担架に先端が鎌のような形状の長刀…フォルケイトソード、左側には突撃砲を装備しており両手には巨大な銃器のようなカメラを携えたタイフーンを操る衛士【コードネーム：インディアン】はつぶやきを漏らす。

彼の網膜にはその手に携えられた“ガンカメラ”からの映像、山吹色の機体を背に両手の突撃砲で近距離狙撃を連続して行いその後ろの存在を守りぬいている自身の隊長のものである蒼紫の機体が映し

出されている。

インディアンはその光景を見つつ苦笑を洩らす……

(まったく気を使うのが苦手なくせに……)

彼は守るということが極端に苦手だ。故にお互いがお互いを守るために必要な部隊指揮は必ず副官である【コードネーム：ブラボー】に任せ自身は最前線で遊撃戦闘を行い、部隊の脅威となる光線級を狩る。

一見ただの無謀な突撃バカに見えるがそうではない。部隊員の能力を完全に把握しそのうえ、各々の独自の判断さえも考慮に入れた特攻を掛けるのだ…今のうちに…

219

『フォックス、隊長がお守りで大変だ手伝ってやろうぜ。』
『ああ…まったく慣れないことするなよな。あの隊長さんは…』

もう一機のタイフーンこちら兵装担架には二丁の突撃砲を背負いさらには、誰も目を引く“それ”…
戦術機の全高よりも尚長大なそれを腰だめに両手で構える。

ラインメンタルMk-56中隊支援砲、のバリエーション【Mk-220】

通常の中隊支援砲のそれと違い220mmの巨大な弾丸を打ち出す。それはまるで対戦車砲を戦術機サイズに拡大したそれは、遙か彼方のBETAをインディアンのタイフーンのガンカメラから送られてくる観測情報によって照準を合わせる。

『しっかり頼むぜ』

タイフーンの引き金に掛ける指と連動したトリガーに指を掛けながらフォックストロットはインディアンの言葉を耳に殺気を銃口に集中させつつ返す。

『任せろよ。BETA共なんざ一網打尽にしてやるよ……お前の子供の分もな……』

網膜に映し出されたロックオンサイトに意識を集中しつつ彼、【コードネーム：フォックストロット】は蒼紫の機体を駆る、自身を率いる者がかつて口にした言葉を脳内で反復しつつ口ずさむ。

殺意は

『……………引き金を絞り』

魂は

『……………弾丸に宿るっ！！！！』

“力チっ”

引き金が引かれる。

“ドオオオオンンっ！！！！”

220mmの砲弾のロケット燃料が爆発し、その破壊の塊を超音速で撃ち出す。

フォックストロットの乗る管制ユニットまで砲撃の反動が伝わり銃口からは白い硝煙が立ち上っている。

二メートルを超える弾頭はその長大な砲身から放たれ、テストドライブによって作り出された仮想的、不可視の砲身に導かれ何十キロも離れた突撃級を撃ちぬいた。

『隊長っ！！俺らがそいつらを援護します。存分に暴れてくださいっ！！』

インディアンがあの刀王の名を冠する青年へと通信を送っていた。

『逃がしやしねえよ』

それを聞きつつフォックストロットは次の獲物を穿つ。

第16話 戦士

亮の駆るタイフーンは舞い散る血飛沫の中を、飛び散るBETAの破片の中を駆け巡る。この土地の龍脈に“向けて”…

二刀一対の刃“断罪” Conviction Blade を振り、全身のカーボンエッジ装甲とブレードを巧みに使いBETAを切り刻みながら進む…龍脈に建設されたモニュメントに向かって。

訓練校で学んだBETAの巣ハイブ…その分布図を見たとき亮は一つの仮説を立てていた。

今回の日本主導のハイブ攻略戦における名目

準第4世代機の実践投入…対ハイブ攻略戦におけるデータ収集“そんなもの”亮にとってはおまけでしかなかった。

ハイブが何のために存在するのか…巣としての機能は本来の目的を効率的に行うためのおまけに過ぎないのではないか？

そんな疑念が亮の中に渦巻いていた。

しかしそれを確認するには実際のハイブを調査しなければならないがハイブを調査するには膨大な軍事力と費用がいる。

そこで今回行われる明星作戦に便乗することで亮はハイブを調査しようと考えていた。

遠征でも他国主導の作戦であれば費用はそれほど必要なく、しかも今回は総力戦、貴重な新概念実証機の実戦データもある程度“盗ま

れる”心配がないのだから…

だが、そこで一つの不確定要素が生まれた。

アメリカである。

太平洋上で不気味な沈黙を守るアメリカ艦隊、亮はフォックストロツトを支援狙撃の実証試験という名目で艦に待機させつつアメリカの通信を傍受させていた。

これこそ二人を置いてきた理由であると同時にインディアンは戦況を読む力“戦術眼”をフォックスは相手の行動を読む野生じみた“見切りの眼”を持つていた故に二人を選んだのだ。ただの作業員もどきで終わらす気など無いが故に、通信傍受を行いながら適切な援護ができる二人を選んだのだ。

眼の前に湧いて出た要塞級の蜂の毒針に位置する部分から射出された触手を掻い潜り一気に懐に潜り込み、脚部と跳躍ユニットそれにテスラドライブを連動させ真上にまるでロケット花火のように機体跳躍させる。

しかし、そこに咲くのは閃光の花ではない。

『はあっ…』

飛び上がり、要塞級の頭部がすれ違う際に左手の“断罪”を走らせる。

刃先が単分子結合技術を用いられ加工された断罪は要塞級の首の分子結合を断ちきりながら切り落とす。

さらに機体を空中反転、振り上げた“断罪”で跳躍ユニットと重力二つの力を受けて猛スピードで落下する際に要塞級の右足群と胴体の付け根に刃を走らせる。

地面に墜落する瞬間、又や機体を反転させ着地する。

“だああああんっ！！！”

着地の衝撃がすさまじく地面が揺れ、砂埃が舞い上がった。

タイフーンは着地するや否や、眼の前にいる前に並んで二体、後ろに一体、計3体の要塞級に向い翔ける。

一瞬で、左側の要塞級の懐に砂塵の尾を引きながら潜り込むと右手の“断罪”を切り上げ、要塞級の右半分を切り飛ばし、

そのままその右側の要塞級にそのまま、振り上げる形となった右“断罪”を振りおろし、左側のすべての肢を切り落とす。

“ぶうう…”フュン“ぶしやあああっ”

その間に迫ってきた要撃級がその剛腕を振るうが、それよりも早く、亮のタイフーンはサマーソルトを披露し、一つの巨大な処刑刀と化したスーパークーボンエッジ装甲に包まれた足が要撃級の腕を切り飛ばす。

“どしいんっ！！” “ガッシャアアアンっ！！”

切り飛ばされた要撃級の腕が地面に落ちると時を同じくして宙返りを終えた蒼紫の機体が着地する。その時

『なっ？！マジか！！隊長っ！！！！アメリカのアホ共が新型のM A P Wぶっ放しやがった！！急いで離脱しろっ！！！！』

インディアンの切迫した声がヘッドホンから届く、

『ちっ！！愚者共が…』

亮は心底いらついて舌打ちを洩らす…

『インディアンっ！！！今すぐ国連、日本軍等、各軍に警告っ！！
ウォールの連中は今すぐ手腕の武装を投棄っ！！近くの奴を抱えて
全速離脱する様に伝令っ！！！！』

亮は通信機の向こうにいるインディアンに指示を飛ばしつつ、断罪
を背の鞘に仕舞う、スタビライザーとしても機能する鞘が左右に開
き、そこに断罪の刃を通す。

“カシユっ”

鞘が閉じるとともに中の空気が吸い出され刀身が抜け落ちないよう
にロックされ、柄と鞘が留め金で固定され一体化する。

『了解っ！もうやっているぜっ！！あと、さっきの二人がまだあの
あたりをうろついて居やがる』

『帰りの駄賃だ連れていく』

亮のタイフーンは反転し二機の日本軍の戦術機を視界に収め、

“キュいいいいいいんっ”

超強力なガスタービンとロケットエンジンのハイブリットである跳躍ユニットが酸素を吸い込み回転数を上げる。

“バシユウウウウウンっ！！！”

タイフーンが地面を蹴ると同時にスラスタから炎が噴きで、機体が水平噴射を行い空気を引き裂きながら翔ける。

『き、貴様！？何を！！！？』

そして、一気に山吹の戦術機の腰に手をまわし小脇に抱えて翔ける。

『その不知火、剣を捨ててついてこいっ！！アメリカの馬鹿が核よりも厄介なもんぶつ放しやがった！！』

『『っ！！！！？』』

かつて、アメリカが日本防衛線の際選んだ戦法、避難民もろとも新型爆弾でBETAを吹き飛ばすという方法が揭示されたのは日本では公然の秘密であり、日本人である唯一と巖谷がたどり着く結論も一つしかない。

巖谷は大剣を投げ捨てる。武御雷と同型の跳躍ユニットを吹かし追従する。

しかし、

『遅い』

空気を引き裂き、砂煙の尾を引きながら疾走する不知火。壱型丙に對して亮はつぶやく。

4GLXはテスラドライブの恩恵によって、機体を押し出すのにはほとんど力を必要としない、故に相当跳躍ユニットの出力を抑えて持久力を高め、無駄な燃料を消費しないようにしている。それでも尚、既存のどの戦術機よりも速いのだ。

『っ！！！』

『どっ！…したのだ？』

亮が突如、驚きの声にならない声をあげそれが機体を伝わり、唯依の武御雷に響いたので唯依は亮に問いかける。

『……………空を見る…………』

制圧が完全に終わりBETAが存在しない地区を疾走する三機の戦術機が空を見上げる。

そこには岩盤を積み上げたようなモニユメントのふもとから無数の光の槍が迎え撃つもそのすべてを捻じ曲げている白く光る光弾が二つ浮かんでいた。

いや、超高高度から落下しているが故に浮かんで見えるだけである。

『呆けている場合じゃないっ！！その不知火これを使えっ！！』

亮の機体は追従する不知火に速度を落とし機体を並べる。

亮は、大事に取っておいた背のGWS-9突撃砲を手に持ちかえたのち、不知火に手渡す。

『何故、いまこれを？』

『この先の地区に少し前、BETAが出没したらしい。そこで補給中だった部隊が壊滅、そしてBETAがいまだにうつろっているからだ。』

『……わかった、ありがたく借りるとしよう。』

インディアンのタイフーンをつうじてCPから戦場の部隊の状況はメールとして送られてきている。

(もともと、ハイブに突入してから使う予定だったのだがな……)

亮は心の中で愚痴をこぼす…

『いい加減、私を下してはもらえないだろうか?』

小脇に抱えられた状態の武御雷から唯依 の不満の声が上がる。

『貴様は動きからして初陣だろ?そんな奴まで構っていられるほど余裕がない。おとなしく抱えられている』

『ぐっ!!--』

二もなく告げられた一言で唯依 は不満タラタラながらも納得する。

(いつか……こいつを見返してやる……)

唯依 にとっては珍しく私情で他人への反感を抱いた瞬間であった。

『一気に突っ切る行くぞっ!!--』

一体の戦術機を抱えてなお、従来の戦術機を超えた速度でタイプー
ンは翔ける。

『うわあああああああつ！！！！』

『うおおおおおおおおおつ！！！！』

亮達が到着するよりも僅かばかり時をさかのぼる、これはG弾が放
たれる直前に起きた出来事…

二体の日本製戦術機、不知火がエレメントを組み突撃砲を乱射しな
がら無数のBETAを葬り続けていた。

『無理だ、孝之っ！！撤退して体制を立て直そうっ！！！！』

『わかった慎二っ！！やるぞっ！！！！』

『おおっ！！！！』

もと居た部隊は彼らを残し全滅している。

周囲のBETAを何とか駆逐し、戦場にはら撒かれた補給コンテナ
……そのうち幾つかから補給を受けていた時、それは起きたのだ。

地中から突如湧いて出たBETAの集団…

しかし、単にそれだけならば精鋭ぞろいである彼らが壊滅することもなかったであろう。

BETAが地中から這い出てくるとき、地面を掘削する振動、それが一切検知できずに奴らは現われたのだ。

ここから予想できることは、地上にいたBETAはおとりであり彼らを引き入れるためのウツボカズラの蜜に過ぎなかった。

ウツボカズラがその蓋を閉めると同様に、かねてから地中に潜んでいたBETAは補給を受けている真つ最中で身動きの取れなくなっている彼らに容赦なく襲いかかった。

突撃前衛であり弾の消費の激しかった二人は、戦術機のセオリーに従い一番初めに補給を行い、済ましていたことで難を逃れるが補給中だった他のメンバーは為す術もなく撃破された。

二体のUNブルーに塗装された不知火は、ホライゾンファースト水平噴射を行い、入れ替わり、立ち替わり位置を入れ替えながら銃を乱射しながらBETA群を葬りながら、安全圏へと離脱しようとする。

『いけるっ！！行けるぜっ！！慎二っ！！』

鳴海 孝之、蒼い不知火を駆る彼は次々とBETAを撃ち殺し道を切り開いてい行く順調な後退ではあるが進撃に、生きて帰れる手ごたえを感じ相棒に語りかける。

『孝之…気を抜くなよ、奴らは何をするかわからない…だから、おれたちは今こうしているんだよ…』

一方もう一人の不知火の衛士、平 慎二はやや不安げにつぶやく…

孝之と違い彼は自分を律することに長、また確かな戦術眼を併せ持ち突出しがちな彼のストッパーとしての役割を持っていた。

また一体、また一体とBETAを突撃砲でBETAを倒しながらその道を直進する二体の不知火…

（おかしい…？）

そこで慎二は妙な異変に気づく、なぜかBETAは倒されたBETAをそのままに、道を開けたままなことに…

（まさかっ！！）

ある一つの答えにたどり着く

重光線級：巨大な光るもの：一つ目の学名を持つそれがレーザーを放つ際、BETAの大群まるで津波のように迫るそれが、あたかもモーゼの十戒のごとく割れることがまれにあるという…

『孝之っ！！畏だっ！！』

“ガッシャアアンっ！！”

慎二の駆る不知火が隣の不知火に体当たりを行う。ちょうど隣にいた要撃級が不知火に押しつぶされ、背にマウントされていた2本の長刀の刃が当たり顔が切り裂かれ孝之の不知火を赤く染め上げる。

『慎二っ！！？』

パートナーの突然の行動の意味がわからず驚きの声を上げるが、それと同時に網膜を焼き尽くす閃光によって視界が白く染まった。

『っ！！』

孝之のに染められた視界がだんだんと回復し、そこで孝之が見たのは自身の機体に覆いかぶさるように佇む慎二の不知火だった。

(体当たりで光線級の射線外に押し出してくれたのか…！)
『すまない慎二っ！また助けられたな！』

『……………』

慎二からの応答は一向になく、孝之の思考は困惑の色を混ぜ始める。だが、いつまでもこうしているわけにはいかないと機体を引き起す。

“ぎいいいいい……………”

慎二の機体はゆっくりと支えを失い倒れていくが、周囲のBETAに意識を向けていた孝之はそれに気付かない。

『慎二、離脱するぞ機体を早く起こせっ！…！』

“がつしやあああんっ！！”

慎二の不知火は本来、自動で行われるはずの受け身も取らず地響きを鳴り響かせ崩れ落ちる。

『……………?!……………慎二……………?!』

孝之の不知火はそのメインカメラを倒れた不知火に向けた…そして見た

『しん……じ……？』

始め、脳がそれを理解しないように現実を拒絶するが、兵士として訓練された思考がそれを享受し始める。

(胃がむかむかしてきた……)

背面と肩の一部を……管制ユニットを含めまるでえぐれたかのよ
うに赤熱した傷跡が不知火に刻まれていた。

平 慎二は管制ユニットごと蒸発させられたのだ。

『う……うわあああああああああつ!!!!』

何とも言えないどす黒い何かに突き動かされ、鳴海 孝之は雄たけ
びを上げた。

続く

第17話 黒い太陽そして門にして鍵

「
うあああああああああああああああああつ！！
！！」

BETAの軍勢に向けたただひたすらに突撃砲を乱射しつつ突撃する
一体の青い不知火

「よくもつ…よくも慎二をつ！！！！」

鳴海 孝之は親友を仲間を故郷を肉親を奪ったBETAに対し胸の
内から湧き出るとす黒い何かに従いひたすらに銃を撃ち続ける。

いま、彼の胸中は生きるとか死ぬとかどうでもよく、とにかく自身
の大切なものを奪った存在に一矢報いてやればいいと自棄にも似
た憎悪に支配されていた。

ただ……それだけだった…

作戦中の全部隊に通達する、アメリカ軍が新型爆弾を発射した！

作戦行動中の全部隊は速やかに離脱せよっ！！！！

公共チャンネルでおそらく横浜にいるであろう全部隊に警告が発せられている

しかし、肝心のアメリカからは事前警告もなにもなしであった。

つまり、アメリカは前線で死力をつくして戦っている者達ごと、BETAを薙ぎ払おうというのだ。

『そうまでして手柄がほしいのかアメリカはっ！！！！』

それを背景に廃墟と化した横浜の大地を翔ける不知火 壱型丙と山吹の武御雷を小脇に抱え疾走する蒼紫の機体

そしてそれを迎え撃つBETAの軍勢

『今、光線級のほとんどは空に眼が行っているっ！飛び越すぞっ！』

『！！』
『ああ、わかったっ！！！！』

『舌を嚙まないように気をつけろっ！！！！』

『言われずともわかつぶっ！！！！』

亮は武御雷に乗っている唯依に警告を発するが、唯依は先ほどの戦力外通知に腹を立てていたのか強気で返そうとするがその瞬間、機体が跳躍し舌を噛んでしまう。

『……………言わんこつちやない……………』

亮はため息交じりにつぶやき機体を水平噴射で飛行させる。

BETAの軍勢は空中の亮達に文字通り手が届かず素通りを許してしまう。

『ヴルザイ…』

唯依は舌の痛みには涙目になりながらも噛みつく。

『……………これは…もしかするともしかするかもな……………』

巖谷は亮の機体に追従しながら今まで見たことのない娘の一面に含むもののある笑みで眩きを洩らすのであった。

そして地上に黒い太陽が現れ、触れるものすべての原子分解し存在を消滅させる。

それと同時に、空中を翔る機体のすぐ下に蠢く異形の軍勢はその活動を停止していた。

あの黒い太陽に吸い込まれている…大量の命が

ブラックホールのような黒い太陽が横浜の大地に存在するすべての命力ををまるで大渦が船を呑み込むように舐めつくし吸い尽くしていた。

横浜の大地が…死ぬ！

「うおおおおおおおお

っ！！！！！！！！」

一機のUNブルーに塗装された不知火が亮たちとは反対、横浜の外側から長刀を手にBETAの津波に突っ込む。

幾たびも振るわれる長刀の切っ先が異形の軍勢たる突撃級、要撃級を切り裂き、相手が倒れ伏す前に前方に跳躍ユニットを噴射、

先ほど今袈裟切りにしたBETAをバーニア噴射で焼きながら急速後退すると同時に後ろから迫っていた要撃級に旋回のクイックターンに乗せた横風の斬撃で感覚器官である尾節を切り飛ばし、返し刀で左右に一刀両断する。

「よくもっ！よくもっ！お前ら 皆殺しにしてやるっ！！！！！」

憎悪の刃を振り回しその青い体軀を朱に染めていく国連軍の不知火。

「返せよっ！！返せよ！！みんなを！！真二を 俺達の街を！」

黒い太陽から発せられる不可視の波に不知火ごと鳴海 孝之少尉は呑み込まれた。

膨張を続ける黒い太陽から跳躍ユニットを噴射させ遠ざかるうとする三機の戦術機

G弾の爆発から十二分の距離が取れてはいたがその推力を落とすことなくむしろ、加速させようと燃料の残量を一切気にせず遠ざかる

うとする。

「お、おい…距離は十分に取れているんじゃないのか？」

巖谷はフットペダルを全力で押し込んだまま前方に背を向けたまま先行する機体を駆る亮に問いかける。

「だめだ、目に見えない波が広がっている　巻き込まれたら一瞬で死ぬぞ」

亮がそう答えた瞬間、たらふく周囲のモノを喰らったためか黒い太陽は一瞬で急速に収縮し、瞼を灼く白い閃光として爆裂する。

タイフーンのカメラが瞬時に幾重にもフィルターをかけ失明の危険性を無くす。

あれは!?

その白い闇の中、黒い太陽の中心部であった場所、G弾中心部…超高密度の重力の渦に自身がこの世界に現れた時に使用したゲートが形成され、そしてそこから蒼い阿修羅の生首が現れようとしているのを目にする。

ESウィンドウっ!?

が後ろから迫りくる、ホワイトホール現象によく似た衝撃波の津波が後ろから迫ってくる、それから離脱することに意識を集中し再び視線を前に向け、跳躍ユニットの出力を上げる。

あたり一面荒野とかした横浜で3体の戦術機が立ち並び、敵味方関係なしに消滅させられた戦場を見据えていた。

『おのれ…よくも多くの同志を…アメリカめ…』

『これは…凄まじいな…』

『……………』

巖谷は、G弾のあまりの威力にただ呆然とし、唯依は勧告もなしに大規模破壊兵器を友軍が居るのにもかかわらず発射したアメリカに元々の反米感情も相まって怒りをあらわに、拳を握りしめて歯を食いしばっていた。

対して亮は先程、爆心地に形成されたゲートから出てきたものに対して思考を巡らしていた。

（あれの動力が予想通りだとすると、アメリカにでも渡して下手なことをすれば“世界が滅ぶ”……………
逆にうまく使えばBETAを打ち破る破壊の炎となる…消すか・使
うか難しいところだな…）

“ビーーーー！！ビーーーー！！”

亮のタイフーンのセンサーが上空から落下してくる物体群…戦術機カーゴとそれに搭載された戦術機部隊…アメリカ宇宙軍の部隊をとらえる。

『やれやれ…時間はない、か…インディアン聞こえるか?』

ザッ! - ザッ! ザッ! ……

『チっ! -!』

ヘッドセットから聞こえてくるはノイズばかり…
重力異常のせいか通信が取れなく舌打ちをする。

(最悪、動力中枢だけでも回収しなくては…)

アメリカに見つけられるわけには行かないと、亮は作業用のコンソールを取り出し、リミッターを外し跳躍ユニットの出力を規定に戻す。

“ キュイイイインツ!! ”

『おいつ! 貴様っ!! どこに行く!?!』

飛び立とうとする蒼い機体呼びとめる唯依

『やる事が出来た、それだけだ…それと”おめでとう”。
君は死の八分を生きぬいたんだ。』

“ バッシユウウン!! ”

そう言い残し蒼紫の機体はあつという間にハイブのあつた場所へと砂ぼこりを舞いあげながら点となり見えなくなった…

『あいつは一体何者なんだ…』

唯依は呟きを洩らし巖谷がそれに答える。

『紫電の刀王…たしか円卓の騎士団【ナイト オブ ラウンズ】において異例のナンバー13を与えられたイギリス軍最強の衛士だと聞いたことがあるな。』

『あいつが!?!』

巖谷の答えに驚きの声を上げる。

『唯依ちゃんよ…彼、お嬢さんにしてみない?』

『はい?』

『あ、唯依ちゃんがお嫁さんでもいいよ』

戦場に似つかわしくない叫びがこの後に木霊するのであつた…

そんなことは置いて（唯依のことは）

かつて横浜ハイヴが築かれていたその場所は二発のG弾によって抉れ、この土地がまだ人間のものであった頃は“心臓破りの丘”とまで言われた鋭い傾斜は完全に見る影もなくなりクレーターと化していたそのクレーターの一角に阿修羅の生首とも見える蒼い機兵の胴体が転がっていた。

かつてあったコックピットを収めた頭部は見るも無残に打ち砕かれ、四肢は完全に無くなり、袈裟切りにでもされたのか顔に見えるその部分には斜めに亀裂が走っていた。

“ガッシャン”

その蒼い阿修羅の生首のそばに着地する蒼紫のタイフーン…

『まさか… よりもよって貴様が流れ着くとはなツヴァイ…… ツヴァイザーゲインっ!!』

タイフーンを駆る亮は蒼い阿修羅の生首… ツヴァイザーゲイン… かつてのXNガイストに語りかけた。

その時っ……

ぼーっ

ツヴァイザーゲインの胴体の切れ目から泡のようなものがにじみ出る。

不可思議な虹色の光を放ちながらそれはシャボン玉のように浮かび上がったそれはツヴァイの上空で滞空する。

『っ！！？』

これから起きること察した亮はタイフーンを近づけようとするがあまりの圧力に近づけなかった。
続いて二つ三つと泡が浮かび上がる。

さらに泡はその数を増やし続ける7…13…いや、無数に

無数の球体群は生き物のように脈動しながら膨れ上がり、ますます多く、ますます巨大になっていく。

『っ！まずい！！！！』

総体での高さは既に20メートルをゆうに超え、うねり、のたくり、脈動し、回転し、分裂し、融合し刻々と色彩と明度を変える。

それは巨大な、そして微小な泡の群れ。

世界にむけて異形の泡があふれだそうとしていた。

そしてその泡の一つ一つが、異世界に通じる次元の門だ。

あるものは灼熱の

あるものは極寒の

あるものは猛毒の

その他多くのものは形容するも不可能なおぞましい世界につながっ

ている。

まるで、泡の群体が一つの巨大な心臓の様な様相を為しており、その泡の表面からは炎を、冷気を、瘴気を、うねりや、笑い声、あるいは精神的な波動をこの世にあってはならないものを放出し始める。

やがて世界が決壊する。

続く

第十八話 相対する龍神人と阿修羅 (OG編) (前書き)

半分 外伝です。おまけに二話構成です。

前回の話を修正しました。

第十八話 相対する龍神人と阿修羅 (OG編)

『この機体とて元はタイプS…ならばやれるさ!』

赤い鎧を纏った機兵ビルトライガーが華麗に宙に舞い上がり緑色のアシュセイバーの頭上をとる。

『ゲシュペンストキック改め…』

ビルトライガーはその背のスラスタから淡い緑色の炎を吹き出し急降下し、反転、蹴りの体制に入る。

ライガーはその脚に青い稲妻と淡い緑色の光を纏う。

『【ライトニング・フォール】っ!!その名の如く貫けっ!!』

ビルトライガーはその赤い装甲を覆われた足に破壊のベクトルを携え、一筋の流星となりアシュセイバーに迫り、蹴り砕く。

『?!?!?!?!?!』

ライガーの脚がアシュセイバーにめり込み、粉碎し中にあるWシリーズもろとも破壊する。

『どのような存在であろうと、蹴り砕くそれだけだ…』

蹴りぬかれ、粉々になり爆散するアシユセイバーを背にライガーを操る亮は呟く。

そしてそれを見据え腕を組み宙に佇む青い阿修羅

『やはり雑魚では貴様らの相手はできんか…』

青い鬼のような風貌、まるで青い阿修羅が紅玉を啜えているかのような胴体に全身に角を生やしたかの様な風貌の機体が腕を組み佇みその機体：ツヴァイザーゲインに搭乗しているヴィンデルは呟きを洩らすとともにハガネ・ヒリユウ改の面々へと殺意の矛先を向ける。

第十八話 相対する龍神人と阿修羅

ホワイトスター：かつてエアロゲイタの地球進行の本拠地でありL5戦役後地球の新たな拠点として改造が進められていたそこは、インスペクターによって占拠されまたも異星人による地球進行の本拠地として使用されてしまう。

ハガネ・ヒリユウ改の面々は待ち受けるインスペクター・シャドウミラーの混合軍へ攻撃を仕掛ける。

2艦の攻撃と時を同じくしてアインスト群の攻撃を受けていたインスペクター軍は戦力を消耗し、内部への突入を許してしまう。

その際の防衛戦においてシャドウミラー幹部にしてエースパイロット【アクセル・アルマー】はかつて殺めた【フィオナ・グレーデン】の双子の兄、【ラウル・グレーデン】の駆るエクサランスに撃たれ死亡。

さらにインスペクター側もシカログ・アギーハといった幹部を撃たれ、さらにはメキボスの離反、それによって転移装置を破壊されたインスペクター指揮官ウエンドロは徹底戦を余儀なくされ、自身の兄であるメキボスを殺害するもその卑劣な手段を目の当たりにしたハガネ・ヒリユウ改の面々の逆鱗に触れ撃破され乗機と運命を共にする。

しかし、そこで異常事態が発生した。

ウエンドロ機の撃破とともにホワイトスターが“浸食”された…

高い科学と遺跡が融合したような白い内壁は内臓のようにピンク色に染まり、脈動し血管のようなものが縦横無尽に浮き出てまるで生

物の体内にいるかのようだ。

外部との通信は一切通じなく脱出の集団もなく変質したホワイトスターに閉じ込められたハガネとヒリュウ改の面々の前にシャドウミラーが現れる。

シャドウミラー指揮官ヴィンデル・マウザーは自身の配下に入れば次元転移装置“システムXN”を使用し通常空間への帰還が可能となると提案する。

しかし、シャドウミラーの理想、【闘争を常とし人類が進歩し続け世界】それを許容できないハガネ・ヒリュウ改の面々、さらにこの世界をその世界と為した後は無差別に並行世界で同じことを行うというヴィンデルに対し決戦を挑む事となった。

『やはり雑魚では貴様らの相手はできんか…』

『なら貴様が相手をするか？お山の大将さん？』

ヴィンデルの呟きに嘲笑を合わせ皮肉で返す亮。

『ならば…そうさせてもらつとしよう……【残影玄武弾】っ！！！』

ヴインデルの音声コードを認識したツヴァイザーゲインの赤い瞳が一瞬煌めき、10数体に分裂する。

『キシュリア・ゼルレッチ多重次元屈折現象?!』

亮は目の前に起きた現象に驚きの声をあげる。

右前腕部の突起が高速回転しまるでミキサの刃のように腕を中心に残像を残す。

そして

『貫けえいつ！！！』

すべての残像から破壊の幻影たる右腕が放たれる。

『くっ！！』

10数体のツヴァイから放たれる実体を持った虚像の拳の嵐から機体を巧みに操り回避していく亮

ツヴァイの飛び交う拳が360度せわしなくライガーを襲い、掠めるたびに火花を散らしライガーの深紅の装甲を削る。

やっと、拳の嵐が終わりを告げたかと思うと360度全方位にツヴァイザーゲインの軍勢が展開しており亮のビルトライガーを完全に包囲していた。

ツヴァイはその左腕に青い光球を携えて、ビルトライガーを腹と頭部の計4つの赤い瞳で射抜く。

『東雲……これが我らの、貴様が無意味といった存在が生み出した世界と戦うための力：【邪龍麟】っ！！！！』

まるで太陽のプロミネンスのように表面が蠢き続けていた光球は徐々に蠢きを強め、その膨大なエネルギーをライガー向け放つ。

全方位から放たれるそれは中心部にいるライガーを、亮を、亡き者にしようと迫る。

『【T-LINKフェザー】っ！！！！』

ライガーの背のメインスラスタ―両側に収納された翼が一気に展開し強念の力を物理的な力として顕現せしめその証である翡翠色の炎の羽を生み出す。

ライガーは翡翠色の翼を羽ばたかせ急上昇し、青い光の雨から逃れる。

だか

『なにつー!!』

待ち受けていたかのように禍々しい装飾大剣 を手にしたツヴァイが居た。

『そして…世界を超える力よっ!!……【暗刃閃】っ!!!』

ツヴァイはライガーに向け剣を構え加速し迫りつつ又や分身しライガーを襲う。

『くっ!!』

亮は押されている戦況に歯噛みしつつ、ライガーの右手にマウントされたシシオウブレードを左手のマニピレーターに握らせ、下段に構えて翔けだす。

ツヴァイが黒い残像を残しヴァイサーガと同等の速度を持ってライガーに切りかかる。

対するライガーも加速に加速を重ね、翡翠色の軌跡を残しあたかも彗星のように翔ける。

“ガキンっ!!ガキンっ!!ガキン…”

闇と光、この相反する二つが交わるたびに甲高い金属音と火花、そしてライガーの翔けた残照である翡翠色の粒子によってあたかも神話の再現の様な幻想的な光景を映し出す。

が、いかんせん数が違いすぎるのか徐々にライガーの動きは鈍くなる。

『東雲、我らの悲願！無意味と罵った罪をここで償うがいいっ！』

ツヴァイのうち一体の大ぶりの斬撃、通常なら難なく避けれる一撃ではあるが、幾つもの攻撃をさばき、ライガーは避ける余力はなく念動フィールドを纏ったシシオウブレードで受け止めるが

“ガキンっ！！！” “フンフンフンフン……”

『しまっ…！』 “ザシュっ！ザシュっ！ザシュっ！ザシュっ！ザシュっ！！ザシュっ！！”

シシオウブレードが弾き飛ばされ、次々とツヴァイの分身が実体を持った虚像たる刃をライガーに無慈悲に四方八方から突き刺してゆく…突き刺さった刃の傷口からはまるで血のように機体をめぐるオイルが噴きでて深紅の鎧を汚す。

『っ亮！！』

『東雲っ！！！！』

亮に次々と突き刺さっていく刃を目にした仲間たちが次々と亮の名前を叫ぶが、無慈悲にも処刑刀は振り下ろされる。

『地獄にて、アクセルにでも詫びておけっ!!』

幾つもの剣が突き刺さり見るも無残な姿となり、淡い緑色の翼も消失した満身創痍のライガーにツヴァイはヴィンデルは刃を振り下ろし一刀両断する。

『ふ…所詮は俗物…敵ではないわ』

剣を振り下ろし落下していくライガーの残骸を見降ろしつつヴィンデルはツヴァイザーゲインのコックピットで嘲笑と侮蔑を含んだ言葉を洩らす。

しかし

『っ!!なに?!』

落下していたライガーであったものがまるで、霞のように消える。

『なにがおかしい?ヴィンデル・マウザー』

背後のリーダーに反応するモノより発せられたたった今殺したはずの声に“まさか…”と振り返るツヴァイザーゲイン…

そこには、変わらず深紅の鎧を纏い、翡翠色の翼を広げる無傷のピルトライガーがシシオウブレードを肩に担ぎその緑色の双眸でツヴァイザーゲインを見下ろしていた。

続く

第十八話 相対する龍神人と阿修羅 (OG編) (後書き)

ちよこつと解説コーナ~~~~

武「なあなあ」

亮「何だうるさいぞ」

武「ひどっ!?! まあ…なんでお前の機体わざわざMrk-?タイプSを改造したんだ?別にノーマルのビルガー改造でいいじゃないか?」

亮「当初その予定だったんだが…カーク博士が「どうせまた壊すから、なら壊れないように頑丈にしてやる」ってタイプSつかったんだよ…まあ、ビルガーは所詮量産型がベースだからある意味当然の帰結ではあるな」

武「あれ、量産型だったの?!」

亮「そうだ、頭見てみるまんまゲシュペンストのままだぞヘルメツト変えただけ」

武「ほんとだ…」

亮「まあ、ラドム博士作の中では一番まともではあるな…」

武「なんかこの人…夕子先生と同じ感じがする…」

亮「多分、大天災なんだろうな」

武「なんか今、字がおかしくなかったか?」

亮「気にするな、禿げるぞ」

武「はげねえよ!」

亮「さあ?どうかな…」

武「ちよっ…やめてくれそついうの!」

亮「……………」

武「何とか言ってくれえ!」

亮「禿げ……(ぼそっ」

武「うおおいっ！……！」

第十九話

時流を司るモノ（前書き）

一話じゃ纏め切れませんでした…

第十九話

時流を司るモノ

探し続け、求め続けていた…

喪つてしまった帰るべき場所…それを探し続け幾星霜

世界を相手に戦い戦い続け…諦めた…

あの世界に俺の居場所はなかった…見つける事もできなかった…

例え、帰るべき場所を見つけようとも“また”壊される…

だから、世界を超え探し続けた…いつか帰る場所を…

いつか見た真祖の姫、殺人貴、両義の女、錬鉄者…

彼らには例え世界に居場所がなくとも帰るべき場所があった…

それが…ひどく…ひどく………羨ましかった

第十九話

時流を司るモノ

『何がおかしい？ヴィンデル・マウザー』

『き、貴様は確かに…』

自身を見下ろすビルトライガーにヴィンデルは振るえる声を発する。
確かに仕留めた筈だった。

ツヴァイザーゲインの操縦システム…ダイレクト・アクション・リンク・システムによりヴィンデルの腕には確かにライガーを一刀両断した感触が残っていたのにもかかわらず目の間に無傷で居るのだから。

『殺したはずだ…などつまらないことは言うな』

『殺したはずだっ！！なぜ！どうして！貴様は生きている！答える東雲っ！！！！』

ある種の恐慌状態に陥ったヴィンデルに亮の言葉は届かない。そしてヴィンデルはツヴァイは再び大剣を掲げ分身を生み出す。

大剣を振り下ろすと共に分身たちが阿修羅の軍勢となりてライガーに迫る。

『ふっ………貴様ごときに出来ることが俺に出来ない通理はあるまい？』

固有時制御：存在夢幻化

『なっ！！なんだとっ！！』

亮の特定の音階をもって発せられた始動キーと共にライガーが無数に分裂する。

そして、其々がツヴァイとその分身を迎撃する。

“ブウンっ！！”

横薙ぎに剛剣がライガーの内一体に振るわれる。

“カチャっ！！”

しかし、剛剣はライガーを断つこと叶わず、剣を振り切った状態のツヴァイに両の米神と額、後頭部に其々四方から黒い無骨な大口径の拳銃の銃口が突き付けられる。

『散れ』

銃を突きつける4体のビルトライガーがフォトンリボルバーの引き金を完全同期して同時に引く。

“ドオン！！！”

ツヴァイザーゲインのコックピットが収められている頭部が光子を圧縮して作られた弾丸により吹き飛ばす。

頭部を喪ったツヴァイは倒れるように落下していきその姿をかき消す。

『【重虎咆】っ！』

ツヴァイザーゲインのうち一体が大剣を投げ捨て、剣よりも迅い拳で殴りかかる。

ソウルゲインを超えるパワーを持つツヴァイの剛腕、それは通常のPTであれば一瞬で鉄屑へと変えてしまっただろうが…

『【^{ガイスト}全休符・^{ナックル}無音】っ！！』

“ガンっ！！メキッ！！”

拳が放たれる刹那の瞬間を見切ったライガーの淡い緑色の光を纏った右拳が神速を持って放たれる。

神速のカウンターである拳はツヴァイの腹部の紅玉を打ち砕き内部機関へと侵入する。

ツヴァイはその剛腕を振るうこと出来ずに腕を振り上げたまま、腹

部から血の様な液体を洩らしライガーの拳を突き刺したまま硬直する。

『おまけだ…とっておけっ!!』

ライガーのコックピットで亮はその手に握るトリガーを引く。

“ガガガガガガガガガッ!!!”

右手前腕部に装備された三連装フォトンガトリングが発射され、内部機関が光子の弾丸によって蹂躪され、ツヴァイの背から胴体を撃ち貫いたフォトンの弾丸が無数に現れる。

“バアン！バアン！バアン！…”

ツヴァイの彼方あつち此方こつちで小爆発が起き、そして

“ドオオオオオオオオオッ!!!”

爆散する。

そして徐々に消えながら落下していく破片の小雨と爆煙の中から現れるは、緑色に光る双眸と翼を備える深紅の鎧を纏った機械仕掛けの天使。

『【邪龍鱗】っ！！砕け散るがいつ！！』

ツヴァイの内一体が剣を持っていない左腕に青い光の弾を生み出し、ライガーに向けて放つ、
先程の収束して放たれたのとは違い青い光玉は弾け、散弾銃のように放たれる。

『其が羽ばたきは不死鳥（朱雀）の羽ばたき…』

“フユウンフィンっ！！”

迫りくる青い破壊の雨に後ずさることも脅えることもなく亮が口ずさむと共に背のT-LINKフェザーが一際大きく広がる。

そして…

フェザーランサー

『崩っ！！』

“バサアっ！！”

ライガーの翼が羽ばたき、淡い緑色の炎の羽が無数に撃ちだされる。

思念により作られた羽の槍と邪龍の鱗が空中で衝突する。

隣接する世界：並行世界より組み上げられる無限の熱のエネルギーから作らされた青い邪龍の鱗

虚数空間より組み上げられる無尽蔵のエネルギーが亮の思念により加工された破邪の槍

この二つがぶつかり合い、お互いを砕きお互いを否定しあう
その苛烈さを表すかのように無数の爆発が連続して起き、変質した
ホワイトスターの内壁を照らし、機械仕掛けの人型達を照らす。

そして…

『おおおおおおおつ!!』

爆発を引き裂き、ライガーが翼をはためかせ、翡翠色の尾を引き裂
きながら翔ける。

“ガキンっ!!”

突進の勢いをそのままにツヴァイにひざ蹴りを食らわしよろけたと
ころを

“ガキンっ!!”

其の頭部の角を右手で掴む

『撃ち砕く…!!』

翡翠色の念動フィールドを纏い、三つのプラズマステーキに青い稲
妻を秘めた左拳をツヴァイに打ち込む。

“ガアンっ!!ピシっ!!メキャっ!!”

ツヴァイの顔面はひび割れ、砕け、拳がめり込んでいる。

『爆ぜろっ!!』

“バシユっ!!!”

“バシユっ!!!”

“バシユっ!!!”

プラズマステークに秘められたプラズマエネルギーが直接内部に叩き込まれ

“バアアンっ!!!”

爆ぜた。

『なに…何だと………』

ヴィンデルは目の前で起きる光景が受け入れることができなかった。

システムXNによって作られた分身…それは多重屈折現象を引き起こし、並行世界から呼び込まれた虚像にして実像

それが…本体と全く同じ能力を持つ分身たちが次々と亮の駆るライガーによって消滅させられていく。

何だ？この理不尽な強さは…

自分の力は、魔道に身をやつし多くの犠牲を払って手に入れた力はこんなものなのか？

何故！何故！！何故あ奴の様な俗物にあのような理不尽な強さが備わっている？

ヴィンデルの思考は何故という疑問に彩られているがやがて一つの答えに集約された。

不条理だ

不条理を突きつけられた人間が行う行動は三通り、

拒絶、享受、逃避

これら上記の3通り、そして自分の理想とかけ離れた世界の現実という不条理対してヴィンデルが行ったのは自身の理想を盲信するということだ。

一見、これは拒絶に見えるが逃避に他ならない。

盲信それは哲学的な自殺である。たとえば宗教戦争…これは現実の不条理を許容できない民衆が宗教を盲信し、自身で思考することを捨てた結果引き起こされるものだ。

精神的なよりどころを作りそこに逃げ込んだ…つまりは逃避である。そして、宗教戦争は必ず凄惨な結果に終わる。

暴徒と化した教殉者たちが殺戮をなんの罪の意識もなくひたすらに略奪や殺戮を行うからである。

そして何故そんなことができるのか？

それは、彼らの自己は既に死んでいるからに他ならない。

ツヴァイの身体から血のように赤いエネルギーがあふれ出る…

そして、その中で尚赤く光る額、腹部、腰部の紅玉と瞳そして、それに映える青い発光部品。

『東雲…いや、この場にいるすべての者よ見るがいいっ！！我が力を！』

ツヴァイの！私の！阿修羅の力を…！！』

『何をする気だ…ヴィンデル・マウザー』

『何かヤバ気な雰囲気よね』

鋼鉄の巨人、アルトアイゼン・リーゼのパイロットキョウスケ・ナンプと蝙蝠の様な羽に生物的な形状の装甲の隙間からは植物の蔦の様な白ものが顔をのぞかせる機体、ライン・ヴァイスリッターのパイロットエクセレン・ブラウンングがこれからツヴァイが行う何かを感じ取り怪訝な声を上げる。

『そうかつ…あれを使うのか、ヴィンデルっ！！』

ツヴァイと若干似た形状の機体、ツヴァイのそれと違い黒い騎士をほうふつさせるマントを纏った機体、ヴァイサーガのコックピットでラミア・ラヴレスは知っているが故の言葉を口にする。

『【麒麟・極】を…亮あれは』いい、あの程度ではうろたえるどこ

るか驚愕にも値しない』それはお前が知らないだけであれが発動したら私たちは全滅を免れないぞっ！！』

『ふっ…ラミア、“見くびるな”あの程度…たかが世界と戦う程度の力では俺には遠く及ばない…』

必死に脅威を伝えようとするラミアだが、亮には羽虫が宙を飛んでいる程度の認識しかない。

『貴様は必ず消滅させ、魔道に墮とすっ！！この麒麟・極にてなっ！！』

ヴィンデルが叫ぶと共に先ほどとは比べ物にならない数のツヴァイの軍勢が其々赤い光を纏ってツヴァイから際限なく這い出てくる。それに対し亮は、この世界で初めて自分の本来の力を使うことを決めた。

『生きながら死者となりし愚者よ、魅せてやろう…』

【世界と戦い抜いた力をなっ！！】

亮の心臓より生み出される膨大な世界を改変する力が生み出され、それが疑似神経回路：魔術回路に流しこまれ、神秘をなす為のプロセッサーとして稼働を始める。

ビルトライガーの周りに、亮から溢れだした魔力が渦巻き蠢く。

『何だ?!あれはっ?!』

『マサキい!すごいプラーニヤだなニヤ!』

『マサキが全快でも比べ物にならない量と密度よあれ!』

「……………」
龍と虎の超機人・龍虎王が人間の耳では認識できない唸り声を上げる。

『どうしたの？龍虎王…来る？一体何が？』

『我らよりも強き、混種？…』

「……………」

『我らは所詮アストラル…？機械仕掛けの肉を持って現世に為しているがあれは、世界をゆがめ現れる……？』

『…あれはこの世の理を壊すものなり？あつてはならない…？』

『東雲 亮…奴は一体何者だ？』

仲間たち…いや、この場において亮が為そうと知っていることを知る
“人間は”いない。

現実を歪め、心象風景を具現化する禁術

【固有結界】

個人の心象風景を具現化するが故に作り出される世界は千差万別、呪文も一つとして同じモノなど存在しはしない。

それどころか、同一人物でも異なる呪文・世界へと変化するのだから。

そして固有結界が術者の心象風景を表すなら、その呪文は術者の在り方を表す

我は龍にして流

(遙か古より受け継ぎし蒼き龍の血)

我は流を司りし龍

(四神において、四海において最強)

我は時の齒車、裁きの刃

(この力故に帰るべき場所を喪う)

我が触れしモノは死すら死せん

(幾つもの戦いがあり屍の塔を積み上げる)

我はI O N、久遠の果てより来る虚無

(故に我を知る者多なりど、俺を知る者無)

『現れいでよっ！我が魂よ！もう一つの俺よ！』

龍神召喚っ！！S H E F I R O T H (流出せし神性)

空間が決壊した。

続く

第十九話

時流を司るモノ（後書き）

ちよこつと解説こつな

武「なあなあ聞いてもいいか？」

亮「何だ？禿外道？」

武「何か前よりもヒドイっ！！禿げてないし外道でもないよ俺？！」

亮「変態は外道だ（人として）」

武「俺はロリコンじゃないっ！！」

亮「証拠があるのに言い逃れできると思うなよ？」

武「証拠ってなんだよ！！」

スッ

マブラヴ ALTERED FABLE

亮「これだ」

武「ぬおおおおおおおっ！！記憶の関連付けがあああああっ！！」

亮「12歳は立派な犯罪だぞ？」

武「違う、俺は小さい子が好きなんじゃなくて霞が好きだっただけなんだ！！」

亮「それは俺に言うのではなく、後ろの貴様を裁く者に言うがいい」

武「え？それどういう…」武「…其の声は、まさか…」

冥夜「」外道断つべし」が家訓なのでな許すがよい」

武「冥夜…「私もいるよ？」…純夏サンデスカ…何故、シャドウをなさっているのでしょうか？」

？？「武、逝こ？」

”がしっ！”

武「あ、彩峰？！」

慧「うん、だから…逝くよ」

武「字が違う気がするんだが……」

純夏「うん？合っているよね？みんな？」

夕呼「そうね」

まりも「間違っていないわね」

球瀬「そうですね〜へんな武さん」

榊「まあ白銀が変なのは今に始まった事じゃないし（変態だし）」

美琴「あははは、武〜あんな小さい子に手を出すなんて変態だったんだね〜」

武「ちよつと待て、あ、引きずっていかないで！物陰に引きこまないで！！ちよ、それだけは、それだけは……ぎやつああああああ」

” 球イイイン ”

” ドガつ！ギユシヤつ！バキつ！！ ”

” ズシヤアアアつ！！ ”

” マグナム！、続いてファントム！！ ”

” ゲム・ギル・ガンゴー・グフォー！！ウィ ターつ！！！！ ”

” 光になれええつえ！！ ”

” 昇華つ！！ ”

亮「……………少々お待ちください。」

亮「肉塊が転がっている……」

肉塊「誰が肉塊だつ！！」

亮「修正、ウエルダンだった」

武「誰がこんがりジューシーだつ！！」

亮「で、何が聞きたかったんだ？」

武「話聞けよっ！！」

亮「拒否」

武「てえめええええ」

亮「ささつと言え、時間がねえよ！（――）」

武「お前のせいだろう！！」

亮「自業自得だ変態」

武「グサっ！…もういい、もういいよ…じゃあ聞くけど固有時制御：存在夢幻化って何だよ反則じゃねえか」

亮「そうでもない魔法に分類されるが、あれは使用者の力量と相手の力量によつて効果が変わるんだ。」

武「どうということだ？」

亮「世界は分岐し続けているこれはわかるな？」

武「ああ、確立分岐って奴だろ？」

亮「そうだ、あの分身は全部今から分岐する世界の俺を今の時間の実像として映し出したものだ。キシユリア・ゼルレッチが横ならさしずめ俺は縦の次元屈折（正しくは時間屈折）だ。」

武「それがどうして力量によつて左右されるんだ？」

亮「武道家ってのは強ければ強いほど、攻撃の手を多く持つていてそれは実行されるかもしれない動作だ。俺のスキル影視には揺らぎとして視認できるのだが、その揺らぎ其々の対応をとつた俺を呼び出すわけだから、【相手の揺らぎ×自身の揺らぎ】の数だけ分身を呼び出せるってわけだ。」

武「よくわからないな…」

亮「つまりツヴァイがABCに分裂したとする。なら俺はこの後A・B・Cのいずれかにもしくは面攻撃を仕掛けるなどいろいろ選択肢が現れる、だから其々を選んだ数瞬先の未来の像を今の時間軸に映

し出したただけだ。…わかったか？」

武「うゝゝん微妙なところもあるけどなんとなくわかった」

亮「気にするな最初から期待していない」

武「なんか、だんだん楽しくなってきたよ！！人間、殺意を何所まで抱けるか限界に挑戦している感じだ」

亮「なら、ギネスに乗るように頑張れ」

”プチっ”

第二十話 つながる世界（前書き）

SHEFIROTHはセフィロスと読みます

龍神の外観は真・龍王機の生物verです。

章とタイトル（og）を変更しました。

第二十話 つながる世界

ザ、ザ、ザ、ザ、ザ

ハハハハハハハハハハハハハハハ

この力を使うたびにあの疎ましい音が脳裏に響き背中が疼く

地面を打ち付ける雨の音と男の高笑いする声

うるさい、うるさい、うるさい

消えていく心音を必死に聞き取ろうとするが男の笑い声でよく聞き取れない

うるさい、うるさい、うるさい

ハハハハハハハハハハハハハハハ

何がそんなにおかしい？

ハハハハハハハハハハハハハハハ

何がそんなに楽しい？

ハハハハハハハハハハハハハハハ

何がそんなに嬉しい？

ハハハハハハハハハハハハハハハ

何がそんなにおかしいっ！！！！

衛宮^{えみや} 矩賢^{のりかた} ああっ！！！！

第二十話 つながる世界

我は龍にして流

(遙か古より受け継ぎし蒼き龍の血)

我は流を司りし龍

(四神において、四海において最強)

我は時の歯車、裁きの刃

(この力故に帰るべき場所を喪う)

我が触れしモノは死すら死せん

(幾つもの戦いがあり屍の塔を積み上げる)

我はION、久遠の果てより来る虚無

(故に我を知る者多なりど、俺を知る者無)

亮が語るは神を呼び出す呪文にして聖句

それは、かつて復讐鬼が永劫の名を冠する黒い機械仕掛けの神を呼び出す際に用いたそれと酷似する。

それは彼らの在り方が似ているからだろうか？

それとも単純に力に対する認識が同じだからだろうか？

それとも……東雲 亮自体が永劫と同じ存在、超絶暴力の化身だという証なのだろうか……

そしてそれは現実を浸食して顕れる。

っ！！！！

星間領域を振るわせる咆哮をあげる。人間の聴覚の可聴領域を物理的にも、精神的にも大きく超えた咆哮。

それはホワイトスター全体を文字通り震撼させる。

その存在は神なる獣、神なる龍、

名がその存在を表すが故に流出した神性の名を持つ蒼き龍

それは、蒼い金属光沢を放つ鱗と甲殻に覆われた長い体躯に、金色

の眼を光らせて
水晶の様な角が天を突き、その背には龍の翼が蒼い炎の羽を携え広げられている。

G u u u u u u u u u u ……………

その龍は低く唸り声を上げながら、亮をその鎧たる機人ヒルトライガーを中心にとぐるを巻く。

『ぬううう………一体何なのかは知らぬが障害となるのなら打ち砕くのみっ！！リミット解除っ！！』

血のように紅い光の鎧を纏ったツヴァイザーゲインの軍勢が鳳仙花の種のように一気に弾け、ライガーと蒼龍に殺到する。

『吼え、薙ぎ払えセフィロス……！』

っ！！！！！

“バサアアアア”

蒼龍：セフィロスが再び咆哮を挙げ、その蒼い炎の羽を羽ばたかせる。

其の咆哮は物理的な衝撃波となってツヴァイの軍勢をその場にとどまらせるのみならず吹き飛ばす。

さらに

“ブウウウウン”

翼によって巻き起こされた蒼い炎の羽が混じった突風がツヴァイの

軍勢を襲う。

『いかんっ！！！！』

ヴィンデルは本能的に命の危機を感じツヴァイの前方に複数体の分身を集める。

いくら実体を持つのが分身体は虚像であり投射装置であるツヴァイ本体が破壊されれば必然と消滅し、ヴィンデルの野望と命は消え去る事となる。

“ボオっ！！”

突風に煽られ蒼い炎の羽が付着した場所から次々と発火し、ツヴァイの分身体は其々蒼い炎の火たるまになり焼滅していく。

ヴィンデルのツヴァイザーゲインは燃え盛る分身体の背後で身代わりにした分身体の灰をその身に浴びながら未だにかろうじて健在であった。

『ふむ、存外にしぶといな…』

『う、うぬうう……！！ この私の理想が！ 闘争の世界が！ 貴様のような俗物などに！！』

ツヴァイザーゲインのコックピットは相対した化け物（理解不能）に対し体の底から際限なく湧き出てくる恐怖と震えを憤怒という感情で抑え込み怒声を発する。

自身が世界と渡り合うために作り出した力を象徴する無敵の軍団…

のはずだったものが、ほんの戯れに過ぎない一撃で焼滅させた存在

そしてそれを操る自身にとって唯の裏切り者にしか過ぎない存在に向かってあらん限り憤怒をぶつける。………そうすることでもはや自己を維持することなど出来なくなっていたからである。

『東雲っ！！貴様何だその化け物はっ！！一体なんなのだっ！！』

東雲はヴィンデルのうろたえを嘲笑うかのようにライガーのコックピットで全周囲モニターに映しだされているツヴァイザーゲインを見据えながら微笑（嘲笑）を浮かべる。

『ふ、さっき説明してやっただろう？【我が魂、もう一つの俺】とな？』

『それが何だというのだっ！！』

搭乗機を相棒、愛用している武具を己の魂と称することがある。ヴィンデルは亮にとって眼前の化け物はそういう類の存在なのだと思っていたそう思ったかった。

しかし、事實は違う文字通りの意味なのだから。

『だから言っているだろう？こいつは俺だよ、俺の人外としての純粹な力が俺の精神世界においてふさわしい形をとったもの…そして俺が行ったのは精神世界にいるこいつを現実を書き換えて具現化しただけさ…』

固有結界、それは現実を術者の心象風景で書き換えるという現実を
浸食する魔術：

そして亮は心象風景の内にある自分の力を象徴するモノのみを現実
世界に映し出したのだ。

『そ、そのようなこと出来る筈がないっ！！』

『出来ているからこいつはこうして存在している…現実を直視し受
け入れる』

まあ無理な話だな。戦いは人に任せて自分は安全なところから指
示を飛ばすだけ、大層な理想をいくら掲げようともやっていること
は卑劣漢とやら変わらん、むしろ悪行をなしている事を自覚して
いない分尚の事^{ナルシスト}質が悪い。そんな自己陶醉野郎に現実を受け入れる
器などあるわけはなかったか。』

『おのれえっ！！東雲っ！一度ならず二度までも侮じよ』

『黙れよ負け犬』

亮の嘲りの言葉に対し“侮辱するな”と続こうとするがそれを遮る
亮の言葉がヴィンデルの感情の制御弁を完全に粉碎する。

ヴィンデルにとって元の世界における惨敗はそれこそ汚点であり、
煮え湯を飲まされるを通りこしてそれこそ、塩酸いや、マグマを飲
まされるに値するほどの屈辱であった。

…にも関わらず、自身を裏切り理想を無意味と断じた怨敵の言葉は

を増していきやがて臨界点に達する。

『龍神業雷槍っ！！！！／極いいいいいいっ！！！！』

純粹な破壊の二つの塊が今まさに衝突する。

せっかくの扉を壊してはダメですの

その刹那の間にエクセレン・ブロウニングによくにた声が響く

蒼龍の放った稲妻は蒼龍が携えている炎とは全く別の炎、
蒼龍の炎が神性を帯びているのに対してそれは全くの逆、まるで人
魂の様な暗い昏い光を放つ蒼い炎の肉を持つ赤と白い骨でできた鬼
の骸骨

50メートルの巨体を持つ特機よりもさらに巨大な其れが突如ツヴ
アイザーゲインの前に現れ、その異形の口から蒼い光線を吐き出す。

“バアアアアアン！！！”

蒼龍の雷は骸骨の吐き出した光線と拮抗し、逃げ場を失ったエネルギー

ギーが爆発する。

“ 餓しっ！！”

『 何っ！！！！』

ヴェンデル・マウザーのツヴァイザーゲインが後ろに現れたもう一体の骸骨に羽交い絞めにされる。

『 邪魔だっ！！』

“ ギュイン、ガシンっ！ガシンっ！”

ツヴァイザーゲインはその怪力を用いて髑體を振り払おうとするも骸骨はびくともしない。

さらにホワイトスターの内壁から、ライン・ヴァイスリッターの間接から顔をのぞかせているのと同じ鳶の様な血管の様なモノが生え、ツヴァイザ ゲインへと伸びツヴァイを拘束する。

ツヴァイは空中で髑體の十字架に磔にされるような形となる。

そして同時にホワイトスターの内壁から無数のアインストの異形の軍勢が生い出てくる。

『 何だこいつら湧いて出てきやがった！！』

『イルム、これは苦戦しそうだな…』

『リン！こいつは小回りがきかねえ頼んだぞ！！』

『ふ、任せておけ！』

飛行能力を持たない地上部隊でアシユセイバーの軍勢と戦っていた青い超闘士グルンガストが鎧を動かす鳶の様なアインストを踏みつぶし薙ぎ払い、紅いヒュツケバインMark-？ことヒュツケバインEXが右手の紅い輝きの非実体剣ロツシユセイバーで紅いコアを貫き、左手に保持しているブーステッドライフルで遠方のアインストのコアを射抜き仕留める。

コアを破壊されたアインストはまるで陽光を浴びた吸血鬼のように白い灰となって崩れ消える。

が、床一面から湧き出てくるアインストのあまりの数に他の機体ともども足止めされて身動きが取れなくなりシャドウミラーの部隊はアインストの海の中で孤立し各個撃破されていった。

そして、その中の一種アルトアイゼンに酷似したアインストの一団がその姿を現す。

「……………」

アインストアイゼンの一団は其々宙に礫になっているツヴァイを見据え、スラストの様な場所から炎を吹き出しそれを推力とし身動きの取れないツヴァイへと迫る。

『！！奴ら門を開く気がっ！！ヨグソトースの門をっ！！セファイ

口スっ!!』

その様子を見ていた亮が目的を察し蒼龍をけしかける。

「……………」

しかし、亮の眼前に先程蒼龍の一撃を相殺した骸骨が立ちふさがる。

『くっ!!…いつもこいつも…そんなに他人ひとの居場所を壊したいのかっ!!…!』

亮の叫びは何に対してのなのかは亮自身しか知らない。

『何っ!!…ヨグソトース…アギユイエウスの扉の事かっ!!…!』

ゲシュペンストRVのギリアムが亮の声に反応しツヴァイへ迫ろうとする。

「……………」

まるで鳥類と人間の骨格を混ぜ合わせた骸骨の様なアインスト【アインストノックヘン】が大量に立ちふさがる。

『邪魔だっ!!…リ プスラッシャー』

RVの各部から小さい部品が分離し空中に躍り出、相互に組み合わせさり円環を形作

りまるでねずみ花火ように節目から超高温の火花を噴出し高速回転

しまるで手裏剣のように放物線を横に描きながら移動し、進路上の
アインストを溶断する。

しかし、アインストアイゼンはツヴァイへと向かうのを阻止しようと
する二人を嘲笑うかのようにツヴァイへと突貫する。

“ガキンっ！！！”

『何をやる気だ?!』

“ダンっ！！ダンっ！！ダンっ！！ダンっ！！”

そしてツヴァイザーゲインの四肢にその左腕手の杭がツヴァイの堅
牢な装甲に突き刺さり、鳳仙花の実と同じ仕組みの内部機関によっ
てその杭がツヴァイザーゲインに深々と撃ち込まれる。

『くっ！何だ?!何だというのだ?!操作を受け付けん!!』

撃ち込まれた杭からはまるで植物の根の様なものが地面に根を下ろ
すかのようにツヴァイを浸食していく。例えるならヤドリギの種で
ある。血管が浮き出るような、蚯蚓腫れにも似たものがツヴァイの
全身の表面に現る。

『“種子”を撃ち込ませてもらいましたの…扉はわたくしどもが
もらいますの…』

ホワイトスターの内壁がまるで血管の弁のように開き中から紅い鬼武者と表現するのがふさわしい紅いアインストが姿を現す。

『ペルゼインだと!?!』

『お、お譲ちゃん!?!』

キョウスケとエクセレンが鬼武者の姿を確認し驚きの声を上げる。ホワイトスター突入戦の折、ペルゼインとそれを駆る少女は確かに撃破されたはずなのだから…

『責様らかつ!!私を!ツヴァイをどうするつもりだつ!!!』

ヴィンデルはこの奇怪な現象を操っているであろうアインスト・ペルゼイン・リヒカイトに叫ぶ、通常ならアインストが応えるわけもないが…

『必要なのは扉だけ…不純物は不要ですの…!』

“ビュウイン”

ペルゼインからエクセレンによく似た声が響き鬼の面で作られたような腕の鬼の口にまるで啜えているように巨大な骸骨と同じ昏青の炎が宿り伸びる。

そしてその炎で出来た棒状のものにペルゼインは右手の掌を掛け、中から一本の野太刀を引き抜く。

『私が不純物だと?!きさつ』

『サクサク、サクサク…逝きますの…』
“ズシャッ！！”

ヴィンデルが言い切る事は叶わずペルゼインの右手に携えられた野太刀【鬼蓮華】がツヴァイの顔面に突き刺さりツヴァイの後頭部を突き抜けて顕れる刀身の切っ先が姿を現しツヴァイの瞳から光が消失する。

そしてー

“ シャアアンっ………… ”

ゆっくりと刀が引き抜かれる。特機型のコックピットは頭部に存在しており引き抜かれた鬼蓮華の刀身に紅く付着した液体がヴィンデルがどうなったのかを示唆する。

『 門を開いてどうする気だ？アインスト・アルフィミィよ 』

先ほどとは違い落ち着いた口調で問いかける亮

『 新しい宇宙が始まりますの…何者も乱すことのない静寂、そしてその宇宙には新たな生命……完全な生命が命を芽吹かせますの…… 』

『 しかし、門を開くには鍵が必要だ門だけ手に入れたところで無意

味だぞ?』

『扉を開けるのに必ずしも鍵が必要というわけではありませんの…
鍵がかかっているなら新しい鍵を用意するか…鍵の留め金を壊して
しまえばいいだけですの…』

『何だとっ?!』

アルフィミイの言葉を聞いたギリラムが声を上げる。

ツヴァイザーゲインは言葉を交わしている間にもメキメキと音を立
て変形、いや変貌し作りかえられていく…

黒い青だった装甲はペルゼインやアルトと同じ深紅に変色人工筋肉
は緑色の蔦のような繊維でできたものへと変化し、巨大だった体軀
は尚巨大となり、肩部の装甲が肥大化し、右手には杭打ち機の様
なものが前腕部に形成され、腹部のコアは金色に変色し肥大化し、装
甲は生物の甲殻に酷似し質感を持ったモノへ、頭部はつきでるよう
な角が生え変化する。

まるでペルゼインとアルトアイゼンを掛け合わせたような姿に変貌
してしまいもはやツヴァイの名残は鬼の頭部の様な形状の胴体部の
甲殻しか残っていないかった。

その姿は奇しくも異世界においてアクセル・アルマーが打倒したア
インストールしたアルトアイゼンと同じ姿であった。

『さしずめアルトアイゼン・リヒカイトオーガといったところか…』

亮がその形状からとりあえずの名称を思いつきで口にする

“ シュルルル…バシッ！”

そしてペルゼインとリヒカイトオーガが相互に鳶の様なもので相互につなぎ接続される。

『 本当はあなた方に扉を開いてもらい空間をつなぐつもりでしたが……』

ペルゼイン「アルフィミイが亮をライガーそれに蒼龍に視線を向ける。」

『 せっかくの扉を壊されてはかないませんので少々強引にやらせていただきますの……』

“ ブウン”

ペルゼインの各部の蒼いコアが輝きを灯すと共にリヒカイトオーガの各部のコアにも輝きが灯される。

『 動力・コア接続…転移フィールド展開…システムXN起動…ファイナルコード……』

アポロン

“ 語彙オオオオオっ！！ ”

ペルゼインとリヒカイトオーガの周りに極彩色の光として視認できるほどの超高密度の時空干渉エネルギーが渦巻き圧力を発するそれは世界に穴を開けてしまうほどのエネルギーだ。

一同はあまりの圧力にペルゼインに近づくこともできない。

『この時を待ち望んでいましたの…扉が開くこの瞬間を…新たな宇宙への…扉が開くこの瞬間を』

続く

第二十話 つながる世界（後書き）

武をいじめようこゝな

訂正：ちよこつと解説こゝな

武「何だこのタイトル!!」

亮「訂正されてるからいいだろ」

武「訂正されてても不安何だが?!」

亮「うるさいぞヘタレ・オブ・ヘタレ？」

武「何だよそれ!!誰がヘタレだ!!」

亮「世間一般での貴様の評価だ」

武「不当だっ!!」

亮「そんなどうでもいいことは置いといて」

武「ひどっ!!」

武「で、固有結界って何？」

亮「固有結界は解説によると

空想具現化の亜種。

術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、内部の世界そのものを変えてしまう結界のこと。

空想具現化と異なるのは、結界の形を思うままに決定できないこと。結界の内部の世界の法則は術者の心象世界を体現するが、術者のただ一つの内面を形にするだけであり、それを術者の意志によって手を加えて自由にはできない。ゆえに、空想具現化のように思うままに世界を変えることは出来ず、必ずワンパターンになる。

ただし、空想具現化が変化させることのできるのは自身（精霊）と自然物のみという制限があり、自然から離れてしまった、例えば人工物を変化させることはできないが、固有結界にはその制限はない。

本来は悪魔が持つ異界常識であるが、長い時間を掛けて『固有結界』を形成する魔術が確立され、人間も一部のトップカテゴリーが使用可能となっている。

魔法に最も近い魔術とされ、魔術協会では禁呪のカテゴリーに入り、魔術師たちにとっては最大級の奥義であり、魔術の到達点のひとつとも言われる。

また、精霊種が作ったものでもない限り、顕現した心象風景という「異世界」には世界からの修正が働く。現在の世界を（一部だが）壊しているため、抑止力による排斥対象となるわけである。

このため、維持には莫大な魔力を要し、大魔術師でも数分、二十七祖クラスの死徒でも数時間しか維持することはできない。

一方で、「持つて生まれた肉体と外界との遮断」は概念的に最も無理がないことを利用し、結界の範囲を自らの体内に限定するという手法をとることで、長時間の展開も可能である。（キリツグの固有時制御）

なんだが…俺の固有結界自体は何の効果もないほんとに唯、異世界

を作り上げるだけのものなんだ」

武「じゃあ何だあの龍は？」

亮「それこそ、エミヤの固有結界から派生した剣製のように固有結界の中から引き取り出したもので、俺の固有結界は固有方式ではなく内包するモノに真価がある変種なんだ。」

武「へえ…で、エミヤって誰？」

亮「fateやるか漫画見る」

武「じゃあ次はヒュッケバインEXってなに？」

亮「第一次スパロボ で条件を満たせば出てくる機体でヒュッケバイン008Lを改良した機体で外観はヒュッケバインmrk-?とほぼ同じだが出力はけた違いだ、あとフレームがHフレームとか微妙な差が多いな。」

武「じゃあエクスバインとは違うのか？開発コードが同じだけど」

亮「エクスバインはヒュッケバイン009、ブラックホールエンジンを搭載しなかった本来こうなるはずだったヒュッケバインをベースに改造した機体で動力が通常のプラズマジェネレーターになっているな」

og1でイルムが一時期乗ってた緑色のヒュッケバインがベースになって開発された機体だ。」

武「なるほど…」

亮「ところでお前収入のいいところ就職しないと大変じゃないのか？」

武「なんで？」

亮「この前作者が「主人公は女難におぼれてこそ輝く」とか言ってたからおそらくハーレム地獄に落とされるぞ」

武「作者殺してくる……」

亮「無理だと思いが頑張れ」

追加

アインスト化したツヴァイザーゲインはアニメ版OG2ジ・インスペクターのナハトが変化した姿と同じです

第二十一話（前書き）

サブタイトル思いつかなかった…

今回声優ネタが少しあります

第二十一話

『ここは…固有結界…いや、少し違う…』

リヒカイトオーガから発せられる極彩色の時空干涉エネルギーがホワイトスターを包み込むと同時にそこに居たモノたちは時空の壁を超え異界へと転移させられていた。

外の風景がホワイトスターの内壁から赤く澄みかかっている不可思議な空間へと変わっており、ストーンサークルや何かわからないが結晶体の様なモノが浮遊していた。

『ぐっ…！』

そしてその異常な宇宙の中に浮かぶ複数の機械仕掛けの人型の内の一体…ビルトライガーの胸部に納められたコックピットの中で東雲亮はうめき声を上げ、

『ガ……！』

吐血した。

同時にライガーのすぐ近くに居る蒼龍セフィロスも苦痛を訴えるように蠢く

『固有結界が…セフィロスが…浸食される…』

パイロットスーツのヘルメット内部に血漿を浮かばせながら亮は今、セフィロスに起きている現象を感じ取る。

セフィロスは亮の魂の内に潜む人外の力の結晶であるが故にセフィロスは亮そのものといっても過言ではなくセフィロスが浸食されるということは亮の魂が浸食されるという事である。

『もどれ…セフィロス！』

苦痛により息絶え絶えになりながらも言霊により固有結界を解除し、セフィロスを現実から消し去る。

セフィロスは赤い宇宙が絡みつき浸食され掛けていたが亮が固有結界を解除したことによりその姿を霞のようにかき消し何とか事なきを終え、精神世界で再び眠りに就く。

『くそつ！魔術回路の大半が損傷したか……！！
まさか…あいつの同類が後ろに控えていたとはな……』

人外の超回復力によりある程度ダメージから回復しつつ亮は確信を持つ。

ヘルメット内部に浮かんでいた血漿は異物を排除する機構によって既に取り除かれている。

『浸食固有結界を持つ 死徒27祖が第五位：O R T…^{オルト}…』

第二十一話

『なら…新しい命とやらを拝ませてもらおうか…
ただし、俺たちは命を賭ける……!!』

キョウスケとエクセレンこの二人から始まったともいえるアインス
トとの最期の闘いはキョウスケの宣言によって幕を開ける。

『その勝負に乗ってこられるならばだっ…!!』

『いくぞ！リユースっ！！』
『わかったよ！マサキっ！！』

“ キュイイイイイイインっ！！ ”

サイバスターの背中の三枚の羽がワンセットになった翼から緑色のフレアが吹き荒れサイバスターに異常ともいえる速度をもたらす。

『行くよっ！ヴァルシオーネっ！！』

“ キュインっ！！ ”

人と寸分変わらない頭部を持ち桃色の髪をなびかせた白銀の鎧を纏った戦乙女ヴァルシオーネの周囲に青と赤の二つの光球が生まれ周囲を舞い、やがてヴァルシオーネの掌に収まる。

『マサキ！あとは任せたよ！！』

赤と青の二重螺旋がヴァルシオーネからサイバスターに向け放たれる。

“ ガシンっ！！ ”

高速で移動し、尚加速しているサイバスターは白銀の戦禽サイバードへと姿を変える。

そして、後ろから追いついてきた赤と青の二重螺旋、クロスマッシャーがサイバスターを包み込む。

『行くぜえ！！アカシツクっ！！スマツシャ

っ！！！！』

ABRAHADABRAアっ!!

サイバスタの手から稲妻が放たれレジセイアの頭部を吹き飛ばす。いや、そのみにとどまらず死雷の洗礼はレジセイアの軀を伝響し各部を吹き飛ばし、アインストの心臓部であるコアもひび割れはじけ飛ぶ。

『オラア!!どんどんきやがれってんだ!!』

『T・LINKナっコウ

っ!!』

白を基調としたトリコロールカラの機体R-1がライガーと同じ翡翠色の拳をレジセイアの一体に叩き込む。

「.....」

しかし、R-1の拳はコアに輝を入れただけで打ち壊すには僅かに届かなかった。

『くそっ!!届かなかったか!!』

十分だ！！

青い重装甲の両肩に片方五つの、合計十に及ぶ砲門を背負う機体R-2のパイロット、ライディースの声がR-1を駆るリュウセイの耳に届く。

『ライっ！！任せた！！』

『了解したっ！！ハイゾルランチャーっ！！シュっ！！！！』

R-1が飛びのき、すぐそこを超高温の収束ビームが通り過ぎひび割れたコアを今度こそ貫く。

異形の軍勢は次々と鋼の軍勢に打ち破られていく。其の光景はまさに機神大戦と呼ぶにふさわしい。

そしてそれは、東雲 亮という異邦人も同様であった。

『魔術が使えないからといって！！』

亮の魔術回路の内、八割近くが先の浸食の影響で発狂^{エラー}しており、人の十倍近い大きさのPTに作用させられるほどの魔術を使うことは今の亮には不可能となっていた。

「……………」

そんな状態の亮を乗せたライガーの前に存在する3体のアインストシリーズの混合物^{キマイラ}アインストレジセイアがの内一体が左腕の植物の蔦のような触手を伸ばし、ライガーを捕らえ押しつぶそうとする。

『なめるなあー!!』

“ガシっ!!”

迫りくる触手の群れを回避し両手で伸びきった触手群を束にして掴み、

『ライガーのパワー…並ではないぞっ!!』

ぬうおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!

特機サイズの巨軀を誇るレジセイアをハンマー投げの要領で振り廻し、もう一体のレジセイアに投げつける。

“ひゅううん…!!ガキンっ!!”

ぶち当たった二体のレジセイアがお互いの破片をばら撒きながらよるける

その隙にライガーは両手の掌を合わせまるで右手で弓を携え手で矢を放つような型を取る。

『破を念じて…』 “キュイイイイインっ!!”

両の掌の間に翡翠色の光こと念動フィールドが収束し、

『刃と成れっ！！』

光の西洋剣を形作る。

そしてそれを

『念動破碎っ！！』

光の剣を矢の如く撃ち出した。

念で作られた刃は空間を引き裂きながら二体のレジセイアに迫り、

“ザシユっ！！”

二体のレジセイアをコアごと串刺しにする。

『念動破碎っ！！』

光の剣を解き放った左手の未だに宿る光を亮の声とともに握りつぶす。

“ドオオオオオオっ！！”

すると、レジセイアを貫いていた剣が連動して爆発し、それに貫かれていたレジセイアも内側からの爆発には到底耐えられるはずもなく

むしろ、強固な外殻により爆発はレジセイアの内部を蹂躞する。

残った一体のレジセイアとライガーの間には念動フィールドとレジセイアの破片が立ち込め視界を一時的にふさぐがライガーにとって意味をなさない。

T-LINKシステムにより拡大された思念が敵を捕捉しているからだ。

『Gテリトリー収束!!』

ライガーの周囲に十三の黒い光球が形成される。

『ン・カインの間よ…我が念に従い……往けっ!!』

ライガーがまるで亮の意志を体現するかのように腕を振るいそれに応え黒い光球…ライガーに内蔵されたグラビコンシステムとT-LINKシステムの二つによって生み出された超高密度の重力弾、それは亮の思念に従い縦横無尽の軌道を描き残ったレジセイアに迫る。

「……………」

レジセイアは鎧で覆われた左手の巨大な口の様な掌から幾つかの光球を放ち迎撃するが…

黒と燈色の光球が衝突するその瞬間、黒い光球がレジセイアの放った光球を飲み込む。

そして

“バシユウウ

んっ!!”

黒い光球から白い極太のレーザーが放たれ、レジセイアの甲殻は一瞬で蒸発しはまるで虫食いのように穴だらけにされる。

「……………」

しかし尚その活動を停止しないレジセイアにライガーはシシオウブレードを抜き放ち、翡翠色の炎の羽を羽ばたかせ迫る。

『刃よ音を奏でろっ！

飛奏

『

亮の空間までを切り裂く究極に研ぎ澄まされた剣術をトレースし、足りない部分をT-LINKシステムで補った斬撃が

いま、放たれる。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!

『!!

“シュイン…ピっ!!”

ライガーは緑色のカメラアイの残光を残しながらレジセイアを切り抜ける。

“ヒュン”

『刹那の間に紡がれる鋼の音色』

ライガーが左手に携えるシシオウブレードを一振りし、纏っていた翡翠色の霧を振り払い、

“ シュイイインっ！！……カキンッ！！ ”

『それは貴様の鎮魂歌だ^{レクイエム}』

右手の三連装フォトンガトリングの銃身達の中央のホルダーに固定された鞘に納める。

それと同時にレジセイアには斜めに切裂が走り体がそれに沿ってずれ、

肉体が崩壊し崩れ落ちた。

『完全となる前につぶすっ！！』

三体のレジセイアを倒したライガーは巨大なストーンサークルの中央を見つめ、そこに向かって飛翔する。

しかし

『まずは貴様が相手というわけか……』

「……………」

異形と化したツヴァイザーゲイン、アルトアイゼンの特徴を残すリヒカイトオーガが立ちふさがる。

『往くぞつ!!!』

ライガーが翔ける。

「……………」 “ダダダダダダダダつ

!!!”

赤い宇宙に佇む赤い剛鬼は左腕の五つの銃口をライガーに向け次々と鋼弾を吐き出す。

ライガーはそれを回避し右手の三つのガトリングキャノンに向け、牽制として光の弾丸を撃ちながらその機動力を使い左回りに背後をとる。

『これで!!! プラズマバクラー、セツト!!!』

左腕の三つの突起物、プラズマステークに青白い稲妻が宿る。

『ジェット・マグ…なっ?!』

後ろをとり、必殺の一撃を撃ち込むべく踏み込むライガーにリヒカイトオーガの間接から無数の緑の鳶の様な触手が伸び襲いかかって来たため亮は、軌道を直角に無理やり捻じ曲げ回避しようとするが、完全に回避しきれず右腕に鳶が絡みつく!

『くっ! ジェット・マグナムっ!!!』

“バシユウン!!!”

絡みついた鳶に左腕のエネルギーを蓄えていたプラズマバクラー

を叩き込む、

鳶ははじけ飛びライガーは自由の身と成り、リヒカイトオーガに視線を戻すと、

“ブオオオオオオオン！！”

胴体の装甲が展開し、肥大化した金色のコアにエネルギーが収束し超高密度・超高温のエネルギーが蓄えられていた。

『修正スル……！！』

『何だと?!』

それが、ライガーに向かって発射される。亮はリヒカイトオーガが突然言葉を発したことに驚き回避が遅れてしまう。

『くっ!!』

“バシユウウウウン”

とっさに左に飛びのくも、右腕、右翼が光に飲み込まれ、右足のかすった装甲が溶解し、光の中でひしゃげ、消し飛んだ。

『チー!ジャケットトアーマー・ハーフパージ』

亮は即座にビルトライガーの脚部の損傷したジャケットアーマーを切り離す。

“ドオオン!!”

脚部装甲に内蔵されていた姿勢制御用スラスタが爆発する。

爆発がライガーを照らし、損傷部位からは内部機関が顔をのぞかし、機体のオイルなどの液体が血液のように流れ出ており、紫電がまき散らされている。

まさに満身創痍、しかし

『貴様八完全ナ生命体ト八程遠イ不純物のカタマリ、此処デ排除スル。』

シノノメ…リヨウっ！！！！』

“ガキンっ！！！”

リヒカイトオーガの右前腕部に弾丸が装填され杭が打ち出される準備が整い、さらにその杭ごと拳がツヴァイのときと同じく青い光に包まれ、振りかぶられる。

『ヴェインデルを制御CPUとしてそのまま使ったか！』

外道が過ぎるぞ！アインストおっ！！！！！！』

ライガーも左腕を引き絞り、青い雷を杭として打ち出すべく装填しさらにその拳を黒い障壁Gテリトリで覆いさらに念動フィールドで覆う。

トリニティ・マグナムっ！！！！！！

ホルツシュラオペ……！！

“ブウン！” “ブウン！！！”

二体の拳が驚異的な潜在力を秘め放たれる！！

ポテンシャルエネルギー

“ドオオオオオンっ！！！！”

“ガガガガッガガガガ！！！！！！”

二つの拳と杭打ち機が真正面からぶつかり合う。

双方の圧力により結晶薄膜化現象が引き起こされ、物質化したフィールド同士が火花をい散らすが…

“ジジジ…バチっ！バチっ！！…ドオオオオオン！！！”

ライガーが剥き出しの肩と背の断面から火を噴き、機体の出力が一気に“墮ちる”。

“パリン”

拳を覆っていた光の膜がまるで硝子が割れるように簡単に碎け散る。

“グサっ！！” “ジジッ…ジジッ……”

ライガーの左拳が正面から杭に貫かれ、碎けた装甲の隙間からは紫電をまき散らされている。

『碎ケロ…！！』

リヒカイトオーガの右腕のシリンダーの撃鉄が落ちる。

“ダアアアアアンっ！！”

リヒカイトオーガの右腕に装填された弾丸が爆発し巨大な杭を打ち

込ませる。

“バキンっ！！！”

『グウウウウっ！！』

あまりの衝撃に、ライガーの左腕が肩口から千切れ飛び、千切れた左腕の内の前腕部はあまりの衝撃にはじけ飛んでなくなっている。

『キサマハ…消滅サセルノミ……！！！！』

“剛おおおおおオンっ！！！！！”

爪が生え、まるで悪魔のように変貌した剛腕が振るわれる。

“ダアアアアアンっ！！！！！”

片翼とスラスターを損傷し満足に動けないライガーはその剛腕を受けられるしかなく、羽虫のようにはたき落とされる。

『アウ……………ウっ……………』

ライガーのコックピットでは無数の放電と小爆発が起き、それを顔面に受け亮のヘルメットのバイザーが割れる。

“フウウウウウんっ！！！”

ライガーは止まることなく無く飛ばされ続ける。

“ボオン！！ボオン！！……………ドオオオオオオオンっ！！！”

宙に浮かぶ結晶体を幾つかぶち抜き、深紅の鎧の破片をばら撒きながら吹っ飛ばされたライガーは一つの結晶体にめり込みようやく止まる。

ライガーの双眸から光が消失し、主機関が安全装置のためか停止する。

そもそも、ライガーの損傷状態からいつて爆発しなかったただけ僥倖といえるかもしれない。

全身に輝が走り、両腕それに右足、右翼が欠落しかろうじて残っている左足もかろうじてつながっている程度…亮の思念で作られた翼も消滅している。

まさにガラクタといってもいい鋼の軀をさらすビルトライガ

“ガシンっ！！”

そんなライガーをリヒカイトオーガは足で踏みつける。

『……………』

リヒカイトオーガの行動に亮は気絶したのか何の反応も示さない。

“ぎゅいいいイン” “ガキンっ！！”

リヒカイトオーガが右腕を振り上げ、装填する。

『静寂ヲ乱ス、存在…消滅サセルっ！！』

キリストを殺害した槍の如くリヒカイトオーガの右腕が突き出される。

やらせはしないっ！！！！！

“ズシャっ！！”

ライガーにリヒカイトオーガの右腕が突き刺さる寸前、黒い風が奔りその右腕が切り落とされた。

『そいつにはまだ返していない借りがあるのでな死んでもらっては困るっ！！』

リヒカイトオーガはその黒い風に向き直る。

『W17……』

ヴィンデルの知識を有しているからかりヒカイトオーガはの剣闘士を駆る戦士のかつての名前を口にする。
切り落とされた右腕の傷口から蔦が生え、絡み合い融合し分裂し再び右腕を形成する。

『違う、私はもはやW17ではないっ！！ラミア・ラヴレスだっ！！！！』

『静寂ヲ乱スモノハ…排除スル』

かつての兄弟機同士が異界の宇宙で交差する。

「くっ…」

瞳を開くとそこには重力など存在しないが故に宙を漂う幾つかの紅い水球と、割れたヘルメットのバイザーそしてビルトライガーのコックピットの内壁が視界に入った。

ヘルメットを脱ぎ棄てる。

押し込まれていた髪が解き放たれ、元々のストレートではあるがやや癖のある髪が自然体の髪型に戻る。

ライガーのコックピット内壁…全周囲モニターは死んでおり暗闇を移すだけ…

機関は停止しておりどうすることもできない。

光の消え去ったコントロールパネルに顔を映す亮の脳裏にある思考がよぎる

このまま息絶えればどうなるのだろうか？

異界で生を受け、帰るべき場所を喪った俺の魂は死すれば何所へ帰るのだろうか？

もしかしたらこの世界の星が宇宙^{ウチウ}に還るのかもしれない。

それとも未来永劫に肉体を喪い彷徨い続けるのだろうか……この極寒の真空の海を

それは、きつと今以上に寒い……

寒いのは嫌……だな……

ならば、

「俺は……ここで終わらない、終わりたくない。」「
焦点の合わない瞳で亮は呟く

「お前はどうか？ライガー……まだ戦えるか……？」

ライガーは応えない

「いや………戦いたいか？」

“ウウン”

“ヴヴヴヴヴヴヴヴ……”

亮の問いかけに答えるように応えるようにライガーの機関が再起動しその振動が響きモニターに光がとまり、その光がコックピットを照らし出す。

B・Hエンジン再起動………特異点露出

………カバラ・システム起動

「そうか…ライガーお前を我が半身、我が同胞はいつかいつとして認めよう」
（そういえばお前も大切なモノを喪ったのだったな…おれは還るべき場所を、お前は比翼を…）

本来二体一对で運用されるはずのこの機体の方割れは永遠に喪われている。

ライガーが亮に応えたのは倒れたパートナーの分まで戦いたいという思いからかもしれない。

亮は額を拭う、未だに流れ出ていた紅い血が擦れパイロットスーツの腕の部分を汚す。

しかし、腕の影から現れた瞳には光が宿り強い意志をうかがわせる。

高密度の靈幽体アストラル反ヲ応機体内部に確認

同調アクセス

星間湾曲………神性顕現

神体投影開始

「俺の力、俺の魂、俺の心…総て受け取れ！」

亮の瞳は魔眼でありながら神の証である金色に変色しその瞳孔は祖先のモノと同じように縦に割れる。

そして聖約の言葉が紡がれる。

「血こそ我が存在

我が魔力の証明
ちから
我が魔術の源泉

聖約の言葉は一つ」

モード 形態・デウスマキナ 鬼械神
『獣・神・変』

その瞬間、すべてが崩壊し再構成……否、神化した。

第二十一話（後書き）

おまけ

クスハ「亮さん」

亮「？何だ、クスハ・ミズハかどうした？」

クスハ「いえ、さっきの戦闘で少しご無理をなさったようなので…」

”ス…”

クスハ「栄養ドリンクを作ってみました！よかったら飲んでください」

亮「あ、ああ…（何だこの液体は！？銀色？緑？紫？一体何を使ったらCGみたいな彩色になるんだ！？）」

クスハ「どうぞー！」

亮「ありがとう…（ええい！ままよー！）」

ーごくっ、ごくっ、ごくっー

プハア…

クスハ「どうですか？今回は口当たりが良くなるようにマンゴー入れてみました！ー！」

亮「…一つ聞く、味見はしたのか…？」

クスハ「いえ、してませんよ？」

亮「人に何かを食してもらうときは自分で味見してからがルールだぞ…」

ーバタンー

ラミア「亮！！だれか！！誰か！！衛生兵を！！！！」

クスハ「？私此処に居ますよ？」

番外編その一

「人生は眼が覚めているだけでたのしいのだ」

風が吹き抜ける草原で虹色に輝く宝石の剣を携えた老人は俺に言った。

「だからこそ、真の意味で俺の眼を覚まさせるモノを。俺の心の還る場所を俺は探しているのだ」

黒衣の赤眼の老人に俺は返す。

「そうか、求める貴様が見つけれずに求めていなかった我が姫が見つけるとは皮肉もいいところだな、“4番目”」

「何が言いたい“二番目”」

「何、簡単な事だ“殺人貴”と“月の姫”を救ってはやれんか？貴様が求めてやまないモノを見つけた矢先にそれを奪われた彼らを」

黒衣の老人キシユア・ゼルレッチは己の偽善に従い訴える

「……俺がこの世界に希望を見出さなくなった時、門を開け。それが条件だ」

「ほう、貴様が嫌いな魔術師の様な事を言うのだな“魔法使い”？
ゼルレッチの赤い瞳と俺の龍の瞳の視線が交差し、同時に一際強い風が草原を撫で、草原の草をさらっていく。

「等価交換は世界の基本だ、それを破れば碌でもないことになる。ただ一つ等価交換が成り立たない現象、人はそれを“奇跡”と呼ぶ」

番外編 月と時 前編

最も大切なモノとの別れ、だけどそれははじめから決まっていたことで結果自体は来て当たり前
結果は同じでも過程が違った。

唯、ただ違ったのは……

俺は、あいつを愛してしまった。

吸血鬼の姫である彼女は血を吸うことで眠りを避けることができる
だから俺は

俺の血を吸えアルクエド

けどあいつは…

ううん、吸わない

なんでだ？吸えない理由でもあるのか？

うん、好きだから吸わない

今にも泣き出しそうな笑顔であいつは言った。

そして、

お願いこれからもずっとそのままです。

“笑って生きて行ってね”

そう言って

ばいばい

そう言い残し、霞のように消えていった

蒼い夜空を見上げ、月を見つめる

「あのバカ女…」

何度目かわからないがあいつのことを指す言葉を口にす

「お前がいないと素直に笑えないだろうが…そんな事もわからないのか…」

遠野 志貴は旅に出ることを決めた。

そして幾たびかの月日が巡った。

「いい加減あきらめたらどうだ代行者？」

真つ赤な夕日によって赤く染められていた大地

そこには周囲一帯に肉塊が散らばり、死臭と硝煙、それえに血の臭いが立ち込める丘の上で

その顔を横から消えかけている夕陽に照らされながら十の武器を地面に突き刺しその一つ漆黒のハルバートに背を預けながら黒のロングコートに身を包んだ青年、東雲 亮は肩や手に十字架と羽の様なペイントのある青い瞳の日本人の面影がある地面に這い蹲る少女に問いかける。

「…誰が！」

「女を殺すのは趣味じゃないのでな、諦めて二度と来ないでほしいものなんだが。」

「どの口で言っているのですか！」

周囲に散らばる肉片は元々、聖堂教会と魔術協会の混成部隊であり、亮を討伐するために集められた者たちだ。その構成メンバーは魔術協会からは執行者、聖堂教会からは代行者という超実戦派の実力者

のみが集められていた聖堂教会きつての実力者であるいましがた亮が問いかけた少女“弓のシエル”を投入していることから本気具合が見て取れる。

「あなたが殺した者達に女だけがいないわけないでしょう!!」

男女、協会と教会関係なく何のためらいなく葬った亮に対してシエルは叫ぶ

「俺に殺意を向けるのが悪い、殺そうとするのなら殺されることを覚悟しなければならぬ正義の味方気取りで人を殺そうとするモノに遠慮する義理も義務もない」

“ガキン”

「あなたの様な強大な力を、魔王の力を持ちながら星に縛られることもなく、さらには魔法さえ己がモノとする異形の血をひくあなたは間違いなく世界のバランスを壊す存在です」

両手持ちのピルバンカーを地面に突き刺しそれを杖にして立ち上がるシエル。

「だから、俺の存在を否定するのか？オマエタチ聖堂教会は、モルセルトだから、モルセルト実験材料として俺を欲するのかモルセルト魔術協会は」

亮はハルバートを引き抜き、その切っ先と視線ををシエルに向ける。その瞳は赤と金のオッドアイへと変化している。

「あなたには同情出来るところも多分にあります。実験体として殺され続けた私には魔術協会、聖堂教会この二つが正しいなんてことは絶対がないという事は理解できません。しかし、元とは言え吸血鬼であった私が生きていくには組織の狗になるしかないんですよ」

パイルバンカーを構え、瞳を閉じ息を整え自分に向けられる刃を感じながら眼を再び見開き。巨大な杭打ち機“第七聖典”の切っ先を亮に向ける。

「そうか…ならば心安らかに逝け!!」

亮がハルバートを持ち、シエルに向かい一気に駆けだし、

「はあああああああつ!!!」

シエルも魔術で身体能力を強化し亮に洗礼の杭を打ち込むべく駆け出し、二人が接触する瞬間僅かに先立ち第七聖典が突き出される

「ふっ…」

亮は不敵な笑みを浮かべ、ハルバートの切っ先を地面に突き刺し棒高跳びの要領でシエルを飛び越える。

「!!!!!!」

洗礼の杭は、無様にも虚空を突き刺すにとどまる。

“タンっ…”

シエルの背後に軽やかに亮は着地し、その着地の動作さえも利用しハルバートを放つ構えをとっていた。

「力を抜け…苦しいと感じるも間もなく逝けるぞ…」

シエルの背後から声をかけ、反射で振り向きつつあるあるあるシエルにハルバートの斧刃を振るう。

“フユン”

ハルバートの大質量を乗せた刃が空気を引き裂きながらシエルの首元へと迫る。

やらせない

“シャンっ!!”

明かりと暗闇、昼と夜、その境目の刻限に一つの閃光が奔る。

「へえ……」

「え……」

亮は驚嘆、シエルは驚愕の声を其々上げる。

亮が振るったハルバートのそれが柄の中から先がすっかりとなくなっていたのだから…

“フュン、フュン、フュン…ガキンっ！！！”

少し遅れて、ハルバートの消えていた先が回転しつつ宙を舞いながら落下し地面に突き刺さる。

そして、亮とシエルの視線がそれをなした人物の背へと向けられる。

「うそ…何故あなたが此処に?!」

「知り合いか…」

その人物を眼に納めシエルはありえない者を見る。

「遠野君!!!!」

遠野志貴はゆつくりと振り返りながら口を開く。

「先輩、少し聞きたいことがあるんだけどいいですか?」

一つの閃光を走らせた張本人は宝石のように青く輝く瞳で、右手に握るナイフをきらめかせながら、まるで学校で宿題の応えを聞くかのような気軽さで語りかける。

「…とその前に…」

が、しかし亮を瞳に納めた瞬間、志貴の空気が変わる。

まるで底なしの暗闇で蠢く何かの様な、絶対零度の氷の刃の様な負の無限大の殺意が纏われる。

「ソイツヲ殺サナイト……」

「殺人衝動か？それに地雷王を一度とはいえ殺すとは何かしら厄介な能力も持っているようだな」

志貴に特大の殺意を浴びせられながらも何も変わらない様子で亮は手元と少し離れたところに突き刺さった漆黒のハルバート“地雷王”を交互に見やる。

漆黒のハルバートはまるで吸血鬼の末路のように黒い灰と成って崩れ風にさらわれていつている。

「来たれ！二つの風刃よ……」

丘に突き刺さっていた残りの武具の内、二振りの刃がひとりで引き抜かれる。

それは亮の呼び声に応えるように宙を舞いながら亮のもとへと移動する。

“ガシっ！チャキンっ！！”

二振りの刃、直刃の日本刀を両の手に掴む。

白い半透明の結晶体クリスタルの様な刀身の刃、“颯”を右手に、

漆黒の刀身を持つ禍々しい空気を漂わせる刃、“疾風”を左手に
そして無為の構えで、遠野志貴を見つめる。

「俺に殺意の刃を向けたモノには殺意の刃を反すのみ」

青い瞳の殺人貴は右手のナイフを逆手に持ちかえ眼前に構える。

さあ…殺し愛おうノ殺シテヤロウ

第二十二話 闘う牙（前書き）

少し声優ネタに走りました…

第二十二話 闘う牙

我は再び見た、海から一匹の獣が海の中から上ってくるのを。

これには十本の角と七つの頭があつた。

その角には十本の王冠があり、頭には神を冒瀆するさまざまな名があつた。

我が見まう獣は、豹に似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようにで。

竜はこの獣に自分の力と大きな権威とを与えた。

ヨハネの黙示録より抜粋

第二十二話 闘う牙

『はあああああー!』

『……………』

赤と青、異形と機械仕掛けの剣闘士が交差する。

黒と青の赤い瞳の剣闘士“ヴァイサーガ”は小回りを生かし切りつける。

“ガキンっ！”

しかし、ヴァイサーガの西洋剣はリヒカイトオーガの堅牢な装甲にただ火花を散らすだけで刃が通らない。

『くっ、堅い……』

『修正スル……』

リヒカイトオーガの右腕が振るわれる。

『くっ！！』

急速後退し何とかその一撃を回避する。

ツヴァイザーゲインがインスト化したリヒカイトオーガはその外見がアルトに酷似しているためかパワーがけた違いに上昇しており、特機型のヴァイサーガとただでは済まない事が容易に想像できた。

『データ収集…やはりパワーはけた違い、捕まればひとたまりもない……か』

“ガキンっ…ガガガガガガ”

リヒカイトオーガの左腕の5連装マシンキャノンを模した銃口から次々と鋼弾が吐き出される。

『回避行動…』

迫りくる弾丸の軍勢を冷静に回避する。

『奴の装甲の堅牢性を考慮すると光刃閃でも難しいか…』

リヒカイトオーガの遠距離武装は腹部の高出力ビーム・腕部のチェインガンのみであり想像できる他の武装は元の機体から予想するとせいぜい邪龍麟を使ってくることぐらいである。

しかし、ツヴァイザーゲインのその最大の能力、本体と全く同じ能力を持った実体ある幻影を生み出す能力を考慮すると、一撃で確実に仕留めることが求められる。

つまり、リヒカイトオーガに分身を使われたら亮を防衛する意味においても、撃破する攻撃においても絶望的な戦力差となる。

つまり相手が切り札を切る前に倒すことが求められる。

(しかし、ヴァイサーガは高速軌道と剣による連続攻撃が前提、一撃必殺の攻撃か…)

“ピピっ!”

コックピットのコントロールパネルを操作し、リヒカイトオーガの予測数値の入力と装甲を突破できる武装の検索を掛けていると

一件該当あり

と表示されていた。

画面が移り変わり、その技の詳細データが表示される。

『これなら……！（東雲が使っていた時のデータを消去しないでおいたのが吉と出たか）』

その技は東雲が、本来ヴァイサーガの標準登録されていたモノとは別に構築した技であり、かつて特機の中でも重装甲を誇るスレドゲルミルを一時とは言え戦闘不能に陥れたものである。

回避しつつ距離をとったヴァイサーガに対しリヒカイトオーガは腹部の装甲を再び展開しエネルギーを金色のコアに蓄えつつ居た。

『…分の悪い賭け…というわけではないが乗らせてもらおうとしよう…！私も、お前もな……！』

ヴァイサーガは、剣を鞘に納め居合切りの様な構えを取る。

『静寂ヲ乱スモノ…修正スル……！』

腹部のエネルギーが臨界点に達しようとする。

（推奨BGM：極めて近く、限りなく遠い世界に）

『よく狙え……！アインスト……！！』

あくまでラミアの主観ではあるがヴァイサーガがその背のマントに

隠れたスラスタから炎を吹き出し急上昇する。

そして反転、急降下する

リヒカイトオーガはヴァイサーガの方へと向き直る。

『消工去レ……!!』

腹部から極太の灼熱のビームが放たれ、それは途中で浮かぶヴァイサーガをラミアを含む総てのモノを蒸発させるべく迫る。

『此処だ！リミット解除っ!!』

“バシユウウウンっ!!”

ビームとヴァイサーガが接触する瞬間、二次加速で微妙に軌道を変え、同時にヴァイサーガの各部のエネルギーアンプが著しく発光する。

超高温のビームはヴァイサーガの機体をほんの一瞬の間赤く反射させ、僅かに巻き込んだマントの一部を蒸発させる。

『ヴァイサーガ！風を！音を！そして光を超えろっ!!!!』

二次加速により超加速したヴァイサーガ がリヒカイトオーガに一気に肉薄する。

『奥義……!!!!』

ヴァイサーガが左手に携える鞘から突き出る柄に手を掛ける。

そして、鞘の刀身を固定する留め具が勢いよく弾ける。

紫電っ!!!一閃!!!

炎のように揺らめく超高密度高温のエネルギーを纏った刃が鞘から弾き出され、その勢いそのまま振り下ろされる。

それはリヒカイトオーガの甲殻をバターのようにとかしながら胴体にコアに届くほど深く深く食い込む。

『これで…』

“ガシンっ!!!”

リヒカイトオーガがコアを破壊されたはずのリヒカイトオーガが活動を停止せずヴァイサーガを掴む。

『そんなバカな?!?!』

コアを破壊されたアインストの末路は決まっている故にラミアは一瞬気を抜いてしまったのだ。

“ガバっ!!!”

『取ツタぞ…!!』

『!!!!!!』

両肩の甲殻が展開し巨大な口の様な形状のモノが開き、犬歯と微妙に糸を引く粘膜の向こうにある無数の発射口アルトアイゼンのクレ

イモアに相当する武装を眼にし、ラミアは息をのむ。

今、まさに破壊の鋼弾の嵐、指向性散弾地雷が打ち出されるその瞬間

『誓約の言葉は一つ!』

獣・神・変

亮の声が響くと共にライガーが居た場所に赤い宇宙を貫く青い光の柱が現れた…

348

その場に居た総ての者達が光の柱を見上げる。

『一体何が…?』

『何だあのエネルギー量は?!』

『強い、とても強い念を感じる…相対すれば膝をついてしまうほどの…』

皆、其々感じ取るモノ、計器が示すモノを思わず口にしてしまう。

その汚い手を離せよ、外道

突如柱を唯一見上げれない人物の、亮の声が響く。

“バシュンっ！！！”

“ヒュンヒュンヒュン……”

そして、光の柱の中から次々と雨のようには巨大な青白い光の矢が飛来し、リヒカイトオーガの全身にヴァイサーガを避けて突き刺さる。

“ドオオオオオオオオオんっ！！！”

リヒカイトオーガに突き刺さった矢が次々と爆発し、その巨体を吹き飛ばし、ヴァイサーガを掴んでいた腕を砕く。

『！！今だっ！！！！！！』

ヴァイサーガはその隙を見逃さず、一気に剣を引き抜き離脱し、光の柱を見やる。

光の柱は徐々に細くなり、光量も少なくなつてやがて消滅した。

だが柱の中央部分にはPTT機分の大きさの蒼い炎の塊が佇んでいた。

“バサアア……”

蒼い炎の塊…否、蒼い炎の羽を持つ龍の翼が広げられる。

“バサアア……”

T-LINKフェザーの緑色のフレアで出来た羽ではなく、蒼龍のモノと同じ蒼い炎の翼

それに、蒼い炎の翼に身を包んでいたそれはもはや野生の獣神ビルト ライガーではなく別のものであった。

それは、機械仕掛けの人型でありながら龍の神の力を宿した龍人のようであった。

真っ赤なジャケットアーマーはメタリックブルーの輝きを放つ龍種のそれを連想させる甲殻に変化しており、腕・肩・胸の装甲はまるで龍の頭と一体化した様な形状をしており、さらには尾が生え、その先端にも龍の頭が在った。

そして機体本体の甲殻から除ける機械の装甲には幾つものラインが浮かび上がっては消滅を繰り返し、何かしらが絶え間なく循環していた。

『ビルトライガー…なのか…?』
誰かは知らないが疑問の声を上げる。

『違う、もはやこいつは野生の獣神ビルト ライガーにあらず!』

ビルトライガーであったものはその瞼を開き、金色の龍眼を開き名乗りを上げる。

『纏うは機神!!振るうは絶大!!』

リユオウムジン
瀧王武神

トウガ
鬪牙！！！！！！！

― 此処に現臨！！！！―

まさに龍の神の位階にたどり着いた瀧人を”瀧神人”をかたどった
機神が顕現した。

第二十二話 闘う牙（後書き）

ふと思った

シュウ・シラカワ ジェイド・カーティス

この二人入れ替えても違和感がねえ！！（中の人一緒だけど）

主人公設定 (ネタバレ含み)

東雲 亮

人生に不幸は付き物だ

囚われた絶望の淵、だが俺は諦めない。それが叶うことのない希望だとしても

静寂の海の中ただ一人凍えているのはひどく寒い…寒いんだ…
悲しみは数え切れなくともその向こうできつと出会える

本名 清龍せいりゅう 守亮もじあき

元々巨大な霊脈が存在する京の土地の守護一族、青龍・白虎・朱雀・玄武の4氏族の青龍の跡取りとして生まれる。

この4氏族は血が混じる事を恐れ互いに婚姻を結ぶ事はなかったが青龍以外の血族の血が時とともに薄れ白虎・玄武は完全に混血としての力を喪ってしまい朱雀も次の代には遺伝しないとされていたが唯一問題なく力の継承が行なわれている青龍(といっても完全ではなく青龍の力を限定的にしか受け継いでいない)の血を入れることでこの問題を何とかしようとしたいわば実験体(ただし両親の夫婦中は良好で今回の話がなかったら家を出ようともしていたそう)

結果、朱雀と青龍の血が混じった亮は青龍の元祖の力である流れるモノを操る能力を発現するがそれは第4魔法とを含める力であり第4魔法を目指す衛宮の魔術師に目をつけられ襲撃を受ける事となる。

襲撃により青龍の一族は亮を残し死亡するも、自身の怪物を取り込

み完全な力を発揮できるようになった亮にその場で襲撃犯は殺害される。

しかし、主犯であるキリツグの父、衛宮 矩賢は右腕を喪いつつも逃走に成功してしまう。

その後行くあてもなく放浪していたところ退魔師の東雲夫妻に拾われ東雲 亮として生きる事となる。

（この時、霊術を習得）

それから10数年後、魔物の討伐に向かった先で正体不明の怪異と遭遇。

自身の体内へ封印尚この戦闘の際東雲夫妻が死亡、息を引き取る際に霊能力者が自身の生命力と霊力を極限まで練り合わせ強靱な精神力で生成した武器、霊^{れいき}祁を受け取る（冒険王ビートのサイガと同じようなモノ）

この後、一族の復讐の旅に出る。

旅の過程でさらに3つの霊祁と4つの魔物を体内に封印さらに魔物を霊祁と対をなす魔剣として使う術を生み出す。

そして衛宮 矩賢の潜伏場所を見つけたが代行者と執行者が介入しており亮自身も二つの組織に確認され討伐・封印対象として指定されてしまい放浪の旅を続けることとなる（衛宮の魔術に関する研究結果から魔術を習得、独自発展させていく）

復讐対象を喪った亮は自身の心の還る場所を求め始める（ガンダム SEED アストレイのナイト・マティガンと同じだが女性に対してそのうち縁があれば出会えると考えており消極的）

しかし、時とともに世捨て人的な思考へと変化していく

さらに数十年後第6次聖杯戦争に参加、大聖杯破壊後に魔剣を破壊放棄しゼルレッチの手によって並行世界にわたる。

存在や能力はベターマンのソルニウムに一番近い

身長175cm（軋間紅摩と同じ）

体重78kg（上記の人物より少し軽い）

年齢肉体年齢 20 実年齢 67歳

属性、流、中立、調和

起源 理解

起源 理解

好きなもの：花鳥風月

能力

筋力B+

魔力B

耐久D

幸運C

俊敏A

スキル

真眼A

：あらゆるものの本質を見ぬく洞察力もはや魔眼の領域

浄眼A　：七夜の一族モノより能力が安定しており魂と其処から生み出される生命力を視認できる。

生命力が形を変えたモノである魔力も見える。

剣術A：研ぎ澄まされたその剣はあらゆるものを切り裂く

魔術C　：オーソドックスな魔術を習得、

【強化】【解析】【分解】【変化】【混合】【投影】【再構成】を極めている。

霊術A　：魔を払う霊力を使った業、霊力とは精神エネルギーのこと

リミピッドチャンネルB：星と対話する能力、同じ能力を保有している者同士でも会話できる（念動力Lv6）

影視A　：情報認識、理解能力を極限まで極めた能力、第三者視点をも用いて戦うことが出来る。また、相手の次の攻撃全てを揺らぎとして視認できる。御神の神速のワンランク上の技能

料理A　：うまい

龍魂覚醒　：受け継いだ龍の血を目覚めさせ能力を大幅に上げるスキル

蒼き王：人の中立としての極限

獣神変　：人外の力を表面化させて第二形態への変身を行う。生身で軋間紅摩と同等の身体能力があるが所詮魔になりそこなっている彼（未完成の紅赤朱）と獣神変を行った亮（人間と紅赤朱の完全な融合）との間には超えれない壁がある。

その他

龍の血を引いているため龍殺しの概念武装にめちゃくちゃ弱い（当たらなければどうということはないって言ってぶっ壊した）

禍風・白桜

東雲が製作した二刀一对の日本刀

物質で在りながら霊質をかねそろえ相手の魂に直接攻撃する能力がある（この力を使い吸血鬼の復元呪詛を無視してダメージを与えていた）

といっても単に魂に触れることが出来る刀というだけで実際切れるかどうかは使い手の技量しだい

金の一千倍の価値を誇るレニウムで創られたこの二本は重量が一本20kg近くあり普通では振るところか持つことさえ難しい。

カズサ
月砂

天狐の一種で白い毛並みを持つ、ある土地に縛り付けられていたのをシノノメが解き放ち以来いつしよにいる。白桜に宿り霊質を与えている。好物は稻荷寿司
本当は尻尾が9本ある。

霊祁

破邪剣醒：乙姫

義母から受け継いだ霊祁

青白い破魔属性の弓

破魔の矢を無限に生み出し射る事ができ矢に破魔の属性を付加して打ち出すこともできる。また生み出す矢にはヴァリエーションが幾つかある。

雷刃剣醒：雷慧

義父から受け継いだ靈祁
雷を宿した純白の刀身を持つ野太刀
払の雷の靈祁は最強の退魔師の証、あらゆる魔に絶対的な破壊をも
たらす

炎刃劍醒：紅くれない

炎の力を宿した十字槍
雷慧に次いで力があり大多数の相手を薙ぎ払うにはうってつけ

風刃劍醒：颯はやて

半透明の結晶体クリスタルの刀身を持つ直刀
風の力を宿し幻影・高速移動・空中での姿勢制御のほか鎌鼬など絶
対の攻撃力には欠けるが機能の多さと汎用性はぴか一
しかし、風の属性を濃くあらわしており制御する者が居ないと直ぐ
反転し闇風の属性に変化する。

水刃劍醒：水鏡みかがみ

変幻自在の水の刀身を持つ剣の靈祁
普段は刃として維持するのに効率のいいように刀身を氷に変えて維
持しながら戦い水と氷、それに蒸気を使った戦闘を行う

第二十三話 力の一端（前書き）

次回でogg編は終了です

第二十三話 力の一端

リュウオウムジン
瀧王武神 闘牙

此処に推・参!!!

鋼の肉体と龍神が融合したその超常の存在には意志と魂が宿り、複雑高等な術式と高密度の魔力が絶え間なく循環しコックピットから伸びた魔術回路がまるで神経のように張り巡らされていた。

これもまた一つの機械仕掛けの神：デウスマキナ

鋼の肉体に人の意志と魂を宿し、神の力を行使する模造神

それがデウスマキナ

凄い……全身に力が漲る………！

亮はその力を文字通り全身で感じる。

闘牙は魔術神経がそのまま機体と自分を接続し人機一体を為し、本来グランゾンに搭載されるはずだったブラックホールエンジンが虚数空間より無尽蔵にエネルギーを吸い上げカバラ・プログラムがそのエネルギーを刻一刻と変化する術式を織り交ぜた魔力に変換しまるで生体のような有機的な作用をもたらす。

拳を握りしめると闘牙もこぶしを握り締めその感触を感じる、闘牙の視界が目に映る。

“ギギギギギ…”

周囲のアイNST群がライガー：否、鬪牙に対し攻撃を行う

骨の様なアイNST、アイNSTノックヘンはオフエンハル：両手の爪をミサイルランチャーのように次々と撃ち出す。

空の鎧を動かす植物の様な姿のアイNSTグリートは頭部に当たる空洞から、熱線^{ヒーム}を放つ。

空なのに動く騎士甲冑の様なアイNSTゲミユートはエイストノイギア：腹部の赤く光るコアから無数の光弾を発射する。

龐大な数のアイNST群の破壊の意志、それは360度絶え間なく放たれそれら全てが鬪牙に吸い込まれるように向かっていく。

『無駄だ…』

それ全ては鬪牙を傷つけることはできなかった。

鬪牙の鋼の肉体を覆う不可思議な光の膜に弾かれ霧散する。

それは幾重にも張られた超多重結界、それ打ち破るには同種の存在でなくては不可能

幾たび、撃ち込もうとも撃ちこまれようともしそれは、鬪牙を傷つける総てのモノを遮断する。

“ブウウウンっ!!”

『……………』

“ガシっ!!”

鬪牙は亮は無言でリヒカイトオーガに向き直り、左掌で右前腕部を驚掴みにしてリヒカイトオーガの突貫を止める。

“メキっ!!”

リヒカイトオーガの掴まれた右前腕の甲殻は鬪牙のパワーによりひび割れ、その指が食い込んでいる。

『最初は右腕…だったな…』

右腕でリヒカイトオーガの肩を押さえ

『貰っぞっ!!!!』

“ブチイイイイイっ!!!!!!”

一気に引きちぎった。

『?!?!?!?!?!?!?!?!』

リヒカイトオーガは引きちぎられた腕を押さえながら後退し、引きちぎられた腕の関節からは緑色の蔦が苦痛を訴えるようにのたうちまわっている。

で生えていた。

『ギギギギ…世界ヲ超エル力……』

大剣を携えたりヒカイトオーガは蒼き阿修羅の時と同じように実体を持った虚像を生み出しライガーの時と同じように殺到する。

『そうかならば剣舞と参ろうか

コンタミネーションアクト
混合・解除 - 』

まるで劇の役者の如きふるまいの亮

そして闘牙の両掌に銀色の筋が伸び日本刀の輪郭を形作り、さらにテスラドライブモノとも違う念動フィールドによく似た光、サイバスターが噴き出すモノと同じ…魔力の光がそれを覆い固形化し二振りの日本刀を…

コンバート コンフュート
存在変換・完了っ！！

赤と青まるで対極の刀、霊刀：白桜と禍風を生み出した。
その光景はまるで御伽話のよう

前後から2体のリヒカイトオーガが闘牙に切りかかる。

“ガキンっ！！”

右手の白桜で前の敵、左腕の禍風で後ろの敵の剣撃を防ぐ。
交わる剣同士がその刃から火花を散らしている。

『ギギギ…ガガガ…』

両手の剣を防御に使い身動きの取れないところにさらに二体のリヒカイトオーガが襲いかかってくる。

『数で押し切れると思うなよ?』

旋風刃

闘牙が刃の角度を変えたかと思うと音を置き去りにし、つむじかぜ旋風の様に回転する。

“チャキン…”

音を伝えることのない真空中に刃が鳴る音が鳴り響き刃を振り切った闘牙…

“シュパッ!!!”

そしてその周囲で持っていた大剣如、胴体が上下に泣き別れしているリヒカイトオーガがおりその骸は幽玄の存在で在る事を表すように消える。

だがその周囲にはさらに十数体のリヒカイトオーガが闘牙を包囲している。

『数に頼る戦いなど無粋もいいところだぞ』

“ガキン”、

白桜と禍風の柄を連結する。すると二振りには青白い光に包まれ、その形を変える。

『破邪剣醒』

光が収まり現れたのは弓、創玄にして冷酷
いかなる存在モであろうとそれが魔に類する魔に類する存在モならば弾
効し断罪する無慈悲な執行者

その名は

『・霊弓：乙姫』

未だに仄かに青白い光を放つ弓を右手に携え、弓から生み出された
光の矢を左手で引く、

赤い悪鬼の軍団は鬪牙を亡きものにしようとお胸体部の金色のコアに
エネルギーを蓄えている。

通常、弓や銃で一度に倒せる敵の数は一射につき一体だが、そんな
モノ神の敵対者たる龍神の前では等しく無意味

鬪牙はその破邪の矢を頭上に向け引き絞る。

するとほんのり青白い光を灯している霊弓：乙姫に携えられた矢の
先端に五芒星セーマンが展開する。

『降り注げ星光』

アストラル・レインっ！！！！！！

左手で抑えられていた矢が乙姫によって撃ちだされ、五芒星セーマンを潜り

抜けると同時に無数に枝分かかれし、クラスター爆弾のように破壊の雨となつてリヒカイトオーガの軍勢に降り注ぐ。

『?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

赤い悪鬼の軍勢は次々と破魔の矢に貫かれ、消滅していく。

そんな中、クリスタル結晶体の影に隠れたりヒカイトオーガの本体は虎視眈々と鬪牙の隙を狙っていた。

『ソノ隙…モラッタゾ!』

大規模攻撃の後は必ず隙が生じる。その一瞬の行動硬直を狙いリヒカイトオーガが影から飛び出す。がしかし

“グサッ!!!”

『何ダト…!』

リヒカイトオーガの両手、両肩に4体の鬪牙が其々違う得物を突き刺していた。

右肩を盾に貫く紅い十字槍はその甲殻を溶解させ、蒸発させ、さらには炎の鞭が絡みつきながら

左腕を貫く青白い雷を帯びた純白の刀身の野太刀は傷口を焦がしながら

左足を貫く白い半透明状クリスタルの刀身をもつ直刀が左足全体を擦り傷だらけにしながら

右足を貫く蒼いクリスタルの様な刀身を持つ氷の剣が右足全体を氷漬けにしながら

虚空に紅い悪鬼を磔にしていた。

『イツノ間二…』

『無論、貴様が気づかないうちにだ』

雷慧を持った鬪牙が応え、本体である蒼い龍神人は弓に淡い緑色の剣“念動破碎剣”を備えその切っ先をリヒカイトオーガに向ける。

『ククク…無駄ダ、幾度散口ウトモ我ハ蘇ル、何度デモダ…』

先程コアをヴァイサーガに破壊されたにも関わらず活動を停止しなかったことを言っているのか嘲笑うかのような口調でリヒカイトオーガは音を出す。

『それはどうかな？エミヤ…業を借りるぞ！』

我が骨子は捻じれ狂う…

』

乙姫に携えられた念動破碎剣に青白い光が巻きつき“捻じる”

捻じられた念動破碎剣は捻じった光と共に織り込まれ二重螺旋を描き出す。

『ダカラ無駄ダト』

『そう、腹部のダミーを狙ったところで無意味』

『！！！！！！！』

炎を宿した紅い十字槍を持つ鬪牙が遮る。

『貴様の本体、それは貴様が取りこんだ者が収められている場所』

風の刃、結晶体の刀身を持つ鬪牙が続きを言う

『さらに、眼で確認は済ませてある。』

氷の刃を持つ鬪牙がさらに続く

『つまり貴様の本体は頭だ、つまらんハツタリだったな、

では、滅びを享受しろ!!』

鬪牙の蒼い炎の羽で出来た翼が一際大きくなり周囲に蒼い炎の羽が舞い散る。

螺旋剣

蒼い白く光り続ける破魔の弓から剣が放たれる。

如何に剣であろうとも矢として使われたのならばそれは矢である。

蒼と翡翠、二色の二重螺旋は空間如紅い宇宙を掘削しながらリヒカイトオーガに迫る。

そして

『キサマハ…何者ダ?』

“ドオオオオオオンっ!!”

音を伝える事のない真空の海に静寂さえも吹き飛ばす小型の太陽が生まれた。

『ただの迷子なのかもな…』
闘牙は凄まじいまでの爆風を真正面から受け止めそんな闘牙の内部のコックピットで亮はもはや届くことのない応えを返す。

やがて、爆風が止み頭部が完全に吹き飛びさらに四肢が欠落したツヴァイザーゲインの胴体部が紅い宇宙にひっそりと浮かんでいた。

『さて、いつまで隠れているつもりだ？観察者よ』

亮は紅い宇宙の主に呼びかける。

いつから気付いていた？イレギュラー 異端者

そんな声とともに幾つも浮かぶストーンサークルの中でも一際大きいモノから、音にならない音が響き幾つもの光の柱が起点たる岩塊から立ち上り、サークルの中心で総ての起点から伸びた光が結びつく。

『この世界を認識した時からさ』

『始まる…新たなる鼓動…宇宙の意志が』

『…！…！…！』

アルトアイゼン・リーゼの手に握られたディバインアームとペルゼインの鬼蓮華が火花を散らしながら鏢迫り合いを行っていたが、アルフィミイの発した言葉からキヨウスケは何かしら^{ステップ}が次の段階に移行した事を感じ取る。

『キヨウスケ…来る…!』

アルトの後方に位置するライン・ヴァイスリッターキヨウスケの援護を行うため待機していたエクセレンがその存在を感知する。

『う、うう……!』

新しい…代わる物……でも、その試みは…!』

アインストの精神支配を受けた故かそれとも別の何かかアインストの存在を強く捕らえすぎる彼女にアインストの思念が流入する。

『あなたたちにも…伝わるはず…ですの』

第二十三話 力の一端（後書き）

アイNSTは旧きものという意味です

機体解説（ネタばれあり）

ビルトライガー・闘牙

亮の人外の力がライガーを媒体として具現化・憑依したモノ魂を介して亮の精神とつながっており闘牙は亮のもう一つの軀とも呼べ文字通り人機一体となっている
（00ユニットのササノオと同じ制御法）

武装の一部が使用不能となるが亮の生身での全力戦闘が行えるようになるため攻撃力・戦闘パターン共に大きく上昇する。

コックピットは腹部の龍の口の中でありそれ以外の龍の頭部はコア状のエネルギーアンプを竜の甲殻が覆った構造となっている。

総合戦闘力は上位、鬼機戒に匹敵もしくは上回っており神レベルの強さを誇る

外観はベルクロス（ヒロイック・エイジ）と竜戦士ルシファー（バスタード）をライガーを基調に掛け合わせた感じ

主な武装

ライトニング・スパイク 念動フィールドとプラズマエネルギーを纏った蹴り

念動破砕拳

T・LINKナックル

念動爆砕剣

T・LINKソード

霊祁剣醒

主人公設定参照

龍業秘技

龍族の魔法や能力による技の総称

ブラックホールクラスター グラビコンシステムにより生み出した
ブラックホールを念動フィールドで固定化し発射し相手を飲み込み
消滅させる武装

ン・カインの闇 ブラックホールクラスターの小型版、
念動力で操作可能なほか、ホワイトホール現象で取り込んだものを
レーザーに変換して撃ち出せる。同時に13個撃ち出せる

羽焰

炎の羽を撃ち出し相手を焼滅させる

ガンブレイジング
ーザー

機体各部の龍の眼から放つホーミングレ

第零式 封神昇華呪法兵装 シャイニング・トラペゾヘドロン

究極の対神武装 総ての因果を断ち相手を消し去る神々の禁忌・
通常使用ではこれに貫かれたものは邪心の住まう世界に永遠に封印
されもてあそばれ続ける。

特殊能力

HP回復（大） 時間逆行による自己復元能力

EN回復（大） あらゆる宇宙からエネルギーを蓄えている虚数空
間から引き出されるエネルギーは実質無限

多重防御結界 何十にも張り巡らされた魔術・靈術・科学的結界
ほとんどのダメージを無効化される
毎ターンEN消費中

瞬間移動 時間操作による瞬間移動EN・SPを消費する

SP消費 ターンごとにSPが減っていく

第二四話 かつての最期（前書き）

友人にマブラヴの面影がないって言われた（ある程度自覚してるよ
コン畜生）

第二四話 かつての最期

紅い宇宙に悠然と佇み周囲に雲を纏いその姿を霞ませている凶星。

ドイツ語で【星になった新たな監査者】を意味するシュテルン・ノイレジセイアであり、纏っている雲の様なものはアインストの集団が集まりそう見せているものである。

アインストの総ての起源、最上位存在であるノイレジセイアがホワイトスター…正式名称ネビーームを依り代にしたもので、他のアインスト総ての生みの親であるノイレジセイアとエアロゲイターの生産プラントであったホワイトスターが融合したことでまさしく超巨大な巢として呼べるものである。

直径40キロを超える巨体から生み出され続けるアインストの数は無尽蔵。

クロガネとヒリユウ改の面々は圧倒的な戦力差の元、苦しい戦いを強いられる事となる。

しかし、そこで引くことは許されない…

アインストの目的は人類の存在を抹消することであり、こうして闘っている間にもアインスト空間が彼らの故郷の世界を浸食し続けているため此処での敗北はすなわち人類滅亡を意味しており彼らの守るべきものが失われることを意味しているのだから…

各員に次ぐ！これがアインストとの最終決戦である！

ダイテツ中佐や多くの同胞の死を無駄にしないために、我々は奴らを地球に行かせてはならない！

今もアインストと、戦っている者たちのために、我々は必ず勝利しなければならぬ！

全機、決して諦めるな！そして、あの魔星を撃て！

撃つて、我らの活路を切り開くのだ！！

『貴様らは、存在そのものが癪に障るっ！！』

青い炎の翼を舞い散らせながら鬪牙は次々と迫りくるアインストを両の手に携えた双刀

白桜・禍風で一刀両断の元に切り伏せる。

『不必要だと？存在してはならないだと？』

“ 斬っ！！ ”

“ 斬っ！！ ”

際限なく襲いくるアルフィミイのものとは違うペルゼイン二体の攻撃を回避し次の瞬間には切り捨て、爆炎を引き裂きながら亮が叫ぶ

！！！！

「貴様が決めることではないっ!!!!」

背面のスラスタからテスラドライブ特有の翡翠色の斥力を持った粒子が噴出され、同時に鬪牙の蒼炎の翼がはためき鬪牙が飛び立つ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオっ!!!!」

翡翠色の尾を引く青い流星がアインストの海を切り裂きながら飛翔する。

流星こと鬪牙が通り過ぎた後には無数のアインストの物である切断面が鏡面状の破片が浮遊しているのみ

そして、アインストの海を突き抜けた鬪牙は二振りの刀の柄を連結させる。

炎刃剣醒

一つとなった刀は赤い、紅蓮の炎に包まれその形と存在を変える。

炎槍・紅

炎の中からその猛炎をそのまま形にしたような装飾の十字槍が現れる。

「そんなモノは……」

携えた十字槍に亮の変質した朱雀の力が注ぎ込まれる。

注ぎ込まれた力によって、十字槍の刃を鏢とし赤い宇宙を貫く超大な蒼炎の刀身が形作られる。

それは巨大な鉾にして空を断つ剣

『己のみが決定するものだあ

っ！！！！』

裂帛の気迫とともに赤い宇宙を切り裂きいているように思えるほどの超大な蒼炎大剣が振り下ろされる。

全長数百キロ蒼炎の超高熱原体ピームの刃がアインストの雲を切り裂き蒸発させつつシユテルン・ノイレジセイアに振り下ろされる。

“ガガガっ！！”

凶星の周囲を覆う歪曲フィールドと刀身が接触し、激しい雷音とプラズマをまき散らし、結晶薄膜化現象により本来不可視のバリアーが姿を現す。

ドクン

闘牙の金色の龍の瞳が脈動し、全身の龍の頭かしびの瞳が著しく発行する。それに連動し蒼炎の刀身の熱量密度エネルギーが大きく上昇し、闘牙の刃を握る力も大きくなる。

ピシ

魔星を覆う光の膜に亀裂が奔る。

『又ウオオオオ』

っ！！！！！』

パリンっ

ガラスが砕け散るように歪曲フィールドが割れ、そのまま長大な蒼炎の刀身が魔星の巨体を溶断し切り裂く。

『くっ！！ズレたかつ！！！！』

しかし、フィールドの影響か刀身はシュテルン・ノイレジセイアの中心線からはやや右にずれ蝙蝠の羽のような肩と鳶と鎧の組み合わせだった左腕にそれと球体状の本体の一部ごとを切り落とすにとどまってしまう。

『不純なる存在…』

認めぬ…認めはせぬ…！！』

各員の脳裏にシュテルン・ノイレジセイアの言葉が響き渡る。
右側面の並んだ目玉のような複数のコアが発行し周囲に無数のエネルギーースフィアが形成される。

そして

『 我は修正する…… 』

シュテルン・ノイレジセイアの声とともに無数のエネルギーースフィアが鳳仙花の実のように弾け幾つもの光球が吐き出される。

視界に収まりきらないほど膨大なエネルギースフィア、それがそれぞれ弾け無数の光弾が赤い宇宙に雪崩の如く流れ出るがそのすべてがある一点…

闘牙に360度雨あられと迫りくる。

『亮っ！！』

『東雲っ！！』

『逃げてくださいっ』

シュテルン・ノイレジセイアの標的を悟った面々が悲痛の声を上げる。

闘牙は回避しようにも逃げ場がないため全身の龍の眼から放たれる閃光で撃ち落としていく。

『俺のことは良いっ！今のうちに…バリアが再展開される前に奴をたたけっ！ 霊祁封印 っ！！』

赤い十字槍は青い光に包まれ、次の瞬間には二つに分かれ霊刀：白桜・禍風へと姿を変える。

連続して迫りくる光弾に対し、ガンブレイジングだけでは対応しきれず槍では不利だと悟ったため双刀に切り替えたのだ。

縦横無尽に迫りくる光球を目にも留まらない一瞬にして連続の剣戟で切り捨て行く闘牙、

シュテルン・ノイレジセイアが鬨牙を真つ先に葬ろうと攻撃しているその間にほかの面々特に特機や大規模火力・MAPWを備えた面々が集中攻撃を行うがまるで霧や雲と見えるほど密集しているアインスト自らが盾となることでそのほとんどを防いでしまう。

『各機はドラゴン1の射線上から退避せよ！！これより本艦はシーケンスGに入る！！！！』

赤い龍を模した艦首を持つ航宙母艦 ヒリュウ改の心臓部、大型核融合炉から膨大な電力が生み出されそれが戦艦用の超大容量コンデンサーに蓄積されていく

「エネルギー充填100%を超えます！」

「艦長、発射準備完了です」

ヒリュウ改の龍の頭部を模した艦首が上下に展開し巨大な砲門が露わになる。

「超重力衝撃砲、発射！！！」

艦長であるレフィーナの号令と同時に天翔ける龍の顎門から黒い閃光：指向性を持ち収束された重力波が解き放たれる。

黒い槍は幾つもの爆発をまとい、アインストの異形の軍勢を飲み込みつつ凶星に突き刺さろうとする。

『あがくな…』

選ばれなかった者たちよ………』

重力衝撃砲の黒い閃光はシュテルン・ノイレジセイアの寸前で屈折

拡散させられダメージを与えられなかった。

間に合わなかったのだ。歪曲フィールドが展開されたことで重力衝撃砲は無効化されたのだ。

『分の悪い賭けになるな……』

『テエリヤアア

っ！！』

360度から絶え間なく襲ってくる光弾を切り裂きつつ両肩、両腕の龍の瞳から放たれる閃光が幾つもの光弾を薙ぎ払い、撃ち漏らしたものは自由に動く尾の先の龍頭の眼光が撃ち落とす。

しかし

“ダンっ！！！”

『ぐっ！』

一発の光弾が鬪牙の背に当たり一瞬…鬪牙がよろけるその隙を狙っていたと言わんばかりに次々と鬪牙に雪崩れ込む鬪牙が爆炎に包まれ見えなくなる。

『新しい宇宙の礎となれ……』

シユテルン・ノイレジセイアの頭部が展開し、ミイラのような髑髏のような素顔が露わになり

その眼を爛々と輝かせながら口に凶暴な光を啜えている。

『 報い…そう、これは報いだ 』

闘牙を飲み込んだ爆炎に向けて魔星に生えた亡者の顎門より極太の閃光…あらゆるものを焼切る破壊の光が放たれる。

雷刃剣醒 つ！！！！

爆炎を引き裂いて煙の尾を引きながら蒼炎の翼を携えた龍機神人…
闘牙が左腕に純白の刀身から青白い雷を吐き出している野太刀いかずちを携えて現れる。

『 切り裂くつ！全てをつ！！！！ 』

闘牙は真正面から自身へと向かう閃光の破壊槍に向けて…

絶空断

『 刃アアアアアアアアアアつ！！！！！！ 』

真正面から雷刀…雷慧を振り下ろした。

シユテルン・ノイレジセイアから吐き出されたビームは闘牙の一振りによって真つ二つに裂ける。

『リュウセイ・ダテっ！！！【出口】を狙えっ！！！！』

破壊の光をその刃で切り裂きつつ亮がSRXを駆るリュウセイに向けて叫ぶ。

『出口…そういうことか！行くぞみんな！！』

『了解したっ！！』

『システムコネクト……！マイ、行くわよ！』

『わかった、アヤ……！T LINKツインコンタクト

メタルジェノサイダーモード、起動！！』

R-GUNとSRXのT-LINKシステムが連動し、双方の超物質トロニウムから無限大のエネルギーを抽出する動力機関トロニウムエンジンがその回転数を上げ始め、R-GUNはその名前の如く人型のPTから両肩の長大な砲塔を分離し銃へとその姿を変え、分離した砲塔がドッキングし追加のロングバレルとなる。

巨大なライフルに変形したR-GUNをその手に携える50m超の鋼の巨人SRX

『トロニウム・エンジン、フルドライブ！』

暴走すれば米粒大の大きさでありながら半径50キロを消滅させるトロニウム

だがアヤとマイの同調した思念の元、安定した二つのトロニウムエンジンが100%稼働していることをライデイス・F・ブランシユタインが告げ

『ターゲットロック…誤差修正……！！』

想像を絶するエネルギーがSRXとR・GUNを駆け巡りその銃口に凶暴な光が徐々にその輝きを増していく。

『リュウ、トリガーを預けるわ!』

『おっつ!』

SRXの胴体と頭部に当たるR 1のコックピットに銃型のコントローラーが展開されそれを両手でしっかりと握りしめるリュウセイ。

展開されたターゲットスコープにシュテルン・ノイレジセイアの口、光線の吐き出し口がおさめられ赤く点灯する。

鬪牙に吐き出され切り裂かれていた光線は徐々に細くなっていく。そして、糸のように細くなり消滅する。

『今だっ!!狙い撃て!リュウセイ・ダテっ!!!!』

『狙い撃つぜえええ』

っ!!!!』

亮が叫びリュウセイがそれに応え引き金を引く。

SRXとR・GUN本体のエネルギーを合わせた重金属粒子の超^ヒ高熱^ムが砲身から吐き出される。

純粋な破壊の意思を秘めたビームは歪曲フィールド唯一の穴、攻撃するための穴を潜り抜け、拡張させ重金属粒子の本流が防御フィールドを決壊させる。

シュテルン・ノイレジセイアはSRXのHTBキャノンの光に飲み

込まれる。

『 欠陥品であるはずの人間に…』

『 このような念が…！』

HTBキャノンの光が収まり、中から満身創痍と呼ぶにふさわしいボロボロの溶けかかりほとんど原型をとどめずにまるで溶けた口ウをぶっ掛けたボールのようなシュテルン・ノイレジセイアが現れる。

『 あいつまだっ！…！』

『 我は、終わらぬ…始まりの地の者から…』

『 そんなことはどうでもいいっ！…！』

シュテルン・ノイレジセイアの言葉を遮り亮が叫び、魔星へと飛翔する。

そして鬪牙の周囲に虚空より水が集まり9つの頭を持つ龍を形作る。

ハイドラストリーム
水竜渦動衝

九頭竜は鬪牙を中心に螺旋状に回転し巨大なドリルとなる。

水の回転衝角と化した鬪牙の前に幾つものアインストが立ちほだかる。
ドリル

『貴様らは眼中に無いっ！どけええ』

！！！！』

アインストの軍勢を次々と貫き、攻撃を弾き、闘牙が凶星に突き刺さり掘削しつつ潜り込む。

魔星内部のアインストも隔壁も内壁もアインストも纏めて貫いていく闘牙

やがて、ホワイトスターの中枢部で有った場所…死の十字架の異名を持つジユデッカが眠っていた空間に出る。

祭壇のような場所であったそこは大樹のような形に蔦のようなものが天井と床をつなぎ、それに半ば埋もれるような十字架に貼り付けにされるような形で、アインストすべての生みの親であり統括者であるレジセイアが存在してた。

闘牙は宙に蒼炎の羽を舞い散らせながら金色の瞳でそれを見下ろす。

『いい加減…この茶番は終わらせてもらうぞっ！！^{アゲレッサー}仮想敵よ』

『何を…言っている？』

レジセイアが亮に問いかけそれに対して亮は苦笑を浮かべる。

『わからないか？そうだろうな…輪にのまれているだけの貴様ではな…』

『何？』

『貴様は疑問に思わないのか？エアロゲイター・シャドウミラー・マシセルそして…貴様らアインスト…これほどに世界を滅ぼす要素がそろいながら必ずそれに抗う因子が存在していることに』

『……』

『貴様も終焉を導く因子ではあるが大極へ至る因子ではない…ゆえに滅びとそれに抗う力双方に利用されたのだろう…大いなる終焉を導く因子でありながら阿頼耶かガイアはたまた宇宙そのどれかは知らんが滅びに抗う剣を鍛えるための抑止力を生み出すための仮想敵として…な』

『理解…不能…』

『世界の間を漂っていた俺にこの世界は剣としての役目を押し付けようとしているのだろうが…そんなものに付き合う義理も義務も…そんな心さえ俺は持ち合わせていない。』

『求めているものがなければ旅立つそれだけの事だが…このシステム、T-LINKシステムを手に入れたことで俺はやっと…やっと辿り着ける…』

『お前は…？お・ま・え・は…………？』

『そうだ…辿り着けるのだ…この孤独が苛む寒さが…何処へ行けばいいのかもわからない無明の暗黒が…やっと…やっと終わるのだ…』

『亮の声には疲れ切った老人のような弱弱しさが宿っていた。』

『がそれもすぐに消え去る。』

『我が内に眠りし気高き魂たちよっ!!!』

鬪牙の胸から5つの光る球が現れ、それぞれが武具へと変化する。

青白い幾何学的な弓へ

純白の刀身の野太刀へ

赤い炎のような十字槍へ

クリスタルの刀身を持つ直刀へ

水の刀身を持つ西洋剣へ

変化した武具たちは鬪牙の周囲に浮かぶ。

そして鬪牙がおもむろに右手を掲げる。

『我が意思の元一つと為れっ!!!!!』

全ての武具が一転へと集い辺りが臉を焼く光に包まれる。

霊柩剣醒

『神霊刀…求め続ける理想郷エリュシオンっ!!!!!』

五つの霊柩を自身の魂と精神リリオンで練り合わせ加工し生み出された東雲
亮

唯一無二の武装

それは片刃の身の丈ほどの長大な刀身の片刃大剣

真珠の輝きを放つ刀身は幾何学的な構造に鬪牙と同じく幾つものラ

インが浮かんでは消えを繰り返しそのすべてが、順に闘牙の腕から柄に伝わり柄から刀身に埋め込まれた虹色の幾つもの色が渦巻く宝玉へと伝わり刀身へと伝達している。

それは闘牙を駆け巡るすべてのあらゆる種類の力が伝響している証

『光射す世界に汝ら暗黒住まう場所なし…乾かず餓えず無に還れっ
！！！！』

エリュシオンの宝玉が輝きを増し刀身を奔るラインが加速し虹色に輝きだす。

闘牙はそれを振りかぶる。

クロウ・クルワツハ

刀身が光へと変わり、虹色の剣が内側から魔星を貫くほどに伸びる。それは触れるものすべてを消しさる神殺しの神剣

それが今、振り下ろされる。

『真っ向っ！！唐竹割りっ！！！！』

なぜ…完全な…新しい生命になれなかった……

虹色の刀身に真っ二つにされながらレジセイアが最期の声を上げる。

レジセイアを中心に瞼を焼く白い閃光が辺りを染め上げ、闘牙をホワイトスターごと飲み込んでいく。

『決まっているだろう？命とはなるものではなく生み出すものだからだ』

つまり前提…最初から間違えていた…と
光の海の中で亮はつぶやく…

続く

第二四話 かつての最期（後書き）

長くなりそうなので区切りました

次の転移の話あとマブラヴに戻ります

リュウセイ〓ロツクオン〓アサシン

〓の意味は声優が一緒

だから狙い撃つ

最期のセリフはデモベ+マイトガイン ネタ

クロウ・クルワツハは北欧神話に登場する神殺しの龍神の名前

第二十五話 帰還・旅立ち（前書き）

むっちゃん長いです

第二十五話 帰還・旅立ち

『一発一発が特注品のベアリング弾だ。遠慮せず持つて行け』

アルトアイゼン・リーゼの巨大な肩部装甲が展開し指向性散弾地雷クレイモアが放たれ何体ものアインストを八千の巣にする。

構造的に非常にもろくなったアインストは自身の稼働による振動で崩壊する。

『ハイハイ　おねえさんの熱い　キツスは如何かしらん』

植物のような筋繊維が剥き出しになった印象を受ける悪魔の羽を持つ白い人型

ライン・ヴァイスリッターがその手に持つ槍のように長くまるで吠える獣の様な銃ハウリングランチャ　をアインストに向け引き金を引く。

ピンク色の光の槍がアインストでできた雲を引き裂く

次々とアインストの異形の軍勢を葬っていく鋼の戦士たち

そしてそれをあざ笑うかのごとく見据えている首の生えた魔星

その表面は溶け崩れ、焼け爛れおよそ無事なところはなく攻撃能力どころか防御能力も喪失しているのかたびたびアインストの雲を貫いた攻撃が突き刺さる。

しかし、その巨体ゆえに象が蚊に刺された程度しか聞いていないよ

うである。

『やはりジリ貧か…』

赤き孤狼を駆るキョウスケ・ナンブは苦々しく言葉を口にする。

いくら攻撃しようとも大半の攻撃はアインスト自らが盾となり…いやどこに撃つても途中で必ずアインストの雲に遮られ、抜けたとしても当たったそばから自己修復を行われるのだからたまったものではない。

先ほど大ダメージを与えたSRXも機体冷却とエネルギー充填で今しばらく身動きが取れない。

ヒリユウ改、サイバスターなどのMAPW搭載機体も状況は似たり寄ったり、

『頼みの綱は東雲か…』

SRXがダメージを与えた一瞬の隙に凶星に突入した龍神人を思い浮かべる。

正体不明、年齢不詳、目的不明 怪しい以外の言葉が全く浮かばない人物ではあるが似たような存在はクロガネ・ヒリユウ改には結構いる。

（だがギリム少佐より正体不明の人物などそういるものではない。ましてや、超機人のような力を使用する人間がいようとは思いません。なかつたがな…）

東雲 亮の機体自体はATX自身のものであるアルトアイゼンの後継機ビルトビルガーをカスタムしておりいくらかよくわからんEOT

を組み込んでいるとはいえ、あそこまで非常識な力を自由に引き出せるわけもなくEOTといっても使用されたのはほとんど解析が進みほかの機体にも搭載されているものである。

しかも改造を行ったのは自分も知るカーク・ミハエルである。

（つまりあの異常な現象と力は東雲個人の力というわけだ…信用できない…もともとシャドウミラーからの離反者にして次元漂流者ということらしいが…）

そこまで思考し、あることに気づき自嘲気味に苦笑を漏らす

（ふ、俺とすることが…分の悪い賭けは嫌いじゃないのにいつの間にか安全な橋を渡るうとしていたとはな……あいつに賭けてみるか…勝てば人類の存続、負ければ人類滅亡か悪魔が降臨する…何とも分の悪い賭けだな）

勝率はよくて3分の1

自分ではどうすることもできない、勝つために勝率あげる手段を講じることができない何とも他人任せなギャンブル

『だがっ！！！』

スラスターを吹かし、急激な突進力による殺人的なGを体に受けつつアルトの右腕に備えられた破城杭をペルゼインのコアに突き刺す。

トリガーを引く、撃鉄が落ちシリンダー内の薬莢が爆発し鋼鉄の塊であるバンカーを撃ちだす。

ペルゼインは粉々に砕け散り、その粉塵がアルトに降りかかる

『分の悪い賭けは嫌いじゃない』

粉塵の中でアルトは翡翠色のカメラアイを輝かせる

そして、同時に魔星に生えた首の眉間から虹色の刃が突き出た。

内側から突き出た虹色の刀身が180度反対へと移動しつつ魔星を切り卸していく

『ふ、どうやら賭けには勝てたらしいな』

上半分を裂かれた凶星が白い閃光に包まれ蒸発していく様を見ながら赤い鋼鉄の鎧のコックピットの中でキョウスケはつぶやきながら見つめていた。

なぜ…完全な…新しい…生命になれなかった…
宇宙の…静寂と秩序を……守るために
始まりの地の者から……不純物を…取り除き…新たな…人類…
を…

何故…我は…新しい生命を……人間を…創れなかった……？

魔星は己を焼く光に包まれ凄まじい勢いで蒸発しながら最期の言葉を紡ぐ

理解…不…可能…何故……われ……は…
…な……ぜ

『当たり前よ、新しい命を誕生させる……つてのに女の私しか調べないんだもの
人間なんか出来るわけないじゃない？』

アインストの肉を持つエクセレンは消えていく凶星に対して告げる。

『人にとっては全く当り前のことが……アインストにはかけていたのか』

『あれだけの力を持っていた彼らがそんなことに気付かなかったなんて……』

エクセレンの言葉に対してレーツェルとツグミは驚きを隠せないで

いた。全知を謳っていた存在があまりに当り前のことを見逃していたことに対して

それだけじゃない

『東雲っ?!』

通信機から亮の声が届きラミアが誰よりも早く声を出す、同時に闘牙が赤い宇宙を染め上げ、魔星を焼き尽くす太陽から蒼炎の翼を広げ飛び出す。

龍の甲殻は傷つき罅割れ龍の頭部を模した甲殻が割れその内部の球体状のエネルギーアンプがその姿をさらし、尾も途中でちぎれている。

“パリン”

ガラスや陶器が割れるような感じに闘牙が碎けまるで脱皮するかのようにビルトライガーが傷一つない紅い鎧を輝かせて姿を現し、翡翠色の羽をもつT-LINKフェザーを広げそしてはばたかせて一同の前に躍り出る。

『それだけじゃないとはどういうことだ？東雲』

キョウスケがアルトをライガーに近づけつつ聞く

『あいつは自分を人間に作り替えるつもりだったようだが…観測者が観測対象になり替わるなどできるわけあるまい？もっと言つなら命とは生まれるものであつて創るものではないだろ？』

…さらに言つなら宇宙を塗りつぶしてしまえばそれは修正ではなく再構築だ。静寂の包まれた宇宙だか何だかしらんがその宇宙を壊してしまつては意味がないだろ？』

『つまりは大前提から間違つていたわけか…だから当り前のことも見逃すし方法も間違つたものしか選べなかつた…っというわけか。…遙か太鼓より、地球を監視し続けてきた者たちの最期としては、締まらない話だな』

『そう、【そこ】だキョウスケ・ナンブ
なぜ奴らは今の時期に目覚め間違つた方向へ進んだのか気には
しないか？』

ほんの数十年前であれば人類は手もなく滅びたというのに…な』

『…何が言いたい…
意図的に奴らが狂わされた…とでも言いつつもりか？』

『さてな…それに応えているほど時は残されてはいない
…そうだろ？アインスト・アルフィミイ』

一同の視線が唯一活動を停止していないアルフィミイのペルゼイン・リヒカイトに注がれる。

『はい…私たちも…彼と…同じ…運命を…迎えることになり
ますの……』』

アルフィミイの重々しく放たれた言葉とともに周囲の景色が不自然に歪み罅割れていく

『次元測定値が反転！？いかん、このままでは！』

ギリウムが計器から吐き出される数値を目にし最悪の未来をイメージする

『もう止められない……………。
私たちは……………ここで……………』

途切れた先の言葉を紡ぐことはアルフィミイにはできなかった。

『この世界を作り維持していた奴は消滅した。ゆえに重なった部分…いやこの世界そのものは世界の修正力によって消滅させられる…俺たちごとだ。』

亮がその先を無情にも告げた。

その頃、ヒリユウ改のブリッジではオペレーターたちが機器から吐き出される情報をもとに状況を報告していく。

「ユン、状況は！？」

「周辺より疑似チャレンコフ反応あり！」

次元間連続麺が発生しています！」

副長のシヨーンの顔が難しい表情となり艦長であるレフィーナにこの後に起こる現象を告げる。

「いけませんな……！」

このままでは、我々はこの空間に閉じ込められてしまいますぞ」

「その後は！？」

「時空の捻じれや虚空間に巻き込まれ消滅するのでは……！」

それを聞いたレフィーナはすぐさま指示を飛ばし乗組員たちを鼓舞する。

「各機を直ちに収容！」

その後、Eフィールドを展開してください！生き残るすべを……脱出する術を考え出すのです！諦めてはなりません！」

「は、はい……！」

レフィーナの激励とそれに応える声がブリッジに響き渡った。

ヒリュウ改の格納庫…回収された大破したツヴァイザーゲインがワイヤーで固定され、

他の機体もハンガーに固定され整備員たちが忙しく無重力空間を慣れた手つきで駆け巡り簡易的な修理と補給を行っておりその中の一ツ…ビルトライガーのコックピットハッチが開く

そこから亮は割れたヘルメットを持ち、コックピットから浮かびながら出てくる…

「負傷なされたのですか?!」

近くに待機していた整備員が割れたヘルメットと袖口の赤い跡を見つげ心配して声をかけてくる。

「いや、大事ない…破片で少し切っただけだ。もう血も止まっているからな…それよりパイロットスーツを変えてくる…いつ再出撃がかかるか分からん、俺の機体は損傷していないからチェックだけ済ましておいてくれ。」

「了解しました。」

整備員の声を背に受けつつ壁や手すりを使ってパイロット待機室へと向かう。

待機室の扉が開かれ中にいた紫の長髪の男性、ギリウムが腕を組み壁に背を預けながら見据えていた。

亮は待機室のロッカーを開け中から新品のパイロットスーツに着替えながら背中越しにギリウムに語りかける。

「ギリウム・イエーガー…ツヴァイを使うぞ」

「やはりそれしか手はないか…」

亮の背中を見つめながらギリアムは苦々しく事実を口にする。

「世界を超えるのは誰でもできる芸当じゃない…異邦人であるお前にもよくわかつているだろう?」

「しかし、あれは欠陥品だ…正しく帰れる保証がない」

「それは間違った使い方をしているからだ」

「間違い?」

「そつだ…間違つた方法で動かす機械は事故を起こす。当然だろう?」

ギリアムの目が驚愕に見開かれる。

「君は一体何を知っているのだ…?」

「世界に隠された神秘…かな?」

着替え終わり振り返つた亮は不敵な笑みを浮かべていた。

歪み、罅割れ…消えていく赤い宇宙その中で黒い螺旋剣のような鋼鉄の箱舟と赤き飛竜を模した船が互いに寄り添い半透明の膜でその

身を覆っている。

それは崩壊する世界の影響で発生する磁気嵐などから船体を守るが世界の消滅に巻き込まれればひとたまりもない。

そんな二隻の船の甲板には集結している鋼の人型たち

胴体部のみとなり変わり果てたツヴァイザーゲイン…それにビルトライガーは触れる。

『東雲…一体どうするつもりなのだ？』

ツヴァイザーゲインについてある程度知識のあるラミアが通信機越しに亮に問いかける。

『この機体…ツヴァイザーゲインの中核【システムXN】は本来魔術的な触媒を機械が制御することで並行世界への干渉をなしている…しかし機械だけで制御しようとしたため…』

『自ずと不都合が発生しシステムが不安定となったというわけか？』

『そうだ…ゆえに然るべき手段を用いて扉を開き…T・LINKシステム…いや思念の力で元の世界を特定する』

さあ、始めるぞっ！…！

亮の声が各々の耳に届く

外なる虚空の闇に住まいし者よ
今ひとたび大地に現れんことを
我は御身に願ひ奉る
時空の彼方に留まりし者よ
我が嘆願を聞き入れたまえ

亮が口訣を口にすると同時に周囲に禍々しい何かが満ちてくる

『くっ!!』

『この歪な念は…』

『……怖い……』

念動力や感応能力を持つメンバーがそれを感じ取る。

ボコリ

ツヴァイザーゲインから虹色の泡がまるで沸騰しているように次々と浮かび上がり、宙を舞って何かを形作っていく。

御身は【門】して【鍵】

【道】にして【道を開くもの】

無数の球体は虚空を目指し高速で飛び、空間に虹色の軌跡を描いていく。

そしてそのすべてが空へ消えたかと思うと七色に爆発し、異界の光で赤い宇宙そらを染め上げた。

異界の光が結晶化して実態を結ぶ

エズファレス

オリユアラム

イリオンⅡエシユティオン

エリユオナ

眩い閃光の中ライガーは亮の操作によって を逆さに描き出す

『

っ！！！！！！！』

龍虎王が吠える。自らの怨敵を宿敵を感じ取り怒りと憎悪を露わにして叫ぶ

『ど、どうしたの龍虎王?!』

『百邪の内一柱が現れる?!』

クスハとブリットは龍虎王とのつながりから彼らの怒りを理解する。

『吠えるな、模造品共』

猛る龍虎王を鎮めようと必死だったブリットとクスハだったが、亮の声で龍虎王が沈黙する。

オレア

オラシユム

モズィム

『扉だ…』

誰かがつぶやく。

異界の光によって生み出されたそれは巨大な扉だった。

しかしそれはただの扉ではない、龍虎王や亮が放つのは全くの逆…
暗い昏い…底の見えぬ深海の闇のような忌まわしい神気を放つそれ
は。扉の属性を持つ神である。

全にして一

一にして全

全なるものは【無限】に通ず！

門に描かれた巨大な一つ目がゆっくりとしかし確実に左右に割れ、
超大な扉が開かれる。

その向こうに異界の海が広がっていた。

『レフィーナ艦長・オノデラ艦長、門の中へ艦を進めてくれ…この
世界、アインスト空間より脱出するっ！！！！』

『なんだよ…こりゃあ……』

『扉が…たくさん…』

『すべての時間と空間につながる神、ヨグソトース…東雲が詠つ
たのは第九の詩と言われる召喚呪文だ…つまり』

リュウセイとマイが周囲に三六〇度全方位に浮かぶ無数の…いや、無限の門を目にして驚嘆の声を上げライが限りなく確信に近い推測を上げる。

『ここはヨーグルトソースとか言いう奴の中ってわけか』

『ヨグ_{II}ソトースだ』

『細かいな_oそつくりじゃないか』

『確かに似てるかも…』

『どこがだ…』

リュウセイの言葉とそれに賛同するマイの天然ボケによってライは義手の左腕で自分の頭を冷やしたくなるほどの頭痛に悩まされる。食品と一緒にたにされた外なる神にも同情しつつ…

まあいつも通りだったとさ

『え_oと…ごめんね、ライ』

『…いえ…』

なんかアヤの労いが心にしみたライであった。

『これからどうすればいいのだ東雲…』

ギリアムが亮に問、亮はそれに応える

『貴様が考えているのと同じ方法だ』

『なるほど……みんな、俺に力を貸してくれ。

元の世界へ………地球へ帰りたいと念じてくれればいい』

ギリアムが仲間たち全員に伝える。

『そ、そんな簡単なことではないんですか？』

『念じろって言われても、あたしら念動能力者じゃねえんだぞ！』

念動力を持っていない者たちから声上がる。

念動力は思念を力に変えることができるかと証明されているからその他の人間はできないと固定観念として存在しているのかもしれない。

『いえ、T-LINKシステムは人の思念を感知し、増幅する装置

……

みんなの想いが一つになり、思念の力が強まれば……私たちを介しシステムが反応する………』

『そう……

そして俺たちの想いの力で探り出すのだ、俺たちの世界へと通ずる扉を……

命の鼓動を……俺たちを生んだ地球に対し、感覚を開くのだ。

一人一人の思念は小さくともそれらを結集すれば………帰れるっ！！
』！

ギリアムとアヤの言葉に一同の心が一つとなっていく………

『SRXチームは外側の念を……地球の人々の思念を引き寄せるんだ』

『え？』

『どうということだ？』

亮がSRXチームのメンバーに対し指示を出す。

『向こう側とこちら側……二つの想いをつなげ道しるべとするんだ。心でつながる道……スターウェイをつなぎ辿るためにT-LINKシステムは作られている。』

人の心を感じし、感知させる機能は念動力者を戦わせるためじゃない、心を絆をつなぐための機能なんだ。』

『……！』

『誰が作ったかしらんが……よくできている。おそらく大いなる戦いとその後、人と人を繋ぐ為に作られたのだろうな……このシステムは』

……』

『イングラム少佐……わ、わかりました！やってみます！』

『マイ、T-LINKツインコンタクトを。』

私たちとSRXで受信機と発信機の役目を務めるわよ。』

『わかった……アヤ』

アヤとマイの念がT-LINKシステムによってつながれ同期し念

が増幅され

そして…SRXにこの場にいる全員の想いが集まっていく。

『…帰ろう、リオ。』

僕たちの世界へ……君のお父さんが待つ世界へ……』

『ええ……』

あなたやみんなと一緒に……』

『諦めかけてた夢…』

もう一度つかめるかもしれない……。だから、あたし……』

『ああ。』

念じよう……俺にも力があるのなら』

『信じよう、』

俺たちやみんなの想いの力を……』

『うん……。』

きつと戻れる……帰れるよ』

『そう……』

夢のため……これからのために……』

『俺には果たせねばならぬ使命がある』

『そして、守らねばならぬものがある』

『……レオナ、無事帰れたらまたアレを作ってくれよ。
俺、もう一度食いてえんだ』

『よくてよ、タスク。』

『でも、その前にやることがあるわ』

『オウカ姉さまとの思い出……失いたくない
それにジャーダやガーネットが待ってる……』

『ああ、必ず生きて帰ろうぜ……！！！！』
『諦めない絶対に……！！』

『俺たちの帰りを待つ者たちのためにも……』

『生きて地球に戻るなきゃ、今までの事が無駄になっちゃう』
『うん……こんなところで終わるわけにはいかないよ』

『俺たちにはまだやらなきゃならないことがある。
そうだろ、りん？』
『もちろんだ、イルム』

想いを思いをSRXが紡ぎ力へと変えていく
そして、彼らを思う者たちの想いを引き寄せ二つを繋ぎ合わせた。

『！おふくろ……！！？』
『どっしたの、リュウ！？』

リュウセイが紡がれた想いを感じ取る。子を思う母の心を

『感じる……！感じるぞ、外側からの念を！』

リュウセイが確信を抱いたと同時に無限に存在する扉……その内の一つから光の系が伸びSRXの胸へとつながり、さらにSRXから他の機体やヒリュウ改、クロガネ……そこにいるすべての者たちが目に見える絆という系でつながる。

『わかる……！距離が離れていても……！』

『人の想いがつながっていく……！』

『T・LINKコネクター、全接続！……ここが……正念場よ……！』

『ば、ばか！そんなことしたら、お前は！』

リュウセイの懸念はもつともであった。

T・LINKシステムは脳に膨大な負荷をかける、そして接続が増えれば当然脳に流入する情報量と圧力が増し下手をすれば廃人……最悪死亡してしまう。

『大丈夫、私も手伝う……！』

『だ、だけどよ！』

いくら二人で分担するといっても今、SRXに集中している思念は強すぎる……

念の強弱に善悪は関係ないのだ。

『今やらなくてどうするの！向うとみんなの念を私たちでつなげる』

のよー!』

『……………!!!!』

アヤの言葉にリュウセイは己のやるべきことを再自覚する。

『リュウセイ、SRXを信じなさい。お前たちのマシンにはそれを可能とする力がある』

『わかったぜ、隊長!』

リュウセイの覚悟をヴィレッタが後押した。

『T-LINKシステム搭載機のパイロットは念の集中を! お前たちの念をSRXに集め、アレをブースターにして皆の念を一気に増幅させる!』

『やるわよ、リュウ、マイ!』

『おう!』

『わかった!』

『ライ、あなたはSRXの機体制御をお願い!』
『了解!』

『コネクター、全解放!接続!!!!』

T-LINKマキシマム・コネクト!!!!!!

S R X と他の機体を繋ぐ光の系が太くなり S R X 自体も輝きを放ち始める。

『くぐぐぐぐ！！』

『うぐぐぐぐぐぐぐぐ！！』

『うぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！！』

P C の電源ユニットが過負荷によって発熱するようにリュウセイたち想いの接合点となっている三人の脳に多大な負荷が掛り苦痛の声を上げる。

『りゅ、リュウセイ少尉！！』

『え、遠慮はいらねエ！！お前らの念ををぶつけてこい！！』

S R X の輝きが尚激しくなる。
が…

“ ダアン！！ダアアアンっ！！ ”

S R X の各部が爆発し、右腕が吹き飛び顔の一部が砕け散る。

“ ガツシヤアアアンっ！！ ”

S R X は膝を着いてしまう。

『ぐう！耐えろ、S R X ！！みんなの念を受け止めるんだ！！』

自身のむしばむ苦痛に耐えながら。

リュウセイは傷ついていく相棒に激励を飛ばす。

『うぐぐぐ！！くぐぐぐぐ！！』

『うぐぐぐ！！あああああ！！』

もっとも負荷の高い二人の苦痛が想いの強さに比例して上がって
いく。

『 つー！！！！』

龍虎王が咆哮を上げる。

光の糸が太くなりすべての機体がSRXと同じ思念の光を放ち始
める。

それに呼応してかSRXが立ち上がる。

『 俺たちの……！！』

『 私たちの……！！』

世界への扉をひらけええええええええ！！！！

“ ギ、ギイイイイイイイイイっ！！”

糸の伸びた先にある扉が開かれ、その向こうに青い水の惑星が顔
のぞかせている。

『 テツヤ大尉っ！！！！』

『 全艦オーバーブーストっ！！！！目標え！！！！地球っ！！！！』

『 了解えっ！機関最大船速っ！！！！』

クログネとヒリュウ改のロケットクラスターエンジンが展開し、大
気圏離脱用システムのオーバーブーストが作動し驚異的な水力から

得られる速力を持って扉の向こうへ二つの船を押し出していく。

『帰るのですっ！！』

『帰るんだっ！！』

『我らの／私たちの地球へっ！！！！』

二つの鋼の船は扉を超え帰還する。

さて…俺は最後の役目を果たすのでしょうか

東雲 亮とビルトライガーを残して…

『東雲っ！！』

『亮っ！！』

キョウスケとラミアが亮の名前を呼ぶ。

『さようならだ…』

『なぜだ？！そこにはいかな世界に辿り着くか分からないぞ！
！お前は二度とこの世界に還ることはできなくなるぞ！！』

『ラミア…よく見る、俺の機体…いや俺に貴様らを繋ぐ絆の糸はな

い…俺の帰りを待っている人は【お前たちの世界】にはいない…それ
れに門を閉じるのは俺の仕事だ」

扉が徐々に締まり…ライガーの翡翠色の炎翼の先端を隠す。

『しかし、それは外からでもできるのではないのか？』

『キヨウスケ・ナンブ…俺は次元漂流者ではない、シャドウミラー
と同じくランダム転移を行ったのだ。世界から居場所を失ってな…』

『それは貴様の力が原因か？』

『そうだ…どいつもこいつも俺を殺そうとし、モルモットにしよう
とした…50年間ただひたすらに戦い続けた……もう、疲れたんだ
よ、俺は…』

『だから新天地を目指してここに来たというわけか…』

『ああ。希望と安らぎ…俺が望んだのはそれだけだ…それを与えて
くれる存在を俺はこのシステムを用いて見つけ出す。』

ライガーは面々に向け背を向ける…

『最後に…お前たちの世界だ、お前たちが守れ』

“ダアアアアンっ!!”

扉が完全に閉まり、そこにあつたのが夢か幻だったかのようにゆら
ゆらと薄くなりやがて消え去り

そして、東雲 亮は永遠にその世界から姿を消した。

ヨグソトースの体内の空間ですべての時間と空間につながる空間でビルとライガーはゆらゆらと何かしらの流れに身を任せてただそこにいた。

そんな赤い機兵のコックピットで亮はつぶやきを漏らしつつ思考する。

『なあ、ライガー…ここは一人でいるには少しばかり寒いな…』

ライガーは答えない

『この旅路の果てに…何処か…暖かいところに…辿り着けたらいいなあ…』

ライガーは沈黙を保つたまま答えない。

T-LINKシステムを使用し思念を広げてはいるが何の反応もない…自分の居場所などこの世界どこかあらゆる世界に無いのかも…しれない…

そう思うとさらに寒くなった気がする。

パイロットスーツで体温調整はされており、もとより人外のこの身はもともと寒い程度では死ねない…

心が寒いのだ痛みを感じ、震えるほどに…

両肩を腕に抱き少しでも暖かいようにするがまるで効果はない…

(いつまでたっても何にも引き寄せられずこのまま永劫にこのすべての狭間を漂うのだろうかの…)

弱気な思考が脳裏をよぎった瞬間身の毛もよだつ寒気に襲われる…
恐怖だ

(だれか…俺を…受け入れてくれ…誰か…俺を…変えてくれ…)

それは願望にして渴望…

世界から不幸を望まれた人外の青年は幸福を求めた人らしく…

そんな青年を乗せた赤き機兵の胸部に一筋の光が伸びる

『あ…』

つばやきが亮の口から洩れ・カメラアイがとらえた絆の糸の先を見る…そこに一つの門があった。

『俺にも…あるんだ…』

亮はコックピットで機体を操作し、その扉へと機体を進める…

『往くぞっ！！ライガーっ！！新しい世界へ！！！！』

ビルトライガーと東雲 亮は新天地にして到着点をめざし飛翔し、
門を潜り抜けた。

O G 編 e n d

第二六話 凶鳥

1999年8月6日

旧ドーバー市そこはフランスに建造されたH・12リオンハイブからの進行が最も多い激戦区である。

イギリスとフランスの二つを隔てるイギリス海峡の中で最も短いドーバー海峡…それを超えてBETAの大群は進撃してくる。

直線距離約34キロ…BETAの進行を食い止めるには短く、砲撃殲滅を行うには遠すぎる…

しかし、何もイギリス海峡はここだけではなくBETAが進行してくる適した地形はあといくつかありそのどれかが瓦解すれば三度目となるグレートブリテンが起きるであろう…

そんな内の一つワイド島…もう一つの激戦区では黒き凶鳥が羽ばたこうとしていた。

『隊長っ…！お客さんが団体で追加ですよ…！』

『各自各々で対応しろっ…！二機編成を崩すなよっ…！』
エレメント

F・5E ADVトーンード

イギリスのエリア防衛を念頭にアメリカ軍のF-5を独自改修した機体でありセンサーと近接戦闘能力が強化された機体でありオリジナルとは違い両腕に腕を挟むように並べられた片側二本のカーボンブレードが特徴的であり関連性はないが忍者の鉤爪手甲をイメージさせる。

トーネードを駆る彼らはリオンハイブより進出したBETA群を相手に苦戦を強いられていた。

両肩に装備されたミサイルは打ちつくしコンテナは分離済み、バウジ弾薬も推進剤も心もとないなか奮戦しているといえる…

『死にさらせ！このくそ豚どもおおおっ！！』
“ズシャッ！！ズシャッ！！”

トーネードの一体が次々と要撃級の虫の幼虫のような表面を切り裂き、足を切り落とし、尾の感覚器官を切り落として無効化していく。相手の増援がいつまで続くか分からない状況下では相手を動けなくして無効化しなければとてもじゃないが【持たない】

『宇宙人はおとなしく宇宙にかえりなさいっ！！』
“ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！”
“ダンッ！！ダンッ！！”

EU独自の突撃砲を4門同時斉射するトーネードの一騎

背の兵装担架が両脇から突撃砲の銃口をのぞかせ衛市の殺意を乗せて36mmの劣化ウラン弾をマズルフラッシュの短い閃光とともに吐き出す。

そして両腕で保持した突撃砲の120mm滑空砲で突撃級を穿つ…

次々とBETAを撃退していく亡国と防国の衛士たち、しかしBETAの圧倒的な数に徐々に押されやがて西海岸が見えるほどまでに後退してしまう。

『隊長っ！！！もう持ちませんぜっ！！』

『持たせるっ！！あんな海にさえなりやしないモン一気に突き抜ける！！そうなりや全部おしまいだぞっ！！』

若干弱気になる部隊員を励まし鼓舞する隊長：ワイド島と本島はポートでさえ渡れる…若干広い川程度しかないのだそんなものないに等しい。

『要塞級から光線級がっ！！！！』

『くっ！！戦力を温存していたとでもいいうのか？！』

光線級は3mほどの小型種でも一撃で戦術機を落とすことができる脅威だ。

『全員ハラアってくれっ！！』

了解っ！！！！

彼らは死を覚悟した。後ろには文字通り守るべきものを背負い、異形の軍勢に突撃しようとする。

一寸待て

通信機から彼らに一つの声が届き

無数の砲弾が雨あられとBETAに降り注いだ。

『援軍かつ!!』

突然文字通り降ってきた支援射撃それは確実とは言えないまでもBETAの足を止め運が良ければBETAを蹂躪する。

そして

『あ、あなた様は...』

『こちら【ナイト・オブ・ワン】ランティス・マクガヴァンだ
防衛部隊は一時後退しろ、補給部隊を置いてある。ここは任せろ』

各員の網膜に支援射撃を指示した人物が映し出される。

イギリス人にしては、珍しい黒髪黒目の青年：EUに所属している
ならあまりに有名な十二人そのうちの一人

“キュイイイんっ!!”

プラズマジエネレーターからエネルギー供給によって青い炎のようなプラズマが背の羽のような電磁推進ユニットから吹き出し高速ホバリングで防衛隊の面々の間を駆け抜け追い越す。

黄色い？字アンテナに人に同じく翡翠色の二つ目に控えめの赤い顎の黒い機体色…異世界でバニシングトルーパーの異名を持つヒュッケバインMK-1

右手にはM90Cアサルトマシンガンが保持され、両サイドアーマーに片刃片手剣のようなものがマウントされ左腕には手甲のような追加パーツが肘側に装備されていた。

『復唱はどうした？』

驚きのあまり硬直してた部隊員に指示を飛ばす青年、その間にも次々と右手の銃から吐き出される90mmの弾頭が一発につき一体の割合でBETAを粉碎していた…

『申し訳ありませんっ！！ランティス様これより一時後退、補給のうちBETA排除を再開します！』

『ああ、了解した！！』

ランティスはヒュッケバインのウイングスラスターの出力を上げ、腰にマウントされたブレードを左腕に持たせる。

そのブレードには通常の刃はなく無数のサメの歯のような刃が一系列に並んでいる。

“ギューイイイイイイインツ！！”

ランティスの網膜に接続の表記コネクトが現れ、ヒュッケバインのプラズマ

ジェネレーターから電力供給が行われ、無数の歯が高速回転する。

つまり、剣型のチェーンソーでありロシア軍の戦術機に装備されることの多いモーターブレードを手持ちにしたものであるが

『まずはアサルトブレード、試し切りと行くか』

背のウイングスラスターから噴き出す蒼炎が増し対象との距離を縮める。

支援砲撃の嵐の中黒き凶鳥が駆ける。

『フンっ！！』

要撃級に向けて一閃、

新素材であるハイパーカーボンでできた無数の刃がアツという間に要撃級の腕を掘削し切り飛ばし、BETAの体液でその鈍い鋼色の刀身を汚す。

“ シャンシャンシャンっ！！！！ ”

アサルトブレードが直接聞けば相当耳障りな駆動音を響かせつつ空気ごと何体もの突撃級を切り裂き、肉片と肉塊へと変えていく。

『つぎっ！！』

要撃級を解体したヒュッケバインに突撃級が突進してくる。

『ハアアアっ！！』

突進級がすれ違う瞬間アサルトブレードを水平に奔らす。

アサルトブレードはダイヤモンド並の硬度を持つ突撃級の電車の雪掻きのような甲殻を火花を散らしながらたやすく掘削切断する。

『ブレードは十分実践で使用可能か…次は…』

右手に持つマシンガンの標的にを探索ランティス、要塞級が目に入り表情は一切変わっていないがその内心には不敵な笑みが浮かんでいる。

『飛べっ凶鳥っ！！』

背中のウイングスラスターの角度が変わり脚部のスラスターとともに機体を押し上げ、ヒュッケバインが宙に浮く。

“ビーっ！！ビ　っ！！”

コックピットに警告が鳴り響き、ランティスの網膜に照準警告とレーザー照射までのカウントが投影される。

ヒュッケバインのセンサーがレーザーの加熱輻射をとらえエネルギー収束率からレーザー照射までの時間を割り出しているのだ。

『いつどこから飛んでくるか分かっていたらば…』

光線級の肥大化した目玉から光が収束し黒き凶鳥に向けて放たれる

『避けることは出来る!!』

ヒュッケバインは空中で手足を振りその反動で姿勢を急激に変え、機体各部のスラスタも併用し回避する。アンバックと言われる一種の姿勢制御技法である。

『落とさせてもらうぞ!!』

空中からヒュッケバインが滑空しつつ下方の要塞級にM90Cアサルトマシンガンの引き金を引き90mmの弾丸がいくつか放たれ。

ハイパーダイヤモンドの弾頭が自身の半分程度しかない硬度の要塞級の甲殻を砕き、内部組織を弾き飛ばす。

ブウンブウンと振り回している鞭ウィップをかくぐり要塞級の背に着地し銃口を先ほどの射撃によって空いた穴に向ける。

“力手”

ランティスがコックピットのトリガーを引きM90Cアサルトマシンガンの銃口のすぐ下に備えられたグレネードが発射される。

“ダアアアアアアアアアアッ!!”

要塞級の背で大爆発が起き、肉片と肉塊それに体液のシャワーが降り注ぎ大きい肉塊が小型種を押しつぶす。

ヒュッケバインは爆発が起きると同時上空へと退避しており、空中で左腕を下方のBETA群たちへと向けていた。

“カシヤ”

左腕の追加パーツが展開しそのうちに固定されていた鋼の戦輪チャクラムが高速で回転し、火花を散らしながら高速回転する。

『往け！鋼の戦輪よ、チャクラムシューター発射！！！！』

円刃が飛び、ヒュツケバインがランティスの操作によって腕を振るうとそれにつながれた鋼糸によって軌道を変え、要撃級に巻きつき次の瞬間には八つ裂きにする。

支援砲撃の雨の中次々とBETAを屠っていくバニシングトルーパーはBETAにとってのバニシングトルーパーとなろうとしていた。

『ランティス様っ！！補給完了しましたっ！！！！』

『では、ワイト島よりBETAを駆逐する。我に続けっ！！！！』

了解っ！！！！

トーネード部隊の一斉放火および本島からの増援によってワイト島

は死守され戦術機が立ち並び仮設テントが張られた臨時キャンプでは負傷者の手当てや機体のメンテナンスなどのため無数の人々が忙しなく動き回っており。その中の一つ黒い機体：ヒュッケバインが膝を着きたたずんでいた。

そんな鋼の巨人を見上げるランティス、BETAの返り血を浴び夕日によって赤く染まる機体を見上げる。

（奴がもたらしたデータから作り上げられたこの機体は果たして…人類の救世主となるのか…）

ランティスはこの機体のデータをもたらし、イギリスの技術レベルを一気に引き上げるまさしく技術革命を引き起こした青年を思い浮かべる。

「おや？ランティスこんなところでどうしたんですか？」

「イーグルか？ペンドラゴンは良いのか？」

ランティスは声の主へと向きかえり自身の友ともいえる人物を視界に収める

彼は、白髪というよりはプラチナブロンドと呼ぶにふさわしい短めの頭髪に細い目であるが笑みを絶やさず人のよさそうな印象を受ける。

「ペンドラゴンは順調に建造が進んでいます艦内設備は70%稼働といったところですよ。」

…で、どうでしたか？新しい武装は」

ランティスは問いかけに対し先ほどの戦闘を脳内に浮かべあらかじ

めまためておいた結果と照り合わせながら返す。

「威力、強度ともに十分実戦で通じるだろうが…そこまでだ現状を打破できるとは到底思えない」

ランティスの辛口の評価にイーグルは肩をすくめる

「仕方ありませんよ…この機体も武装もまだ過渡期…というよりまだ時期がまずいんですよ。人間同士が争っている今ではBETAに向けるべき銃口を味方の背に向ける連中ばかりですから」

「確かに…な」

「ええ、彼らを焼き尽くす浄化の火はまだ【出せないんですよ】今回の日本のあれ、かなりきな臭いですよ？」

「お前のほうで何かわからないのか？ダッスオーの情報網…並ではないはずだ」

「一介の軍事会社に無理を言いますね…しかし」

線のようなであったイーグルの目が見ひらかれ鋭い研ぎ澄まされたナイフのような鋭い眼光がランティスを射抜く

「例の5番目が何かやろうとしているそうです」

「…そうか」

ランティスは短く答えると沈黙してしまう。

それを見たイーグルはまた先ほどと同じように人の好きそうな笑み

を浮かべランティスをからかう。

「大丈夫ですよ。リヨウなら、
なんたつてイギリス最強の衛士、ナイト・オブ・ワン…ランティス・
マクガヴァンを打ち負かしてラウンズに入った。皇帝に最も近く最
も遠い者

難民の英雄、紫電の刀王、最強の衛士じゃないですか…どこぞの誰
かさんはシヨックを受けて旅に出ちゃいましたが…」

「…イーグル…」

ジロリとそのどこぞの誰かさんはイーグルに向けて若干恨みの籠つ
た視線を向ける。

「おまけにお嫁さんまで旅先で見つけて…これでマクガヴァン家は
安泰ですね

僕も早くお嫁さん見つけないと」

「……………」

いい加減疲れたと重くなつた頭を割と力を入れて持たせてはいるが
やはり重たく若干垂れた頭（ムク）のため息をつくランティス。

しかし先ほどの心配事はそこまで気にならなくなっており気を使わ
せたと友に過去の事を穿り出されてだいぶ減ってしまった感謝の念
を抱く

「ランティス様!!」

ランティスとイーグルのほうへ伝令を伝える兵士が息切れを起こし

ながら駆け寄る。

「どうした？」

「大変ですっ！！アメリカ軍が横浜ハイブ攻略部隊ごと新型爆弾で攻撃を行いハイブを奪還したものの多くの部隊が被害を受け。ナイト・オブ・サーティーン シノノメ卿を含め派遣部隊とも連絡が取れなくなりました！！！」

懸念していたことが現実になったかと、ランティスとイーグルの顔が険しくなる。

「それだけじゃありませんっ！！アメリカは新型爆弾の有用性を証明したと声明を発表しランティス様には至急王都に帰還なさるようにとの御指示が」

「わかったすぐに戻ると連絡しろ。イーグルお前はどうする？」

「僕も行きます。彼ならきっと大丈夫です何せ不死身ですから僕たちにできるのは彼の国の横暴を許さないことですっ！！せっかくここまで漕ぎ着けたのを水泡に帰すわけにはいきません！！！」

「そつだな」

第二六話 凶鳥（後書き）

簡単解説

ヒュツケバインR

ヒュツケバインの製造データをもとに作成された再生機

機体材質はHCハイパーカーボンに変更され動力はプラズマジェネレーターを使ったため基本機能は009と同等

ある思惑の元、非実体の装備は一切装備されず実体武装のみを使っている

ランティスの専用機でありデータ収集用の機体

武装

M90Cアサルトマシンガン 弾頭をラインメンタルと共通のHD製に交換

アサルトブレード ガーリオンが装備していたものを復元したもののチャクラムシューター リープスラッシャーの代わりに装備されたものMK-2と同型

ハイパーダイヤモンド

ダイヤモンドを常温加圧し作られるものでダイヤモンドの二倍の硬度を持つ、元来の製法で有れば小型の者しか作れなかったが東雲のもたらした重力制御技術により大型の物も作成できるようになったほか、大量生産も可能となった。

炭素はBETAの死骸から分離抽出したものを使用しているため
エゴ？

HC：ハイパーカーボン

まだ秘密

ナイト・オブ・ラウンズ
イギリスの近衛に当たる部隊で全13部隊存在しそれぞれの隊長は
一級品の強さを持つ

基本的に数の少ないほうが強く東雲はあくまで例外

ラウンズに入隊する条件

ラウンズの過半数の推薦を受ける

ラウンズと一対一で決闘し勝利する
のどちらか

ランティス・マクガヴァン

イギリス王族と姻戚関係のあるマクガヴァン家の二男で宰相の弟
衛士や指揮官能力が高く実力でナイト・オブ・ワンに上り詰めた実
力者

御前試合で東雲に負けた

イーグル・エンドルフィン

東雲とランティスの友人 フランス人

ダッスオーの社長子息で二人に何かと融通してくれる

東雲の機体は彼の手引きによるもの

後は秘密

第二七話

伏線（前書き）

分かる人には分かるネタ

第二七話 伏線

世界にむけて異形の泡があふれだそうとしていた。

そしてその泡の一つ一つが、異世界に通じる次元の門だ。

あるものは灼熱の

あるものは極寒の

あるものは猛毒の

その他多くのものは形容するも不可能なおぞましい世界につながっている。

まるで、泡の群体が一つの巨大な心臓の様な様相を為しており、その泡の表面からは炎を、冷気を、瘴気を、うねりや、笑い声、あるいは精神的な波動をこの世にあってはならないものを放出し始める。

やがて世界が決壊する。

カルドウレク

ダルマレイ

カダトっ！！

いや、決壊する世界の壁を白い五芒星が抑えきり荒れ狂う混沌が

瞬間 意思を持つ生き物のようにぴたりと動きを止めた。

第二七話

伏線

決壊する世界の圧力を受けて亮の青紫のタイフーンは仰向けに吹っ飛ばされる。

そして倒れてゆくタイフーンの胸部装甲が開き、強化装備の亮が混沌の波を意に介さず飛び出した。

「フォミクレー
-複製-」

亮の言霊と連動し一部の地面がえぐれた様に消え去り亮の手に白銀のラインが奔り、そして魔力の光とともに一本の短剣が像をなす。

そして亮はそれを自身の左掌に突き刺した。

本来、防刃効果を持つ強化服を紙を突き破るかのごとく刃が通り、手の甲から血に濡れ刀身が顔を出す。

「ふんっ!!」

すぐさま腕から短剣を引き抜くと極彩色の混沌に短剣を投合し、地面に着地するなり血があふれ出している左手で剣指を作り五芒星の印を切る。

指の軌跡に沿って血のラインが宙に描かれ血で出来た五芒星が現れ

赤く発光する。

「第四の血印はエルダーサインっ！邪悪と敵意を封じ込めるものなりっ！！！」

泡の混沌を封じ込めるように四方それに上下の六面に五芒星エルダーサインが展開し世界が決壊するのを防ぐ。

カルドウレク

ダルマレイ

カダトっ！！

混沌に向かって亮が叫んだ。

瞬間 意思を持つ生き物のようにびたりと動きを止めた。

「カウンター逆回転っ！！！！」

流出し侵入し浸食しようとしていた圧力の流れが逆転する。

球大群は、瞬間群れなす太陽のように眩く発行すると一斉に弾けて消え、解放された熱、光、音その他もろもろの混沌の構成物は困エルダーサインっていた五芒星と共に消えていった。

「な、なんとか封印出来たか……」

世界が破滅する一歩手前まで行ってしまったのをなんとか阻止でき

たため冷や汗をぬぐいつつ亮は安堵の息をつく。

その時

“ヒュウウウウウん……………”

“ガツシャアアアアアんっ！！！”

何かしらの巨大な物体が落下し地面を吹き飛ばし、砂塵を舞い上げ轟音を巻きたらしめた。

「くっ…次から次へと……………っ！！！」

立て続けに起こる厄介事に若干イラつきながら自身の愛機へとかけタイフーンの胸部に空いた穴、管制ユニットへと飛び込み強化服と座席を接続ーロックする。

“ビュウウん…ビ、ピピっ！！”

「機体各部問題なし…」

機体の起動シーケンス実行の過程が網膜に映し出され問題ないことがわかれるとタイフーンを起こし立ち上がらせる。

“ガツシャアんっ！”

タイフーンが金属音を鳴らし駆動音を響かせながら立ち上がる。

「一体何が来たっていうんだ？」

タイフーンを落下物の作り上げたクレーターへと歩ませる。

“ガシン、ガシン、ガシン”

お世辞にも快適とは言えない揺れを感じつつタイフーンがクレーターを覗き込み頭部のメインカメラがそれを視界に収める。

「やれやれ…あいつは何をしていたんだか…」

メインカメラの映像が網膜に映し出され、それを認識するやいなや亮はその持ち主対して愚痴る。

マサキ・アンドーに対して…

「右手一本異世界に落とすなよ…方向音痴に加え落とし癖か…救いようがないな

（さっき瞬間的に開いた扉から流れ出た物なんだろうが…いったい何があったのだ？）」

なんか散々なことを言いながらクレーター内部へタイフーンを進め、マニユピレーターでそれを持ち上げる。

風の魔装機神サイバスターの【神の右腕】を

タイフーンの跳躍ユニットを吹かしクレーターから飛び出たタイフーンは先ほどの怪異の原因ツヴァイザーゲインへとその歩進め、その戦術機の二倍ほどの巨体の胴体部を見下ろしている。

「さて…そろそろかな…？」

タイフーンの管制ユニットで亮は不敵な笑みを浮かべる。望むべき望まぬ来客を思い浮かべながら。

リョウ・シノノメ大尉だな、一緒に来てもらおう

突如としてヘッドセットから音声通信が入り、網膜に照準警報ロックオンが映し出される。

そして亮のタイフーンはゆっくりと声の主へと振り返り五機の戦術機をカメラに収め亮の網膜に投影する。

『やれやれ…礼儀がなくなっていないな親の顔を見たいぞ…無限の戦士団？』

右肩にをかたどった部隊賞エンブレムに電波吸収塗料による濃緑の機体色
その頭部は戦闘機が二機が重ったような形状とそこに備えられた
複数のカメラ

アメリカ製戦術機の特徴ともいえるウエポンラックを内蔵し肥大化した膝部
正史では後に「戦域支配戦術機」の異名をとるアメリカ製第3世代戦術機

【YF-22 ラプター】

その先行量産試作機である。それが三機

『要件は一つ我々とともに来てもらう。さもなくば』

それに呼応するかのように隊長機と思しき機体ラプターの後方から一步前へと踏み出すラプターとは違う機種の二機

突き出た顎がF-15直系であることを現す頭部に

漆黒の機体色に腹部に赤く砂時計のようなマーク、もう一機は灰色に塗装された二機

両方とも通常の戦術機とは違い背ではなく肩に武装を背負い、大艦主義のアメリカ製戦術機にしては珍しくソリッドな長刀を装備し。

腕に携えられた突撃砲はポピュラーな120mm砲と36mm砲のハイブリットではあるが120mm砲塔の下部には大型短剣が装備され銃剣パヨネットとなっていた。

ラプターを超える機体性能を持ちながら惜しくも主力戦術機の座をラプターに奪われた世界一高価な鉄屑と呼ばれた悲運の機体YF-23ブラックウイドウ？である。

『さもなくば？』

『いや何、俺の用意したおまけがそこまで気に入ってもらえるとは思わなくてな…』

俺自身を欲するまでに気に入ってくれるとは感謝の念に尽きないぞ』
嗤い涙を拭いながら亮は語る。

『で、どれを試したのだ？』

超重力の中で押し潰れ、世にも珍しい球形の棺桶で眠りに着いたものか？

はたまた苦しむ間もなく灼熱の太陽の中へと誘われたことか？

それとも、暴走した愛機に殺される喜劇か？

あるいは『黙れっ！！！！』』

亮が語るのはイギリスに潜む諜報員と裏切り者から横流しにされた亮の技術を使った模造品の行く末である。

それを聞いて激高するアメリカ製戦術機に乗る隊長衛士

ここに一つの図式が成り立つ。

情報が漏れること前提でシステムトラップを仕込んでいたのだ…上層部さえも知らないものを

『貴様のせいだっ！貴様のせいだっ！何人の同志がその命を散らされたと思っっているっ！！貴様のせいでアイツは……！！！！』』

亮の言葉を遮り恨みの声を怨嗟を吐き出す敵隊長

『盗用しておいて随分な物言いだな、傲慢なコソ泥風情が』』

プツン

敵隊長の何かが切れる音が聞こえる気がした。

“ダアアンっ！！！”

亮の青紫のタイフーンに向かって銃弾が放たれる。

人間で見たらたかがライフルだが戦術機で見た場合人間が持つその約十倍、戦車の機関砲よりも大口径なそれはもはや大砲と呼ぶにふさわしく。

その怨嗟の銃弾は戦術機であればたやすく装甲を貫き、破壊をもたらす。

だが…

『だから甘いんだよっ！！！！』

“キインっ！！！！”

瞬間一筋の閃光が奔り、弾丸の起動がそらされる。

刀身のそりを使用し、絶対のタイミングを音速で飛来する弾丸を見切り、コンマ何ミリの繊細な動作を戦術機でなす神がかり的な技能によって弾丸は青紫の重騎士を傷つけることは出来ず場違いな方へと飛んで

行った。

サイバスターの右腕を掴んだまま刀身を左手に脚立する戦術機を見据える面々、重金属雲の隙間から刺した陽光によって断罪の剣が煌

めきを放つ。

それに伴い、相対する戦術機の衛士たちに緊張が走り意識が戦闘態勢にシフトする。

『投降の意思をなしと断定、総員【リョウ・シノノメ】を殺せ弔い合戦だっ！！』

yes sirっ！！！！

亮に五つの殺意が殺到しようとしたその瞬間

『茶番は終わりだっ！月砂っ！！ジュリエットっ！！』

“ズシャっ！！”

亮が言葉を発したその瞬間、スパイダーが隊長のラプターの管制ユニットの収められているべき場所に深々と短刀を突き刺していた。

第二七話

伏線（後書き）

叢雲 効 よろしく

ラプターⅡ ゴールド天

スパイダーⅡ ブルーフレームセカンド

真魔装機神&スパロボZカットインよろしく

第二八話 円環ではなく螺旋

『茶番は終わりだっ！月砂っ！！ジュリエットっ！！！！』

“ズシャっ！！”

亮が言葉を発したその瞬間、スパイダーは背後から自身を率いる者の駆るラプターの胸部に深々と突き刺す。

内部にいるであろう隊長衛士は何が起きたかも悟れず、巨大な鉄塊に両断され管制ユニットの内部を鮮血で染め上げる。

セーフティ安全装置が働きYF - 22の主機関が停止しYF - 22の各部の力ーボニックアクチエーターは供給されるべき電力を失い脱力し、皮肉にもYF - 23（スパイダー）に支えられる形になる。

『インファイー3?!何

』こつこつことよっ！！！！』

キーン

本来仲間であるはずの衛士の突然の裏切り行為を問い詰めようとしたYF - 22が灰色のYF - 23（グレイゴースト）の長刀によって切り捨てらその灰色の装甲は返り血の様なオイルによって汚される。

“ドオオオオオン”

長刀によって切断された胴体部から火の手が上がり主機関が爆発し YF - 22 は黒煙を上げながら炎に包まれた。

『インファイター4つ!!! 貴様もかつ!?!』

アメリカ製第3世代戦術機に与えられた特性は隠密性、G弾発射直後の戦場の崑崙に乗じて亮を確保し、システムトラブルを解除させる。もしくは亮を亡き者とし他国の技術発展を阻害させ、物資・技術ともにアメリカが世界をリードする存在とさせるための計画

そのため未だ正式発表のされていない YF - 22 を投入し、近接戦闘をも念頭において建造された機体 YF - 23 を再生させて対人戦闘部隊【インファイニティーズ】に預けた。

のだが

『スパイがあなたたちだけの専売特許だと思わないことだよ』

『そういうことだ』

スパイダーを駆る衛士が同僚に向けて嘲笑を含めた言葉を発し、それに応えながら青紫のタイフーンが最後のラプターを一刀両断する。

『ク……オノレ……おのれええええええええええつ!!!』

亮のタイフーンに切り裂かれたラプターは紫電をまき散らし血液のように機体のオイルを滴らせ、外部スピーカーから衛士の恨みの声を響かせながら

“ドオオオツオオンっ！！！”

恨みの丈を表すかのように爆散し無数の破片となって薙ぎ払われた
横浜の荒野に散らばっていった。

ふとその様子を見ながら亮の脳裏にある種の思考がよぎる

自分たちが後ろから撃つたものと同じく後ろから撃たれ同じ地に
散るとは因果なものだな

『月砂、ジュリエット帰還するぞ』

『了解』

そこには二機の戦術機ラプターの残骸がそれに乗っていたであろう衛士の墓
標として鋼の骸をさらしていた。

第二八話 円環ではなく螺旋

海上に浮かぶいくつかの艦船の内ひとときわ巨大な空母

戦闘機が光線級BETAによって無力化され用をなさなくなった空母を回収し戦闘機用の空母としたものでありその甲板上に十機近いタイフーンが膝を着いた状態で何重にも甲板に設けられたフックにつながったワイヤーで固定され、何機かは空母の格納庫に収容されている。

そんな中、ハンガーに固定され照明に照らし出される四機の戦闘機…外から丸見えではまずい機体

奪取した機体YF-22プターとYF-23ブラックウイドウ？その一号機と2号機それに亮の青紫のタイフーンである。

そして亮のタイフーンのコクピットハッチがゆっくりと開き管制ユニットに格納庫を照らす照明の光がわずかに差し込む。

「お疲れ様です大尉」

整備兵の一人が顔を覗き込ませる。

「ああ、爆風に吹っ飛ばされたから整備を念入りに頼む」

整備兵に返事をしながら管制ユニットから出る。カツカッソと網目上の鋼鉄の足場から発せられる音が格納庫に反響する。

「了解しました。しかしすごい機体ですね、私たちでもマニュアル見ながら整備するのがやっとですよ」

「今のうちに慣れておいてくれ、YF-23（アレ）が手に入った以上間もなく第4世代機が完成する。そうでなくともテストラドライブはほぼすべての戦術機に搭載される予定だ。今度は君たちが教える側になるんだ。」

「では、頑張つて経験を積むとしますよ。……それにしてもアレ、なんですか？」

整備兵が視線を向け、その先にはワイヤーで固定されたツヴァイザーゲインとサイバスターの右腕があった。

「ペテルギウスの浄化の炎……その種火さ」

亮の意味深な言葉に整備兵は首を傾げる。

「隊長、よろしいでしょうか？」

「ん、シルヴィアかどうした？」

整備兵と会話していた亮に後ろから声をかける人物シルヴィア

「はい……あの機体について伺いたいのですが……」

シルヴィアの翡翠色の瞳に映し出される3機の戦術機：YF-23と胸部に短刀が突き刺さったままのYF-22である。

シルヴィアが困惑と怪訝を織り交ぜた視線を向ける中、YF-23一号機スパイダーのコックピットハッチがエアロックが解除される

音とともに開かれ、中から白銀の髪をもつ少女が飛び出してくる。

「亮~~~~~!!!!!!」

少女は亮の姿を確認するなり駆け出し抱きつく

「な?! 貴様! 隊長に何をする!」

「シルヴィアいい、こいつはこんなもんだ……久しぶりだな月砂」

「うん! 後でご飯(稲荷寿司)を食べさせてくれるとうれしいな」

月砂はその金色の瞳を輝かせて亮にねだる。いくら天然ものだからと言ってアメリカの食事はいささか彼女の口に合わなかったようだ。

「見せつけてくれるわね」

月砂の背後、亮の前に褐色の肌に長い黒髪をなびかせた女性がグレイゴーストの管制ユニットから出てきて声をかける。

「ジュリエット…貴様今までアメリカにいたのか?」

「そうよ……隊長のご命令でアメリカでスパイしてたのよ……その子と一緒にね」

ジュリエットの黒い瞳の視線が月砂をさす。

「隊長……」

ジロリと亮に向けシルヴィアが白い視線を突き刺す

「な、なんだ? シルヴィア……」

シルヴィアのあまりの剣幕に少々たじろぐ亮

「わ・た・しは聞いていませんよ？専門のジュリエットはともかく、こんなどこの馬の骨ともしれない女まで…」

最初の自分を指す単語を強調するシルヴィア、
しかしそれに反発する月砂

「どこの馬の骨っていうのは失礼だね。私はあなたなんかよりもずっと長く一緒にいるし亮とはパートナーだよ命を預けあつた言わば運命共同体。どこの馬の骨は私から見たらあなたのほうなんだけど？」

「なんだと?!」

「なによ!!!」

月砂とシルヴィアの間にはバチバチと見えない火花が散る。
そんな二人の様子に亮はため息を吹き頭を抱える。

「いい加減にしろ…シルヴィアそれ以上騒いだら貴様の憧れのイーグルにお前の恥ずかしいエピソードベスト12をビデオで渡すぞ、月砂も飯を作ってやらん」

「「申し訳ありませんでしたっ!」」

見事なユニゾンハーモニーで月砂とシルヴィアは亮にひれ伏し、

そんな3人の様子を見ながらジュリエットは腹を抱え悶えていた。

そして英国の衛士たちは眠りに着き格納庫の一部は封鎖され消灯の時間も相まって人影が完全に消えた格納庫、そのなかの封鎖領域のなかツヴァイザーゲインの前に亮と月砂がたたずみそれを見上げていた。

並行世界への扉を開くシステム、システムXN
それを搭載したツヴァイザーゲインの胴体部から天上のクレーンに繋がれた鎖が巻き上げられあるものが抽出される。

「これは…【マナウス神像】…？」

きりきりと鎖が巻き上げられる音とクレーンの駆動音が響く中、照明に照らされたそれはかつて大英資博物館に安置されていたもの。それを見た月砂がその名を口にする。

それは人の腿ほどの小さな石柱 いや、石像

それは竜の翼をたたみ直立する赤い人型
あるいは蝙蝠のような生き物を荒削りな彫刻で示しているようで同時にどこか非生物的な歪さを持っていた。

材料は玄武岩だろうか、暗黒の地肌の上に鮮やかな血のように紅い塗料が塗られ、全体的に生贄の血を浴びた邪教の神像といった風情だ。

その意匠はあまりに禍々しく“死”や“恐怖”の影を見出させ、石像に穿たれた眼窩を通して太古の暗黒神にこちらを覗き込まれているような感覚さえ覚える。

「……………【リベル・レギス】……………！」

その、呪文めいた言葉を亮が口にした瞬間、

ざわり

と、格納庫内の空気が変わった。

昏く、冷たく、禍々しく…いや、それを見しえていた者たちだけが感じているのかもしれない。

マナウス神像の一带のみが違う次元隔てられたかのようにだった。

やがて、ツヴァイから摘出されたマナウス神像が地面に置かれ余った鎖も地面に横たわっていく。

亮はマナウス神像に近づき、いつの間にか持っていた赤い布、【聖骸布】でマナウス神像を覆う。

『銀の鍵を守護せし旧き神よ第四の血印の元、無限の心臓を封じ込めたまえ！！』

亮が口訣を唱えるとともに赤い布に無数の淡く光る魔術文字が駆け巡りやがて消える。

「亮、これをどうするの？…いたずらに神の力を弄ぶものは非業の最期を遂げる。」

…知らないわけじゃないでしょ？」

「目的のためには不可欠なリスクさ」

月砂の心配そうな声に、赤い布にくるまれた神像を抱え振り向きながら亮は月砂に返す。

「月砂…俺は人間に対してとこの昔に絶望している。」

「うん、知っている」

亮の言葉に月砂がうなずく

「だけど人は…命は繰り返しているように見えるけどそれは繰り返しじゃない、螺旋なんだ。」

「だから、あなたは望むの？未来を…」

月砂の言葉に対して亮は石像を持っていないほうの拳を握りしめ見つめる

「命は決して二の轍を踏まない。だから信じれる…未来を

だから

死者を利用し、未来を奪うあいつらは…潰す

だから、魔を断つ剣が、【人間のための】デウスマキナ鬼戒神が必要なんだ。」

第二八話 円環ではなく螺旋（後書き）

YF - 22 & YF - 23 ゲット

マナウス神像、マスターテリオン（緑川）の心臓

機能的にはアイオンのアルハザードのランプと同じ”無限の心臓”という儀式魔術中枢が内包された呪物

デモンベインの獅子の心臓はこれを機械的に再現したもので並行世界への門を開き異界から無尽蔵のエネルギーを引き出す。

尚、銀鍵守護神機関に組み込むことで制御が可能となりデウスマキナの動力となる。（軍神強襲デモンベインにおいてデモンベインに組み込まれマスターテリオンと宇宙空間で戦闘を行った。マスターテリオン曰く「今までのデモンベインの中で最も強い攻め」とのこと）

デモンベイン原作においてマスターテリオン（グリーンリバー）の搭乗機、リベル・レギスの動力中枢にしてマスターテリオン（鮮血神ズウアイア）の心臓

第二九話 神の名を汚せしモノ達（前書き）

クラウディウス：ローマ4代目皇帝、体が不自由で4人目の妻に毒殺された

ネロ：ローマ5代目皇帝で暴君として知られるが民衆からの支持は高く彼の墓標には花が消えることがなく、暴君については鉛による中毒、精神障害の可能性があると指摘されている。

ミドティアヌス：ネロの蘇りともいわれるローマ皇帝の一人（実際にはキリスト迫害しか共通点はないが）

第二九話 神の名を汚せしモノ達

指揮官に充てられる士官室

そこで亮はデスクトップに並べられた無数のモニターに向かい合いデータを読み取っていく

いくつかのモニターには不知火・アクティブイーグル・タイフーン・YF-23などさまざまな戦術機の詳細なデータが映し出され、さらに他のいくつかのモニターにはアルファベットや数式が映し出され高速で移り変わっていく。

「…やはり、そうなるか……」

そんな中、幾つものモニターの内一つに亮は注目している。

それにはCGで球体の断面図と太陽系の惑星周回軌道が表示されるものがシミュレートされていた。

「このままでは…地球は、この星は………人間によって滅ぼされる……！」

地球の断面図では赤く表記された一部分が陥没しそこを覆うようにその周囲がせり上がりその部分を埋め立てる。

その赤い一部分にはユーラシアプレートという表記がなされ、また惑星の周回軌道図では本来の起動とは違う内側に“ずれた”軌道が赤い線で表記されていた。

「急がなくては…【再誕^{リバイ}】を……」

亮が重々しく若干焦った声色を室内に響かせる中、【4GL 01 a Sirius】と

【4GL-02a Fenrir】と銘打たれたそれぞれタイプ
ンとYF-23の特色を持つ機体がモニターに映し出されていた。

果たしてこれから生まれるであろう牙狼は人類に勝利をもたらし、
BETAに終焉を運ぶ鍵となりえるのだろうか…

それを知る者は現時点において運命の女神のみである。

「せいぜい持ちこたえてくれオルタネイティブ4の盲目暗愚たる輩
たちよ…“その時”までな…」

第二九話 神の名を汚せしモノ達

明星作戦後の横浜、

夜明け前の空がうつすらと明るくなる東雲と呼ばれる時間帯

一機の不知火が長刀を持ったまま直立不動で異形の死骸の中で立ち
すくんでいた。

そのUNブルー、国連軍の証であった薄い青色は異形の赤黒い返り
血によって染まり上がり乾化しこびりついていた。

そんな不知火に返り血の浴びていないUNブルーの不知火が跳躍ユニットの爆音を引き連れ宙を翔け近づく

「ヴァルキリー3からヴァルキリーマム応答を願う」

不知火はその直立不動の不知火を空から見下ろしながら通信を飛ばす。

「こちらヴァルキリーマム、感度良好どうしました？」

「A-01の不知火を発見した　　搭乗者は鳴海　孝之」

「機体及び衛士の状態はどうですか？」

「機体に目立った損傷は無い　　しかしバイタル反応無し、これより直接確認を行う」

指揮所のCPの応答を聴きながら不知火は跳躍ユニットの推力を調整しゆつくりと荒野と化し、今や異星からの侵略者の死骸に埋め尽くされた横浜の大地に降り立つ。

不知火は二足歩行で機械的駆動音とともにその歩を進め朱に染まり不動の不知火の向かいへと移動する。

そして指揮官権限を行使し向かい合う不知火のコンピューターにアクセス、コックピットハッチを開かせる。

自分もコックピットハッチを開き、渡しに不知火の主腕を用いて飛

び移る。

そして目にしたのは…

『こちら、ヴァルキリー3

鳴海 孝之少尉の死亡を

直接確認、死因は不明』

目を見開いたまま、操縦桿を握りしめたまま息絶えた彼の姿だった。コックピットには衛士がよくお守り代わりに持ち込む私物、彼と彼の同期であり親友でもあるMIA認定された人物と事故により任官の遅れた二人の少女の『4人で写った写真』が貼られていた。

『了解 鳴海 孝之少尉をKIAと認定します。指示は追って通達します。』

ヘッドセットの通信が途切れるとともに”彼女”はその強化装備に包まれた手を伸ばす。

「せめてこれくらいは……」

見開かれたままの臉をそつと閉じさせ、操縦桿から死後硬直で硬くなった腕を外させ写真を手に体の前で組ませる。

「もう、終わったんだ 休め」

帰ることのない声を掛ける。

しかし…彼女には心なしかその表情は穏やかな眠りについたかのように見えた。

彼女、伊隅　みちるはふと、開かれたままのハッチから差し込む朝陽に気づく

「暁に死す　　そんな言葉があつたな」

伊隅　みちるの言葉は朝焼けの大地へと消えていった

1999年、8月6日

明星作戦は一応の成功をおさめ日本は本土を奪還することに成功する。

しかし、本来ならば勝利の美酒をあおっているはずの戦士たちの間には、勝気な空気は流れず。多くの戦友を失った悲しみと後ろから撃ったアメリカへの憎悪と怒りが渦巻き重々しい空気が流れていた。さらに、アメリカのG弾の有用性を証明したという声明によってG弾を推進する後方支援国家とG弾脅威派の最前線国家とに世界は二分される。

人類は未だ一つとなることはなかった…眼前に滅びが迫っていると

いうのに。

そんな中、東雲 亮率いる艦隊は、帰還のための補給に横浜から最も近い東京湾に建設された軍港に寄港し補給、明星作戦の折戦場で収容した負傷兵の引き渡しを行っていた。

「こちらの書類にサインをお願いします。」

「ああ、分かった」

塩風が靡く中、引き渡した人員やその亡骸、受け取る艦の燃料や武器、弾薬……その他もろもろが書かれた書類にサインを入れる亮。

「たしかに、ではこれにて失礼します。」

サインの入った書類を確認し担当の帝国軍人は亮に敬礼を返しその場を後にする。

亮はそれを視線で見送る。

そんな時

「やあ、君が東雲 亮という人物かね？」

亮に背後から声をかける紺色のコートと帽子を羽織ったスーツの男性が声をかける。

それに対して亮は振り向きながら辛辣に返す。

「そうだが、人を訪ねるときは自分から名乗れ。」

「これはこれは失礼…私は鎧衣 左近というものだが……君はネロ

「についてどう思つかね？」

鎧衣左近と名乗った男は亮に飄々と返し、何の脈絡もないことを訪ねる。

「ローマ第5代皇帝、ネロ…666獣の数字を指すと言われ『キリスト教（オルタネイティブ4）』を迫害した皇帝、奴隷（G元素）と恋（使用した）に落ちた禁忌の徒…」

なるほど…言いたいことは分かったぞ。貴様は第4計画クラウディウスの支持者か。

「

「ふむ、博識な人物との会話は遣り易くて助かるな。で、質問に答えてはいただけるのかね？」

鎧衣は目の前にいた人物の評価を改める。

初めは自身の知る“とある天才”と同種の人間かと思ったが全く違う人種であると

かの天才は盗聴などの危険からわざわざ遠回しに比喻を用いて説明しているというのに直接言葉に直させる。

いくら無駄が嫌いと言っても軍事に携わるのに直接言葉で交わすのは危険すぎるというのに理解しない。

その点、目の前の人物は自分の暗号と呼ぶにはいささか稚拙だが、即座にそれを理解し同種の暗号を持って自分の立ち位置を理解した

のだ。

相手に合わせる協調性も持ち、ある意味力任せの天性と反対である。

「愚行の極みとしか思えん、自分で自分の首を絞めている。まさしく史実道理に自分の喉を剣で貫くことになるだろうな」

まるで、優秀な秘書と会話している気分に陥りながら亮の答えを聞き届ける。

そして自身が手に入れたカードを切る。

「ほう？…君のミドティアヌスではそれが解決されると？」

「貴様、どこからそれを知った？」

彼の目つきが鋭くなる、自身よりもかなり年下であるはずの若造に戦慄を覚える、のど元にナイフを突きつけられているような錯覚さえ覚え、知らず知らずのうちに手の平にいやな汗が浮かぶのを感じる。

「……………イギリスの地下深くには理想郷アウアロンがあり、そこには守護者たる赤き竜が眠っているそうです」

「…俺は、クラウディウスもネロも認める気はない。それらの先は破滅と決まっている。」

夏の日差しがじりじりとアスファルトを焼き、その熱気が二人を包み込む中、暗に言ったのだ。

どちらにしても人類は…

滅ぶと

「それはそれは……どうしてかな？」

「ネロについては言うに及ばず、クラウディウスについては……酷過ぎる、情報について確かに必要であろうが力がなくては無意味だよ」
情報は最大の力だが、有効活用できなくては意味がない。
情報があれば最低限の力で効果的に相手を打倒できるがその最低限の力さえ人類にはないのだ。

「もっと言うなら……自分たちに危害を加えることのできる存在が現れたら貴様ならどうする？」

「っ！……！！！」

鎧衣は気づいてしまった……BETAの巢、ハイブを監視している人工衛星……それが今まで危害を加えられず存続しているその意味、散発的な着陸ユニットの襲来と一軍隊のみで防衛ができてきている意味BETAが圧倒的な物量を誇りつつ最低限の攻勢にしか出ていないこと、
そしてBETAが外宇宙から飛来したという仮説……

全ての情報がパズルの断片となり組み合わさり、第4計画と第5計

画双方の行く末を鎧衣の脳裏に描き出す。

人類はBETAに未だ“脅威”とさえ認識されていない、だから破壊の一手手前で抗えていられる。

だが、仮に第4計画と第5計画どちらか…あるいは双方によって地球からBETAを排除できたと仮定しよう。

BETAは手法は分からないが全ハイブで情報共有が行われていることが第3計画の結果から知られている。

もし、地球からハイブとBETAを根絶できたとして、それが引き金となって全宇宙のBETAに地球人類は脅威と認識されてもしたら…

仮に…全宇宙のハイブで情報共有が行われているとしたら…

「気づいたか、だから必要なだよ。神をも殺せる剣…そして、あらゆる災厄を跳ね返す盾がな

“イージスの盾”と“ハルペーの鎌”それを自らの手で生み出さなくては明日はないだろう」

蝉の鳴き声が鳴り響き、陽炎が周囲の景色をゆがめる中で彼の先見に驚愕し、畏怖する。

…と同時にナイフを首元に添えられているような感覚・殺気がきえていることに気付き安堵する。

「テストドライブ、プラズマジエネレーター…それだけで足りるのかい？」

鎧衣は声をふるえわせながら、すぐるように亮に問いかける。鎧衣が得た情報によるとそれらの技術は既存の兵器の概念を塗り変えるだろうが、人類の救い手にはなりえないはずであったからだ。

「足りんさ」

しかし、帰ってきたのは否定、目の前が真っ暗になり地面がないに等しい不確かなものを感じられる錯覚に陥る。

「だが、まだ剣は竜の胎盤の中で眠っているのさ、真打は未だ一振りさえも生まれてはいない。」

希望はある…と亮は言外に言っているのだった。

「わかった、私にできることがあれば何でも言ってくれたまえ力になるっ」

鎧衣はかの天才を見限るのを決めたのだ。

「しばらくはクラウドイウスを持ちこたえさせてくれ…ネロはともかくあれには利用価値がある…抑える意味でも今、潰れられては困る。」

「誠心誠意、頑張るとするよ。かの美女は少々気難しくて大変なのだが…」

「せいぜい、頑張ってくれ美女の相手は貴様の望むところだろ？」
にやりつと皮肉気な笑みを鎧衣に向ける亮、それを受け鎧衣も帽子を深く被り直すがその口元に同じく皮肉気な笑みを浮かべている。

「それでは、機会があればまた会おうとしようか…紫電の刀王、今度何か出張先のお土産を持ってくるとしようか。」

「せいぜい、期待しておくでしょう…課長殿…」

夏の暑さに似合わない怖気を誘う冷たい空気を後にして二人はその場を後にしたのだった。

第二九話 神の名を汚せしモノ達（後書き）

TEロシア編でアイオーン出します。

第三十話（前書き）

デモンベイン解説にデウスマキナ・アイオーンを追加しました。

第三十話

我が親愛なる日本国民の皆様

先年の折、我らの郷土は多くの将兵の奮戦むなくBETAによって蹂躪され3600万という尊い命と共に灰塵と化してしまいました。

そして、私たちはさらに多くの犠牲を払いこの地を奪還しました。

しかし、未だ我が国は異星起源種との戦いにおける矢面に立っており、余談を許さない状況です。

しかし、私たちは誓い戦わなければならないのです。

嘆きと共に散った命に

子を守れなかった父の無念に

子に明日を与えられなかった母の涙に

親を奪われた子の叫びに

愛しきものを略奪された憎悪に

私たちがこの胸に抱く想いに誓い、散って逝った命に報いるために

いつの日か取り戻さなくてはならないのです、誰もが明日を笑って迎えられる世界を

子供たちが健やかに育ち、親がそれを見守り、先人たちが安心して眠れる世界を

逃げてはならないのです、自身が自身たらしめる何かを守るために何より、生きることから逃げてはならないのです。

故に今日この日、我らが大地を取り戻し我が母なる星で生きてゆく決意を新たに戦い取り戻しましょう！

緑あふれ、四季の移り変わる私たちの故郷を、私たちの星を

戦いましょう、抗いましょう、例え相手が神であろうとも命を奪い故郷を奪う権利などありはしないのです。

誰かが英雄になれるのなら

誰もが英雄になれるのです

理不尽に抗い続けた者だけが英雄になれるなら、共に抗い戦い英雄となりましょう。

「姉上……」

とある武家屋敷、井草の匂いと木の香りが交じり合い落ち着く雰囲気
気を漂わせ

ちりん、ちりん

と夏の風に風鈴が揺られ涼しげな音色を奏でる。

そんな日本の特有の空間である居間に設けられたモニターを見つめる
一人の少女、

少女の顔立ちは画面に映る少女と瓜二つであり、髪型と毛色のわず
かな違いがなければ判別することなど不可能であろう。

画面に映し出されている少女、征夷大將軍 煌武院 悠陽とまさしく
生き写しの少女は名を御剣 冥夜と叫んだ。

「冥夜様……」

そんな少女を後ろから見つめる流れる柳のような長髪を携え、紅き
軍服を纏った女性

月詠 真那に冥夜は語りかける。

「なあ、月詠…私は、私がこの御剣に預けられた意味はなんだろう
かと常日頃から考えておった…」

「……………」

「御剣とは御まもるための剣、私がこの家に預けられたのは姉上を姉上
が守ろうとするこの世界を守るための剣となるべくしてだと思っ

だ。」

「冥夜様…まさか!？」

「国家が象徴たる姉上は前線にでて将兵と共に命を賭けることは出来ん、そんな姉上の代わりに剣となりて戦場を駆ける…それこそが私の役目ではないかと思うのだ。」

強気意思をその瞳に宿した少女は、自身が受けるかも知れなかった重責をそのか細い躰で一身に受ける姉を想い剣となる覚悟を決める。一体誰がそんな切実な願いと覚悟を止めることができようか…

「私は…人類の守り手たる衛士となる」

ちりんちりん

と風鈴が悲しげな音色を奏でていた、まるで平穩に暮らしてほしいという直接会うこともかなわない姉の心を願い表すように…

軍港に停泊している戦術機母艦の甲板の上で夏の日差しがジリジリと照りつける中、EUIギリス軍の軍服に身を包んだ東雲 亮は潮風に充てられながら軍港の放送施設から流れる声を聴いていた。

『誰かが英雄になれるのなら

誰もが英雄になれるのです

理不尽に抗い続けた者だけが英雄になれるなら、共に抗い戦い英雄となりましょう。』

「やれやれ…あの小さな少女が大きくなったものだな…」

若干の苦笑に懐かしさを秘め亮は語りかける。

「そうは思わんか？刃菊よ…」

「そうだな、かつての我が主よ」

亮の後ろにいつの間にかたたくむ黒い影が集まってできたような犬がそこにおり、紅い瞳を亮に向け人語を口ずさむ

「……いや、なれが思っているより大きく、そして強く、そして気高く育っているぞ」

「撒かれた種は育っている…ということか………刃菊よ、彼女は“開眼”しそうか？」

亮は揺らめく海面を見つめながら背後の黒犬に問いかける

「いまだ、その兆候はない。血が薄すぎるのか…確かに力は在るのだがな」

「そうだな、力は同質のモノと引き合うモノだ…でなければ俺とあの娘こが出会う理由もない、いやそれさえも運命だったのか…：ともかく…：いざというときはお前が抑えろ、あれは人には過ぎた力だ」

亮の言葉と共に黒い犬の姿が揺らめく

誰にもものを言っている我は犬神、守護せし巨魅かみぞ必ずや護り抜いてみせよう

言葉を風に残し黒い影の犬はまるで霞の如く消え去る。

ではな、かつての我が主よ、汝の救世主が見つかることを願っておるぞ

風に乗り黒き犬神の声が亮に届くのであった。

「ああ、待ち遠しいぞ、君と出会え繋がるその時がこの世界にいるであろう君よ…」

亮は陽光を受けて煌めく水面の遙か彼方の水平線を見据え、手を伸ばす。

そして演劇のように寸劇の様に詠いかける

「俺が世界を救おう……だから、この世界のどこかにいるであろう我が君よ、

君が俺を救ってくれ、この渴きを餓えを癒し、温もりをくれ、
そのために俺は折れた翼をはたかせ戦場を駆けよう。

憎悪の空から流れ落ちた涙と怒りの炎で剣を鍛えあげよう。

天翔ける龍の胎盤から救世主の鎧を生み出そう。

……だから、俺を救ってくれ……」

亮はすでに出会っているかもしれない、まだ出会ってもいないかもしれない存在に祈りを捧げ懇願する。

“ ギイ、ギギイイイイイ ”

細長い楕円形のテーブルが置かれ席についていた面々がその開かれた扉から現れる人物へと視線を注ぐ。

その部屋の一番奥にテーブルを挟んで扉との反対側に数段の段差が

ありその奥に設けられた豪華な装飾がなされた椅子の手すりに顎を着き今しがた開かれた扉を見据える一人の男性、

「よく戻ったなランティス」

「ハッ！ランティス・マクガヴァン召喚に応じ馳せ参上いたしました。」

ピオニー9世陛下」

その男性は綺羅やかな金髪を肩口まで伸ばし、肌はうっすらと日に焼け小麦色となっており活発な青年といった風貌だがそのたたくまいからは王の威厳がにじみ出していた。

その青年に対しランティスは片膝を着き忠誠を表す。

「いいぞ、ランティス…席に就け…そちらはダッスオーの跡取りか
エンドルフィンは息災か？」

「はい陛下、父も社員ともども彼の計画により大いに張り切っていますよ」

ランティスの背後にたたずんでいたイーグルはピオニーの問いに笑顔で穏やかに返す

「それは何よりだ…イーグルはその東雲の席にでも座ってくれ、
悪いが席がないんでな」

「はいわかりました。ではお邪魔させていただきます。」

ランティスとイーグルはそれぞれピオニーに最も近い席の両側に着く。

「会議を始めるぞ…題目は知ってる通り、【横浜とG弾だ】。」

第三十話（後書き）

アビスキャラ出しました

外伝とは名ばかりの外伝その一

外伝 その一

マサセーセツツ州、アーカム

アメリカの片田舎にあるこの町にはミスカトニック大学という町の規模に反して巨大な大学がありまるでロンドンの時計塔の様に優美さと積み重ねられてきた時を感じさせる長大な時計塔が聳え立ち町を見下ろしていた。

「ここね…」

そんな時計塔の麓に腰まで伸びた白髪をなびかせ年端十代半ばから後半であるう少女が時計塔を見上げていた。

その少女の瞳は神の証である金色であり、ただそこにいるだけでひれ伏してしまうような圧倒的な威圧感、神気を纏いその容姿はまるで美の神の様に美しく画家がその姿を描いても即座に自分で破り捨て、写真家がいかなる角度からレンズにその姿をおさめようともし決して満足などできない幻想的な美しさを持っていた。

少女は時計塔内部に作られたミスカトニック大学図書館へと続く扉へと歩を進め扉に手をつける。

「……これは“ドル・ドーニの時計塔”なるほど空間的にも時間的にも断絶させて中にある最悪の災厄を閉じ込め守っているわけね…

でも、私には無駄」

時計塔の扉に時計が浮かび上がる、それは心臓の様に無数の血管が浮き出て扉に生えていた。

まるで、どこかの吸血鬼の少年の物語で悪い魔法使いが持っている心臓で出来た懐中時計を連想させる。

「趣味が悪いよ」

ドオオオオオオオオオオッ！！！！！！

言葉と共に少女の右手から青白い雷撃が放たれ、扉を吹き飛ばす。

「私の主は時の皇、この程度の時間断絶なら式神の私でも簡単だよ。」

吹き飛ばした扉から続く時計塔内部へと侵入する。

内部は壁全てが本棚となっており、頂上へと続く螺旋階段が闇のような天上へと続いていた。

少女はまるで奈落の底を覗き込んでいるかのように吸い込まれそうな天井を見上げる。

「……………あれは、頂上だね」

空気は希薄、しかししっかりと感じる死と闇それに獣の咆哮の空気を感知取る。

少女は螺旋階段を一段一段と歩を進めゆっくりしかし確実に目的の

モノへと迫っていく。

カツン、カツン、カツン、

螺旋階段の先に存在する一室、そこへ少女は足を踏み入れる。

その部屋には、見るだけで狂気を催す絵や人の骨格標本のような奇怪なオブジェなど猟奇的な何かで埋め尽くされ真面な存在など一切ない、壁一面に収められた本に関しても同様である。

495

妖蛆の秘密

水神クタアト

エイボンの書

屍食教典儀

無名祭祀書

英訳ナコト写本

新訳ネクロノミコン

悪名高き狂気の魔導^{レブリカ}が記された魔同書たちである。

もっともすべて写本であるため概念が軽く宝具としての能力は数ラ
ンク低く危険度も比較的軽いモノ達ではあるが。

「さて、この向こうだね…」

少女の金色の双眸がさすは部屋の奥に設置された五芒星が旧神の印が描かれ白く発光している扉。

しかし、かつて太古の百邪、外なる神すべてを封じ込めた旧神の印を持ってしても抑えきれない濃密な闇の気配が黒い瘴気となって扉の隙間から漏れ出していた。

バアアアアアアんっ！！！！

扉が開かれる、濃密な闇の本流が津波となって流れ出て少女を襲う。

「この程度の瘴気、私を害するには足りないなあ」

闇の津波を物ともせず歩を進める少女。彼女の周囲には絶えず白雷が奔り、少女の体をつつすらと覆うキラキラと光る光膜が闇を払いのけていた。

少女は部屋の奥に無数に立ち並ぶ本棚の中から一冊の本を引き抜く」

「見つけたよ」

本には分厚い革表紙で覆われラテン語で題名が記されていた。

ネクロノミコン
死霊秘法

「御嬢さん、開館時間はとうに過ぎているのだがね？」

ふと少女の背後から声がかげられる。

少女は本を手にしたまま声の主におそらくは高齡の男性に向き直る。

「ヘンリー・アーミティッジ」

少女が老人の名を口にする老人は高齡のためか禿げ上がった頭部にわずかに残る白髪を米神に残し、ブラウンのコートとその下にスーツを羽織り、少女を睨みつけていた。

「ほう、私を知っているか。ならばここの規則は……それは……！」

アーミティッジは少女が手にしているもの見て愕然となる、それは焦りからだ。

「伝説の三銃士にお会いできて光栄だよ。

私は月砂、時の皇を頂きにおく嘗ての五大神が「稲荷神」」

「ネクロノミコンをどうする気だ!？」

「別に、どうもしないよ。この星にいや宇宙に巣食う敵を滅ぼすの必要だからもらっていただくだけ」

「どづいつことかね?」

「くすすす……、物語はこれからだよ? ネタバレ禁止 ……じゃあね」

少女、月砂の体が内から噴き出る閃光に包まれる。

「待て! ……!」

待たないよ

閃光の中から一匹の白い狐が飛び出しアーミテッジを抜き去り今しがた月砂自身が入ってきた扉から消える。

「一体……何が起ころうとしているのだ………？」

独り残されたアーミテッジにこたえる者は誰もいなかった。

亮、やっぱりあったよネクロノミコンの完全な写本、ラテン言語写本が

そうか、じゃあ月砂も一つの目的、YF-23奪取を行ってくれジュリエットが先行して潜入している合流して“任務”をおこなってくれ

了解、我が主様
気色悪いやめろ

ひびくっ！！

外伝とは名ばかりの外伝その一（後書き）

コツコツとデモンズインフラゲが立っていく

第三一話 狼の胎動

明星作戦から二か月：1999年10月

イギリスの王都ロンドンに設けられたイギリス陸軍専用戦術機倉庫で一人の青年が自身の愛機たる戦術機を見上げていた。

青年は欧州にしては珍しく東洋人であり、色素が薄いのかやや茶髪に近い髪にブラウンの瞳を持ち極限まで鍛え抜かれ無駄な筋肉さえそぎ落とした体つきは鋭い視線と相まって一振りの日本刀を連想させる。

そんな青年：東雲 亮が見上げている愛機タイフーン：であったものそれはすべての装甲が取り払われ剥き出しのセンサーやその巨躯のあちらこちらで機体を整備する整備員がまるで死体に沸いた蛆を連想させ鋼の骸を連想させる。

…が実際は生まれ変わっているのだ。

天翔ける天狼として…

明星作戦後各国にてアメリカの声明とG弾についての閣議が開かれ、その後G弾脅威論派と推進派と呼ばれる二つの派閥に世界は別れることとなった。

主に脅威派は国を蹂躪されたモノ達が脅威にさらされ続けているモノ達の国

推進派は未だBETAに蹂躪されていないBETAの恐怖に怯えている国

二つに分かれていたが、イギリスから発表された真実により世論は大きく変動する。

明星作戦に参加していた、ウォールのインディアンのG弾の観測結果とそこから導き出された結果に世界は震撼する。

原子崩壊を引き起こすほどのブラックホールに匹敵するほどの超高重力それがもたらすのはユーラシア大陸の地殻沈没とその周囲の海底のせり上がりによる大海崩：地殻津波と呼ばれる現象だ。

そしてそれは地球の周回軌道にも大いに影響を与える。

太陽との引力と遠心力のバランスを崩し本来の惑星軌道から地球を弾き飛ばす。

それによって引き起こされる災害は被害はいかなるものだろうか…

いや、最終的には地球そのものが太陽へと落ち消滅するだろう。

「いいか、貴様らが引こうとしているのは地球滅亡のシナリオの引き金だ。其れでも尚その引き金を引くというのなら…貴様らは人類の…いや、地球の【敵】だ。」

イギリス皇帝、ピオニー9世は国際会議の場で宣言した。

さらにダメ押しとばかりにG弾の特性の一つである迎撃不能性も否定された。

G弾…それはフェイズ5以上のハイブ内で生成される特殊元素、グレイン11を使用した重力制御機関、ムアコック・レヒテ機関の構造を簡略化させ反応を暴走させるものである。

つまり、原子力の核分裂における水や重金属体といった反応を抑制する物質を取り除いた爆弾。

これは、G弾に大量の反応抑制剤を打ち込めばG弾を無効化できることに他ならず航空戦力に対して光線級が誕生したようにG弾に対しても同じことが起きる可能性が十分にあったのだ。

これらの事実をうけてG弾推進派の大部分も意見を翻しさらに事前警告もなしに友軍もろともBETAを葬ったアメリカに対しG弾脅威論ならぬアメリカ脅威論が各国で巻き起こる。

誰が好き好んで平気で後ろから仲間を撃つものを信用するのか。強大な軍事力を保持しつつ全く信用のおけない国、それは唯の脅威にしかない。

そして同時に世界の鼻つまみ者となったアメリカが提案し準備を始めている第五予備計画は発動を無期限延期されるのであった。

そんな中、イギリス軍はユーロフェイタス社とダツスオーの二社の協力を仰ぎ奪取したYF-23を解析、タイフーン4GLXをベースに改修を加えた次世代機を開発する。

ECTSF計画は途中脱退したフランスを加え当初の目的であった高性能国産2世代戦術機の開発から発展に次ぐ発展を繰り返し世界初の第4世代戦術機を実用化することを最終目標とすることが目的となりその第一号たる【4GL01a Sirius】が今まさに組み上げられていた。

「やっと…ここまで来たか…」

感慨深げに亮は改修を受けている愛機を見上げながらつぶやく

思えば長いようで短い道のりだった。

まず初めに発言力を得るためにナイト オブ ラウンズのNO、1ランテイスに御前試合を挑み勝利しラウンズの末席に名を連ねることから始まり、新概念の提唱と基軸となる技術理論の提供、その実施試験などに一年

タイフーンを4GLXへ改修し動作試験を重ねる3年、幾つもの技術革命を意図的に引き起こしその技術のデータ蓄積による細かい改修などにこの数年のほとんどを費やした。

SRX計画の雛形となったヒュッケバインを建造できるまでに何とか漕ぎ着けた。

「リヨウ」

戦術機ハンガーに設けられた通路を歩いてきたイーグルが声をかける。

「イーグルか…調子はどうだ？」

ランティスとの御前試合の直後に声を掛けられてから親しくなったフランスのダッソー社長子息である彼の手引きであらゆる技術革新がスムーズに行われた。

「はい、順調ですよ。あなたの4GLXの動作データはそのまま我が社のラファールに反映できますし新型モジュールを共通して装備するにあたってとても参考になりました。」

自身の機体はタイフーンよりも剣戟戦闘に秀でた機体でありすでに実戦配備が始まっているラファールの部品を使い強化したためほとんどのデータが共有出来たのだ。

「それは行幸だな」

イーグルと亮の二つのブラウンの瞳から放たれる視線がクレーンで吊り下げられたYF-23ブラックウイドウ?の肩部モジュールと瓜二つの灰色の木目の鋼材で構成されているパーツへと向けられる。

木目の鋼材…それは新素材、ハイパーカーボン…通称HCである。

カーボンナノチューブ構造体であるダマスカス鋼をテスラドライブによる超高重力下で精錬しカーボンナノチューブを超高密度に育てた物質でありアルミの4分の一という軽さと鋼鉄の200倍の堅牢さを持ちその強度は突撃級の甲殻さえ余裕でしのぐ

その新素材で作られた肩部モジュールこそ第4世代機開発に当たって障害となっていた肩部に浮遊用テスラドライブと兵装担架の二つを同時に装備するというものを解決するものである。

506

機体の倒立性を強化し高機動を実現するという日本から受け継がれた戦術機構想は欧州の戦術機開発に大きく受け継がれている。

そのため推進用のテスラドライブを背面の兵装担架に装備し、腰部の跳躍ユニットを排する方式が設計段階から考案されより人型に近く高機動を実現するための段取りがとられた。

将来的に月や火星などの宇宙空間での運用するにあたって今の空気に頼った推進方ではだめなのだ。

：いやそもそも地上のハイブ内部奥深くに酸素が残っている保証さえせないのだ。

戦術機はジェットエンジンとロケットエンジンのハイブリットである跳躍ユニットから電力供給をうけて稼働しているが酸素がなければジェットエンジンを動かせず一気に活動限界が来てしまう。

つまり今の戦術機では真に人類の敵を断つ刃となりえないのだ。

そんな中、アルテリオンのツインテスラドライブを発展させアステリオンが二機のテスラドライブの負荷率を分散させる方式とは違い機体本体に浮遊用と背面兵装担架に推進用と役割分担させたテスラドライブで高機動を実現する方式をとった。

テスラドライブの機能を限定することで小型・高性能化させるといったものだった。

しかしハイブ突入を考え戦闘継続時間を大幅に延長させる必要も発生した、タイフーンやラファールは固定武装が多く手持ち武装の多くを失っても戦闘は可能だが一つ問題が発生する。

リーチの問題だ。

剣道三倍段という言葉をご存じだろうか？

素手の人間が剣をもった相手に勝つには相手の3倍の段を持つほどの実力が必要で剣を持った人間が槍を持った人間に勝つにはさらに3倍の段が必要ということだ。

つまりたとえ近接武装のみの機体であろうとその武装を失ったとき単純計算で戦闘力が3分の1から9分の一まで低下してしまうこと

になる。

これは非常に問題であり、これを解決する手っ取り早い方法は初めから多く持っていることである。

補給のないハイブ攻略戦には兵装担架増設は避けては通れない道であり、本来跳躍ユニットが装備されていた腰部それに肩部の計4か所に兵装担架を装備するという方式が採用されることとなった。

：が今までにない方式であったためソフト・ハード共に開発が難航していた。

そんな折、亮がアメリカ特殊部隊から奪取したYF-23のデータを流用することによって試験期間を大幅に短縮することとなりタイフーンは天駆ける虎狼：天狼^{シリウス}として再誕生するのだった。

第三一話 狼の胎動（後書き）

今回簡単なうえ尻切れトンボですが勘弁してください…

次話から新章でドイツの話に行きます。

第三二話 黒夜（前書き）

オーストラリアじゃなくてアフリカでした（ー・ー・）

第三二話 黑夜

BETAの進行を水際で食い止めている大陸、アフリカ…

その北沿岸部をジェットエンジンの爆音を引き連れて低空を翔ける
4機のMiG-27アリゲートル…

F-4ファントムに機動格闘能力を付加させるべくソビエト連合に
よって再設計されたチボラシユカの再設計強化戦術機であり母体が
第一世代機F-4でありながら第二世代戦術機にカテゴリーされる
第二世代戦術機である。

(この高度なら国境付近のレーダーにも捕捉されにくいはず…！)

東ドイツ軍 第609戦術機中隊に所属するフォルカ・エイセル中
尉は身を焼くような焦燥に蝕まれながら作戦成功の確信を抱く

(あと十キロ…そこまでたどり着ければ、俺たちは自由…そして奴
らのお終いだ…！)

戦術機を強奪して基地から脱出できた時点で亡命計画は半ば成功し
たのも同然

フォルカは自らの思惑の正しさを実感する。

後方の基地からいくつものサーチライトが一斉に伸び闇夜を切り裂きながら振り回される。

甲高いサイレンの音も聞こえてくる

(もう遅い、こっちは戦術機だ…突破してやる)

「だ、大丈夫なんでしょうか……」

二番機を操る衛士が怖気づいたように尋ねる。

「国境付近には、シュタージ国家保安省の戦術機部隊がいると聞いていますが……」

シュタージ
国家保安省

それは東ドイツの政権を担うドイツ社会主義統一党が自らの一党独裁体制維持のために組織した秘密警察・情報機関だった。

それは東ドイツに住まう…いや所属する者たちにとってBETA以上の恐怖だ。

彼らは情報提供者と呼ばれる密告者を国中に配置することで市民の言論を隅々まで監視し、反対分子には徹底した弾圧を加える。

彼らに連行されたものは大概生きて帰ってくることは……無い。

それが冤罪であろうとなかろうと関係なく。

「大丈夫だ。奴らは俺たちの計画に気付いていない。追撃を受けたとしても後方であんなくだらないことに全力を注いでいる奴らが、何千何万ものBETA相手に鎬を削ってきた俺たちに勝てるはずがない!!!」

(だからこそ、奴らもこの国も許しがたい　　っ!!!)

フォルカは憎しみを込めて闇夜の彼方を睨みつける。

学生時代から付き合っていた恋人の笑顔が脳裏によぎり耐え難い感情の猛火が身を焼き心を焼き尽くす。

(あいつは奴らに連行されて…棺に入って帰ってきた…!ただ…親友の家族がベルリンの壁を越えようとしていたのを事前に知っていただけで…)

第二次世界大戦においてドイツは東半分をソビエト連合が、西半分をアメリカが占領し戦後の復興の際に占領国の政治体系が大きく影響を及ぼした。

二つの国は鋼鉄の壁で裂かれそれぞれで独自の政治体系を構築するもそれが原因となり元の一つの国に戻ることはなかった。

例え故郷をBETAに蹂躪されアフリカ大陸へその機能を移しても…

さらに両方とも元の一つの国へ戻るといふ野望を抱きながらも実際に政治体系は自分のモノを適用させようとするため国土を失いながらもベルリンの壁は健在だった。

そんな歴史をのせいか
ソビエトが残したのは差別と貧困そして…悲劇と生きる意味を失っ
た者たちと肥え太った豚だけだった。

そして、フォルカは手に入れたはずの幸福を奪われた…そのくだら
ない社会主義国のメンツを保つためという…肥え太った豚の見栄の
せいで

棺に入った変わり果てた冷たくなった動かなくなった最愛の人

国家保安省局員の説明だと

死因は取調室での首つり自殺

だったか…

彼女が亡命を手助けしたと局員たちが判断、ほかの仲間たちの情報
を聞き出そうと暴行した結果に違いなかった。

（あいつのお腹には年明けに生まれるはずだった俺たちの子共がい
たんだぞ…）

得られなかった幸福が決して癒える事の無い傷となって胸をえぐる。
歯が砕けんほどに噛み締める。

抉れた心が憎しみの炎を灯し、さらに心を削っていく

国に対して誇りも何も持つてはいなかった。

移住した土地に愛着があるわけでもなし、あんな糞みみたいな言論の自由もない24時間監視されている国をどうして誇れる、恐怖に支配された国が何故正しいと言える。

それでも戦ったのは自分が戦っている限り、守りたい者たちを守れるからに他ならなかった。

しかし、自分が国を守ったのに国とそれに喰食う豚とその手下どもは奪った。

もう、この国のためには戦えない……いや、滅ぼしてやる
本当の意味で戦うのを決意したのは怒りからだ

亡命者が絶えないこの国で自由を求めるもの、絶望の淵に落とされたものは後を絶たない、
同志を集め、東ドイツの内情を他の国へ知らせ正式にドイツ国民の救助を求めることにした。
そこに住んでいる物からの直訴であれば他国軍であろうと大義名分
が得られ現政権を滅ぼせる。

幸い、その足がかりは向こうからやってきた、

鎧衣 左近

怪しい人物ではあるが彼の話は渡りに船だった、とある人物がBETA反攻作戦を立てておりそのためには各国の意思統一が必要であり見栄ばかり張っている夢想主義国はいらないため排除するという目的だったらしい。

俺は、豚どもに復讐できればそれでいいが…

(もし、復讐が終わって俺の命が残っていればBETAのいない世界を実現するために命を使うのもいいかもしれない…)

どうせやりたいことはないし、生きる意味もない。

どうせ無為に過ごすのなら世界のためとやらに戦うのも悪くない。

口元に微笑が浮かぶのを感じた。

「中尉！背後から敵味方不明機二機が出現！
アンソウン

戦術機です！

「！

来たようだ…愛しい怨敵が

「振り切れっ！！もうすぐ国境だ、迎えの部隊がいる手はずだ！！」

フォルカは随伴する3機のアリゲートルの衛士に指示を飛ばし、フットペダルを押しこむ、跳躍ユニットの内部機関が変形、密室を作りだしロケットエンジンが点火

ジェットエンジンがアイドリング状態のまま跳躍ユニットはロケット噴射で機体に加速を与える。

「駄目です！奴らの速力はアリゲートルを遥かに超えていますっ！！」

「……あと十秒で追いつかれます！」

「まさか 新鋭機だと!？」

後方から連続した砲声と共に36mm徹甲弾が迫り、3番機と4番機のアリゲートルの跳躍ユニットのに命中し弾痕を形成する。

その直後スラスタ ノズルと弾痕から猛火が噴き出る。

跳躍ユニットの灯油と同成分のジェット燃料とロケット燃料に引火したのだ。

気化した燃料はすでに燃え上っている炎と反応し機体を木端微塵に

吹き飛ばしながら墜落させる。

(跳躍ユニットの狙い撃ちだと……………!!)

「 うおおおおおつ ……!! 」

跳躍ユニットのみをを前方に向け全力噴射

前に行こうとする慣性の力が後ろから強大なGとなって襲い掛かり
消化器官と脳髄…あらゆる臓器をシャイクする。

コンマ何秒のタイムラグを経て機体は一気に後進し、敵戦術機の後
頭部の延長線上…

戦術機のもつとも無防備な位置、を取る。

(この機動なら!!)

アリゲートルが敵の頭上を通り過ぎ、突撃砲を構え発射しようとし
たその瞬間、

「 なっ ……見破れ 」

「 !! 」

敵は肩部モジュールから前向きにスラスターを噴射、一時的に仰向
けの体制となりその手の突撃砲をフォルカのアリゲートルに向け引
き金を引く

(こいつら対人戦闘に慣れていやがる!!)

フォルカが知覚できたその一瞬に下方から放たれた36mm徹甲弾

が機体を揺らす、幸い真正面から受けたため特殊複合装甲が弾丸をはじくが機体は大きくバランスを崩しかろうじて残っていた自然の木々をなぎ倒しながら墜落する。

「中尉っ！」

二番機の衛士は機体を反転追撃機に向け突撃砲を向け、引き金を引こうとする。

「っ！？」

が、眼前に接近していた追撃機の一機の右腕がアリゲートルの腹部に滑り込みその先端に展開したモーターブレードが装甲を火花を散らしながらたやすく掘削し、内部にいた衛士をひき肉に変えた。

一息に追撃機の右腕が引き抜かれモーターブレードが回転を止める。

その規則正しく一定方向に並ぶ無数の刃には掘削した装甲の金属粉と赤い肉片が付着し内臓が絡み付き骨のようなものも見えた。

武装警察軍に所属する二機の戦術機を撃墜されたアリゲートルから燃え上る炎が不気味に照らした。

夜間迷彩に塗装されたチェルミナートルであった。

二機のチェルミナートルは地表に落下したフォルカの機体の前に着地し突撃砲を突き付ける。

炎が揺らめきその姿を何とも言えない邪悪な存在を連想させるように照らす。

「貴様等……自分の任務を恥ずかしとは思わないのか……!!」

恨みと屈辱に染まった声をフォルカは絞り出す。

「BETAという敵がいるのに…国を失い尚、あの肥え太った豚どものために…亡命者を刈るのか…!!」

自分を見下ろす機体は準第3世代機…最前線の兵士たちが一刻も早い配備を望んでいる最新鋭機だ。

(それをこんなことのために……!!)

国に対してもはや恨みと失望しか浮かばない。

「……言いたいことはそれだけか?こんな時代だからこそ国民は団結せねばなるまい?」

突撃砲を構えるチエルミナートルから音声通信が届いた、どうやら女性らしい

「貴様はこれから恥ずべき裏切り者として処刑される。しかし最後の言葉位聞いてやらないでもない」

数秒ほど黙り込んでいたフォルカは皮肉気な狂気を秘めた笑みを浮かべ呪詛を吐く

「貴様等はいずれBETAに滅ぼされる、恐怖のみで成り立っている国に明日はない……」

俺たちは祖国に誇りも抱くことができないんだからな……」

あの世で待っているぞ……貴様らをなああああ……！！！！」

チエルミナートルの手にある突撃砲の引き金が引かれる。

………が、いつまでたっても砲声は響かず、自身を碎き消し飛ばすはずの銃弾は放たれない。

それもそのはず、チエルミナートルの突撃砲に大穴があいていたのだから。

そして数俊後に爆音が響き渡る。

突撃砲の火薬が引火し爆発したのだった。

「一体何が!？」

「レーダー反応はないぞ!？」

二機のチエルミナートルの衛士は突然のことに狼狽えながらも突撃砲をおそらく狙撃したであろう存在がいる方角に機体を即座に向ける。

そのチエルミナートルの紅い双眸がさす先にはなぜか跳躍ユニットを持たない青紫の機体が漆黒の翼を広げ、高速で接近していた。

「やれやれ、遅刻の上に出向かせるとはいいい度胸だな？」

人類初の第4世代機シリウスの操縦席で亮は皮肉な笑みを浮かべたのだった。

第三二話 黒夜（後書き）

シリウスの外観

タイフーンの肩と腰のパーツをYF-23に交換して背部兵装担架コネクタにSEEDのストライクノワールのウイングを直接つけた形状

第三三話 開合・会合（前書き）

P Cが不調で上げるのが遅れました。 m) p q m

第三三話 開合・会合

東ドイツと国連直轄領との国境に迷彩シートに身を隠し潜む存在がいた。

東ドイツは社会主義国の例にもれず秘密主義であり各国家群の軍隊を投合している国連軍とてその領地に干渉を一切許されない。

社会主義：それは生産にを国民すべてで共有し、能力に応じて再分配するというものだが成功したことは一度としてない。最初に社会主義が生まれた時から血と弾圧悲劇の連続だ。

まずに、競争力がないため成長することがないのだ。

国民すべてが一種の公務員であるため競争する意味がない、そのため資本主義における労働対価が不平等なことが多いのだ。

次に能力応じて再分配するということだが、誰がその能力を判定するかというと国がすることが問題なのだ。

全ての判定を国がするためその判定に異を唱えることができないのだ、故に賄賂などの一部の者達は汚職し放題であり、一部には自分たちが国民を管理している選ばれた人間とまで思っているモノもある。

これはいう間でもなく失敗以外の何物でもなく、いや…そもそも人が人を正しく管理することなどできるはずもない。

人は過ちを犯し、それを直そうと努力するから人なのである。しかし管理する側は失敗を認めない、認めてしまえば自分たちの存在意義を否定するに等しい…そして国民を弾圧、反乱分子の粛清と連鎖が比較的早い段階から始まる。

さらに人を管理する政治体系の最終はすべてが管理された未来の選択肢が存在しない未来ディストピア（ユートピアの反語）である。

初めから破綻しているこの主義は理想主義というより夢想主義というのに相応しい。

つまり、国の実情よりも体面を気にする国では他の国家群と連携が取りにくい、ソビエト連邦を例にとってみるとあれはロシアという大国が力で周囲の国を従えてなんとか一つにまとまっているように見えるが水面下では罅だらけの結束であり、他国家群との連携不備もひどい。

（第4世代のお披露目が人間相手の実践とはな…）

亮は戦術機…と言っても内一部内装が変化した戦術機のコックピットで操縦桿を握りしめながら呟く。

既存の管制ユニットは固定で衝撃から衛視を守るものであるためGや衝撃がもろに衛士に伝わる。

亮が生まれた世界で実際にあった事故にあったアメリカ車は無傷だが中の人は死亡という笑えない冗談を形にした車とコンセプトが一緒なのだ。

ある意味アメリカのライセンス生産なのだから仕方ないのかもしれない。

故に管制ユニットも新規生産を制作した、主な変更点は二酸化炭素を分解して酸素を作り出す生命維持装置の搭載と操縦席と一体化している機械化歩兵装甲の固定をショックアブソーバーに変更、そして…コントロールパネルとコントロールスティックとの一体化だ。

武装選択などは網膜投影の焦点変更で操作するのが一般的だが、密集戦闘の際に敵から視線を外すのは致命的だ。それを補うためコントロールパネルが装備されているのだが操作するために態々操縦桿から手を放すという操作法はさらに致命的の一言に尽きる。

故にコントロールパネルとコントロールスティックを一体化したためPTの操縦桿に酷似した形となった。

慣れれば視線を相手に向けたまま素早く武装の切り替えなどができ生存性が期待できる。

生命維持装置は来るべき戦いのためだ。

(鎧衣の手はずだとそろそろだな…)

網膜に投影される時刻を見つめながらに意識を臨戦態勢にシフトさせる。

今回の任務は東ドイツの内情のデータを持った亡命者の保護だ。

恐怖政治からの解放という大義名分を得て、ヨーロッパを丸とす
るために必要な行為、これが終わらないことにはBETAへの反攻
作戦の準備さえまともにできない可能性があり、後藤の憂いを断つ
ためにも必要な行為だ

国境の向こう側で闇を穿つ光がいくつか昇る。

「隊長、フェイズ1発動を確認した。」

インディアンがガンカメラで目標を捕捉し、その報告とともにヘッドセットを通じて網膜に映像が映し出される。

「分かった、インディアンはそのまま監視を続けてくれフォックス
トロットはもしもの時に備えて高狙撃戦の用意を」

「了解」

フェイズ1それは東ドイツからの亡命者が基地の戦術機を奪取し脱
出することであり、追撃の内容によって国境を越えて救助を行うフ
ェイズ2、もしくは亡命者が国境を超えることに成功した後のフェ
イズ3のどちらかに移行する。

「…あれはっ?!隊長。追撃機だ…あれは、Su-37チエルミナートルだ!」

「おいおい…ソビエトさんの最新鋭機じゃねえか」

インディアンからの報告にフォックスロットが驚きの声を漏らす。それは二年前に配備が始まったばかりのものだったからだ。

Su-37チエルミナートル…それはF-14トムキャットやF-18ホーネットの後継機である第二代戦術機Su-27ジユラーブリクを第三代仕様にアップグレードした機体で第2・5世代戦術機とされる。

ジユラーブリクと比べ機体の機動力・即応答性、射撃・格闘能力、レーダー索敵範囲を強化しつつ整備性も上げたという傑作機だ。

「…アリゲートルじゃ歯が立たないな、俺が出る。」

第二代機と第三代機では決して埋めることのできない性能差があり衛士の技量によっては何とか覆すことができるだろうが国家保安局…いわば暗部のものが対人戦闘に精通していることは想像がたかない。

対して亡命者はBETA戦闘におけるベテランであるかもしれないがそれは対人戦闘では通じない。

「俺たちも行くか?」

「いや、一人のほう captures されにくいお前たちは増援が来るかを監視し必要に応じて援護を行ってくれ」

「了解つとー!!」

随伴機の衛士二人に指示を発した後亮は、自身の機体である生まれ変わった天狼シリウスを起動めざめさせる。

「モードアクティブ：生体認証クリア、OS起動、音声コード…“シリウス”」

機体の胴体に内蔵されたプラズマジエネレーターが待機モードから移行し、機体を膨大な電力が駆け巡り光が迷彩シートを透かして機体のメインカメラの光が漏れる、機体シリウスが自身を覆う迷彩シートを脱ぎ捨てながら立ちある。

右手にYF-23で試験的に採用された新型突撃砲、XAMWS-24 試作新概念突撃砲を保持し、本来跳躍ユニットが装備されるべきはずの腰部装甲にも片側一機つつ突撃砲が接続され、本来それが装備されるべき兵装担架は背にはなく代わりに一対の剣が収められた漆黒の翼があり、肩と腰のモジュールは外見がYF-23のものと同分違わないものに交換された…かつてEF-2000タイプーンであったもの、4GLX-01a シリウスである。

「各エネルギーライン良好、テスラドライブ起動!!」

月明かりに照らされる嵐タイフーンから生まれ出た天狼シリウスの足が地面から離れ機体が宙に浮きその背中に設けられた一対の黒い翼の内側に並んだス

ラスターノズルから翡翠色の粒子がわずかに漏れ出してくる。

「今こそ駆け抜ける時だ、天狼っ！！！」

“バツシユウウウンっ！！”

翼が跳ね上がるように展開し、膨大な翡翠色の粒子が猛火フレアとなって吹き出しリリウスは空気を破裂さえるような音を残し翔ける。

超高速で木々が足先に触れるかどうかの超低空でシリウスが翔ける。

亮の網膜投影によって映し出されるシリウスの視界そのにアリゲートルに銃を突きつけるチェルミナートルが赤い炎に照らしだされながら映る。

「そのまま撃たれては困るのでね、不意を突かせてもらっぞっ！！」

右手に保持したXAMWS-24 試作新概念突撃砲…YF-23
のそれをチェルミナートルが保持してる突撃砲に狙いを定め、引き金を引く。

“ダアンツ！！”
高速で低空飛行を行っているシリウスが片手で構えるXAMWS-24 試作新概念突撃砲から36mmのハイパーダイヤモンド製の弾頭が打ち出され、チエルミナートルの突撃砲を狙撃し、大穴を開けた。

その直後、チエルミナートルの突撃砲が爆発し周囲を一瞬強く照らす。

そしてアリゲートルへあらかじめ決めておいた周波数で通信を取る

「やれやれ、遅刻の上に出向かせるとはいい度胸だな？」

「あ、あんたは……」

「コードネーム：アルファだ」

二機のチエルミナートルは即座こちらに向き直る。

「一体何が!？」

「レーザー反応はないぞ!？」

通常周波数でアリゲートル通信を行っていたためこちらにも相手の衛士の音声が届く。

跳躍ユニットを使わないシリウスに排熱などあるわけもなくステルス機であるYF-23のデータを流用しているシリウスは既存のレーザーにうつりにくい、

しかしそれに気づいて即座に反応するというのは彼らが優秀な衛士

であることの表れでもあった。

一機の随伴していたチエルミナートルは跳躍ユニットからロケットエンジンで機体を跳躍させる噴射跳躍で浮かび上がり、闇夜にをかけるシリウスに照準を合わせ、引き金を引く。

「攻撃する時が最大の無防備だぞ」

“ダァンっ！！ドオオオオオオンっ！！！”

瞬間に120mm滑空砲に撃ち抜かれ爆散する。

人は銃を撃つとき、狙って、構えて、撃つというプロセスを取るそして無意識的に構えの時に行動が止まり、撃つの時に後ろに下がる。

つまり構えた瞬間が最も無防備であり武の先を取るという一種の極みを習得していればその隙を突くことはたやすいのだ。

そしてオートロックオンであっても人が動かしている以上この点を変えることができない。

「くっ！よくも同志をっ！！！！」

僚機を撃破されたチエルミナートルが前腕外延部に装備されたモーターブレードを展開させ無数の刃の駆動音とロケットエンジンの噴射による爆音とともに迫り、両腕の巨大なチェインソーを突き出してくる。

「その速度ではよけられまい!!」

シリウスとチエルミナートルはすさまじい速度で近づき、それに合わせてチエルミナートルのモーターブレードが管制ユニットを引き裂くべく突き出される。

「それはどうかな？」

「何っ!？」

超高速で移動していたシリウスがモーターブレードが突き出されると同時に水平直角に移動した。

モーターブレードは虚しく空を斬る。

実際は一秒にも満たない時間ではあるがチエルミナートルの衛士の思考は混乱する。

戦術機は戦闘機の発展であるためその飛行能力は自ずと戦闘機の発展となるため、その機動に自ずと制限がつく。

しかしテスラ・ドライブを搭載した無反動推進であれば初速と最大速度のタイムラグが0になるほか慣性を制御しているため機体の速度をそのままに向きを変えることができる。

よって、第4世代機は跳躍ユニットという心臓部と慣性の法則という束縛から解き放たれ驚異の空中制御能力を獲得できるのだ。

「夢こそ抱いて眠れっ!!!」

チエルミナートルの真横に一瞬で回り込んでいたシリウスは左手を背の翼に伸ばし、柄を掴み長刀を引き抜きそのまま振り下ろす。

“キーン”

甲高い金属音が鳴り、チエルミナートルの機体の斬撃による傷跡から紫電が走り

「…これが…私の…終焉か……」

“ドオオオオン!!!”

衛士の最後の言葉とともにチエルミナートルが爆散、炎上する。

そして、ゆっくりとシリウスはいまだに地表に撃ち付けられたまま動かないアリゲートルの前にゆっくりと降り立ち手を差し伸べる。

「貴様を迎えにきた。」

「ああ…俺は…俺の名はフォルカ…フォルカ・エイセル…頼む、この国を変えてくれ、誇りを持てるような国に…」

「それは俺の役目ではない、それは…そこに住む貴様らの仕事だ」

人外の青年と埋められない虚無を抱えた青年は会合を果たした…これが後に起きるベルリンの壁崩壊への始まりとなるのだった。

第三三話 開合・会合（後書き）

西博士とジアビスのディストを出すか結構本気で悩んでいる今日この頃

（雰囲気は確実に壊れるが）

年表？

1995年

東雲、クリスカと出会う

後に、日本へ渡り両親が死んだ場所へ向かう（一種の墓参り）、その際に式神を用いて現状把握に努める。
その時に悠陽と出会う。

欧州へと渡り難民キャンプに潜り込み、軍隊に入隊手続きをとる。

訓練校にわたる前日にBETAに難民キャンプが襲撃され、兵士級の材料に気付き激怒する。

1996年

訓練校に視察に来ていたナイトオブワン ランティスに決闘を挑み勝利し、異例の13番目のラウンズに抜擢される（この時オルタネイティブ4・5について知る）

欧州の国産時期主力戦術機開発計画ECTSFに介入する。

OGの世界で蓄えていたEOTやPT関連の技術によって上記の計画を掌握オブザーバー兼テストパイロット兼開発者というSRX計画におけるイングラムの立ち位置になる。

（なおどう計画の開発チーム、通称、い組・は組と連携をとりことにあたる）

イーグルがフランスをECTSFに再加入する手続きをとる。

1997年

タイフーン4GLXの開発が順調に進みフェイズ2の実線データが各地で収集される（もともと完成真近だったタイフーンが素体だったため動作試験は順調）

東雲の機体にラファールのパーツが組み込まれる（後に同機に技術転用するため）

1998年

タイフーン4GLX フェイズ3に移行、ヒュッケバインの建造され、データ収集に当てられる。

東雲関連の技術の有用性が認められ、赤龍計画レッドドラゴンが始まり一大反抗作戦の準備が開始される。

BETAの対処能力を考慮し入念な準備を行うため発動は2001年以降を前提

1999年

明星作戦、

ウォールの狙撃補助観測戦術機からのデータでG弾の欠陥が発覚、

第五予備計画凍結

アメリカ脅威論が各地で巻き起こる。

YF-23及びYF-22専攻試作機を奪取、技術解析によりEC
TSFが最終段階に移行
(次世代OSと新型管制ユニットの配備開始)

東ドイツからの亡命者を受け入れる

2000年

これから

第三四話 折れた牙にして騎馬（前書き）

アイヒベルガーたちの口調がわからない…

第三四話 折れた牙にして騎馬

2000年一月十日

欧州の西ドイツ・イギリス・フランスの三カ国は東ドイツの亡命者からもたらされた内情のデータにより恐怖政治による弾圧と国民への情報欺瞞など政府としてもはや信頼がおけない旨伝え、東ドイツ政府を解体、西ドイツと統合するように東ドイツ政府庁に通告。

しかし、東ドイツ政府はこの要求を理不尽な内政干渉と断じ要求を跳ね除けそれに対し弾圧された市民の解放という大義を掲げ東ドイツに向けて三カ国連合が進行、交戦状態に突入

東雲 亮率いる試験部隊ウォールは部隊を二つ分け鎮圧任務に就く。

首都機能が移された北アイルランドでは東雲 亮率いるA分隊は順調に各部隊を撃破、離反した東ドイツ兵を吸収しつつ着実に東ドイツ政府庁に迫っていた。

「厄介なことになってそうだなソード」

「そうだね…たぶん禄でも無い事になってるよ」

…がそんな折、西ドイツ軍ツェルベルス大隊第1中隊の進行が停滞しており亮と月砂（コードネーム：ソード）の二人は二機の新型機を輸送しつつ援護に向かうのであった。

二機のシリウスに守られながら飛ぶ巨大な飛行物体
戦術機輸送空母ムリヤ、大型のジャンボジェットが再突入殻背負つ
たような形の巨大な飛行物体：

その中に二機のBETAに終焉を呼ぶべく作り出されたオオカミが
解き放たれるその時を待っていた。

第三四話 折れた牙にして騎馬

西独陸軍第44戦術機甲大隊、通称ツエルベルス大隊 第一中隊は
政府庁へ向け進行し、周囲の都市を解放し亡命者とその同志が多数
の命を対価に得たりストに従い多くの密告者を拘束しつついたがあ
る町で国家保安庁シユタージの部隊と交戦、ここで剣道三倍段の効果が出る。

ハルバートシを標準装備の純第三世代機であるタイフーンシのほうが国
家保安庁ユタージのチエルミナートル及びジュラーブリクに対して優勢であ
ったのだが、彼らは予想外の行動に出た。

「貴様等には誇りというものがないのかっ！！ドイツの面汚しがっ
！！」

「勝てばいいのだよ、そのために戦争をしているのだよ我等は！」

「ヴィルフリートっ！！！」

「動くな！！人質がどうなっても構わんのか？」

御世辞にも状態がいいとは言えない市街地の建築物に挟まれた大通りで黒いタイフーンに銃を突きつけるチエルミナートル

抵抗する術のない漆黒のタイフーン…その姿は

幾つもの砲撃を真正面から受け無数の弾痕が穿たれ、左腕は欠落し、その精緻な頭部は見る影もなく抉れ、機体各部のカーボニックアクチエーターは千切れ、血液のようにオイルを滴らせながら紫電を奔らせハルバートを杖にし何とか立っている状態である。

シュタージ 国家保安庁の部隊が意図的に避難させていなかった民間人に自分たちが不利だと悟るや否やあるうことが砲撃を行ったのだ。

第1中隊（シュバルツ：Schwarz（黒）中隊）指揮官 ヴィルフリート・アイヒベルガー少佐は自身の機体を盾とし民間人を庇うがそのせいで機体は戦闘不能なほど損傷し逆に人質にとられてしまったのだ。

銃を突きつけられる漆黒のタイフーンを見ていることしかできない純白のタイフーンの衛士、ヴィルフリード・アイヒベルガーの副官、ガイスヴォルフ 白き狼の異名をとる

ジークリンデ・ファールレンホルストは管制ユニットのグリップを握りしめ耐える

（どっすれば…）

ヴィルフリートのみが人質ならば彼は迷わず自分もろとも敵を撃つというのならそれに従うこともできるだろうが未だ周囲には避難していない民間人も多数おり、彼ごと敵を撃破などできない、仮にしたらところで同じことを繰り返され状況は一転しない。まさに八方塞がり

(なにか…打つ手は無いの…?)

“ピュ…”

ふと、タイフーンのコピューターに一通のメールが届く、それを解凍し目を通す。

こちら、英陸軍第13独立機甲兵団、ウォールデータリンク回線554に情報転送を行いたし

メールによる通信、それは援軍がそれなりの至近距離とであり生の生きた情報を欲している証で今の状態をある程度認識していることの表れである。

メールの指示に従いデータリンクを指定の回線につなげ情報共有を行う。

“ピュ…”

再びメールが届く

状況は認識した、300秒後に隙を作る

網膜投影に映し出された文字

(この状況を打開するすべがあるのでしょわか?)

ジークリンデの疑問に答えるものなどいやしなかった。

(守るべき民を盾にするなど……!!!!)

ヴィルフリード・アイヒベルガーは怒りに内心を滾らせている。

自身が駆る漆黒の機体は騎士たる者、貴き者たる義務 血を流すことを厭わず守るべきもののために前線に挑み、殿を全うする”高貴なる義務”を示すものである。
ノブレス・オブリージュ

それをこのような下劣極まりない手段で牙を折られたことはこの上ない屈辱であり、何よりそれを行ったのは自分と同じドイツ人というのがさらに彼の琴線に触れていた。

網膜投影には恐怖に震え、身を縮ませる多くの民間人がいる建物が映し出されている。

「ではまず、貴様のパートナーから地獄に行ってもらおうか!!」

「そいつに手を出すなあつ!!!!」

「くっ！！ヴィルフリード……」

一機は絶えず自身の漆黒のタイフーンに突撃砲を構え残りの4機のチエルミナートルの突撃砲がパートナーである純白のタイフーンに向けられる。

「はっ！！牙の折れた狼に何ができる！！そこで大人しく見ているがいい！！！！」

「巫山戯るなっ！！！！」

機体状況に関係なく操縦桿を動かすが、機体はわずかに力を籠め稼働するが即座に関節から小爆発と火花が散り地面に音を立てて膝をつく漆黒のタイフーン

牙は折れてしまった、もはや自分は無力

「なんと……無様なことか……！！」

口から洩れるは嘲りの言葉、

幼き頃より共にいた存在さえ、半身のような存在さえ守れず何が七大英雄か！！

何が黒き狼王【シユバルツアーケーニツヒスヴォルフ】か！！！！

無様としか言いようがない

「地獄の番犬は大人しく地獄に帰るがいい！！！！」

殺意によって引き金が引かれる。

“ズシャッ!”

調子に乗るな、屑が

突撃砲は殺意の弾丸を放つことはなかった。虚空より突き出た刃が鋼の巨人の胴体を刺し貫いて管制ユニットごと衛士を貫いていたからだ。

パリン

周囲の景色を映していた鏡が割れ虚空より紫陽花のような青紫の天^{ウラス}狼^{ウラス}が姿を現した。

データリンクで送られてくる映像を網膜に移しながら若干顔をしかめる亮、そんな亮の網膜に割り込むように月砂の顔が映し出される。

「やっぱりだね……………ねえ亮?」

「なんだ？」

「ああいうの……すごく嫌いでしょう？」

やりたいことはわかってるよと言わんばかりに薄ら笑いを浮かべる
月砂

「……………死ネクロノミコン霊秘法を使う」

「そっか……じゃあ私はあの二機の護衛だね」

「頼んだぞ」

「任せといて！」

月砂との通信を切る、月砂の顔を映していたウィンドウが消え、亮の青紫のシリウスがスラスタの出力を上げ加速し、ムリヤと月砂のエメラルドグリーンのシリウスを置き去りにする。

「契約アクセス、汝が父にして王が命じる！！ネクロノミコン機械言語写本
術式形態選択……………偽神デウスマキナっ！！！」

亮の言葉を引き金トリガーにシリウスのOSが記憶領域に保存された何かに
浸食される。

人が鋼の巨人を操るために作られた情報の集合体“プログラム”は
人外の異世界の論理が支配する何かに変わる。

シリウスの機体装甲の表面を幾つもの魔術文字で編まれた線ラインが走り、

カメラアイなど微弱な光を放つ部位の色が血のような朱に代わる。

機体表面を奔っていた光の線が消えると同時にシリウスは超常の存在へと変貌し、物理法則の……いや、人間が知りうるあらゆる法を超越した存在となる。

「虚実と幻影を司る鏡よ……………【ニトクリスの鏡】っ！！」

シリウスの機体表面が徐々に蜃気楼であったかのように消え、やがてその姿を完全に隠した。

第三四話 折れた牙にして騎馬（後書き）

ネクロノミコン機械言語写本

軍神強襲デモンベイン・機神胎動で登場した霸道 鋼造が所有していた魔導書、すべて0と1の二進数でラテン言語写本を翻訳したものでコンピュータ制御の機械にデウスマキナと同等の戦闘力を付加させることができる。

総合アクセス数が40万を突破！！

というわけなので何か記念的なイベントを書こうかなと思います。
以下からお選びください

1、フランス王室との会合（ルーク・アッシュ、ティア、ジェイド、ガイ、ナタリア登場）

2 明星作戦以降の唯依のーコマ

3、ランティスとの決闘

4、さつさと続きかけ

5、その他

てな感じになります、

あとこの後の流れはやや、飛び飛びで東独との戦争を描いた後TE
に行こうと考えています

(飛び飛びなのはさっさとTEに行きたくてしょうがないからじゃ
ないよ?)

車に跳ねられてしばらく歩けない…

第三五話 終末の獣 前編（前書き）

デュランダルはデビルメイクライ4のネロが持っているレッドクイーンみたいな感じですよ

第三五話 終末の獣 前編

民間人と黒き狼王ことアイヒベルガーを人質に取っていた国家保安^{シユター}庁の戦術機部隊は亮が使用した魔術武装ニトクリスの鏡による光学迷彩による奇襲により虚を突かれシリウスの高い近接戦闘能力と相まって瞬く間に管制ユニットを破壊されその機能を停止する。

しかし、東ドイツは政府庁周囲に秘密地下通路を多数建造しておりそこを通り市街地周辺に敵増援が現れた。

「…なるほど初めから事を構えるつもりだったということか。」

皮肉にもそれはハイブ攻略を難解なものにする一要素である地下構造体と同じ効果を持っており突然湧き出る機体は先行した部隊を挟撃し撃破するには持つてこいであり、人民の解放という大義名分を掲げる連合軍は周囲の民間人を考慮し全力を出せず各個撃破される危険性が高い。

つまりBETA戦争のあと欧州各国との戦闘を意識した戦術であるが：あまりにも上のものの自分勝手な考えが表面化している戦術である。

迫りくる戦術機部隊：味方が撃破された所を何らかの手傷を負っている敵に追撃を駆ける味方を出汁にした戦い、効率的ではあるが亮にはその切り捨てることしかない社会主義の戦いは無性に神経を逆なでされて仕方がなかった。

地表や予想外の地点に敵がわいて出るのだ、他の部隊の苦戦は必衰。

「俺が囿になる、貴様らはポイントA - 112へ行け」

「俺たちに逃げろとっ!？」

「一機だけでは無茶ですわっ!!最低でもエレメントを組まなくてはすぐにやられてしまいますっ!!」

既存の戦術機OSは一動作ごとにコマ何秒の硬直が存在するがTCOSにそんなものは存在しない。

「問題ない、貴様らは早くポイントへと向かへ…貴様等の新しい牙が貴様を待っている。」

ウィンドウに表示される二人の目が見開かれ、驚愕の色に染まる。

「新しい…牙…だと?…」

「そうだ…戦闘開始から120秒後にここを離脱しろいな!!。」「
タイフーンの名残を大きく残すシリウスはその漆黒の翼からフレアを噴出してその場を離脱した。」

(推奨BGM: SAVIOR IN THE DARK.)

「来たか…」

有視界領域に敵戦術機、ジューラーブリクとチエルミナートルの混成部隊が現れ、それをシリウスのカメラアイが捉える。

シリウスの装備は近接戦闘を重視したもので腰部兵装担架にXAM WS-24 試作新概念突撃砲をベースにしたモノを装備しその両肩の兵装担架には片刃長刀が一刀ずつマウントされその峰にはスラリとスラスターが並んでいる。

斬撃の際内蔵したプラズマスラスターにより斬撃を加速させ攻撃力をあげるとともに兵装担架に装備している状態では追加バーニアとしても機能する新型近接武装…

BWS-07 デュランダルである。

背中の対の翼と共に二刀のデュランダルが跳ね上がり内蔵されているスラスターがすべて機体の後ろに向く。

“ キュイイイイン…… ”

青いプラズマと斥力を持った光粒子が僅かにスラスターから垣間見れる。

「プラズマジエネレーター…リアクターモードに移行!!」

“ ダアアン!!ダアアアンっ!! ”

シリウスの近くに突撃砲の弾が着弾し地面が爆ぜる。

その土煙をその身に受けながらシリウスの胴体、外見はタイフーンと変わらないがその内部に携えた小型の太陽がその核融合反応の抑制を解かれ臨界まで反応が加速する。

「テストドライブ、フル・ドライブ全力稼働……」

機体を駆け巡る電力が一気にその出力を増し肩と腰のモジュールそれに背中の黒翼に内蔵されたテストドライブに注ぎ込まれる。

そんなとき一発の徹甲弾がシリウスへの直撃コースをとる。

しかし

“カァン！！ドオオオンッ”

徹甲弾は見えない……いや、徐々に視認できるほどに出力が上がっていく重力偏差壁：ブレイク・フィールドに軌道をずらされすぐ横の地面を吹き飛ばす。

「ブーストっ！！」

シリウスが地面をけり、同時に背面のスラスタから猛烈なフレアが噴き出て、シリウスは弾かれるように翔け出した。

加速した瞬間最高速度に達し、シリウスは正しく一発の弾丸となりユーラシアと違い緑のあふれる草原を翔ける。

火線がシリウスに集中し砲弾が群がる。

「俺と此奴を止めれると思うなっ!!」

寸差でずれた砲弾やブレイクフィールドに弾かれた弾が地面を吹き飛ばしそれによって巻き上がる土煙をシリウスは浴び、突き破って銃声と着弾の轟音をBGMに怒涛の勢いで中隊規模の戦術機部隊に迫り一気に飛び込む。

「ハアアアアっ!!!」

速度に任せてそのまま先頭にいたジュラーブリクの頭部を鷲掴みし敵中央にあえて踏む込む。

火中の虫と言わんばかりに周囲の戦術機の突撃砲が向けられる。

「吹っ飛べ!!」

その内の一機に鷲掴みにしたジュラーブリクを投げつける。

それ自体が巨大な質量の塊である戦術機同士が衝突し轟音と火花をまき散らしながらよろける。

よろけた二機に向けて瞬時に加速しつつ両肩のブレードマウントのデュランダルをそれぞれの手にそのグリップを握らせる。

マニピレーターのコネクタから膨大な電力が流れ込み、刀身を形作っている無数の鱗状の鱗が高周波で振動する。

「フンッ!!!」

未だ、地面にさえついていない二機をスラスタで加速させたデユランダルですれ違いざまに亮の呼気と共に二機ごとぶった切る。

高周波数で振動する刃は機体の分子結合を破壊しながらまるで熱した鉄でバターを切るようにたやすく切断する。

やがて機体の残骸は紫電を走らせ、跳躍ユニットと機体に内蔵された燃料電池が爆発し爆散する。

戦術機の爆発光を背に受けつつ土煙を上つつ地面を抉り滑走するシリウスに幾つもの突撃砲が向けられ、一斉に引き金が引かれる。

“ダツダダダツッ!!”

「その程度っ!!」

が、シリウスは既存の戦術機では考えられない跳躍力を発揮し錐揉み状にまるでサーカスのピエロのような華麗な動きでそのすべてをかわし、空を切った徹甲弾は包囲していた味方にそれぞれ命中しあちらこちらで爆発が起きる。

その爆発を頭上から見ていたシリウスは左のデユランダルを振りかぶり、その峰に設けられたスラスタから青白いフレアを噴出させ落下速度をあげながら一気に落下し、

「一刀両断っ!!」

そのまま一機のチェルミナートを一刀両断する。

その瞬間 シリウスの背後から両腕のモーターブレードを展開、高速回転させたチェルミナートルが襲い掛かってくる。

「それで不意を突いたつもりかっ！」

シリウスは左足を軸に振り向きつつ、左手に保持したデュランダルのスラスターを噴出させ加速した横風の斬撃でその鎖鋸が届く前にその胴体を上下に分断する。

「その程度で刀王を打ち破るなど笑止っ！！！」

金属擦過音と共に機体が切り裂かれ、切断面に俊雷が奔り機体が爆発し、その破片と爆炎を受けながらシリウスの各部の赤い燐光が爆煙を透けて浮き出る。

“ガシャン…ガシャン…”

対の剣を構え歩を進めながら爆炎とチェルミナートルの残骸しがいを踏み越えて立ち上る黒煙から現れる青紫の機体…その漆黒の翼を持つ重騎士を連想させる風貌はまさに聖書に記された墜天せし夜明けの明星【ルシフェル】であった。

「往くぞ…！貴様らのその命余さず漏らさず貰い受けるっ！！！」

背中黒翼に翡翠色の猛火を携え、亮が放つ剣気が機体から滲みでて進らせているシリウスは敵機の群れに駆出する。

“ キュイイイイン……っ！！ ”

タービンエンジンの金切音と爆音を引き連れて純白のタイフーンは亮が派手に暴れたためにできた包囲網の穴を突き破り草原を滑走する。

亮が突貫した方角の映像がジークリンデとヴィルフリードの網膜投影にウィンドウで表記され絶えず爆発そして爆煙が上がり、亮が一機で戦闘し続けていることを示している。

「信じられませんわ… たった一機にあんなことができるなんて…」

「あれが… 第4世代機のカ… だということのか…」

余談ではあるがタイフーンを操縦しているのはヴィルフリードであり機体の本来の主であるジークリンデはヴィルフリードの膝の上で簡易ハーネスに体を固定させている。

逆だといろいろまずいのである。見た目的にもヴィルフリードの心情的にも

“ ビーっ！！ ビーっ！！ ”

網膜にロックオン警報が表示されたたましい警鈴が鳴り響く。

「やはり見つかったか…」

「どうするのですか？ヴィルフリードっ!？」

幾ら亮が大部分をひきつけ敵は亮を倒すことに躍起になり意識が集中しているが全部をひきつけているわけではない。

そんな中、たった一機の戦術機が単独行動をとりしかもそれが相手のエース機だとすれば狙わない手はないだろう。

ヴィルフリードはグリップを握りしめフットペダルを踏み込むと同時に言葉を発する。

「振り切るっ！加速に注意しろ!！」

ジェットエンジンとタービンエンジンのハイブリットである跳躍ユニットの内部機関が変形しロケットエンジンが点火され機体が加速する。

「っ!!!！」

瞬間、長年の戦闘経験の賜物か研ぎ澄まされた感覚器官が何らかの情報を広い危険が迫っているとヴィルフリードに悪寒を持って知らせる。

跳躍ユニットを操作し機体の機動をずらす。

“ヒュウウン…ドオオオン!!!”

先ほど機体があった機動を徹甲弾が通り過ぎ地面を穿ち、地面に大穴を開ける。

そしてそれは一発にとどまらず次々と飛来する。

「クツ！！このままでは追いつかれる……」

回避運動をとっているタイフーンよりも真直ぐに直進する追撃機が早いのは通りであり時折砲弾の隙を見て背部兵装担架の突撃砲を放つが効果は芳しくなく。

徐々にその距離を詰められる。

距離が詰められれば当然相手の弾が命中する確率も上昇し、1対1ならばともかく複数の敵を相手にするのは無理である。

「……万事休すか……」

ヴィルフリードは歯噛みする。

だがあきらめるわけにはいかなかった。今自分は文字通り大切な存在の命を背負っているのだから。

“ヒュウウン…ドッオオオンっ！！！！”

今しがた、砲弾が機体のすぐ横を通り過ぎ爆煙を上げる。

瞬間　跳躍ユニットのジェットエンジンが停止した。

「なんだとっ！？」

バード・ストライク

ヴィルフリードの脳裏よぎる言葉

本来それは巡回航空中の戦闘機の推進機関の吸気口に鳥が入り込んでしまい推進機関が故障してしまう事故であるが。

幾つもの砲弾が地面を穿ち吹き上げられた土砂が跳躍ユニットの吸気システムフィルターなどを直撃し内部タービンが故障したか詰まっってしまったのだ。

今はロケットエンジンでかろうじて水平噴射ホライゾンブーストを維持しているがロケット燃料は消費が激しく持久力がないそれを補うためのジェットエンジンなのだから。

「こんな時につー!!」

背後から迫りくる敵機から放たれる砲弾を何とか避けてはいるが徐々にロケット燃料とバッテリーの残量が減少していく…

「ヴィルフリード…」

不安そうな幼馴染の声を聴きつつヴィルフリードは指定ポイントへ向かう、少なくともそこには友軍機いるはずであり生存確率は一気に上がる。

「持ってくれ……………つー!!」

残量がイエローに投入した。

回避運動も行っているため、消費量が通常と比べ大幅に大きくなったり着けないかもしれない。

そんな懸念がヴィルフリードの脳裏によぎる。

やがてレッドゾーンに突入する。

跳躍ユニットが機能停止した戦術機などただの的だ。

ここまでかっ！！！！

続く

第三五話 終末の獣 前編（後書き）

機体解説

4GL-01aシリーズ

世界初の第4世代機

タイフーンベースで開発されたが内部機関が大きく変化しておりもはや別物

主な変更点

プラズマジェネレーター内蔵

機体各部（両肩、両腰、背翼）にそれぞれ別方向に機能特化させ小型化したテスラドライブを装備しリミットを外すことでソニックブレイカーが使用可能

関節を従来のものからTGCジョイント（同時にHフレーム対応に直されている）に交換し人間以上の稼働領域は持たされておらず人間と全く同じ自由度を持つように変更された。

これは、装備しても前線の衛士が使いこなせておらず近接戦闘における攻撃力と耐久力を考慮した結果（人間にできない動きというのがイメージしにくくつつさの動作で使うには不向きだったため）

また脚部の伸縮による安定機能も削除し耐久性を強化しより近接戦闘向けとなっている。

ハイブ攻略を前提としており両肩腰のモジュールに兵装担架を装備し最大6砲同時射撃が可能（手腕、肩、腰）（制御システムにYF-23の管制システムを流用）

新型の管制ユニット（OS込）を装備し即応性、操作性、居住性などを大幅に強化し一部の機体にダイレクト・フィードバック・システムットが搭載されている。

（機体とパイロットをつなぐハードがすでにあっただのでソフトを用意するだけでよかった）

また従来の背部兵装担架部には推進用テスラドライブ内蔵スラスト・ウイングが装備されこれはBWS-06 新型グレートソード：カラドボルグのブレードマウントを兼ねている。

これは刃先が単分子サイズで刀身側面に超低摩擦コーティングが施され切れ味が極限まで高められHC材質であるため大太刀の特性も持っている。

主武装にYF-23の突撃砲を正式量産したモノやラインメンタル、追加でBWS-07 デュランダルを装備し機動性を強化することもできる。

各部に対水圧処理を施しカーボンブレードベンを高周波ソードに交換しこれをスケイルモーターとして機能させる水中用カスタムも生産予定

また、フランス軍のラファールも同様のカスタムを施すことで第4世代にグレードアップできる。

第三六話 終末の獣 後編（前書き）

作者の意見

兵器としての最強はストライク・イーグル

戦術機最強は武御雷

戦術機の一つの完成形はタイフーン

使えない、意味のない機体、ラプター

エース用なら十分使えるんじゃない？ YF - 23

第三六話 終末の獣 後編

「なかなか数が多かったな…」

荒野となった草原に立ち尽くすシリウス、その周囲には夥しい数の戦術機の残骸が散らばり黒煙を上げている。

これをたった一機の戦術機が為したなど普通は信じれないだろう。

「こんなに戦力があるというのにBETA相手に使わないとは…愚を極めているな。」

上に立つものとしての心構え、能力、矜持…ないない尽くし。

東ドイツの舵を切っている者達の低能さと無能さそれに醜さを実感する。

“ビーっ！！ビっ！！”

敵のマーキングをレーダーが感知し警報が鳴る。

「もう少し…休ませてほしいものだが…」

軽口を吐きながら、亮は呼吸を整え臨戦態勢を整える。

敵が有視界領域に入りまだ緑の残っている大地を水平噴射で近づいてくる。
ホライゾンブースト

敵機をシリウスのカメラが捕捉し網膜に投影させつつ映像拡大でその姿を映す。

「あれは新型っ！？……しかもソビエトかつ！！！」

チエルミナートルを基幹にしているであろう漆黒のボディとそれに映える紅い燐光、

アルトアイゼンのヒートホーンと同じ使用方法であろう戦術機の額から前方に突き出た大型のカーボンブレード

両肩のチエルミナートルよりも肥大化したカーボンブレードベン

大型化しつつも洗練された外観を持ち爪先と踵に大型短刀を装備した新型脚部モジュール

右肩にマーキングされた赤い五つ星……

ソビエト製局地型第三世代戦術機Su-47ビエルクトである。

「……あれが獲物か……タイフーン？ラファール？……いや、あの肩はYF-23……それに跳躍ユニットがない？」

ビエルクトの胎内……鋼の棺桶にして揺り籠のうちで鋼の巨人を操る衛士は敵の既存ものとは相違点あまりに多いそれをみて疑問の声を上げるがその後、妖艶な微笑を口元に浮かべる。

「……まあいいわ、せいぜい楽しませてもらいましょうね」「イーニア」

「そうだね“クリスカ”……私とクリスカならどんなモノにだって負けない！」

銀色の髪を携えたかつての少女と龍の血を引く異界の青年
二人の再開は戦場だった。

ここまでかっ！！

「そう簡単に諦めると英雄の名が廃るよ？」

一体だれだ？

突如入った通信に二人の思考が同時に同じ疑問を弾き出す。

瞬間

五つの火箭が追撃部隊に降り注いだ。

エメラルドグリーンの機体色…イギリス陸軍の証である機体色である。

さらにその機体は先ほどの囷となった戦術機と同型機であり些細な違いと言えばラファールの部品が一切使われておらず純粹にタイフーンから発展したことをうかがわせる。

翡翠色のフレアを背の翼から噴出させつつ両肩、両腰部から4つの突撃砲を展開しさらにMK-52ラインメンタルをその手に持ち通常の戦術機とは一線を化す火力を持って追撃部隊を足止めする。

「よし！！じゃあ狙い撃つよっ！！」

突撃砲を牽制に攻撃しようとした動きが単純になった瞬間をラインメンタルで狙撃し撃破していく月砂のシリウス

「…一体なぜ…？」

「合流ポイントはこの先のはずだが？」

長い間ホバリングができないタイフーンは反転、速度を殺したのちに地面に着地し、左手に保持した突撃砲を撃ちつつ迎撃に加わる。

「データリンク…つながったままでしょう？」

的確なタイミングで引き金を引きつつ答える月砂

「…感謝する。」

機体の異常と敵の追撃をしつつ駆け付けてくれたのだ。

「それにはまだ早いよ…来たっ！！」

新たに猛スピードで接近する二機の戦術機

背部カメラからの映像がウィンドウで表示されその二機の姿が映し出される。

漆黒の機体色に胴体部に紅いラインで描かれた砂時計のようなマーク通常よりも巨大な両前腕外延部に装備されたナイフシーススタビライザー

シリウスと完全同型の肩と腰のモジュールを装備し、全体的にシヤ

「ブなイメージを持つ機体

「YF-23…ブラックウイドウ？だと！？…しかし…」
形が違う

アメリカの主力戦術機の座から墜ちた世界一高い鉄屑と称されはしたものの現状で最高峰の性能を持つ機体…

明星作戦で亮を狙った暗殺誘拐計画を逆手にとって奪取した機体ではあるが…幾ばくか外見が変化している。

跳躍ユニットは廃されその背の予備兵装担架にはシリウスのものと同じテスラドライブ内蔵スラスタウイングが装備され頭部はタイフーンのものに交換されその機体印象を変化させている。

そして、もう一機純白に塗装され、スパイダーと同様の改修を施された機体グレイゴーストの二機

「アメリカから強奪した二機を改修して作った第4世代戦術機…4GL-02フェンリル…これが君たちの新しい牙だよ…だから乗って！！」

オートパイロットでタイフーンの傍に降り立つ二機は自分の主を招き入れるようにその腕を伸ばす。

「行きましょう！ヴィルフリード…」

「ああ、急ぐぞジークリンデっ！！！」

「はいつ!!」

砲弾飛び交う中伸ばされたそれぞれの機体の主腕の手のひらに飛び移る二人は視線をかわしそれぞれの新しい騎馬に乗り込む。

「やらせないよ!!リミットブレイクっ!!!!」

機体のジェネレーターのリミッターを外しプラズマジェネレーターがプラズマリアクターへと変化、テスラドライブが全力稼働し指向性ブレイクフィールドを展開、盾となりつつ二人を庇い、敵を穿つ。

しかし

「しまった!？」

“ドオオオオンっ!!”

即座に正面からは突破できないと悟った敵部隊が左右に展開、迎撃が追いつかず純白のタイフーンに着弾、爆発する。

「フェンリル、貴様のその力俺に見せてみるっ!!」

しかし、その黒煙を突き破って白と黒色違いの二匹の狼が煙を突き破って飛び出した。

ヴィルフリードはフェンリルのコックピットの操縦席に座り強化衛士服と機体を接続する。

接続中……接続完了

網膜に表記が現れ、起動シーケンスが流れるように表記される。

Z I N K I 0 1 起動

各武装、リンク

B M セレクト・ノーマル

プラズマジエネレーター・定格起動中

各テスラ・ドライブ、正常起動

ダイレクト・フィードバック・システム起動

機体とパイロットとの脳波リンク開始

完了

4 G L - 0 2 フェンリル起動

「…見慣れないシステムが多い…OSも従来のものとは違う…」

武装を長刀：カラドボルグとA M W S - 2 4 突撃砲を選択し装備する。

コマンドを受けてフェンリルはその背の漆黒の翼より右手が刃を引

き抜き左手には腰部兵装担架から突撃砲を保持する。

「弾薬は30%増し、大型短刀がついて近接対応可能か…つくづく…」

自分好みの機体だ

機体ステータスを示すウィンドウから読み取った単純なスペックは明らかにハイブ攻略が念頭に置かれ通常武装も突撃前衛向けのものが多い。

「ヴィルフリード…そちらはどうでしょうか？」

「問題ない…往けるっ!!」

二機の色違いのフェンリルのカメラアイに光が宿る。

「フェンリル、俺にその力見せてみるっ!!」

ヴィルフリードは強化服の感覚欺瞞による錯覚だがフットペダルを踏み込みスラスターを吹かす。

瞬間、敵機が猛スピードで迫っていた…いや、こちらが迫っているのだ。

（なんとという加速!!初速と最大速度の間がないだど!?さらにGがかなり軽いっ!!）

戦術機が物理法則に支配されている以上如何に高出力の推進装置を使おうともそこには若干のタイムラグが必ず生まれるがテスラドラ

イブによる完全無反動推進にそんなものはないのだ。

さらに対G機構は強化服の感覚欺瞞ですべてを誤魔化していたが新型の管制ユニットはそこを改良しており強化服の能力と併用し衛士の負担を減らすのに役立つ。

「ウオオオオオオっ！！！」

雄たけびと共に豪速で迫る漆黒のフェンリル

「フンっ！」

速度を維持したまま左手の銃剣パヨネットの短刀を相手のジュラーブリクの胸部に突き刺しそのまま引き金を引く。

ゼロ距離で120mm滑空砲が火を噴きジュラーブリクの胴体に巨大な風穴を開け吹き飛ばす。

機体が爆発しその爆炎がフェンリルの黒い装甲を朱に染める。

「…機体がイメージした通りのモーションを取った……？」

機体がイメージした理想のモーションをその通りに行ったのだ。特定のモーションしかとらない既存の戦術機では有り得ないことだった。

さらに銃剣を突き刺してから撃つまでのタイムラグもなかった。

「二人ともきいて、その機体フェンリルにはDFSが搭載されていて、搭乗者にイメージしたモーションを即座に作成、適応すること

によって人間の持つ反射反応をそのまま機体に伝達することができる。

だから、君たちは機体をどう動かすかじゃなくて機体でどう戦うかをイメージして。

機体という機械を動かすのではなく機体を自分の手足の延長上と思つて動かして！！

そして…

その機体は重力の指向性を操作して動かしているっ！！既存の反動推進の常識はまず通じないから気を付けて！！！！」

月砂から通信で簡単な機体説明が入る。

周囲の追撃機は一斉に火炮を向ける。

反射的に回避に一番適したルートを検索する。

真横にサイドステップ同時に肩部スラスタを吹かす。

放たれた徹甲弾はフェンリルの残像を穿つ。

「なんとという性能だ…やはりこの機体すごい…！！」

フェンリルの反応速度、レスポンス操作性、機動性に感嘆の声を上げつつ敵機へ向かう。

背に設けられた対の翼より翡翠色の猛火を吹き出し、翔ける。

右手の長刀：カラドボルグの切っ先が地面と接触し火花と甲高い断続的な金属擦過音を散らせながらフェンリルは各部の翡翠色の燐光が引く残光のラインを携えて敵機に迫る。

「ヴオオオオオオオオオオオつ！！！！」

怒涛の気迫と共に敵機を袈裟切りにし断ち切る。

そして、敵機が爆発するよりも早くに離脱、そこを狙っていたチエルミナートルに向け超加速しその速度を持って右手の長刀を突き刺す。

胴体を深々と貫く、そしてそのまま刃を強引に横に振るう。
チエルミナートルの腹はまるで喰い破られた様に欠損しやがて爆発する。

立ち上る黒煙が風にさらわれ、チエルミナートルの残骸の上に立つフェンリルの姿をあらわにする。

そして、新たな獲物に向けその目を輝かせるのだった。

青紫と漆黒、二つの風とも思えそうほど自由自在に鋼の墓標が立ち並ぶかつての草原の上空を上下前後左右の三次元でデットヒートを繰り広げる二機の戦術機。

「やるっ！！しかもこの感覚はっ！！」

青紫の風、漆黒の翼を持つ青紫の鋼鎧シリウスを操る亮は、不快感を露わにする。

まるで、脳の中に胃カメラをブチ込まれている気分だ

戦闘が始まって感じるその感覚に徐々に苛立ちが募る。

近づこうにもその瞬間を正確無慈悲な砲撃が放たれ、隙を作るため攻撃しようにも兵装担架が稼働した瞬間を砲撃され回避に専念するしかないのだ。

しかも親切に向こうの硬直時間をカバーするように砲撃が発射される隙がない。

その上この不快感を煽りまくって剥げそうな感覚、亮の勘忍袋の緒が切れるのも時間の問題だった。

「クリスカっ！？あの人全然心が見えない、聞こえない！どうしたらいいの！？」

イーニヤは後部座席に座る、自身の姉であり母でもある存在に泣きつく。

脳波遮断措置を施しているのか？それとも…

意図的に自分たちの精神感応を単身で遮断できる存在をクリスカは一人しか知らない。

あの5年前に別れた赤い翼騎士を駆る東洋人の青年…

「まさか…リョウウ……なのか…？」

無意識のうちに言葉は口から零れるのだった。

しかし、戦士としての本能なのか即座に荒れる心を落ち着け敵を打倒する手段を模索する。

「イーニヤ、一旦全操作系を私が受け持つ、その瞬間に全力でリーディングして。」

「分かった。」

第6世代のイーニヤのESP能力は高い、そして敵の反応から読み取れることはできなくとも何らかの効果があることを動きから悟ったクリスカは全力でやれば何かしら起きると考え指示を出す。

両手の突撃砲を眼前の青紫の機体に向け時間差を持って放つ。

これによって相手の意識は回避に専念しなくてはならず精神に穴が開く、そこを突くのだ。

「イーニヤ！！今よ！！！！」

「うんっ！！」

俺に…入ってくるなああああつ！！！！

瞬間、イーニヤの脳裏に獣、いや龍を彷彿させるような雄たけびと供に無数の光景が流れ込む。

雨の中、男の人の生首を持ち高笑いをあげる男

そして、その男が後ろから自分の子に銃で撃たれる光景

あたり一面、水晶でできた渓谷

そこで蠢く周りと同じく水晶で出来たような巨大な蜘蛛、見るものすべてを捕食する究極の攻勢生物、金色の瞳と人間のモノではない四肢をもってそれと戦い砕き、武具で切り裂き粉碎していく青年。

夜の街、蠢く無限ともいえる死体の群れを薙ぎ払っていき、ただの肉塊と肉片へと変えていく青年

灰へと還っていく死の街で後ろから刃に貫かれる青年

クリスカの問いにも答えず、イーニアは頭を抑え、振り回し震え痙攣する。

「怖い！！怖いよ！！助けてクリスカっ！！！！」

それは新人兵士が陥る、シエル・シヨック…精神が恐怖で打ち砕かれ恐慌状態に陥る現象である。

こうなつては戦術機の操縦などではしない。

「…ごめんね、イーニア」

クリスカはイーニヤを落ち着かせるために鎮静剤投与と催眠暗示を行おうとする…しかしその隙を逃す亮ではなかった。

「その隙…貰つたっ！」

「クッ！」

頭上を取り猛スピードで落下してくるシリウス、即座に機体を仰向けにし両手の突撃砲を発射する。

「その程度！すでに読んでいるっ！！」

“キイイインっ！！カッアアアンっ！！”

120mm滑空砲の弾を両手のデュランダルを交差させ防ぐ、しかし剣は両方とも弾かれてしまう。

「今ならっ!!」
クリスカのビートルクトは無防備になったところに再度突撃砲を撃つ。

「読んでいるといったあぁっ!!」

シリウスが腰部兵装担架の突撃砲を投合する。

弾は突撃砲を穿ち破裂させ、クリスカの視界が爆煙でふさがれる。

「捕ったぞっ!!」

爆煙を突き破ってシリウスが飛び出し、左腕でビートルクトの顔面をつかみ落下しながらさらにスラスターの出力を上げ、それによって尚加速をあげながら墜落する二機

“ドオオオオオん!!”

凄まじい轟音が響き、土砂が舞い上がりクレーターが作られる。

そのクレーターの底、でシリウスはビートルクトに対しマウントポジションを取っていた。

”ガキン!!!”

そして、右腕のカーボンブレードが腕前方にスライド、ロックされそれを引き絞る。

「これで仕舞だ!心安らかに眠れっ!!!」

その刃を管制ユニットに向けて真直ぐ撃ち出した。

続く

第三六話 終末の獣 後編（後書き）

SU-47ビートルクト

1999年配備開始のソビエト製純第3世代戦術機。

SU-37をベースに、ハイヴ攻略・制圧戦における密集格闘戦を主眼に再設計が施され、X-29の面影を色濃く残しながら、究極の機動近接格闘性能を追求した強化改修機。

近接戦性能向上を図り増設・大型化されたスーパーカーボン製ブレードベーンにより制御困難になった空力特性を補佐するため、西側最新アビオニクスの導入とOBLへの換装が施されている。結果としてその処置が、高効率・高出力の跳躍ユニット主機との相乗効果を生み、三次元多角形機動とも言うべき驚異の運動性能を獲得した。また跳躍ユニットには前進翼が採用され、これも運動性能の向上に一役買っている。

加えて、新設計の大型主脚の採用で連続稼働時間も30%増加している。

本国でMiG-35との比較試験が行われており、また2001年の時点で第43親衛戦術機甲師団へ配備が進められている。

名称は露語でイヌワシのこと。

愛称はオルタ本編及びLD1・LD3ではベルクト、TE・TS FIAではビートルクトとなっている。

ハイヒールなのはグチャグチャのウン みたいになったBETAの死骸で滑らないようにするためとか…

第三七話 言葉を交わすのはいつの日か

激しい衝撃により一時的に暗闇に包まれたクリスカが瞼を開けるとそこには…

逆光の中浮かび上がるシルエットがあり、その右腕に装備された刃を振り下ろさんと構えている瞬間であった。

「くっ…」

歯を食いしばる、トリースタとの誓約であるイーニヤを守るという約束さえも守れず…あの時、一緒にトリースタの最期を看取った青年との再会も果たせない。

…ただそれが無念でならなかった。

「リヨウ…もう一度遇いたかったな…」

振り下ろされる刃がスローモーションで映り、脳裏に一夜の思い出が駆け巡る。

小説のように熱い夜を過ごしたわけではない、ただ普通に普通にコーヒーと一緒に飲み焚火にあたり、朝日で彼の奏でる旋律を耳にし涙した。

そして、機会があればまた会おうと言って別れた、別れの品として今も操縦席に置かれているオカリナを貰い。

そして再び会うことを目標に生きてきた。

5年間、その時の流れはクリスカの興味を恋心へと変化させそれに

気づかずとも亮に再び出会うことのみを希望にして生きてきた生きてこられたのだ。

瞳から零れ落ちる滴：それは少女が長い時をかけて培った夢が水泡に帰すことが彼女の心中で決定した証であった。

「え？」

しかし訪れた現実に疑問の声を挙げた、眼前の重騎士の腕刃はビエールクトの薄い胸部装甲、三寸先で停止していたのだから。

「っ！！止まれ！！！」

一瞬脳裏に浮かび上がった光景に亮はとっさにシリウスのコマンドをキャンセルさせた。

衛士と機体をつなぐフィードバック・マン・マシン・インターフェイスがその反応を捉えシリウスのタイフーンと同型の腕に取り付けたラファールの刃を止める。

「…今の感覚、クリスカなのか……」

脳裏に浮かび上がった光景、それはこの世界にきて最初の夜それを知っているのは二人のみ

クリスカが無意識に行ったプロジェクションにより亮は眼前の戦術機に乗る人物を悟る。

その時、

“ドゴオオオオオンっ！！！”

真横から120mm滑空砲がシリウスの頭部に命中し機体を吹っ飛ばした。

Tドットアレイという力場と最新素材であるHC装甲により外見はダメージがないが衝撃に経りカメラからの映像が乱れノイズが奔る。地面に仰向けに横たわるシリウス、即座に背面ウイングスラスタを吹かし起き上がる。

「ちいつ！！増援か！？」

砲撃の方へ向き直る青紫のシリウスその視線の先には3機のビートルクトがあり、硝煙を上げる突撃砲を向けている。

武装は長刀：カラドボルグのみ、しかも一対多数：クリスカの機体が再活動できるかは疑問だが不利は否めない。

「…………クッ！！」

不利を悟り歯を噛み締める亮の網膜には赤く表記されたカウントが凄まじい勢いでその数字を減らしている。

「時間切れ…か」

プラズマジェネレーターの核融合反応を臨界まで加速させるリアクターモード、当然核融合反応の加速はその熱量を増し機体冷却に負荷をかけ一定時間をい過ぎればオーバーヒートを防ぐため機体のセーフティが発動し出力が25パーセント以下まで下がる。

そうなつては袋叩きもいいところだ。

対の長刀を漆黒の翼から引き抜き盾にしつつシリウスは後退する。

ある程度距離を稼いだところで反転、最大速度で離脱する。

“プシューウウウウウ！！！”

その途中で機体を通常モードに戻す、機体のあちこちから超高温の蒸気が噴き出て陽炎を起こし景色を歪め、蒸気の尾を引く

蒸気の尾を引きながら飛行するシリウスのコックピットで亮は自問自答する。

「俺は…なぜあの時刃を止めた？」

今まで顔見知りであろうとなかろうと敵ならば殺した俺が今更どうしたというのだ？

その問いに答えるものなどいない。

（もう一度、もう一度あの娘…クリスカに合えばわかるか？）

後ろ髪をひかれる思いを残しながら亮は月砂と合流するのだった。

「無事か？イーダル1」

「すまない、通常動作は何とか可能だが戦闘続行は今の機体状況だと少し難しい…」

クリスカは機体の状況を網膜に投影させ操縦桿根本にあるコンソールを操作していく。

その前部座席では自分の妹のような存在であるイーニヤが気絶し眠りにについている。

機体の各関節は落下の衝撃でダメージを負っており頭部は半ば握りつぶされ半壊状態でメインカメラが死んでいる。

こうなっては射撃管制能力がガタ落ちでまともな戦闘は出来やしない。

「そうか、ではわが部隊はイーダル1と共に後退する…この国はもう終わりだ、何ちようどいい実験場だったがEUの最新鋭機という貴重な情報を得れたのだ収穫は十二分にあつたと判断する。」

対BETA戦と比べ圧倒的に帰還率の高いこの国の戦争はソビエトにとって同じ社会主義国の救援という名目で新兵器の実戦テストを

行つのにちょうどいい演習場だったのだ。

「はっ！」

ゆっくりと油の切れたブリキ人形みたいな音を立てながらクリスカのビールクトは起き上がり他の機体と共に後方へと跳躍ユニットを吹かし後退するのだった。

（しかし、なぜあの新型の衛士は止めを刺さなかったのだ？）

クリスカは知らないその新型に待ち望んだ人物がいた事を…

同時刻、国連大西洋方面第1軍ドーバー基地群

そこに存在する戦術機ガントリーでランティスは新たな愛機を見上げている。

多方向からライトで照らされ暗闇から映し出されるその上半身をその胸部あたりの高さに設置された通路から見上げているのだ。

その新たな機体とはヒュッケバインmk-?、ヒュッケバインの実働データをもとに製作された機体でmk-?は現在、最終作戦に向けて強化改修中である。

「どうですかmk-?は？」

かつん、かつんと反響する足音と共にイーグルが現れる。

「全体的な印象だが、mk-?に比べより洗練された印象を受けるな。操作もmk-?にくらべよりシャープだ」

「Gシステムはどうですか？突撃砲くらいなら軽く防げるくらいは障壁を張れるのですが」

「歪曲率を変化させることでレーザーをも屈曲させるアレか…」

「グラフィコンシステム、mk-?の装備されたオーバーテクノロジーであり東雲しかその原理を理解しきれず機構を模倣することで何とか実用化したモノ。」

「好き好んでレーザーの的にはなりたくないのでは試していない。」

「まあそれもそうですか。一樣実射試験では良好な結果をのこしていますよ。」

「おい、発言には気を付ける。…あれはAAAクラスの秘匿事項だぞ」

「おっと、これはすみません。」

ランティスの諫められにつこりと笑顔を崩さず謝罪するイーグル実射試験、つまり光学兵器が製造開始されていることを示唆することであり未だ軍上層部と軍事企業のトップしか知る者はいない。

「…まあいい、イーグルお前はシノノメをどう思う？」

「どう、とは？」

「ヒュツケバインといい、テスラドライブを始めとしたオーバーテクノロジーを始めとした新型戦術機的设计開発を兼任する技術者にして戦士…少々出来すぎだと思わないか？」

「ランティス…あなたの懸念は尤もですが僕は彼が何を目指しているのか何となくわかる気がします。」

「なに？」

ヒュツケバインを見上げながら線のように細い目を若干開きブラウンの鋭い視線をヒュツケバインに注ぐイーグルにランティスは疑問の声を挙げる。

「ランティス、仮にですが今地球上からBETAがいなくなったとして月を奪還するのにどれほどかかると思いますか？」

「それは…」

「無・低重力下で運用できる機動兵器はF-4のベースとなったハ―デイマンのみ…つまり―から全く新しい戦術機を開発しなくてはなりません、三〇年たって未だBETAに決定的打撃を与えることのできなかつた戦術機を作り直して。」

当然、あたらしいカテゴリーの兵器は金と時間と人手がかかる。

唯一の水中機であるイントルーダーが一種類しか開発されていないことからその難しさが垣間見れしかも真空という極めて過酷な条件下の開発はいろいろと制約がつくのだ。

たとえば真空では太陽光に照らされた部分は一気に数百度という高温だが影の部分はマイナス250度近い極低温にさらされる。

さらに一瞬で潤滑油も蒸発し空気中と違い酸化しないため断面の摩擦係数が異常に高くなる。

極め付けに既存の戦術機は跳躍ユニットのタービンエンジンから機体に内蔵されたバッテリーに給電することで稼働しており真空では戦術機は文字通り木偶の坊と化するのだ。

そんなあらゆる条件をクリアした機体、ヒュッケバインと第四世代戦術機

そこから導き出される答え。

「おそらく、彼の目的は地球絶対防衛線の構築もしくは宇宙からのBETA根絶、このどちらかでしょう。量産に秀でた戦術機と一機当たりの機体性能が高いPTと呼ばれる新概念機動兵器のHiilowミックス構想…それらを運用する指揮所を兼ねそろえた移動戦闘母艦…一騎当千の超闘士、人類の未来を切り開くそれが彼の望みなのでしょう。」

PTとは人型で四肢を持ちマニピレーターによる武装交換というところは戦術機と同じだが始めから宇宙空間での戦闘を前提で開発されているためその起源こそ戦術機と同じ低重力下での重作業機械だがそこで地上運用と宇宙運用で分岐し、それぞれ別の進化の道を歩んだ分かたれし兄弟、

故にPTを一機であろうと設計図通りであろうと開発するということとはそのまま宙間戦闘用の機体を開発することと同義なのだ。

「もっとも彼が最終的に求めているのは別のモノでありBETA根絶は過程なのでしょうが…」

「？あいつは何を求めているのだ」

「以前彼は言っていました…」

ランティスの問い返しにイーグルは「僕が言ったことは秘密にしてください」と人差し指を口に立てその意思を伝える。

「自分はランティスが羨ましいと、
「俺がか？」

怪訝な表情になるランティス、確かに家柄など他人に羨ましがられる要素はいくらでもあるが亮がそれに頓着する性格ではないことは知っているし、生身・戦術機とわず彼の戦闘力には逆に羨んでいるのだ。

…ひそかな秘密だが
それにイーグルはにっこりとほほ笑みながら続ける。

「あなたは光という伴侶を得て、もうじき子供も生まれる…あなたの世界は輝いていませんか？」

昔、御前試合で亮に完敗したランティスは彼の強さの秘密が知りたく日本や中国などあらゆる国の前線へとおもむきその際、極東の国で一人の女性と恋に落ちた。

恋は盲目とはよく言ったもので思い出したら思わず顔が赤面してしまふような言葉も口にしたり、向う見ずに突っ切ってしまった。

しかし、それ以来自分の見る世界は幼少期の世界の汚さを知る前と同じように確かに輝いて見える。
だから、その幸福を守るために戦う。

「彼は力も才能もある、客観的に見れば皆が皆彼を羨み、妬むでし

よう。

すでに才能に恵まれた彼の幸福を誰が願うのでしょうか…ランティス、彼は見ず知らずの人を救い、自分の幸福を願い心を満たしてくれる人を探し続けているのだと思いますよ…その中にいるかもしれない者を生かすために　　これでもまだ彼が疑わしいですか？」

「ふっ、最初から疑ってはいない。ただ気になった…あいつがどこから来たのかな」

「確かに、それは僕も気にはなりますが…いつかいつか彼が打ち明けてくれるまで待ちましょう。それが彼の友人を自負している僕らの役目です。」

二人は再び照明の明かりを受ける巨大なブルーグレーの人型を見上げたその時、

“ブウン！！ブウン！！”

けたたましく警報がなりあたりが赤いランプが辺りを照らす。

「第一種警戒警報っ！BETAかっ!？」

「ランティス、ヒュツケバインへ指令室との通信を!!！」

イーグルに言われるままにランティスはヒュツケバインのコックピットへと飛び乗り、機体に火を入れるのだった。

第三八話 地獄の入り口

けたたましい警鈴が鳴り響く中、基地の一角の滑走路上に設けられた地下の戦術機倉庫から戦術機を発進させるための昇降機リフトが駆動音と共に稼働し地下へと続く暗闇の中からブルーグレーの18m程の人型が現れ、その瞳に輝きをともす。

ランティスのヒュッケバインMK-?である。

その両手にはM90cアサルトマシンガンが保持され腰のバックアーマーには補助アームマウンターが装備されBWS-07 デュランダルが備えられている。

さらにほかの滑走路の地面が割れ地下からライムグリーンの機体が何体も現れる。

戦術機とは明らかに違うそれはヒュッケバインmk-?の各部を簡略したことが見て取れ、チャクラムシューターのオミット、頭部センサーの簡略、デュアルアイのゴーグル化など各部に明らかにコストダウンを図ったことが見て取れる部分が多い。

唯一同じなのは武装と背部のメインスラスターぐらいだ。

異世界において地球連邦の主力機として採用された量産型ヒュッケバインmk-?である。

それらもランティスのヒュッケバインと同様の装備を施され両手にM90cアサルトマシンガンと後腰にBWS-07 デュランダルを携えている。

「各機に次ぐ、俺たちの目標は地中進行してくるBETA群の水際防衛にある、現在フランス陸軍第6竜騎甲兵団がロンハイブに間引き作戦に出ているため基地の防衛力が想定以下にある。」

このままでは撃退したところで彼らがこちらに進行しているBETA群が撤退した場合、挟撃に会う可能性もあるため俺たちは攻性防御にて敵の数を減らす。

第一小隊は俺に続け、第二小隊は第一小隊を援護射撃にサポート、第三・四小隊はラインメیتالで高狙撃戦を行え」

「僕も仲間に入れて、いただけませんか？」

今まさに凶鳥が羽ばたこうとしたその瞬間にランティスのMK ? に聞き覚えのある声の通信が入る。

「何!?!」

一機の戦術機が昇降機によって押し上げられ、其の姿を現す。

フランス軍最新鋭機ラファールを基幹としシリウスの部品を流用して強化改修された機体。

純白のボディにYF-23と同形の灰色の肩部モジュールと蛍火の燐光を放つセンサーカバーと放熱フィン
本体と同じく純白の対の翼

ラファールにシリウスと同様の改修を施したイーグル専用の先行試作機

FTO - (エフ・ティー・オー)

【Fourth Type 0】を略した機体名でありフランス軍初の第4世代機その零番機

「今は一機でも多くの機体が必要なはずです、僕の実力はあなたも知っているでしょう?」

からかう様に自身の必要性を説くイーグル
イーグルは今でこそ商業と開発事業に専念しているが訓練校を主席で卒業し実戦経験も豊富であり何よりラファールを完璧に乗りこなす実戦配備にまで漕ぎ付かせた功労者である。

タイフーンよりいち早くラファールが配備されたのは彼の存在が大きいと言われている。

今まで第三世代機が存在しておらず相違点や操作の違いなどが一切マニュアル化されていないラファールを乗りこなすということから彼の高い戦闘センスや衛士適性が見て取れる。

「しかしお前は…」

イーグルは今の欧州にとってなくてはならない人物のひとりでありこのような事態だと速やかに後方に避難するのが通例である。

「ランティス…僕は戦士としていきたいのです。」

覚悟を決意を込めた声色で言い切るイーグル

戦士は戦場でしか生きられない、魚が水中にしか鳥が空にしか生きられないように。

始しました。

未だレーザー種は認められず凶鳥部隊は作戦行動を開始してください。」

「では各機発進！各々武勳を上げろ！！」

「了解！！」

各機の復唱が通信機から帰ってくる。

それと同時にヒュツケバインの背部のメインスラスターから青いプラズマのフレアが吹き出し内蔵されたテストドライブによって浮き上がる機体を押し出し粉塵を舞い上げながら十数期の機体が離陸する。

凶鳥の群れは飛び立った。

「邪魔をするなっ！！肩がっ！！！！」

鮮血色を基調にところどころを黒く塗装されたラファールは荒れ果てた荒野の地面を蹴りそのまま腰後部の跳躍ユニットのロケットエンジンを点火、砲弾のように迫りくる矢じりか雪掻きのような甲殻をかぶった突撃級をクイックターンでかわす。

通り過ぎた突撃級と背中合わせの状態となる。

ラファールの左腕が肘が後ろを通常の人間では考えられない稼動領域を持って180度逆さ向き逆さに構え、突撃砲の銃口が突撃級の

無防備な背面を捉える。

“ダダダダダダダッ！！！！”

強烈なマズルフラッシュと共に36mmの徹甲弾が銃口から放たれ突撃級の無防備な背面から剥き出しになっている柔らかい体組織を貫通し内部を蹂躪。

動かなくなる突撃級の死骸を確認するよりも早くに、迫りくる突撃級をすれ違いざまに右手のフォルケイトソードで真横に甲殻ごと上下に両断する。

「アツシュ師団長っ！！」

「騒ぐんじゃねえ！！いいか！俺たちが此処を突破できれば基地に向かってくるくそ豚どもを基地防衛部隊と挟み撃ちにできるんだ！！だから何としても此処を突破するぞ！！」

「東方6km地点に光線級です！？」

「ちい！こんな時に！！」

真紅のラファールを駆る衛士長い朱髪を携えた碧眼の18ほどの青年、通称【鮮血のアツシュ】は歯切りする。

ハイブに存在するBETAの個体数が飽和状態になると外延部のBETA群は内陸部のBETA群に押し出されるように大規模侵攻を開始する。

故にハイブ周辺のBETAの個体数を一定値以下に保つための攻性

防御を目的とした攻撃が俗にいう間引き作戦である。

そうして多数のBETAと戦闘を行っていた竜騎機甲兵団だったがその真下を多数のBETAが地下進行していたのだ。

何体も地下から湧き出てくるBETAと戦闘の騒音に紛れその舞台はユーラシアの地下を掘削しドーバー海峡超えて彼らの基地へと迫っていた。

はたしてこれはBETAの戦術的進行なのか単に偶然が重なっただけのモノなのかは誰にもわかりはしない。

「そういらいらすんなアツシュ……俺らで落とせばいいだけだろ？」

灰色の珍しく日本帝国軍で採用される74式近接長刀を背負ったタイフーンを駆る短く刈られた金髪に碧眼の好青年と言った風貌の衛士：ガイラルディア・ガラン・ガルディオス伯爵：通称ガイがたしなめる。

「いいだろう、俺とガイが光線級を殲滅する。」

……その際に貴様らは一斉に離脱しろ。いいな!？」

「はっ!?!ご武運を!?!」

ミラージュとラファールの混成部隊から離脱する二機の戦術機を部隊員たちは見送り地下から湧き出る異形を相手に奮戦するのだった。

「ガイ！俺が囿になるその隙に近づいて斬れ！！」

「…分かったけどよ…あまり死に急ぎすぎるなよ。ルークはお前の代わりじゃないんだ…お前の代わり、あいつの代わりになる奴なんているわけはないんだぞ。」

「…分かっている……………」

「ならいいけどよ…っとおいでなすった！！」

「遅れるなよガイ！」

「そつちこそ！！」

ジェット噴射で地表から粉塵を巻き上げつつ高く飛び上がる紅いラファール。

最優先撃破目標を確認した光線級、重光線級は照準用の低出力レーザーをラファールに照射し射線を取る。

全高3メートルほどの脳髓から足と目玉が生えたような薄気味悪い容姿の光線級と戦術機を超える全長を持つ二本足とバランスを取るための尾を持つ一つ目の異形 重光線級の目は過熱放射により目に光が集まるような様相を呈し、天候や大気による減衰を物ともしないほどに高出力の超高密度の指向光…レーザーが発射される。

「今だガイっ！！」

レーザーが発射される直前にアッシュは機体を反転、天に跳躍ユニットと背面を向け一気に噴射、ラファールはレーザーが当たる直前に重力と噴射反動によって地面に向け加速し一瞬前にラファールがいた空間がレーザーによって灼かれレーザーの余光によってラファールの機体が照らされる。

そして、凄まじい速度で落下するラファールは反転、着地の姿勢を取るとそのまま要撃級の一体をクッションに着地する。

巨大な質量の塊である戦術機が真上から落下してきたために要撃級はその背中から血飛沫をあげなが押しつぶされ肉塊となり噴き出た鮮血がラファールの表面をさらに赤く染める。

「うおおおおおつ!!!」

レーザー再照射までのインターバルにガイのタイフーンが宙に舞い光線級の群れに36m突撃砲を撃ちこむ。

ところどころに存在する重光線級に火花が散りその周囲に紅い火花が咲き乱れる。

「ちい!!相変わらず固い!……けどよっ!!!」

重光線級の見かけ以上の外郭の硬さに舌打ちするガイしかし、跳躍ユニットの出力をあげ空気を引き裂きながらタイフーンは加速し重光線級に向かいながら突撃砲の120m滑空砲を連続で発射し重光線級を穿つ。

120mmの劣化ウランの芯が入った砲弾は弾の最後部にあるロケ

ツト燃料を爆発させ加速し重光線級の目玉を保護する瞼を貫通しその体内で破裂し致命的なダメージを与える。

未だいる重光線級、そのインターバルが終わり再びレーザー照射の準備が始められる。

しかし

「もうここは…」

ガイの灰色のタイフーンは弾が僅かしか残っていない突撃砲を躊躇なく放り捨てその右腕を背の兵装担架に備えられた74式長刀のつかに伸ばす。

「俺たちの間合いだっ!!!」

火薬ノッカーがさく裂し刀身が跳ね上げられその運動エネルギーを殺さずに重光線級の一体を真横から縦に両断する。

動作直後の一瞬の硬直、そこに旋回した重光線級のレーザー照準用の照射がタイフーンの装甲の一部を赤く照らす。

「やらせるかっ!!!」

いつの間にか近づいていた紅い血塗れのラファールが灰色のタイフーンにレーザー照準を行っていた重光線級を鎌のような先端を持つ長刀：フォルケイトソードで同じく縦に両断する。

距離を近づければそれだけ相手は大きく視線を動かす必要性があり視線がそのまま攻撃になる光線級は接近されることでその脅威度を

著しく下げるのだ。

残りの光線級にガイのタイフーンとアッシュのラファールが向かおうとしたその時、

“ドオオオオオオオンっ!!!”

地面が爆ぜ要塞級がその姿を現しその足元に無数の戦車級がその穴から這い出てくる。

「数で攻めるしか能のない屑がつ!!!」

「そうカッコしなさんな…：作戦目標は変わらないだろ？」

「わかっている!!!」

頭に血が上りやすいアッシュのブレーキ役であるガイがたしなめつつ二人はそれぞれの機体の全身に装備されたカーボンブレードと長刀を巧みに操り戦車級の肉片と血飛沫の中を駆ける。

「面白そうですね、僕も混ぜてもらいますよ」

突然の通信、

そして幾つもの大口径の砲弾が飛来し要塞級の身体を貫通し一発のミサイルが真直ぐに要塞級の頭部に命中、爆発し頭部を失い全身をスタボロにされた要塞級は何体もの戦車級を下敷きにしながら黒煙を上げつつ倒れる。

「だれだ!?!」

「その声は…イーグル・エンドルフィンか!?!」

「お久しぶりです、アッシュ・フォン・ファブレイ子爵様」

相変わらずの微笑を携えたイーグルの駆るFTOは右腕のM90アサルトマシンガンから硝煙を上げつつ地面から数m浮いた状態で真直ぐに翡翠色のフレアを推進力に飛来した。

第三八話 地獄の入り口（後書き）

これに出てくるアッシュは灰ではなく樹という意味です。

ヒュッケバインmk ?

mk-?の実働データと蓄積された技術を使ってmk ?の建造データに沿って作られた機体

部隊運用前提で隊長機はノーマルヒュッケバインmk ?とほぼ同じものが充てられる。

主な変更点は非実体装備を廃していることと腰のバックアーマーに兵装担架を装備できるようにしていること。尚テスラドライブを装備したトロンベ仕様。G?フレームではなくHフレームが使われている

ヒュッケバインmk ?・M（量産型）

OGのものとはあまり変わらないが背のメインスラスターが上記の物と同じになっているほか同様の改修を施されている。

これは機動力を優先したため。

両者ともに巡航能力は戦術機に負けるが瞬発的な機動力、旋回能力は圧倒的でありレーザー回避能力が着眼されている。

00ユニットってどうなってんだ？

擬似生体

クローニングや細胞培養を応用して人体の一部を複製する技術
機能のほとんどを人体とほぼ同等の水準で再現可能、BETA大戦
によって負傷者が急増したことによって急激に進歩した。
また00ユニットはこの技術を応用して作られている。

マブラブ公式メカ設定資料集より

つまり肉体はスミカの細胞を培養して作られたものであるらしい

ってことはスミカのクローンの体に量子電腦が脳みその変わりに入
ってんのか（手のひらサイズであることから考えて脳みそ部分にキ
ッチリ収まると思う）、ターミネーターのシュワちゃんみたいな
かさっぱり不明

どちらにしても擬似生体って擬似じゃないし（複製生体部品のほう
が意味としては正しい）生体の部分がある以上生物根拠0でもない
（人間の細胞も厳密に言えば一個の生命体であるから）

生物は、自己増殖能力、エネルギー変換能力、ホメオスタシス恒常性維持能力、自
己と外界との明確な隔離という特徴をもって定義している。（自己
増殖は上記のうちどちらであるからで分かれる）

皆さんの意見を聞かせてください!!

あとどうでもいいけどXMM3のCPUでバイオコンピュータだと思
う。

生体素子を使った集積回路で通常のコンピューターと違い二進数で
はなく4進数で演算している。

特別なプログラムを組まなくても並列演算が可能、さらに素子自体
が演算内容に合わせて成長するため演算速度が自動的にあがる。

しかし制御用ドライバーに人間の頭脳と同じ演算システムが要る。

(00ユニット研究していた夕呼先生なら人間の脳にも精通してい
るし)

第三九話 十字架のスペレッド

トウエ レイ ツエ クオ リヨ トウエ セイ

風に乗って旋律の調が流れる。

クオ リヨ ツエ トウエ リヨ レイ ネウ リヨ ツエ

真っ白な壁に囲まれた部屋の窓際に設けられたベッドの上で緋色の髪を首元で切り揃えた碧眼を携えた少年は歌を口ずさむ、自分の愛しい人の歌うその歌を

オ
ヴァ レイ ツエ トウエ ネウ トウエ リヨ トウエ ク

青空をそこに流れる雲を見上げる。

その窓から見える景色のみが今の彼にある唯一の外界の景色

リヨ レイ クオ リヨ ツエ レイ ヴァ ツエ レイ

作られた命、その篝火が消えるのはもう間も無くだ。

生きていたい、生きて明日を掴みたい

ヴァ ネウ ヴァ レイ ヴァ ネウ ヴァ ツエ レイ

自身の原体たる兄弟は戦場に今もいる。
オリジナル

自分は彼に何かあったときのための臓器のスペア、
まだ擬似生体の技術が確立されるよりも前の話…ルーク・フォン・
ファブレはアッシュ・フォン・ファブレの予備パーツとして生を受

けた。

クオ リヨ クオ ネウ トウエ レイ クオ リヨ ツエ
レイ ヴァ

ほぼ世界初となった人間のクローニング、その代償は短命な体だった。

遺伝情報抽出の際に遺伝子が損傷したために造血肝細胞が不完全となり体中のあらゆる臓器に異常がおき始めていたのだ。そのため20まで生きられない体となっているのだ。

レイ ヴァ ネウ クオ トウエ レイ レーイ

歌が終わる。

自分が作り物の命と知って生きる意味を見失った。

何かのために生まれなければ生きられないのか？

自身の剣の師である人物は問うた。

そして徐々にしかし確実に体を蝕んでいく死の予感…その果てに悟った。

生きていることに意味はないのだと、生きたいと思った。

…ただそれだけでいいのだと、愛しい人ともに未来に向かって歩みたい。ただそれだけでいいのだとやっと判った。

だけど…その未来への道は短い、運命のレールその上を走る列車に自分は途中の駅までしか切符を持っていない。

自分にとっての終着駅はもうまもなくだ。

「ルーク、体の調子はどう？」

扉が開かれ栗毛色の長髪を腰まで携えたブルーグレー色の瞳の少女が現れる。

年ころは十代後半、17・8といったところだろうその女性らしい体のラインの象徴である胸部の前に白い花束を携えている。

「ああ…今日は目も見えるし調子もいいよ、ティアの顔をはつきりと見ることができる」

少女は枕もとの机に置かれた花瓶に持ってきた花を生けながら空を見上げる緋色の髪の少年自分より二つ上の少年を見やる。

「そうよかったわ…譜歌……………歌っていたの？」

「ああ、あの歌はなんと言うか心が安らぐんだ…ティア、歌ってくれないかな？」

「いいけど…またなんで？」

再び少年は少女を見やる、少女が小首を傾げその揺れによって前髪に隠れた右目が目に映る。

その一瞬、の光景を美しいと感じた。

あと何度その姿を見ることが出来るかは判らない…そう、多くはないはずだ。

だから、その一瞬を一コマでも多く瞳に焼き付けようと思う。

「ティアの歌が聞きたいんだ…ティアの声はきれいでやさしいからな…」

はにかんだ少年の笑顔と共に向けられた言葉によって少女の頬は若干、朱に染まる。

「……………ばか」

か細い声で少女の声が漏れる。
俯いた少女の顔が持ち上げられ、何かを堪えている様な笑みを向ける。

「仕方ないわね……………いいわよ、」

「ああ！」

トウエ レイ ツエ クオ リヨ トウエ セイ

今度は少女の声で歌が綴られる。

歌を耳にしつつ緋色の髪の少年は空を見上げ、遠き地ユーラシアの故郷の地を踏む幼馴染とオリジナルに思いを飛ばす。

(ガイ…アツシュを……………あの馬鹿兄貴を頼んだぞ)

空に浮かぶ白雲が歌に乗って流れ、花瓶の白い花が揺れた。

(アツシュ…お前は大好きな人を…お前のことを好きでいてくれるやつを泣かすんじゃないぞ)

「何で貴様がここにいる!？」

「ランティスに新型をもってきたところ今回の進行がおきてしまっ

たので」

飄々としながら機体を操るイーグル

イーグルの駆るFT0はまるで舞うように銃撃を放ち、蹴りで飛び掛る戦車級を切り裂き肉塊へと変えていく。

プラズマジエネレーターの高出力とテストドライブの無反動推進の未だデータ蓄積が不十分でオペレーション・バイ・ライトの動作補助システムが機能し切れておらずマニュアルに近い制御を強いられているとは思えないほど軽やかな動きである。

そもそもプラズマジエネレーターの超高出力はセミオートでなければ機体に振り回されるのがオチでありウォールのメンバーでさえ未だ実戦にはリミッターは欠かせなくリミッターなしどころかささらに高出力のリアクターモードを使う亮は化け物の一言に尽きる。

余談ではあるが戦術機の動力ではPTを数分間程度しか動かすことのできない出力しかないことからどれほど高出力かが悟ることができるだろう。

「そんなことを言ってるじゃねえ！貴様が、基地にいるはずの避難しているしてなければならぬ貴様がなぜここにいて聞かなくてんだよっ！……！」

「落ち着けアツシュ、後半口調がルークになってるぞ？」

頭に血が上っているアツシュを諫めるガイ本当に苦勞人である。

「まったく…もうじき20になるのですからもう少し落ち着いてく

ださい…」

「うるさいっ！誰のせいだと思っていやがる！！！」

「だからそうかつかすんなって…」

イーグルの言い様に逆上するアッシュに対し本当に疲れた口調でつぶやくガイ…

そんな面々だが操る重騎士のフォームをもつ機人はすさまじい勢いで血飛沫を舞い上げ血風の中をスラスターによる閃光を携えて翔け抜ける。

「あなたに死なれては後々困るのです。世界のためにも、ルークを救う意味でも」

「何！？」

「アイツを助ける方法があるのか！？」

イーグルの言葉にストッパーであるガイでさえ声を荒げる。

それも当然のことだ自身の親友であり剣を捧げると誓った相手、体を持った欠陥ゆえに為す術もなく弱っていく彼を自分は見ていることしかできないのだ。

それがただ歯がゆく、せめて彼の願いをかなえようとここにこうしているのだから。

「ええあります、見つかりました。そのためには彼のオリジナルであるあなたが必要なのです。」

「アッシュー！！」

イーグルの言葉にガイは喜色の色を含んだ声で名を呼ぶ。

「わかっている!!!とつとついつらを片付けるぞ!!!」

アッシュは決意を新たに感覚欺瞞によって設けられた強化服のブーツの底のフットペダルを踏み込む、電気信号の錯覚ではあるが脳が本物と誤認する精度でその感覚が伝わる。

その操作によって朱色のラファールの跳躍ユニットからロケットエンジンが噴射されその反動によって急激に加速し前進する。

まるでバツタや蚤のように飛び跳ね襲い掛かってくる戦車級

「邪魔すんじゃねえ!!!」

左腕の突撃砲を尻ぐように連射する。

空中で戦車級は36mm徹甲弾に穿たれ、衝撃によって弾けとび宙に真っ赤な液体の花火が咲き乱れる。

その血風の中を翔け抜けるアッシュのラファール、

しかしその前方の地面が爆ぜ、舞い上げられた土砂と共に要撃級が姿を現す。

それに向かい一切の減速なしで鮮血に染まったラファールは迫り右手の鎌の様な先端を持つ長刀：フォルケイトソードを構える。

「ガイっ!!!」

「あいよっ!!」

「閃光っ!!」

一気に要撃級の眼前に踏み込みクイックターンに載せた切り上げるような横薙ぎの一閃を放つ。

鎌のような先端が要撃級の底に突き刺さり、長刀によって切り上げられ、そのまま宙に若干の赤い滴を撒き散らしながら浮く要撃級の巨体、それに迫る影

ガイの灰色のタイフーンである。

「追刃牙っ!!」

その手に携えた日本刀を横した74式長刀でタイフーンが一刀両断する。

すれ違い背中合わせにユーラシアの荒野に聳え立つ対の重騎士は再び地面を蹴り異形を刈り取っていく。

「やれやれ、僕たちも負けていられませんか、FTO…GO
っ!!!!」

FTOの背に設けられた白い対の双翼が跳ね上がり蛍火の猛火があふれ出し弾けるように前進するイーグルのFTO

空気を全身の装甲とブレードベンで押しつけ引き裂きながらすさまじい速度で地表を翔け抜けるFTOは一気にBETAの群れに踏み

込み片足のみを地面に叩き付ける。

「はあああああああああつ

!!!!」

推進力を回転力に変え高速でまるでコマのように回転するFTO、その両腕に保持されたM90Cアサルトマシンガンと後腰部に装備されたXAMWS-24 試作新概念突撃砲、その正規量産版を放つ。

FTOを中心に周囲にはら撒かれる徹甲弾によって周囲の異形は爆ぜ飛び気色の悪い生のオブジェと化す。
通常では味方に弾があたる可能性もあるための少数だからこそできる戦法だ。

“ザ、ザザ つ!!!”

支点となっていないほうの足が地面を抉り土煙を上げつつ回転を弱めながら静止するFTO

「奥義：大回転魔弾……なんちゃって」

その硝煙を上げている突撃砲を携えている機人の内部で横殴りの凄まじいGを受けたとは思えないほど飄々とした様子でおどけて言うイーグル。

「いくぞっ!!! 貴様らの相手はこのアッシュ・フォン・ファブレだ
!!!」

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ!!!」

「俺たちですよ」

BETA如き、働き蟻如きに戦士を止めれる訳は無い。

真に人が持つ強さ、正しき怒りと憎悪を持ちそれを体現する機械仕掛けの鎧を纏った戦士……生きようとすする活力を内に秘めた戦士、勇者を世界が望んでいるのだからそれはいつか生まれる。

…すでにその胎動を始めているかも知れない。

第三九話 十字架のスプレッド（後書き）

大回転魔弾：元ねた勇者王ガオガイガーのビッグボルフォッグの技

ルークとアッシュの関係はスパイラルを基にしました

第40話 凶鳥の群れ

「くっ…勢いが

途絶えない…っ!？」

国連大西洋方面第1軍ドーバー基地群を防衛するため出撃した戦術機部隊隊長はUNブルーに塗装されたタイフーンの管制ユニット内部で歯噛みする。

現在、東ドイツの部隊は現政権が解体されるまで出撃を禁じられ基地に拘束中

フランス軍が間引きに出ていると同時に今回の進行が起こったため絶対的に戦力不足なのだ。

(しかし普段に比べ数が少ない…?)

フランス軍の間引きが効いているのか稀に起こる大規模進行よりその数が少なく

少ない戦力でどうにか持つてはいるがそれも時間の問題

「隊長おおおおおっ!!!？」

耳を劈く女性衛士の悲痛の叫びが耳に届く。

「どうした03!？」

通信の主、三番機のトーンードADVにカメラを向ける。そこには戦車級に集^{たか}られ真っ赤に染まった三号機の姿があり通信機越しに“ガリガリ”と装甲が噛み削られている音が届く。

「くっ、三号機発砲をとめる救助できない!!」

恐慌状態に陥った三号機の衛士は無暗矢鱈に突撃砲を撃ちまくりそれによって仲間の戦術機は近づけないでいる。

「ちい!!こんなときに!?!」

そうこうしているうちに海中から這い出てくる敵の増援

見捨てるしかないか !?!

そんな言葉が戦術機部隊隊長の脳裏に浮かぶ

「第4小队キャニスター弾撃てつ!!!」

突然入る通信とともに宙に無数の閃光の花が咲き鋼鉄の種子をばら撒く

地面がBETAの軍勢と共に爆ぜ飛び駆逐される。

大型種であれば表層を傷つける程度であろうが小型種には致命傷となり大型もその動きを一時的に止められる。

“ヒュウウウン”

“ドオオンン”

一発の90mmの鉄甲弾が飛来し戦車級に集られたトーンードの突撃砲を保持した腕を吹き飛ばす。

「援軍か!?!」

猛スピードのホバリングで真横を通り過ぎるブルーグレーの機体色を持つ翡翠色の双眸の戦術機とはあまりに違うシルエットを持つ機械仕掛けの人型とそれに続く3機のライムグリーンの機体達

「第一小隊は俺に続き前衛を行い後続の第二小隊は近接支援、第三小隊は防衛部隊の救助、第4小隊は支援砲撃を行え」

中隊各機の復唱を耳にしランティスはヒュッケバインMK-?の背部スラスターを一気にふかし両手のM90Cアサルトマシンガンを連射しながら疾走する。

通常弾の三倍近い口径を持つ90mmの弾頭はダイヤモンドの二倍から三倍の近い硬度を持つハイパーダイヤモンドであり突撃級の甲殻さえも容易く貫通し内部組織を蹂躪する。

「大玉…受ける!!」

ランティスを含む小隊各機のM90Cアサルトマシンガンの銃口の直ぐ下に備えられた単発式ミサイルが発射され巨大な爆発音と共に砲弾斉射よりも多くの敵を吹き飛ばす。

ランティスの第一小隊が前衛でBETAを駆逐している隙に防衛部隊にラインメイトルを保持した3機のライムグリーンの機体量産型ヒュッケバインが近寄り^{こめかみ}蟀谷に内臓された20mm機関砲を発射し戦車級BETAを駆逐する。

20mmの機関砲であれば戦車級を排除しても特殊複合装甲を持つ

戦術機の装甲を傷つけるほどの威力はなく短刀で排除するよりも効率的に味方機を救助できる。

「た、助かった…?」

若干呆然としながら呆けたようにつぶやく3号機のパイロット、その機体は装甲が齧りとられ内部機関が?き出しなり鋼の骸を連想させる、戦車級の返り血が尚一層その様子を強調させるがそれでも衛士は生きていた。

「無事か?」

「おい邪魔だっ!!とつと下がれ!!!」

「ここは俺たちに任せろ!!!」

他の部隊の同じく戦車級取り付かれていた者たちも同じように救出されていた。

まさにあつという間に防衛部隊を救助し戦線を持ち直させる。

「うおおおおつ!!!」

両手にデュランダルをその手に持ちランティスのヒュッケバインが切り込む、

クイツクターンに乗せての横薙ぎの斬撃、刀身の峰から吹き出る青い炎がその速度を加速させ威力を上げる

“ザシユっ!!”

突撃級を火花を散らしながら上下に両断する刃、その直ぐ横から要撃級が迫りその豪腕を振るう。

「テヤアアっ！！！！」

振り切ったデュランダルを下方に垂直に向きなおしクイックターンで振り返ると共にデュランダルのバーニアを噴射させ剣そのものを加速させ切り上げる。

顔面から胴体半ばまでを切り裂かれ血飛沫を上げながら要撃級は崩れ落ちる。

そんな中一機の量産型ヒュッケバインが要撃級を袈裟切りにするがその背後から突撃級が時速120kmの猛スピードで突進する。

「やらせるか！！」

ランティスは即座に機体を操作する。
ランティスのヒュッケバインは地面を蹴ると同時に背部のスラスタから青白い炎を噴射しその反動を受けて加速しGウォールを展開する。

「っああああああっ！！！！」

“ガキンイイインっ！！！！！！！！”

重力障壁を纏ったヒュッケバインの体当たりが炸裂しひび割れ破片を撒き散らしながら吹っ飛ぶ突撃級

他の武装では一度加速のついた物体をとめる方法がなかったためこのような手段をとったのだ。

「周囲に意識を貼れ、やつらは何処からでも来るぞ」

「す、すいません助かりました！」

部下の無事に内心息を突きつつBETAの増援へと向き直る。

「こちら第3小隊、防衛部隊の救助完了しました！」

「よし！！第一小隊は前衛、バンガード、第二小隊後衛、インターセプト、第三小隊は砲撃支援、インバクト・ガード、陣形は楔型だ。アローヘット・ワゴン。そして第4小隊は滞空支援射撃を行えいつ光線級が現れるかわからん気を引き締めていけ！！！」

「了解！！！！」

BETAは進行のさいまず突撃級、次に要撃級、戦車級、光線級という布陣で進行してくる。

しかし、ドーバー海峡は海で隔たれているためか光線級の上陸頻度はそれほど高くはない。

戦術機にとつての最大の脅威となる小型種をラインメタルを装備したヒュッケバイン小隊が宙に滞空した状態で220mmの超大口径からキャニスター弾を斉射することによって戦車級などを駆逐、大型種も手傷を負う。

そこに第一小隊が突貫し手負いの大型種を掃討、撃ちもらしを第三小隊が狙撃で駆逐し第一小隊が窮地に落ちいったときは即座に第二小隊が支援に回るといふ二段構えの相互補完布陣でありテストラドレイブがなければ最初の段階で不可能となる戦法である。

さらに突撃してくる突撃級もM90Cアサルトマシンガンで難なく粉砕可能

元来、戦術機用の突撃砲の30mmは戦車級などの小型種、120mmが大型種用として開発されたものだ。

故に本来30mmで大型種を相手にするのは想定外の運用法なのである。

そこで120mmと30mmの中間の口径を持つM90Cアサルトマシンガンを使うのだが小型種を相手にするにはオーバーキルとなる。(密集形態ならこの限りではない)

その弱点をカバーするための頭部機関砲でもあるのだが如何せん弾が少ない。

そこでこのような布陣を取るのだ。

「戦線を押し上げる！俺達の故郷だ俺達が守るぞ！！！」

おおおおおおおおおおおっ！！！！

凶鳥の部隊は守郷のために駆け抜けるのだった。

そして、場所は再びアイルランドの北側、東ドイツ政府庁周辺へと移る。

「まさか…こんなものまで用意しているとはな…」

青紫の機体が対のデュランダルを保持したまま宙からその巨体を周囲に浮かぶ八機の同型機と共に見上げる。

130mを超える巨体、

それは片方向性重力障壁を纏いこちらからの攻撃のみを無効化しさらに両腕にあたる部分に超大型の大砲を備えつけさらに全身にくまなく装備された機関砲が全周囲に火を噴く。

さらに極めつけは胸部から発射される荷電粒子砲

「まるでジガンスクード・スパイダだな…」

亮はシリウスのコクピットの中でそれを睨み付けながら呟く
その目の前にアメリカのH I M A R E F計画その成果の明らかな
発展型が目の前にあったからだ。

(ここでも人を守るために鍛えられた剣は悲劇を生むのか)

亮は奇妙な運命を感じながらもシリウスを翔けさせる。

「いま、その戒めから解き放ってやるっ！……！」

第40話 凶鳥の群れ（後書き）

ガオファイガー…一人しか意見来なかった…（ガオファイガーよりもガオファアのほうが出番多いと思うけど）

ちなみに最後らへんでジエネシツクに進化させようかと思ってるんですが…

（ちなみにラスボスは惑星サイズです）

最後に出てきたのはXG-70”C”です（日本じゃないため和名はなし）

外伝 破壊機神の胎動

「イーニア…ごめんね、トリースタごめんなさい…イーニア守れなかつた。」

白いシーツの敷かれたベッドの上で点滴を受けながら眠り続ける少女を見下ろす首元までの銀髪を持った女性、クリスカはその額を撫でながら亡き彼女の父と双方に懺悔の言葉を口にし悲しげな視線を少女に注ぐ。

そんな少女は眠りの中の眠りの世界で目覚める

ここは？

どこだろう？そんな疑問に突き動かされて周囲を見渡す少女、その腰にかかるほどの長髪がきらきらと銀色に輝きながら揺れる。

見渡す限りの水平線と青い空

そのなかで鏡のように空を映す水面みなもに波紋を広げながら立ち上がる。

足元は不思議なことに水であるのにもかかわらずまるでアメンボになつたかのように浮かんでいる。

(どうしちゃったのかな？わたし…たしかクリスカと一緒にアイランドに行って…そこで)

疑問も何もかもが突風を受けた蝋燭の灯りのように吹き飛ばす。

無意識に奥歯が力チ力チとなり体が震え、寒くもないのに悪寒が背筋に奔る。

（そうだわたしは…）

戦っていた相手の心を読もうとしてたたき付けられ折られた。

膨大な量の戦闘記録、その膨大な量の情報と圧倒的な恐怖そしてそれを上回る苛烈なまでの怒りと憎悪

それを一気に開放し叩き付けられたのだ。

（わたし死んじやったのかな……………）

肉体的にか精神的にかは判らないがただでは済まなかったと思う、彼に記憶には相対すだけで精神を粉碎する太古の昔に旧神に封印されし邪神の存在やBETAなど比に成らない究極の強者、絶対的な捕食者、星さえも単体で喰らう究極攻撃性生物の姿もあったのだから。

ただ、思う自分の姉にして母…彼女は自分を責めてはいないだろうか？悲しんでいないだろうか？

そう思うと胸を締め付けられるような痛みが走りその華奢な体を苛む。

「その心配は要らない、君は眠っているだけ時期に目覚める」

ふと後ろから唐突に声がかかけられ振り向く、そこには漆黒の外套を纏った青年が自分と同じく水面に波紋を広げ映る空を足に敷き立つ

ていた。

「あなたはだれ？」

「すまないが、夢幻の存在である俺に名前は無い」

「どうということなの？」

口元到人差し指を添え首をかしげる少女、それに対し黒衣の青年は苦笑を漏らす。

「フっ…簡単に言うと俺は君の中のあいつの未処理データの集合体、今の君はデータを処理しきれず処理落ちしてしまい眠っている状態だ。」

頭を茹だらせながらあうあうと湯気を上げつつも与えられた情報を自分なりに整頓し分かりやすくしてみる。

「えっとつまり脳に書き込まれた情報が多すぎてコンピューターがフリーズしちゃったみたいな感じかな？」

「ご名答だよイーニア・シエスチナ」

「私の名前！？まさか…あなたも……………？」

目を見開き眼前の青年を凝視する、それに対して青年は不敵に微笑みながらかぶりを振る。

「残念ながらはずれだ。」

所詮情報集積体である俺に君たちの力、リミピッドチャンネルは無

「い……もっとも俺のオリジナルであるあいつには備わっているがな。」

「リミピッドチャンネル…?」

鸚鵡返しその名を口にするイーニアに青年は首肯する。

「そう、場に存在する意思を読み取るカリミピッドチャンネル…その本来の用途は読心などくだらないものなどではない、それは本来星との対話に使われる力だ。」

「星とおはなし…?」

「そつだ、星もまた巨大な生命体だ。」

ゆえに意思を持つ、星と対話し世界に人類に警告を促すそれが君たちセトラの民の本来のあり方。」

「星のこころを伝えるそれが私たちのすべきこと?」

「さてどうだろうな?俺が言ったのはあくまで君の祖先のあり方であつて君のあり方ではない。」

それを決めるのは君自身、大切なのはどうすべきではない君がどうしたいかだ」

「私がどうしたいか?」

「そう、だから俺のオリジナルは選択した。」

決められた運命に抗い、己が意思で自分のために戦うと時には世界の意思にさえ背き

……だから、君も決めるんだよ、自分の生き方は自分でね」

首を縦に振り青年ははにかむしかしその姿は徐々に揺らぎ薄らいでいく。

薄らいでいく己の腕を青年は見やる。

「ふむ、時間のようだ…君はもうまもなく目覚める」

視線をイーニアに戻す、微笑を携えながら

「さて最後に一言言っておこう、あいつの記憶を怖がる必要はないそれはすでに終わったことだ。そして…怪物は最後には倒される。

終わらない夜は無い、必ず明日がやってくる。」

もうほとんど視認することも出来ないほど姿が薄らぎ、世界が白い光に包まれ始める。

「ただ諦めて何もかもを享受するだけの人間は己の…そして周囲の死さえ享受しなければならぬ。

だから忘れないでほしい…絶望の淵で、もがき抗うことでしか勝ち取ることの出来ないもの…それは、生きる資格だということ。」

意識がアウトプットされ、少女の意識は幽幻の世界から現実の世界へと回帰する。

体の震えはいつの間にか止まっていた。

瞳が半ば無意識に開かれ、照明の光が差し込まれ

自分がおそらく医療機関の病室に寝かされていることに気づく。

「イーニア!？」

首だけ動かし視線を横に移すとそこには目を真っ赤にした自身の姉にして母たる存在が視線を注いでいた。

「クリスカ……………?どうしたの?目、真っ赤だよ?」

「何でも、何でもないよ…イーニア」

自身の問いかけに篤い抱擁を行う彼女の温もりが心音が伝わってくる。

「でも、よかった…本当によかった…イーニアがもう目を覚まさないかと思つたら不安で胸が苦しくて…空なんて今にも落ちてきそいで、地面なんて無いような感じだった」

嗚咽交じり胸中を吐露する彼女にイーニアは抱擁を返す。

「ん、大丈夫大丈夫だよ。私は」

「よかった、ほんとうに…よかった…」

彼女達がアイルランドで何を手に入れたかはだれも知らない。しかし、二人の絆がより強く結びついたことだけは確かであろう。

未来を脅かすもの、総ての命を脅かすもの

星の内部、地殻よりも尚深いそこに流れる淡い緑色の光を放つ本流星を巡る命の流れライフストリーム
その中に存在する五つの意思

地表に存在する異星からの侵略者はまるで癌細胞が偽装血管を作り宿主の血液中の栄養分を略奪し成長するように星の命を吸い上げていた。

宇宙のキャンセルを滅ぼし星を救うには我等ソムニウムが変わり託さなければならぬだろう

テクスたち人にそれが出来るか？

出来なければこの星は死するのみ、無限の破壊を止めるのもまた破壊のみ。

破壊と創造、繰り返してあり繰り返しては命の本質

無限の円環を体現する彼らにこそ未来を切り開く剣を託さなければならぬ

命は決して二の轍を踏まない、故にあらゆる困難を打破できる

我らはすでに行き詰った存在、幾たびもの戦いでわれらは種族としての衰退を向かえもはや戦う力はない…ならば

あとは託そう、我等の命を種に生まれる力を同じ星から生まれし兄弟に

究極の破壊神の鎧を

破壊のための創造を破壊するための力を

過ぎた力だろうがそれを止める存在はすでにこの世界に現れている

ならば後は託すのみ人類とそれに混ざりし我等と同じであり異なる存在の最も近く最も遠き世界よりの来たりたソムニウムに

侵略者BETAはいまだ知らない、癌細胞を滅ぼす細胞は自身が糧としている血液から生まれであることを

星の命が凝固せし命の結晶の中で星の免疫抗体として生まれた者たちは自身を核に新たな免疫抗体を生み出そうとする。

まるでマイクロファージを喰らい新たな抗体を生み出すB細胞のように

急がなくては ジェネシックの誕生を

命の起源たる力の顕現を

我等ソムニウム…命の螺旋最大の戦いに向け我等総ての力を結集…

いや……合体すべし！

> i 2 9 2 2 0 | 3 7 5 9 <

疾く生まれ出るので命を超えるものよ

外伝 破壊機神の胎動（後書き）

カンケル：ラテン語で癌細胞の意

リミピッドチャンネル：本文にあるとおり場に存在する意思を読み取る力

オルタ3のエスパーのリーディングが距離に影響されることからこの力が最も近いと推測される（ベターマンに登場の単語）

ソムニウム：アミノ酸はまるでかがみ写しのように左右逆の分子結合体が存在しておりこれをL型D型とそれぞれ呼称し総じて光学異性体と呼ぶ

ベターマンことソムニウムは地球生命体の抑止力的存在であり体を構成するアミノ酸がこの光学異性体で出来ているため人間の形をしまったまったく別の生き物なのである。

追記、東雲は人外とのハーフであり体、特に遺伝子を構成するアミノ酸の何割かがこの光学異性体で出来ており通常のL型アミノ酸と混合することでそのDNA情報は4進法から8進法へと変化しており遺伝情報が普通の生物の数乗の密度となっている。

ある意味超進化人類、エヴォリユダーとも言える存在かも知れない

第四十一話 決着

東雲を含むウォールがXG-70 相対する数十分前

「止まって見えるぞ!!!」

銃弾の嵐が飛び交う中、青紫のタイフーンの意匠を残す機体シリウスが翔ける。

いくつものビルの谷間で其れを迎え撃つ二機のチエルミナートル

黒く夜間迷彩を施され左肩に人狼を象った骸骨の紋章エンブレムを持ち背に巨大な柳葉刀を背負っている。

その懐に一気に踏み込みその胸部に突撃砲とその先端に取り付けられた大型短刀の刃先を突き刺し

「ゼロ距離…執つたぞ!!!」

そのままに引き金を引く

爆音が鳴り響き一機のチエルミナートルは大量の機械部品を撒き散らしながらその胴に風穴を開け吹っ飛ばす。

それと同時にチエルミナートルは中華統一戦線などのアジア近隣諸

国の戦術機部隊が多用するトップヘビーの長刀、77式近接戦用長刀を慣性と重量に任せて亮のシリウスに向けて振り下ろす。

「ぬるい!!」

振り下ろされる長刀を左腕外延部に装備されたブレードスタビライザーを外へ打ち払うように撃ち当てその軌道をずらし先ほどの敵機と同じく先端に大型短刀を装備した突撃砲を突き出す。

それにあわせて敵の黒いチェルミナートルは左前腕の一部装甲を展開せり出してきたチェインソー。モーターブレードでその突きを防ぎ、右腕に保持していた柳葉刀を捨て去り右腕のモーターブレード展開しを振り下ろす。

「ムっ!!」

其れを左腕のブレードスタビライザーで受け止める。

高速回転する刃と強靱な固定刃が競合い文字通り赤い火花を散らす。

一瞬の唾競合い。

両者共にバックステップで間合いを取りなおす。

“ダン!”

「はあああああつ!!!!」

バックステップによる着地と同時に二機は地面を蹴りお互いに鏡合わせのように蹴りを放つ。

「貴様らの子飼いな狼の処分は終わった、後は貴様らだけだ一時間の猶予をやる速やかに投降しろ」

東ドイツ政府庁の建物を包囲する欧州各国連合軍

その中には離反した東ドイツの部隊も数多く存在しさらに後方には町ごと包囲する戦術機部隊その数は数百にも登る。

そんな物々しい雰囲気の中進行部隊の指揮官、アスラン將軍の駆るタイフーンから外部マイクでいまだ立て籠もっている東ドイツ官僚に向け投降を呼びかける。

「亮、静か過ぎない？」

包囲している部隊に混じった八機のシリウス、ウォールの半分の戦力でありその中で月砂が通信で亮に語りかける。

「ああ、この国は装備を見てると分かるようにソ連と癒着がひどい、それにG弾を作ったのは東ドイツの人間だ
何か奥の手があるのかもしれない………其れも最悪のものがな。」

不気味なほどの静寂、まるで嵐の前の静けさに似た空気

「残り… 32分か」

視界の隅で刻一刻と迫る期限を示すタイマーに視線を移す。

ここで投降しても官僚達には地獄が待っている。

いままで弾圧を行った民衆にその身を裁かれるのだ、まともな人生など送れるわけも無く最悪死刑さえ行われるのだ。

一途の望みを託して投降するとは考えがたい。

しかし、こちらは無法組織ではない、形式と投降を呼びかけたという事実が必要だ。

因果応報、自業自得、身から出た錆、天に唾

彼らは自分達の行いゆえにその身を裁かれる。

いままで自分達の利益と保身を優先し民衆を弾圧した結果だ。

同情の余地もないしする気もない。

しかしそんな外道こそ姑息で卑劣な手段ばかりを思いつく。

本来、自身が座すべきではない王の席

そこに座するために足りない器量、度量、能力を補おうと真つ当な方法では補えないから悪事に手を染めるのだ。

タイマーに再び意識を移す。

タイマーの数字はちょうど半分、残り30分を指した。

は…しない。

「せ、セシル

……」

包囲陣の中央をぶち抜く其れは指揮官であるアスランのタイフーンを周囲の部隊ごと飲み込み周囲の町並みも瞬時に蒸発・焼失させ街に巨大な溝と作り出す。

「部隊が!!」

「野郎!!」

「くっ、警告もなしにいきなりか!？」

「とことん腐った連中だな

貴様らはあああ!!

!!」

回避に成功したウォールのメンバーが口々に言葉を発する。

政府庁を包囲していた部隊の4割が今の攻撃で消滅、赤熱化した街を縦に裂く溝は湯気と陽炎を起こしながら徐々に冷え表層をガラス化していき、その周囲にいた戦術機部隊も余波の衝撃波をもろに受けたり倒壊した建物の下敷きなったり大部分が行動不能まともに動けるのは最翼端の部隊とテストドライブを装備しているが故に得ている機動力と防御力を持つシリウスのみ

空中で背の双翼から翡翠色のフレアを携えその熱線を放った存在に
向き乗る青紫のシリウス

其れは、陽炎の向こう側で中に浮きたたずみ、ゆつくりと胸部装甲を閉じ発射口を隠し
ラプターと大きさこそ違えど酷似した複眼を光らせる。

「まさか…こんなものまで用意しているとはな…」

その存在はかつてアメリカがハイブを攻略するために開発していた
機動兵器…

と呼ぶにはあまりに巨大なまさしく移動要塞といわれても思わず納得してしまいそうなほどの大きさ

M L機関、G元素を反応させることで得る膨大な余暇電力と重力制御機能をふんだんに使用した決戦兵器

ラザフォート場と呼ばれる重力障壁は接近した物質をひき肉のように粉々にしあらゆる攻撃を受け付けず、さらには胸部から重力の仮想的、不可視な砲身からプラスの電荷を帯びた粒子を加速させ打ち出す荷電粒子砲

その運用法は正しく彼の巨大な盾：ジガンスクードと同じ

さらには当時の技術では不可能であった通常武装の搭載を可能としている

両腕部にまるでガトリングのように幾つものおそらく220mmクラスの砲が束ねられ搭載され他には全身に幾つもの機銃とミサイルランチャーが見え隠れし

ている。

おそらくは有人操作が不可能という点も改善されているだろう。

「まるでジガンスクード・スパイダだな……」

かつて自身が相対した平行世界でシャドオーミラーによって持ち込まれた改修される以前の人型となる前のジガンスクードに全体的にその印象は酷似している。

向こうではライガーの力技でどうにかなったが、こちらでは相手の機体出力が桁違い

自身の機体もライガーほどの出力・攻撃力は未だ望めない。

しかし、

(ここでも人を守るために鍛えられた剣は悲劇を生むのか)

かつて、テロによりコロニー市民に忌むべきものとして扱われることとなるかの機体、それに酷似した機体は傲慢な為政者によりまたも悲劇を生んだ。

命は死すれば星へと帰り、そして新たな命が星から生まれる
繰り返しこそが命の本質であり人が人である以上過ちが繰り返されるのは必然なのかもしれない。

しかし、そのまま看過して言いどおりは存在しない。

「いま、その戒めから解き放ってやるっ!!!」

背に供えられた鞘にして翼、対の黒翼から翡翠色の噴出させ翔ける。

「ふむ、さすがというべきかな。さすがはハイブ攻略用の決戦兵器だ。脱出艇にするはずだったがどうしてなかなかにすさまじいではないか！！！」

東ドイツ元政府庁地下に作られたシエルターの中で官僚の一人が優雅にソファアームにくつろぎ紅茶の入ったカップ片手に感想を述べる。

「G弾開発の見返りとして貰い受けた物ですがこんな形で役立つとは思いませんでしたな」

各自この貧困の世にあってその下腹は突き出ておりいかに贅沢な暮らしを送っているかを垣間見れる。

「ジブリール、君もそう思わんかね？」

「ええ、しかしここから始まるのですよ！！おろかな民衆どもはBETAにいつかは勝てるよ、ありもしない希望に甘い毒に踊らされあろうよか飼主である我等に牙を剥いた…」

「教育が必要です」

半ば劇のように謡う彼、通称ロード・ジブリール彼こそが東ドイツの官僚をまとめ圧政を強いていた張本人であった。

XG-70はオルタネイティブ5の際その単独大気圏離脱能力を使い自分達を守るべき民衆を見捨てて宇宙へと逃げるための箱舟とし

て用いるつもりだったのだ。

東ドイツに渡された其れは試作3号機に改修を加えたものであり、演算機能の不足をBETA由来の元素、現在アメリカと日本が独占している通称G元素その9番目に発見された元素を使った量子コンピュータを搭載することで補ったものであり二号機では不可能であった通常武装の搭載と有人操作を可能としている。

モニターでは八機のシリウスが宙を舞い攻撃を仕掛けるが其れを物ともせず反撃し弾幕を放っている。

其れを回避するシリウス達。

官僚のだれの目にもいずれば墮ちる羽虫の足掻きにしか見えてはいなかった。

「はあああああつー！！」

青紫のシリウスは怒涛の勢いで背の翼と肩に背負ったデュランダルからフレアを噴出させCG-70の側面へ突貫しその重力障壁に先端に大型短刀を備えたXAMWS-24突撃砲を突き立てる。

半透明の膜が負荷によって視覚化し撒き散らされる白雷の中でメキメキと音を立てながらひしゃげていくそ突撃砲に反対側の腕に保持した突撃砲で狙撃を行う。

大きな爆発が起き、重力障壁の内側に突撃砲の破片がばら撒かれる。

其れは幾つかのミサイルランチャーの発射官に入り誘爆を引き起こしその周囲の機関砲を無力化する。

「ちっ！動くには支障が無いということか！！」

しかし依然と佇む脅威に亮は齒噛みする。

“ドオオオオオオン！！！”

「っ！？」

突如として轟く爆音と降り注ぐ砲弾の雨

其れが飛来した方角にメインカメラを向ける

そこにいたのはMGI-23チボラシユカとその後継機アリゲートル、さらにF-4ファントム再設計機バラライカの100機を超える編隊、東ドイツの弾圧され続けた者たちの軍勢だった。

「俺達の国で起きたことだ！！お前らばかりに良い格好させるか！！」

「この日をずっと待っていた、故国が元の姿に戻るこの日を！！」

「ここで引いたら、今よりも悪くなる其れが分かっている引けるかアアア！！」

「私達にだって意地はある！！」

まさに必死、死の恐怖を押さえつけながら彼らはXG-70に攻撃を仕掛ける。

しかし唯の砲弾では弾丸自体が重力障壁によって届く前に圧壊し粉

々に砕け散る。

そしてXG - 70の胸部装甲が開かれ電極が帯電し重力場による砲身が展開される。

「！！来ちゃだめ！！！」

荷電粒子砲の発射を予知した月砂がオープン回線で叫ぶがもはや間に合わない。

XG - 70の胸部から荷電粒子砲が発射された。

東ドイツ部隊に迫りその姿を白く染める粒子ビーム、それと同時に砕け吹き飛ぶXG - 70後方の地表

触れるものを瞬時に蒸発させ掠めただけで余波に夜よる衝撃波で碎かれる

その破壊の嵐を巻き起こす閃光が東ドイツの部隊に迫る！

「やらせんよっ！！！」

閃光のと部隊の間に割り込む亮のシリウス、突撃砲を投げ捨て肩のブレードマウントからデュランダルを引き抜き正段に構える。

「亮！！！」

「！！隊長！！！！！！」

「つあああああああつ！！！！！！！！」

ウォールのメンバーが各々叫ぶ中荷電粒子砲のビームを真っ向から受け止め、引き裂く亮のシリウス

「突き破れよ……天狼っ！！！」

うおおおおおおおおお！！！！！！

背の双翼が跳ね上がりその内に並んだスラスタから斥力を持った粒子を噴出し機体を押し出しプラズマを発するほどに加速した水素粒子の光の本流を切り分けて前進していく青紫の重騎士

「…すごい、荷電粒子砲を切り裂いていやがる……」

ウォールのメンバー、キロが呟く

「…高出力ブレイクフィールドにブレードを干渉させて力場を鋭角フォース化させることで機体全体を覆う刃に仕立てているんだわ…」

ジュリエットは他のメンバーと同じイギリス陸軍機の証であるミニトグリーンの機体の中で半ば呆けながらその光景を目にしその原理を理解する。

あらゆる国の内部で諜報を行ってきた彼女はそういった知識が豊富なのだそこにおいて当たり前を強要される諜報部員にとって知識とはまさしく己の身を守る上でなくてはならない最前提なのだ。

しかしそんな彼女でも理論上納得できても早々出来るものではない。

その僅かな可能性に気づき死の恐怖を押し殺しその向こうにある生

前に居た世界ではグルンガストシリーズにも採用されたありふれた技術だ。

荷電粒子砲の照射が終わり閉じようとするその重力バレルにその身をねじり込む！

閉じようとするラザフォート場とシリウスのブレイクフィールドが相互干渉し結晶薄膜化現象が引き起こされ視覚化・擬似物質化する。双方ともに重力を操り障壁を生み出しているという点においては同じ、ならば…

「撃ち破れ天狼っ！ソニック・ブレイカ

！！！！」

迸るプラズマ、テスラドライブにかかる負荷が増していきステータスが真っ赤に染まる。
このままではオーバーロードで爆発するだろうが…
だけど

面と点、エネルギー総量が違っても突き破れない通りは

無い

“ガキン”

130m超の巨体を覆うラザフォート場を突きぬけその内側に入り込むことに成功する。

「破あああああああつ!!!」

“ザシユ!!!”

そのままデュランダルを胸部荷電粒子砲発射口突き立てる。

「フンっ!!!」

デュランダルのトリガーを引きその峰から青い炎が噴出しXG-70の胸を横一文字に切り裂き亀裂を作っていく。

“ガキン”

堅牢な装甲を力任せに引き裂いていった代償か中ほどから刀身が折れる。

「でやあああああつ!!!」

背の翼にして鞘、対の黒翼から長刀：カラドボルグを両手で引き抜き荷電粒子砲の電極をそこを覆う装甲を貫いて突き立てる。

幾つもの爆発が起き火花とプラズマが滝のが撒き散らす水飛沫のようにあふれ出

そしてそれが巻き起こす爆煙が亮の青紫の機体を飲み込む。

其れと同時にXG-70の体内を出鱈目に駆け巡る電流の嵐によって精密回路がショートしML機関のセーフティーが作動、主動力機

関が停止したことにより浮力を失い轟音を響かせながら地面に底を着くXG-70

そんな中黒煙を突き破り両腕を無くした青紫の重騎士が所々焼け焦げた姿で現れコックピットの納められたラプターと似た意匠の頭部の前に躍り出る。

其れと同時に両肩と双翼から爆発が起き黒煙が上がり浮力を失う

「くっ!!」

がそのまま胸部装甲の上に火花を散らしながら着地し頭部の真前に立ち塞ぐ。

その頭部さえ戦術機ほどの大きさがあり亮のシリウスは腰部の兵装担架を稼動させ腰の左右から前方のXG-70の頭部に予備突撃砲の銃口を突きつける。

「消え去れっ!!」

そして引き金を引く
120mmと36mmの鉄甲弾をマズルフラッシュとともに連射し
その頭部を砕いていく

やがて砲撃がやみ硝煙の白い煙の尾を引きながら後腰部兵装担架が稼動し元の位置に突撃砲が戻る。

其れと同時に亮はオープン回線を通じて宣告する。

「残存全機に告ぐ!!やつらのジョーカーはもう無い…地下シエルトーに突撃、犯罪者どもを捕縛せよ!!!!」

第四十一話 決着（後書き）

この章は後2、3話位で終わります。

第42話 永劫にして刹那の炎

“ドゴオオオオオオオオオオオンっ！！！！”

爆発と共にシエルターの一室、東ドイツ官僚の立て籠もっていた部屋の扉が吹き飛び、爆発の粉塵を突き破って数人の特殊装備の者たちがマシンガンを構えながら官僚を包囲し破られた扉から一人の黒と青紫の強化服を着込んだ青年が少し遅れて姿を現す。

「き、貴様らこんなことをしてただで済むと思っているのか!？」

そこだけ違う明らかに成金と評してもいいほどの内装が施された一室で官僚のうち一人が声を震わせながら青年に怒鳴る。

「お前達がな、守るべき民草を弾圧し続けた寄生虫が偉そうな事を言うな…捕縛しろ」

「ハッ！！！！」

青年、東雲 亮の言葉に従い官僚たちの手に手錠をかけ拘束していく特殊部隊の面々

ふと最重要人物が足りていないことに気づく

「…ジブリール、ロード・ジブリールはどうした？素直に吐かないと……さてどうなるのだろうか？」

喜悦を含んだ歪な笑みを浮かべる亮に対して何をされるかまったく持って想像がつかず拷問されることは間違いないと思いつける官僚たち

「し、知らない！…気づいたら居なかった！！やつは我々を置き去りにしてひとりで逃げたっ！！！」

その言葉を受けてカツン、カツンと足音と共に官僚の一人に近づきその頭髪を鷲づかみにして強引に視線を合わせ問いかける。

「本当か？…嘘なら

切り落とすぞ

」

一流の剣士のみが放てる受けるだけで全身を千の刃で切り刻まれるような錯覚を引き起こす凄みを帯びた殺気、剣気をぶち当てられ真っ青に顔を染める官僚たち

「本当だ！！信じてくれ！！！！本当なんだっ！！！！！！！！」

「ちい！面倒なことを…まあいい、こいつらを連れて行け」

喚きながらも力づくで特殊部隊に引きづられていく官僚たちを尻目に見やる。

「保険は打つてあるさ…フォルカ、永劫は使うなよ…」

「くそっ！！！！一体どうしてこうなったっ！？」

“ダアアンっ！！！”

アイルランドの雲の上を西へと音速を超えて飛行するビップ用旅客機とそれを警護する4機の戦術機の姿があった。

その座席のひとつのでジブリールは手すりに握り締めた拳を打ち付ける。

BETA進攻は留まることを知らず半ば捨て身の戦法で持っても留める事が出来なかった。

「BETAの圧倒的な物量には勝てん！！なぜそれが分からんのだ！！そんなことだから真に自分達を導く存在に牙をむき、偽りの希望を掲げる盲者に付き従うのだ！！！」

ヒステリックに喚き散らすジブリールに心底あきれ返りながらそれを御くびにも出さず付き従うロシア兵

彼はロシアに自分だけ亡命しようとしているのだ。

「私は終わらん！！このまま死を待つ星で朽ち果てるなどあってはならないのだ！！！」

そう叫び窓の外を睨み付ける。

その瞬間

“ ガアン！！！！ヒュウウウウウウ… ドゴオオオオオオン！！！！”
突如として旅客機を護衛するため並んで飛行していた黒いソビエト連邦製戦術機、ビートルクトに黒い何かが空中で衝突したかと思うと火達磨になり雲海の中に沈み爆発したのだ。

「 なっ！？ 」

突然のことに目を見開き窓に食い入るジブリール

護衛の各機体は仲間がやられたことで臨戦態勢に移行し警戒を強めいつ何処から攻撃がこようと対処できるように体制を立て直す。

“ ゴオオオオオオオオオオオオ ガキンっ！！！！ ”

突然雲海かを突き破って巨大な黒い夜の闇が凝固したかのような人の十倍近い体躯を持つ戦術機をさらに凌駕する巨大な機械仕掛けの人型の腕が現われ護衛機のうち一機を鷲づかみにする。

『 た、助けくれええええええええっ！！！！ 』

『 くっ… 一体なんなんだ！？ 』

『 んなことどうでもいい！！各機攻撃っ！！！！ 』

自由に動ける二機が跳躍ユニットの推力を調整しホバリングしながら巨大な黒い機械の腕に砲撃を行う。

“ガアアンっ！！！！カアアアンっ！！！！”

マズルフラッシュと共に放たれる無数の大口径の砲弾に対し火花を散らすのが全くの無傷の腕、しかも徐々にその掌を握る力が増していく。

メキメキ、ギチギチと軋みをあげるビエールクト、紫電が奔り管制ユニット内部で逆電圧により幾つかの機器が火花をあげながら弾け飛ぶ。

「た、たす」

“グシャ　ドガアアアアン”

機体が衛士諸共握りつぶされ爆散する。

それと同時に爆音に混じり祝詞が謳い上げられる。

「我は光　瞳を焼く己を焼く世界を焼く熾烈と憎悪

我は闇　染まらぬ揺るがぬ迷わぬ不変と愛

この深き昏き怨讐を胸に、その切実なる命の叫びを魂に

刻み込み我が手は断罪の剣を執る

汝、久遠の果てより来る虚無

【永劫】
アイオーン

眼下の雲海を突き破り現われる鋼の巨神を見上げる。

オリハルコン
漆黒の装甲表面に奔り煌めく魔術文字、その内部に張り巡らされた
チューブ
アソート
血管を流れる水銀の血液

人の鮮血が酸素を輸送する様に銀血は魔力を鋼の四肢に伝浸させる。
放たれる圧倒的な神気、背のまるで幾重にも重なった剣の刀身が折
り重なり作られたような翼から吹き出る魔術フレアによって宙に浮
かぶ圧倒的な質量と存在感

まさしく機械の神、
デウスマキナ
鬼械神

しかし、その体は完全無欠の神にしては余りに脆い、機体から迸る
白雷と共に分解・再結合を繰り返す余りに幽玄で儚い存在

『あまり時間がない…急がなければ…』

黒い鋼の巨神の胸部の操縦席で肉体に張り付くような機体と同じく
漆黒のボディースーツ…最強位の魔術師の証マギウス・スタイルの
フォルカは戦術機と怨敵の乗る機影を睨み付ける。

その脳内では何か音が立てて崩れ咀嚼されていき生命力は吸い取
られ燃焼しすさまじい勢いで減っていく。

まるで一瞬のうちに数十キロを走破したような疲労感とガラガラと

音を立てて崩れていく正気

人外の理論の顕現である鬼械神との一体化は大きな代償を強いる。

『なんだか知らんが撃てっ！！！！』
『了解っ！！！！』

二機のビエールクトが跳躍ユニットを吹かし雲の尾を引きながら鋼の巨神：アイオンへと迫る。

『往くぞ！！フラットシザース！！』

左右に分かれたビエールクトは同時に120mm滑空砲をアイオンに連射で浴びせるが不完全な顕現とはいえ神

幾重にも展開された防御術式を抜けることは通常兵器では不可能
ロケット燃料によって加速された劣化ウラン弾は火花を散らしながら逆に碎け散る。

『邪魔を

するなああああああああああああああああああつ！！！！！！！！』

フォルカの怒声と共にアイオンの紅い瞳が煌めき虚空より二振り
の刃を引き抜き振るう。

風を編む双子の神の名を持ち、その神力を帯びる双刀
50mクラスの巨体にあわせてその刃も巨大、掠めるだけでその圧
倒的な質量は戦術機を木の葉のように千切り砕くであろうそれによ
って縦に、上下に両断され爆散する

そして遠方へと去ろうとするそれを目にする。

『貴様だけは逃さないっ!!』

“ガキンっ!”

対の剣が十字に組み合わさり巨大な手裏剣へと変貌する。

『ロイガー・ツァール…その名の如く吹きすさべっ!!』

そしてアイオンが腕に携えたそれを振り投合、ブウンという風き
り音と共に高速回転しつつジブリーの乗る旅客機の方翼を切飛ば
す。

飛行機というものは前から後ろへと流れる空気の流れを翼に受ける
ことによって浮力を得ているそれがなくなれば当然墜落するのみ。

“ヒュウウウウウウ　　ガンっ!!!”

一瞬の無常力を感じ、機内で浮かぶジブリーだが墜落していくは

ずの機体が静止したことによって床にたたきつけられる。

「ぐ…いったい何が…」

『ジブリールだな』

「だれだ!？」

『貴様を裁くものだ』

そうジブリールの機体はアイオンに掴まれていたのだ。そしてアイオンの掌に力が籠められる。

ひしゃげていく天上と床それに壁、それに挟まれつぶれたらんと垂れた腕と頭だけになっているロシア兵、操縦席から聞こえる悲鳴。ジブリールの己に死が足音を立てて近付いてくるのを悟る。

「た、助けてくれ!!何でもやるから、金でも権力でも女でも…だから助けてくれっ!!」

女でもか

見つとも無く足掻くジブリールのその一言がフォルカの琴線に触れた。

『なら返せよ…』

「な…何をだ!？」

『テメエの子飼…^{シユタージ}国家保安庁に殺されたアイツと…』

恨みを持ったまま殺されたものたちの怨霊を集めそれを贄アイオンに永劫を
召喚したのだ。

もつとも数十年分の怨霊凡てをつかつてもアイオンを召喚するだ
けで精一杯、さらに戦闘など出来るはずもなくアイオンは文字通
りフォルカの命を燃やし動力としていたのだ。

落下していく機械部品は燃焼し燃え尽きていく、その中に混じって
落下するフォルカの肉体

彼の体は、老人のように干からびている唯でさえ彼の身に余る“機
神召喚”の果て、凡ての生命力を霊燃機関で燃やし尽くした末の消
耗死だ。

地へと落下する彼の骸を支える人影

茶に近い黒髪に縦に割れた瞳孔と金色に染まった瞳を持つ漆黒の外
套を羽織った青年…東雲 亮

「……………」

亮は宙に蒼い炎の翼を広げ宙フォルカの亡骸を腕に佇む。

「来い…ネクロノミコン」

亮の言葉に従い雨のように降り注いでいたアイオンの部品が一気
に集まり炎の小塊を作りだし、その中から一冊の古書が零れ落ちる。

それこそフォルカがアイオンを呼ぶのに使ったネクロノミコン・

ラテン言語写本である。

「お前の復讐いぎざま確かに見届けた…」

宙に浮かぶ古書ネクロノミコンからフォルカに視線を移す亮

「ネクロノミコンは自らを手にする者全ての血を啜り、魂喰らい、禍々しき力を蓄えていく…だけど、それは力であり意思でもある

魔を滅ぼす魔なる力、憤怒を持って邪悪を砕く意思

そう、お前も斬魔の大いなる意思のひとつと成るのだ　　し
かし」

そのまま眠るには少しばかり速いぞ

東の空より差し込む陽光が雲海と空の間にある水平線を明確にし自分たちを照らし出す。

1999年、この朝日とともに東ドイツは崩壊し西ドイツと統合された。

それは人類の新たな明日への兆しなのか、破滅への前進なのかそれを知る者は時の女神だけであった。

第四十三話 G元素(前書き)

今回むっちゃ難しいです

第四十三話 G 元素

東ドイツ開放戦から二ヶ月、大きな被害を出しつつも東ドイツは開放され西ドイツと統合

国として本来の姿を取り戻しベルリンの壁は崩壊し民主制と貴族制をバランスよく組み込んだ新政権が確立する。

新たに編成されたドイツはEUに加盟しBETA駆逐に他国と共に全力を尽くす旨を公表し徐々にだが世界は一つに纏まりつつあった。

この事件によりEUは東ドイツの保有していたロシア製戦術機のデータも入手し戦術機開発においてアメリカ並ぶもしくは凌駕する技術を保有する国家連合となる。

さらには戦場で幾つ物目撃情報があった新世代戦術機の噂が飛び交いBETA駆逐の秘策がEUにはあると俄かに国家間で囁かれるのであった。

「カーティス大佐、頼んでおいたものは完成したか？」

“カシユ”という機密扉の音と共に研究室に入室する中佐の紋章をエンブレム胸に下げた亮が入室する。

そこは所狭しと機材が並べられており幾人かの研究員が入ったりき

たり機材に釘付けになっていたりしている。

その中で全ての機器のデータをモニタリングできるモニターに目を走らせていた白衣の男性が回転椅子を回しながら振り返り亮に視線を注ぐ。

「おや？新たな英雄殿ではありませんか、」

「それは止めてくれ、英雄など柄じゃない…で頼んでおいたものは出来たかのか？」

人の少し嫌がることをいい相手の反応を見て楽しむのはこの大佐殿の悪い癖だがそれを含めて皇帝陛下に気に入られていることを知っているし、心構え、いわゆる人間としての芯は捻じ曲がっていないことを知ってはいるので殆どスルーする。

「淡泊ですね〜〜からかいが無いじゃないですか。…それはさておき完成していますよ。」

ディスプレイに向き直りキーボードを高速で打ち込むジェイド・カーティス大佐

その頭脳を買われ軍門として名家のカーティス家に養子に取られた鬼才の人物だ。

生物工学の権威でもあり世界十第頭脳の一人にも数えられ戦略という指揮能力も高い天が二物どころか五物くらい与えてしまったような存在だが唯一の欠点が人格が捻り曲がって360度捻れ戻っているという点だ

本当に

残念で成らない。

そんなことを考えている間に人が持つ靴ほどの大きさのユニットが

映し出される、その半分は実写の映像であるがもう半分は設計図のようなものが重ねて映し出されそのユニット内部に

生物の脳が封入されている事を見るものに告げる。

「バイオコンピューター、通称【トモロ】 戦術機を人間としてみた場合における頭脳と脊髄を担当する自己学習型生体コンピューター、これの利点は特殊なソフトを用意せずとも情報の並列演算が可能、さらに生体素子自体が学習し演算速度が自然に向上する。」

さらには高等海洋哺乳類の脳を擬似生態で複写し使用すること
で本来彼らが持つ超感覚と機体各部のセンサーをつなげ戦術機の“
感覚”を強化服を通じ衛士に伝えることにより敵や武器の感触を感じ取れること、どれほど有意義なものになるか想像したら限がありません。」

「光コンピューターは一種の量子コンピューターだがコストが掛かりすぎるしそういった機能は新しく付加しなければいけないからな
直ぐに使うには障害が多すぎる、既存の完成している技術を
応用して造るほうが動作も確実に量産も効きやすい」

「実に面白い研究でした。サフィールも大張り切りで見ている痛ま
しかったほどです。
で、東ドイツでの成果は如何でしたか？
まさかその胸の勲章だけ というのは無いのでしょうか？」

自分の斜め後ろに座っていた亮に椅子だけ回転させ向き直るジェイドは眼鏡越しに紅い瞳の視線を注ぐ

「ああ、撃破したXG - 70からG元素を回収できた。
……分析した結果、あれをG元素などと一括りにしたウィリアム・
グレイは稀代の馬鹿だという事が分かった。」

「おやおや またそれはどうしてですか？」

悪ふざけな態度から一転神妙な口調で眼鏡の位置を調節しながら聞
き返すジエイド

「カーティス大佐、ガイア理論というものを知っているか？」

「確か、我が国のジエームズ・ラブラックがおよそ100年前に提
唱した地球と生物が相互に関係し合い環境を作り上げていることを、
ある種の「巨大な生命体」と見なす仮説でしたね それが？」

「そう、学会ではいまだ眉唾物だがこの説は正しい 否定的な
科学者は皆、証拠や現物を自身の理論が未熟なせいで否定する現実
逃避者どもだからな。」

少し話しがずれたが：G元素は星の血液だ。」

「おや、これはこれは……星の血液とはまた盛大な話ですね」

「量子電導脳、そのプロトタイプがアレ、XG - 70Cには封入さ
れていて解析したところ未発見の新たなボース粒子が凝縮し結晶化
していたものを加工していたことが分かった：そしてこの粒子は大
気中にも若干存在し、とくに人間など生物の体内に多く存在する。
だが死体からは殆ど検知されない。」

「ふむ、確か人が死ぬとその直前と直後では体重が微量に変化するとの観測記録がありました。がその粒子が一気に抜け落ち質量が軽減したという見方も出来ませぬ」

「此処からは俺の予測も交えてだが、この粒子は記憶を運んでいるのだと思う」

「…記憶ですか？」

亮の言い分に思わず怪訝な顔つきで聞き返す。
それにうなずきながらに答える。

「通常素粒子には二種類が存在しているといわれている、まず尤も身近なものが物質を構成する【フェルミ粒子】
そして

【力】を媒介する【ボース粒子】だ。今の所発見もしくはあるとされているボース粒子は原子間力を媒介する【中間子】、重力を媒介する【重力子】、光を媒介する【光子】などだが如何に粒子といえど高密度で凝縮すれば物質化し密度によって気体、液体、固体へと変化する。」

「そして記憶を媒介する粒子…それが量子電導脳を構成するグレイ・ナインの正体であるか？」

量子学において1911年に発見された超伝導をつかさどるクーパ
ー対の法則によれば

【超伝導状態を実現するためには電子系が何らかの凝集状態にある

必要がある。しかし、電子はフェルミ粒子であり、パウリの排他律からくる制限により、そのままでは凝集できない。」

ということでありグレイ・ナインが亮の推測どおりボース粒子の結晶体であるとしてもなんら矛盾は無い、いやむしろ今まで暗闇のベールに包まれていた部分も説明できる。

「ああ、グレイ・イレブンも何を媒介するかまでは判明していないがボース粒子が結晶化したものである可能性が高い。

：状況証拠から分析するなら生命力を媒介するボース粒子の可能性が高いと俺は踏んでいるがな

そして此処からが重要だ、如何にBETAといえど無から有を作り出すなどではしない。」

ジェイドは亮の言おうとしていることの続きを悟る。

「なるほど、それで星の血液という表現ですか…

さらには定期的に宇宙に打ち出される物体：地下深くへと伸びるハ

イブ：死体からは検知されない粒子が結晶化して精製されるG元素

：パズルが完成に向かっていきますね」

幾つ物情報の断片をつなぎ合わせて真実の全容を紐解くそれが出来なくて科学者などとは呼べない、

(確かにウリイラム・グレイは稀代の馬鹿ですね)

分析するだけなら機材と環境が揃っていればそれこそだれでも出来るのだから

ジエイドが自分と考えを共有したと確信を抱く亮は決定的な一言を発する。

「その通りだろう、BETAの目的は資源採掘…いや、採取という名の略奪だ」

第四十三話 G元素（後書き）

ふと思った、日本帝国使用の量産型ヒュッケバインってモロインスペクター仕様のヒュッケバインだよな

第四十四話 横浜基地（前書き）

もう少しでT Eに入れる〜〜

第四十四話 横浜基地

2001年1月

東ドイツ開放から数ヶ月、横浜ハイブ跡に建設された横浜基地の施工が7割ほど完遂し基地が前面稼働を開始して数日のことである。

「遠路はるばるようこそというべきかな？東雲 亮」

「……それにどう返せと？」

ブラウンのスーツを纏った中年の男性と黒いロングコートを羽織った青年が廃墟となったまま一切の復興が行われずゴースタウンとなった横浜市街地の廃墟の一室で顔を突き合わせていた。

「いや、そこは小粋なジョークで返してくれないと困ってしまうよ」

「なら逆に聞く、お前ならどう返した？」

肩を竦めながらおどける中年、鎧衣 左近の無茶な要求に亮は聞き返す。

「……………」

沈黙、時が無常に流れていく。

「さて本題だが」

(流したっ!?)

鎧衣のスルースキルに顔を強張らせ眼を剥く

そんな亮の様子などお構いなしに彼は懐に手を伸ばし一枚のカードキーを取り出す。

「これで魔女の巣窟のそこそこ深いところまではいけるだろう」

「反応炉までは?」

「さすがに錠セキユリテイが硬くてね…あの麗しき魔女もまた天才、全く手が出せなかった」

「そうか」

短く返しつつカードキーを受け取る。

「しかし正気かね?稼動したてで十全ではないとはいえあそこの装備はなかなかのものだそこに単身乗り込む、反応炉を直接見るただ其れだけのために」

「保険はかけてあるさ…それにこれでも腕に覚えは有る」

答えに対し帽子を深く被りなおしその口元の微笑を除かせる鎧衣

「確かにそうだろう 何せたかが二振りの刀でBETAの大群相手にそれを幾百と切り裂き五体満足で生き残ったのだから」

すうつと眼を細める

「知っていたか…」

「キミは自分が思っている以上に有名だよ、後とあるお嬢さんがキミの武勇伝を聞いたがっていたな。」

「…物好きも居たものだ」

そのとあるお嬢さんとはすでに会っており4ヶ月後に会うことになることを亮はいまだ知らない。

亮と鎧衣の会合から数十分がたち丘の上に作られた横浜基地のそこだけ舗装された通路とその両隣に植えられた桜の木が見渡せる門の前に居る二人の外人

二人とも銃花器を手に防弾チョッキとヘルメットを軍服の上に纏いその肩にはUNという大きな文字と世界地図が組み合わさった国際連合の紋章エンブレムが有る

「…なあ？」

「何だ？」

「こんな廃墟に造られた基地にだれが忍び込むんだろうな…」

「さあ？よっぽどの物好きじゃないのか？」

「居るのかそんなやつ？」

「さあ？」

気の抜けた会話を繰り返す二人、そんな二人の意識の外で黒い人影が壁を一跳躍で飛び越えて侵入していた。

「…侵入するのは存外容易かったな」

拍子抜けするほどのスムーズな進行に逆に畏ではないか？

と不安を感じるほどに何の障害も無く横浜基地内部を駆け抜けていく亮

その顔には顔全体を覆うマジックミラーのようなマスクで覆われ表情をつかがうことは出来ない。

気密扉の横に備え付けられたコンソールにカードキーを通し暗証番号を高速で打ち込み電子ロックを解除しその奥へと進んでいく

横浜基地は奪還したハイブを利用して建設しているためその構造は通常の基地に比べ大掛かりかつ少々雑な構造となっている。

地上部分こそ通常の基地と変わらないが亮が目指す地下はハイブの縦穴をそのまま利用しているためであり、地下の施設は戦術機などの格納庫、基地全体の電力を賄う原子力発電施設、最下部のオルタネイティブ4占有スペースが大部分を占めている。

そうして幾つかのエレベーターと気密扉を同じ手法で潜り抜け地下へと向かう。

しかし幾つか目の扉、オルタネイティブ4占有スペースへの扉のコンソールにカードキーを通すもコンソールに映し出される“error”の文字

「そう容易くはいかんか…仕方が無い“^{アクセス}契約”魔刃鍛造っ!!!」

ロングコートの裾に隠れては見えないが腰に備えつけられたホルダーに納められたネクロノミコン・ラテン言語写本に刻まれた術式を発動し一本の偃月刀を虚空から鍛え上げながら抜き放つ

「フウンっ!!!」

呼気と共に風きり音が鳴りバルザイの偃月刀が振りぬかれ特殊合金の気密扉に火花が散る

“スウ　　ゴトンっ!!!”

僅かな時を要して三角形に切り抜かれた扉が地面に音を立てながら落ちる。

“ブウンっ!!!ブウンっ!!!ブウンっ!!!ブウンっ!!!”

突然けたたましく鳴り響く警報、真っ赤に染まる通路

「さて、急ぐとするか」

亮は漆黒の外套を靡かせて紅く点滅する通路を駆け抜ける。

「むっ！」

真っ赤に点滅する通路、その幾つ目かを曲がったところであったそれに眼を剥く
壁がせり上がったかと思うと巨大な回転砲身ガトリングが展開し火を吹く。

「くっ！！」

“ダダダダダッ！！ダッダダダッダだっ！！”

とっさに跳躍、自身が今しがた飛び出してきた壁に隠れる、それと同時に着弾し地面が爆ぜ飛ぶ

通路を舞う粉塵越しに侵入者撃退用の機関砲を睨み付ける。

「なるほど戦術機のIFFを応用した対侵入者用の迎撃装置か…しかし」

口元に微笑を浮かべる。

「俺を止めるには足りんっ！！！！」

通路の角から飛び出す仮面をつけ外套を靡かせる亮、そんな亮に容赦なく銃弾の嵐が迫る

「ふっ」

短く息を吐き出しつつ壁に向かって跳躍、そのまま三角飛びの要領で天井に足をつけそのまま駆ける。

そして天井を蹴り宙で反転、重力の助けを借りて速度を上げつつその手に持つバルザイの偃月刀を振り下ろす。

「閃っ!!!」

“シャン!!!”

一瞬の交差、落下でついた加速を全く殺さずに軌道を直角に曲げ先ほど自身が断ち切った機関砲には目もくれず速度を上げて疾走する。そうして駆け抜けていく、今度は三門の機関砲が壁と床から迫り出して来る。

「飛べ！偃月刀っ!!!風を編む双子の神よっ!!!」

バルザイの偃月刀を投合し、続いて虚空よりロイガー・ツァール双刀を引き抜く。

ブーメランに似た形状の偃月刀は迫り来る銃弾を物ともせず迫り床から生えた機関砲をまるで熱した鉄でバターを切るかのように容易く切断する。

しかし一門潰した所で機関砲はまだ生き残っており生身の亮に向けて次々と鉛球が音速を超えて飛来する。

「はぁぁぁぁあっ!!!!!!」

銃声と金属の触れ合う音が同時に通路に響き渡る。

一発の銃声で何十発という弾丸が放たれる、しかし亮は双刀の刀身側面の角度を使い全てをいなし弾き飛ばしつつ銃弾の本流を速度を一切緩めず溯る。さかのぼ

コンマ一秒単位での角度調整、0.01秒単位での連撃速度、常人には赦されない超人のみに許された身体能力と鍛え上げられた技量によりなせる業

「フンっ!!」

同時に放たれた二つの剣閃が機関砲を断ち切り、火花を散らしながらその機能を停止する。

「…BETAの侵入を警戒しているような装備だな」

あちらこちらから火花の飛沫を上げる機関砲を尻目に呟く
明らかに威力が高すぎるのだ

「そんなことはどうでもいいか」

疑問を頭から追い出す、考察など後であればいいことだからだ。

「この向こうか…」

一段と巨大な扉、戦術機にも使われる特殊複合装甲の扉シャッター
厚さ数メートルは有るそれを見上げる。

「少々強引だが力技でいくか」

すでに力技以外の何ものでもない手段で辿りついているのだがそんなことは気にしていられない。

巨大な最後の障害に手を当てその物質構造を解析し理解する。

「貴様の死を穿つ…【サイコグロリー】」

物質崩壊点・クランブルポイントをロイガーで貫く

“ピシッ！！！！”

まるで数万年の月日が経過したかのようにひび割れる巨扉シャッター
ばらばらと崩れ落ちてくる破片

「フンッ！！！！」

“ダアアアアアアン”

崩壊寸前の巨扉シャッターに掌底を叩き込むと同時に碎け爆ぜ飛ぶ。

そして粉塵の中を突き進んでいく、やがて粉塵が晴れそれが目に入る

「これがハイブの中枢…反応炉か」

それを見上げる、まるで木の実と根が生えかけの球根が混じったような巨大な物体が床か生えひび割れたマグマのような表層の隙間から漏れ出る青い光

それを瞳を切り替えて見やる

仮面越しで変化を知ることが出来ないがブラウンのはずの瞳が青く
光り輝き反応炉を流れる力の流れを透視する。

浄眼

これは在りえざるものを見抜く瞳、しかし自分のそれは受け継いだ
血のせいか魂とそこから生み出される生命力を視認出来る。

青龍、それが司るのは変化

変化を促す力それは時の流れ 時によって全てのもものは流れる
その人の命、生命力さえも。そして変化を常に引き起こし変化の積
み重ねを体現するものそれは命そのもの。

即ち青龍の青が本来指す色、青々しい緑、星を巡る命の流れライフ
ストリームの色

そう、朱雀が命の炎を司るように青龍も命を司る存在

故にこの瞳が宿った。

(…反応炉内部を高速循環している物質…やはりグレイ・ナイン…
セル・パーティクル記憶粒子そして動力源として消費されているのはグレイ・イレブン
…ライフストリームっ!!…)

反応炉から文字通り植物の根のように地下へと伸びる管、それは地
殻突き抜け星の命を吸い上げている

(…腫瘍、もしくは寄生虫だな)

「やはりそういうことか…
BETA…G元素…定期的に打ち上げられる物体…完全に殺される命…そういうことか!!」

全てのパズルが繋がった

脳内で今まで収集した情報の全てが繋がった。

何故BETAは人間のみならず全ての生命を根絶やしにするのか

それは星内部のライフストリームの総量を増やすため

定期的にハイブから打ち上げられる物体

本体、もしくは女王蜂に加工した食料ロイヤルゼリーを届けるため

何故、日本のような狭い土地に二つもハイブが作られたのか？

日本は命の流れが収束するセフィロトの一つだから

自分たちを生命体としてみなしていない

自分の触覚や道具を生命だと思ふ生命体は居ない、本能的に埋め込まれたロボット三原則のようなもの

(下らんっ!!何がBETAに人間を生命と認知させるだっ!!!!)

コイツは…こいつらはまさしく癌細胞じゃないかっ!?)

心中でオルタネイティブ4の最終目標が決してかなわぬと悟る。
BETAにとつての女王蜂は星規模で命を喰らいその手を広げていく、まさしく癌細胞の如く広がっていくBETA…その行く末はオメガやカオスといった星の宇宙全体の代謝機構の死滅…即ち宇宙そのものの死滅

癌細胞と通常の細胞が共存することなど有り得るか?

その答えは否、不可能…全く共生共存の出来ない壊れた存在

人類いや、宇宙に存在する星、全ての敵　それがBETAだ。

「うすうすは気付いていた、しかしこれで確信が持てた」

“カチャ”

「そう、何が判って何を確信したのかよかったら教えてくれないかしら?」

銃口を向け激鉄を挙げる音と共に女性の声が耳に届き振り向く

そこには軍服の上に白衣を纏い銃口を向ける女性と　そのクリ

スカと同じ白銀の髪を携えた少女が居た

第四十四話 横浜基地（後書き）

BETAに関する没案

ファフナーにおける敵、フェストウムが宇宙のどこかで人類と同じ知的生命体を融合捕食した結果誕生した生命体が生み出したもの。

サイコグロリー、

その存在が持っている死そのものともいえる点を刃で貫き相手を粉碎する能力

式達の直死の魔眼と似て非なるもので相手に接触、構造解析、理解、打突という手順を踏まなければならないため戦闘における実用性は皆無

ガオファイガー設定資料・改(この話においての)(前書き)

ガオファイガー知らない人は勇者王ガオガイガーFINAL GG
Gを求めてビデオレンタル屋にダッシュ!!

ガオファイガー設定資料・改(この話においての)

Gストーン

Gストーンは複合重金属粒子を骨格としグレイ・ナインの正体である記憶粒子を結晶体構造に生成しそれをグレイ・イレブン：ライフストリームの結晶体で覆って構成された。

地殻内部を流れるライフストリームは大量の記憶粒子が内包されており地球が始まってからすべての知識が蓄積されなお増え続けておりいわば無限に情報蓄積を行う特性を持っておりGストーンもこの特性を受け継いでおりほぼ無限に情報を蓄積できるほか結晶回路を利用した高度演算装置としても機能する。

更に生命が持つ不条理を打破し未来へ進もうとする闘志、勇気に感応しまるでミトコンドリアのようにエネルギーを発振する特性がありその出力はほぼ無尽蔵

しかしその特性上Gストーンの機能を活用できる人間には精神的な強さが絶えず求められるため万人に使用できるわけではなく量産も効きづらく軍用兵器としてはあまり使えない。

余談だが東雲は第三魔法に関する知識と自身の生態器官である竜玉を参考に生成した。

Jジュエル

Gストーンをベースに結晶記憶粒子回路の周りを同じく結晶化させた古細菌、リンカージュエルとライフストリームを積層構造で固め生成したもので基本性能をGストーンと同じくするがエネルギー出力

が格段に向上している

Jジュエル・Gストーンともに文字のようなものが点滅しているのは内封されている記憶粒子の結晶回路が機能しているための現象

豆知識

ウィルスや古細菌は生物と鉱物の特性を半々に持つており特定の配列、密度で結合し結晶体となることがある（実話）

GSライド

本編ではGストーンのエネルギーを増幅する装置でありギャレオンから齎されたオーバーテクノロジーを地球の技術で再現したもの（のちに犯罪組織バイオレットにこの情報が流出、Gストーンではなく純粋なエネルギー増幅機関として使用するフェイクGSライドが開発されてしまう、しかしオリジナルのGSライドほどの高出力は望めない）

本作では鬼械神アイオンの動力中枢術式 霊燃機関【アルハザードのランプ】を機械的に再現したものとす。

アルハザードのランプは人間が持つ霊力を燃焼させアイオンの動力として莫大な魔力を生み出す増幅機関でもあり霊力以外にも魔力と共にその大本である生命力も力に変換する超大規模魔術回路集積体とも言え、Gストーンが命の宝石である以上、これから発振されるエネルギーは正しく視認できるほどの濃密な命力でありこれをアルハザードのランプが増幅、全身へと送り出すことでガオファイガーは稼働することとなる。

ただし、アイオンの様に機体が一方的に搭乗者から搾取する方式ではなくあくまでGストーンから抽出される命力を変換・増幅しているにすぎずその稼働率はGストーンエネルギー発振率と比例する。

ただし、アイオンの様に強引にエネルギーを解放・搾取する機構は未だ残っている。

ガオファア

動力：Gストーン&GSライド

全高22.3m

乾燥重量 55.6t

搭載型AI G M X - F G 1

出力 計測不能

推進機関型式 腰部・肩部Gインパルスドライブ

飛行速度 650km/h(大気中)

フュージョン所要時間 機密

バリアシステム Gパワーバリアシステム

物理防御システム レーザーコーティング積層ハイパーカーボン装甲

武装 ファントムクロウ

ドイツ解放戦線で撃破されたGX-70Cの動力および量子電導脳に使われていたG元素を解析、発展応用して開発された無限情報サキットGストーンを動力として開発された対BETA決戦兵器の中核となるべく開発されたファイティングメカノイド、通常時は高

機動大型戦闘機フロントムガオーとなり高い機動性を発揮する。

ロケットガオー

ガオファイガーの肩部および上腕を構成するガオーマシン、ライナーガオー？とほぼ一緒

相違点は動力にGストーンではなくJジュエルとジュエルジェネレーターが使用されている点とTGCジョイントが使用されている点

ドリルガオー

外観はも内部もドリルガオーそのまま

相違点はやはり動力にJジュエルを使用している点とグラビコンシステムを搭載し突進力と防御力を向上させられている

ステルスガオー

外観はステルスガオー？

元と比べて一番乖離している機体、ウルテクエンジンを搭載しておらずテスラドライブによる無反動推進を行いJジュエルによる高出力を得ているところが違う

テスラドライブの出力を上げ形成されるブレイクフィールドを纏って機体自体を巨大な刃に見立てて相手を切り裂くことが可能（ぶちやけビクティム・ブーク）

ガオファイガー

全高 31.5 m

重量 630 t

内臓タンク総量 不明

搭載AI型式

GSライドクラス 機密

機関構造 Gドライブ結合

動力GSライドと・3基のJジエネレーター結合共鳴発振機関
出力 over 1500000kw (2000000馬
力以上) (推定)

飛行システム 主翼内臓テスラドライブ

飛行システム推進力 不明

最高走行速度 不明

最高飛行速度 5.0 Mach (推定)

ファイナルフュージョン総所要時間 機密

バリアシステム プロテクトウオール

物理防御システム 対レーザーコーティング積層ハイパーカ

ーボン装甲

装備 ブロウクンファントムノドリルニーノプロテクトウオ
ールノプラズマホールド

ガオファイと三機のガオーマシンが合体することにより完成するス
パーメカノイド

合体時に額にせりあがるGストーンはガオーマシンに内蔵されたJ

ジュエルとの共鳴によりGとJの文字が重なり合い点滅する。

外見はステルスガオー？とドリルガオー？に換装したガオファイガー

ガオファイガーはJジュエルとGストーンの共鳴反応を利用し絶大な出力を発揮できXG-70シリーズのML機関さえも凌駕する。

またEOTが各所に組み込まれそれと強大な出力の相乗によって破格の攻撃力を生み出すように設計されているが搭乗者の意志力に応じた出力変動が分離状態のガオファーよりも激しいという弱点にして長所を持っている。

勇気×エネルギー発振率＝機体出力

でありエネルギー発振率が強大になった分変動幅が大きくなってしまっているのである。

705

鬼械神の技術も部分的に使用しているためモバイルデウスマキナといえるかもしれない。

(基本コンセプト等原作同士で元から類似点が多い)

ブrouクンファントム

中々近距離用のガオファイガーの右前腕を高速回転させ打ち出す武装

高速回転する拳にGパワーバリアシステムが収束展開されておりさらにグラビコンシステムにおいて意図的に重くされた上に腹部から展開されるエネルギーリング：ファントムリングを伴うことで拳全

体を拡張されたGテリトリで覆いそれが高速回転することで空間ごと相手を粉碎できる武装

ドリル二

膝頭から延びるドリルガオーの回転衝角を高速回転させながら放つ膝蹴り

ブロウクンマグナムと同じくグラビコンシステムによって意図的に重くされた上に高速回転するGテリトリを纏っているため触れただけで空間のねじれに巻き込まれ相手は粉々に砕け散る

プロテクトウォール

広域展開するGテリトリ

JジュエルとGストーンの高度高速演算によりエネルギー系の攻撃を重力場の壁の歪曲率を微細に変更し反射させることが可能（波を反射させているだけでありレーザーも波の一種である以上これを突破できない）

ガオファイガー腹部から展開されるウォールリングにより効果範囲、攻撃反射上限を拡張できる。

プラズマホールド

重力操作によって生まれる歪曲フィールドに相手を閉じ込めること
によって身動きを取れなくさせる武装

その際フィールド内では激しい電離現象が生じ、これが目標の電子機器を破損させる付随的效果も認められている。（BETAは生体であるためダメージも期待できる）

ヘル・アンド・ヘブン

通常、ガオファイガーは右腕に攻撃的エネルギー、左腕に防御的エネルギーを集中させることで高い戦闘能力を発揮する。

ヘル・アンド・ヘブンはこの両腕のエネルギーを融合させ爆発的な破壊力を生み出すガオガイガー最大最強の特殊攻撃である。右掌に攻撃エネルギー、左掌に防御エネルギーをそれぞれ集中させた後、掌を組み合わせることで両者を集中融合、同時にファイナルフュージョン時に発生させるEMトルネードを利用して目標を拘束する。そこへ融合エネルギーを両掌に集中させた上にブレイクフィールドを纏ったガオファイガーが突撃、目標の核を抽出すると同時に掌に集中させた融合エネルギーを目標機体内で解放、目標を内部から完全に破壊する。

(この時ガオファイガーを覆うブレイクフィールドは内側からの融合エネルギーの干渉によって鋭角化している)

この際GSライドはフル稼動状態にあり、その余剰光は周囲を取り巻くEMトルネードの色と臨界点まで稼働しているテストドライブのブレイクフィールドとあいまってガオガイガーの全身を緑色に染める。またエネルギー融合の際、唱えられる「ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ」という呪文のような言葉がある「ふたつのちからをひとつに」という意味があるらしい。

原作と違い機体全体をブレイクフィールドで覆っているため真後ろ以外完全に防御され攻撃力も上がっている(同時に核ごと相手を粉砕してしまうが)

まあ簡単に言うと原作のヘルアンドヘブンとJフェニックスの合わ

せ技みたいなもの

その他の技・武装

重斬刃

手刀にGテリトリーを展開させそれを一気に振りぬくことで重力場の刃を飛ばし相手を切断する技
ガイバーで村上さんがよく使った技

Gブレード

左腕の4つの重力場発生器官から発射される重力塊、相手を根こそぎ削ぎ落とすマシンガン
ン・カインの闇の連射版、ただし軌道制御はできない

ガオファイガー設定資料・改(この話においての)(後書き)

ちなみに：武ちゃんではGストーンをもっても大した出力は得られないというのが作者とその友人の見解

だって、へたれだもん。(基本行動がすべて逃避でできているから)リミテッド最期らへんならもしかするかもだけどオルタだと永久に無理

第四十五話 脱出

.....

“ブウン……”

唐突に意識が覚醒する。

目に映るのは格納庫の内部の光景

『お、オレは……』

「気が付いたか？」

自分の声がやけに機械的に聞こえる中、声を掛けられそちらに意識を向ける。

其処には恐らくEUの軍服を纏った20代前後の東洋人の青年がいる。

…オレに力を与えた存在、東雲 亮が

「まず簡単な質問だ、自分が何者かわかるか？」

『フォルカ・エイセル…なんでそんなことを聞くんだ？シノノメ』

「意識レベル正常か…GSライドはどうだ？」

「安定稼働中、問題ありません」

シノノメは計器を操作している研究員の問いかけその答えに満足

げに顔を頷かせる。

「さて、フォルカ…自分がどうなったか覚えているか？」

『…オレはアイツを…アイツを…殺せた　　殺せたんだ』

確かに覚えている、この手にアイオーンとの同化によって握りつぶしたシャトルの感触が残っている。

「そう、お前は仇を討った…俺が使ったといった永劫の力を使つてな　　簡潔にいう、お前は死んだ」

『なら、何故おれはここに居る？』

「…お前はもう人間ではない、超AIにお前の人格と記憶をコピーした」

『そんなことが…』

「人間の意識もまた電気信号の産物、ならば複製も可能ということだ」

『シノノメ…お前は俺に【なにを】させたい？俺の【用事】は終わった　　黄泉路を帰した仮初のまがい物の命をどう使えばいい？』

亮は両手を左右に大きく広げる、その背後に居る巨大な30m超の機械の人型の骸骨がその鉄骨と歯車、シリンダーで組み上げられた骨格を晒していた。

「ファイティング・ガオガイガー　　略して【ガオファイガー】

これの意志となり力となり…魔を絶つ剣と為れ」

第四十五話 脱出

“力チヤ”

「さあとつととそのフザケタ仮面をとって洗いざらい吐いてもらうわよ」

ブレることなく自身に突きつけられる銃口を見据える亮、しかしその意識は女性の隣にいる少女に向かっている

「思ったより早かったな、今頃あそこに踏み込んだはいいが誰もおらず慌てて向かっているころだと思ったのだがね」

肩をすくめながら鋼鉄の壁から生えた管制室を言葉で指す

そこには反応炉に打ち込まれた電極やこの空間に備えられた各種センサーから得られた観測結果、人類が知りうることのできる反応炉に関する凡ての情報が秘められているといっても過言ではない。

「私はアンタと楽しくお喋りしているんじゃないの。【命令】しているのよ」

「拒否させてもらうよ、オルタネイティブ？最高責任者 “香月夕呼”」

亮の即答にさらに自身の名を呼ばれ顔を顰める女性、夕呼

「自分の立場が分かっていないようね　　来なさい」

“カシャー!!”

“ダダダダダダダッ!”

“カシャー!!”

“ダダダダダダダッ!”

“カシャー!!”

“ダダダダダダダッ!”

夕呼の命令とほぼ同時に部屋中の扉が開かれ特殊装備の兵が無数の足音とともに雪崩込み亮を包囲しその黒光りする銃器マシンガンを向ける。自分の構えていた拳銃は用が済んだといわんばかりにその手の中で玩ばれる。

「これでもその態度を変えないつもりかしら侵入者さん？」

「……（あまり時間がないか……）」

夕呼は内心焦っていた、なぜなら目の前の侵入者に対し自身の傍らに存在する少女、社　霞リーディングの読心が一切効かないことに。

彼女の頭部のウサギの耳のようなアクセサリーは登録された特定の脳波を遮断する装置ではあるが事前に登録しておかないと意味はない。

つまり相手は素でリーディングをブロックしたことに他ならない、最も優秀とされる少女でさえ存在を感じ取ることが限界それ以上は不可能だという。

「ひとつ聞く、これに満足のいく答えを出せたのなら俺は君の望むすべての回答を与えよう」

「立場わかって言っているの？…だとした大した度胸ね」

亮の言葉に感嘆の息をつく
そしてまっすぐに亮を見据えながら答える

「いいわ、言ってみなさい。別に答えたところで結果は変わらない
なら労力の掛からないほうを選ぶわ」

「…君の計画で救われる【世界】はなんだ？」

どういう意味？

夕呼は眼前の男の言う世界が何を指しているか、それがわからない。通常世界とは自分という価値観を基準においた環境、主観世界もしくは単純に地球という星に内包された国際社会を指す

しかし

(こいつはそんなことを聞いているんじゃない)

目の前の男の見ている景色、それと自分が救おうとしている世界それが同じであれば男は同志となるが違えば敵となる。

ここまで侵入してきた手腕、迎撃装置を生身で突破する卓越した身体能力と技能

一転、暗殺のために全力を注がれれば逃れるすべはないだろう。

(恐らく今この状態からでも私だけを殺すのは造作もないはず…あえて聞くその真意は?)

「言っておくが其処の蛭子の力は通じんぞ…同じリミピッドチャネルを保有しよう次元を異にする存在だ。せいぜい俺の存在を感じ取るのが限界だ」

亮の言葉に“ビクリ”と震える少女、同時に夕呼の片眉が僅かに上がる。

(っ!?!?社の力を知っている!!それどころか単純にESPと区分エスパーされる力の恐らくは本質を識っている　こいつ何者?)

いくら考えを巡らそうとも一向に答えが出る気配はない。

「どうした答えられないのか?言ってやろうこの星を救うだけではダメだ。

君が産み出す存在は宇宙を救えるか?」

「スケールの大きな話ね、しかしBETA戦役を終わらすのにわざわざ“勝つ”必要性があるのかしら和平という手段もあるのよ」

オルタネイティブ?その最終目標は地球人類を生命体としてBETAもしくはその創造主に認識させることだ。わざわざ殲滅という手

段をとる必要がない、というより不可能だ。

BETAという【脅威】がなくなればそれでいい、そのための前身としてBETAと対話できる存在を生み出すことが第？計画の目標なのだ。

その目的に謀報能力などの汎用性を持たすのはオマケに過ぎない。

「君の考えが人類全体の考えであれば人類は　　宇宙は死滅する
だろうBETAという癌細胞カンケルによって……」

断言する君の計画では人類は救えない　　」

「そう…残念ね　　」

夕呼は片腕を上げる、その手が振り下ろされる瞬間に亮を包囲する銃器が一齐に火を噴くだろう。

それも致し方ない完全に両者の意見が食い違っているのだ。
夕呼はその頭脳故に純軍事力ではBETAを駆逐できないと知り、
人類生存への道しるべとなる存在を生み出そうとしている。

対して亮は世界の精霊種でありながら人間でもあるが故に魔法へと至り、理解の起源を持つがゆえにモノの本質を識りBETAを駆逐しなければならぬと識った。

人類の存続を求める二人が求む存在は目的に反して対照的
未知なる存在との対話者

命を齧る存在を屠る破壊者

どちらかが敗北／折れることなければ同じ道は歩めない。

「…知ってはいけないことをかなり知っているようだし消えてもら
うわ　　また会いましょう」

夕呼の腕が振り下ろされる。

そして亮の周囲を囲っている特殊部隊員の手にもつ機関銃が一斉に
火を噴いた。

「ハッ！！」

それと同時に亮は地面を蹴り跳躍、宙を捻回転しながら宙を舞う。

直後に先ほどのいた場所を銃弾が通り過ぎる。

そして着地と同時に一陣の風の如く疾走する。

特殊部隊員たちは銃口を亮に向け即座に引き金を引く。

蛇行走行でその音速を超えて飛来する破壊の弾を回避しつつ鋼鉄製の壁際まで移動する。

「無駄よ、電子ロックは完全にロックしているから出られないわよ
！！」

「ならば駆け上がるまで！！！！」

鋼鉄の垂直に伸びる壁、それに足をかけ一気に駆け上る。

「ハア！？どこの忍者よっ！？」

思わず素っ頓狂な声を上げる夕呼

そんな声を置き去りして100メートルを超える壁を垂直に駆け上っていく亮、やがて天井　縦穴を階層ごとで区切るジャイアントシャッターに近づいてく

そこで壁を蹴り宙に躍り出る。

「ヴェーアの無敵の印のもと“力を与えよ”力を与えよ“力を与えよ”」

紅蓮の炎塊が宙に顕れ、そして細長く変形する。

亮はそれを躊躇わず掴み取る。同時に炎塊は大きく大きく巨大に為っていく。

直径数十メートルにも及ぶ巨大な炎の大剣、それは一気に冷え固まりし一本の偃月刀を鍛え上げる。

そう、亮が侵入のさい使用した魔術師の杖にして剣、【バルザイの偃月刀】

しかしその大きさは携える亮が米粒に見えるほど巨大、鋼の巨神、アイオーンが振るうそれを召喚したのだ。

「フウ　　ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオっ！！！！！」

その数十メートルにも及ぶそれを亮は振るい反応炉の安置されている空間その天井であるジャイアントシャッターに突き刺す。

「では失礼させてもらおうよ。ここに用はもうないのでね」

天井に突き刺さったバルザイの偃月刀を足場にシャッターの亀裂へと亮は消えていく。

それを見送るしかできない特殊部隊員、みな眼前に起きた超常の光景にあっけとらわれていた。

「なにをボサツとしているの早くアイツを追いなさい、私は指揮所に向かうわ二人護衛に着きなさい」

「は、り、了解ッ！！！」

夕呼の叱咤で我に返る面々

夕呼は反応炉に背を向け二人ほど兵を引き連れて自動扉をくぐる。その拳は固く握りしめられていた。

第二機械化歩兵部隊、通信途絶！！」

「相手はただの一人だ！包囲して一気に叩くのだ！！」

夕呼が指揮所の扉を潜り抜けるとコマンドポスト、戦艦オペレータ

ーに相当する涼宮が戦況を報告し黒人の男性、ラダビノット指令が命令を飛ばしていた。

「涼宮、ヴァルキリーズに出撃命令を出しなさい」

「なっ!?!」

「香月君正気か!?!相手は人間だぞ!?!」

部屋に入るなり夕呼の発した言葉に思わず問いかけてしまう二人、指揮所の視線が夕呼とラダビノットに集まる。

「あれが人間ですか? 単独の生身で小型種とはいえ人間の数倍の身体能力を誇るBETAを相手にする機械化歩兵部隊を葬り去るあれが人間ですか!?!」

「ぬう…それは」

夕呼の剣幕と言葉に思わずうなる司令官

「相手は人間じゃないと思って対処しないといけませんわ、ここで計画がとん挫すればそれこそ人類全体の未来を脅かすその可能性をやつは秘めている。なにがなんでも消さなければなりません。」

「…致し方あるまいか……」

良心の呵責を感じながらラダビノットは指令を飛ばすのだった。

廃墟と化した横浜の街を駆け抜ける亮、

そんな亮の前に倒壊寸前のビルの陰から89式機械化歩兵装甲を纏った部隊が現れる。

「シタミネーション・アウター
混合解除」

大規模魔術回路集積体である魔導書を介さずに自身の魂に付属した疑似神経、魔術回路に生命力を変換した力、魔力を流し込み神秘を具現化させる。

腕の物質構造に混入していた異なる存在の物質が乖離しその様子は腕から無数の燐光があふれ出ているように映る。

そして魔力を媒介する超粒子、エーテルが両掌の中に大太刀の輪郭を描きあふれ出したフォミル粒子はそれに群がりその大太刀を顕現マテリアライズ化させる。

物質の最小単位から即座に組み上げられた対の大太刀、蛍丸それに大包平

対霊宝具である対の大太刀の鈍い光が尾を引き闇夜に浮き上がる。

「止まれっ！！止まらんと撃つ！！」

マイクで増幅された歩兵の声が届くがそんなことでは止まらない。

ヒュッケバインボクサーによく似た機体構造の89式機械化歩兵装甲は戦術機の操縦席となる87式フィードバックシステムを装着した強化服に装着され始めから機械化歩兵として配備されたそれは衛士脱出用のそれと違い剥き出しの前面に簡易ながら戦術機と同じ特殊複合装甲がなされ外見はまさに2メートル超のロボットだ。

人の十倍を軽く超える身体能力を獲得した機械化歩兵は重火器を片腕で難なく振り回しロケットバーニアによる高機動性を獲得しているまさにミニチュア版戦術機

「…（生身の人間相手にこれは良心が咎めるがこれも任務なんだから悪く思うな）」

亮に向け重火器を向け間接フィードバックによりその引き金を引く
“ダアアアンンっ！！”

迫りくる砲弾を見切り、旋回するように躲し地面を蹴り音を置き去りにして一瞬で機械化歩兵に肉薄する。

「っ！？」

カメラ越しに亮の鋭い視線を受け息を呑む。

“シャン”

夜の闇さえ切り裂くような剣閃が機械化歩兵装甲上部のメインコンピューターを特殊装甲ごと引き裂き血飛沫のように大量の火花があふれる。

“ドオン”

やがてその裂け目が爆発し黒煙を上げる。

「速いつ!!」

一瞬で仲間を行動不能に追いやられた機械化歩兵の一人が驚きの声を上げる

“ズシヤ”

その瞬間に亮は機械化歩兵装甲の頭上に飛び乗り垂直に刃を突き刺す。

“バチい!!バチい!!”

刃を突き刺された機械化歩兵装甲の制御回路が破損し全身に雷が奔りやがてそのままの姿勢で硬直し機能停止する。

戦術機と同じ稼働機構、カーボニックアクチエーター炭素繊維電磁収縮帯は制御する電荷の向きで収縮を行うが制御CPUを破壊され電力供給が行われなくなればそのままの状態です。

人に何倍もの戦闘力を付加するパワードスーツは一瞬でストレイトジャケット拘束服へと変貌する。

「見つけたっ!!」

後ろからロケットブースターの爆音とともに迫ったあらたな敵機を視認するなり足蹴にしている機械化歩兵の上部装甲を蹴り宙を舞う。

「くっ!!?速い!!しかし空中では身動きがとれまいつ!!!!」

「固有時制御：二倍速」

稼働、反射、思考

ありとあらゆる速度、自身の肉体時間の

流れが倍加する。

この身は第四の秘法へと至った身、ならばそこに至る過程で発生した術を使えない理由はない

落下速度さえも一気に倍加する。

「いきなり!!…速

」

「フっ!!」

“ シャンっ!! ”

短い呼気とともに振るわれる大太刀

言葉中ほどでほかの仲間同様に制御部を切り裂かれ火花の血飛沫を上げる愛機にその体を拘束される。

それをしり目に海へ向かって駆ける。

“ ヒュン!

ズシャ ”

風を切る音と共に黒鍵が宙を切り機械化歩兵装甲のダーツの的のよ
うなカメラを真正面から貫きその奥にある制御用基板を破壊する。

硬直する機械化歩兵装甲のストレイトジャケットのまるで直立不動
のオブジェと化した陸軍兵の隙間を駆け抜け抜け亮は海辺まで後僅か
というところまで迫っていた。

「もう少し…海には【アイツ】が居る

っ!?!」

“ キュイイイイイインっブオオオオオオン！！！！ ”
空気を引き裂き粉碎するタービンエンジンの金切音とジェットエンジンの爆音を引き連れて頭上を幾つかの青い機影が通り過ぎる。

“ ガツシャアアアアアアアアアア ”
『 ここまでだ、おとなしく投稿しろ 』

亮の行く手を塞ぐ様に土煙を舞い上げ地面を振動させながら着地する18メートル超のUNブルーに塗装された機人達

「 青い不知火……魔女の懐刀、戦乙女の戦団ノヴァルキリーズか 』

36mmの銃口が月明かりを反射させ鈍く輝く

「 ……相手にとって不足はないっ！！！！ 」

亮は視線と闘志を鋭く研ぎ澄ませ剣気を練り上げる。

構える大太刀の透き通る鈍い鋼が月明かりを反射し青白く煌めく。

『 投降の意志はないようだな 撃てっ！！！！！！ 』

数機の不知火がその手に持つ突撃砲から36mm弾が瞳を灼くマズルフラッシュと耳を劈く砲音ともに発射され亮ごと地面を砕き爆風で砂塵を舞い上げる。

『…やったか………』

『伊隅大尉、後味の悪い任務でしたね、』

『しかし、生身でアイツ一人にいくつも機械化歩兵部隊がやられたのだ…副指令が私たちに始末を命令したのも無理からぬことだ』

『案外新種のBETAだったり…』

『それは笑えない冗談だ速瀬』

ヴァルキリーズを率いる二人の女性が軽口を叩き合った。真正面から戦術機の間からみれば連射される大砲となる突撃砲の集中豪雨を受けたのだ肉片でも残っていれば御の字だ。

そう　ふつつならば

「本当にそれは笑えない冗談だな」

『っ！！』

不知火たちの隊長機、伊隅機の管制ユニットに外部マイクからの音が届く

『伊隅大尉っ！！首元に！！！！』

伊隅の駆る不知火の首元、肩部モジュールと首の間に亮が黒いコートの裾を靡かせてそこに居た。

「まずは隊長機」

旋風刃

一瞬、亮の姿がぶれ煌めきが奔る
そしてゆっくりとズレ墜ちていく不知火の首と右肩

そう、亮はその手に持つ二振りの大太刀、大兼平と蛭丸で斬り落としたのだ。
人の十倍近いスケールのそれを

“ドガアアアアん”

地面に墜落する不知火の頭と右腕

『くっ！よくも隊長を！！！』

宗像の駆る迎撃後衛装備の不知火が左手に持つ盾ノ92式多目的追加装甲を投げ捨てると同時に左腕ナイフシースタビライザーが展開その先端を逆手につかむ。

元の位置に戻るサブアームの先端から短刀の刃が顔を覗かせる。

『ハアっ！！！！』

戦術機に取りついた戦車級を排除するのに使われる短刀が逆手に握られ亮をピンポイントで狙い振られる。

一陣の風のような斬撃が伊隅機の首が存在したところを薙ぐ。

戦術機の腕は人間にとっては一撃必殺の質量兵器となる、まともに当たれば体中の骨は砕け内臓や脳髄は破裂し肉塊となり戦術機のシミとなることは必至

『どこに行つた！？…左腕に損傷あり！？』

不知火の腕に吹き飛ばされた様子も残骸が散らばった様子もなく亮を見失つてしまう宗像、その網膜に投影される不知火のステータスの内、左腕が赤く染まっていた。

カメラを左腕に向けると其処には不知火の腕に刃を突き刺しそれにぶら下がる亮の姿があった。

「ふっ！！」

短い呼気と共に全身をバネに刃を回転軸にし不知火の腕の上に飛び上がり反動によりUNブルーの装甲から刃を引き抜く。

そして一直線に不知火の腕を駆け上がる。

『くっ…このっ！！！！』

腕を振るう不知火、しかし亮は吹き飛ばされる直前に跳躍

そのまま不知火の顔面のセンサーカバーに覆われたメインカメラに刃を突き刺す。

『カメラがつ！？』

カメラが機能停止しサブカメラに映るまでの一秒に満ちるか満たな

海を突き破って巨大な人が前屈姿勢をとったような形状の戦闘機が
その姿を現した。

第四六話

幻影の名を冠せし勇者

「ファントムガオー

っ！！！！」

『戦闘機だっ！？』

海面を突如として現れる戦闘機、戦術機よりも一回りほど大きいそれは既存の戦闘機とは比べ物にならないほどに大きい、しかしそれは大質量故の圧倒的存在感をものともせず海面に影を写し宙に佇む

「システムチェンジは可能か？」

後ろの宙に佇む戦闘機に語りかける。亮

『GSライド瞬間出力制御がうまくいかない、システムチェンジは不可能だ』

戦闘機から聞こえてくる電子音が亮の問いに答える。

「そうか

ならば！！！！たあっ！！！！」

亮は地面を蹴り跳躍、それに伴い戦闘機：ファントムガオーのキャノピーがひとりでに開く。

「フュージョン」

戦闘機のキャノピーの奥へと吸い込まれていく亮　そして閉じる
コクピットハッチ

それと同時に機体に変化が起きる。

“ブウン”

機体から波動が発せれると同時に機体機首の上弦と下限が分離し上弦はそのまま腕へと、下弦は脚部に變形する。

そして前屈姿勢だった機体が起き上がるように人型に変わりコックピットブロックのあった上部装甲が背中にスライドすると元の場所から人と同じ【目鼻口】のついた頭部が内部からせり出し完全な人型へと變形した。

そして完成する戦術機より一回りほど大きな機械仕掛けの巨人、肩の分厚い装甲板に隠れた3連Gインパルスドライブと額に翡翠の輝きを放つ六角形の宝石“Gストーン”

そのフォルムは既存の戦術機とは原点から異にする存在であることを告げる

『ガオファ つ！！！！！』

> i 2 9 2 1 9 — 3 7 5 9 <

ステルス戦闘機ファントムガオーは強い生体波動とGストーンが共

鳴することによってフュージョンしメカノイド・ガオファへと変形するのだ。

「フォルカいけるか？」

「当然だっ！！！」

第四六話

幻影の名を冠せし勇者

「へ…変形した…？…？」

驚きの声を上げるUNブルーの不知火達の前にゆっくりと降り立つガオファ

そしてファイティングポーズをとる。

「さあ、第二ラウンドと往こうか」

「喋った…」

啞然とした声が不知火の内一機から漏れる、それも当然、人型巨大機動兵器に人と同じ顔が付いているだけで非常識なのに口を開き言葉を発するのだから。

「くっ…このお

侮めるなああああああああつ！！！！

！！！！」

『待てっ！！速瀬！！！！』

速瀬駆る不知火が跳躍ユニットを吹かし地表から若干浮いたところで水平噴射を行い機体を加速させる。

『ぶった切ってやるわよっ！！！！』

背のブレードマウントが稼働し背負った長刀が90度跳ね上がり肩越しに背負う形になりその柄に手を伸ばし掴む。

ブレードマウントの固定パーツが弾け飛び、火薬式ノッカーが作動、長刀を勢いよく跳ねあげその速度のままに長刀を振り下ろす。

跳躍ユニットによる不知火自体の速度と相まってそれはとんでもない速さに達する。

『はあああああああああ』

っ！！！！！！！！！！』

“ブウン　　っ！！！！！！！！！！”

突撃級の甲殻から戦術機の装甲まで何でも切断するそれは速度によつて破壊力を増しガオファ　に迫る

『太刀筋が甘いつ！！！！！！！！！！』

振り下ろされる長刀を掴む腕をつかみ一瞬で姿勢を入れ替え肩越しに不知火の腕を背負う体勢にもっていき

『フンっ！！！！！』

そのままに投げ飛ばす。
しかし

“ガキンっ！！”

『ちよ！？は！？』

柔よく剛を制す、きれいに決まるはずの背負い投げは不知火が得ていた速度のせいか、従来の戦術機特有の人間以上の稼働域と引き換えの間接の脆さのせいか不知火の肘関節部が千切れ不知火自体の速度のベクトルに従いガオフアの向こうへとすっ飛んで行く。

『一体なんなのよ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ！！！！！！』

“バツシャ

ンっ！！”

速瀬の叫びを外部マイクから律儀に流しながら不知火は海へ水柱を上げ海へと消える。

『…いいのかあれ』

『面倒がなくなっただけだ 特に気にしなくてもいいと思うな、
きつとそうだ』

現在機体のシステム管制を担当しているフォルカが唾然とした口調で同化している亮に問いかけるが結構冷たい感想を述べる。

亮はこれで効果音が“ポチャン”とかだったら大変居た堪れない気分になったんじゃないか？などと考えていた。

『よくも速瀬をつー!!』

そんな中、残りの不知火達が動き出す。

それに呼応するように向き直るガオファ / 亮はその手に持つ不知火の腕から長刀を引き剥がし投げ捨てるとともに下段に長刀を構える。

機体サイズがほぼ同等であり戦術機の武装が人間が使用するものをスケールアップしたに過ぎないためガオファ もまた戦術機の装備を使用できるのだ。

『君たちに魅せてやろう、本当の高機動剣術というものをっ
!!!!』

両肩の分厚い装甲の後ろに隠れた3連Gインパルスドライブが噴射し機体を一気に加速させ一瞬にして不知火のうち一気に肉薄する。

『ハアツー!!』

そして一気に突撃前衛装備の不知火の右手、右足、右跳躍ユニットを切り落とす。

『これは つー!!無外流だと!?!』

無外流、それは新撰組三番隊長 斎藤 一が収めたといわれる流派の剣術でありその本質は驚異的な踏み込みとそこから生み出され

る脅力を持つて相手の行動に不可欠な部位を損傷させ相手の戦闘力を奪う古武術の一つ

文字通り戦術機の足と腕を奪われ地面に横たわる不知火、こうなれば戦術機などただのガラクタの塊に過ぎない。

『このっ！！』

ストライクバングード
強襲前衛装備の背に長刀を二本背負い両手に突撃砲を持つ不知火がガオファーに狙いを定め突撃砲の引き金を引く。

『フウンっ！』

両肩のGインパルスドライブを交互に噴出させそれに連動させるように軸足を入れ替え過激な重心移動をバランスを崩さず連続して行いまるで変幻自在の風のように36?弾の嵐を掻い潜っていく。

『そう来ると思ったよっ！！』

『覚悟っ！！』

『っ！！』

ガオファーを挟むビルの陰から一対の不知火が飛び出し左右から長刀を手に切りかかる。

『ふっ……』

口元に微笑を浮かべ腰部のGインパルスドライブを噴出させるとともに地面を蹴りバック転を行い振り下ろされる刃を回避する。

『なっ！っ！』

土煙を上げながら着地し再び両肩のGインパルスドライブを噴出させることによつて一気に加速し刀を振り下ろした状態で固まる不知火に迫る。

二体の不知火の胴体を手に携えた長刀による横なぎの斬撃で一気に切り落とす。

鮮血のような火花の血飛沫をまき散らせながら地面に落ちる不知火の上半身

しかし奇跡的なそれでいて意図的な差異で管制ユニットには直撃せずその下の不知火の下腹をガオファーは切り裂いており衛士は無事であった。

『日高！！シーリイ！！』

『やめる風間っ！！跳躍ユニットが誘爆する！！二人が死ぬぞっ！！？』

自機の戦術機の操縦席で仲間の名を呼びガオファーをロックオンする風間、しかしそこに静止が伊隅から掛かる。伊隅の不知火は指揮官機故のバイタル確認用装備が施されているため二人がまだ生存しておりここで発砲すればもろともに吹き飛ぶことが分かったのだ。

そうなれば重装甲のガオファーはともかく損傷した不知火では内部の衛士を守りきれない。

一瞬の躊躇、その隙を突きガオファーが風間の不知火に迫っていた。

『フロントムクローっ！！！！』

長刀を保持していない腕に金色の鉤爪が展開、一気に不知火の頭部

をもぎ取る。

「カメラがつ！！」

「足もやられたっ！？」

視界を奪われ動きを取れなくなる不知火にガオファアの弧を描くような水面蹴りがさく裂し不知火の膝関節を真横にへし折る。

地面に墜落という言葉がふさわしい音を立てて倒れ伏す不知火、地上において両脚を失うというこいとはそのままガラクタ、もしくは固定砲台以外使えないということを目指す

驚異的な加速力と膂力で一気に近づき相手を戦闘不能に陥れ戦闘不能が故に味方が巻き込まないように自分への攻撃を躊躇うその瞬間を狙い同じように一瞬で接敵し同じく相手を行動不能に陥れる。

不殺が勝利への布石となるのだ。流れるような連撃はパターンが判っても止められない、柔を交えた剛の動きで相手を翻弄し倒した敵を盾に近接戦へと持ち込み連携を許さない。

亮とヴァルキリーズでは蓄積された戦闘経験も戦術眼も戦闘理念も根底から違うのだ。

永き時を聖堂教会、魔術協会に追われ積み重ねた闘争の人生と瞬時に最適な行動を理解する戦術眼それは一対多においてその真価を發揮するのだ

「貴様で最後だっ！！」

最後まで抵抗を続ける伊隅の不知火に迫る、頭部と右腕を失いそれ

でも右兵装担架と左腕の突撃砲で抵抗するがその悉くが避けられる。それはANBACと呼ばれる宇宙船外活動において手足を振ることで急激重心を移動させ機動を変更させる技法であり極めれば少林寺拳法などで武空術と呼ばれる戦術となる。

『フンっ！！』

残った左腕と右兵装担架から延びた突撃砲が一瞬で切り裂かれ分解ける。

『くっ！！もう

手がない

ならば』

文字通り見方は全滅の上、自機は両腕を切り落とされた。不知火は歩くことしかできない。しかしS-11は健在、指向性を持たされた超高性能爆薬、この至近距離でやれば相手もただでは済まない。

SDSの文字が刻印され透明なカバーで封印処理が施されたスイッチに向かい腕を振り上げる伊隅

『タアっ！！』

腕が振り下ろされるよりも早くガオファアの右腕のフォントムクローが振り上げられ、不知火の前面腰部装甲に内蔵されたS-11が切り落とされる。

『なっ！』

完全に完璧に考えを読まれ行動を封じられる。
サブカメラから網膜へと送られる自分を見下ろすガオファアの口が動く

『お前達のような奴の行動は大体読めるさ、己が命と引き換えに任務全う　　大した美談だが、正直反吐が出るぞ二流』

『なんだと!!』

伊隅達ヴァルキリーズは過酷な任務を仲間ノ屍を踏み越えつつも潜り抜けた自信と矜持があったがそれを虚仮にされて憤る

『命を粗末に扱う戦士は二流　　否、それ以下だ。止めを刺す価値さえない。諦めと覚悟は似て非なるもの生き残ろうとする意志こそ真に強き意志にして力と知れ』

その強い意志を力に変換する^{エネルギー}宝石を携えた彼等にとって切り捨てる強さは何よりも脆弱な強さに変わりない。

なぜならそれは絶望を享受することに他ならないからだ。
犠牲を認めないことは絶望を享受するのではなく抗うこと、その果てに暗黒神話を打ち破った英雄を、旧き神を彼、亮は知っている。
悪意を享受できない脆弱な心とそれに抗い続ける壮絶な覚悟が鍛え上げた最弱無敵の戦士の刃鎧を知っている。

だからこそ受容できない、東ドイツ然り、香月　夕呼然り覚悟を決めているという言葉で現実を見ているという言葉で彩った享受と妥協の意志を、

“ガシャン、ガシャン”

伊隅を無視してガオファーは背を向け太平洋に向く。

『フュージョン・アウトっ!!』

ガオファーが一瞬で元の戦闘機に変形、肩と腰部にあったGインパルスドライブがすべて後方へ向きその推力を集中させている。

“バツシュン!!”

それが一気に噴射しファントムガオーはアツという間に米粒大の大ききさになり水平線の彼方へと消えていった。

『隊長…』

『ぐ…私たちの 完敗だ』

廃墟と化した街に残されたのは鋼の骸を晒す機人達とそれを駆っていた敗者のみであった。

亮が横浜基地を去ってから数時間後夕呼は指揮所に黒人指揮官ラダ

ビノットと共に自分の副官である蒼眼金髪の女性士官イリーナ中尉からまとまった被害報告を聞いていた。

「被害状況を報告しなさい」

「最下層ブロック隔壁および内壁に重大な損傷、突き刺さっていたはずの剣はいつの間にか消失：第4通路から第一通路自動迎撃システム完全沈黙、機械化歩兵部隊一個連隊、総数106機全滅、ヴァルキリーズ不知火12機すべて損傷レベル6から8：全機、廃棄処分です。」

損傷レベル5で片腕が？がれた程度を表し人間ではかなりの深手を負ったことを表す。

それ以上は大破判定で廃棄処分確定の損傷レベルである。侵入者一人にこれはあまりに大きすぎる損害だ。

「人的被害は如何程のものなのかね？」

ラダビノットがイリーナに問うと同時に彼女は書類から目を離し二人を見据えながら表情を変えずに淡々と結果を述べる。

「人的被害は打撲などの軽傷、重症でも骨折程度で実質人的被害はないと言えます。」

「なんとっ!?!」

殺すことより生かす事のほうが何倍も難しい、それを一対多という圧倒的な数の差を立ち回りや個人の技能で成した。それはもはや神業というのに相応しい。

「…恐らくは生かして置いたほうが離脱に役立つと踏んだからでしょう。」

「どういふことかね？香月君」

ラダビノットの驚愕を主成分とする疑問に答えたのは夕呼だった。

「残されたアイツの戦闘記録を見るに奴は刀剣類の一撃を以て相手を行動不能に陥れ周囲の味方が発砲を躊躇った隙を突き、再び相手を行動不能に追いやる。実にシンプルでいて人間には効果的な戦術です。」

「しかし…」

「ええ、それを可能とする圧倒的な身体能力と技能、戦術眼のすべがあつてのものです。恐らくやつが使用していた刀剣の類もなんらかの処理が施され奴の戦術を効果的に運用させる手助けをしていると思われませう。」

「それについてはこちらをご覧ください。」

夕呼の予想を裏付けるようにイリーナが二つの棒状の金属部品を取り出す。

「それは？」

「切断された不知火の関節部品の内一つです。…論より証拠見てください。」

そういつつイリーナは二つの部品の明らかに切断されたであろう面

同士を接触させる。

すると二つの金属部品は磁性体でもあるかのように自然とくっつく。

「なんと!?!」

思わず目を?くラダビノットにその部品を手渡しするイリーナ、ラダビノットは角度を変えその部品を隈なく観察し少し力を入れ部品を二つに別ける。

するとその部品の断面は鏡のようにラダビノットの顔を映す。

「恐らく…切断面の凹凸が極限までないため分子間力が働き吸着現象が起きているのでしょう。身近な所でガラス同士が張り合っつまうあれですわ。」

「むう…ガラスを二枚張り合わせるとその二枚が吸着してしまうあれか…」

マクロな分野が専門である夕呼が推察を述べ、ラダビノットは身近な現象を例にあげられ驚きつつも理解する。

「…つまり侵入者は刀で特殊複合材の戦術機や機械化歩兵装甲をガラスの表面並の滑らかさに切り裂いたということか…信じられん。」

「整備長が仰るにはこのように金属を切断できる工具、機材は知らないとのことですよ。」

単純な可能性としては斬鉄が最も高確率かと、御剣訓練兵が言うには真の達人は木刀であっても鋭い剣閃によって摩擦と真空活断層を生み出し如何なる物質でも切断できるそうです。」

御剣訓練兵、ここ横浜基地で訓練が始まったばかりに新入隊員では

あるが少々訳在りでありその名はラダビノットや夕呼の印象も濃い。彼女は古武術を納めており、侵入者こと亮が刀と古流剣術を使っていたことから意見をイリーナが求めたのだ。

そして彼女が言うには真の日本剣術の達人であれば得物は選ばない。通常、技量が近い者たちほど得物の差が顕著に表れるとされるがそれは真正面から剣を打ち合わせる西洋剣術の場合と中途半端な実力者同士のみの話だ。

その剣術の一種の到達点である斬鉄

それを体得するだけで如何程の修練が必要か、またそれを戦闘という極限状態において当たり前に使用し一撃一撃が文字通り必殺となる領域に一時でもたどり着いた存在が過去永劫存在するかも定かではない。

「あの機動兵器についても不明慮な点が多々ありますわ、戦闘機と人型への相互変形機構に加え浮遊能力：恐らくは限定的な重力制御技術に加え海中であろうと活動可能であるという桁違いの汎用性、既存の戦術機とは何もかもがかけ離れている推進機関：それだけの機密の塊を用意できるとなると……」

機動兵器はその性能を維持するために使用された技術に見合うだけの設備が必要だ。

例えば斯衛軍専用機 武御雷、この機体は最新技術をふんだんに使用した上に複雑極まりない機体構造と特注の独自規格部品の多使用により整備性など無いに等しくそのため機体整備にそれなりの設備が整った基地と専属の整備士が居なくては機体性能を維持できない。

「なるほど、つまりは裏に組織それもかなりの規模のものがついて

いるということかね香月君」

「高察恐れ入りますわ。」

ラダビノットの言葉を肯定する夕呼、だとすれば反オルタネイティブ？の工作員というのが一番単純明快で簡単なのだが破壊工作が潜入と離脱のみでこちらの被害は装備を除けばほぼないという線からそれは考えにくい。

つまり中立の組織である可能性が高い。

「わたくしの予想では中立派の工作員でありある程度ハイブ反応炉や例の元素に関する知識のある組織となりますわ」

「ふうむ…だとすれば米国の中立派か」

G元素はアメリカが占有しており例外として横浜基地で僅かなG元素を保有しているのみである。

「その可能性が最も高いかもしれませんが斜め上というところで欧州という可能性もありますわ。」

ラダビノット指令もご存じのはず昨年東ドイツ解放戦線のことを、そして東ドイツはアメリカと裏で幾何かの取引が行われていたと噂ですし例の解放戦線後に秘密裏にG元素を入手し解析した可能性もありますわ」

「逃してしまつた魚は大きい　ということか」

「ええ」

本格的に始動したオルタネイティブ？に暗雲が立ち込めているような気がしてならない二人であった。

「なんなのよアイツっ！！！」

ダアンと響く音の元、自分のロッカーを殴りつける一人の少女

「お、落ち着いて水月」

その少女の背後で清楚という言葉を表したかのような頭に白いリボンを結わえた指揮所にいた少女、涼宮 遙が水月と呼ぶ少女を宥めるがその怒りの炎は消えることがない。

それもそのはず戦術機という世界最強の機動兵器を駆って生身の人間に一体が中破、もう一体が大破させられさらに相手が同じ土俵に立った途端に自分は愛機ともどもカウンターの背負い投げで海にドボン

相手に傷一つ負わせることなく敗北したのだ、矜持も何もかもが粉々に打ち砕かれたといっても過言でもない。

特に彼女は負けん気がかなり強いのだ。人一倍を通り越して五倍ほど

その憤怒たるや怒りの籠もった視線で相手を殺せたのなら光線級と真っ向から撃ちあえるだろう。

「みんな無事だったんだから…ね？」

「つまりあたしたちみんな手加減されたってことでしょうっ!？」

ロツカーに拳を撃ちつけたまま床を見つめる。その後部に結わえられた鳶色の髪が垂れるが気にしない。

「あたしは　　あたし達に負けは許されないのよ!!あそこは絶対に仕留めなくちゃいけなかったアイツを　　たとえ命と引き換えにしても　　」

“ パァンっ!!!”

最後の一節を口にした辺りで強引に肩が引かれ振り向かされそして強烈な張り手が真横から彼女のほほを撃ちつける。

「命と引き換えに!?!ふざけないでっ!?!」

風船が破裂した音の残照が耳に残る中、先ほどまで宥めていた遙が声を張り上げる。

「は、遙？」

紅くなり灼熱のような熱さをもった頬を押さえながら聞き返すしかできない水月

「死んだらそれまでなんだよっ!?!私との決着つけないで逝っちゃう気なの!？」

ううん、それだけじゃない私たちの敵は人間じゃないでしょ、相手を間違えちゃだめだよ。

悔しいのは判るけど一人も死ななかつたその幸運を今は噛みしめて！じゃないと本当に道を間違っちゃうよ！！」

汚名を雪ぐのは悪いことではないがそれだけに為ってしまったら道を間違ってしまう。

その果てに自己を顧みずに我武者羅に闘い無残な最期を迎えた衛士を彼女は幾人も見てきた。BETAへの憎しみだけで戦う人間を

そういう負の感情で戦う人間は早く死ぬ。水月彼女にそうなって欲しくないとは遙は常日頃から考えていた。BETAさえ居なかつたら“彼”が死ぬこともなく自分たちが戦場に立つこともなかつた。

水月が奪われた。あつて当たり前の日常に対する復讐心を原動力にしていないと言えは嘘になる。

散って行った仲間から背負った想い、最愛の人を奪った憎しみ

想いを技術と経験と共に積み重ね今の彼女がありそれが打ち壊されたことでそれが侵入者への復讐心にすり替わってしまうのを恐れたのだ。

「……………ごめん遙、少し熱くなりすぎてみたい。決着つけなくちゃね。」

「うん、負けないよ！」

頭が冷えたのか一回目をつむり、再び見開くと同時に言う水月に遙は微笑みながら返す。

「でも、あれって今のところ遙かにか・な・り有利だしね〜」

「え？え？何が？？」

「だって今のところ同年代の野郎どもはみんな軍属の上に女の八分の一……あっちゃこっちゃで取り合いになるのはめにみえてる。」

「うんそうだね…それと私が有利がどうつながるの？」

小首を傾げる遙にからかう様な笑みを携え、下手糞な劇風に水月は語る。

「戦場心身共に不安定になってしまっ彼、そして遙はCPという役職から通信機越しに「大丈夫、あなたは大丈夫私の想いがあなたを守るから」と勇気づける。戦場でいつも心を支えてくれるそんな遙にいつしか惹きつけられていく彼、遙も不自由な両足を氣遣う彼の優しさにいつしか惹かれてね。そして二人は　な〜んちゃつてね」

「水月、それなんて三文芝居？小説の読みすぎだよ」「グサッ！！」
思いつきり胸に遙の言葉の槍が勢いよく突き刺さる。
現実でいえば厨二病と真正面から真顔で言われるようなものだ。

戦場のラブロマンスは意外とあるもんだが如何せんベタすぎる。そもそも彼って誰だ？
極秘任務が多い以上自分は部隊以外の人間と接することは余りない
というのに

という突っ込みどころ満載の三文芝居に内心突っ込みつつ床に崩れ落ちた親友の介抱に精を出す戦乙女のCPコマンドポストであった。

第四十七話 朔月（前書き）

TE入りまあす

第四十七話 朔月

2001年 一月二十九日

帝国国防省 第六会議室

会議室に立ち並ぶ高級将校と兵器開発メーカーの重役たちは緊張した重苦しい顔を並べて元の書類とスクリーンに映し出された資料に目を通しつつ技術士官兵の青年の声に耳をじっと傾けていた。

「案件一〇二 『試験99型電磁投射砲』 に関しては現状のまま、量産を前提に開発を継続する」

議長を務める帝国軍大佐は応答を見守ったうえで結論をだしその上で周囲を見渡し、異議の声が上がらないことを確認すると担当の技術士官とメーカーの重役に領きスケジュールを決めるように催促し次の案件へと進める。

議長からの指名を恰幅の良い年配の将校が外見に似合わないキビキビした動作で立ち上がり案件についての資料をリモコンを操作し大型スクリーンに映しつつ説明を始める。

「案件一二一 『94式戦術機の改修要望』 についてでありますが

『94式戦術機』

順調に各部隊への配備が進む世界初に実戦配備された第3世代戦術

機 不知火のことであり、アメリカ軍F-15 イーグルを徹底的に解析した結果日本独自の戦術理念に沿い新技術を惜しみなく使用した結果完成した機体。

この機体は運用が進むにつれ現場の衛士や整備兵たちからの様々な回収要望が本部へと殺到していた。

通常新規開発された兵器にこういった要望が届くのは当たり前で不知火が欠陥機だったというわけではない、むしろその逆で不知火は近接、遠距離問わずバランスのいい戦闘力を発揮し整備性も良好まさに名機とも呼ばれている機体

だからこそ名機だからこそ細かな回収による洗練されることが望まれたが故に改修要望が殺到したといえる。

「残念ながら、今回ご要望全てを実現するのは難しいと言わざるえません」

不知火開発チームの主任は『94式回収要望』と書かれた厚さ数十センチもある資料にそつと手を置き、冷静な面持ちで発言する。

「ご存じのように94式は、極めて困難な要求仕様を実現するため、量産機としては異例なほど突き詰めた設計がなされた機体です。

従って通常は考慮される発展性のための機体構造的余裕についても極限まで削ぎ落とされています。」

「 であるから、改修は不可能だと? 」

案件を出した帝国将校は顔の前で両手を組み合わせ結論を急かす。

「不可能ではありません、ですが94式を改修しようとする場合、従来機に比べ根本的かつ大規模な改造を行う必要がある、ということとです。当然それを行うには多くの時間と労力を其の為に費やさなくてはならないということです。」

現在帝国で戦術機開発が可能なメーカー河崎・富嶽・光菱の三社は来るべき佐渡島奪回、そして大陸反攻に向けて新型戦術機開発にそのすべてを費やしている。

BETAの圧倒的な物量を上回るために一騎当千を超えた一機当万ともいえる強力な戦術機を生み出す事こそ急務であり、運用に問題がない不知火をわざわざ改修する余力はない

「仮に要求仕様をすべて満たした改修機が完成したとしても自機主力機としての要求仕様には遠く及ばないということも付けくわえさせていただきます。」

不知火開発主任からのダメ押しによって会議室のあちこちでざわめきが生まれ議論が噴出し始める。

「77式 撃震の耐用年数がすぐそこまで迫っている今、何も手を打たずにいるわけにはいかん

「いやしかし、77式の代用として97式吹雪を充てるというのが期衛防衛大綱の」

「主機の換装が必要になる！その上97式は94式の試作型を簡易化したものだ。基礎設計が同じである以上97式もすぐに行き詰まる！！」

「必要な機体が国内調達できない以上、外国機の導入も検討すべきですな」

「なにを言う！対BETA主力装備である戦術機は国産であるべきだという結論はそれこそ94式開発時において」

「議長」

各々が好き勝手に発言を繰り返す中、それまで沈黙を保っていた一人の将校

帝国軍技術廠・第壹開発局副部長である巖谷いわや 榮二中佐えいじが発言許可を議長に求めた。

円卓の席から着立する彼を円卓に座った全員が口を噤み固唾をのんでみる。

巖谷 榮二彼はこの中であって若輩に当たるが期衛から帝国軍へと移籍し大陸の勇戦にて多大な戦火を上げF-4改修機である瑞鶴を

駆りアメリカ軍F-15イーグルを打ち破った生きた伝説のテストパイロットさらには不知火の開発にも携わるなど日本で戦術機開発に携わる者ならば知らぬ者はいない猛者である。

そんな彼は同席する将官たちから見てもかなりの傑物でありその精鍛な顔立ちは左額から顎にかけてまるで稲妻が奔っているかのような傷痕が自戒の為に残されており彼自身が発する武人としての気配イラと相まって相当な凄みを発する。

巖谷は周囲を一瞥するとゆっくりその口を開く。

「小官に一つ愚策があります。」

不知火を回収要望に応えるのではなく全く別の機体として生まれ変わらせるというのはいかがでしょう?」

「どうということかね巖谷君?」

「皆さんご存知の通りイーグル初期型、俗にいうA型はその機体性能を万全に発揮するには主機推進剤、燃料電池等の出力不足により不可能でした。これは機体の進化とは別にエンジン・燃料電池の発展が追い付かなかったことが原因です。」

「……………皆さんはこれによく似た事例をご存じのはずです。」

「そうか!!不知火壱型丙 Nタイプか!!」

不知火の性能向上を目的として開発された機体である壱型丙主機容量拡張、カーボンツクアクチエーターレイアウト変更による即応答向上、フレーム強化、跳躍ユニット主機高出力化を施され、ハードウェアを改良した派生機である。

稼働時間が想定よりも短いという欠点を得てしまったこの機体、まさしく不知火の原型となったF-15イーグルの初期型と同じ欠点を持っておりこれをなんとかするため省エネ機能を搭載した新型OSを採用したがこの機能が操作系に干渉し壱型丙の機動特性を劣悪なものに陥れてしまった。

しかし日本への大規模BETA進行という危機的状態に際し専用OSを通常のOSに載せ替えたNタイプが100機ほど生産、実戦へと投入されることとなった。

実戦では燃費の悪さを操縦技術でカバーできる熟練衛士に優先的に配備されその高い近接戦闘能力・生存性を証明する。

巖谷が明星作戦で使用したのもこの不知火壱型丙 Nタイプである。

「しかし、いま必要なのは早急に代替え可能な戦術機だ…燃料電池やエンジンの製造技術の向上を待っている余裕は我らにはないぞ巖谷中佐」

この案件を上げた帝国将校が唸る

「そこでアラスカで行われるプロミネンス計画です。我々が今すぐ用意できないのなら他国にその部分を求め組み込めばいい、さらに他国の技術を全体的に組み込むことで来たる反攻作戦において新型戦術機にとって代わるもしくはその技術を礎にさらに強力な戦術機を開発できる。

我々がF-15J陽炎から不知火や武御雷を生み出したように」

ロシアとの国境に建設されたアラスカ国連基地では各国の新世代戦術機開発における技術的な壁を各国の技術を公開・共有することで

打破する目的の元行われる戦術機改良計画
それがプロミネンス計画である。

「確かにアメリカはエンジンや燃料電池といったデータ蓄積が肝となる技術は他国より数歩リードしている…しかし」

足りていない基礎技術、しかしそれをアメリカに求めるのが腑に落ちない様子の帝国将校

いや、彼だけじゃない、ここに居る全員が似たような心中である。いくら条約上問題がないとはいえ彼の国は国民ごとBETAを焼き尽くす戦法を強行しようとした上に事前通告なしに撤退した上にいる強行かつ傲慢な行いをしている。

半ばアレルギーにもなっているのだ帝国軍を含めた日本人の外国嫌いは

心が一つとなる議会場は沈黙に包まれるがそれを打ち破る存在が居た

「ならば彼の国ではなく欧州というのはどうですか？」

突如として会議場の陰からすうと現れる一人の男性

「鎧衣課長…：…問者がここに如何な要件だ？」

「おやおやとんでもない…：…私は皆さんにとって最良の選択肢を揭示しに来たというのに…：…」

明らかに嫌悪を込めた視線と物言いをする将校におどける鎧衣は思わせぶりの言葉を発する。

「鎧衣課長、最良の選択肢とはいったい？」

その思わせぶりな口調から何かを感じた巖谷は鎧衣をまっすぐに見据え問う。

彼の脳裏に引っ掛かるキーワードが鎧衣の言葉に含まれていたのだ。

“ 欧州 ”

明星作戦においての欧州との共同戦線……といっても中隊規模だがその規模に見合わない戦果を挙げた戦術機部隊、その片鱗を自分は一瞬に目にしている。

「まあ、論より証拠これをご覧ください」

鎧衣は愛用のコートのポケットからリモコンを取り出すとモニターに向けそのボタンを押す。

すると大型モニターが切り替わりある戦場の光景が映し出される。

「なんと……」

「これは……」

「信じられん！」

円卓に並ぶ将校と重役たちは驚愕の声を上げるのみ

それは東ドイツ解放戦線の記録映像

たった一機で中隊規模12機のソビエト製戦術機を圧倒する二刀流を扱う青紫の機体の映像

彼等は戦術機という兵器を運用するためそれがどういふものか熟知している、熟知しているからこそその光景が信じられない。

「長刀を片手で、しかも跳躍ユニットが存在しない！」

長刀は手腕の関節強度・トルクの観点から長刀を片手で扱うことは出来ない。さらに二刀流、不知火に搭載されたOSとは桁違いの重心制御能力、明らかに慣性を無視したような理想的な機動しかし彼らの驚愕はそれだけに留まらない。

「…何かがおかしい、機構どうこうとは何かが違う…：いったいなんだ？」

将校のうち一人がその豊富に蓄えられた顎鬚をなでながらつぶやく。

「モーションパターン 予定動作です」

その疑問に答えたのは巖谷だった。

「この機体は既存の戦術機がワン・モーション一動作ごとにしか動けなかったのに対してこの機体は止まらない無限に動作が続いている。

こんなことはリアルタイムでモーションパターンを書き換えないと不可能です、それに加えこの機体は生きた動きをしている…まるで人間がその手足の延長線上で動かしているように」

戦術機に関する機構も戦術も特性も熟知している巖谷だからこそ、その決定的な違いを認識できた。

一定の動作しかできない戦術機を上回る動作柔軟性、新技術を用いられた機体本体だけでも魅力的だがこの動作を実現させるシステムがあるだけで不知火は次のステップへといける。

円卓に並ぶ将校たちの胸中にこの技術が自分たちのものにできないか？という思いが渦巻くのは至極当然の帰結である。

「さて、みなさん私が示す最良の手段とは即ち、欧州に不知火の改良を依頼するというものですか？幸い、向こうには借りがありますしね？そして同時にアメリカにも不知火の改良を依頼し二者を競わせるのです。」

「欧州に依頼するのはともかくなぜアメリカにも依頼しなくてはならないのだ？」

鎧衣の最後の一言に片眉を上げ怪訝な表情をする恰幅の良い帝国将校

「この議会の案件は94式 機体名称不知火の改修ですが先ほどどなたか仰られたように77式 機体名撃震の代替えとなる機体を用意するというのも急務です。

すなわち同じ機体をベースに異なる機体を生み出させることでそれぞれの要望を一度に満たさせてしまおうということを愚考するのです。」

「なるほど…二者を競わせることで機体は完成度を上げつつライセンス料の低下を狙え、しかも不知火の生産ラインを流用可能とすることで配備までの時間の短縮さらにはHi-Low Mix構想のHiとLowを一度に備えようというのか」

鎧衣の狙いを悟った将校が大きくうなずきながら納得の意を表す。

「ほう、断片的な情報から利点を一気に叩きだすとはなかなかの慧眼…恐れ入りますな」

鎧衣は不敵な笑みで参ったと言わんばかりに肩をすくめ、そして巖谷に向けて意味深な目配りする。その視線の意味を読み取った巖谷は鎧衣に頷く。

「議長」

巖谷は再び議長を見据え、周囲を見渡した後に発言する。

「私は日本戦術機を諸外国の技術により強化する計画
ロス O S S フュージョン F u g h n y n ジャパン J a p a n …… 【X F J 計画】を議会に
提案します。」

3日後 2001年2月2日

帝国国防省戦術機技術開発研究所

ここでは一機の黒い戦術機が運び込まれハンガーへの固定作業が行われている。

腰部と肩部を分厚いアームに固定され装備した跳躍ユニットをが収納器によって固定され機体の腰から取り外されていく

その戦術機は武御雷ではあるが他の武家専用機である武御雷とはあまりに違う頭部を持つ武御雷…俗に言うC型だがよく見ると所々に不知火のパーツが垣間見えたり微妙に異なっている。

やがて完全に固定された武御雷の胸の前に通路が降下し、武御雷の

黒い装甲が開き中から管制ユニットが迫り出してその内部の操縦席が照明の元照らし出される。
其処に座るのは山吹色の強化服に身を包んだ長くきめ細かな黒髪を持つ女性衛士

「篁中尉！！」

篁 唯依であった。

迫り出した管制ユニットとちょうど凹凸のように組み合わさる形状の通路を一人の整備兵が金属の反響音ともに駆け寄る。

「どうでしたか、この普及型武御雷は？」

「やはりF型に比べ長刀を振った際の脚部の安定性に少々難があるように思うのとやはり武御雷ほどの即応答性と柔軟性は望めないらしい…個人的にはだが〇〇式短刀がオミットされたのは少々使い勝手が悪い」

管制ユニットから足場へと黒い髪を靡かせつつ唯依が感想を述べていく。

「まあ、試作機ですしね…武御雷に整備性と汎用性を付加するには幾らか機能をオミットしなければなりませんからね。」

普及型建御雷、従来の武御雷と比べ独自規格部品を国際規格に準じたものに換装し上腕およびサブアーム、手首足首など比較的、重要度の低い部分を下位互換機である不知火に交換したものである。

「〇〇式短刀を手首側だけでも装備したほうがよいと私は思っな」

「開発部に進言しておきます。」

手元の端末に唯依の意見をメモしていく整備兵、不意に彼が唯依の後ろを見るなに身を強張らせすぐさま敬礼をする。

「取り込み中すまないが……君、少し席を外してくれないか」

振り返る唯依の耳に聞き覚えのある声が届き、目には整備兵に向かい敬礼を行う巖谷とその半歩後ろで同じく敬礼を行う自分が身に纏う強化服と同じく山吹の期衛軍服に身を包んだ黒髪を首元で白い紐を用いて結わった大和撫子を絵に描いたような女性が目に映る。

「中佐！それに藤原大尉！」

「お久しぶりですね篁“中尉”」

「はっ！大尉もご健勝何よりです！！」

柔らかな笑みと共に敬礼を送るその女性軍人に唯依も敬礼を返す。唯衣が巖谷達の敬礼に反している間に退出する整備兵。

「中佐に藤原大尉がいらしたということは先日の会議のことでしょうか？」

「うむ……」

「　　っ！！」

唯衣がからかわれたことに気づきその頬はみるみる紅葉のように赤くなっていく。

「ふふふ…まあまあ、こんなに朱くなってしまって、叔父様少々悪戯がすぎますよ？」

巖谷は日頃から単刀直入な物言いをいする。それが経過をくどくど話すなど何かを意図している以外有り得ないのだ。

「おいおい、君もずいぶんと乗り気だったじゃないか！」

「それはこんなにかわいい唯依の姿が見られる絶好の機会見逃すはずありませんわ」

目の前の談笑する二人に向けて何とも言えない複雑な表情を晒す唯依そんな唯依の表情を見た巖谷は言う。

「確かにな、唯依ちゃんそれにしてもその反省癖そろそろ卒業したらどうだ？お前さんは親父さんそっくりだが、そういうところはまだまだ修行が足りんな」

「それはだめですよ叔父様、唯依のこういうところは乙女の特権です無くしてしまったら惜しいです」

「ふははははっ！！！！違くない！」

「中佐、大尉…」

二人の討論の内容とその題材が自分であるということころでものすい

く気が重くなる唯依が【もう勘弁してくれ】というニュアンスを込めて二人を呼ぶ。

「おいおい、せつかく人払いしたんだ。巖谷の叔父様でもいいんだぞ？」

「私も普段のように美沙都姉様でもいいのですよ？」

そういつて笑い続ける二人に唯依はこの二人には叶わないと思う。乳飲み子の頃より唯依を知り、実父をなくし途方に暮れていた自分を本当の姉のように支え困難にぶつかるたびに自分の力で乗り越えられるように見守り、父の代わりに自分を育て鍛え上げてくれた恩人たちなのだ

「さて、実はなくどくと説明したのには理由があった」

「理由……？」

反復する唯依の言葉に頷く二人、それと同時に二人の顔に軍人の厳しさが宿る。

そして威厳を伴った口調で巖谷が口を開いた。

「大原大尉、篁中尉。貴様等の戦術機に対する知識と技能、そして国産機に懸けるその想いと熱意を見込んで特別任務を与える」

「はっ！」

「はっ！……しかし特別任務　でありますか？」

美沙都と唯依の二人の復唱、しかし唯依は巖谷の指令が飲み込めず聞き返してしまう。

「そつだ貴様等にはアラスカへ飛んでもらつ」

「アラスカ………!？」

第四十七話 朔月（後書き）

藤原 美沙都

半ばオリキャラ、原作で第一独立北方中隊の隊長を務め寒冷使用の武御雷に乗っていた人

苗字と出身武家しか情報がなかったため殆ど後付の設定をしたオリキャラになってしまった

ユウヤのヒロインとしてステラ&中華娘を含める三人が候補でまだ決まっていない

唯衣の姉的立ち位置

外伝 直死と時の皇（前書き）

ちよつとづつ書いてたのが溜まったのであげときます

外伝 直死と時の皇

私は夢を見る

流れるように過ぎ去って行ってしまった大切な人との思い出
もう、その先がなくなってしまうた物語り

私は、語りを遮りながら、出鱈目（ＩＦ）を織り交ぜながらゆっく
り風変わりな出来事を映し出し

在り得たかもしれない物語りを私に魅せる

それは不定期に私を楽しませ、心を癒し、救いが在るような錯覚を
覚えさせる。

だけど、それは、想像するほど、創造するほどに私の心を蝕む
時の流れが思い出を徐々に劣化させ、あの人の顔をぼやかしていく

今はまだ、

今はまだ……………覚えていられる。

だけど、あなたと共に生きられないのが

共に駆け抜けた景色が思い出になってしまったのが

悲しい、哀しい、かなしい

この身を捕らえる千の鎖が冷たくて

千の城の玉座が冷たくて

何よりこの孤独と、時折見るあなたの隣に私が居ない…

あなたの笑顔は私の心を癒やすけれど、同時に私の心を凍てつかせる

寒い… 怎いよ……… 志貴

私は、ますます心が凍える事がわかっていながらそれを止められない
星を通して彼の姿を見る

774

なんで？

星から送られてきた彼は辺り一面の死体が転がる丘である… 代行者
の、先代ロアの女と共にいた…

とあるモノと相對して

だめ！！

それは人間の勝てる… いや、どうにか出来るものではない

やめて！！ 志貴！ 死んじゃう！！

星の血栓、負の思念集積体を己が身の一部として取り込み武器とし

て振るうも一つ一つの真祖
月の民が月のアルティメット・ワンの複製品なのに対してあれは…
対アルティメット・ワンの超攻性免疫抗体

時の民

精霊王の一族、同時に星霊王の血さえ受け継ぐ彼は異質にして最高峰
人間がどうにか出来るようなモノではない

愛しい男性おとこの死、それが明確に浮かび上がってしまう。

制御できない感情の本流が私の中に渦巻く

そして鎖が砕ける音が聞こえた。

番外編 死と時

赤と金、魔を表す二色の残光…赤は血に飢えし獣を意味する生粋の
魔を表す色

金は魔眼にして魔眼にあらず祖は神眼

蒼：本来清いモノを表す色だがそれがもたらすのは漆黒の“死”のみ

その普通から乖離した超常の瞳を持つ二人が交差する。

「……………」

「閃っ！！」

“キーン！！”

月のみが照らす丘で火花が散る。

月の明かりを受け鈍い光を放つ短刀：七夜と闇の中においてその輝きを喪わない風の刃と月の明かりさえ反射しない漆黒の闇風の刃が二刀を操り高速で立ち回り、その不安定な重心を利用し変幻自在に立ち回り斬撃を放つ金と赤のオッドアイの黒ずくめの青年

東雲 亮

対して、ただ異様：東雲が旨いのに対して異様：

東雲が風ならば彼は蜘蛛

人の意識の死角を付きながら、蒼い残光を残しつつ移動し、閃光の如き斬撃を放つ

同じく黒ずくめに青い瞳を光らせる、遠野志貴

「その体術…貴様、七夜の生き残り…か…」

「……………」

亮の言葉は自意識を極限まで薄め、殺人衝動により遠い忘却の果ての修練を浮かび上がらせ、一つの殺人マシンと化した志貴には届かない。

更に二つの閃光を纏った異なる闇風が交差する。

“キーンっ！！”

「……………」

「言葉さえ喪つたかつ！！」

嘲りを含めた怒声を放つ。

自分と同じ退魔の一族…中でも七夜と亮の生来の一族“青龍”はあらゆる意味において対極をなしていた。

青龍家は退魔というより守護を前提とし、魔性の存在でありながらその実対極な力をもつ一族でありその力は魔なるモノにしかな影響を与えない式典や方術を人の属性故に受け付けられない混血であろうと例外なく葬り去る。

人を捨て特別になりながらも人間らしさを喪わず、それゆえに力を発揮する一族

対して七夜は混血のみを対象にした退魔の一族であり、暗殺の一族だ。

人間で在りながら特別に至るが、その過程で人間らしさを捨てた一族この二つは永久に相いれない。

さらに、この二人は内面的にも在り方も対極をなしている

遠野 志貴に好感を持つ人間は多いがその実彼が持つ濃厚な死の気配故に皆近づこうとはしない、志貴自身善人の人格を為しているがそれは後付けのモノでありその根底には世捨て人的な思考が眠って

いる。

対して亮は、その過去から逆に表層に世捨て人的な人格を形成してはいるがその根底はどうしてもぬぐいきれない、人の良さが眠っていた。それは復讐相手の息子であるキリツグに対して手を出していない事から窺う事が出来る。

つまりこの二人、表層人格と潜在人格が完全に逆なのだ。

更には得物にも言える

短刀それは暗殺において如何に相手に気取られずに殺すかという部分においては最適だろう。

二刀、亮がそれを選んだ理由は、いつか自分が守りたいモノが出来た時一つの剣では一つしか、己の身しか守れない。つまり己を含めた何かを守る際には二つの剣が必要という思いから派生している。

778

幾度もの交差、そのたびに地面が爆ぜ砂塵を舞いあげるも鋭い剣閃が砂塵のカーテンを切り裂き、その剣風がまた新たな砂塵を舞いあげる。

お互いが互いに一撃必殺を放つもの二人とも高度な未来予測と超直感故に未来を読んでいるため相互に回避される。

“ダっ！！”

同時に二人が砂塵と剣風の嵐から離脱する。

「……………機械の様な人間は見るに堪えん、此処で終われっ！！」

龍魂：覚醒っ！！」

志貴の感情を亡くした瞳を鋭い視線で射抜いていた亮の瞳の瞳孔が縦に割れる。

周囲に魔力の本流が吹き荒れ物理的な干渉を起こすほどの高密度の魔力、龍族のみが使う事の出来る魔力が亮の周囲に渦巻きコートをはためかす。

「刹那の間に鳴り響く鋼の鎮魂歌レクイエムの内に眠るがいつ」

亮は地面を踏み砕き爆発の如き砂埃を巻きあげながら、志貴に迫る。右手の颯を投げ捨て、疾風を肩に担ぎ両手持ちに変える。

「……貴様八邪魔ダ……」

志貴の蒼い瞳から赤い線が…血涙が流れ出る。

亮の死を理解しようとして脳に過負荷がかかり毛細血管が破裂したのだ。

極死：七夜

飛奏

互いに死の風と化した二人がぶつかり合う、志貴の眼が捕らえる死は何者で在ってもしても逃れる事の出来ない死をもたらす

亮の一撃は空間さえも切断するほどに研ぎ澄まされた一撃、龍の魔力と風の魔力を纏い放たれるそれはどのようなものであるかと破壊

を与える。

この後に待っているのは……どちらかあるいは両者の死という結末……

ではなかった

「ぐっ!!」

突然、二人の間に衝撃波が奔り、次に瞬間には黒刀を握った亮の左腕が宙に舞った。

「あ……」

「あなたはっ!!」

宙を舞っていた左腕が墮ちると同時に二人は驚きの声を挙げる。

真っ白なドレスを身にまとった永遠を象徴するかのように静かにたたずむ

金色の髪の子

まるで月が人の形を取ったような儂さと静かな明るさを纏った女性

アルクエイド・ブリュンスタッドその人だった。

「ア、アルクエイド……」

遠野志貴の瞳から血涙を洗い流す滴が溢れる…止め処なく求め続けた

求め続けていたそれが眼の前に愛して、愛して

狂おしいほどに愛した愛おしい女性が

眼の前に…居るのだから…

志貴の顔は笑顔なのか泣き顔なのか既に判別がつかないせつかく愛おしい人が眼の前に居るのに景色がぼやけてはつきりとは見えない

ただ景色をぼやかしているモノを止める事は出来ない

志貴はアルクエドに向かって一歩歩を進めようとする。

「アルクエイド…会いたかつ

」志貴…それ以上…来な…いで…お願いだから

志貴はアルクエイドの拒絶の言葉によってその出そうとしていた一歩を止める。

「
っ……………!」

アルクエイドの雄たけびと共に彼女の瞳が金色に変わる

そして、彼女が地面を蹴ると同時に地面が爆ぜ、音速を超えて亮に迫り

“ザアアアアあんっ!!!!!!”

狂爪が切断された腕の断面を押さえている亮に振り下ろされた。

“ダ
ンッ！！！！”

「くっ！！」

亮はその狂爪の一撃を右手一本で掴みこらえる。地面に足がめり込み蜘蛛の巣状の罫が奔る。

「月の姫…と、言うことはその七夜の小僧が殺人貴…ということか」

「
っ！！！！！！！！！！」

亮が掴んでいる腕に力が押し込まれ、地面の輝を押し広げる。

徐々に押し負け狂爪が亮の頭部を抉り砕こうと迫る。

「……仕方がない…か、【獣神変】っ！！！！！！」
「っ！！！！！！」

亮の腕…いや、全身に血管が浮き出ると同時にアルクェイドは全力で掴まれた腕を振り払い離脱する。

亮の千切れた左腕から蒼い炎が噴きでて新しい腕を作り出し、それだけにとどまらず全身を炎が覆う。

天を衝くような巨大な蒼炎の柱

それは逆巻くように渦巻、まるで天へ螺旋階段が伸びているようで

ある。

そして炎の中の人影は徐々にその姿を変える。

“ ジャアアアアン ”

炎の柱を内側からその鋭利な爪で引き裂き、連結刃のような三本の尾で切り裂きそれが顕れる。

体を覆うマグマが冷え固まったような質感を持つ固体の炎を連想させるような青黒い竜の甲殻

その重厚な気配はそれを纏う存在が超越者であることを知らしめる。

その背後でゆらゆらと揺れるのはあらゆるものを切り裂き、削り取る三本の連結刃に酷似した尾

そしてアルクエドと同じく金色に光輝く双眸

そしてその存在は体中から白い湯気を上げながら名乗りを上げる。

「輝竜戦鬼 闘牙

ここに現臨

っ！！」

第四十八話 龍神の灯火

2001年一月31日 イギリスロンドン 皇座の間

奥へと延びる広大な空間の奥、左右を守護兵が立ち並ぶその奥にある玉座に座り腕を組みつつ膝をつき臣下の礼を取る亮を見下ろす金髪に日に焼けた小麦色の肌を持つ30ほどの男性、イギリス皇帝ピオニー9世

「以上の観点、状況予測からBETAは云わば宇宙規模の癌腫瘍であり殲滅という手術が必要です。」

「そうか、ご苦労だったなシノノメ だがな…その態度やメロお前が素直にやると気色悪い」

いきなり癖癖した様子で腕をシッシと振り亮に態度を普通にしろと言っ。

「はあ……全く失礼な皇帝だ、こっちが態々臣下の礼を取ってやったというのに」

先ほどまでの雰囲気はどこへやらと亮も立ち上がり腕を組みつつ斜めに構えジト目で皇帝を見据える。

「で物的証拠がない以上、状況証拠だけで欧州諸国を動かせるのか？」

亮は皇帝の騎士としての位を持っているとは思えないほど気安く語

りかける。

「ああ、議会のジジイ共は煩いだろつがBETA駆逐という目的は欧州全体の意志だ。」

第4世代機、PTそれにペンドラゴンを始めとする海空宙航行可能な万能機動戦闘母艦…これだけお膳立てが揃ってるんだ体制さえ整えれば各国も動くだろうな。」

組んでいた手の内片方を顎に添えピオニが語る。

「日本やソビエト、中華統一戦線とかはどうだ？」

「中華のほうは方舟とシリウスを三機ほど送ったら協力すると言ってきた、ソビエトはあの国はどうも好きになれん、日本は丁度いい申し出が来た。」

「丁度いい申し出？」

怪訝な表情の亮にニカッと陽性の笑みを浮かべる。

皇帝というすべてを背負う重圧の中でこのような生きた笑みを浮かべることのできる人間は強い故に皇帝としてそして
奏者として選ばれたのだろう。

「そつだ、タイプ94…不知火をお前さんのもたらした技術で改良してほしいとの事だとき。」

まあこつちはECTSFを作るときに技術提供を受けた借りがあるんだが開発終了後に共同戦線の展開を提案したら快く受け入れてくれたぞ。」

「…担当は？」

「なにを寝ぼけたことを言っただけでやがる、お前がやるんだよ、あんな出鱈目…もとい高等な理論を理解しているお前がやらんで誰がやる？」

「いくらでもいるだろう？」

新武装の改良、開発はもはや亮の手を離れており放っておいても技術部が開発を続行している。幾つかの基礎設計プランを時折提出するか協力を求められたときに知恵を貸すくらいだ。

「だからだ、正直お前さんが一番手が空いているだろう。」

「俺はさつき帰ったばかりなんだが？せつかくイギリスのまずい飯に舌鼓を打とうと思っていたのだからな」

露骨に『どこが手が空いている？』という皮肉を返す。

「自分で作って食べ、ダッスオーとユーロフェイスのほうに通達は行っている。」

ナイト オブ ??? リヨウ・シノノメ アラスカへ出向し X F J 計画に参加しろ」

突如として王の威厳を醸し出す声によって告げられる命令、亮自身は皮肉を言っただけでいるが最初から断る気はなかった。なぜなら目の前の男は王が持つべき先見と度量を持っており自分より広く情報を扱う目の前の男が必要だということは其処に隠された重大な意味があるはずだからである。

(行って自分で確かめる というわけか)

「はっ!!! X F J 計画参加の任謹んでお受けいたします。」

亮は跪き頭を垂る臣下の礼を取り復唱を返すのだった。

第四十八話 龍神の灯火

それから1カ月後 アフリカ ダッスオー戦術機開発研究所

「不知火壱型丙……か」

ハンガーに固定され、装甲版が引きはがされた上に手足を外された鋼の標本を呈する不知火壱型丙であったもの。

その様子は獣に喰い散らかされた死体を連想させ、忙しく駆け回る整備兵が死体に沸いた蛆を連想させる。しかし確実に不知火は新たな力を得た自分へ組み上げられ、再誕へと進んで行っているのを感じれる。

そしてその機影を見上げる亮、不知火に関する資料はブラックボックス部分も含めて手元に資料として届いてはいるが如何せん実物がなければ改良するにも手を付けられない。

故に日本からお蔵入りしていた素体となる機体が届いた。それが次期主力機開発用として保管され電磁投射砲の運用テストにも使われた二機の不知火型丙そのうちの片割れである。

「シノノメ中佐、こちらの機体は事前に指示のあった通りのパーツに換装を行うのでよろしいですか？」

「ああ、問題ない」

整備班長に問いにこたえる亮

不知火の基礎設計データを基に設計した新型モジュールの制作をダッスオーとユーロファイタス社に依頼しており、ダッスオーが開発した新型モジュールと内部パーツに交換しその後のアラスカへと輸送しテストと細かな改修が行われ、本体があらかた完成を見たところでフェイズ2となるユーロファイタス社に依頼しておいた新装備を装着し機体調整を行う予定である。

「篁…唯依…：…か」

手元にある資料の内目の前にある機体に乗るであろう人物の資料に目を通す。

（二十歳で中尉…なかなか優秀な人材のようだな）

テストパイロットはその国の実情を正しく理解しなおかつ機体特性を即座に理解しそれが最適かどうか判断できる人物が必要となる。

（アメリカの気がしれんな…いや、何かを企んでいると考えるべきか？）

資料を見つめながら何やら難しい顔を作る亮

もう一機のXFJ計画で作られる機体のテストパイロットがアメリカ軍人なのだ、実戦など験したことのないただのルーキーにこの役が務まると亮は考えていない。

そうでなくとも自由と正義の国はここ十数年でBETA戦役の影響が優秀な為政者は暗殺や失脚を繰り返し今やそのトップの座は愚者の巣窟となっている。

単純に言えば力でのごり押しとしゃっぽを巻いて自分たちだけ逃げるかのどちらか、そうでない者たちもそういった者たちに敵対した途端に毒蜘蛛の罠に掛かりろくでもないことになるという状況が出来上がっているため碌に動けない。

そんな中アメリカが強固に自国の兵を日本で使う戦術機のテストパイロットに推したのだ何かあると考えない方がおかしい。

（開発主任はフランク・ハイネマン……戦術機開発の鬼、ならば策略というより抜きん出た素質を秘めたものであるという可能性も捨てきれん）

彼の経過は大雑把ではあるが欧州の諜報部や鎧衣からの情報が来ていた。そして亮は行動から彼の思考をトレースし人となりを予想していた。

（奴の思考はアードラーやイーグレットに近いものがある……油断できない存在だ）

俗に言うマッドサイエンティストに近い存在、己が目的＝欲求の為に手段を択ばない人種と中りを付けていた。

こういつた人種は時折、想像もつかない狂行に走る。

マッドサイエンティストにアメリカ、ソビエト各々の思惑が複雑に絡み合う地、アラスカ

どう転んでも波瀾万丈な行方が待っているとしたか感じられない亮はため息を突きつつ自分が基礎設計を行い生まれ変わらせた機体に視線を向ける。

「不知火…いや、蜃気楼お前はどう思う？」

剥き出しの複眼を晒す不知火が答えることはなかった。

それからさらに数日後、亮はアラスカの大地に広がる針葉樹の森の上空を巨大なジャンボジェット機も容そのままにさらに一回り大きな戦術機カーゴを左右に一つつつ背負った輸送機、ムーリヤの座席に座り外を見下ろしていた。

貴重な酸素の供給減であるアメリカ大陸、しかしここはBETAに土地を追われた者たちが逃げ込んだ文字通り“最後の楽園”であり数多くの難民が居座るが故に数多くの社会問題が発生している楽園からかけ離れた楽園であった。

（部隊はシルヴィアに預けた、アイツも2年もたつて経験を積んで十二分に役割を果たせ）

窓からいまだ人類が抗い続けている証である広大な森林をを見据え

ながら物思いにふける亮だがその背後で“もしかもしゃ”バクバク
“といった咀嚼音に顔を顰める。

「いい加減静かに食べ、月砂」

「ん？だって美味しいよ？食べたいように食べないと損損！」

後ろでは口元に大量のクッキーの屑やクリームを付けた月砂が居た。
アメリカで一回補給で降り立った時に大量に購入した菓子類を貪り
食っていたのだ。

アメリカはイギリスと違いBETAの脅威がないため養殖だが天然
の食材が手に入る。

食に人生の7割を賭けている月砂にとって合成食品の食事は耐え難
いものだったのだ。

「限度というものがある」

「？この程度じゃ私お腹壊さないよ？」

一瞬の眩暈を感じるが頭痛によって現実を引き止められる。

ストッパー役である刃菊が居ないため、このあーぱー式神の行動は
亮のSAN値をがりがり掘削していつているのだ。

「…お前本当に精霊種かよ」

「大地と人との盟約を司る真祖ですから事食べ物にはうるさいんだ
よ」

受肉化した精霊種である月砂は実は真祖と真逆の属性を持つ存在
吸血鬼が人と自然の調停を司るのに対して月砂は人と自然の調和を
司る、

余談だが

月砂や真祖、サーヴァントなど受肉化した幻想種の肉体は人体とは左右逆の物質構造を持つ光学異性体であり通常の食事では活力を補給できないため、星からの力をサーヴァントの場合はマスターからの魔力供給を受けその物質構造を保持している。

つまり物質構造とそれを保持している力の種類を見ればその存在がどういったものかを知ることができる。

「そうか…ならぞんぶんに貪り食って丸々と太ると良い」

「それ、レディには禁句！！」

「レディ…（フッ）」

「鼻で笑われたっ!?!」

後ろでショックを受けている月砂を放置して亮は再び窓の外を見やる。

するとアラスカ国連基地が地平線の彼方からだんだん近づいているのが目に見え移る。

「何か演習しているみたいだね？」

「割り込むな…確かにそのようだな」

後ろから強引に顔を割り込ませた月砂に文句を言いつつ演習用の広大なスペースを動き回る機械の人型を見やる。

JIVESによる仮想演習によるもので敵の姿は見えないが其の機

動などから対BETA戦を想定したものだ と理解できる。

パツと見、無様なパントマイムに見えないことはないが中に居る衛士は真剣そのものだ。

ふと、亮の視線が一機の浅黒く塗装された不知火によく似たフォルムを持つ戦術機をとらえる。

機体感覚を掴む為に備えられた剥き出しのフレームが印象的な肩部モジュールや頭部アンテナを二本から一本へと削減し様々な機能を簡略化したようなフォルム、97式高等練習用戦術機 ”吹雪” だった。

「無様だな……」

思わず口から洩れる感想、つんのめって転倒しそうになったりするのを跳躍ユニットによる力づくの修正で何とか持ちこたえるがふら付いている。

例えるならいきなり補助輪を外された幼稚がどうにかバランスを取りながら自転車をこいでいるかのような機動

他にも残弾確認ミスや危ういバランスでふらふらしているが故に弾道がぶれているあれでは到底狙った場所に当るはずもない。

そして弾が底を突き突撃砲を投げ捨てる吹雪が長刀をつかみ振るうがそのあと派手に転倒しそのまま動かなくなる恐らくは大破判定を受けたのだらうと思いたる。

「本当に無様だな……機体が泣いている」

亮の嘲笑と悲壮を込めた弦音が漏れ出るのだった。

第四十八話 龍神の灯火（後書き）

題名の【龍神の灯火】は不知火の別名といるるかぶせた結果

ちなみに不知火とは屋気楼の一種でもある、

日本戦術機は天候に関する文字を付ける法則がある

武御【雷】

吹雪 まんま

不知火 まんま

陽炎 まんま

撃【震】 たぶんこの文字

第四九話 邂逅

「ブリッジス少尉、少しよろしいですか？」

演習が終わりハンガーに固定された吹雪の管制ユニットからリフト車のキャリアーを使い降り立ったユウヤに国連軍服を纏った藤原大尉が語りかける。

「は、何でありましょうか大尉殿」

格納庫の入り口から差し込む夕日を背負いながら語りかける上官にユウヤはいかにも不満たらたら様子で答える。

それに対する藤原 美沙都はいつもの柔和な笑みは消え失せ鋭い視線をユウヤに注いでいた。

「今回の演習、どう思っていますか？」

「は、最悪ですよ、大尉」

今回の演習はソビエト、俗に言う東側に恥を晒しただけの結果となっている。同時に同じ内容の演習が行われたソビエト側はユウヤ達よりも少ない戦力であるにもかかわらずBETAを殲滅できていたというのだからなおさらだ。

それに加えユウヤの精神を大いに摩耗させたのはあらゆる米国製戦術機を完全に乗りこなしてきた自分が嫌悪してやまない 日本 の戦術機、しかもたかが練習機に始終翻弄されていただけで終わってしまったというところだ。

「貴方は吹雪の挙動に戸惑っていました。乗りなれていない、しかも根本から開発理念の違う初めての機体では仕方のないことかもしれません。」

テストパイロットに選ばれただけあって自分なりの矜持を持っていることを悟っている藤原が一語一語言葉を選びつつ語りかけるが、その気遣いに気付くほどユウヤに精神的余裕はなかった。

「しかし、機体特性を理解していれば乗りこなすはさほど難しいことではないはず。そのための練習機なのですから」

「お言葉ですがね、藤原」

大原の言葉に噛み付くユウヤ、整備兵たちの視線が集中する。

「“米軍機”であれば問題なく行えた挙動ばかりだ!!」

「続けてください。」

「吹雪の主機出力は圧倒的に不足しています。ピーキーな機体特性に噛み合ってません。実機動に対応できない機体なんて問題外ですね。」

「……………」

「俺はF-22の運用試験もやりましたが、本物の第三世代機は“あんなの”とは別次元ですよ。吹雪があれば、直系の不知火も期待薄ですね。」

次々とユウヤの口から出てくる吹雪…ひいては日本戦術機に対する不満。

つまりはF-15イーグルに劣悪な改造を行った欠陥機だったからこそ自分は醜態を晒したのだとユウヤは言っていた。

「自分の腕の未熟を機体のせいにするとはとんだ軟弱ものだな」

突如としてユウヤの背後から声が掛けられる。

振りくユウヤの瞳に国連の軍服を纏った黒髪を滴らせる女性、唯依の姿が写る、そしてその眼は侮蔑の色を映していた。

「なんだとっ!?!」

思わず怒鳴り返すユウヤ、本来階級が上の者に対して許されない発言であるがそんなことに気を留めている余裕はユウヤには無い。

「【自分は悪くない、悪いのは機体のせいだ】これのどこが軟弱じゃないというのだ?第一貴様が欠陥機扱いしている吹雪は我が国の前線で実戦配備もされている機体だ。」

「酷い話だ。衛士の命はただじゃない、そんな機体を前線に送りだす国は腐っていやがる」

「だが、前線の兵士は貴様が直面した状況より尚過酷な状況に直面しても吹雪を完全に乗りこなしているぞ?」

「信じられませんね。」

「その衛士は、貴様が絶賛するF-15Jも完全に乗りこなすぞ?」

はっきりに言わせてもらう、貴様の衛士としての技能は我が

国の平均以下、新兵以下だ。」

「　　っ！！」

視界が揺らぐほどの耐えがたい怒りがユウヤにこみ上げてくる。

日本人とのハーフであるという劣等感レツテルを拭うために尊敬される米国民となるために死に物狂いで磨き続けてきたそれをあろうことか日本人と日本戦術機によって否定されたのだから。

「唯依、そこまでにしなさい。」

しかし、ブリッジス少尉せめてこれだけは心に留めておいてください。この計画では日本で先人たちの流血の果てにえた実戦証明コンバットレフ理論を他国の技術でより洗練させることこそが命題　あなたは数多くの衛士の命を背負っているということを」

唯依を止める、藤原が口にするそれは切実な願いであると同時にもっと広い視野をもてという意味が込められていた。

「そんなことは　　分かっていますよ。」

しかし、いくら深い意味が込められていようが聞き手が理解し受け入れようとしなければ意味のないものへとなり下がる。そうまさしく馬の耳に念仏を唱えるようなものである。

「だが、本当に理解しているのか？無能

」

新たな介入者、男性用国連軍服に英軍の軍服の上着を羽織った東洋人の青年が差し込む茜色の夕日の逆光の中で佇んでいた。

第四九話 邂逅

「あなたは？」

輸送機が着陸した後に迎えに来たジープに乗っていた黒人男性、イブラヒム・ドーウィルと簡単な挨拶を交わした後に先ほどの演習がX F J計画のメンバーによるものだと知った亮は格納庫へ寄り道

していくように指示し立ち寄った先で途中からではあるが会話を聞きかじっていた。

もつとも倉庫の入り口からでも聞こえるほどに激しい言い合いがおこなわれていたからではあるが

「ああ、すまなかった。俺は」

「オイ！アンタ、誰だか知らないがユウヤが無能だつて！？何も知らないのに勝手なことを言うんじゃないやねえ！！」

大原に掛けられた質問に答えようとした言葉を遮り、金髪の白人青年の整備兵が詰め寄る。

「ローウェル軍曹！！上官の言葉を遮りしかもその言葉遣いは一体何だつ！！」

少し遅れて付いてきたイブライムの怒声がヴィンセントに降りかかり、友人を貶されたことで頭に血が上っていたヴィンセントは亮の階級章を目にするなり慌てて敬礼を行う。

「申し訳ありませんっ！！中佐殿！！」

「部下が大変失礼しましたっ！！この責任は」

「いや、いい　本日付でXFJ計画に参加することになったりヨウ・シノノメ、階級は中佐だ。よろしく頼む」

頭を下げるイブラヒムとヴィンセントを手の動作で静する。

その陰で名前を耳にした唯依が目を見開いていた。

「さて、貴様ユウヤ・ブリッジスだったか？先の演習は空の上から見物させてもらった。」

「はっ」

また日本人か…と内心、疎ましく思いながら亮の言葉を聞くユウヤ、相手が四階級も上では幾ら毛嫌いしている日本人であつても失礼な態度は絶対に許されない。

「あんな滅茶苦茶な機動で立って歩けるか…確かに才覚はあるのだろう、しかし未熟を通り越して無脳だ。少しはその軽くて堅そうな頭を使え」

嫌味にしか聞こえない、その言葉がユウヤの怒りの矛先を否応なしに亮に向けさせる。

同時にほかの面々、藤原、ヴィンセント、イブラヒムは亮の言いたいことを理解しその観察眼に舌を巻く。

ちなみに唯依は混乱しておりそれどころではない。

なぜなら明星作戦で会ったときは音声通信のみで亮の素顔を見たことがなかったのだから

なぜここにいるとか、もしかして欧州側の不知火の開発主任が彼なのか？

などと疑問が洪水のように脳内に溢れかえっていた。

「 どういう意味でありましょうか？」

亮を睨み突けながら口を開くユウヤ、それに対し亮は無情な言葉を投げかける。

「言葉の意味通りだ、貴様の衛士適性が幾ら高くても意識レベル、技量が吹雪という練習機にさえ追いついていない……つまりは貧相な技術テクニクが悲しいほどに効果を損なわせているということだ。

…この計画に無能がいたら邪魔だ
自分の未熟を理解できないのなら荷物をまとめて帰れ」

「中佐：先ほどのあれは少々言い過ぎではないでしょうか？」
「僭越ながら自分もそう思います。」

格納庫の一見の後に亮をアラスカ基地指令室へと案内する一向…藤原 美沙都、イブラヒム、唯依の三人

指令室への歩みの中で美沙都が歩みを止めて口を開きイブラヒムがそれに続く

「二人は戦術機とはどういうものだと考えている？」

「人類を守るための盾であり矛であると考えていますか？」

亮の投げかけられた質問に藤原大尉が応えるが亮はそれに静かに首を横に振り半歩振り向きながら答える。

「違う、盾であり矛は衛士だ。

戦術機は鎧、戦士のための刃鎧だ。子供の玩具でも自己満足の為の道具でもない。

その中で新型戦術機の有する価値は計り知れないものがある…そしてそのテストパイロットに必要なのは機体を理解し客観的視点から問題点を洗い出すこと

それが出来なくては存在する価値もない　　違うか？」

「…確かに仰る通りでしょう　しかし、彼は人間だ！あのような言い方で受け入れることができるわけではない」

「否応なしにでも受け入れてもらう、それが出来なければ奴はそれまでの人間だった　ということだ、それにここは訓練校じゃあない前線だ。育てる場所では無いよ。」

同じテストパイロットという境遇からイブラヒムはユウヤを弁護するが亮の口から出た正論に口を紡ぐしかなくなる。

無力感に苛まれるイブラヒム、

そんな彼を置いて亮は前向き直りつつも新たな言葉を紡ぐ

「…反応次第では少々荒療治をすることになるが構わないか？」

亮の背中越しに決してユウヤを見限った訳ではないことを悟る。
三人は心中で捻くれ者という評価を亮に追加するのであった。

統合司令部12階 「プロミネンス計画」本部

「失礼します。シノノメ中佐をお連れしました。」

ノックの後の入れという言葉に従い入室した大原大尉がマホガニ一の執務机に座っていたガツシリした体躯の男性に亮を紹介しそれに続いてイブラヒムを廊下に残し唯依と共に入室した亮は自己紹介を行う

「イギリス軍より出向しましたリヨウ・シノノメ、階級は中佐であります。」

「ご苦労だったな。『プロミネンス計画』を預かるクラウス・ハルトウィックだ。貴官を歓迎しよう、楽にしてくれたまえ。」

休めの姿勢を取る亮、それに対して答礼をゆっくり降ろす初老の左官

「君には一度お目にかかりたいと思っていたよ、私は西ドイツ出身なんだがBETAにより郷土を失っても尚別れたままの祖国を正直口惜しげに思っていた。故に昨年の解放戦線の折に君が打ち上げた武勲は耳にしているよ。」

「は、恐悦至極であります。」

「…随分と固いな、普通ここには荒くれ者が集まるのだがな……最近
は真面目な荒くれ者が多いものだ。」

起立するクラウスは亮に歩み寄りながらここ最近に着任した数名の
人物を思い浮かべる。

その大半が日本人の血を引いているので民族的特徴かと思に至る。

「公私の区別を付けるのは最低限の義務であり、年長者を敬うのは
若人の義務と考えて織りますゆえ」

クラウスの呟きに律儀に答える亮、実は亮の方が年上なのだがバカ
正直に答えるのは気はないそもそも誰かに口外する気もない。

「上官に対する敬意は最低限でいい、幸い私と君の階級は一つしか
変わらない普通に話せ、普通にな」

「では、お言葉に甘えさせてもらおうとしよう」

突然変わった亮の口調に一瞬目を丸くするがすぐに適応が早いと満
足げに頷く

「何か言いたいことが在るのなら質問も適宜もしてくれ、エンジニ
アでありエースである君に大いに期待しているよ、中佐」

亮の日本人の平均よりも広い肩を二度ほど強く叩く、

「さて、もう少し君との親交を深めたいところではあるが。
そうもいかん」

クラウドスは名残惜しげに亮たちに背を向け歩き始める。彼が歩を進める先には贅沢なソファークセットに縁メガネの白人男性がひとり腰深く腰を落としていた。

膝に両肘をついた前かがみの状態から亮に弱弱しくとも友好的な笑みを向けている。

(…随分と作り物くさい笑顔だな)

亮の蓄積された経験と真実を直感的に見抜く洞察力が仕立てのいいスーツに身を包んだ白人男性、フランク・ハイネマンに酷評を下す。

この人物は詐欺師の類であると

「こちらは君と同じくオブザーバー兼、技術顧問であるフランク・ハイネマン氏だ」

「ハイネマンです。民間企業からの出向で担当機体が違うライバルですが、貴方と共に英知を競えることは非常に楽しみで光栄に思います」

相変わらずの笑みを浮かべるハイネマンは右手を差し出す。万国共通の融和の証である握手である。

亮は一礼したのちにその手を握った。

其処にハイネマンは左手も添え、大きく上下に振る。

しかし亮はそのべた付く笑みの奥にある獲物を狙う毒蛇の眼光を見た。

「そしてすでに自己紹介が済んでいるかもしれないが開発主任の藤原 美沙都大尉だ。」

「ご紹介に預かりました大原です、貴方と貴国の協力に感謝します。」

後ろに大原を紹介され握手を交わす。

「東雲 亮だよろしく頼む。」

その際に公用語である英語ではなく日本語の日本式で自己紹介したことで一瞬目を丸くするがすぐにいつもの柔らかな笑みを取戻し挨拶を終える。

「そして、君が担当する機体のテストパイロットを務めることになる篁 唯衣中尉だ。」

「は、篁 唯依です。宜しく申し上げます。」

クラウドの自己紹介によって前に歩み寄る唯依に亮は手を伸ばす。

「改めて自己紹介する東雲 亮だ。久しいな篁中尉：二年ぶりとなるか？」

「……！！覚えていらしたのですか！？」

完全に度肝を抜かれ目を？く唯依に亮は苦笑を漏らす。

「そういうことになるな、君の腕がどれほど上がったのか見させて

もらひよ」

「はっ！...！」

生きの良い返事が返ってくるのであった。

すっかり日が暮れ夜の闇に染まっていく滑走路を一機の牽引車がジヤンボジェット型の輸送機、ムーリヤを牽引し所定の位置へ移動させる。

それを夕暮れ時特有の突風を身に受ける中でジャケットを羽織った唯依と亮が離着陸用の滑走路から見上げる。

「月砂、カーゴの展開を」

『分かったよ』

片耳に着けたトランシーバーから指示を飛ばし、それによってムーリヤの背負った大気圏外からのハイブ突入作戦にも使用される戦術機カーゴが駆動音と共に展開し、空飛ぶ棺桶内部に寝かされていた一機の戦術機が台座ごと垂直に立たされその姿を現す。

「これは　　！！！」

「君に乗ってもらおう機体：“不知火”改め：“塵気楼”だ。」

その外観は不知火を基礎にしながら大きく異なったシルエットを持つ。

頭部や胴体、肩部は通常の不知火と殆ど同じだが手足が大きく変化しており内部も大幅に変更されている。

特徴的なのは前腕部が丸々新規のものに交換され、外縁部のシース

スタビライザーが廃され手首から肘さらにその後方へと突き出る長刀ほどの長さを誇る鈍い光沢の鋼刃
膝から下をF-15J陽炎に似てはいるがより鋭利で直線的な流線型に変更された下肢部

「非公式ではあるが、欧州の戦術理念は元を辿れば日本から提供された技術と実戦データと自国の実戦データを照らし合わせた末に生まれたものだ。故に欧州機の特徴を発展させ組み込んだ。どうだ？」

簡単な説明と共に履気楼を見上げる唯依の顔を見下ろしながら問う

「……言葉がありません。」

見るからに限定的ではあるが格闘用の斬撃固定武装を施されたその機体は外観からも日本が求めるドクトリンに合致し、肘のブレードも長刀を振るう際に通常のシースタビライザーと違い腕の空気抵抗を減らすように90度ずらして装着するなど日本の戦術を戦術機が補強できるように構成されていた。

「そうか…中尉、この機体には動作蓄積データが存在しない上に新概念の推進機関などを搭載している　　今までの機体とは訳が違
うぞ。」

「必ずや乗りこなして見せます!!」

唯依はよりシャープな造形のレーダーカバーに交換されより精緻な顔つきになった不知火を数か月前まで自分と共に幾つもの仮想戦闘を行ったもう一つの愛機を目に焼き付けた後、隣に佇む亮に宣言するのであった。

その様子に苦笑を漏らす。

「そこまで肩肘を張るな、心に余裕を持ってでないとおの無脳ユウヤと同じだぞ。

自分を信じるそれだけの努力と研鑽を積んだのだろうか?」

あくまで自然体でいると言う亮に困惑する唯依、なぜなら唯依は常に自分を律するのが自然体であるからどうすればいいのかわからなかったのだ。

第五十話 イミ

「だー！ー！ー！つ！！なんなんだあいつはっ！！あれじゃユウヤがかわいそうだ！
いったい何様だつてんだ！」

基地の周辺に建設された繁華街、そこにある一軒の飲み屋で褐色の肌を持つ少女が己の髪を掻き毟り怒り心頭の様子を表している。

「何様つて騎士様だろ、リョウ・シノノメ…ヨーロッパにいたころ聞いたことがあるぜ、

本来12人のはずのイギリス皇帝の懐刀、円卓の騎士団に異例の13人目として抜擢された在外日本人のはずだ。」

褐色の少女の隣にいたイタリア人の男性がビールをジョッキで一口

煽った後に口する。

欧州戦線にいた彼にとってラウンズとはインペリアルガド、日本で言う斯衛に該当する超エリート部隊だ。

「はんつ！何がラウンズだ、あんな歳で中佐なんておかしいだろ！？きつと親の七光りかなんかさ、だからユウヤもあんなヘタレのボンボンに何言われたって気にすんなよ」

静かに酒を煽っていたユウヤに同僚の少女から掛けられる言葉、しかし倉庫での一軒の後、親友であるヴィンセントが徹底的にメンテナンスを行ったが何も問題はなかった、そう一つたりとも問題はなかったのだ。

ユウヤはヴィンセントの技術者としての腕に絶対の信頼を置いている、そしてそれは3人の日本人の言い分が正しいことを示唆していた。

「タリサ、あの人親の七光りなんて受けてないわよ」

褐色の少女、タリサの言葉を否定するカクテルを上品に口にしていた透けるような金髪と大理石のような白い肌をもつ女性が彼女の適当な推察の言葉を否定する。

「なんだよステラ、あいつの肩持つのかよ！」

「そう意気がるなって、あいつに親なんて居ないんだよ」

「どづいつことだVG？」

タリサがイタリア人男性、VGことヴァレリオ・ジアコーザの言葉

に思わず聞き返す。

それを受けてV Gはジョッキのビールを口に含み飲み干した後に言葉を紡ぐ

「あいつは難民から実力だけで上りつめた難民の英雄とまで言われている奴だからだよ」

俺やステラ…欧州で国がない奴の間じゃちょっと有名なんだぜ？なんたってラウンズに入れる条件は二つの内どちらか、ラウンズの3分の2以上の推薦か……現ラウンズを一对一で負かすことだからな」

「そんなの相手がしょぼかっただけじゃないのか!？」

「馬鹿か、そんな奴がラウンズ入れるかよ。しかも……奴が13番目に選ばれたのは 一番強い奴を負かしたからだよ」

「 V G少し話を聞かせてくれないか?」

今まで静観を決め込み自分の殻にこもっていたユウヤがV Gに尋ねる。

同じ日本人でありながら自分の目標、所属する国家の尊敬される国民となるのを実践した亮に興味を示したからだ。

「ん？なんだ興味でもあるのか」

「ああ……」

ぶっきらぼうに返事をするユウヤにV Gは「仕方がないな」といつて語り始める。

「オレもそこまで詳しい訳じゃないから端折りながら言うぞ、あいつは前の戦争の時に占領地置き去りにされた日本人の子供らしい、

つでBETA戦争で国を追われて欧州に流れ着いて軍に志願したらしい、まああいつは一人だったらしいから軍属になるのは分かる話ではあるがな」

国を命をかけて守る軍人は如何な職業であろうとその状態を万全に保つために優遇された環境と国籍を入手できる。難民キャンプから国籍を得るため軍属となる人間はアメリカでもかなりの人数を誇る。

「でもな訓練校にあいつが移動する前日難民キャンプがBETAの襲撃を受けた。

どうやら光線級が地下を溶解させて進んでたらしく振動感知もされず完全に不意を突かれたって感じだな。」

「…なんだよそりゃあ、そんな状況でどうやって生き残ったってんだ!？」

タリサの驚きも尤もだった。最下位の戦闘力を持つ兵士級であろうと人間の数倍の身体能力を持ち闘士級、戦車級になると生身で勝てる道理は一切ない。

せめて重機関銃が必要だが難民キャンプにはまともな戦術機どころかそんな装備などあるはずもない。

タリサの脳内に兵士級に頭部を噛み砕かれ、闘士級に頸椎ごと頭を引き抜かれ、戦車級によって丸ごと咀嚼される光景が一瞬浮かぶ。敵を熟知しているためその状況を正確にトレースしてしまったのだ。

「カタナだよ、あいつはたった二本の刀で救助が来るまでBETAを切り殺して切り殺し続けて生き残ったんだよ、戦車級も闘士級も…眉つばだが要撃級も生身で切り殺したらしい」

「なんていうか…信じらんねえな」

「まあ、ここは嘘かほんとか知る者は其処にいたメンツだけさ」

肩を竦めるVG、その話を聞いてユウヤの中に亮の評価に得体のしれない存在が追加されていた。ユウヤの思考は典型的なアメリカ軍人でありBETA相手に時代遅れのカタナで相手にするのは正気の沙汰ではないと考えている。

戦術機でもそうなのに生身では非常識さえ飛び越えた命知らずにしか感じられない。

故にさすがにそれは噂から派生した虚偽の情報だと断定する。

（まあ、卓越した剣術を使える程度に思っておくか　　）

「まあ、そのあといろいろあつて現ナイトオブ？に決闘を申し込んで勝っちゃった。

本当ならそいつと入れ替わりにラウンズに入るんだが、一番強い奴をクビにするわけにも馬鹿正直に信用して皇帝に近づけるわけにもいかなかった、だから尤も皇帝から最も遠い席：即席の13番目の席に座ったってことだ。」

「そして…それから新型戦術機開発に従事して欧州のあちこちで多大な戦火を上げて、話には日本の明星作戦にも参加していたって話よ。でも妙なことにその新型戦術機は誰も見たことも考えたこともない技術を使っていて彼がそれをどこから仕入れたのかは全く分

からないって話よ。」

ステラとVG、二人の欧州出身の衛士が語る真実は亮が卓越した技術と知識を保持しているということだけであり、強者は強者を知る。

ユウヤ自身がクラウドに感じたその感覚が、亮がユウヤを強者として全く感じていないということを示すものでしかなかった。

「ふ〜〜ん、つまりなんかすごい強いつてことしか分からないんだな」

タリサが頭の後ろで手を組み椅子の背もたれにもたれながら呟く

「ま、ぶつちやけ他人事だしな。」

「そうね、でも　ユウヤ、彼が言っていたわよね貴方には【才覚があるって】それってつまりは貴方はまだまだ伸びるって事の裏返しじゃないかしら？」

VGの開き直りに続いて放たれたステラの言葉に目を剥くタリサとユウヤ

「　頭を使え…俺は何かを見逃している、もしくはその考えに至ってないってことか？」

ユウヤの言葉を受けながらステラはカクテルを上品に一口掬い、コップをテーブルに置く
カランと氷とガラスのぶつかる清らかな音色が響く

「そういうことね、確か日本の言葉で【敵を知り己を知らば百戦危

うからず】というものがあらしいわ、つまりあの状況で貴方が知らないものを消去法で考えていけば、答えは：知らないものは、貴方自身の本当の才能を貴方が気づいていないか」

「俺が吹雪を正しく理解していないかのどちらか」

「あるいはその両方ね…」

答えの輪郭がおぼろげながらも見えてくる。ユウヤは自分が何に気付いていないのか思案を始めるのであった。

第五十話

イミ（後書き）

屋気楼

不知火式型と同じくXFJ計画で試作された第3・5世代戦術機

タイフーン4GL-Xと同等の改修が行われており不知火との相違点は以下の通り

人間以上の可動域の廃止
膝、肘関節を磁性流体アクチュエーターとのハイブリットにすることによるトルクの上昇と撃震並の関節強度の獲得

肩・手首、足首部にTGCジョイント採用と同時に規格を欧州製戦術機と同一規格に交換、（発展性と汎用性の付加）

両腕、ブレードトンファー装備（ガンダムシユピーゲルみたいな感じ）

両下腿をF-15ベースのモノに換装、膝にウエポンラックが追加されたため狙撃時に膝との四点留めが可能となり安定性が向上の他携行弾数も向上

尚、ビュールクトと同様の脚部改修が為され前面は武御雷やタイフーンと同じようにカーボンエッジ装甲に変更され足がそのまま刃となっている。

全体的に不知火のパーツが五割、陽炎が二割、新規パーツが三割を占めている

戦術機考察（前書き）

戦術機に関する知識に偏りが多い気がするので価値観をまとめておきたいと思い載せます。

戦術機考察

戦術機

月面での対BETA戦の際に使用されたマスタースレーブ形式のパワードスーツを原型にスケールアップされ開発されたハーディマンが世界初の戦術機でありこれを地上戦に特化させたものが現在の戦術機となっている。(つまりルーツはMSやPTとほぼ同一)

地上での高機動戦闘を実現するため大出力のジェットエンジンとロケットエンジンのハイブリットである跳躍ユニットを装備しているのが最大の特徴といえる。

動力、

主に機体に内蔵される燃料電池(水素と酸素を反応させ電力を生み出すバッテリーの一種)と跳躍ユニットのジェットエンジンからの火力発電で動いている。

(つまり酸素がなければ本当にただの木偶の棒)

装甲

宇宙開発で得られたシャトルの外装から発展した特殊複合装甲を使用

ハイブリットアーモ

つまりはアストレイシリーズ位は防御力があると思われる。

上位装甲であるスーパーカーボンというカーボンナノチューブ構造

体であることからガンダム○○のイナクトやフラッグぐらいの防御力はあるのかしれない

信号伝達、

第二世代機以前は通常の電線を使用しているが第三世代機や第2・5世代機以降は光ファイバーにより伝達速度を向上させるほか電磁防御力を上げている。

ちなみに初期のF-4やF-5はほぼ完全なマニュアル操作のため操縦がかなり困難であったが第二世代機以降に搭載されるコンピュータ補助システム(OBLやOBY)によりかなり改善されている。

間接

戦術機の関節は第二世代機以降は人間以上の可動範囲(自由度)獲得のためその強度が著しく下がっている。

膝では上下のフレーム間を膝の裏側で”コ”の字型の多関節アームで接続し着地の際の衝撃受け流しや脚部の伸縮による接地性の向上などのメリットがあるが横からの衝撃に非常に脆く操縦が未熟な衛士はそれだけ損耗も早い(原作でタマが死んだのはこの機構のせいだと思われる。)

肘もあまり差異は無い為かなり脆い(特に武御雷の肩はイカの足で繋がっているように見える プラモで再現されている)

駆動機構

戦術機はすべてカーボニックアクチーターという炭素系の人工筋肉の一種を使用しており非常に滑らかに伸縮しかつ強靱で高剛性に優れている。

これは電気信号により素材の分子構造が変化し伸縮するバイオメタルの技術を応用したものである。
またこれは関節の駆動のほかに衝撃吸収材としても機能する。

武装

基本的に戦術機の武装には多数戦闘を前提にするため突撃砲が使用される。36mmチエーンガンは戦車級などの小型種、120mm滑空砲は大型種を相手にするのが前提の装備だが120mmの連射不足や弾数制限から36mmで大型種を相手にする場合が多い

また、必ずと言っていいほど短刀が装備されている。

そのほかにBETA戦役最前線国家の戦術機には近接戦闘を前提に数多の武装が施されるがこれは兵糧と戦略的観点、戦闘継続能力などの理念から来た実戦証明理論の産物であるが後線国は巨艦巨砲理論が蔓延しているため射撃一辺倒（ラプターははつきり言ってかなり役に立たない札束の松明）

日本・東ドイツ・中国、フランスでは長刀が愛用される傾向が強い

が日本の77式近接長刀は形だけの鑄造品なので本当に日本刀の持ち味が生かされているか甚だ疑問

西ドイツではハルバート。イタリアはフォークみたいな槍といった長モノが使われる。

ソビエトは例外的でタイフーンや武御雷と同じく全身に装備されたエッジ装甲で機体備えつけられた刃と腕部から展開される戦術機用のチェーンソーを使う、メンテナンスの時は外縁部のユニットを丸ごと交換する（整備どころか掃除だって大変だ）

主な各国の戦術機

不知火

世界初で実戦配備された第3世代戦術機でハードウェアがほとんどアップグレードされていないのにもかかわらず第一線でいまだ現役、本編でラプターにぼろ負けした印象が強いが冷静に考えれば不知火よりも撃震のほうが多く旧世代機である撃震がやられた後に袋にされた可能性が非常に高い

武御雷

不知火の上位互換機であり外装は一からの新設計で肩のサブアームが特に違うほか全身にエッジ装甲を搭載されマニピレターの指も短刀として機能するほか前腕部の手甲に片側3本つつ隠し短刀が備えられている 世界最強の戦術機

ちなみに初期の機体はOSが開発されておらず不知火のものを流用していたため本当に熟練者しか動かせない機体だったが動作蓄積やOSを含めたOBLの改良によってそこそこ動かせるまでになった

YF - 22ラプター

アメリカ最新鋭機だがいろんな意味で不幸な機体

F - 15e ストライクイーグルがこの機体のデータを流用して建造された上に跳躍ユニットも同型のものを使用しているため存在意義がステルスしかない

瞬発力は不知火に負けるし、空力特性も不知火に負けるし、ほぼ全部のスペックでタイフーンに（必然的にラファールにも）負ける…なんでこんなの作ったの？と言いたくなる。正直YF - 23のほうがいい（つつか一般機に極地専用機充てるとどういうこと）

中華娘曰く「金にものを言わせて作られたゴテゴテした不細工な機体」

オマケに先行量産機（インフィニティズ）は一般量産機と性能が変わらないと表記されているにも関わらずヴィンセント曰く全くの別物という矛盾満載の機体

本機を小型化し近接戦闘能力を付加したのがYF-35ライトニングとなる

冷静に考えるとブルーフラッグでの相手は殆ど第二世代機、勝つて当たり前だろ

F-15 イーグル

第二世代傑作機といわれる機体、恐らく兵器としても最強

各地の戦線に合わせて多種多様な改造が施されかなりバリエーションが多い、不知火の原型となった機体日本では陽炎と呼ばれている。
(作者が二番目に好きな機体でもある)

SU-27 ジュラーブリク

イーグルに勝るとも言われるもう一つの第二世代傑作機：しかし初期型のマシントラブルが多すぎた不運な機体：しかし近接戦闘能力はイーグルを上回り前線国家にはけっこうおいしい機体だと思う
ソビエト・東ドイツ(この国で生産された機体がソビエトに逆輸入されている)・統一中華で量産運用されている(中華では頭をラウンドモニターに交換している)

SU-37 チェルミナートル

型式が違うのにジュラーブリクと呼ばれることが多い。

ジュラーブリクに第三世代の技術導入を行いジュラーブリクを強化した機体だが機体性能は第三世代だといってもそんな色がないと思われる。主に指揮官やエース用の機体

タイフーン

欧州やオーストラリアで量産運用される第三世代戦術機で第三世代の技術を日本から提供されて開発されたと思われる。

そのコンセプトは汎用で砲撃戦から近接格闘などオールマイティな戦闘対応能力、さらに長距離航行など欧州の大陸奪還への悲願が込められた汎用機、ステルス以外はラプターを凌駕しておりラプターの異名がプロパガンダにしか聞こえなくなるほどの完成度（まあ1年+日本からの技術提供+欧州各国との共同開発だと其の位行くか）

ラファール

フランス軍で開発された第三世代機、タイフーンと基礎技術、コンセプトを同一にした腹違いの兄弟ともいえる機体、主要部以外を大胆に簡略化し整備性と稼働率を向上させ規格は欧州各国と共通のモノを使用しコストを下げている

つまりタイフーンとラファールはその部品の大部分を共有していることとなる。

突撃砲4門装備の突撃前衛がいることくきみーボイスらしいが...で有名

F-4ファントム

世界初の戦術機でハーディマンの特徴を色濃く残している、当初光線級が存在しない状況を想定されたため重装甲を行った機体、配備開始から30年近くたっているがいまだ世界各地で頑張っている（アメリカ以外）、基本的に関節強化がされることが多い（チボラシユカやアリゲートルはこの機体の再設計機だがあまりに似ていない）

F-5 フリーダムファイター

すぐに大量に配備可能な実戦機という要望で配備された元練習機
欧州に優先的に配備され欧州機の始祖となる機体でF-4の劣化版
だったが機動力に優れており欧州戦線を支え続けている功労者

欧州各国の地形やドクトリンに沿って改修されているが基本的に固定近接武装、頭部アンテナをF-4のモノに交換するなどの処置が施されることが多い

基本性能の不足からタイフーンに追いつけず打開策としてアラスカ基地で改修実験が行われているがTEではほとんど出なかった。

結論

対BETA戦においていえることは戦闘継続能力の低さ、攻撃力の低さ、操作系の未成熟が言える

(全力機動で戦闘を行った場合、補給なしだと一時間持たない)

総じて機構と基礎技術の発展はすごいが革新的な技術がないのが難点か…(正直突撃砲は90mmが一番バランスがいいと思う)

第五計画後の地球（前書き）

クロニクル2のバビロン作戦後の地球の様子をまとめておきます

第五計画後の地球

第五計画：通称、バビロン作戦においてユーラシアに存在するすべてのハイブに向け一斉にG弾が撃ち込まれモニュメントが一掃される。

そしてBETAを排除したと確信した人類は領土と資源をめぐり紛争状態へと突入

日本とアメリカの連合国は欧州各国と戦争状態へ、その際F-15J陽炎で選抜された派遣軍が欧州の前線で勇猛な武勲を上げアメリカにその名を轟かせる。

しかし、G弾の影響による強力な磁気嵐が発生、これにより人間の英知の結晶である電子機器に異常が発生さらに恒常的な重力異常によりユーラシア以外の気圧が急激に減少、南半球の空気が海水と一緒に一気に北半球に移動し欧州、日本各地のユーラシア近隣の国々は海へと沈む

辛うじて脱出できた者たちも数か月に及ぶ海底の隆起や津波により死亡、アメリカやオーストラリアはシアトル周辺を残し急激な減圧による高山病や空気の消失により死亡、辛うじて生き残るも全てのライフラインが世界規模で停止し自然も壊滅したため残った人たちも全て死亡

これらにより人類の生存圏はシアトル周辺とハワイ諸島のみとなる。

街規模で国家を形成すまでに陥った人類に組織はアメリカ・日本・

カナダ・フランスの以上4か国のみ
(厳密に言うと軍・政府機能を維持している集団)

大陸のほとんどが低気圧や潮風、元が海だった土地など食物育成不能な土地であるため慢性的な食糧危機、物資不足、人材の損失による専門職人の欠損：

ここにBETAの再来が襲いかかり人類は滅亡の危機にさらされている。

にも関わらずBETA発生頻度が少ない為民衆は軍人に対し不満を抱いている。

さらに7度目のBETA上陸の際に母艦級が出現、その存在が確認され世界最大の艦砲大和の主砲を連続で浴びせるも無傷、仕方なしに二体のうち一体をまりもの副官である龍浪中尉がS-11を内部に直接打ち込み撃破、もう一体は撤退

悠陽とまりもの存在の確認はとれているが白銀の所在は不明、純夏は海の底

ちなみに撃震は全く出てこない。まりもちゃんも不知火乗ってるし、ウォーケンもF-22だった相変わらず

自分のBETA健在の予想としては三つ、

カナダのハイブが実はまだ生きてた（進行方向から考えてあんまりない）

月から新しいユニットが下りてきた（かなり濃厚だと思う）

実はオリジナルハイブがまだ生きていて地殻の中に存在している（BETAの木星でも活動できる適応性を考えると否定できない）

こんな所かな？

ちなみに日本はその立地条件等から大部分が脱出に成功しているらしい（まあ元から数は少ないけど）

どう考えても自分で自分に止めを刺したようにしか思えない。

（まあ、汚染効果確認しないで核撃つ様な馬鹿が世界の実権を握っている世界だしね）

実話、アメリカは核の放射能汚染を一切調べずに日本に核をぶち込み、そのあと数年後に核放射能汚染が判明して海上実験で放射能汚染を受けてしまった漁師と訴訟問題になっている。

ちなみに核を日本に打ち込んだ本人談

『私はあのスイッチを押したことを誇りに思っている。なぜなら不毛な戦争に終止符を打つことができたのだから』

自分個人的にこの人とフランシス・ゴルトンおよびヒトラーが一番嫌い、一方的な考えを持ちそれが絶対に正しいと信じ込んでいる。傲慢にもほどがある

理論に正しい、間違いはあるけど行いにそんなもんあるわけないし
(悪行、善行はあっても正行なんて言葉は無い)

外伝、起源の記録

これはむかし、むかしのお話

暗黒神話を打ち破る荒唐無稽な御伽話

他者が嘆き悲しむのを見ていたくない、
何もしないでただ命が蹂躪されるのを見てられない

そんな在り来たりな普通の正義感に従って普通の人間だった彼はちよつとづつ特別になって、彼女とであって また少しづつ特別になって

神様になったんだよ

外伝、起源の記録

むかし、むかし人間が生まれ出るよりもずっと昔のお話

地球の外、宇宙の外からオールド・ワンと呼ばれる神様がやってきて地球を自分たちのものにしてしまったんだ。

そして、空が、海が、大地がそこに住むあらゆる命が彼等、悪い神様に苦しめられて涙した。

みんなみんな泣いた、怒った、憎悪した。

助けてと泣き叫んで救いを求めた。

それに応える声があった　　良い神様がやってきたんだ。

祈りの祝詞を携え高らかに歌い上げながら。五芒の星を背負って

憎悪の空より来たりて

正しき怒り胸に

「我等は魔を断つ剣を執る　　つ！！！！」

世界の壁を切り裂いて、無数に積み重ねた世界の屍で出来た神剣を携え、鋼の巨神の鎧を纏って

その白亜の神様はねちっぽけだけど壮絶な願いと祈りと覚悟が鍛え上げた一振りの剣でもあったんだ。

「汝、無垢なる刃」

「汝、明日への翼」

「魔を断つ剣ノデモンベインっ！！！」

まあ、簡単に言ってしまうえばその良い神様はね他の悪い神様には最初勝てなかったんだよ。

痛いと痛めつけられた躰に鞭打ち、嗚咽を飲み込み、剣が折れようと腕に縛りつけて剣を振るい続けたんだ。

そしてそして最後には全部の悪い神様をその剣に閉じ込めちゃったんだ。

そして、オールド・ワンたちは自分を閉じ込める世界の檻の中で彼らを憎悪しながら恐怖しながら考え続けるんだ。

なぜ、他者の為に苦しい思いをして闘い、すごく痛いすごく辛いのにあきらめないのか

その疑問はね彼が人間だった時に聞いたことが有るんだ。

「ねえ？九郎……どうして君は絶望の中で諦めずに戦えるの？闘い

が怖くないの？」

それは純粹な興味だったんだ。無限に続く身喰らう蛇のロンドの旋律の中で私も、私の子供たちも諦めたのに彼だけ抗うことを諦めなかったんだ。

その傷だらけの全身、自らと敵の血に染まった両の腕

辛いはず、辛くないはずなのに彼はね太陽みたいな笑みと共に答えた。

「怖いよ…だけど

何もしなかったらヤバいつて分かっている　それでなにもしないで…

やっぱりその通りになってしまおう方が怖いっ！！！！」

ただ、それだけの理由……

普通のだけど、それを最後まで貫く特別を持った彼

オールド・ワンたちには絶対に理解できない答え、最も新しき旧き神である彼が神の中で最も特異かつ普遍

そう、暗黒を享受を出来ない脆弱な心の元で宇宙に敵対する壮絶な覚悟を以て不屈の闘志を貫くことが彼の強さだったんだ。

だから獣もその心を持ってさえいれば血に濡れ罪に錆びようと無垢なる剣になれるんだよ。

混沌に生み出された我が子と違い自然発生した世界の怨敵、本当の七角十頭の獣

神に弓引く竜の名を持つ明の冥星、君が敵対する世界は人間の世界とは限らない

君は君の名が象徴する、憤怒をもって邪悪を砕く邪悪

そして君がいる以上、君の干渉によって対となる魔を断つ剣も生まれる。

陰と陽、+と-、アミノ酸のD型とL型、生命の男と女、X染色体とY染色体

全てのものは対になる、何故ならそれが最も多くの属性を内包するから。

十の頭の内、五頭を失おうとも君は未だ、マスターテリオンなんだよ。紅い月に対抗するためガイアが生み出した免疫抗体、その末裔…君の本当の役割はこの世界において果たされる。

それは世界が仕組んだ運命なのかもしれないけど、その過程で君が求めるものが見つかるともかもしれないよ

彼が、エルダーゴット 旧神 大十字 九郎がそうであったように

君の紡ぐ旋律を語れるのを楽しみにしているよ、だって私は

【ラプソトス／神歌の歌い手】なんだから。

外伝、起源の記録（後書き）

エルダーゴッド。最も古くから邪神と戦い続けて来た最も新しい善なる神。五芒星の魔法陣・旧神の印エルダーサインを象徴としている

またクトウルフとハスターは旧支配者でありながら敵対しており、クトウルフと敵対した人間にハスターが力を貸したこともある。さらにナイアラルトホテップの混沌の森をクトグウアが焼き払ったりしたこともある。

このことから邪神達は一枚岩ではないことが明らかである。

近年ウルトラマンティガにおいて、遂にウルトラマンが旧神扱いされてしまった。

続編ではルルイエまで浮上している（脚本家がなんでもクトウルフ系に絡めるので有名な人だったのが大きいだろう）

またノベルゲーム、デモンベインにおいては主人公とヒロインが最後に旧神となるEDが用意されている。

謎の多い存在ゆえに、製作者の好き勝手に設定される題材である。

第五十話 シドウ(前書き)

今回は屋気楼の本当に細かい設定話です。

第五十話 シドウ

アラスカ

その土地はBETAによりその国土の大半を奪われたロシアがアメリカから租借し首都機能を移譲させることでその国家機能を維持している国ではあるがそれ故に各国家・企業の思惑が複雑に絡みつき余談を許さない土地でもある。

ロシアとアメリカ間の冷戦から続く緊張は当然として人類史上二度目となる着陸ユニットがカナダに飛来しこれを核の集中攻撃を以て撃退したためアメリカと隣接する国家カナダはその領土の実に半分以上を放射能で汚染され人の住めない不毛の土地と化してしまった。

それゆえ住む場所を追われた住民はアメリカへ移住を余儀なくされそれによって住む場所を追われたアメリカ国民もカナダ人への印象を悪くしロシアに対しても又同様の結果となっている。

それはアメリカとロシアの国境線上に建設されたアラスカ国連ユニコーン基地においても又同様であった。

第五十話 シドウ

演習場に佇む二機の戦術機

片方はパーソナルカラ である青紫の機体色であり、

欧州、オーストラリアで量産配備が着々と進行している第3・5世代戦術機タイフーン4GLXを一部改良の後に正式配備したものであり、正史と違い世界一般ではこちらがタイフーンと呼ばれるようになった機体である。

先行量産機であるECTSFと違い各部にEOTを応用した装備が施されその両肩はYF-23の外観をそのまま流用しておりそのイメージを一気に鋭いF1カーと騎士を融合させたような印象へ変化させている。

『準備はいいか？ 篁中尉』

タイフーンに搭乗する国連仕様の強化装備に袖を通した亮が隣に直立するUNブルーに塗装された戦術機の内部に居る衛士に語りかける。

その戦術機こそXFJ-02A 蜃気楼である。

タイフーンと同じく各部をEOTを用いた装備で強化した上に全体的に設計を見直し改修された同じく第3・5世代戦術機となる。

丸みを帯びていた額のレーダーカバーは鋭い鋭角で形成された流線型へと変更されまるで戦車と同じ進化を辿ったようである。

『問題ありません、いつでも行けます』

『CP、両機準備完了だ…指示を乞う』

屋気楼に搭乗していた唯依の返事を聞くと指揮所に通信を開く

『了解、これよりXFJ-02A屋気楼の慣熟稼働試験を始めます。ミラージユ1、60秒後に水平噴射開始、既定のポイントを目指して下さい。』

『チェイサー 随伴機はミラージユ1発進後30に移動を開始して下さい。』

ヘッドセットに内蔵された通信機から月砂の声を聴き機体を待機モードから一気に稼働状態へとシフトさせる。

二機の戦術機に内蔵された核融合炉に火が入り生まれる小型の太陽が重力場の壁の中で蠢き圧倒的な熱量と太陽風を生み出しそれを電気エネルギーへと変え戦術機の鋼の四肢へと伝侵させる。

屋気楼の茜色のレーダーカバーが燐光を放ち始める。

そのUNブルーの機体の内部で女性用国連強化服に身を包んだ篁唯依は戦術機の普段のものとは違うグリップを握りしめながら胸が高鳴るのを感じる。

心臓の鼓動が耳元で鳴るような錯覚の元、事前に受けた機体に関するレクチャーを隠し切れない興奮と共に思い出す。

「さて、履気楼についての説明を始める。」

国連の軍服に身を包んだ亮が基地の一室でスクリーンに履気楼の概略図を写しながら席に着く唯依を見据えながら説明をする。

「まず不知火との大まかな違いを上げていく。

第一に形状から見て判るように脚部はF - 15 J陽炎の脚部フレームを改良し装甲と関節を丸ごと交換している。」

履気楼の膝から下に掛けての内部構造図が表示され通常の膝を構成している多関節アームが廃されF - 4 ファントムと似たような構造の間接に置き変わり、膝装甲も不知火のようなサブアームに支えられる装甲ではなく脛から伸びるF - 15 俗に言うイーグルシリズと同じ内部構造のウエポンラックが接続されている。

「関節はF - 4の膝構造を小型化し外骨格構造モノコックから動力とフレームを一体化した内骨格構造△トバフルフレームとしF - 4の欠点であった可動性を克服した。」

同時に第二世代以降標準となった機体の軽量化と伴ってその関節強度を大幅に向上させ、関節をベアリングではなく磁性流体アクチュエーターとすることで通常の電磁伸縮炭素帯カーボニックアクチュエーターとの併用を可能としそのトルクの大幅向上に成功した。」

「それでは通常の戦術機に備わっていた膝部の伸縮による衝撃緩和機構と接地性が失われてしまうのではないのでしょうか？」

唯依の質問、殆どの戦術機は地形によってその膝関節の隙間を調整すること、いかなる地形であろうとも安定して直立出来る特性とその機構を利用して着地の際の強烈な衝撃を緩和する役割がある。

しかし、唯依の質問に対し亮は首を左右に振り説明を行う。

「確かにその通りだが、人間の足の構造をしてみる。人間の足は膝を伸縮するように出来ているか？答えは否だ。命が数億年掛けて築きあげた成果を超えることは早々出来はしない。

まあ、先ほど君が言った欠点、接地性は元から静安性を打ち消す機体構造と実にミスマッチであり不要と判断し耐衝撃機構はタイヤイン開発時に得られた新関節機構TGCジョイントをムーバブルム機構と合わせて股関節、足首に採用することでこれを克服した。関節の強度は理論上だが通常の戦術機の十数倍以上数値が計算で出ている。」

「っ！！」

亮の口から出た言葉に思わず息をのむ唯依

関節強度、戦術機はその関節の柔軟性によりその機体寿命を衛士の技能により大きく左右される。

スラスタの出力をうまく制御し関節にかかる負担を減らす、着地の際の主脚の角度をうまく調整するなど、この非常にデリケートな作業を戦闘という極限状態に於いて実行しなければいけない。

つまり未熟な衛士ほど戦闘中に機体が何らかの不具合を起こす可能性も高くなる。

戦闘中に敵が機体整備をさせてくれるはずもない、また敵の攻撃を受けてしまったとき動作不能に陥る可能性が著しく高いということでもある。

これを機動性を落とさずに関節強度向上は衛士にとって願ってもないことであり、それだけで死の8分を乗り越える衛士が増えることは想像難くない。

「また下腿部はウエポンラックも含めエッジ装甲を施し近接戦闘能力を向上させた。これは日本や欧州機と同じように空力補助の為に整流翼としての機能も兼ねそろえている。」

外観こそF-15イーグルを連想させはするがその実態は全くの別モノ

唯依は亮の話を熱心に聞いていく。

唯依が投げかける疑問に淀みなく答えるそれは知識を意識レベルで理解しているが故のものでありただマニュアルを読んでいるのとは訳が違う

「次に腕部だ、見ての通り前腕部に備え付けられたブレードだがこれは通常、垂直尾翼と同様の効果を発揮し頭部マストセンサーや脚部と連動して動かすことでより小さな力での方向転換を可能とするほか緊急時には手首の付け根を中心角として回転展開、固定式の長刀としても使用できる。」

スクリーンに展開した刃を握る膺気楼の映像が映し出される。

唯依は武家出身でありそれだけ近接戦闘における間合い…リーチの重要性を理解してはいるがこの武装については納得できない部分があり亮に疑問を投げかける。

「中佐、肘部固定刃の機能は理解できませんがそれでは戦術機の間人間の稼働域が阻害されてしまいます。」

戦術機はその柔軟な機体構造を生かし仮に後方への攻撃法が主腕に装備した突撃砲だけであつても腕だけを後ろに向かせ攻撃が可能となる、しかしこの機構は脚部と同じように関節の強度を下げることに他ならない。

「今回も君の言う通りだが実戦で君はその機能をどれほど使用した？」

「それは…」

問いかける亮に唯依は答えることが出来ない。

極限状態が続く実戦で反射的にその機能が使用できたことなど殆どなかったからだ。

人間以上の可動領域を戦術機は得ているがそれを動かすのは人間、自分に備わっていない機能を反射で使用するにはいささか無理がある。

「篁中尉、技術者も衛士も基本的なことを忘れがちだから言っておくが…」

戦術機は【人型機動兵器】だ、そしてそれを操る衛士もまた人間だ。ならばより直感的に操作できる戦術機が望ましい。

人間が普段無意識でやっている補正等をコンピューターが代行する程度がちょうどなんだよ。それ以上は逆に弊害を誘発するだけだ。」

「！！」

言われてみればそうである、改修が幾ら重ねられようと第一世代のF-4が配備から30年経とうともいまだ第一線で使用されるのはまさしくそれが理由だ。

撃震は後世代機より遙かに機体性能が劣る、それは疑いようのない事実だが、“余分”な機能がない故に万人に使いこなせる機体

そして自分が従事する任務は次期主力機開発、斯衛の様に新兵であろうと一流の訓練を幼少期より積み重ねた存在とは違う

それが配備される戦術機は高性能で信頼性に優れた“汎用機”であり、万人がその性能を十全に発揮できる機体でなくてはならない。

特殊な機構を搭載するのは極一部の存在だけでよいのだ。

その点、この機体は見たこともない技術を使っではいるが原点、F-4の機体構造に顧みられた普遍的な技術と最新の技術の融合により戦略に幅を持たせるのではなく基本スペックと信頼性を向上させる。

主力機とは量産機なのだということを踏まえた亮の設計思想は質実剛健にして洗練された一種の日本刀のようだ。

「さて次の説明だ、知っての通り不知火壱型丙の基本コンセプトは重武装が可能な不知火だ、そのための出力強化だったがこれが近接

戦闘においても優秀な結果を生んだのは既知のことだと思う。」

「はい、しかしその結果として稼働時間が短くなってしまいましたそれを補う専用OSが機体の空力特性を劣悪なものにしてしまいました。」

私もあれに搭乗したことはあるのですが正直、出鱈目な操作性でした。」

唯依は自分の実体験からくる感想を述べる。

ホワイトファンゲス

実験部隊であり唯依が指揮する部隊【白牙】はその存在意義である次期主力となりえる戦術機関連のデータ取得のため不知火壱型丙に唯依自身も搭乗経験があった。

「つまるところその燃費は後で説明するとして…この機体本来のコンセプトを実現するに際し屋気楼では肩部モジュールの【92式多目的自律誘導弾システム】 装備用コネクタを通常の兵装担架用パイロンへと換装した。」

この武装は使い捨ての為、新規生産品のコネクタを変更すればいいという観点からこの仕様とした。」

不知火の重武装化、それを大型の武装を装備し攻撃力を上げるのではなく装備数を増やして攻撃力と持久力を強化しようというのだ。

「これには92式のレーダーユニットを欧州で実戦配備されているラインメタルと併用することで精密な砲撃支援を行うという目的もあり、TGCジョイント換装に際し規格を欧州製戦術機と共有し最悪、不知火がタイフーンの腕を装備して出撃もできるようにした。」

言わなくても判ると思うが、これらは来たるべきユーラシア奪還に向けて共同戦線を展開した時のことを想定したものだ。」

亮の言葉に屋気楼がどれほど先見性をもって設計されたかその片鱗

が伺える。

現在、日本に脅威を齎しているのは佐渡賀島に建設されたハイブの他ユーラシア内陸の二つのハイブ合計三つのハイブから押し寄せてくるBETAの群れだ。

仮に佐渡賀島を奪還できてもすぐにその後が控えている。

日本が完全に脅威から逃れるには大陸派遣は必衰条件なのだ。

其処に各国家連合と規格を共有した戦術機部隊、発展性と助長性、汎用性を両立させるその機構は日本が目指すべき一種の到達点ではないかとも思えてくる。

そのようにある意味、画期的、ある意味で普遍的な雇気楼について唯依が思考を巡らせていると亮が空気を一変させるように口調のリズムを変える。

「さて、普通の違いについてはここまでだ。篁中尉、雇気楼は第何世代だと思っかね？」

「……第3世代機ではないのでしょうか？」

おずおずと答える唯依に亮は口元を皮肉気に歪める。

その様子に若干ムツと眉を吊り上げそうになるが相手が上官であるため明鏡止水の心を以て心を落ち着かせる

相変わらずこのような技術に頼らねばならいとは未熟

同時に悪癖である内省癖も誘発してしまう。
その様子に亮は好感による苦笑を漏らす。がそれは逆に唯依の神経を
逆なでするだけだ。

「やれやれ君は素直じゃないのかそれとも素直故なのか…
つと話がずれたな、不知火は確かに第3世代機だが蜃気楼は違う
あれは第3・5世代戦術機だ。」

秀囲気を戻して話を修正する亮に続いて唯依自身も気を入れなおす。

「3・5世代戦術機ですか……？」

「そうだ」

唯依の復唱に頷きをもって肯定する亮、そしてモニターを操作し映
像が蜃気楼の概略図が何やら小難しい式の並んだ図解へと移り変
わる。

「まず第一の特徴だ、核融合という言葉を知っているか？」

「水爆でしょうか」

一時の間を以て真剣な表情でそれを口にし首肯する亮は詳しい説明
に移る。

「原理は同じだ、水素という非常に軽い原子同士を超高温下でプラ
ズマ化させ原子変換を引き起こす時に発生する熱量を利用する技術
だ。蜃気楼はこれを動力源に使用する。」

「大丈夫なのですか？」

亮を睨み付けんばかりの視線を注ぐ唯依、自分が乗る機体が戦略兵器と同じものを動力にしているというのだから機体に命を預ける衛士にとっては至極当然の疑いだ。

「問題ない、この核融合炉：正式名称【プラズマジエネレーター】は1950年にロシア主催の国際核融合実験で使用されたトカマク型核融合炉JT-90というものを新技術で改良・小型化したものでタイフーンに搭載、数年前に実戦投入され信頼性は証明済みだ。また炉壁に罅が入っても空気が流入した時点で自動的に核融合反応は停止する。……なんせ核融合は真空じゃないと発生しないからな」
肩を竦める亮、その言葉にほっと安堵の息をひそかに漏らす唯依

「まあ、ともかくとして……こいつは熱量以外に炉心から発生する太陽風：電磁波の嵐を同時に電力として使用することでかつてないほどの高効率かつ大出力を獲得するに至ったわけだ。」

「稼働時間の問題は解消されたという訳ですね。」

「ああ、」

大きく肯く亮、通常戦術機は燃料電池などバッテリーで稼働しお世辞にも稼働時間が長いとは言えないがこの動力を搭載したことによって跳躍ユニットの推進剤の問題を除けばほぼ無尽蔵に稼働できることにならない。

これはいつまで続くともしれないBETAの攻勢に対し物資や戦闘中の衛士の心的状況等から非常に高い効果を上げるだろう。

「続いて推進機関、まずこの機体にはテスラドライブと呼ばれる質量と慣性の分離装置、いわば一種の重力制御技術を使用し浮遊、機体を推進機関で押し出すことによって高機動戦闘を行う。」

「重力制御…そんなものまで……一体どうやって……？」

「すまないな、それはNeed to Knowだ。君が気にすることではない。」

唯依の呟きに対して卑怯ともいえる答えを返す亮、

Need to Know

それは危機管理リスクマネジメントの一種であり、情報を必要最低限の存在のみが把握しておくことでその情報故の危険事態の発生を阻害する処置であり、危険事態の発生後の対処法はクライシスマネジメントといわれている。

唯依は軍人であり上官からこれを言われては質問することさえ許されはしない。

「君なら判ると思うがこの技術を開発した人物の所在が広まってしまえばその存在は世界から狙われることとなる。…情報の秘匿は徹底的にしなければならない。」

「はっ了解しました。」

亮が律儀に説明すると唯依は納得し敬礼をもって応えた。

「ああ、理解してもらえて何よりだ。

次の話に移るとするか……移動に際し機体から電力供給を受けて推進力に変える電磁推進システム【プラズマバーニア】を搭載した新型跳躍ユニットを装備し運用を行うこととなる。」

「なるほど、これで戦術機が全力稼働を行おうと補給を殆どせずに戦闘続行が可能であるということではありませんか。」

通常、戦術機が全力で機動戦闘を行えばその稼働時間は一時間に満たない

無尽蔵とも思えるBETAの軍勢に対してこれは余りに心元無い、現に補給中に襲撃を受け孤立、壊滅した部隊も少なくはない。

なぜならBETAは地表だけではなく地下からも襲い掛かってくるのだから

「機体装備はAMWS-24突撃砲とM90Cアサルトマシンガンそしてラインメタルを新規に不知火の全ての武装を継承出来るように調整してある。」

亮がスクリーンを移し替えると同時にタイフーンおよびシリウスと共に配備が開始された二丁の突撃砲が映し出される。

「まず、AMWS-24突撃砲だがこいつは大型短刀を先端にグリップ部にスパイクを追加したことにより銃剣とある程度近接戦闘が可能となっている。銃弾も各30パーセント増しになっている。

もう一つの突撃砲、M90アサルトマシンガンでは90mm徹甲弾を使用し真正面から大型種を粉碎するというコンセプトで単純に3

6mmと120mmの中間の連射性能と破壊力が備わっている。また銃身下向部には単発式ミサイルランチャーを装備し要塞級や光線級を一気に吹き飛ばす際に使用するなど面制圧能力を付加したものだ。これは換装によりフェニックスミサイルも使用できる。」

フェニックスミサイルとは大型ミサイルの中に小型ミサイルを大量に搭載し水平発射の後に拡散弾の様にミサイルを発射するスプリットミサイルの一種でありF-14トムキャットが使用する装備ではあるがコストが高く近年生産は中止されている。

「さて…概要はここまでだが、ここからは後の予定を伝える。

屋気楼は現在フェイズ1でありこの量産試作型のデータ収集および細かな修正が完了したのち、フェイズ2へと移行。」

「フェイズ2でしょうか？」

同時に開発が進められている不知火式型は内部パーツを米国製の高性能部品に跳躍ユニットを高出力のジネラルエレクトロニクス製F-140エンジンに交換、データ収集を行い並行してアメリカ本社で新型モジュールを開発、それに交換し慣熟を行うことで完成となる予定ではあるが亮の言う屋気楼は若干スケジュールに相違があった。

「今現在の屋気楼はすでに不知火式型のフェイズ2に達している。次は特出した戦力、BETAの大軍を突破し反応炉を迅速に破壊できる特別機、つまりは上位互換機へ装備を換装、テストを行う。」

現在、イギリスのユーロフェイタス社でその新型装備の建造が行われている。」

欧州機との規格共通がここでも生きてくる。

戦術機同士には部品の互換性は殆どない、せいぜい蓄電器や兵装担架を共有できるぐらいだ。

しかしTGCジョイント採用の際に各パーツを部分ごとにモジュール化し接続部分の互換性を保つことで上位機種を新たに製造するのではなく既存の機体をアップグレードできるように設計に余剰を持たせるではなく部分ごとで上位部品に交換することで拡張性を持たせようというのだ。

これはヒュッケバインに搭載されたHフレーム機構を戦術機に対応させたものであり、ヒュッケバインの並行開発の産物である。

「以上で厩気楼についての概要は終わりだ、君はこれからテストの際はミラージューの識別コードを取ってもらう。　なにか質問等が有れば受け付ける。」

「はっ！問題ありません。ありがとうございます！！」

厩気楼だけにミラージュとはそのままだな

内心その安直なネーミングに微妙な感想を懐きつつ唯依は亮に起立し敬礼を返すが、その心中は早く新型機を駆ってみたいという衛士ならではの一種の病気ともいえる興奮を懐いていた。

「では、明日より慣熟試験を実施する管制ユニットは日本仕様にしてはいるがOSなど操作系が変更されているためマニュアルを熟読しておけ」

「了解しました」

そして、唯依は今こうして厩気楼のコックピットにいる。

『10・9・8・7・6…跳躍ユニット始動!』

『跳躍ユニット始動開始』

唯依の網膜投影のウィンドウに金色の瞳と銀色の頭髮の少女の士官が支持を送りゆいはそれに従い機体を操作する。

厩気楼の腰に接続されたそれは通常の赤い炎ではなくプラズマの青い炎を孕む。

『4・3・2・1…っ!!厩気楼発進してください!!』

「厩気楼……ゆくぞっ!!!!」

唯依は戦術機のフットペダルを踏み込んだ

五十一話 カイコウ

カッン…カッン……

格納庫の金属の壁に音が反響し響く、

その音の主である存在は戦術機ハンガーに固定された一機の戦術機の胸部前、コクピットレベルと呼ばれる高さに設けられた通路にハンガーに固定されたUNブルーの機体から長い黒髪を靡かせて降り立つ。

女性らしい曲線の浮き出るボディースーツ、国連軍が正式に使用する型の強化装備服であり防刃、防弾その他装着者の生命維持補助など多様な機能を備えた戦術機用のパイロットスーツ

それを纏った女性は金網で作られた通路に降り立つと同時にその体が崩れ落ちる。

「　　と…」

しかしその体が冷たい床に打ち付けられることはなく一人の強化服を纏った男性に受け止められる。

「あ……申し訳ありません中佐　　」

その女性、少女の残照が抜けつつある筈　唯衣は自分の体を支える青年に謝罪する。

「気にするな、強化服にできるのはあくまで感覚欺瞞　　加速度によるダメージが無いわけではない無いと感じるだけだ　　だから少し休め」

その覚束ない足取りで尚立とうと自分の体に鞭打つ唯依を諫める。テストドライブ、による超高効率反動推進による超加速はOBLのデータ蓄積が完全ではなくまた出力制御も未調整項目であった為、搭乗者に大きな負担を強いていた。

こういつた実際に動かしてみないとわからない数値を実働により最適値を求め設定するのがテストパイロットの仕事なのだから何とも言えないが

「いえ。大丈夫ですから……」

「……すまん」

“トスっ”

強情に自力で立ち上がろうとする唯依の首に如何な技巧か手刀を落としその意識を刈り取る。

気を失い今度こそ完全に脱力する唯依、その時彼女の手から零れ落ちる物があった。

「…これは」

それはアンティークな懐中時計、その刻まれた年季がどれほどの時を歩んできたのか物語る。

「それはその子の父親の形見です。」

唯依を抱えたまま地面に落ちたそれを見る亮の背後から語りかける声があつた。

藤原 美沙都大尉であつた。

「そつか……大原開発主任、彼女を頼む」

そういつて唯依の体を藤原大尉に預けると亮は床へと手を伸ばし時計を手に取る、

その手にした時計には本来あるべき機械的動作音がせず振動も感じられない。

そしてその懐中時計を開く、その針は8時15分を指したまま止まっていた。

「……主と共にその歩みを止めたのか。」

「今思えばこの子の時はその時計が刻みを止めた時、この子の父が他界した時に止まったのかもしれない。この子は本当に純真で素直で父親譲りの頑固モノなんですよ。」

藤原は手に抱く妹分の顔を愛おしげに慈しむ様に見据えるがすぐにその表情は曇ってします。

「純粹故に自分を殺しすぎだよその娘は たしかにこの時計と同じにただ一人の篋唯依という少女の時間は止まったままなのかな」

「はい……」

消えるように呟く藤原、亮は唯依を見た時からいつもその眼が何かを堪えている様に感じていた。瞳の奥で待っているのだ自分をただ一人の少女を救ってくれる存在を　しかしそんな他力本願な自分を許せずさらに自分の戒めを強くしている。

「……………」

「あの……中佐？」

しばし無言で時計を見つめる亮に怪訝に思った藤原が声を掛けた。

「ああ…すまない、彼女を医務室に連れて行っておいてくれ……」

藤原に言い残すと亮は唯依の父の形見の時計を手にその場を後にする。

ふと意識が覚醒し、唯依は眼を覚ました。

見覚えの無い天井それは差し込む夕日により茜色に染まり長い影を引いていた。

ベッドに敷かれたシーツの上で上半身を起こす。そこはユーコーン基地の医務室だった。

「私は一体……」

そこまで言いかけて自分が屋気楼の慣熟試験により体調を崩し亮に意識を刈り取られたのを思い出す。

OBLをテストドライブ使用時に発生するTドット・アレイと変化した力学を前提においた日本や欧州機に使用される戦術機の全体の四肢を利用した空力制御技術と併用し機体を制御するシステム【LIEONシステム】

しかしデータ蓄積を重ねその動作を最適化しなければ機体が安定せず360度全方位から空力制御が未熟故に発生する振動が唯依の体力を削り取ったのだ。

“ガラガラガラガラ”

ふと医務室の扉が開かれ亮が入室する。

「気が付いていたか」

横から夕陽に照らされながら亮は唯依を見る。

「あ、中佐……ありがとうございます。」

「礼は俺じゃなく開発主任に言うんだな、俺は君を気絶させたただだ。」

唯依の感謝の言葉を受け流しつつ亮はその位置を移動しベットの脇にある椅子に向かい腰かける。

「今回の動作試験により幾つかの設定項目の修正が終了した、次回

からはだいぶ動かしやすくなったはずだ。ご苦労だったな。」

「いえ…」

労いの言葉をかける亮、

唯依自身、武御雷の動作テストを行った経験から新型戦術機はハードの問題がなくとも制御系の問題からこういった事態が発生することは身を以て知っており特に亮を非難するつもりはなかった。

そういった緊急事態に対応するため随伴機が試験テストに同行するのだから

しかし、寧ろ倒れたのは自分の体力のペース配分を見誤った自分の失態だと唯依は感じていた。体力の消耗と相まって自信が揺らぎ弱音が漏れ出てしまう。

「中佐、私は未熟です。……そんな私に乗りこなし完成させる事が出来るでしょうか……」
「屋気楼を」

「中尉　自分を未熟だとは余り言っな」

唯依の弱音を切り捨てる。その瞳は鋭く真摯な光を宿し彼女を貫く

「自分のことを未熟だといってしまったらいい訳だ。未熟だから出来なかつたとな　謙虚と未熟と思ひ込むのは似て非なる事だ。

遣り通せるのは遣り通そうとした人間だけであり、そこに未熟も何も存在しはしない」

「　　っ！！」

亮の言葉が胸を突く、今まで自分が良くしてくれた人々の恩義に答え、祖国の人々に安寧な暮らしを与えるに当たって自分が応えられ

ない歯がゆさを自分が未熟だからという思いで現していたが彼はそれが弱さでありそれに甘えると言外に言っていたのだ。

それと同時に自分を責めるなども…

亮の下手糞なフォローに込められた不器用な気遣いに若干好感を懷いた唯依は苦笑を漏らす。

「中佐は女の慰め方が苦手なのですね」

「ほつておいてくれ…どくも女子供は苦手だ、」

それに亮はそっぽを向きながら頭を？き呟く

その様子はいつもの捻くれた嫌味な物言いではなく照れ隠しを行う外見相応の仕草であった。

「それとこれを預かっておいた」

「あ…それは」

亮は懐から一つの懐中時計を取り出す。そのあまりに見覚えのあるそれを目にした唯依は自身の服を弄るがどこにもない。

「大切なものなのだろう」

「はい」

差し出される懐中時計をその手に取る唯依、その手になじんだ重みを感じるがそれはチクタクと精密機械特有の振動が伝わり。思わず

その蓋を開く。

「動いている……！」

8時15分を指したまま止まっていた針が時を刻んでいた。

「勝手にだがそれを修理させてもらった」

「ありがとうございます。」

動き出したそれに様々な情念を懐く唯依はそう呟くのが限界だった。亮自身解析の魔術を基礎に発展する魔術を得意とする関係から物体の構造や理論などを理解することに長けておりそれを応用して修理を行ったのだ。

「いや、いい　それには持ち主の想いがこもってる故に宿る温かみを感じた。それが時を止め凍てついているのが我慢ならなかっただけだ。」

あくまで自分がやりたいからやったと言い張る亮に唯依がクスリと微笑む

「随分とロマンチストなのですね」

「む、やはり似合わないか」

唯依の一言に微妙な表情を浮かべる亮、自分自身そんな俳句や詩が似合う人種とは思っていないための感想を口にする。

少し不貞腐れている亮に唯依は慌ててフォローする。

「いえ、そんな！素敵ですよ？」

「いいよ、そんなとってつけなくても……」

それに若干落ち込んだ亮の姿があった。

夜のユーコーン基地、そこには国連基地としては大きな規模を誇る。東西240kmにも及ぶその広大な敷地には戦術機開発に必要な様々な施設が設置されている。あらゆるデータを検証する研究棟、実験機を完全に整備するための整備施設など

一つの巨大な工業都市でもあるこの基地は任務にあたる人員が暮らす居住区や日々の生活を送るための物資を売買する商業地区までも存在する。

そんな街のはずれにある一角、繁華街の明かりが遠くに見える川沿いの平野で亮は瞳を瞑り意識を研ぎ澄ます。

人間の感覚器官は元を辿れば野生のそれであり人間は普段意識していないが其処から得られる情報にはさまざまなものが隠されている。

人間の外界情報の8割を補う視覚を閉じることであえてその他の感覚器官を鋭敏にさせ体全体で空気の流れを感じ取る。

混合解除

自身の内より生まれ全身を循環する命の力を疑似神経回路である魔術回路へと流し込み世界の理に干渉するための力と為す。

腕の物質構造に溶け込んでいた異なる物質の最小単位まで分解したそれを抽出し元の形に組み上げる。

魔力を媒介するエーテルを凝固させ物質化させる投影と違いこれはその下位ランク変化の魔術から派生する系統を違えた魔術

物質を構成する原子よりさらに細かなフォミル粒子を魔力で結合し繋ぎとすることで物質を組み上げ分解する。

まるで虚空から抜き放つかのように両の腕に大太刀を握る。

それらは現存する宝具、

かつて宮本武蔵が怨霊討伐に用いたとされる日本刀の最高峰、大包平鎌倉時代にその所在が不明となった霊刀、蛭丸

手に確りと感じる質量とは別の重厚な気配、人々の想念が集約されたそれは質量とは違う重みすなわち概念の重みを宿す。

左の蛭丸を下げたまま、右の大包平を水平に持っていく

「ふっ！」

呼気と共に刃を水平に薙ぐ。

まるで超精密機器の部品一つの重りを測る様にその手に刃が受ける
空気の抵抗を感じながらそのコンマ数マイクロンの刃先に空気の粒子
一粒一粒を感じ取りそれに垂直に刃先を当て一機に切り裂く。

悪くない

空気を上下に切り裂き、その時に発生する真空活断層が引き起こす
空気の乱流を肌で感じながら評価を降す。

力の【入り】と【抜き】、水飛沫の一粒を狙い断つほどに精確かつ
鋭い斬撃

それを可能とする反射神経、感覚器官に緯度と経度の差による誤差
は見受けられない。

往くつ!!!

思考と連動し亮の肉体は地面を蹴り宙へ躍り出る。

右から斜めに三本、左に水平に二本、刃が断ち切るのに理想的な軌
跡を夜の闇夜に銀色の残光の尾を引くことで描き出す。

「ハアアツ!!!!」

裂ぱくの氣勢と共に対の大太刀で空を薙いでいく。

薙ぎ、振るい、断ち切り、突き上げる

虚空に想定する理想の軌道を重ね、それを忠実にトレースする。

空間の傷、刃に切り裂かれ発生する真空活断層がもとに戻るうと周
囲の空気を吸い込み気流を発生、

亮は剣風と刃の鈍い反射の繭を纏い対の大太刀で空を刻んでいく。

流麗に、鋭く。
眼にするものに息継ぎどころか瞬きさえ許さない一瞬が連続して続く連撃

最後の一刀を振りぬきその勢いを殺さぬまま跳躍箇所を遙、前方に軽やかに着地する。

「そこに居るのは判っている　出てきたらどうだ？」

背後から自分を見ていた存在に語りかける亮、

「君は」

おずおずと物陰から出てきたのは年端もいかない少女だった。腕に熊のヌイグルミを抱きしめて、涙目に自分を見つめていたがそんなことより亮の目を引いたのはその特徴的な銀髪と容姿

オルタネイティブ3で大量生産された人工ESP、の特徴だった。

オルタネイティブ計画、国連のBETAに対する現状を打開するために始められたこの計画について知ったのは自分がラウンズに入った時だ。

国防の最前線と皇帝の懐刀としてあらゆる任務に就くラウンズ、特にそのトップは現状自分を含め13人のみ当然、国防という政治と密接に関与するその立場からその権限は並の政治家を遙かに上回る。

故に本来、国のトップしか知るはずのない極秘情報も一部閲覧可能だった。

「……俺に何か用か？」

対の大太刀を虚空へと仕舞い問いかける。

「……あなたとおはなしして見たかった」

刀が仕舞われたことで安堵したのかおずおずと語りだす少女

「俺と会ったことが有るのか？」

「海の方こうで」

「あの時の黒い戦術機か……君はあれだけのものを見てなぜ俺に近づこうとする。」

東ドイツ解放戦線の折、激突を繰り広げたSu-47ビュールクト思考に干渉を受けた自分は少々苛立ち逆にすべてを解放することで相手を情報の波に飲み込ませた。

怖かった、でも全部あなたがやっつけたんだよね

脳内響き渡る声、リミピッドチャンネルによる思考通信 相手
の存在波長さえ分かっていればたとえ地球の裏側であろうと念話を
可能とする力

確かにそうだが、俺を恐ろしいとは思わないのか

リミピッドチャンネルで語りかけてくる少女に亮もまたチャンネル
を解放し会話を行う

あなたは本当はいいひと、貴方が闘うのは悪いことに怒りを
感じれるから…他人の為に怒れるあなたは ほんとうにいいひ
とそんな人を怖いなんて思えない

君は

イーニヤ、私のなまえイーニヤ・シエスチナだよ

微笑みながら自分の名を告げる少女

“イーニヤ” その名前は聞き覚えがある。

この世界に始めてきたときその死に際を看取った青年が彼女に託し
た存在だった。

五十一話 カイコウ（後書き）

真面目な恋愛は苦手だ…

第五十二話 実力（前書き）

前回の話終わりの部分が切れてしまっていました。

投降してから一時間後ぐらいには修正しましたが、まだ見ていない人はお手数ですがそちらもご覧になってください。

そのままだと文脈がおかしいことになっているので

第五十二話 実力

イーニヤ、私のなまえイーニヤ・シエスチナだよ

「そうか、君がか」

自分に名を告げる少女に思わず声を口にしてしまう。
その胸中にどのような感情が巡っているか自分自身にもわからない。

で、俺と何を話すというのだ？

いっばいあった、でも実際に会うと何から話していいかわからないよ

熊のヌイグルミを抱きしめ少し困ったような笑みを浮かべる銀髪を携える少女

何故自分にその笑みを浮かべるのか理解出来ない

なぜ、俺にそんな笑みを向けれる？ 俺は君にとって赤の

他人だろう

そうだね

少女は返事と共に腕のヌイグルミに顔をうずめその瞳を閉じる。

なら何故？

聞き返す自分に少女、イーニヤは微笑む

それはね……あ、ごめんもう帰らなくちゃ！またね

突然身を翻し銀色の長い髪を靡かせながらイーニヤは駆け出した。その様子をまるで影ごと縫い止められたように直立する亮は見送るのみ

またね……か、君は何を想って俺に近寄ろうとする

第五十二話 実力

鷹気楼のテスト開始から一か月

鷹気楼は動作データ蓄積が進み開発衛士である唯依が機体自体に慣れ始めたことも相まってその完成度を徐々に向上させテストにおける理想値を叩きだしていた。

そして不知火式型も各機関部のパーツ交換が完了し組みあがり、既に唯依が新型の慣熟テストを行っている焦りからユウヤは藤原に自身の日本戦術機に対する慣熟訓練を切り上げ求め、式型の試験に挑

むがその結果は望ましいものでは無かった。

吹雪でこそF-15Eストライク・イーグルと遜色ない動きを可能とするユウヤであったが圧倒的に向上した主機出力によりさらに鋭敏となる機体特性に振り回され乗り越すことが出来ていなかった。

それに対しユウヤはアメリカ軍の模範的機動を行うための改修を要求、しかしそれは対BETA戦に対し有効ではないという実戦証明から拒否されるがそれは逆にユウヤの不満を積もらせることとなる。

彼は未だ新人、^{ルッキ}如何せんあらゆる意味で実戦を現実を知らないのだ
った。

「やはり彼には荷が重かったのでしょうか」

藤原は演習後のデブリーフィングまでの僅かの間に指揮所のモニターに映っていた演習の光景を思い出したため息を突く。

唯依の方は順風満帆だがユウヤの方はひどいの一言、機体の特性を理解しようと思わずに無理やり自分の得意とするアメリカ式の跳躍ユニットのみの加減速を繰り返す。

不知火本来の空力制御や重心移動を前提においた設計がその軌道を邪魔する、もとよりそんな非効率的な軌道を執るように設計されて

いない。

「藤原大尉、」

そんな藤原に語りかける声があった、亮だ。

「なんでしょうか、中佐」

「少し提案がある、多少荒療治になるが
あれは見ていて不憫
だ機体も衛士も」

モニターに映る先ほどの演習の光景を冷めた目で見る亮、藤原は彼がユウヤに引導を渡すつもりだと悟る。

「その話お聞きしましょう。」

「くそっ！主機出力増加の見積もりが甘かったか
」

外見こそ不知火型内、フェリスカモフラージュ塗装の不知火の胸部前のキャットワークに設けられた転落防止用の鋼鉄製のフェンスに持たれながら格納庫の天井を仰ぎ見るユウヤ

そんな彼の肉体は演習中に無理やり搭乗員保護設定を無効化した軌道を取りその反動で気絶、即座に電気ショックによる覚醒を繰り返

しダメージを負っていた。

「お疲れさん、ほれ」

そんなユウヤに近づくヴィンセントがユウヤにミネラルウォーターを投げて渡し、それをキャッチするユウヤは煽るようにそれを口にす
る。

「ユウヤ、お前の日本嫌いは知ってるけどよそんな私情…てか思い込みを捨てないとこいつは乗りこないぜ」

ヴィンセントの言葉にユウヤの片眉が上がる。

「どついう意味だ？」

「おっと、ヒントはここまでだこついうのは自分で気づかないと意味がないんだよ」

おどけて見せるヴィンセントは身を翻し管制ユニットへと向かう、
言いたいことはたくさんあったユウヤだったが彼の仕事邪魔するわけにはいかないとそれを飲み込むと再び手に持つミネラルウォーターを煽る。

「ローウェル軍曹はいるか」

そんな時にふと現れる国連軍服を纏った青年、ブラウンの瞳とやや色素の薄い黒髪を携えた亮だった。

「今、こいつのメンテ中ですよ。」

振り返った亮に弍型を指しながらぶつきらばうに返すユウヤ、彼の亮に対する心象は最悪だったからだ。

しかし、亮はそんなことを気にもせずそうか、と返すと弍型のコックピットへと向かう。

精いっぱい抵抗もスルーされユウヤの心はさざ波立つ

若いな

ユウヤの刺す様な視線を背で感じながら亮は管制ユニットの調整を行っていたヴィンセントに上から声を掛ける

「ローウェル軍曹」

「お、中佐じゃないですかこんなところまでどうしたんですか？」

作業をいったん止め亮を見上げるヴィンセント

「君にこの後至急にやって欲しいことが有る。」

「なんすか？」

「吹雪を明日に稼働できるように整備して“弍型”^{こいつ}から取り外した【FE108 - FHI225】跳躍ユニットと指定する管制ユニットを装備しておいてくれ」

FE108 - FHI225 跳躍ユニット

それは不知火壱型丙に装備されていたそれでありF型武御雷にも装備されている高出力跳躍ユニットである。

「管制ユニットは良いですけど……跳躍ジャンプユニットはマッチングがうまくいくかわかりやしませんぜ？」

「問題ない……そういう機体には慣れている。」

あっさりと言つてのける亮、ある意味こつこつ試作モドキのピーキーな機体との縁はATXチームに在籍したことのある人間ならば必ずめぐり合うこともある。

ヴァイサーガの次に自分が搭乗した機体、ビルトビルガ。Lは彼の博士の中ではまともではあるが扱い難い機体であることに一切の疑問は無い。マ印は伊達で酔狂でもなければ乗らないような極端な機体なのだ。

「分かりました。他の奴らにも声かけて大急ぎでやります。……でも誰が乗るんですか？まさかユウヤに乘せるってわけじゃないですよね？」

「当然だ。」

俺が乗るんだ

」

亮は不敵に笑みを浮かべるのだった。

「さて、諸君今日の演習だが我々アルゴス小隊と東雲中佐の小隊と合同で演習を行うこととなった。」

ブリーフィングルームの教卓上で東南アジア系の色黒の男性イブラヒム中尉がアルゴス小隊の面々に向けその日の演習内容を示す。

「はあ〜？何だってアイツらと一緒に演習しなきゃならないんだよ」

同じく東南アジア系の少女といって差し支えの無い年齢の軍人、タリサが不満の声を上げる。彼女は同じテストパイロットであるユウヤを虚仮にした亮を毛嫌いしていた。

「悪かったな、君たちの遊戯に邪魔すること為って　しかしこれは上層部が決めた決定事項だぞ。」

唐突に突然、に唯依を伴って入室した亮が皮肉を込めた口調で返す。

「遊戯ってなんだよ！！」

「マナンドル少尉ッ！！上官に対する口の効き方に気を付けんか！！！！」

思わず亮に噛み付くタリサにイブラヒムの落雷のごとき怒鳴り声と拳骨が落ちる。

「~~~~~！！！！」

「部下が毎度申し訳ありません!!」

悶絶するタリサをよそに謝罪するイブラヒム

「いやいい、もう慣れたここに集まるのは癖が強いらしいからな実戦でもそれならばむしろ心強い　　いろいろとな　　」

意味ありげな言葉を残す亮に一同の大半が怪訝な表情を作る。

「で、中佐がこちらにいらっしやっただということとは既に?」

イブラヒムの問いかけに腕を組みつつ頷きヴィンセントに向けたのと同じ不敵な笑みを浮かべ亮は言い放つ

「ああ、俺の機となる吹雪の出撃準備が完了した。」

亮の言葉にユウヤがその眼を見開いた

「　　こちらアルファ機、所定の位置に到着…各機応答せよ」

広大な敷地を有するユーコーン基地、そこには戦術機開発に必要なあらゆる施設が備わっている。補充パーツの保管庫や本格的な整備施設を備えた格納庫など　　当然演習を行うためのスペースも存在する。

その広大な空間は人の十倍近い体躯の戦術機が模擬戦を行うのに十分な広さ、しかもそれは一つだけではなく戦術機の耐環境試験を行うために荒野のみならず沼地など多種多様な地形も用意されている。今回選ばれたのは何も無い荒野

それを浅黒い強襲前衛装備の吹雪のメインカメラが捉え亮の網膜にまるで本物と錯覚させるほどの精度を以て投影されている。

やがて各員の復唱が順次耳に届く、そして説明を始める。

「今回の目標は連隊規模BETAの殲滅だ、指揮は俺が取らせて始めよう慎ましくな」

亮が言葉を発すると共に戦術機のコンピューターに仮想的に構成された敵が出現する。

視界の半分、広がる大地を覆い尽くす異形の群れと対照的に澄み渡る青空

「ブリッジス」

迫りくる異形を前に式型への通信回線を開く

「…なんでしようか、中佐殿」

数瞬の後に嫌な奴に話しかけられたと言わんばかりの表情を形作るユウヤがウィンドウに表示される、しかしユウヤの気分など気にもしない。

「手本を見せてやる　よく見ておけっ!」

フットペダルを踏み込む、吹雪の換装された主機が唸りを上げロケット燃料を点火、機体を一気に押し出す。

土煙を上げながら地表すれすれを滑るように飛行する吹雪

「たかが機械如きに遅れを取るものか」

先頭を突っ切る突撃級との距離が一定に達したところで跳躍ユニットの噴射を停止、浮力が損なわれ地面へと足がつくその瞬間にサイドステップ、そして再び跳躍ユニットを点火
それをもう一度繰り返し突撃級の群れの側面をとる

「ターゲット・インサイト……撃ち貫けっ!!」

と同時に両手の突撃砲を発射、左翼端の突撃級を屠ると同時に地面を蹴ると同時に跳躍ユニットを噴射しその頭上を取る

「日本製は美味いらしい　　特と味わえ」

文字通り鋼鉄の雨を降らし突撃級を蹂躪する亮の操る吹雪
流れるような動作、全てが予定調和されているかのようなスムーズな動作、そこには一切の無駄な機体に振り回されている挙動は存在しない。

そして吹雪は宙で反転、脚部の多関節構造の膝がショックアブソーバーと同様の働きを以て着地の際の凄まじい衝撃を殺し土煙を上げながら着地する。

その眼前にせまる要撃級に向け両手の突撃砲を放つ

「アルゴス3！アルゴス2の背後三時の方角の敵を撃て、ミラージユはその支援砲撃の後切り込め！！」

銃口から閃光と共に放たれる弾丸が要撃級のまるで芋虫のような体組織を蹂躪し肉片ミンチへと変える。

そんな中、自分の眼前の敵を的確に討ちながら並列して部隊全体に効率的な指揮を飛ばす亮、しかも個人個人の細かな拳動に対する指揮をも行っているのだ。

「これが ナイトオブブラウズの実力…」

ユウヤは亮が撃ち漏らした数匹のBETAを屠りながら驚愕の声を上げる。

自分自身が最前線で直接戦闘を行いながら部隊全体の指揮を並行して行う、それは口で言うほど簡単なことではない。

何より

「なんで……なんで……初めて乗った機体であそこまで動かせるんだ ……！？」

東雲が駆る吹雪はかつてユウヤが22時間搭乗した機体であり主機こそ交換されてはいるが他は殆ど手つかず、しかもユウヤ自身が言っていた吹雪の主機出力が足りていないという意見は今、自分が乗っている式型によって完膚なきまで否定されている。

吹雪と不知火この二機の差は外見ほど無い、センサー系と、肩部・

腰部装甲を簡略化しS-11搭載機構を排除しただけで他はすべて不知火と変わらない。

その系列機である不知火弐型は主機出力を大幅に向上させている、それを乗りこなせないというのはユウヤの意見が間違っていることの証明でしかない

突撃砲を打ち切った吹雪が両手の銃を放棄する、そこに紅い戦車級BETAがまるでノミかバッタのように飛び跳ね襲い掛かる。

「ぬるいつ!!」

両腕、外縁部のシースタビライザーが即座に展開、サブアームの先端に搭載された担当の柄をマニピレーターへと運びそれを吹雪は掴み取る。
鞘を兼ねるサブアームがスタビライザーに収納され短刀の鈍い刀身が空気中に晒される。

「御庭番衆式小太刀二刀流」

回転剣舞・六連

跳躍ユニットの片側のみが噴射、その場でまるで旋風の様に刃を伴って回転する 吹雪

それは最早、ミキサード。

高速で舞う短刀による斬撃の嵐に巻き込まれ文字通り肉片となる戦

車級、その二進法による数字の羅列で作られた死骸と鮮血の雨の中で佇む吹雪はまさしく別格であった。

同時刻、A - 102 演習場

連隊規模BETAに対する演習は一部隊だけでやるには当然規模が大きすぎる。

つまり、大規模演習は他の部隊と地区別けを行いそれぞれ担当地区のBETA排除を以て完遂される。

そんな中、亮達がデータで構成された異形の屍を積み上げているその隣の演習場でも異形を屠り、その屍を積み上げていた。

薄い紫をベースにした露軍迷彩塗装を施されたSu-37チェルミンナートルである。

チェルミンナートルは跳びかかる戦車級をその腕から展開されたチェインソー、ロシア製戦術機に標準搭載される武装、モーターブレードを腕ごと振るい削り裂く。

同時に跳躍ユニットを点火、後方へと大きく跳躍し戦車級の群れにA-97突撃砲から36mm徹甲弾の雨を降らす。

「あ」

少し高度が上がった為視野が広がり隣の演習地区の様子がチェルミンナートルのメインカメラに映り、内部に佇む二人の衛士の内片方、あの夜亮がであった少女イーニャが声を上げる。

無数の戦車級に飛びかかれながらも卓越した機動と合わせた高速斬撃でそのすべてを切り裂いた光景を目にし思わず声を上げてしまったのだ。

「どうしたの？イーニヤ」

イーニヤの座る操縦席の後ろに備えられたもう一つの操縦席、肩口のあたりで切りそろえられたイーニヤと同じ銀色の髪を持つ女性、クリスカが問いかける。

「…あの人すごいよ」

イーニヤの意識の向く先に在るのは跳躍ユニットのみ若干カラーリングの違う戦術機、先日も垣間見た日本製高等練習機、吹雪

この基地において跳躍ユニットのみを交換し動作テストを行うのは珍しくとも何ともないが明らかに先日、ユウヤが駆っていた時と動きが違う。

視界にはユウヤが駆る式型の姿もあった。故に乗っている衛士が別人であることには変わりないがその腕は凡庸ではない。

短刀を収納し長刀に切り替え次々と敵を切り裂いていく吹雪、その拳動は大胆にして繊細

「あの機動……どこかで……？」

長刀を振るう吹雪のモーションにデジチャン既知感を感じる。

いや、今はそんなことより演習に集中しなければ

「確かにすごいね、イーニヤ私たちも負けないようにしないとね？」

「うん！！」

頭の隅に引つ搔かかる疑念をクリスカは打ち払い機体操作に専念するのだった。

岩肌が剥き出しの荒野に積み上げられた無数の屍、その中で紅い血に濡れながら佇む数機の鋼の人影、二機のアクティブ・イーグル、吹雪、不知火弐型、屋気楼の五機

『演習終了！JIVES解除します。』

其々の戦術機、アルゴス小隊の面々には聞きなれたステラが通信機越しに、亮と唯依には月砂がそれを告げる。それと同時にBETAの死骸も戦術機を赤く塗りあげる返り血もキレイに、消え去る。

『了解した　　これより“第二演習”を開始する。』

『　　了解　　』

亮がそれを口にし、月砂が答えると共にJAVSで作られたデータの死骸が消滅、同時に戦域データリンクも途切れる。

『あ？一体何が起こったんだ！？』

『おい！！CP返事しやがれ！！』

『ステラ！？、隊長！？何が起こった！！！！』

突然の事態にざわめき立つアルゴス小隊、そして彼等のコクピットに警報が放たれる
ロックオン警報が

『さて、篁中尉　　有象無象は任せた。』

『はっ！！』

唯依の返事を聞きながら亮は吹雪に長刀を構えさせる。

刃引きなどされていない本物の長刀を、そして黒光りするその切っ先がユウヤの式型に向けられる。

『な！？何のつもりだ中佐』

開かれた回線を使って亮に叫ぶユウヤ、しかしそれに冷たい殺気を纏わした言葉を返す。

『ユウヤ・ブリッジス、剣を構えろ　　さもなくば死ぬぞ』

第五十二話 実力（後書き）

るろ剣やっちやった

第五十三話 柵ノ壁

『中尉：あんた　　あんた等はそんなにユウヤの事が気に喰わないのかよっ！？』

アクティブ・イーグルを駆るタリサが目の前のUNブルーに機体各所の茜色のレーダーカバーが映える戦術機に乗っているであろう唯依に向かって叫ぶ。

『私個人の感情などどうでもいいことだ。

そして我が国に必要なのはこの機体、蜃気楼と弑型………ブリッジスが必要という訳ではない、故に邪魔をするなら　　』

蜃気楼からの通信回線から通じる機械的音声に変換された唯依の声そして蜃気楼は彼女の意志に従い背に覆うように装備されたテスラドライブユニットに装備されたブレードマウントから長刀を引き抜き構え

【斬る】

二機のアクティブ・イーグルにその切っ先を向けた

『そっかよっ！』

アクティブ・イーグルの膝頭から延びるウェポンラックの側面装甲がスライド、短刀の柄が飛び出しそれを演習用の重りとセンサーのみの模造銃を投げ捨てると共に躊躇なくつかみ構える。

そして後ろを向く四つのスラスタ―に炎が灯る。

『やってやるよ！！！お姫様っ

！！！！！！』

第五十三話 柵ノ壁

『ユウヤ・ブリッジス、剣を構えろ

さもなければ死ぬぞ

』
少し離れた場所で唯依と二機のアクティブ・イーグルが戦闘を繰り広げる、最中で絶対零度の殺意を機体から染み出させながらユウヤの弐型に刃を向ける吹雪

『中佐：本気ってわけか

』

ユウヤは弐型に長刀を装備させようとする。

『ブリッジス、それを抜いて【本当に】いいのか

？』

剣を構えておきながら亮が言葉をかける。

『なっ

？』

『この吹雪は主機出力、電力効率共にお前の式型を下回っている。況してや演習直後だ。このまま貴様が尻尾を巻いて逃げれば追い付くことは出来ない……もう一度言っ。

剣を抜いて本当にいいのか？

』

亮の吹雪はユウヤの式型に比べ激しい機動を取り本来想定していない跳躍ユニットの装備
ギ型丙と仕様が似ているということは欠点も同じ、活動時間が迫っているのだ。

つまりユウヤはここで亮に背を向け逃げれば事無きに終わる。

即ちユウヤは亮と初めて出会った時と同じように逃げ道を用意されたのだ。

逃げたければ逃げろと

目の前の細身の戦術機から滲み出る圧倒的かつ鋭い絶対零度の刃のごとき突き刺さるような殺意、

ユウヤは掌が汗ばむのを感じ、全身に鳥肌が立ち呼吸がはやくなる。

式型に長刀を装備させれば其れは開戦の合図となり、機体を乗りこなせない上に現在唯一の実戦装備たる長刀の使用経験は殆どない、結果は判り切っている。

しかし

『ざっけんじゃねえっ！！！！』

ユウヤの怒声と共にブレードマウントが稼働、その柄を式型が掴むと同時にロックボルトが弾け飛び刀身を挟み込んでいた固定器具が開き火薬式ノッカーが稼働、

長刀を勢いよく跳ね上げそれを地面に叩きつける様に振り下ろし構える。

『はいそうですかって逃げれるわきゃ無いだろうっ！！』

不知火式型に装備されたジネラルエレクトロニクス製F-140エンジンが唸りを上げ噴射、ユウヤの式型は長刀を手に跳躍ユニットの爆音と共に亮の駆る吹雪に向かい翔け出した。

『フっ 来るがいい』

猛然と迫る式型を見据えながら亮はその口元に笑みを浮かべる。

まず第一段階はOKか

『ぬあああっ！！』

式型が戦術機用の巨剣を振るう。その鋭利な刃は質量とカーボンナ

ノチューブ構造体であるが故の柔軟な特性を以てダイヤモンドクラスの硬度を誇るBETAの外殻から戦術機の装甲に至るまであらゆるものを切断する。

しかし

『だめだ』

『な　　っ!?!?』

迫りくる刃と式型を半歩後ろに下がるだけで回避する吹雪

既についていた加速の為吹雪を通り過ぎてしまった式型は跳躍ユニットの出力の左右比率を変更することで向きを変えた後に噴射、向き直ろうとするがバランスを崩してしまふ。

堪えるよっ!!

米軍機であれば容易な其の機動も静安性を打ち消す為に高くなった重心、まるで十字架の左右に重りを付けたかのような揺らぐ重心バランスによりうまく取れなかったのだ。

『ただ真正面から馬鹿正直に切りかかるやつがあるか！虚を突かず相手を打倒せると思うな!!!』

敵の虚を突くには【仕掛け】【動き】【間】を外すのが基本
と思え、そのどれかを読まれれば何万回試そうとも熟練者には通じ
ない』

『うっせえんだよっ!!』

崩れたバランスを驚異的な姿勢回復能力で何とか取り戻したユウヤは式型を再び奔らせる。

式型は空気を引き裂きながら長刀を構え再び振り下ろす

「 戦闘において最も大切なもの それは【想像力】だっ

！！！！」

「 グあっ！！！」

振り下ろされた長刀の軌道上あるはずの吹雪の機影が消え、その後直後に式型の上半身がのけぞる。

先ほどと同じように剣の軌道を読み切った吹雪が半身を翻すと共にすれ違う式型の顔面に肘打ちを見舞ったのだ。

式型頭部のカメラカバーが割れ破片をまき散らし、頭部の丸みを帯びたリーダーカバーがへこみ^{ひしゃげ}拉げる。

蹈躡を踏みつつもユウヤの反射にも近い操縦によって何とか転倒だけは免れた。

何が、俺とアイツ乗っている機体は同じ日本機、直系機 同
じ軌道特性を持った機体…… “何が違う”っ！！！！！！

割れたリーダーカバーの隙間からその内に並んでいた複眼を晒す式型内部でユウヤは
思考する。

アイツが言った“手本”、どうやって吹雪を乗りこなしていた？

先の演習で吹雪が見せた軌道を思い浮かべる

『相手も自分も法則に縛られている以上、相手の・自分の外観から動きによる立ち位置や体勢を想像し予想しろ　戦術機がなぜその外観を持っているのかその意味を理解しろっ!!』

『　　っ!!』

日本製戦術機の異常に高く設定された重心、それは何故か？頭部から延びるマストセンサーは何故其処まで長いのか、

戦術機が縛られている法則、それは空力という流体法則そして物理法則つまりは　　慣性の法則

おぼろげに操作の度に付きまとう違和感が見えてくる。

そして、吹雪の軌道　　跳躍ユニットを加速などの人間の移動力強化のみに使用する変則的機動

跳躍ユニットに依存しないANBACと呼ばれる手足を振りその反動を使用した宇宙で船外活動を行う宇宙飛行士必衰技能

『　　そして』

今度は吹雪が長刀を水平に構え引き絞りその刀身の峰に空いていた手腕を這わせる。

『戦術機が人型機動兵器である以上　　人間の古典的な武装、戦

術も又有効だっ！！！！！！』

牙突

地面を蹴ると同時に跳躍ユニットを全力噴射、吹雪の戦術機の中では軽量に値する機体を跳躍ユニットが一気に押し出し凄まじいまでの加速を与える。

『 つ！！！！』

凄まじい勢いで式型に迫った吹雪は間合いに入るなりまるで銃弾の如き速さで構えた長刀を突きだす。

刀身に這わせた手腕が居合抜きの際の鞘走りと同等の効果を齎し凄まじいまでの加速が踏み込みとそれによる偏った重心が移動することにより振り子の様にさらに加速されその瞬間に長刀が打ち出されたことよって瞬間的に幾つもの加速を与えられまさに閃光の如き速度に達した長刀を回避するのは不可能

“ズシャっ！！！！ ブチイイ ！！！！”

長刀の刀身が式型の損傷した頭部に突き刺さりそのまま引きちぎる。千切れた不知火式型の首から吹き出す鮮血の様に雷が奔る。

しかし

『 唯じゃ終わんねえっよおおおおおおおっ！！！！！！！！！！』

ユウヤは反射的に機体を操作、弐型は仰け反り倒れながらも長刀を下から上へと振り上げる。

まるで自分が弐型になったかのような不思議な一体感を一瞬にして刹那の時の狭間に感じるユウヤそして長刀は

吹雪の左腕を切り飛ばしていた。

頭部が撃ち抜かれ仰け反った状態から無理やり長刀を振るった為、荒野に横たわる弐型

それを見下ろす左腕を肩口から欠損した吹雪、そしてその長刀の切っ先は弐型のコックピットに突きつけられている。

『畜生……ここまでか………』

倒れふし頭部を失った弐型の操縦席でユウヤが呟く、完全に始終圧倒されたしかも手加減された上で　しかし

『でもよ……一矢報いたぜ　』

不敵に嗤うユウヤ、次の瞬間突き付けられている長刀がコックピットごと自分を貫くかも知れないというのに、不思議と死の恐怖は無かった。

『……………ふっ　　CPこちらアルファ、演習目標の達成を確認した　』

『CPより各機、状況終了!』

『なっ!?!?』

突然、吹雪を駆る亮の言葉と突然回復したH Qとの通信に目を見開き驚きの表情を形作る。

『ユウヤ・ブリッジス、最後の一太刀見事だ。……【その感覚】を忘れるな』

『……………』

空いた口が塞がらない

呆けた様子のユウヤにCPを行っていたステラから帰還命令が届くが耳に届いても頭までは届かなかった。

「ふう　　慣れんことはするものじゃないな」

吹雪から降り立った亮は吹雪の胸前に降るされたコックピットレベル通路でため息を漏らしながら呟く

「お疲れ様でした中佐」

そんな亮に吹雪の隣のハンガーに固定された屋気楼から降り立った唯依が語りかける。

「篁中尉か…すまん、こんな茶番に付合わせたりしてな」

「いえ、しかし意外と教え好きなのですね」

二体のアクティブ・イーグルを元からの腕に加え圧倒的な機体性能差で行動不能に追いやった唯依は亮とユウヤの戦いを見ていた。

いや、戦いという名の教練を

「……………そうだな、つい性癖くせでな……………」

「しかしこんな遠回りなことをせずに普通に教えてもよかったのでは？」

唯依の疑問に対し首を左右に振りながら答える

「だめだ。ああいう手合いは実践させつつ考えさせないとな敵にほんじの言うことを素直に聞くタイプじゃあないからな」

肩を竦め苦笑する亮

本当に素直じゃない人なのですね

「そんなものでしょうか？」

「そんなもんだ　　少し着替えてから風に当たって来るとするよ、
疲れただろ？今日は休め」

「御心使い感謝します。」

敬礼を行う唯依に答礼を返した後、ロッカールームへと足を運ぶのだった。

「おうおう…これまた三機とも派手にぶっ壊したな……………」

繋ぎを来た白人の青年、ヴィンセントが戻ってきた機体たちを見上げ声を漏らす。

アルゴス小隊の戦術機ハンガーに並ぶ帰還した戦術機はみなどこか欠損している。

本来、仮想的な戦闘演習 JIVE S では戦闘ダメージを負ってもデータにより損傷部位の動きを制限するだけなので機体は稼働ダメージのみとなるが今回はほぼ実戦に近い演習であり特に三機の損傷が酷い

元から予備機であった吹雪は兎も角、アクティブイーグルと弐型は早急に修復しなければ X F J 計画に影響を及ぼしてしまう。

これから数日の作業内容に少し気重くなると同時に機体をいじれることにワクワクするヴィンセント。

「すまないヴィンセント…」

「なんだ、今日はやけにしおらしいな？」

隣にいたユウヤの態度に少し疑問を感じる。

「手も足も出なかった。あの人が本気だったら俺はここに居ない、それどころか稽古を付けられていた。」

「……」

ユウヤの言葉を黙って耳にするヴィンセント、今日の実戦形式の演習がユウヤに何らかの変化をもたらしたことは確実だ。

「『相手も自分も法則に縛られている以上、相手の・自分の外観から動きを想像し予想しろ 戦術機がなぜその外観を持っているのかその意味を理解しろっ!!』」

中佐が言っていた。教えてくれヴィンセント何故、こいつはアメリカ戦術機と外観からここまで違う？こいつを乗りこなしてやるにはどうしたらいい？」

ユウヤの言葉にヴィンセントは一瞬意味を見失い瞳を輝かせる。

「へえ…気付いたって訳か 良いぜ！教えてやるよ」

ヴィンセントは素直に喜ぶ、ユウヤが親友が一つの柵しがいみを乗り越えようとしていたのだから。

「まずアメリカ式の機体は基本的に跳躍ユニットで加減速とか行っかなり力づくの機動制御を行ってる、これはお前にも当てはまることだ。」

…でもよこれはかなり効率が悪く上に反応も如何したって僅かに鈍くなる。

日本機は違う、あの頭から延びてたマストセンサーは丁度戦闘機の垂直尾翼みたいな役割をしててなその向きを変えたり偏った重心を

急激に動かして跳躍ユニットだけで機動制御するよりもずっと高効率かつ鋭敏な機動制御が出来るんだ。」

「　　っ！！」

大量の推進剤とロケットエンジンとジェットエンジンのハイブリットを内蔵した跳躍ユニットはかなり重い、それを動かすより空力制御と重心移動を用いればずっと早く効率的に機体の方向転換などの制御が可能だ。

あの異常に細い脚部や肥大化した肩部、頭部から延びるマストセンサーの不知火に与えられた外観の意味を理解する。

「まあ、それというのもアメリカはG弾で粗方敵を吹っ飛ばした後の掃討戦に使用されるアメリカ力機と鼻っから防衛から決戦までの汎用を目指して作られた日本機じゃ装備、仕様は全然違う　　部品の損耗率もな」

なるほどと納得する、投入される戦局が違えば戦術も変化する当然そうなれば機体が違う状況下で運用される以上部品の損耗率も変化する。

「でもよ、ユウヤお前さんの部品損耗パターンは典型的な米軍衛士の損耗パターンとぴったり一致するわけよ、本来想定されていない操縦をやっても機体が反映できない
お前がこいつを乗りこなせなかった原因だ」

そういつて再び式型を見上げるヴィンセントにつられユウヤも式型を見上げる。

「お前の改修要求が呑まれなかったのも、その仕様だと日本の戦局に対応できていないガラクタにしかならないからだ」

「俺は分かって居なかったのか此奴の事を」

「こいつをお前に合わせてチューニングすることは俺にもできる。ただどなそれはあくまでお前と弐型の意志疎通を上手くいかせるための補助に過ぎないんだ。

……一方向的押し付けじゃ戦術機も人間も答えちゃくれないんだ
そこをくみ取って100%の性能を引き出してやるのが衛士だ
る？」

挑発するような激励をかけるヴィンセント

「さすがだぜ、ヴィンセントお前は天才だ!!」

「あははははやっとなったか!もつと言え、もつとだ!!!」

「でも、お前も中佐もなんでもつと早くに教えてくれなかったんだ?」

「お前が素直に聞くタマかってんだ、こついうのは意識の問題だ。幾ら周りが言おうとお前自身が分かるうとしなければ“馬の耳に念仏”なんだよ。」

そつだ、今回の演習で命の危機を感じ弐型を乗りこなす為はどうしたらいいのかを考え始めたのが始まりだ。

それまで自分は弐型に欠陥があると疑って信じなかったのだから。

「そうだな……でも、お前と不本意だが中佐の御かげで式型こいつを乗りこなすための糸口は掴んだ、後は手繰り寄せるだけだ」

「そつだ、その意気で頑張れよ【トップガン】」

胸の前で拳を握りしめるユウヤにからかいを織り交ぜた激励を送る
ヴァインセントであった。

「……でもよ、こいつら修理に時間かかるから暫く実践できないぞ

……」

「……あ

やる気が空ぶってしまった。

「風が心地いいな」

国連軍服の上にEUの軍服を羽織り、アラスカの大地を踏みしめる。
川沿いに設けられた歩道を歩き基地の中心で北から直角に曲がり西
へと延びるユーコーン川を眺める。

夕陽が徐々に落ち川の穏やかな水面に揺らぐ並さえも紅く染める。

~~~~~

ふと風に乗って耳に凜とした音色が届くオカリナの音色だ。

「……この音色は」

そのオカリナの音色に誘われその元へと足を運ぶ、やがて開け放たれたフェンスを越えロシア領側に足を踏み入れる。

どちらも一つの基地の中に設けられた国境線、しかしこの基地が国連基地という性質上、基地に所属する職員は自由に国境を行き来できる。

そして徐々にしかし確実に近づいてく音の発生源  
やがてその旋律を奏でている存在が目に見えた。

銀色の髪を携えあの時と違い肩口に斬り添えたかつての少女、  
彼女はその傍らにイーニヤを佇ませ曲を奏でていた。

嘗て自分が彼女に聞かせた曲を

数歩の距離まで近づくと彼女が振り向く。

「ふむ、懐かしい旋律に誘われて来て見れば、これはまた懐かしい  
顔に会えたな。」

俺は数年前に邂逅した少女に語りかけた。



第五十三話 柵／壁（後書き）

またるる剣やっちやった

外伝、それぞれの思惑

我等が立つは不在の神に引き裂かれた大地

我等が往くは 女神の嘆きに満ちた大海原

いざや開かん      いざや進まん

天と地と海の果つる彼方への道を

勇者なら詠い進め      そして、勝利の鍵を掴み取れ!!!

外伝、それぞれの思惑

横浜基地の地下ブロック、その一角……ごく一部の関係者のみが進入することのできる一角

其処に備え付けられた巨大な試験管、天井と床を繋ぐ<sup>シリンダー</sup>その中に収められた存在

それは竜にも似た異形……しかしその異形は全身がそのまま化石になったかのように硬化し元がどういった生物なのか一切不明、

ただその胸の恐らくは半球体であろう割れた一部分まるでそこだけが欠損しその部分には人ひとり入れるだけの空間が備わっていた。

「原初のアーリア人……もしあいつがそうなら、BETAに関して何か知っていても可笑しくない」

そのシリンダーに収められた異形を見上げる軍服の上に白衣を纏った妙齢の女性、香月夕呼。

彼女が見ていたのは1960年、BETAが地球に飛来する約10年前に中部アフリカに存在するコンゴ民主共和国コンゴロにおいて発見された謎の生物の石化した躰

当時BETAとの接触と同時に学会、特に生物学会を騒がせた貴重

な標本だ。

なぜならこの生物は人間の肝細胞によく似た素材で構成されその体は蟹かにによく似た身体構造を持っていた。

しかし、何より学会を震撼させたのはその体を構成するアミノ酸。通常の人間を始めとする地球上ほとんどの生物はL型アミノ酸でその肉体を構成するがこれは違った

L型アミノ酸と左右逆のまるで鏡に映ったかのような左右逆の分子構造を持つD型アミノ酸でその体が構成されていたのだ。

世界初のD型アミノ酸で肉体を構成された生物、しかも解析していくうちに驚愕の事実が判明した。 脳が存在しないのだ。

いや、脳どころか消化器官、心臓 あらゆる臓器が存在しないのだBETAと同じく

BETAは基本的に攻撃に不必要な地球上の生物にはあるはずの生命維持に必要な不可欠な臓器が存在しないことが第2計画において判明している。

しかし、BETAと違いこの異形は世界各地に古くから伝承が残されていた。

その名をアーリア人、またの名をソムニウムと言う。

何故、この異形が人間と称されるのかそれは謎に包まれているが、伝承を統合することでこの生命体は地球生命の敵となる存在、

毒を駆除する人間で言う肝機能のような存在であることが判明している。

研究目的でオルタネイティブ権限を用いて取り寄せたこの標本、基本的にクローン技術の発展である疑似生体で体を構成し唯一絶対に人間と違う部位、脳をBETA由来のG元素を用いて作られた量子電導脳にした人間モドキ、それに人間の人格を含むすべての脳内情報をダウンロードすることで00ユニットは完成する。

しかし、量子電導脳はその機能維持の為にODLという溶液に浸して置かなければならないが、これは時間経過、負荷率によって劣化し透析を行う必要がある。

これを行うのは現在の人類技術力では不可能であり、反応炉に直接00ユニットを接続しなくてはならない、しかし完全にその機能が判明してはいないの敵勢力のものを馬鹿正直に使用するのは危険すぎる。

そのためBETAによく似たBETAと違う種を研究しそこを補間するためこの標本を取り寄せ00ユニットの完成と平行し研究を行っているのだ。

それとは別に夕呼が気に掛けていること、彼らがBETAと戦闘を行っていたのだ。

地球生命にとって免疫機能の一端を担う彼らのはっきりと敵対した。それは彼らがBETAを地球生命に対する敵と認識しただからだろ

う、しかし人間が初めて体験するウイルスに無力なように彼らは敗北した、それは間違いない。

「もしかしたら、アイツは進化した免疫抗体…… BETA に対する最もベターな戦法を行使できる存在、【ベターマン】いや、それすらも超えた【ベストマン】なのかもしれないわね。」

相手が人間の姿をしていたのも BETA に現状、最も対抗できている存在として世界が認識した人間をベースに産み出した免疫抗体

だとしたらその存在が超常の力を持つ理由も説明できる。

そして、“それ”が社霞のリーディングをブロックできたのも同種かつ同等以上の力を持つており人間、もしくは星、さらには宇宙そのものから知識をダウンロードできるとしたら

正しく天然の 00 ユニットだ。

「いずれにせよ、何としてもアイツを捕らえなくてはならないよね」

シリンダーに収められた石化した竜を睨み付けながら夕呼は呟くのだった。

「やあ、久しぶりだねウラジミル」

イギリス首都、ロンドンの美しい町並みの中の洒落たカフェのオーブンテラスで新聞を読みつつ紅茶を飲む鎧衣は自分に近寄りその歩みを止めた一人の、短く駆け立ってた金髪にサングラスを掛けた白人男性を向かえ新聞からその視線を移す。

「ああ、そうなる。だが私は昔と違い今はそこそこ忙しい身の上なのだが？」

彼は陽光を反射するサングラスを指でつつきながら返す。

「それはすまないね、でも君にも見せておきたくてね」

「ほう、一体何を？鎧衣課長」

ウラジミルと呼ばれたロシア人男性に鎧衣は相変わらずの含みある笑みを返す。

「人類の希望だよ                      おっと来たようだね案内人が」

新聞をしまう鎧衣、ふと其処に一台のジープがエンジン音を響かせながら近づき、そして停車する。

「少々お待ちせしてしまつたようですね」

二人を迎える同じく二人の青年、イーグルとランティスが其処に居た。

やがて、一向は簡単な挨拶を終えた後にイーグルの運転するジープに乗りロンドン中枢、街の中央を通る巨大な川、テムズ川に設けられた軍港へと向かう。

幾つかの検問をう繰り抜けやがて基地施設に入るとともにおそろくは物資搬入用であるう戦術機が数機ほど直立したまま入れる巨大なエレベーターにジープごと入る。

網目状のシャッターが下り、機械的な駆動音とともにリフトが下降を開始する。

「ウラジミル、君は今のソビエト……・引いては君の祖国であるロシアをどう思う？ 国土を失い、未来ある若者をロボットのようなただの戦闘マシンとして育てる現態勢、他国家を力で押し込め自分たちだけ後方で暢気に過ごし身内同士で足の引っ張り合いを行う社会主義

かつての強国、ロシアはもう存在しない」



「……………」

灰色の枢機卿と呼ばれるかつてのロシアの諜報活動工作員に語りかける鎧衣

彼は権力欲は微塵もなく、仕事一筋で生きるタイプではあるが今の祖国の状況を快く思っては居なかった。

彼が政治の裏に精通しているため、社会主義国家上層部の腐敗したものに嫌悪までを抱いていた。

醜い権力争いのせいで自分は故郷を失ったとまで思っていたのだから。

「私は常々、中世のように、汚職する公務員は手を切り落としてしまえばいいと考えている。

しかし、彼らはゴキブリのように逃げ足が速く毒蜘蛛のように用意周到だ。」

冗談のようなことを言っただけのけるウラジミルだがその声と表情に一切冗談の色はない。

そんな彼の様子に鎧衣もまた辛らつに返す

「長く続くBETA戦役、腐敗した上層部、離れてしまっている国民の心、確かに国として終わっているね。衣食そろって礼節を知る今のロシアは衣食そろっても居ないしそもそも礼節を必要と考えていない、これでは人が人らしく生きるのとは不可能だ。

そこで私は君に一つの提案をしよう　ウラジミル・プー

チン、道を往く者よ。

強力な指導力によって秩序と安定をもたらす【法の独裁者】になつては見ないかね？」

「【法の独裁者】……………」

「今のロシアには変革が必要だ。そしてそのためには劇薬が必要なのだよ。そしてそれは各国の裏を知り、現実を見据える存在によって為さらねばロシア　　人類に生存の”道”はない」

鎧の言葉にプーチンはBETAの勢力図を頭に浮かべる。

現在ユーラシア各国の前線国家の踏ん張りによってかろうじてBETAをユーラシアに押しとどめてはいるがそれも時間の問題、基本的に東ドイツと同じ戦法を用いているロシアが同じ結果を迎えるのは想像難くない。

そうなれば、貴重な地下資源の多くが失われ貴重な生産国家であるアメリカが前線に立たされその生産力は激減、そうなれば他の前線国家も敗北する。

いまや人類総ての国家が人類存亡の一手を担っているのだ。

「【人類は今、この一瞬の間にも存亡の危機に立たされている】。誰かがこの流れを変えなければならぬ。力はある人物によって齎された、後はそれを使う意思だけだ。」

「力……………？」

ウラジミルが怪訝な表情をとったその瞬間、エレベーターの壁が透明に切り替わりテムズ川地下に作られた巨大な空間が見渡せるようになり其処にたたずむそれが目に映る。

「…これは……っ!？」

それは駆逐艦と戦術機母艦を合わせたようなフォルムの500メートル半ばまで達する巨大な戦艦が地下空間に建造されたドックに固定されていた。

何より目を引くのは艦後方のロケットクラスターエンジンと巨大な翼、船全体を鮮やかな赤で塗装され竜の頭を連想させる艦首

「これがユーラシア奪還に向けて現在、最終調整中の欧州の技術力の粋を集めて建造された万能機動戦闘母艦、スペースノア級零番艦ペンドラゴンです。」

ジープの運転席に座っていたイーグルが合わせてその名を告げる。ペンドラゴン、かつてイギリス、ブリテンにて異民族の侵略を跳ね除けた英雄アーサー・ペンドラゴンにちなみ赤竜の名を冠する戦艦

その艦首は容易にモジュール交換を行えるように艦全体のブロック工法を応用したフレキシビリティ構造が採用された。

これにより、艦首モジュールの換装によって短時間で目的に応じた装備を調える事が可能となったのだ。

そしてペンドラゴンの艦首は異世界の機動戦艦【ヒリュウ改】に装備された超重力衝撃砲をモジュール化しスペースノア級戦艦に搭載

したものだ。

これは強力な重力波を目標に照射するものであり。強力な重力波の中では重力が大きく変動するために、この変動にさらされた物体は粉碎されるといふものであり発射角度の問題から地上では使用を制限されてしまふが戦艦としては破格の攻撃力をペンドラゴンに与えたのだ。

「相手を原子レベルで分解する反中間子を照射する反中間子砲を艦上下部に四門づつ、48cm艦砲を副砲として艦側面に二門ずつ計八門その他間全体に迎撃用機関砲をくまなく装備しています。さらに重力制御時術により飛行可能な上、重力場の出力を上げることでブレイクフィールドと呼ばれるバリアシステムを形成可能となっております。」

「…凄まじいな」

イーグルの説明に驚嘆しか浮かばないウラジミル  
超大火力の艦砲を装備した機動戦艦、大陸奪還における問題、支援砲撃が戦車部隊のみしか行えないという問題を完全克服した上に圧倒的な攻撃力と共に防御手段さえも付加されている。

「それだけではありません、この船には内部的な機動兵器整備施設が有されていて長駆進行においても戦術機を初めとする機動兵器の機能を維持するほか医療設備、トレーニングルームなど多目的を目的とした設備が備えられ長期の作戦行動を可能としています。」

「  
やがてエレベーターのリフトがドックの床に着き、ジープが再び動

き出しドックから赤い竜を模した戦艦内部へと伸びる橋、物資搬入口から内部へと侵入する。

「そろそろ、私にこれを見せた理由を教えてはくれな  
いかな？」

「EUは現在BETAに対する研究からあの異形の正体がさしずめ地球生命に対するウィルスの存在と結論付けました。ハイブとは言ってみれば腫瘍です。」

「それで？」

言われて見れば確かに似ていると思いつりながらも言葉の続きを促す。

「とある事情で超技術の数々を手に入れたイギリスでしたがそれでは各国のパワーバランスが崩れ欧州が空中分解してしまう危険から欧州全体でプロミネンス計画のようなものを立ち上げ各国に技術提供を行いました。それを利用した戦術機を配備しパワーバランスを均一化し同時にユーラシア奪還のために力を蓄えていました。」

「私にこれを見せたのもその延長線上か？」

「確かにその側面もありますが  
実直に言わせてもらえば  
今のロシアは信用できない。」

社会主義と神でなくては為せない夢想主義を掲げその場しのぎを繰り返すだけの愚者とは共闘できません。」

進行方向を見つめるイーグルの眼差しと同じく真剣な声色を伺う

ラジミル

「つまり、この技術を提供し共にBETAを駆逐するに当たってウラジミル・プーチン、君が現政権を打ち倒し実権を握れ  
まりはそついうことだよ。」

「見返りは何だ？」

鎧衣の言葉に彼が返す。

ただほど高いものはない、後からいろいろ請求され碌でもないことになるのは歴史の必然だ。

「オペレーション・ウロボロスへの参加とBETA駆逐後のユーラシア連合の結成、  
その先にある【汎人類連合】への形成のための助力を」

「汎………人類連合」

「つ………!!」

圧倒的なスケール、思わず気おされてしまう。

総ての人種、国家が手を取り合い一丸となる政略、その一手に自分が誘われているのだ。これは自身の手腕、人柄、信念が彼らに見込まれているからに他ならない。

「君でなくてはならないのだよ、君は諜報員であると共に武道家だ。柔道を哲学とまで言う君でなくてはならないのだよ。共に母星<sup>はほほし</sup>を守る為に世界を変えないか？」

現状、地上戦力のみでもBETAからこの青い惑星を守りきれるか  
は判らない。しかもそれも現状BETAの増援が月からのみという

状況下だからこそだ。

火星から一基でも着陸ユニットが飛来した時点で人類は終わる。

まさしく鎧衣が言ったとおり、人類は今この一瞬でさえ存亡の危機に立たされているのだ。

「着きました、御覧ください」

イーグルの駆るジープが止まり、其処に広がるそれらに一同の視線が向けられる。

ジープが止まっていたのは機体格納庫を一望できる通路、ウラジミルはジープを降り身を乗り出すようにそれを見渡す。

其処に立ち並ぶのは建造されている途中の機体が幾ばくか見られるがどれも戦術機とは根本から違う機動兵器群

黒い電磁吸収塗料を塗られたジャケットアーマーを装備された”ビルトビルガー”と同じく塗装された”ビルトファルケン”

そして50メートル近い巨体を誇る紫のグルンガスト式と赤い参式

立ち並び神の如き氣を発する4機の魔装機神

まるで中世の騎士が翼を持ったかのような機神

人型の鴉、それは敵対するものに死の漆黒をもたらす凶風

透き通り清らかかつ力強いモノを秘めた拳闘士

白き龍を両肩に携えた鋭丹な剣士

「これら総ては来るべきBETAとの決戦と――その先、奴等の本隊に備えて建造されているハルペーの鎌だ。」

言葉もなく魅入っていたウラジミルに助手席に座って今まで沈黙を守っていたランティスが言葉を発した。

「本隊……？」

「そうだ、今の奴等は先遣隊に過ぎない。やつ等を滅ぼした時人類を危険存在と認識した奴等が人類を真に殲滅させるための本隊を送り込んでくる。」

「　　っ！！、そのための汎人類連合かつ！！！」

目を見開きながら助手席に座ったままのランティスに視線を注ぐ。この場にいる面々の真の思惑を悟った、ウラジミルはそのサンングラスをはずす。彼の灰色の瞳が露になる。

「……どうやら選択肢は無い様だ。私も一枚噛ませて貰うとしよう。故郷を守る為に　　」

ウラジミルの言葉に鎧衣は満足げに頷き、イーグルは「宜しくお願います」と右手を差し出し、ランティスは僅かに安堵の息を漏らすのだった。



外伝、それぞれの思惑（後書き）

ウラジミル・プーチン

2008年までロシアの大統領をしていた実在の人物

ヒリュウ 赤い竜 イギリス ペンドラゴン

こんな感じ

## 独自設定用語集

命力

文字通り命の力、生きようとする力。生命生み出した大いなる力  
Gストーンが発振しているのはこのエネルギー

災力

全てを死に誘う力、 - の無限力  
時折、邪界思念、などとも呼ばれる。

日本神話における創生神、イザナミのミコトは我が子を産み落とす際に命を落とし黄泉の国へと閉じ込められ生界に存在するすべてを呪うようになりその結果、寿命というものが生まれたと日本では伝えられている。

つまりこの呪力のような力、命力と同じ性質を持ちながら完全に反対の周波数を持っている。

リミピッドチャンネル（ベターマンベースの独自設定）：

場に存在する意識の波を読み取る力、型月の精霊種はこの力を持ち星と対話しアカシックレコードから情報のダウンロードを行う  
また人間にもこの力を持つ種族があり『セトラの民』と呼ばれていたが時の流れと共に消滅した。能力自体は精霊種のそれに大きく劣

り限定状況下での意思疎通が限度で強いもので星の声を聴く程度

しかし、限定的に情報のダウンロードの能力もあつたためリンカー  
ジェルという触媒を用いて情報を得ていた。

念動能力者（スパロボOG×ベターマン+独自講釈）

リミピッドチャンネルを有していたセトラの民の末裔の総称、T-  
LINKシステムで増幅された思念波がアカシックレコードに干渉、  
情報の書き換えを行うことで限定的に超常的な現象を起こすことが  
可能となる。

特に優秀な者はサイコドライバーと呼ばれる。

カンケル（ほぼベターマンと変わらない）

全てを死滅させようとする力、負の命力、邪界思念、災力などと呼  
ばれる力の干渉によって変性した生命体

総じて全ての生命を一方的に捕食する壊れた生態系を構築するいわ  
ば癌生命体

聖杯から生まれようとしていたアンリ・マユもこれに該当する。

起源の命力の前ではその生体構造を維持できず触れただけでその部

分が崩壊へと導かれる

青竜：多様な属性を持っていた地球の属性の一つ変化を司るアルティメット・ワン

つまりはORTや紅い月と同位の存在、世界の分身の一つではあるが束縛を嫌い世界の意思、ガイアから離反する。

しかし、ガイアを守ろうとする意志は強くカンケルや他の星のアルティメット・ワン侵略に備え自分の血と力を受け継ぐ人間を作り出す。

この人物が5人の魔法使いのうちの一人、東雲のご先祖様

変化を体現するため変化を促す時の属性と変化を体現する命の力を持つ、体内に龍玉を持つ、これはGクリスタルと同じもの

ライフストリーム（FF7+テイルズ オブ ジアビス）  
星の命そのもの

肉体が土に還るように全ての命はここから生まれ此処に還る、

生命が死した後、その命は現世で蓄えた記憶ごと星をめぐる命の流れたるライフストリームに還ることで記憶を還元しライフストリームに含まれる記憶粒子がその記憶を媒介しているため素手で触れたりすると膨大な情報量に精神が圧迫され廃人になる。

リンカージェル

桜色に発光する液体。ミトコンドリアと似た特性を持ち複数の命と触れ合いエネルギーを発振するなど多くの特性を有する。セトラの民のリミピッドチャンネルを強化できる。

青竜の力がさしずめ命力と称すならリンカージェルが表すなら活力と称すべき力であり朱雀の力

Jジェル

紅い宝石、Gストーンと基本性質を同じくし内部の記憶粒子結晶回路を構成しているライフストリームを

一個の命と誤認したリンカージェルがGストーンのエネルギーを増幅、放出するため個人が触れた場合でもあつても膨大なエネルギーを放出する。

エネルギーの形質が変動しているため災力を中和することはできないが干渉を阻害することができる。

Gクリスタル：東雲など青竜の血をひくものが体内に持つ龍玉、これが絶えず発振している命の起源の力は世界に満ちる災力を絶えず中和し宿主を不老長寿へと変える。東雲が霊力、魔力を双方使えるのはその大本である起源の命力を持ちそれを変換する回路を体内に併せ持っていたため

第五十四話 結ばれていた縁（前書き）

挿絵に挑戦？してみました

## 第五十四話 結ばれていた縁

「り、亮……なのか？」

上ずった声と共に振り向いた彼女はあの時のような少女ではなく一人の立派な女性になっていた。

「この数年で容姿が変わった気がしないのだが、もしや忘れたなど寂しい事をいうなよクリスカ？」

少し意地悪く苦笑しつつ言う。

すると彼女は俯きながら絞り出すように言葉を口にする。

「この、馬鹿たれ……」

たった一言、その一言にどれだけの思いが込められているのか自分には知る術はない、知ってはいけない。

リミピッドチャンネルは思考を読み取る力、相手が意思を明確にしていなければ機能しない。

「縁はあったようだな、俺と君の　　そしてその子と俺も」

視線を彼女の傍らに居た、彼女と同じく銀の髪を携えた以前、夜に出会った少女に向けた。

「欧州（EU）に居たのか？」

「ああ…潜り込むにちょうどよかったのでな」

ユーコン川の岸、舗装された歩道に設けられたベンチに並んで座りながら彼女、クリスカと言葉を交わす。

二人の視線の先ではイーニヤが展望台から見える物資を輸送する船が行き交うユーコン川を眺めている。

「髪を…切ったのか」

当たり前障りのない問を投げかける

「ああ、長いと邪魔になることがあったからな…」

その答えに少しばかり表情を歪めてしまう。

「少し残念だ」



「どうしてだ？」

瞳を閉じ、脳裡に数年前に出会った少女の姿を思い浮かべながら彼女の疑問に答える。

「君の長い銀髪は晴天の日に降る雪のように煌めいていて綺麗だった。……少し惜しい」

純粹に思ったままを口にする。

そんな、亮の言葉にクリスカは少し逃げるように亮から視線を外し俯く

「い、いきなりそんな事をいうな馬鹿たれ」

この反応、懐かしいな

照れ隠しなのか静かに罵倒を飛ばすクリスカに懐かしさを感じ取る人としての本質が変わっていないことに心なしか安堵する。

「すまない、すまない……少々、無神経だったか」

「……馬鹿たれ……」

苦笑しつつも応答する亮に小鳥がさえずるように呟く。

しかしそのおどけた態度はすぐになりを潜め視線がイーニヤへと注がれる。

「あの子が彼の言っていた子か……？」

「ああ……イーニヤ・シエスチナ、トリースタの娘だ。」

そうか、と短く返す。

「ならあの子の家族は君ということになるのか？」  
「そうでありたいと思っている、」

脳裡に思い出たとなつてしまった人が、そしてイーニヤと過ごした日々がクリスカの脳裡に浮かぶ。

最初は義務だった　でも少女はいつしか掛け替えのない存在となつていた。

イーニヤの為、それがクリスカの生きる意味と言つても過言ではなくなつていた。

けれども二人は実質、他人。

血がいくら近かろうとも決して本当の家族にはなれはしない、そんなどうしようもない現実に関心不安で揺らぐ。

でも、そんな彼女に声を掛ける存在が隣にいた。

「大丈夫さ」

決して拭えない現実を直視するクリスカの憂いの籠つた視線を感じ取った亮はその形にならない不安を打ち消すように語る。

「家族というのは血で為るものじゃない、心と思い出で紡がれた絆で為るものなんだ。」

お互いが家族と想っている限り君たちは家族さ」

確かに血の繋がりを家族と言うかもしれない。

しかし、幾ら血がつながつていようとも家族にならない人間など掃いて捨てるほどに居る。

なら、その逆もありうる。赤の他人であろうとも心で繋がれば家族になれるのだ。

身近なところで言えば夫婦がそうではないだろうか、あれは血の繋がらない赤の他人同士が愛という絆で繋がりがり家族になるのだから

「そうか、そうだな　お前にはあの時から大事なことに気付かされてばかりだ」

クリスカが亮に向け微笑む

凜としつつも小さく可愛らしい苺の花のような微笑み、思わずそれを美しいとおもって幻視して　しまう。

> i 2 9 1 8 8 — 3 7 5 9 <

「ねえ…クリスカ、リヨウ」

そんな時、行き交う船を眺めていたはずのイーニヤが二人に近づき呼ぶ。

「どうしたの？イーニヤ」

優しく微笑みながら問い返すクリスカ

「おなか空いた…」

イーニヤが押さえたおなかから“くぅ～～～～”と実に可愛い虫の鳴き声が出た。

「どうだ美味いか？」

繁華街に在る川沿いのオープンテラスで小さい口にクレープを頬張るイーニャに尋ねる。

それに対し満面の笑みを浮かべる顔を頷かせる。しかし、その隣にいるクリスカは申し訳なさそうにしていた。

いま、イーニャが口にし自分の前に置かれているコーヒーは亮の自腹を切って出されていたからだ。

「すまない……」

「気にするな、再会の記念とでも思えばいい」

クリスカの謝罪に肩を竦める。

全く気にしていない亮の様子に少しばかり心苦しさが拭われ数旬の間を要してクリスカは長年秘めてきた問を亮に掛ける。

「……以前から聞こうと思っていた……お前は何故この世界に来たんだ？」

やがて日が傾き世界が茜色に染まり始めた頃、唐突にクリスカが切

り出す。

「俺は 探していたんだ。俺の能力でも血でもなくただ俺という存在を俺という個人を必要としてくれる誰かを…」

「そして世界を超えた…お前は元の世界で見つけれる事はないと思っただけか？」

クリスカの言葉に自分が生を受けた世界を思い浮かべる。…不思議と郷愁の感情は浮かばない。

「そうだな、それも一つさ、あの世界に俺の居場所は無かったそれだけかもしれない。

例え見つける事ができて俺はその人を幸福にはできないだろうと思っただけかもしれない…

しかし皮肉なモノだ。異星からの侵略者を抹殺するために生を受けた俺が向かう世界全てで異星からの侵略者を相手にするとは、世界は未だ俺を縛っているということか…」

「世界がお前を縛る………？」

眩きにも似た最後の言葉を耳にしたクリスカがオウム返しに聞き返す。

「クリスカ、世界は生きているんだよ。」

しかし、答えたのは亮の反対、彼女の隣に座る少女だった。

「何故なら私たちが小さな命の集まりであるように私たちが集まっ

て星という命を作って、星が集まって宇宙という命を作ってるんだよ。」

「時折、星や人間の無意識集合体は世界、或いは運命フレイトと呼ばれるものに干渉し自分を守るうとする。古今東西、英雄と呼ばれる者たちはそうだった世界の働きかけによって生まれた者たちがほとんどだ。俺は大きな輪に囚われている儘なのかもしれない。逃れられないモノそれが運命だ」

イーニヤの言葉の続きを紡ぐ亮は諦めにも似た口調で紡ぐ

「亮…」

「しかし、運命は抗う事を決意したその瞬間に“宿命”となる。

俺は 命がただ理不尽に不条理に翻られていくのは正直、腹に据えかねる。

ましてやそれが俺の宿敵の仕業となれば尚のこと

クリスカの言葉を遮り発した亮の言葉に宿った静かな怒り、それが何を指すのかすぐにわかるが宿敵と称するのが判らなかつた。

「宿敵だと ?」

「カンケル 死の災力によって生み出されし存在カンケルによって生み出された存在、それがBETAだ。」

「どういうことだ…?」

「人間の体組織は科学的見地から分析した場合その新陳代謝機能は約250年は維持される生体構造を持っているが現実には20年前後でその機能が衰え始める。これは世界に渦巻く死へと向かう力に

よるものだ。　　呪いと言ってもいい。」

老化は“すべての生物が患う致死率100パーセントの不治の病”  
という言葉がある。

つまり人間は生まれた時から呪いによる老化という病を背負っているのだと亮は言う。

「日本神話における創生神、イザナミのミコトは我が子を産み落とす際に命を落とし黄泉の国へと閉じ込められ生界に存在するすべてを呪うようになりその結果、寿命というものが生まれたと日本では伝えられている。」

「そのイザナミのミコトがお前の敵なのか？」

「いや、違う　　イザナミのミコトの呪いのような力が世界には渦巻いているということだ。ちょうど命の力、誕生の命力と対を為すように」

しかし、死滅の災力、邪界思念とも呼ばれるそれに侵された生命体が全てを死へと誘う生命体へと変貌することがある、身近なところ  
で言えば癌細胞がそれにあたる。」

死の災力に人間の体細胞が侵され、癌細胞へと変質し無限の細胞分裂を行い他の細胞を侵食し始めやがてその細胞群という種、その個体を死に至らしめる。

「世界いや、宇宙規模の癌生命体、一方的に他者を捕食し他の如何なる生命体とも共生・共存を許さない自己完結した壊れたすべての生命の命を奪う総てを滅ぼすための生命体　　カンケル、それが俺の敵だ。」

おもむろ  
徐に席から立ち上がり夕陽に赤く染まるユーコン川の揺らぐ水面を  
見つめる亮が告げた宿敵の存在

死の災力が純粹に凝縮された存在がアンリ・マユであり実体を持たないカンケルだ。

故にアレは実体を得てすべての生命体を滅ぼす為に間桐 桜を求めた。

「お前はそれに勝てるのか？」

背中に掛けられる問いに一切の躊躇なく答える。

「無理だ」

あまりに規模の大きい相手に立ち向かおうとする亮に恐る恐る問いかけるが帰ってきたのは無情な言葉だった。

闘牙一体では底が知れる、さらに高い戦闘力を持つアイオーンは戦闘可能時間が長くて15分、命を捨てても20分が限界  
地球で生まれたカンケルであれば何とかなっただろうが、相手は星規模ではなく宇宙規模だ。

到底、どうにか出来る相手ではない。

「だが、そのまま何もしないで命が踏み躪られていくのを傍観することは俺には出来そうもない。

何より命を奪う存在を破壊する、それが俺の誓約、



生き足掻く命の力を受け継いだ俺の宿命だ

「

そう宣告する亮の瞳は力強い輝きを放っていた。

第五十四話 結ばれていた縁（後書き）

明星作戦での孝之の最期を書き直しました

## 第五五話 休日

ちようと川を挟んだユーコーン基地の北側、主にソ連の軍の施設が立ち並ぶ一体の一つ実験棟の内部に設けられた一室

寝具など最低限の家具のみが並ぶその部屋で置かれた寝具ベッドの上で肌着にタンクトップのみという出で立ちで、クリスカは自分の前に座る妹が娘ともいえる少女の長い銀色の髪を櫛くしで解かす。

「ねえ……イーニヤは亮の事、どうして知っていたの？」

「う〜んとね、初めて会ったのは前に、外国で戦った時だよ。クリスカも覚えているよね…私たちのビートルクトを倒しちゃったあの青紫のヒト…」

今日の夕刻に起きた出来事を思い出しながら尋ねるクリスカにイーニヤは髪を解かれるのが気持ちいいのか目を細めながら答える。

「な！」

が…イーニヤの言葉に思わずその手を止めてしまうクリスカ  
自分は会っていたのだ。敵として 自分の知らない内に命を取り合っていたのだ。

「…クリスカ………？」

「ごめんなさい、イーニヤ………少し驚いちゃった。」

怪訝に思ったのか不安げに振り向いた彼女に急いで笑顔を作り直す  
クリスカ

しかし、その胸中は驚きにより混乱を極めていた。

「ねえクリスカ、わたしはあの時、リヨウの心を　　ううん、  
記憶を見たんだ。　　だからわかる、あの人は体だけがとくべつ  
なんじゃ無い

その心こそが在り方が異端　　きつとトクベツ　　」

膝に顔を半ば埋め、物思いに耽るように呟くイーニヤ

「……イーニヤ、どういう事が教えてくれる？」

「リヨウは、誓いのために命を守るため戦った、闘って闘っていた  
それが制約誓約だから

でも、人は優しく無かった。人間たちにとって亮は身近な分、明確  
な敵だったんだね。」

「それは……」

理解できる

自分たちで生み出しておいて敵であるBETAよりも身近な私たち  
を恐れる同志、マインドシーカーで自分達の席が前にあったのも“  
魔女”に背中を預けたくないという者達からの要望だったからだ。

「自分に敵意を向ける人たちを守るために戦った。

いつか自分を必要としてくれる人が生れるのを心の拠り所にし

て

「ただ、リヨウは誰も自分に近づけさせない。

一定のライン　境界線を踏み越えさせない。そう、空と大地を別  
け隔てる地平線みたいに…」

「多分、それはリヨウが優しいから　自分の路が茨だと識ってい  
たから誰も付き合わせたくないと自分のせいで誰かが傷つくのを見  
たくない優しさと弱さの裏返し」

「だけど……それは」

「ひどく矛盾している。

誰かと共に歩むために戦うが、その誰かを傷つけないために誰も近  
づけさせない」

「不器用だね、だから教えてあげたいんだ」

「いったい何を？」

「ヒトは　簡単に不幸になるほど弱い生き物じゃないって」

翌日

人並みが適度に行き交いショーウィンドウが並び時折、露店が並ぶ道を私服姿の輩 唯依が手提げかばんを片手に歩いていた。

実を言うと実戦後の雇気楼のデータ収集のため亮に休暇を与えられ、日用品を買い足しに繁華街へと足を運んでいたのだ。

ユーコン基地はその規模に比例し人口が多く、国政や戦術機開発においては最前線ではあるがBETA戦線で見ればかなりの後方に位置するため非戦闘員も非常に多くまたその家族も居住スペースに住んでいる。

総勢10万の軍人と市民を内包するユーコン基地はそれらの人民の生活を支えるため商業地区が建設され活気あふれる街並みを形作っていた。

「…大体こんなものか ん？あれは……？」

粗方の日用品を買い揃えたところで、立ち並ぶ露店の一つに行列が出来ているのが唯依の目に留まる。

「…なんの行列だ……？」

視線の先、行列の終着地点のカウンターで客が店員から受け取っているものそれは……アイスクリームだった。

それを見て唯依の脳裡に、まだユーコンに来たばかりの頃にひよんな出来事で口にしたクレープの味が再現され思わず生唾を飲む。

何時の時代、どんな世界で在ろうと甘味が嫌いな女子は存在しないのだ。

アレはどのような味なのだろう

人間の三大欲求の一つ、食欲と好奇心が織り交ざったそれが唯依の胸中に渦巻いていた。

「ありがとうございます！」

「…つい、買ってしまった………」

店員の声を背に受けながら唯依の手に握られている渦巻き状アイス

『濃縮還元合成バナナ味ソフトクリーム』

そう、彼女は負けてしまったのだ未知の甘味を求める乙女の宿命とも言える性に…

そして唯依はバナナソフト片手にコソコソと拳動不審に道端へと移動し其れを口へと運ぼうとしたその時

「篋か？」

「はうあ!？」

突如として後ろから声を掛けられ飛び跳ねながら振り向く、そこには白いジャージの上着と紺のジーパンに漆黑オーバーコートの前を開いた状態で羽織っていた私服姿の亮が居た。

しかし

『あ…』

重なり合う二人の声、唯依があまりに過敏に反応し激しい動作を行ったためソフトクリームのコーンから上が  
落ちた。

『……………』

二人して地面の染みとなったソフトクリームを眺める。

「あ~~~~~その……うん、すまない」  
「いえ……」



気まずい雰囲気にまけ唯依に謝罪する。  
シヨボンと俯きながら本当に悲しそうな目で地面に視線を注ぐ唯依の姿が酷く印象的だった。

「ありがとうございます！」

「さっきは済まなかったな」

先ほどと変わらない店員の声を背に亮が両手にソフトクリームを手に道端で待つ唯依に近づき差し出す。

「そんな！ あれは私の不注意ですし中佐が気に病むことでは…  
ましてや弁償など…」

「男の甲斐性というやつだ受け取ってもらわないと俺が困る  
それに…」

言葉を途中で区切り、唯依の顔を少し覗くがすぐに視線をそらし思  
い出し笑いの苦笑を漏らす

「君のあの捨てられた子犬のような表情は見ていて少々居た堪れな  
くなくなってしまっからな」

「なっ!?!」

亮の一言に一瞬で唯依の顔が瞬間湯沸かし器の如く沸騰し真っ赤に

染まる。

「そういえば、声を掛けた時の悲鳴もなかなか可愛らしいものがあつたな。」

「な…な…な…な」

ただ、口をぱくぱくと開いた閉じたを繰り返すのみの唯依に最早思考など存在しない。

そんなものとうに吹き飛んでしまったから

「そういえばアイスを買うために行列に並ぶ君の瞳は輝いていて表情はまるで年相応の娘子の様だったぞ」

全部見られてたっ!?

明らかにからかわれている唯依の恥ずかしさから来る混乱は最頂点<sup>ピーク</sup>に達した。

「~~~~~っ!?!?!」

「…く…く…く…く…!?!」

最早、“な”さえ出なくなる唯依、亮はそんな唯依をみて押し殺した笑いを漏らす

そこで唯依は初めて自分がからかわれていることに気づいた。

「ちゅ、中佐!?!?!」

「東雲 亮だ 東の雲に諸葛亮の亮だ。」

抗議の声を上げる唯依にいきなり亮が笑いを引込め、芯の通った声で自分の名と象形文字である漢字を示す。  
何故そんな事を言うのかとおもつ唯依に亮は言葉を繋げる。

「今日の俺は私人だ、軍人として呼ばないでくれ…正直、息が詰まる。」

唾棄するように言葉を口にする亮、その瞬間に唯依は亮に対する印象をひどく変える。

普段の行いを見ていた結果、亮は極度の現実主義者で在り目的の為には障害を容赦なく切り捨てる非情さを持ちその懐に無数の切り札と頭脳に知識を持ったそのしれない人物だと…

しかし、今しがた唯依をからかうといった行動や先の言葉…彼はそうあろうとしているだけでその実、ただの人間なのだ。

「さて、早くしないと溶けてしまうぞ」

さっきまでの真剣な空気は何処へやら砕けた空気の声で告げる。

そして、唯依にソフトクリームを押し付け自分は反対の手に持つバナナアイスを口に運ぶ。

「…ふむ、やはりバナナだけは天然か」

アイスの味を冷静に分析している無駄に高レベルなスキルだ。

アイスに必要な牛乳や卵白はそのどれもが合成食材ではあるがバニ

ラはもともと南半球のマダガスカルなど熱帯で育成されていたため  
BETA戦役の被害をあまり受けなかった貴重な食材だ。

アイスを口にする亮を見つつも自分も受け取ったバナナソフトを口にする。

「…おいしい……！」

その瞬間、口内に広がる濃厚かつクリミーナ味わい　多少混ざった感があるが日本の菓子に為れた唯依にとっては衝撃にも似た味覚の革新であった。

「それは僥倖だな」

目をパチクリさせる唯依に又も微笑を漏らす亮であった。

「そういえば中…いえ、東雲殿はどうして繁華街へ？」

譜代武家の娘として育てられた唯依は純情さと相まって亮の名を呼ぶことなく苗字で殿つけで呼ぶことにしたのだった。

「俺も日用品とあと、面倒を見なければいけないやつのを一寸な…」

「面倒を見なければいけない奴…？」

亮の言葉をオウム返しに口にする唯依。

そんな唯依をみて先ほど見た意外性満載の唯依の素の性格から考えてあれにあの状態のあいつに合わせたらどうなるかと少し興味湧

く。

「そうだな、夜でも俺の部屋に尋ねてこい。そしたら合わせてやる」

「なっ！？夜に！！」

「……………何か勘違いしていないか、篁」

何を想像したのか、恋人関係の男女が愛情を確かめあう行為でも連想したのか

赤面しつつ俯く唯依の反応に呆れつつもやはり彼女は抑え込んでいるだけで年相応の娘で在ると再確認する。

「…そうだな、最近アルゴスの奴等も酒場で集まって飲んでいらしい。夕食でも一緒にどうだ？」

「つまりは、交友関係を円滑にするための作業であるか？」

「君は…………いや、いい 今晚見ている、目にももの見せてやる」

唯依の先ほどの発言をごまかす仕草なのか、あくまで任務の一環だと言いつける唯依に何を思ったのか言いかけてそれを呑み込み、ほくそ笑む。

そしてその夜

“コンコン”と唯依は亮の佐官室の扉を叩く

「入れ」

短い返事を耳にし扉を押し開く。  
すると

「…この匂いは！」

「どうぞだいい香りだろ？」

だし醤油ベースの独特の匂いが唯依の鼻孔を突く。

すると自分の私室である尉官用の部屋と違い佐官室に設けられた簡易キッチンから亮がエプロンを装着した状態で現れた。

「…中佐、その恰好は……………？」

そのあまりに違和感バリバリの恰好の亮に絶句しながらもなんとか問う唯依

「？見てわからんか？日本で言う割烹着みたいなものだが」

「いえ、それはわかりますが何故…そのような恰好を？」

唯依の質問に対し亮は『何を言っている？』と言わんばかりの表情を形作り答える。

「何故って、自分で作るからに決まってるだろ？」

……意外すぎるにも程がある

昼間とは別の意味で絶句する唯依は亮に促されるまま入室し部屋の中央に置かれた恐らくは接客用であろう大きめのテーブルにその腰を下ろす。

そしてキッチンへと向かい作業に戻る亮を一瞥、部屋を見回す。作業用デスクの上はある程度、資料が散らかってはいるが機能的に整頓されている。

そして順に寢床、ロッカーへと視線が移り変わっていく中で向かいの椅子の影に白いもこもこした物体が目に入った。

これは…一体なんだ……？

唯依が不思議そうに眺めていると…

「っ！？」

“ピク！ピクク！”

なんか白いもこもこが動き出した！

“ピク！ピク！ピク！………ゾモモモモモ！！！”

再び何度か動いたかと思っただら今度はモコモコした毛が一気にそそり立った。

アレは何なんなのだ！？

なんか見たこともない何かが奇怪に七変化していく様子に戦慄さえ覚える。

しかし、その物体は毛のそそり立ちがピークに達したかと思うと一気に萎れもとに戻る。

そして

「ふうあ~~~~~」

椅子の影に隠れてた狐の首が持ち上がり伸びをしながら大きな欠伸をする。

そう単純に丸まっていた白い狐が寝ていただけだったのだ。

ん？白い狐……………？

「こいつが俺が面倒を見ている月砂だ」

キッチンから現れた亮が月砂の腹を抱え立たせるように宙にぶら下げながら抱きかかえる。

明らかに手触りのよさそうな白く艶やかな毛並を持った狐がつぶらな瞳を唯依に向ける。

「っ」

きらきらと輝くその瞳に吸い込まれ抱き寄せたい衝動に駆られるが、自分を押さえるために後ずさる。



そんな唯依に月砂が挨拶のように片手をあげ鳴く

「くう〜ん？（やつほ〜唯依ちゃんどうしたの？）」

「ほら、抱いてみる」

たじろぐ唯依に月砂を押し付け、作業に戻る亮

「…私に一体どうしろと……………」

動物など抱いたことが無い唯依は力加減が判らず困り果ててしまう。しかし、胸に抱く小動物の体温が伝わりなんとなく心が和むような気がし、その腕に白い狐こと月砂を抱き再び席に着くと調理を行っている亮を視界に収める。

その手つきはリズムカルに運ばれ洗練されていることが手の動きからだけでも察することができた。

今日は、この人のいろんな一面を見たな

今日一日だけでも新たに見た亮の側面はかなり多い、自分をからかうちよつと意地悪なところや妙に料理に精通していたり、私室に動物を飼っていたりなど…

身近となった人物の新たな一面の発見は唯依に関心と興味を抱かせ

る。  
「できたぞ」

そして、テーブルに並べられる料理それは、真っ白に炊き上がった米と肉じゃがだった。

日本の家庭料理の代表、その起源は昔ビーフシチューを食べた日本の役人が船のコックに作らせた際、役人のあまりにおぼろげな記憶をもとにコックが苦心しつつも再現しようとしたがあまりに記憶が適当だったため生まれた間違い料理ともいえる料理だが昨今では日本の食卓にその名を連ねる料理である。

そして、唯依にとっては母親から教わった思い出の料理であった。

ちなみに、大量生産が可能な芋類や穀物も全滅から免れ生産が追い付いている数少ない食材の一つである。

「さて、食おうか　いただきます。」

「いただきます」

手を合わせ、箸を手取る。

唯それだけだが、唯依にとってはそれはとても懐かしい行いテーブルに並ぶ料理が和食で在ることも大きいかもしれない

そして、唯依は皿に盛られた肉じゃがのジャガイモを箸でつまみ口へと運ぶ

「　　っ！！！！！！」

唯依の脳裡に落雷の如き衝撃が奔る！

ホクホクのジャガイモとそれに丁度よくなじんだし汁、さらには合成牛肉…海洋ブランドンや魚類から合成で作られ再現された牛肉の違和感、混ざりもの特有の違和感が逆にマッチする<sup>スリッ</sup>ように汁が整えられていたのだ。

それは自分自身で作る肉じゃがの味を超えていた。

「ま、負けた……………」

打ちひしがれる唯依、密かに自信が有ったのだ。武道と軍務にその人生の大半を費やしてきたながら唯一女らしさとして自慢できるそれが粉々に打ち砕かれた瞬間であった。

「ふむ、自分ではうまくできたと思うがどうだ…簞？」

「はい……………しよっぱい位に美味しいです……………」

「？塩か醤油を入れすぎたか？」

「そうじゃないんです……………」

「くう~~~~ん…（涙の味だよね……………」

赤い弓兵とは別の意味で鈍感スキルを発揮する亮の態度に月砂が思わず同情の眼差しを見上げながら注ぎ、唯依の膝に手を労わるように置きフルフルと首を左右に振っていた。

結局、唯依はふらふらと覚束ない足取りで自室へと帰還し、その様子を偶然目撃した姉替わりなる大尉が噂好きっぽい妄想を膨らませ巖谷に密告したとかしなかったとか

蛇足おまけ

「そういえば月砂お前なんで寝てたんだ？…その前はなんか萎れてたし」

「ああそれね

実はお昼に狐形態でお散歩してたら…」

回想~~~~~

青空の下とことこと歩く白い毛並の狐、彼女は普段と違う視点から待ち行く人々を眺め人間観察を行いながら呑気にお散歩を楽しんでいた。

しかし

「あ！かわいいっ！！！！」

「コっ！？」

突如として後ろから迫った少女に抱き上げられてしまう。彼女の長い銀髪が揺れ煌めいていたがそんなのは今関係ない

「ねえ、わたしとお友達になろう！！！」

「コココ~~~~~ンっ！！！！（強い強い！力強い！！中身が出ちゃ

う~~~~~っ！！！！）」

「あなたもお友達になりたい？うれしい！！！！」

「コ　　ンっ！！！！（みぎゃ~~~~~）っ！！！！」

銀髪を携えた少女の腕の力が強まり悲鳴を上げるが彼女の声は少女に届かない。

「イーニヤ」

「あ！クリスカ！見て！お友達になったんだよ！！」

「……イーニヤなんかその子ぐったりしていない………？」

「………つてことがあつて命からがら（比喻なし）で逃げてきたんだよ」  
「あっそ」

「冷たいよ~~~~この冷酷魔人！！」

「また会えるかな？」

ランランウキウキ状態のイーニヤがその日から街に出かける頻度が  
増えたとかどうとか…

第五五話 休日（後書き）

クリスカ・イーニャの頭のあれはガチでマニージングマシンらしい

## オリジナルメカ設定資料集 VER 1・5

### 第4世代戦術機

OGの世界で実用化されたPTやAMといった機動兵器に採用された技術を用いて建造される次世代汎用機動兵器、汎用性やすべての性能が既存の戦術機を凌駕し圧倒的な性能を持ち持久力も高いが専用武装は2001年の現在にもほとんど配備されていないため通常の戦術機の武装を流用している場合が多い

また、東雲が提唱した第4世代戦術機の定義は以下の通りである

- ・テスラドライブによる完全無反動推進
- ・プラズマジェネレーターによる大出力
- ・TGCジョイントによる機体高耐久性及び高トルク稼動
- ・次世代コンピュータと光ファイバーによる即応答性
- ・新型OSによる高い操作性
- ・LIONシステムによる学習コンピュータを活用した四肢連動力学的機体制御

これらを満たした戦術機には型式番号として4GLが付けられる事となる

OGの世界のカテゴリだとたぶんAMにカテゴリされると思っ  
4GLXはFourth Generation Language  
e Xの略で日本語訳すると試作型第4世代

タイフーン TYPE - 4GLX

### 第3・5世代戦術機

タイフーンの先行試作機であるECTSFをベースに改造した機体、



外見は殆ど変わらないが背部兵装担架にかぶさるようになり、テスラドライブユニットが装備され内部もTGCジョイントや人間以上の可動領域の廃止やプラズマジェネレーター内臓や既存の戦術機とはコンセプトから別にする機体

#### 4GL-01 シリウス

タイフーン TYPE - 4GLXにアメリカから強奪したYF-23の技術を導入しつつ改修し完成した正真正銘の第4世代機。

従来の戦術機の特徴である跳躍ユニットが廃され、YF-23の肩部モジュールを基本構造そのままに流用し肩部スラスタユニットをテスラドライブに交換し装着したものの兵装担架は両肩と跳躍ユニットが装備されていた腰となり装備数が増えている。

また従来の背部兵装担架には推進用テスラドライブを内蔵したスラスタウイングが搭載されている。

これはアクティブ・イーグルのデータを流用したもの

基本的にタイフーン TYPE - 4GLXとの違いはモジュール交換を行っただけで7割以上の部品を共有している。

両肩のテスラドライブで浮遊、背のスラスタウイングで推進を行うツインフライトシステムを使用、アステリオンAXとほぼ同様のシステムではあるがこちらは負荷率を分散させるのではなく役割を分担することでテスラドライブを小型化させ数を増やしている。

尚、スラスト・ウィングは鞘を兼ねており片側一本ずつ刃先が分子で構成され刀身に超低摩擦コーティングを施された単分子長刀、カラドボルグを系二本装備している。

一部エースやラウンズ専用機

#### タイフーン正式配備型

正史と違いこちらがタイフーンと呼ばれる。

基本的にはタイフーン TYPE - 4 GLXと同じただし肩部モジュールがテスラドライブ内蔵型の YF - 23 のものになり背部のテスラドライブユニットが廃されている跳躍ユニットが外宇宙探査船にしようされる電磁推進システムに交換されその持久力、や防御力を向上させられている。

現在、欧州各国に配備開始中

#### 4GL-02フェンリル

強奪した YF - 23 の 1 号機、2 号機を改修し第 4 世代にグレードアップさせたもの仕様はシリウスと変わらないが肩部兵装担架がオリジナルと同じく片側 2 つの腰を合わせて計 6 つの装備を同時に装備できる。

新型センサーモジュールが用意できなかったためシリウス（タイフ

ーン)の頭を付けている。  
カラーリングがそのままの一号機は黒き狼王ことアイヒベルガーに、  
二号機は白く塗装されジークリンデ・ファールレンホルストに預けら  
れている。

F T O ( F o u r t h T y p e 0 )

第4世代0号機の略

フランス軍のラファールはその出自から構造、部品をECTSFと  
多く共有しておりタイフーンをシリウスにアップグレードするのと  
全く同じ方法で強化できるためにマッチングの確認を兼ねて建造さ  
れた機体

イーグル・エンドルフィンが搭乗、後にフランス軍で現行のラファ  
ールが順次アップグレードされている。

屋気楼

X F J 計画で日本と欧州の協力の元開発された不知火の改修機  
不知火壱型丙の基本コンセプトを受け継ぎつつ改修が施され3・5  
世代戦術機にアップグレードされた。

基本構造から大幅に見直しをされ関節強度やトルク、空力特性が大  
幅に向上しタイフーンと同じ仕様のため実質、活動限界が存在しな  
い。

その他にも限定的に固定近接武装の装備、ラインメイタル使用時の精度向上や肩部ミサイルポッド接続部を兵装担架装備可能などユーラシア奪還に向けての装備が多い

また欧州機を規格を統一化されたため欧州機のパーツを流用可能、  
(ヒュッケバインのHフレーム技術の応用)

外観は不知火の丸っぽい額を鋭角で形成しビュールクトとイーゲルの脚部を不知火ベースで混ぜたような下腿部とガンダムシユピーゲルみたいな刃のついた腕が特徴的

P T

ビルトライガー

ビルトビルガーLを改造した機体、開発コンセプトは小型・高性能化したグランゾンSRXとヒュッケバインMK ? の関係と同じであり、。

ゲシュペンストMK-?タイプSのフレームを流用しブラックホールエンジンの搭載やT-LINKシステムやグラビコンシステムを追加し武装を換装した。搭載されているブラックホールエンジンは本来グランゾンに搭載されるはずだったものの意図的な欠陥を修復したもの

通常は機体に内蔵されたテスラドライブで飛行を行うがT・L・I・N  
Kフライトシステムを併用したツインフライトシステムを使用する  
高機動モードでその速度を異常にあげることが可能。

アステリオンAXほどの最高速度は出ないが加速性、旋回能力は大  
幅に上回る。これは凄まじいまでのGが搭乗者に掛かるため人外の  
肉体を持ちつつ念動力リミピッドチャンネルを兼ねそるえる亮し  
か使用できない。

また、ブラックホールエンジンにグランゾンと同じくカバラ・プロ  
グラムを組み込んでおり亮自身のアストラルエネルギーを使用する  
ことで竜王武神 闘牙へと変貌する。(契約が必要だったがアイン  
スト戦の最中に契約、変神した)

現在日本の富士山火口内で時ごと凍らせる結界、氷結境界にて封印  
中(BETAは火山活動地帯を避ける傾向があるためライガーが破  
壊される危険は殆どない)

ヒュッケバインR

亮がライガーのメインコンピュータから抜き出したヒュッケバイン  
のデータを基に建造したレプリジン

基本性能を同じくしオリジナルと同じくデータ収集用の機体

武装が一部交換されガ リオンが装備していた巨大な剣型チェーン

ソー、【アサルトブレード】

【チャクラムシューター】、ビルトビルガ が装備していた【M90Cアサルトマシンガン】の三つと為っている。

ナイトオブワンであったランティスが搭乗し各地で戦果を挙げ後のPT開発の礎となる。現在機体を大規模改修中

ヒュツケバインMK-?

ヒュツケバインで基礎技術が蓄積されたために建造可能となり製作された機体

基本スペックはほぼ同じだがフレーム構造がHフレームに変更され頭バルカンが20mmに変更されている。これは戦車級に集られた戦術機を傷つけず速やかに救出するための装備

その他は引き続きM90Cアサルトマシンガン、チャクラムシューター等

またラインメیتال中隊支援砲も活用でき近接用装備は欧州で新規開発されたデュランダルを二本装備している。

これは刀身を高周波で振動させ相手の分子構造を破壊することで切り裂く武装で刀身の峰にプラズマスラストスターが内蔵され斬撃そのものを加速させることが出来るが使用者の技量が問われる。

また機体各部を簡略化した量産型もあるがそちらと違いランティス専用機はEOT、グラビコンシステムを試験的に採用している。

任務に多様性が存在するラウンスのみに配備されている機体（機体ステータスのバランスがいい為）

## 特機

### S R D ( S R デモンベイン )

外観はデモンベインの脚部シールドを装備した S R X

S R X をベースに建造された決戦特化型機動兵器。 T - L I N K システム、魔術など予算度外視で建造されたデウスマキナの贗作、ちなみに型式から分かるように S R アルタードこと S R X バンプレイオスのほうに寧ろ近い

動力に無限の心臓と銀鍵守護神機関を搭載し制御にネクロノミコン機械言語写本を用いオリジナルの S R X を凌駕する攻撃力・防御力を獲得している。

オリジナルの S R X と同じく三機の P T が合体して構成されているためパイロットは三人、戦闘管制を行うメインパイロットと魔術・動力制御を行う者と二人の思考をつなげ戦闘行動をスムーズに行わせ敵の捕捉などを行う二人のサブパイロットが必要

よってメインパイロットは数多くの武装を使いこなすための高い戦闘センスが求められ、サブパイロットには魔術師と念動能力がそれぞれに求められる。

## 武装

アトランティス・ストライク（ブレードキック+）：脚部前面に装備された大型シールドによる空間の圧縮と開放により相手を粉碎する第一近接粉碎呪法兵装

T-LINKブレードナックル：機体の間接を保護し衝撃等から守る念動フィールドを拳に収束、剣状にし相手を切り刻み刺し貫いた状態で爆散させることで相手を破壊する武装。

我、埋葬に充たわず：SRXのハイフィンガーランチャーを術式魔砲に交換した砲撃武装、念動力による敵補足と連携して行う拡散ホーミングビームと威力をあげた収束モードを切り替えることが出来る。

S・Z・Oソード：バンプレイオスと同じ武装、爪先から伸びる脚部ブレードを組み合わせ柄とし水銀を念動フィールドで固形化し魔力を浸透させ刀身を構成する大剣

レムリア・インパクト：第一近接昇華呪法兵装

無限の心臓からつながる異界の炎を無限に引き出した無限熱量を相手に直接叩き込む大技、これを受けた相手は特殊な結界球に閉じ込められ重力無限大・熱量無限大・質量零の状態にさらされ完全に消滅する

バルザイの偏月刀：デモンベイン及びアイオンが使用していた武装と同じもの

アトラックIIナチャ：魔力で編まれた糸で敵を拘束する武装



ニトクリスの鏡：虚実と幻影を映し出す鏡を召喚する、使い方は術者の発想しだいで多分に変化する。

XNデイメンジョン（次元斬）：すべての時間と世界をつなぐ無限の心臓の神力を利用しS・Z・Oソードで次元を切り裂き空間転移などを行うSRDのキモとなる装備

## ロゴス・アイオーン

東雲がネクロノミコン・ラテン言語写本より召喚した鬼械神  
東雲の魔術に関する認識と力を受けて多少変質しシャンタクが赤く染まった蝙蝠のような形状の双翼となっているほかはノーマルのアイオーンと変わらない戦闘可能時間は約15分

## 武装

バルザイの偏月刀：ネクロノミコン記された精製法の術式によって即座に鍛造される魔術師の剣にして杖  
形状を変更して鍛え上げることも出来る。

魔銃クトウグア：魔刃鍛造の術式を応用して作り出された銃、クトウグアの神力や術者の霊力を弾丸にして打ち出すリボルバー

## ニトクリスの鏡

スヘル・ヘリクス  
螺旋呪文砲：魔術師の杖、先端を展開し、魔砲形態となる

クトウグアの神力を一気に解放しいかなる相手だろうと焼き尽くす。  
ぶつちやけSLBなの！ \* (・・) \*

ロイガー&ツアール：風を編む双子の神に関する記述を元に武装化  
した二刀、組み合わせて大手裏剣となる

ハイパーボリア・ゼロドライブ：絶対零度・・・負の無限熱量を直  
接相手に叩き込み物質崩壊を引き起こす大技、クトウグアの子アザ  
ート・ホーの神力を纏い打ち付ける

ド・マリニーの時計塔：時間操作魔術

アトラックナチャ：(檻髪)

・ (発音表記不能) ・ 因果を断ち切  
る神々の禁忌

機械用語集(わからない単語があったら申し付け下さい)

アンビルセル：特定の材質を超高圧で圧縮しその特性を変化させる手法

モノコック：車でよく使われる構造手法、外装を機体を支えるフレームの一部とし内部フレームに掛かる負担を軽減させ材料費を浮かせつつ軽量化できる。ロボットの機構において関節の可動領域が制限されるという難点がある。

ムーバブルフレーム：内骨格と呼ばれる機構手法の一つ。人体と同じように外装に一切頼らず稼働と支柱を内部に用いること。ガンダム、エルガイム、ドラグナ-などの仮想戦機に登場する。

プラズマジエネレーター：超小型高効率核融合炉、通常の核融合炉はプラズマ化した原子を磁場の壁に閉じ込めることで炉壁が融解するのを防ぐがこれは重力場の壁で包み込むことで高効率かつ小型化をなしている。

エッジ装甲：武御雷やチエルミナートル、タイフーンなどに装備されている武装、機体各部の装甲を文字通り刃の様に鋭くすることで戦車級などを撃退する武装。さしずめ刃鎧といったところか。

武御雷はこの比率が異常に高く整備性を悪くするのにも戦闘能力を上げるのにも一役買っている。

OBW：オペレーション・バイ・ワイヤの略。機体の操縦にコンピュータが干渉することで複雑となった機体の操作を簡略化する技術、今やほとんどの戦術機が装備している。

OBL：オペレーション・バイ・ライトの略。OBWで通常の鋼線で行っていた信号伝達を光ファイバーケーブルで行うことで高精度かつ高速に操縦補助を行い戦術機の即応<sup>レスポンス</sup>答性を向上させると共に電

## 磁防御を付加したものの。第3世代標準技術

ハイパーダイヤモンド：ダイヤモンドをアンビルセル手法で超圧縮して構成されるもの。通常のダイヤモンドの3倍ほど固く壊れにくい、本作では劣化ウランの弾芯がハイパーダイヤモンドの弾頭を押し込み打ち出すことで要塞、突撃問わず撃破できるようになっている。

量産体制もBETAの死骸から分離抽出した炭素をテスラドライブによる超重力で圧縮を行うことで生産しており文字通り無尽蔵

ハイパーカーボン：カーボンナノチューブ構造体であるダマスカス鋼をテスラドライブによる超重力下で精錬しカーボンナノチューブを超高密度に育てた物質でありアルミの4分の1という軽さと鋼鉄の200倍の堅牢さを持ちその強度は突撃級の甲殻さえ余裕でしのぐ

磁性流体アクチュエーター：第3・5世代以降の戦術機に使用される動力兼関節機構。

磁性流体は、磁性体の微粒子を分散媒体である液体に多量に分散させて得られるコロイド状の固液混相流体である。柔軟な容器に入れた磁性流体に磁界を加えると、磁界の強度に応じて容器が変形し、機械的出力を取り出すことができる。本アクチュエーターは、

1) 電氣的制御が可能でエネルギーを外部から非接触で供給できる、 2) 機械的摺動部がない、 3) 流体漏洩がない等の特徴がある。本アクチュエータをマイクロ弁やマイクロポンプへ応用した例が報告されている。

オリジナルメカ設定資料集 VER1・5（後書き）

話がとても長くなってしまっているので東ドイツ編が終わったあたりでいったん区切り横浜、TEを別の小説として投稿したほうが良いのではないのか？

と友人から意見を貰ったのですがどちらが良いでしょう？

今のままだとTEだけでも五十話は行きそうな雰囲気なので…

つまり、序章として東ドイツ編までを、中篇としてTEを、後編としてオルタを、最終章として宇宙編をとという感じになります。

読者様方の読みやすい方式にしたいのでご意見をお願いします

## 第五六話 頂（前書き）

この小説を東ドイツが終わったあたりで別の小説として分けてしまおうかと悩んでいるのですがどうでしょう？

TEだけで四〇話くらいいきそじつですので

## 第五六話 頂

ユーコン基地に供えられた幾つものダンパーに支えられた管制ユニットのような風貌の機材、戦術機シミュレーターのその一つ、先ほどまで稼働していたそれから降りてくる国連軍強化装備のユウヤ

「くそっ…うまくいかねえ……」

彼は降り立つなり悪態をつく。

そんなユウヤに語りかけるフライトジャケットを羽織ったチームメンバーのヴァレリオ

「よう、トップガンどうした？満足いかないようだが」

「マカロニか…いやな、突撃砲だと思いついて動くんだがカタナだとなんかうまくいかないんだ」

「ふう〜ん…お前、長刀の振った時のイメージが間違ってるんじゃないのか？」

何がいけないのか原因が判らず頭を抱えるユウヤにVGはカタナという種類の武器をユウヤが理解しきれていない、つまりは吹雪のと同じことが原因じゃないかと推測を口にした。道具は適した使い方しないと効力を十全に発揮しないのは大前提でありそれを見逃していたからこそ式型を使いこなせなかったのだから。

「ん〜〜やっぱ、そうなのかもな……でもよ、カタナを使うコッ  
つてマカロニ分かるか？」

「マカロニ言うな、でもよ俺たちはカタナについてはさっぱりだぞ  
？おれん所は中刀と槍、ステラのところはハルバート、日本刀は専  
門外だ」

お手上げと言わんばかりのポーズを取りながらユウヤの質問に答え  
る。

日本刀とはその名の通り日本独自の武器だ。力任せに振り回すタイ  
プの西洋剣でもかなりの習熟が必要だがそれに輪をかけて日本刀は  
かなりの技量を持ち手に要求する。

ナイフぐらいしか刃物の経験がないユウヤには少々荷が重かった。

「まあ、カタナに関しては専門が三人も居るんだから聞けばいいじ  
やねえか」

「それは、そう…なんだけだよ…」

ヴァレリオの意見に対し口ごもるユウヤ、  
衝突を幾度となく繰り返した手前、頼みにくいことこの上なかった  
のだ。

「おっ！お前らこんなところで何やってんだ！？」

VGとユウヤが会話しているところに現れる繫姿の青年、ヴィンセ



ントだ。

彼は何やら興奮した様子でユウヤたちに駆け寄るとまくしたてるように言う。

「どうしたんだヴィンセント？また面白い賭け対象でも見つけて一儲けしようとしてんのか？」

「ああそうだ！！唯衣姫と中佐が雇気楼のテストの一環で長刀同士サンの一対一の

模擬戦をやるってんでみんな大騒ぎだぞ！？」

「おいおい、そりゃあマジか？」

「よかつたじゃねえかユウヤ、最高の見本が見れるチャンスじゃねえか？」

亮と唯衣、この二人は先の実戦形式の際、長刀と日本製戦術機を完全に操って驚異的な近接戦闘能力を示した。

スペックで圧倒している筈の式型を吹雪で圧倒し、唯衣はアクティブイーグルという機動力だけならば第三代戦術機を軽く凌駕する機体を二機同時に相手とり圧勝した。

見て真似るには絶好の相手が模擬戦を行うのだ参考にならない訳がない。

「じゃおれは終わっち前に行くぜ。」

「……待ってくれヴィンセント、俺も連れて行ってくれ」

「分かった！いいから早く行こうぜ」

ユウヤはヴィンセントと共に指揮所へと続く通路へと駆け出した。

幾つかの通路を駆け足で通り指揮所の自動扉を超えた先の大型ディスプレイに映し出された74式長刀を装備した二機の戦術機

「…なんだ…ありやあ…」

「これが、本当の近接戦闘…！！」

ヴィンセントが呆然と呟き、ユウヤは滾るなにかに突き動かされ拳を握りしめたままそれを見る。

ディスプレイには文字通り火花を散らし刃を交えながら限定空間内の超高速三次元戦闘を行う機械仕掛けの人型が映し出されていた。

「はああっ…！！」

「フンっ…！！」

二機の戦術機の跳躍ユニットが電力を推進力に変え光のフレアが機体を超加速させ一気にその距離を縮める。

“ガキイン”

甲高い鋼音と火花がまき散らされ二機はすれ違うが即座に方足を地面に食い込ませたクイックターンに乗せた横なぎの斬撃を放つ。

そして青紫のタイフーンは塵気楼の刃を持つ掌を左腕で掴み、塵気楼は左腕を盾に肘側のブレードスタビライザーでタイフーンの刃を防ぐ。

互いの機体の主腕に負荷が掛りギチギチと軋みをあげる。

“バツ！”

一瞬の静止の後に互いの機体が後方跳躍バックステップで距離を取る。  
カーボニックアクチエーターと磁性流体アクチエーターのハイブリットである脚部動力機構が高トルクを齎しTGCジョイントが負荷を激減させる。

これら新技術の併用による新型の脚部駆動システムはジャンプ・ステップなどを可能とし既存の跳躍ユニットのみに頼り切った機動と違いより速く細かな移動を連続して行えるようになり戦術機の戦闘概念を塗り替える。

一旦開いた距離を唯衣の駆る塵気楼が刃を振り上げ新型のプラズマバーニアを吹かし怒涛の勢いで迫る

「破アアアアア

っ！！！！」

裂帛の氣勢を乗せた74式長刀が勢いよく振り下ろされるその瞬間、

「太刀筋が正直すぎるぞっ！！！」

同じく94式長刀をタイフーンが塵気楼の振り下ろす刃に合わせ往なす。

本来の軌道をそらされ場違いな方向へ振るわれる長刀、即座にタイフーンの前腕に装備されたブレードスタビライザーによる斬撃が塵気楼の頭部を狙って放たれる。

「くっ！？」

即座に長刀を放棄し腕を立て、その肘側外縁部に装備されたブレードで亮のタイフーンの一撃を受け止める。

ブレード同士が摩り減り文字通り火花を散らす。

「いい判断だ」

網膜投影によって視界に移る唯衣の塵気楼を目にはくそ笑む防ぐために超著なく武器を捨てた唯衣の行動を評価する。なまじ武器に執着するとそれが命取りになることは多々ある。

「くっ…！」

ハアアアアアアア

っ！！！！」

唯衣の気迫に応えるように蜃気楼のオレンジのカメラアイが輝きを放ち左腕の手首から肘、その先に延びるブレードスタビライザーが回転展開、ブレードトンファーへとその機能を変える。

そして振り上げられる刃を青紫のタイフーンはバックステップで緊急回避する。

後勢になつた：追撃の機会チャンスっ！！

即座に空の右手に背のブレードマウントから長刀を引き抜かせ、後退した亮のタイフーンに向け機体を奔らせる。

「お覚悟っ！！」

右手の長刀と左手のブレードトンファーの式刀流、蜃気楼の強化されたトルクは長刀を片手で楽々と扱わせ怒涛の攻めを実現させる。

亮はそれに対し冷静に跳躍ユニットを前方に向け全力噴射、テストドライブによつて質量を仮想的に零にされた機体は容易く最高速度に達するが後退より必然と速度の出る唯衣の蜃気楼が間合いを詰め振りかぶつた長刀を振り下ろす。

が

「なっ！？」

「飛べっ！！」

即座に左手で長刀を掴む右腕を掴み、長刀を放棄した右腕で蜃気楼の左腕を掴む

とそのまま反転、屋気楼を機体の加速そのままに投げ飛ばす。

「く、くううううううつ!!!」

地面に土煙を上げながらまるで墜落した飛行機のように地面を滑走していく

衝撃に全身をシェイクされながらも唯衣は必死に意識を繋ぎ止め即座に姿勢回復にかかる。

やられた

あそこで後退したのは自分を勢いづかせ今という絶好の追撃の機会を作るためのフェイントだったのだ。

「呑気に呆けていていいのか？」

「っ!!!」

思わず息を飲む、何とか体制を立て直した屋気楼のカメラには真近に迫ったタイフーンが長刀を振りかぶっていた。

咄嗟に長刀を横にタイフーンの斬撃を受け止めようとするが

「不」

それは難なく振り下ろされた長刀によって断ち切られた。



「中佐、一体最後のアレは何なのですか？」  
「ん？最後のアレ…？」

機体格納庫のコックピットレベル通路の手すりに持たれながらスポーツドリリンクを煽る亮に対し同じくスポーツドリリンクを手にしたままの強化服姿の唯衣が訪ね、亮はそれに首をかしげる。

「あの長刀を切り落としたアレです、カーボンナノチューブ構造体である刀身があそこまで容易く切り落とせるなんて…たしか同じ武装を使用していたと記憶していますが？」

「ああ、あれか…簡単に言うとな速度と入射角の問題だ。」

「速度と入射角？」

「ああ、」

亮は唯衣に肯くとともに説明を始める。

「いいか、カタナとは刀身の最も薄い部分が刃になっている。ならば切断対象に対し垂直に刃を当てる事ができれば殆ど力を使わずに理論上如何なるモノであろうと切断可能だ。  
あとは摩擦係数をうまく中和できる速度で充てればあのような芸当ができる」

「…なるほど、中佐は日本出身ではないのに随分と日本剣術に明るいようですね。」



「まあ……な」

言葉を濁す亮に一瞬、懐疑感を感じる唯衣だが、それも突如として割いる予想外の人物の予想外の発言に吹き飛ばされる事となる。

「中佐！！」

亮を呼ぶここ最近聞きなれた声、国連強化装備の儘のユウヤが睨みつけるような視線を携えて迫ってきていた。

「?どうした、ブリッジス」

疑問の声をかける亮、何故ユウヤがこんなにも鬼気迫りながら迫って来たのか確かな予想がつかない

「アンタに頼みがある　俺に剣を教えてくれ」

思わず絶句する亮と唯衣、ユウヤが人に教えを乞うという奇天烈の事態にさすがの二人も目を見開き互いの顔を見合わせた後、再びユウヤを見据える。

「正気か？お前の性格から考えてさすがに気を疑うぞ？」

「アンタは言った、戦術機が人型である以上人間の戦術もまた有効だと

そして衛士が戦術機の操縦より先に銃器の扱いを学ぶのは生身で使えない武器を機体に乗ったからと言っていきなり使える訳は無いからだ！

なら弑型本来のコンセプトである近接戦闘能力を發揮するには俺自身が剣を学ばなくてはいけない！」

ユウヤは確信していた、日本の数百年の積み重ねである武術をまず習得しなければ習得前提の不知火を使いこなせずまた、武術を習得することで自分は衛士としてさらなる高みに昇れると。

そして亮も思案する。

屋気楼は日本と欧州のユーラシア奪還に向けて設計され新世代技術を惜しみなく搭載した高性能機だ。

しかし、屋気楼はその対価として不知火と6割近くのパーツを共有してはいるが基本構造が違いすぎるため既存機の改修によるアップグレードは不可能だ。

そこで既存機の改修に弑型を充てるという思い切った設計を施した訳であり弑型の完熟は先に見据えた戦いに大きく影響しその開発衛士であるユウヤの申し出は渡りに船と言っても過言ではない。

「…いいだろう、しかし如何せん時間がない為、付け焼刃の荒事になるが覚悟しておけ」

第五六話 頂（後書き）

ブレイクブレイド第四章見ると分かりやすいかも

第57話 君だけの旅路（前書き）

ちよつとふざけた新種のBETA

飛行捕食級 フルフル

軽母艦級 ミノモンタ

怪光線級 目玉の親父

## 第57話 君だけの旅路

剣戟

朝日が地平線から差し込みユーコーン川に立ち込める朝霧を浮き出させると時を同じくしてそれは始まる。

「てやあああああつ!!」

手に剣を携えた青年、ユウヤは裂帛の気合いと共に朝霧の向こうに佇む人影へと切りかかる。

「踏み込みが成っていない!!」

駆けつつ振り下ろされるその刃は“カンっ!”と甲高い音と共に弾かれいなされる。

その次の瞬間に腹部に鋭く鈍い衝撃、ユウヤの体が若干浮き後方へと飛ばされる。

「左足で地面を蹴り腰を入れて右足で踏み込め!! 剣に体重と遠心力を乗せて打ち込め!!」

濃霧を膝から下に携えた人物、亮はユウヤを見下ろしその手に携えた大太刀をの刀身を肩に担ぐ。

「の……糞っ!!」

横隔膜を強打され肺の空気が一気に吐き出された為に起きた一時的な呼吸困難に嘔吐<sup>えず</sup>く、ユウヤは意地で離さなかつた剣を地面に突き刺し支えにしてよろよろと立ち上がる。

その剣は全長約90cmの片手半剣であり先端に厚みがあり反りを持つ刀身、柄から垂れる飾り布…日本では青竜刀と誤解されがちな中国剣、柳葉刀<sup>リュウヨウブトウ</sup>だ。

その剣は先端に重心が偏っており剣を振り回した際の遠心力と重量で相手を断ち切る。

その単純さ故に慣れれば比較的扱いやすい武装だ。

（アイツの刀は小回りが利かない筈だ……懐にさえ飛び込めれば……！）

ユウヤは途切れ途切れの息を吐きながら亮を睨みつける。

亮が持つ大太刀は刀身だけでメートルを超える大太刀の中でも大型に分類されるものだ、到底小回りが利くとは思えない　しかし

（あいつが…自分の不利な間合いにオレを入れさせるわけがない）

あの大太刀を片腕で振り回す膂力と重心制御能力、それでいて自分の動きを完全に見切り手加減しつつ打撃というカウンターを喰らわせた。

その実力は本物

中距離では大太刀が、懐に踏み込めば格闘術

まさに死角無し

「どうした？休憩には随分と早いぞ」

思考する相手を見据えそう言っなり亮は地面を踏み碎き、音を置き去りにして迫る。

「くっ！？」

反射的に地面から剣を引き抜き真正面から剣を防ごうとする  
だが、しかし

“ヒュン！”

突風がユウヤの顔を撫でた                      そして亮の刃がユウヤの頸動脈に  
添えられていた。

「さて、これで死んだのは何回目だったか？」

朝陽に煌めく刀身の向こうで静かに亮が問いかけた。

「ほれ！」

スポーツドリンクの入った容器が弧を描きユウヤの手元に墮ちる。それを方腕で掴むと蓋キャップを開け喉へと流し込む。

「ふう……今回はどうだった？」

「15点」

喉を潤し一息ついたユウヤが眼の間に立ちすくみスポーツドリンクを煽る亮に問いかけるがすごく辛めの採点が返ってくる。

「…そんなにダメか」

「初めてまだ一週間だ、いきなり満点が取れるはずもあるまい？  
せめて素振りと踏み込みだけでも満足に出来るように成ってから出来を訪ねたほうがいいぞ。」

「厳しいことで………」

ため息を吐き地面に視線を降らすユウヤ、柳葉刀をユウヤに渡した亮は基礎となる素振りを徹底させたがユウヤがより実践的なモノがしたいと言いつ出したのでガス抜きを兼ねて掛合稽古を行ったのだが結果はユウヤの全敗で終わる。

「そもそも一足一刀が体得できていない時点で勝負になるわけない。銃でいえば構えもセーフティの外し方も知らず射撃訓練を行うよ



うなものだ 形になるわけないだろう」

「分かってるよ……」

ユウヤは亮の追加口撃に半ばうんざりしながら煉瓦街道に寝ころび空を見上げる。

「まあ、こいつはカタナより分かり易いからまだいいけどな

」

まだ陽が横にあるためただ青い海が広がるだけの大空に寝ころんだまま先ほどまで使用していた剣を翳す。

日本刀は基礎技術を体得するのにも時間がかかり、そもそも日本以外の剣は斬るではなく割る・裂くといったほうが近い剣が大部分を占めている。そのためか斬るという概念が他国人に理解しづらいという問題があった。

そのため亮はユウヤの剣の指導を行うにあたって既存の戦術機用近接武装の中で比較的使いやすい77式近接長刀の元となった柳葉刀を与え剣術指導を行っていた。

「あと、式型の修理と点検が終わったらしい。藤原大尉に中国派遣軍へ申請してもらい77式長刀を調達しておいた…これ以降のテストはそつちでやれ。」

「ああ、サンキュ」

77式長刀は恐らく世界で一番多用されている近接装備だ。大東亜連合、EU、統一中華戦線、中東連合などユーラシア大陸を囲む多くの多国籍軍で使用されている。

恐らく近接武装として一番使いやすいため広まったものと予想できる。

ハルバート、要塞殺し、日本刀、フォルケイトソードなど一部の国でのみ使用される近接装備は国の文化に影響される部分が多いとみられるがどれもかなりの習熟を迫られる装備であり本土を失った国家連合群が使用するには不向きであったのだろう。

だがこれは見方を変えれば訓練する余裕もないギリギリの極限消耗戦がユーラシアの多くの国々で行われている結果でもある。

「ちゃんと藤原大尉にも礼を言っておけ」

「……………」

「上官命令だ、藤原大尉に後で礼を言え」

「……………分かりましたよ」

溜息と共に返すユウヤを見据え、唯依に言い聞かすときの既知感デジャブを感じた。

しかし訓練を始めてから徐々にだが以前あった反発はなりを潜めていったのは確かなようでこれ以上言う必要は無いと言葉を飲み込む。

「じゃあ、素振り一万回と型稽古を六セットやったら上がっていいぞ」

「ちよ、一万つて普段と同じじゃねえか！！稽古したばっかでそれは無理だ！！」

悲痛な叫びをあげるユウヤに亮は背を向け歩き出す。っと数歩進んだところで振り返ったかれは皮肉気な笑みを携えている。

「ほう、まさかトップガンともあろう御方がたかが鍛錬が辛いと投げだすのか　少々貴様を高く買い過ぎていたようだ。出来ないことは言っただつもりは無かったのだがそれはそれはすまなかつたな」  
すまないといいながら、謝る気が微塵も感じられない寧ろ嫌味と挑発に凝り固まった言葉にユウヤは切れた。

「だ~~~~~っ！！！！やってやるよ！！やりゃあいいんだろっ！！！！」

一刻も早く終わらそうと飛び起きたユウヤは自棄になり柳葉刀を振るう。

“ブウン！ブウン！”

と素人丸出しの風切音が響くなかで亮は

チヨロ甘だな

どこの世界的権威の外道生体シエイド工学者の言いそうな言葉を心中で発していた。

ユウヤが剣の師事を乞いてから約一週間

恐らくは亮が日本刀を強制しなかった事が一因だろう。日本「侍」  
刀の究めて偏った固定観念によつて近接戦を軽視してはいたが、日  
本というフィルターを外すとその重要性にすぐに気付く。

もともとユウヤは馬鹿ではない、幼少期から常に差別に曝されてき  
た彼は本質を見抜く事に優れ、模擬戦では味方が後ろから撃つ事も  
多々存在したため衛士としての腕を極限まで磨きそれを悉く打ち破  
った。

理解、応用、実行      それを確実履行できる彼は馬鹿ではない。  
そしてF-15Eストライク・イーグルで近接戦闘ドッグファイトを行いそのすべ  
てを打ち破った彼は敵をBETAに置き換えた事で機体制御以外に  
も近接戦闘の戦略的な意味にも気付いたのだ。

そして、ユウヤ自身の得物を選定するにあたって式型の近接装備の  
大原に進言しそれは認められた。

筋は悪くない、後は本人の努力次第だな

古武術、その神髄は敵対者の行動に対応した最適な型を即座に行う  
ことにある。これは面白いことに戦術機の操作とも類似している。

戦術機の動作はあらかじめ登録した動作しか行えない、コンピュータがある程度補正し変化するが大本は一緒だ。所謂モーションパターンというものだがこれを剣術の型に当てはめるとその類似性が表れてくる。

つまるところ、戦術機も剣術も敵の行動を読み切り、それに対する最適な動作を即座に選択することこそ本質なのだ。

「……………頑張れよ」

その言葉を、本当にか細く残すと今度こそユウヤに背を向け亮は歩き出す。

不可思議な縁だ

ユウヤと自分は似ていないようで似ている。

自分は異形故に  
彼は異端故に

敵にばかり囲まれた中で自分の技量と力だけで勝ち抜いてきた孤高の闘争者、その生きざまは共に生き急いでいるかのよう

一つ違つとすればその終着点

ユウヤは己を認めさせる確固たる存在意義を得るために、  
己はやがて己が魂が還る場所を見つけ出すための探索者

どちらも共にその終着点は不確定、

彼は誰にも認められず存在意義を見いだせず死するかもしれない。  
己は最期まで生きたいと思つ理由を見いだせず、虚無の海に沈み消えるかもしれない。

「これは 君だけの旅路<sup>ジンセイ</sup>、目的地もお前だけのもの。

【貴様も】精々足掻け そして掴み取れ」

言葉は風に流れて青空へと消えていく。

少し、ほんの少しだけ軽くなった爽やかな心持で自分は歩く、己だけの旅路を 遠く悠くに己の求めるものがあることを信じて。

第57話 君だけの旅路（後書き）

EDテーマ 君だけの旅路

小説二巻にある南の島編どうしよう…飛ばしてロシア編に言っちゃおうかな？

## デモンベイン解説改訂版

デウスマキナ

> i 2 9 2 2 1 — 3 7 5 9 <  
> i 3 1 2 5 7 — 3 7 5 9 <

鬼戒神と描く機械仕掛けの神で有り魔導書の人外の理論が顕現した神の模造品

一種の固有結果であり、動力に術者の生命力や霊力を使用し召喚・維持だけでも術者の命を削り戦闘になると消費が爆発的に増え一定時間動かすだけでも命にかかわる。(例外も存在する)

また、人外の論理で生み出され行使されるため術者は人外の論理を受け入れるか、耐えきるだけの器がないと狂死するか反転し邪神の眷属となる。

大きさはさまざまだが大体50m前後

(最少20m位 最大200m位)

ラバン・シユリュウズベリイ(声、アナベル・ガトー)曰く

「機神召喚もまた魔術、術者の能力・位階・属性によって同じ魔導書であるうとも召喚されるデウスマキナは変化する」



とのことで固有結界と同じであることがうかがえる（デモンベインは厳密にいうとデウスマキナを模して造られたロボットであるため例外で変化しない）

マナウス神像、マスターテリオン（緑川）の心臓

機能的にはアイオンのアルハザードのランプと同じ”無限の心臓”という儀式魔術中枢が内包された呪物

デモンベインの獅子の心臓はこれを機械的に再現したもので並行世界への門を開き異界から無尽蔵のエネルギーを引き出す。

尚、銀鍵守護神機関に組み込むことで制御が可能となりデウスマキナの動力となる。（軍神強襲デモンベインにおいてデモンベインに組み込まれマスターテリオンと宇宙空間で戦闘を行った。マスターテリオン曰く「今までのデモンベインの中で最も強い攻め」とのこと）

デモンベイン原作においてマスターテリオン（グリーンリバー）の搭乗機、リベル・レギスの動力中枢にしてマスターテリオン（鮮血神ズウアイア）の心臓

獅子の心臓：無限の心臓を機械的に再現した儀式魔術中枢

銀鍵守護神機関：儀式魔術の無人化・高速化を目的に作られた機関機械が魔術式を解析、制御を行うので邪神の神気による発狂死などは起こらず安定した動力をえられる。

(無限の心臓に靈的に接触した場合脳と視神経が侵食されて腐食する)

## デモンベイン

|               |   |           |
|---------------|---|-----------|
| > i 2 9 2 1 7 | — | 3 7 5 9 < |
| > i 3 1 2 5 6 | — | 3 7 5 9 < |

霸道 鋼造が制作した鬼戒神デウスマキナ(といっても過去に飛ばされたデモンベインを修復したもので一から作ったわけではない) 通常のデウスマキナと違い通常物質を錬金術で加工して作られているため顕現した際に世界の修正力に抗う必要はなく、動力に並行世界から組み上げたエネルギーを使用するため理論上無制限に稼働でき、適性がある魔術師が乗れば一切負担なく操縦できる唯一のデウスマキナ(このため人間のためのデウスマキナとも呼ばれる)

動力は【獅子の心臓】コルレオニスを銀鍵守護神機関で制御し使用している。

また、魔導技術を使用しているため搭乗者は魔術師でなくてならなく、制御コンピューターとして魔導書が必要

防御力は結界などもありかなり高いのだが相手の攻撃が強すぎて紙屑的な印象を受ける（しかも本編初期以外では高速自己修復までするため防御？何それおいしいの？的な感じ）

全長約50m（実は武御雷とデザイナーが同じらしい）

本編の公式EDだと時空間の狭間に取り残された主人公こと大十字九郎をもとの世界に送り返すため自身の心臓を抉り出して握り潰し動力炉を暴走させて次元移動ゲートを作り送り返したのち800年前の地球のアリゾナ砂漠に落下風化の一途を辿っていったが機神飛翔の隠しEDで霸道財閥に回収され修復された。

別名。最弱無敵のデウスマキナ、魔を断つ剣、無垢なる刃

搭乗者

霸道 鋼造 魔導書 ネクロノミコン機械言語版

大十字 九郎 魔導書 ネクロノミコン原本 アル・アジフ

エドガー 魔導書 上記と同じ

大十字 九朔 ネクロノミコン血液言語版

固定武装（魔導書は除外）

頭部バルカン ×2

脚部シールド アトランティス・ストライク：空間圧縮とその解放によるエネルギーを直接相手にぶつけるけり技（主に回し蹴り・かかと落とし・ライダーキック）

レムリア・インパクト

コル・レオニスから引き出される無限熱量を相手の内部に直接叩き込み、重力無限大、熱量無限大、質量ゼロの状態に相手を晒し消滅させる武装

リベル・レギス

第一形態

> i 2 9 2 2 2 | 3 7 5 9 <

血戦形態

> i 2 9 2 2 3 | 3 7 5 9 <

グリーンリバー ライト屈指の最強機体

マスターテリオンの搭乗機にして彼の分身、真紅の墮天使、蝙蝠のような皇帝とも比喻される。

通称、皇帝モード、決戦モードの二つの形態があるがアニメでは決戦モードしか登場しない

マスターテリオンが聖書に弓引く獣を象徴しているのに対して獣に力と権威を与えるとされる紅い邪竜サタンがモチーフ

マスターテリオンは邪神ヨグⅡソトースの息子であり、邪神形態Ⅱ鮮血神ズウアイア

人間形態Ⅱマスターテリオン      機械神形態Ⅱリベル・レギス

といった関係であり実は制御に魔導書は必要ないが、真の実力を引き出すには魔導書が必要不可欠。

勇者王に乗っ取られたことがある。(本編のルート)

動力はコル・レオニスのオリジナル”無限の心臓”でこれはヨグソトースの影の一形態でありマナウス神像におさめられている。

一度、霸道に奪取されデモンベインに組み込まれ二つの心臓を用いたデモンベインと戦闘を行ったことがある。

搭乗者

マスターテリオン      魔導書      ナコト写本

リユーガ・クルセイド(勇者王・アズラエル・シロー アマダ)  
上記を体内に取り込んで使用

武装、多すぎて書けん

ちなみにグリーンリバーの敵としてよく出てくる子安もこの作品に登場している

アイオーン

> i 3 1 2 5 5 | 3 7 5 9 <

> i 2 9 5 9 6 | 3 7 5 9 <

ネクロノミコン原本アル・アジフから召喚される最強のデウスマキナ

漆黒の装甲を持つデモンベインによく似た機体だが、デモンベインの元となった機体でデモンベインが似ているのである

召喚する術者に応じて姿形が変化し、アズラッドが召喚したアイオーンが一番有名で剣の属性を持っていた。

動力である霊燃機関【アルハザードのランプ】は術者の霊力を燃焼させエネルギーとするもので霊力や魔力が足りないと術者の生命力を無理やり削りエネルギーへと変え多くの術者を食い殺した機体

アイオーンはマスターテリオンとの戦闘の折大破し、アル・アジフを脱出させたのち九郎の先代のマスターオブネクロノミコンの亡骸

と共に爆散、消滅した。

また、頭部の装甲の下にはデモンベインと同じ素顔が隠されている。

### 主な武装

バルザイの偃月刀

炎の属性を持つ魔術師の剣にして杖、多くのマスターオブネクロノミコンが愛用した。

魔銃：クトウグア

クトウグアの術者さえ焼き尽くす炎の力に指向性を与え撃ちだすビームピストル、威力はかなり高い

### 灼熱結界

術者の霊力を過剰なほど燃焼させ周囲一帯を焼き尽くす炎の嵐、アズラッドはよく使っていた

スヘル・ヘリクス  
螺旋呪文杖

> i 3 1 2 5 9 — 3 7 5 9 <

魔術師の杖、先端を展開し、魔砲形態となる

クトウグアの神力を一気に解放しいかなる相手だろうと焼き尽くす。  
ぶっちやけSLBなの!!!

\* ( . . ) \*

捕縛結界 アトラック!! ナチャ

魔力で編まれた糸で相手を拘束する呪文、エドガーはマグロをこれで釣り上げていた。



気まぐれver2(前書き)

まえと同じく本編には一切関係ありません。

トランプズヘドロンを使わないバージョンです。

## 気まぐれver2

数々の命を内包する水の惑星

地球

その青き惑星が浮かぶ絶対零度の凍てつく真空の海　　宇宙、その暗黒の大海にて紅き惑星を視界に収めながら二体の機神が衝突する。

「マスターテリオオオオオオ

ンっ！！

！！」

その二体は四肢と頭部、人間に似た構造を持つ。人が神の写し身だと云われるが故に人と同じ姿を持つそれらもすべからず神の模造品であった。

暗黒の海を翔る機械仕掛けの神の内の片割れ：永劫の名を冠する漆黒の機神はまるで蝙蝠のような紅い羽根を広げ、翡翠色のフレアを噴出させてもう一体の機械神

まるで頭から鮮血を被ったかのような深紅の逆さの蝙蝠のような、皇帝のような機神へと向かい突撃する。

### 魔銃鍛造

漆黒の鎧を纏った紅翼を携えた機械神はその左腕に焰を生み出す。その焰は一気に収束、冷え固まり黒光りする鋼のリボルバーを生み出させる。

そしてその殺意の銃口を目の前の鮮血神に向け引き金を引く。

“ ダアンっ！ダアン！ダアン！！ ”

撃鉄が落ち、シリンダー内部の焰銃弾が光の速度で打ち出される。

「 諦めよ 」

響き渡る気だるそうな声色の青年の言葉

その言葉と共に鮮血機械神 法の書の名を持つ機械神「リベル・レギス」はその右腕を翳す。

すると見えない障壁が展開され、衝突する焰銃弾をことごとく弾き、無意味な魔術文字の破片へと砕く

> i 2 9 6 4 8 — 3 7 5 9 <

「 魔刃鍛造 」

バルザイの偃月刀っ！！！！！！」

宙を翔ける漆黒の機械神、アイオーン永劫はその右腕に炎を生み出し新たな凶器を生み出す。

それは魔術師の杖にして剣、魔術師バルザイが製作した偃月刀であり数多くの魔との戦いにその命を燃やし尽くしていったマスターオブネクロノミコン達が愛用した武器だ。

そして、アイオーンはそれを振りかぶり、リベル・レギスへとその刃を振るう。

> i 3 1 2 9 6 — 3 7 5 9 <

“ガキン”

しかし、その刃は目の前の鮮血機械神が手に顕わした黄金の十字架に受け止められてしまう。

「貴公が持つ魔導書、ネクロノミコン、ギリシャ言語写本は確かに数ある死霊秘法ネクロノミコンの中でも最高位の力を持つ　しかしっ！」

“カアアン!!!”

剣越しに見据えていたリベル・レギスのその嘲笑っている能面のような顔に穿たれた緑色の双眸が輝いたその瞬間、バルザイの編月刀が十字架剣によって弾かれアイオーンも姿勢を崩しのけぞる。

「余とこのリベル・レギスを相手にするには到底足らぬぞ　！」

「グっ!!」

リベル・レギスの左掌がよろけたアイオンの貌を鷲掴みにする。

「エセルドレーダ」

「イエス・マスター

死に雷の洗礼を

ABRAHADABRA

」

青年の声に応える少女の声

それと同時にアイオンの機体に掴まれた掌から呪いを帯びた雷が流れ込む。

「があああああ

つく!!」

アイオンの四肢が痙攣し、機体のあちらこちらが爆ぜ飛び、真空の無重力の海に水銀の血液をまき散らし紫電を奔らせる。

フィードバック  
感覚接続が搭乗者である青年の肉体をも傷つけその口端から鮮血が滴る。

「 飛べ!」

鮮血機械神はその手に掴んだアイオンを振り回しそして投げ飛ばす。

「 ガっ!!!!」

吹っ飛ばされたアイオンは火星周辺を漂う隕石群、アステロイド



うなイレギュラーな存在が無くてはならない、  
余の絶望を癒す糧となるがいい」

自分を見下ろす機械仕掛けの鮮血神を駆る金色の瞳と髪を持つ青年が心底愉快に晒う。

「お前はそのため……そのためだけにアイツを  
っ！！！！！！」

奥歯が砕けんほどに噛みしめながら怨嗟を吐き出そうとするが言葉は出ない、憎しみが強すぎるのだ。

「そうだ、貴公の復讐劇は余にとって最上級の“遊戯”であったぞ  
プツン

憎しみで茹っていた脳の最後の何かが……切れた

「ふ　　巫山戯るなあ　　っ！！！！！！」

アイオーンを駆る青年が叫んだ、その瞬間、アイオーンの瞳が輝きその背の紅い双翼、シャントクが変化したフライトユニットより超高密度の魔術フレアを噴出させ翡翠色の尾を引きながら怨敵たるリベル・レギスに迫る！





「くっ！！目には目を刃には刃を　　というわけか！！」

忌々しいと毒づきながらマスターテリオンは相機の左腕に内蔵された必滅魔導兵装を起動させる。

リベル・レギスの形作られた左手刀もアイオンの右腕と同じく負の無限熱量を帯び凍てつく

「ハイパーボリア・ゼロドライブっ！！！！！！」

ぶつかり合う負の無限熱量　　クトウグアの子、アフォームザーの旧神に封印されながらも漏れ出た神力で超大陸、ハイパーボリアを消滅させたそれが真つ向からぶつかり合う。

その衝撃は火星の一角を吹き飛ばし後に海と天文観測で言われるようになる地形を作り出した。

「　　驚いた、此処までの力をたかが写本のネクロノミコンでそれからデウスマキナを召喚するに留まらず余とリベル・レギスにここまで抗うとは　　どうやら貴公を見くびっていたようだ

正直、余と渡り合えるのはは大十字　九郎とアル・アジフ　二人が駆るデモンベインを置いて他に存在しないと思っていたぞ。」

地表に穿たれたクレーターとも認識するにはあまりに大きすぎる陥没した一帯の中心部  
半壊しながらも大量の砂を滴らせながら立ち上がるリベル・レギス、その左半分はほぼ完全に消滅し内部機関が露出し紫電と水銀の血液が流れ出ていた。

「うおお……！」

リベル・レギスが見据える視線の先でアイオーンもまた立ち上がる。アイオーンもまた右半分を失い緑色のエネルギーが消え去りアイオーンの装甲は元の漆黒へと戻ってしまっている。

「復元呪詛起動」

アイオーンを駆る青年の言葉と共にアイオーンの存在時間が損傷する前まで逆行し機体損傷をなかったことにする。  
文字通りビデオの巻き戻しのように復元されていくアイオーン、それをマスターテリオンとその魔導書の精霊エセルドレーダ駆るリベル・レギスが仮面の双眸で見据える。

「愉快………愉快だこれこそ戦いの空気。」

軀の芯から凍えるような灼熱の恐怖。これこそ戦いの芳香<sup>におい</sup>。かくも芳しき、腐れ墮ちる死骸の腐臭。………良かろう」

マスターテリオンの言葉と共にリベル・レギスの機体がまるで時間が巻き戻ったかのように一瞬で内側から機械部品が溢れ機械仕掛けの骨格を形作りそれを深紅の装甲が覆い即座に復元した。

「貴公を余の好敵手として認め、全力を出すとしよう」

復元の終了したりベル・レギスの蝙蝠の羽のような機体の上半身を覆っていたそれが展開しリベル・レギスの真の姿が曝される。

それは鮮血を被り紅く染まった墮天使、666：ナンバーオブザビースト、七角十頭の獣に力と権威を与えるとされるサタンそのもの

しかし、その威容は青年の視界に入っても意識には入らない

その圧倒的な神気、世界中の妊婦の半分を雄叫びだけで流産させそれと同数の異形の子を産ませ街一つを数百年に渡って焦土と化した邪心ズアウエアの神気を全力で解き放たれる。

「さあ、余を楽しませろっ！！神に叛逆せしものよ！！！」

リベル・レギスが自分の身を包んでいた赤い双翼から高密度の魔術フレアを噴出させ黄金の十字架剣を手に漆黒の機械神に切りかかる。

「 - 魔刃鍛造                      つ！！！」



リベル・レギスはその細身のボディからは信じられないほどの膂力を発揮しアイオーンが手に持つダンビラを弾くと飛び上がる。

「貴公の憎しみにより咲く鮮花を魅せる！！」

天に掲げられた十字架剣が天を眩く発光し天を衝く　　まるで  
空を二つに分かつほどに巨大な十字架剣が上段に構えられた。

「フオマルハウトより来たれ　　！」

弾かれ構えなおされた鉄塊刃の表面に無数の魔術文字が蠢き、その密度を一瞬で高め炎の神の力をその刀身に降ろす。

形は違えどこのダンビラもまた《バルザイの偃月刀》：当然、魔術師の杖としての機能は生きたままだ。

刀身から超高密度のプラズマが吹き出てエネルギーの更に巨大な星を撫でるほどの刀身を形作る。

『グランドクロス！！ノクトウグア　　つ！！！！！！』

天を切り裂く十字架剣と星を薙ぐ超高温のプラズマの刃が交差し行き場を失ったエネルギーが更に広大なクレーターを抉り景色を白く染め上げる。

視界を焼く閃光の中、交差する刀身たちは互いの発する力の本流に絶えられずガラスのような音を立てて崩壊する。

その白い世界の中でリベル・レギスが白い闇を引き裂いてアイオンに迫る。

それに反応したアイオンとリベル・レギスの両腕が互いを掴み取っ組み合いへと持ち込まれる。

「アイオンっ!!!」

「リベル・レギスっ!!!」

アイオンの赤い瞳とリベル・レギスの緑の瞳が輝きを放ちその腕の力を込め、赤い翼より噴出すフレアが増す。

互いの出力は互角<sup>パワー</sup>

「燃え尽きる

」!

アイオンの魔導機関エンジン、アルハザードのランプが術者である青年の命を燃やし漆黒の機体に内包される魔力が急激に高まる。

各間接から超高温の朱炎が装甲の隙間から噴出する。

夜の闇のような漆黒の装甲が赤熱化する。

それは火星表層に生まれる小型の太陽

その呪術的な炎は一瞬で周囲を溶解させクレーターにマグマの湖を作りだす。

しかし

「これは随分と熱い情熱だ　　ならば余も返礼せねばなるまい」

灼熱の太陽の中で悠然とたたずむ獣の鎧

リベル・レギスのアイオーンの左掌をつかんでいた右前腕の装甲が左右に開き11の砲塔が出現する。

「ン・カインの間　　」

砲塔により作り出される黒い光球、超高密度に重力弾だ。それが至近距離で解き放たれる。

「ぐあああああ…がああああ…!!!」

次々と黒い光玉がアイオーンに直撃しその機体を抉り砕いていく。胸は大きく抉れ、右肩が砕かれ、左腕の肘が砕かれ、左太股が砕かれ左足が地に落ち、赤い双翼は虫食いだらけとなる。

飛行ユニット、シャンタクと脚部が破壊されアイオンの漆黒の機体は自分が作った真つ赤な溶岩の泉に沈む。

その様子を見下ろすリベル・レギスの貌はまるであざ笑っているかのよう

「うおおおおおっ！！！！マスターテリオオオオンっ！！！！」

もう残り少ない魔力でシャンタクだけ修復したアイオンが紅いマグマの水面を割って飛び立ちリベル・レギスに迫る。

「もうよい…飽きた」

冷徹な声が響くと共にリベル・レギスから五本の金十字架が飛来しアイオンの残った四肢と胸を貫き、そのままクレーターの側面に貼り付けにする。

「マスター……テリオンっ！！」

貼り付けにされ尚、敵に向かおうとする漆黒の機体。その体は動くたびに夥しい水銀の血液が流れ出て紫電と共に各部が爆発する。

それでも尚、飛び立ち戦おうとする。



「貴公の憎しみは甘美であったが甘味は飽きるのが早いものでな・  
もう飽いたぞ。」

クレーター側面に縫い付けられ尚を抗おうとするアイオンを青年を見下しながら宙に佇む、リベル・レギスとマスターテリオン

その瞳はすでに彼らに興味を失っていた。  
しかし、何か思いついたようにその神が創造した端正かつ精緻な貌が愉悦で歪んだ。

「ふむ　最後によい余興を思いついたぞ!!」

リベル・レギスの胸が左右に開き内部機関が露出しそこに黒い光球が携えられていた。  
それは光さえ飲み込んでしまう超重力の渦、混沌と煮え滾る闇の井戸：ブラックホール

リベル・レギスはその腕をおもむろに自分の胸にある光球に突っ込み何かを引きずり出した。

「なんだ　それは　」

見上げるアイオンの瞳に移ったそれを見て青年は惚けたように聞き返した。

紅い鮮血を頭から被った機械神が手に携えるのは

「 シャイニング・トラペズヘドロン 」

> i 2 9 2 2 3 — 3 7 5 9 <

それは嫉じり曲がった神柱のようであり、狂った神樹のようであった  
或いは刃のない神剣か

「これぞ余とリベル・レギスの窮極呪法兵装にして大十字 九郎が  
とデモンベインが何時いすれたどり着く極致 貴公が決してた  
どり着くことの出来ぬ境地ぞ」

光悦とした声色で語るマスターテリオン、まるでその時が待ち遠しくて堪らないといった様子で

「そしてこの神具の構成材質は 即ち世界

つまりは この剣は世界を裂く剣！そしてリベル・レギスの魔導  
機関エンジンはすべての時間と空間にも繋がる我が父君の影の一形

態：即ちこの神剣にリベル・レギスの時空に干渉する神力を注ぎ込む事によって！！」

リベル・レギスが虚空を一閃、空間が：いや、世界が切り裂かれた。そして、世界に亀裂を生み出したリベル・レギスはアイオンの貌を掴み宙に持ち上げる

「一体：何を……」

「見るがいい、この空間に奔る亀裂の向こう側こそ第二魔法を求めてやまぬ者たちの新天地、無限に連なる世界　　平行世界ぞ！！」

リベル・レギスのアイオンを掴む感触を手に受けマスターテリオンの精緻な貌が愉悦で歪む。

「即ち、この向こう側は如何な世界にたどり着くかは判らぬ。当然、この亀裂の向こうからこちらを特定することは不可能　　つまりは一方通行の未知なる路！！これが余を楽しませた礼だ受け取るがよい！！！！」

アイオンを掴んだりリベル・レギスはアイオンをその亀裂に投げ込む。

「貴様あああああああつ！！！！！」

すでに満足に動くことさえ出来ないアイオンと内部の青年はその世界の亀裂に抵抗することさえ出来ずに飲み込まれていく

「余に復讐することできず虚無に絶望に浸りながら異界で朽ち果てるががいい東雲 亮！！！！！」

虚空に奔る亀裂に吸い込まれていくアイオンを見据えながら宣告するリベル・レギス。  
しかし

「マスタアアアアテリオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

アイオンが青年が最後の力を振り絞り唯一残った右腕から魔力で編まれた蜘蛛の糸を伸ばしそれがリベル・レギスの左腕に絡みついた。

「貴公！往生際が悪いぞつ！！！！！」

ハッキング  
「接続つ！ナアカルコードによる暗号解読！機構解析つ！！！」

紅い燐光を放つ蜘蛛の糸を回線としリベル・レグスの左腕に内蔵された必滅奥儀・ハイパーボリア・ゼロドライブの機構とそれを稼働させる術式を瞬時に解析、複写を行う。

「二進数符号変換！電信形式転送　　目標、地球！！！」

「貴公…真逆っ！？」

解析されたデータが地球へ電波の波に乗り転送されると同時に驚きに染まっているであろう仇の貌を思い浮かべ青年の口元に微笑が浮かんだ。

「いいか、覚えておけ！貴様等がどんな力を振るおうと其れが力である以上！いつか必ず別の力に蹂躪される、其れが力というものだ！！！！忘れるな　　ナイアルラトホテップ！！！！！」

眼前の鮮血の神が右腕に携える神剣を振り上げる。

そして其れが振り下ろされ青年をこの世界に唯一つなぎ止めるものである蜘蛛の糸が断ち切られた。

「霸道　鋼造……………いや、大十字……………九郎！！後は任せたぞおおお  
おおお……………」

今度こそ青年と生命永劫の名を冠した機械仕掛けの神はこの無限螺



デスクの椅子の背もたれに身を預ける40頃の男性の名を呼ぶ老人

「惜しい人物を亡くした…しかし彼がその復讐の最後に我等に齎したそれを無意味するわけにはいかん！」

霸道の手にはプリントアウトされた設計図と魔術術式がある。先ほど火星から電波で送信されたものだ。

何かを心に己に魂に誓い霸道は勢いよく立ち上がる。

「アーミティツジ！デモンベインに組み込むぞヒラニプラシテム………彼が残した魔を断つ剣最強の武器となるであろうレムリア・インパクトを…それだけが彼に…いや、彼等に報いる唯一の方法なのだから」

そして彼はかつて自分と共に戦った愛機にその手に握られた呪法を元に新たな力を授ける。

その最後の機構にも稼動術式にも関係ないただの一言、消えた青年が最後に残したその言葉を頼りに

その言葉とは…

「負は有限、されど正は無限か…東雲、貴様のお陰で奴に対抗する最後のピースがそろつう。

見ている我々は決して折れない、我等の魔を断つ意思こそが剣なのだから」

^ 9 5 3 7 3 | 5 0 2 1 3 4 . 7



TE編外伝 熱砂の対決(上) (前書き)

おふざけBETA

軽捕食級 間桐家地下(産地)直送のアレ

遊泳級 宇宙ヒラメ(OGSやったらわかる)

宇宙突撃級 宇宙怪獣ぶっちゃけたな

## TE編外伝 熱砂の対決(上)

ユーラシアから迫りくる異形の津波を防ぐために日夜、激戦が繰り広げられている熱砂の海  
スエズ

ここは今や欧州の多くの国が首都機能、民間人を移動させ食糧、工業部品などの地球規模での産業を支えているアフリカ大陸へのBE TA侵攻を塞ぎ止める最期の防波堤である。

しかし、このあたりエジプトはユーラシア大陸と陸続きであり防衛線構築役立つ海峡は存在しない…そして、周囲一帯に広がる砂漠という過酷な環境は多少のBE TA進行速度の低下というメリット以上に多くのデメリットを生み出す。

砂漠という地形は唯一BE TA侵攻を事前察知させる振動センサーを無効化し、熱センサーに誤作動を誘発させてしまう。

さらに舞い上がる砂塵と昼夜の温度差は戦術機という機械工学、電子工学、流体気工学、材料力学などあらゆる学問の集大成であり究めてデリケートな工業製品である戦術機の運用に決して少なくない障害となる。

関節部、跳躍ユニット吸気口などに入り込む砂塵は機体の駆動・推進系の寿命を著しく縮め、故障率をあげさらにその不安定な地形は近接戦闘能力を損なわせる。

さらには日中の炙るような日差しは戦術機の頭脳であるアルビオニクス全般にも負担を掛ける。

これらの幾重にも重なる悪条件はアメリカの戦術思想ドクトリンに沿えば最終局に投入されるはずの戦術機の即展開戦闘可能という特性を用いて『はじめから』砲撃準備が終わるまでの文字通り盾として運用することで綱渡りのな防衛を行う以外の選択肢を人類から奪い去る

そして、エジプトスエズ運河防衛線を支えるファイユーム前線基地から飛び立つ戦術機たちはあまりに低い帰還率に片道切符と呼ばれるジンクスを背負うことを宿命づけられてしまう。

そして、またファイユーム基地から26機の天狼が飛び立ったのだ。

### 空を掛ける

うつすらと白み始めた群青色ラピスラズリの空……未だ姿を表さない太陽は白砂の大地をもその色で染め上げようとしているが返ってその白雪とは違う白さを引き立たせる。

それを見下ろしながら十数機のシリウスがテスラドライブにより生成噴出された反重力子による淡い緑色の尾を引きながら編隊を組んで翔る……まるで大海原をその身一つで遺伝子に刻まれた地図を頼りに飛破する渡り鳥のように

シリウスを駆る彼らもやはり血の刻印に従い飛ぶのかも  
れない……  
いかに困難な理不尽かつ不条理な力に吞まれようとも決して生を諦  
めない命の煌めき  
命の宿命に従って

皮肉なことに彼らが飛ぶ地表を埋め尽くす白き砂は死者の通り道…  
…ファイユーム基地から飛び立った戦術機はその大部分が帰還する  
ことはない。

ピ！

そして機体の半身が眩い朝陽に吞まれる中、砂海の向こうに押し寄  
せる異形の群れが津波の如く押し寄せてくるのを戦術機のカメラが  
捉え内部の衛士の視覚に直接投影する。

『各機準備はいいか、もう少しで戦闘空域に到達する』

編隊の先頭を翔る灰色のシリウスを駆る、ウォール副隊長シルヴィ  
アがデータリンクを使用した回線で部隊員に語りかける。

『諸君の知つての通りこの戦域は片道切符のジnkスが存在する  
がそんなものは踏み倒せ』

朝陽が昇り、北上する編列の右側面から陽光が差し込み、夜が終わ  
りを告げる。

『我々は希望だ！終わらない夜などは存在しない、我々は夜を終わ  
らせるこの朝陽の如き希望の光を駆っているのだ。』

人には不条理に抗う力があることを衆兵に見せつけろっ！！！！』

激励を耳にする中隊メンバーはその任を移された少女の声を耳にし、敵を睨みつけ心に火を灯す、その炎は十人十色

各々の戦う理由……守りたい存在がいる、守りたかった大切な存在がいた、変えたい世界がある、生きたい未来がある、取り返したい場所がある、守りたい場所がある

それらが万華鏡の模様のように一つとして同じ色の存在しない心の焰を灯しそれを原動力に彼らは戦地に赴くのだ。

『壁が健在な限り敵は進めない　　そして壁は壁でも棘付きだ  
ということを奴らに思い知らせてやれっ！！！！』

空を翔る猛禽が獲物を見つけたように天狼がシリウス一斉に駆け出した。

『ホルス1より大隊各機、イギリスの虎の子部隊がおめかししてお手伝いに来てくれるそうだ持ちこたえろっ!!』

激励を飛ばすF-14トムキャットを駆るホルス1、が他の砂漠戦仕様のF-4Eを駆る衛士達に励ましの言葉を贈る。

F-14トムキャット、最古参の第二世代戦術機であり揚陸戦を念頭に置かれて設計された為航続距離に優れジュラーブリク、チエルミナートルの母体にもなった戦術機であり二人乗りのため操縦自体はアルビオニクスの改良で単独でも可能ではあるが、そこにオペレーターを搭乗させることで部隊指揮能力と連携能力を補正させる部隊構成となっていた。

「ホルス4！ホルス5のフォローを！」

『こちらホルス8よりホルス1　　奴ら倒しても倒しても地下から湧き出てきやがる……………畜生っ!!』

『くっ!?　　増援はまだかっ!!!』

部下からの苦悶の声を耳に舌打つホルス1自機以外が一個大隊のF-4Eで構成されたこの部隊が師団規模にも及ぶBETAの軍勢を

押しとどめるのは物理的に不可能だ。

地面に穿たれた大穴からまるで蟻のように次々と吐き出されてくる要塞級が兵の混乱を狂気に変え、押し寄せる戦車級の波が戦術機を飲み込む。

ホルス1のF-14に届く指揮を乞う声が徐々に減り、代わりに金属や肉を租借する音と悲鳴が耳を突き、後部座席に座るオペレーターの視界に投影される戦域マップのマーキングが減り、それ以上のペースで敵のマーキングが増える。

脳内に 全滅 の二文字がちらつく。

「こちらウォール ブラボー！50秒以内にそっちに到着する。それまで持たせる！！」

突如として戦域マップに新たな友軍のマーキングが刻印されると共にそれがすさまじい速度で自分達へと近づいてくる。

「ホルス1よりウォールっ！！遅いぞ昼寝でもしてやがったか！？」

殆ど罵声にも近い声を叩き付けるが がその声色には明らかに歓喜が宿っている。

「すまないな、だがレディーの準備に時間がかかるのは常識だ。それを待つのも男の甲斐性だろ？」

エメラルドグリーンに塗装されたシリウスのうち一機、フォックス  
トロットが皮肉気な答えを返す、そのあとを継ぎ副隊長であり臨時  
の隊長職に就くシルヴィアが指令を飛ばす。

『各機散開っ！！！味方が敵の波に吞まれている突撃砲は使つな長  
刀で対応しろ！』

編列を組み砂の海を波打たせながら高度僅か数メートルを高速でま  
るで水上スキーのように翔る機体群

通常、戦術機は戦闘機の延長線である機動特性しか有しておらず  
気流の影響を凄まじく受ける。

低高度飛行、特定速度による航行には著しい制限が付くベテラン衛  
士でも精々高度10メートルが限界なのだ。それ以下の高度では航  
行不可能

しかしテスラドライブを装備した機体は機体自体の慣性と重力を分  
離変化させるため高速ホバリングという芸当が可能となり本来不可  
能だった航行しつつの近接戦闘という芸当が可能となる。

先頭を翔る灰色のシリウスが右肩のブレードマウントに装備された  
ハルバート型長刀

『BWS-8 Flugelberte』を引き抜き一気に加速し  
異形の津波へと突撃する。

『ハアアアアアあっ！！！！』

ハルバートを携え地表を滑るように翔ける速度を乗せ横なぎに振る  
う、要撃級の前腕が宙に舞い赤黒い体液が地表を染め上げさらにそ



の巨体を返す刀で肩に担ぎ叩き落とす槍斧の一撃を以て斜めに両断さらに地表を埋め尽くす戦車級の赤波に向けハルバートを振るい木の葉のように舞い上げる。

『そこっ！』

宙に打ち上げられ自由落下が始まるまでの僅かな時の間、虚空に静止する戦車級をシリウスのカメラが捉え輝きを灯す

そしてシリウスの踵のブースターが点火、タイフーンから続くカーボンエッジ装甲により文字通り裂く蹴りを戦車級達にお見舞いする。

それを二回、三回、四回、五回　　数えるのも馬鹿らしくなるほどそれがさまざまい速度で連続して行われる

シリウスの回転運動に乗せ次々とハルバートによって舞い上げられそのあとに迫りくる刃金に切り裂かれ肉塊と化す戦車級の赤黒い体躯

まるでその様は死の旋風、相手の存在を揺らさない処刑刀の乱舞

押し寄せる津波の如き異形の波を圧倒的な破壊を以て押し留めるシリウスの中隊、その有様は文字通り壁

高速ホバリングが可能なシリウスから見れば戦車級、要撃級などの動作は鈍重極まりない亀に等しい。

『やいてめらあ！！人様の家に土足で踏み込むとは礼儀が成ってねえなっ！！！！！！』

イギリス陸軍の証であるエメラルドグリーンに塗装されたウォール第二小隊の先頭を切るヴィクターのシリウスが背の双翼に収納されていた大型ソード、カラドボルグを両手に持ち切り込む

突撃級が凄まじい速度で突進し迫るのを相対速度、角度等を適切に見きり剣閃の火花と共に切り捨てる。

『テンポあげつぞ！』

背のウイングバインダーが跳ね上がりフレアが爆裂敵に向け一気に加速、要撃級はその剛腕で迫りくるシリウスを粉碎しようとする　　が

それをまるでサッカーのドリブルを行う選手が敵を掻い潜るようにターンで躲し背後をとるその手に携えた長刀で両断  
そんなシリウスに背後から迫る要撃級

『見え見えなんだよつ！！！！』

だが、シリウスの機体はそんな振り返ると同時に要撃級の剛腕の付け根の間に存在する顔面に膝蹴りを見舞いする。

顔面が砕けつづれ赤黒い体液を噴出しながら仰け反る要撃級にとどめの一撃を以て撃退する。

亮のように洗練され研ぎ澄まされた刀のような戦舞とは違う、荒々しく野性味あふれたしかし命の息吹のような力強い戦い

宙に滑空するのではなく浮遊するシリウスだからこそできる砂上で  
の超高速近接戦闘術、次々と防衛線が押し上げられ、その間に比較  
的損傷軽微なF-4E達が体勢を立て直し、生き残っていた衛士た  
ちも救助されていく。

『ここは我等が抑える、貴君は残存機を率い戦域を離脱しろ』

相手の攻勢がある程度削がれたところで撤退したシルヴィアのパー  
ソナルカラーシリウスが後退しホルス大隊の隊長機であるF-14  
トムキャットに通信を送る。

『しかし』

言いよどむF-14トムキャットの衛士  
自分たちの当初のたった三分の一の戦力で戦線を維持しようとい  
うのだ、戦いが如何に同等の戦力を調達できるかに尽きる以上彼の疑  
念は尤もだった。  
しかし、そんな彼の疑念を吹き飛ばす声が届いた。

『こちらダンサー01!!!  
ならばそれはこちらが引き受  
けようっ!』

その直後、BETAを挟んでちょうど正反対、地中海側から無数の  
砲弾とミサイルが豪雨のように飛来する。

突如背後からの敵をいち早く察知するBETAであったが当然正面からの支援砲撃等を撃激するものとに分かれる為、光線級の迎撃能力は半減する。

そして、夜明けの空を裂く光槍の隙間を縫って、北の空から新たな機兵が翔けてくる。

『オールダンサーズ各機、兵器使用自由　諸君、デートに邪魔な彼等（BETA）には御帰り願うとしよう』

『ダンサー02了解　隊長、私達が帰り道塞いじゃってますよ？』

『何を言っているのかねモニカ君、彼らの帰る場所はある世しかなかったら？』

『それもそうですねっ！！』

『A小隊全機　チャージ着剣！！　突っ込むぞっ！！！！』

タイフーンの原型であり正史ならばその名を受け取っていたはずの機体、ESFP  
俗にプロトタイフーンと呼ばれる機体を駆る国連教導部隊、『レイ  
ンダンス中隊』

大隊規模には今一步届きはしないが、どちらも機体スペック、衛士の技量すべてを先のホルス大隊を凌駕しており、さらにはアフリカ大陸側と地中海側からの挟撃

ここに勝敗は決した。

## TE編外伝 熱砂の対決(上) (後書き)

マブラヴオルタネイティブ外伝に登場するキャラ

外伝レインダンスーズに登場のダンサー02、モニカ・ジアコーザ  
トータル・イクリプスに登場するVGことヴァレリオ・ジアコーザ

もしかして姉弟？

モニカは作中で三歳下の弟がいるって言ってたし………両方欧州の  
イタリア出身だし

そこから逆算するとVGは23歳になる………違和感は………ないな

あとストーリーの組み立てを何度か思案したのですが南の島編を力  
ツトしロシア編に行きたいと思います。

主な理由としては…

・もともとあのイベントはタリサが唯依に負けたことの腹いせに自  
分の代わりに広告に載せようと上官に言い始めたことが原因である  
ためうまい理由を思いつかなかった。

・そもそも担当士官が東雲より2階級も下のため勝手なことが出来  
ない

以上の理由です

まあ、それはともかく現在執筆中のマブラヴSSのOG編の一部とビルトライガーのB・Hエンジンに関する設定の一部を変更しました

ロシア編プロローグ(前書き)

『オペーラ』E.V.I.I S.H.I.N.N.E



## ロシア編プロローグ

久遠に臥<sup>ふさ</sup>したるもの死することなく

怪異なる永劫の内には死すら終焉を迎えん

「力を与えよ」

その瞬間<sup>トキ</sup>、唯依は見た

カムチャツカ半島を飲み込むように殺到する異形の群れ、全長一口にも及ぶ新種の15体のBETAの腹腔内から続々と吐き出されてくるBETAの大群

一体あたり師団規模のBETAを輸送してきたその異形は戦車砲や爆撃を物ともせず。

吐き出され続ける異形の数に戦場は狂気と絶望が蔓延る混沌の庭園と化しその場にいた誰もが死を覚悟した　その瞬間に見たのだ。

「『燃滅呪法』……………?」

突如として地上に生まれた太陽。猛る、荒ぶる、咆哮する光が邪悪を退ける。

半島を舐める異形の群れによって形作られた津波、汚穢<sup>おわい</sup>なる異形の海、津波にのよう<sup>むれ</sup>に迫りくるそれらを瞬時に蒸発させ、爆裂し圧倒



要撃級は剛腕を振るい、光線級はすべてを焼き払う光条を突き刺すが其の全てが弾かれ霧散する。

膨大な魔力と肉が爆ぜ空間が揺るがされる。

「っ!!!」

残った最後の偃月刀は揺らぐ漆黒の影の前に突き刺さり、その聳え立つ偃月刀の上に直立不動で立つ男に唯依は眼を見開き視線を注ぐ、食い入るように

そして彼は懐から一冊の古書を取り出した、アラスベク模様に黒檀装丁の大冊　　ネクロノミコンを

「俺は貴様らの存在を認めたりはしない　　」

彼の持つネクロノミコンの蝶番が独りではずれ開かれた書から眩い閃光があふれ彼を包み込む

「貴様らが命を否定するのなら俺が貴様らの存在の総てを悉く否定しつくしてやるっ」

光は魔術文字、複雑強靱な魔術式、それが彼の肉体に根を降ろし存在を組み替えていく。

そして現れる全身を包み込むほどの漆黒のオーバーコート  
全身から発せられる強大な力の波動

「俺の存在を刻め、貴様ら悪鬼を冥府へと連行する任、閻魔<sup>フルート</sup>より仰

せつかった者だ」

その姿は世界最強の魔術士の証明、あかし術衣形態マキウススタイルだった。

「夢物語の鬼よ           お前たちの好きにはさせたりはしない」

彼が手を天に掲げる、焰が生まれ爆裂、収束、物質化           自分が  
足場になっている物とサイズ以外すべてが全く同じ偃月刀が生まれる。

「お前達に世界を奪わせたりしない           ！」

そして偃月刀を構える、黒衣の外套コートが解け、無数の紙片ページが宙に舞い  
それぞれ彼の周囲を囲いそれぞれ複雑怪奇な呪文や魔術文字をめま  
ぐるしく表示する。

力の波動だけでも圧倒的な魔力をその魔力を研ぎ澄まし錬成し、魔  
術回路が命を燃やしさらに魔力を生み出す。

『詠唱形態』

魔導書がその効力を最大に発揮する形態スタイルだ。

そして今現在進行形で展開されている術式こそ、魔術の一つの到達  
点、

最強最大の奥義

「夜を引き裂いて鋼よ唸れ           機神召喚！！」

そして、彼の詠唱が世界に響き渡る。

「アイオーン  
永劫！」

時の齒車、断罪さばきの刃、久遠の果てより来る虚無」

詠唱に呼応し影を囲む偃月刀が奔る焰で結ばれる、そして描き出される文様は六望星、召喚魔法陣だ。

「アイオーン  
永劫！」

汝なれより逃れ得るものはなく、汝なが触れしものは死すら死せんっ！！」

彼の詠唱に唱和する紙片群

発光する魔術文様の機械的律動

光と音は同調し、地面に描かれた魔法陣と組み合わせり立体魔法陣を織り成し、空間の性質を変容させ

自身を囲う、まるで子宮のような立体魔法陣の中で漆黒の巨影が確かな質量と厚みを得る。

そして、世界の軋みが衝撃波となって立体魔法陣と共に弾け飛び漆黒の機械仕掛けの神が世界に産み落とされた。

それは全長五〇メートルにも及ぶ闇色の機神、最強を謳われる疑神

「アイオーンっ！！！！！！」

偃月刀の上に佇む彼が足元に展開された魔法陣に沈み、その存在が最小単位まで分解、コックピットへと転送される。

それは術者を機神の魂に導くためのテレポーターだ。

彼が機神の内部で再構成された瞬間、アイオンの機関内を、装甲表面を高度な魔術式を練りこまれた超高密度の魔力が駆け巡る。

全身に張り巡らされた血管の如き配管を巡って魔力が浸透する水銀が人体の血液を配線が電気信号を伝達し神経を代替する。

術者という魂を得て、冷たい鋼鉄に命が宿る。

アイオンの赤眸が輝いた。重い金属音と共にアイオンが活動を開始した。。。

「さあ、懺悔の時間だ」

## ロシア編プロローグ（後書き）

ふと思った

途中脱落の白銀が何故オルタ5が発動した場合人類が滅んだって知ってるんだろ？ ただ単に負けたと思いますと言っているだけの  
ような気がしてきた

## 第五十八話

闇が凝結した漆黒の機械で作られた鬼神

地表を埋め尽くす異形の軍勢を睨む紅い双翼を携えたその後ろ姿に彼の背中を幻視する。

否、幻視ではない……アレは彼の背中だった。

「呪詛よ、巡り廻りて螺旋を紡げ……スベル・ヘリクス呪文螺旋」

アイオンの前に突き刺さったバルザイの偃月刀が炎上、火柱となりその中で金属が形を変え存在を変える。

アイオンはそれを両手で掴む、炎が晴れその全容が明かされる。

それは杖、金属製の黒鉄ガンメタルの光沢をもつ巨大な魔術士の杖だった。

「ロッド展開                   『神銃形態』！」

金属で構成された魔術士の杖、その先端が世界を支配するあらゆる物理法則に背き重金属音を響かせながら変形・肥大化カノン、巨大な大砲となる。

腰だめに砲杖を構えるアイオン

その砲口をBETAという異形の波に向け、腰を深く落とし両足で地面を踏みしめつつ、

対戦車ライフルを構えるように左手で砲身の先端を保持し右手は引トリ金ガに掛けられていた。



その魔術士の杖である大砲に降ろされる妖神は炎の神性を持つ。  
そして砲口に幾つもの環状魔法陣が展開され回転し、徐々に加速していく

砲口が携えるのは凶暴な破滅の光。宿すは狂喜なる破壊衝動。

「フルドライブ 霊燃機関、全力稼動！！」

機械仕掛けの心臓が回転数を上げ心拍数を上げる。そこで生み出された強大かつ莫大な魔力は高等複雑な魔術式を練りこまれ水銀の血液に乗ってアイオンの全身を駆け巡っていく。そしてその魔力を喰らい顕現する旧支配者の神力

アイオンの飛行ユニット、シャンタクの機械仕掛けの紅い双翼も広げられその多関節構造体の節目からオーバードした炎神力が魔力の粒子となって漏れ出る。

かつて遙かな太古に這い寄る混沌の邪神の領域、混沌庭園を焼き払ったそれが密度と熱量を高めながら光が唸り声をあげ、その力は己が名を呼ばれ解放の時を今か今かと待ちわび砲身を、大気を、世界を振るわせる。

発射体勢は整った。あとは引き金を引くだけ

そして

「フォマルハウト 北落師門より来たりて我が怨敵を焼き払え……………！！

イアっ！クトウグア……………！！

！！」

トリガー  
引金が引かれ炎神が解き放たれる。  
無限螺旋における「無かつた事」にされた戦いの一ページに記され  
た火星人に占拠されたロンドンをその一撃にて灰燼と化した破壊の  
超高熱線

炎神たる獣神の咆哮によって世界が白く染まった。  
その混沌の闇を焼き尽くす白閃の闇の中で唯依はこの旅の始まりを  
思い出すのであった。

2001年 7月11日

唯依は自分が半年もの間を付き合ってきた機体を見上げる。  
その機体は両肩と胴体を巨大な万力で挟まれ倉庫に固定されている。  
その機体の足元で整備員が忙しく駆け巡る上でコックピットレベル  
通路から自分が育てて来た機体を見上げる。

当初は武御雷のようにOSが不完全であり本来、機体のより効率的  
な動作を補助させるLIONシステムが悪影響を及ぼしていたがそ  
れも解消され細かなコンデンサーや抵抗の適正値が徐々に見いださ  
れ信頼性はほぼ確立されたといっても過言ではないだろう。

それもアラスカ基地の設備があればこそという側面が強い

超大規模な戦術機を開発するためだけに建造されたこのユーコーン

基地ならではの設備の御蔭であり雇気楼は各種テスト項目をクリアした。後は実戦証明を行うだけだ

「中尉、ここに居たか」

相機を見上げ感傷に耽っていた唯依を現実に戻す亮。その顔はやや何かを訝しむ表情が表れている。

「中佐、どうなさったのですか？」

「この基地のテスト部隊全体にロシア領、ペトロパブロフスク・カムチャツキーへの遠征が言い渡された。」

「いよいよ実戦、というわけですか」

唯依は自分の中に戦意が猛るのを感じる。

「いや、俺たちはアルゴス小隊付きのオブザーバーとしてロシアへ向かうが雇気楼は置いていく」

「なぜですかっ!？」

「雇気楼を次のステップに進めるための改修パーツが完成したと知らせが来た、ロシアの実地試験の期間中に到着し改修が行われる

もともと、この演習は予定に無かったんだ。今じゃなくても何処かと予定を被ってしまうのは仕方がないが……まあ時期が悪かった」

「そう………ですか………」

理由は理解できるが納得できず意気消沈な唯依姫、しかし亮はそれを意に介さない  
なぜならその胸中は別の事を思考していたからだ。

（あの遠征を断った時のハイネマンとサンダークの態度…何か企んでいたな………）

会議室で二人と対峙した際、雇気楼は強化改修を行うので辞退すると言った際しつこく派遣を行えと遠回しに言い続ける二人

不知火式型も確か同時期にフェイズ2への移行が在ったはずだが、それを態々捻じ曲げて日本と欧州の最新鋭機を呼び寄せるその理由

恐らくは何らかのトラブルを引き起こし、雇気楼を接收するつもりだったのだろうか

こういう裏工作と口八丁で相手の成果物を奪うのはソビエト連邦の十八番だ。

後は、面子に拘るかの国からしたら信頼性が低いという評価を受けるソビエト製戦術機の圧倒的な戦果を知らしめる事で戦術機開発における国際的発言力の向上などが考えられるがどれも憶測の域を出ない。

「中佐…？どうしま」

物思いにふける亮を訝しみ唯依が声をかけようとしたその時インカムに通信が入る。

『 篁中尉、日本から長距離通信です。至急、司令部棟四階、総合通信センターまでおいでください』

突然の通信に唯依は亮に断りを入れ、後ろ髪引かれつつもその場を後にするのだった。

「よう、元気になっているか？」

衛星経由による国際通信による映像が100インチはあろう巨大スクリーンに映し出さる。

通信状態が悪いのであるうか荒い画面の向こう側では顔の右半分に奔る大きな傷跡を携えた巖谷が気さくな表情で語りかけている。

「巖谷……中佐！どうなされたのですか。急に!？」

「なに、久しぶりにお前さんの顔が見たくなつてな。どうだ、そっちのメシはうまいか？」

巖谷の余りにフランクな言動に唯依は微苦笑を浮かべ、安堵の息をつく。

「驚かさないでください中佐。私はてっきり日本で何か重大な事態が発生したのかと肝を冷やしました。」

「なんだ、相変わらず固いな。俺はお前さんの親代わりだぞ、娘の心配して何が悪い!」

堂々と胸を張って言い切る巖谷

父の生前から懇意も相手であり、上官としてまた一人の人間としても敬愛している巖谷からの軽いながらも唯依を気遣う言葉に自然と頭が下がる。

「は、ありがとうございます。お陰様で藤原大尉らの協力のもと大過なく過ごせております。」

「そうか、そいつはよかった。」

モニターの越しの巖谷は目を細め神妙な雰囲気になり替わる。

「いままで連絡しなくてすまなかったな。藤原のから定期連絡でお前さんのことは大体、聞いていたんだが、こつちとしてもお前さんたちに無理難題押し付けた立場だから結構気に掛けていたんだ。」

まあ、唯依ちゃんお前さんのことだから大変な時期に連絡しても逆に強がっちゃうと思うてなあ、連絡を控えていたんだ。」

(……………！)

「当初、どつちも難航していたようだったが…資料見る限り順調なようである安心している。まあだからこそこつちやっけてぬけぬけと連絡したんだがな。」

「……………は」

短く返す唯依、巖谷は手元の資料に目を通しながら喋っているのかその視線は下に落ちており、一瞬の動揺を目に止められていない事を心から願う。

そしてその顔を視線を戻した巖谷が真正面から見据えながら気遣わしげな声をかける。

「で、お前さんの疑問は解決したのか？」

「……率直に申し上げて、ここで行われた一連の試験が本当に帝国の利となるのか本気で危ぶみました。ですが」

日米、日英のそれぞれ異なる国との合同戦術機開発、  
自分ともう一人の選ばれた主席開発衛士、ユウヤの精神的・技術の  
脆弱さ未熟さ 対人戦闘を念頭に置かれて繰り返されるテスト  
項目。

無意味ではないのかという不安を感じながらこの計画の初期を過ごしたが……

戦術機開発における特異ともいえる既存の概念を逸脱した理論と機構……戦術の数々を一人の人物の提唱のもと目にした。

その影響は自分が育てた屋気楼だけに留まらなかった。本来、管轄外であるはずの不知火弑型にも影響を衛士、機体に及ぼしている。

そして、

「……………わたしここがすき。いろんなイロがみえてたのしいから。」

……………ユイはここ……キライ？」

繁華街で出会った白銀を摩かせる少女が、教えてくれた

彼女の言葉が【自分は人々の笑顔や人間らしい生活を取り戻す為に私は戦う】のだということを知った、悟らせてくれた。

「自分の事を未熟だと言うのは止めたほうがいい、それは未熟だからできないという言い訳だ。」

唯依の自責症ともいえる反省癖など、不器用ながらも正しい道を歩めるように助言をし、時に試練を与える上官。

脳裏に巡る半年に及ぶ出来事を唯依は振り返る

「このX F J計画で得られた成果はどれをとっても我が国に利を齎し、また私自身も得るものがとても大きいものです。」

まっすぐとモニターの海の向こうにいる巖谷の目を真正面から見つめ唯衣は断言する。

「なるほど……もしかしたら、お前さん自身の成長が一番大きな収穫かもしれないな」

「!？」

「戦術機は所詮機械だ。極端な話したとこの計画でなくても同等のモノが手に入ることもあるだろう。だが、人とその心はそ



うはいかない。」

その厳つい表情が先ほどとは別の意味を持って細められる。

巖谷は初の日本製戦術機『F-4J瑞鶴』を唯依の父親と共に制作しその開発衛士を務め不知火の開発にも携わった生きた伝説となった傑物だ。

そんなかれは定期報告に目を通し詳細に書かれていることは無くとも何があつた手に取るように思いつくに違いない。

そんな巖谷は自身の体験談からそれを理解している。例え開発計画がうまく行かずともその開発経験をもつた人材は替えの聞かない貴重な存在となることを。

何より、幼少期より見守ってきた少女の成長を心から嬉しく思っているのだ。

1072

「それは兎も角、唯依ちゃん」

唐突に巖谷の目と声が真剣な色を帯びる。

「お止め下さい中佐！今は任務中で」

「いいから聞け、国連の様子が妙だ。日本じゃあそれほど変わったことは起きていないが世界中で妙なんだ。いま世界で『何か』動いている。」

「妙とはどういうことですか？」

「欧州を初めとした彼方此方の国で、入隊している兵と出向している兵の数が全然釣り合っていないんだ。」

画面の向こうの巖谷が腕を組み言葉を紡ぐ。

国連に席を置く兵の多く亡国の兵達であり国連軍において出向している兵の数は本来少ない、そのバランスが入れ替わってきているのだ。

つまり欧州の各国の国連軍の兵力が水面下で低下してきている事に他ならない。つまりは現在の自分のような立場の人間がその比率を凄まじい勢いで増やしているということだ。

これは何かあった際、兵が軒並み寝返り超大規模なクーデターが起こりうる事に他ならない

「恐らく世界を巻き込んで何かが起こりようとしている筈だ。

……これは俺の直感なんだがその中心に居るのは奴、『東雲

亮』だ。」

「！！！！」

告げられる個人名は彼女がああ木星の名を関する一大反攻作戦の折に出会った彼の名

それに一瞬、背筋に悪寒が奔り心拍数が跳ね上がる。

彼は唯依にとって目標であり認めさせる相手だった。

そして今や彼は上官であり、その目的を達成させるには絶好の立場で彼と過ごしていく内に彼の多くの異なる姿を目に徐々にだがしっかりとその印象を変化させ興味の対象としてかなりの上位ランクに位置している。

その人物の名を親代わりである人物が要注意の存在として挙げたのだ。

「それで世界がどうやって、どんな風に変わるかなんてさっぱり分からんが気を付けてくれ、何かが変わるのに痛みは付き物だ

それがお前さんになってしまったら・・・俺はアイツに顔向けできん、お前さんの無事と幸せそれだけが俺の望みだ。」

唯衣の身の安全を心配するあまり巖谷が感情を弱音を吐きだしたのだ。

生きた伝説とまで言われる彼が恐れるほどの何かが起きようとしていることに対する恐れ、不安などをごちゃ混ぜにした戦慄が奔ると同時に、自分の親代わりに其処まで心労を掛けていたかと唯衣は申し訳ない気持ちに胸中に渦巻く。

だが唯衣は、自分に言い聞かせるように巖谷に向け言い切る。

「叔父様、大丈夫です。あの人はそんな何でも割り切れるような物わかりのいい人じゃありません。あの人、東雲中佐は・・・・・・  
・・・自分が傷つくのは、憎まれるのは無頓着なくせにほんのちょっとした犠牲も許容できないそんな偏屈なお人なんですよ。」

「お前さんがそう言うんだ。信頼に値する男なんだろうな  
そいつは・・・・・・。だけど唯衣ちゃん、本当に怖いのはそういう  
信頼できるやつを疎ましく思っている毒蟲カスどもみたいな連中だ。」

そう云う奴らは手段なんか選ばねえ、お前さんやそいつだけじゃねえその周囲にも気を張っておけ。

これが俺が上官として、親代わりとしてできる唯一の助言だ。」

「肝に銘じて於きます。」

そうして通信を終える。薄暗い通信室の中で真っ黒なスクリーンに映る自分の顔を唯依は見つめる。

(・・・一体私の知らないところで何が動こうとしているのだ?)

言い知れぬ不安、地面が揺らぎ今にもグチャグチャになって倒壊しそうな錯覚を感じるがそれは所詮錯覚、事實は動かず。現状も変化していない。

違いがあるとしたらそれは一つだけ筈 唯依が裏につごめく不穏な気配を感じたそれだけだ。

・・・それは待っていた。

時が熟すのを、すべての鍵が揃うのを 死を超える死を以て待っていた。

アマゾンの奥地に隠れ住む獣人達が信仰する神が

あらゆる時空を超越する空間に自意識を閉じ込められたまま待ち焦がれているのだ。

己が衝動に、本能に、本性に内側から炙られつつ

余は渴いたり、余は餓えたり

## 第五九話 少女(前書き)

ネットの不通&少しスランプ気味で更新速度等が低下してきていますがご了承ください。

今回は電撃コミック マブラヴTE01を先に見ておくとより楽しめると思います。

## 第五九話 少女

通信を終え、部屋から退室する。すると眼前に壁に一人の少女がまるで何かを待っているように壁に背を預けていた。

アルゴス小隊のメンバーのタリサよりもさらに頭一つ小さい銀色の長髪を携えたフライトジャケットに身を包んだ華奢な少女だ。唯依はその少女に会ったことがある。

「あなたは…こんな所でどうしたの？」

屈み、目線を合わせながらなるべく優しい口調で問いかける。

「まっつた」

「?…何を、かな……………」

少女が呟いた言葉に対し疑問を投げかける唯依、しかし少女は唯依の言葉にたいし首を左右に振る。

「…………ユイをまっつた」

「私を……………」

少女…イーニアの言葉に戸惑いを隠せなかった唯依であった。

第五九話 少女

「ユイこつち!!」

「ちよ、ちよつと……!!」

唯依を待っていたという少女、イーニアに引つ張られリルフォート繁華街を進む  
唯依

このユーコン基地に来たばかりに日用品を買いに来た際、不意に街を歩いていた白いコートに白銀を靡かせる少女にぶつかり転倒させてしまった。それがこの少女との出会いだった。

両親が居ないという少女の言葉を迷子という意味で受け取った唯依は彼女を警察に届けようとしたが自分は来たばかりで道がわからずこの少女に逆に引つ張られ街を周る事となった。

その時、ある衣服店で暴走した店員による『ちよつと』したハプニングがあったのだがそれは省いておく。



そして川沿いにある展望台で一息ついたころ、実感した。

このように活気あふれる街こそ人の住むべき場所だと

BETAとの戦いに日夜明け暮れその領土の半分以上を廃墟・岩石砂漠に変えられた日本に民衆がまともな生活を送れるほどの生活基盤を維持するのは不可能だった。

難民キャンプで少量の合成食材のみと着の身着のまま替えの衣服さえ存在しない移住区

で生活を強いられる国民、現状維持が精いっぱい  
の戦線

日本という国は疲れ切り、光を見失っている。

あの時は自分もまた見失ってしまっていたのかもしれない、日本の戦術機の明日を背負うXFJ計画を見事完遂させ、日本に利を齎し自身を信用しこの計画に自分を押し込んだ巖谷の信頼に報いることが出来るのか？

さまざまなものが重責となり、不安に半ば押しつぶされそうになっていたかもしれない。

「ユイ」

「ん、どうしたの？」

少女に引つ張られ到着した場所はその時と同じ展望台広場、休日であれば家族、恋人の団欒で賑わう場所だ。

時刻は夕刻、空にパレット上の絵の具が混ざり合う様に群青と茜が混ざり合いそれが鏡のように川面に写る。

そんな空の下で少女が振り返る。

「すきなひとができたんだね」

「っ!?!」

思わず息をのみ目の前の少女を注視する。

誰が、誰を!?

「うん、まえとは違う色…クリスカも同じ色を持ってた…ここに  
来る人たちもそっくりな色を持ってた」

混乱する唯依を眺めつつも確信を抱き、ひとり頷くイーニア

「わたしはその色がすき、綺麗で温かい色…アソコには絶対に無かった色」

おしえてほしいな、ユイがすきなヒトってだれ?」

自分をまっすぐ見つめる少女の所々意味が掴み取れないが自分が恋をしており、それを教えるという少女の言葉に思わず 彼の姿を思い浮かべてしまった。

「……そのヒトがユイの大事なヒトなんだ。」

心を見透かすような言葉を少女が放つ。

それに心臓を鷲掴みされたような戦慄が奔り背筋に冷たいものが滴る

「私が…中佐を……？」

そんな筈は無い、自分にとってあの方は超えるべき目標であり尊敬する上司だ。

恋愛の対象になるはずがない！

そもそも自分に恋愛などという自由は許されていない。などと少女の言葉を内心で否定する。

簗家は譜代の武家でありその当主は自分だ。父は養子を取らず自分を跡取りに推した。

つまり当主である自分はそれなりの家名を持つ次男以降の他の家の干渉が余りない存在でなければ婚姻は叶わない。

そこまで考えて気付く

やらないのではなく出来ないと考えている自分がある。

出来ない事を言い訳にしようとしている　　自分は、無意識の内に避けていたのだ。

その感情に到達するのを

胸が締め付けられるように苦しくなり地面に蹲る。そんな自分の頭上から降り注ぐ声がある。

「実らない想いなら最初からしないほうがよかった？」

少女の声は無邪気なソレではない、まるで傷口を切開するメスのような鋭さを持っている。

まるで自分が今自覚した思い人が現実を突きつけるような無情な温度を持たない口調だ。

「ユイがリヨウの事を好きなのはとてもいいこと、だけど最初から諦めているならリヨウに近づかないで。

リヨウは無意識に他人を愛するということを避ける。そしてそんな自分を自覚している、愛すればいずれ残酷な別れが訪れる事を知ってしまったから、そしてそれでいいと思っている。

傍にいれば血風と鉄爪がその人を傷つけるから　　愛されても愛さなければ人は自然と離れていく　　」

年齢不相応な言葉を紡ぐ少女の言葉を耳にしたまま煉瓦が敷き詰められた歩道を見つめるのみ…いつしか世界は黄昏の黄金にも似た朱

に染まっていた。

少女はその長い髪を夕日の朱に染めながらお語る。

「それがリヨウなりの守るための愛情、他人と関わるなら絶対に深い関係に行かない。

だけどその壁を壊して自分を変えてくれる存在を待ち望んでいた

」

少女は真横からさす川に沈んでいく夕日を見つめる。何処か憂いのある表情で…

「二反律だね。ユイがリヨウの枷を壊せるだけの想いを持っているならそれでもよかった…でも唯依は諦めようとしているのに諦めきれないそんな半端な気持ちじゃダメ　リヨウの傍にいる資格がないよ」

「わ…私は……………」

血を絞り出すような声が唯依の口から零れる。

足音が遠ざかっていく…

がそれは数歩、歩みを刻んだところで一旦止まる。

「ユイしってる？リヨウはずっと…ずっと…泣いたことがないんだよ。」

銀を携えた少女が去る。唯依の意思を問う言葉を残し

「もしも、ユイがリヨウの傍にいるその資格を得たその時教えてあげる。リヨウが何のために戦うのかを　　その胸の内に秘めたモノを」

残された言葉は、自分が彼の事を何も知らない　　いや、自分自身の事さえ知りはないという現実を否応なしに突きつけた。

「私は…私は　　！！」

この胸を締め付ける痛みに似た苦しさは何か  
ああ、この感情は悔しさだ。

関係は分からないが恐らくは彼と触れ合った期間はせいぜい自分と同じ程度であろう少女に比べ、半年もの間、任務とはいえ傍にいた自分よりその少女が彼の事をその内面に及ぶまで理解していた事に嫉妬していたのだ。

自覚した…私は彼、東雲　亮という男性に

焦がれているのだと…

コンコン、

唯依と銀色の少女の邂逅が為されたその日の夜、ユーコーン基地司令棟に存在する尉官室の扉を叩く基本型国連軍服を着こんだ若干色素の薄い頭髪と眼を持つ東洋人の青年、

英陸軍、インペリアルガードより出向した東雲 亮である。

「はい、どちら様でしょうか」

扉の奥から帰ってくる、女性の声      X F J 計画の開発主任、藤原 美沙都大尉だ。

「藤原大尉：シノノメだ。夜分遅くにすまないが少々込み入った話があるが大丈夫か？」

「…少々お待ちください」

「了解した」

女性なのだから幾らか準備が必要なのだろう  
扉越しに帰ってきた声に従い待つことにする。

扉の前で待つこと数分…、扉が開かれ中から寝間着の上にカーディガンを羽織った藤原が現れる。

「お待たせしました。このような恰好で失礼します。どうぞ中へ

」

「いや、訪ねたのは自分だ。気にしないでくれ」

軽い門答を交わしつつも藤原に促されるままに彼女に充てられた部屋へと入室する。

自分の佐官用の私室と違い尉官用のそれはシャワー室とトイレ、それに作業用の机とロッカー睡眠用の寝具と今は稼働していないが空調設備が備えられているのみの簡素なものだが部屋主である藤原の趣味が幾つかの小さい観葉植物が机上に置かれていた。

やはり私室の空気は部屋主によって差異が生じるものだと感想を抱きつつ藤原が用意する来客用の椅子にと腰を落ち着け藤原自身も作業機の椅子の向きを変え腰を着ける

「では中佐、お話しとはどのようなものですか？」

「単刀率直に言わせてもらう　　今度の実地試験で日本帝国軍に用意してもらいたいものがある」

藤原からの切り出しに一寸の迷いなく用意していた案件を掲示する。



すると藤原の表情が険しくなる。元が整った容姿であるためか彼女の鋭い視線と相まって優麗かつ冷たい日本刀を連想させる表情だ。

「それはなんでしょうか」

「『レールガン電磁投射砲』だ」

「っ!?!? どこで其れを？」

日本帝国軍のかなり上位に位置する機密を口にした亮に藤原大尉の視線がさらに鋭くなる。

「知らないと思ったのか　それとも知らなかったか俺の事を」

藤原からの剣気を真っ向から受け止め、椅子の肘掛についた頬杖で亮が言う。

不敵な態度に眉を顰める藤原

「なら教えてやろう、優秀な軍人：それはフェイク、俺の事を唯の武官だと思っているのならそれは間違いだ。

衛士としての能力、指揮官としての能力、技術者としての能力

それらは俺のもっとも得意な分野、その一側面にしか過ぎない副次効果だ」

怪訝な表情になる藤原を目に口元を僅かに歪める。

「俺は

ネクシャリスト  
情報統合学者だ」

「っ!？」

まさかあなたが…」

怪訝な表情から一気に驚愕の表情へと変貌する。

ネクシャリスト  
情報統合学者

それは、近年各分野の専門化が進行するに伴いそれらの各学問を跨ぐ形で設立されたロボット工学から生まれた新しい学問、ネクシャリスト情報統合学のエキスパート

あらゆる専門分野の情報を収集、統合することで結論を導き出すという性質からすべての学問における素養を兼ね揃えていることが最低絶対条件であり、それ故に優秀な人材以外は習得出来ないとされる学問。

物理学方面の香月夕呼、生体学方面のジェイド・カーティス、経済方面のイーグル・エンドルフィンなどネクシャリスト情報統合学者と呼ばれる人間は両手の指で数えられるほどしか存在しない。

その内の一人が眼前にいるのだ…藤原の驚愕は至当であつた。

「資金、人材その個性、資材の流れ…あらゆる情報の断片をフラグメント収集し繋げることで真実は自ずとその『輪郭』を見せる 情報戦なら国相手とて引けは取らない」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4965o/>

---

Muv-Luv オルタネイティブ ~ファイブ・リバイ~

2011年10月13日15時45分発行